

彼 坪 遺 跡 III

－福岡県久留米市北野町今山所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書 第202集

2005

福岡県教育委員会

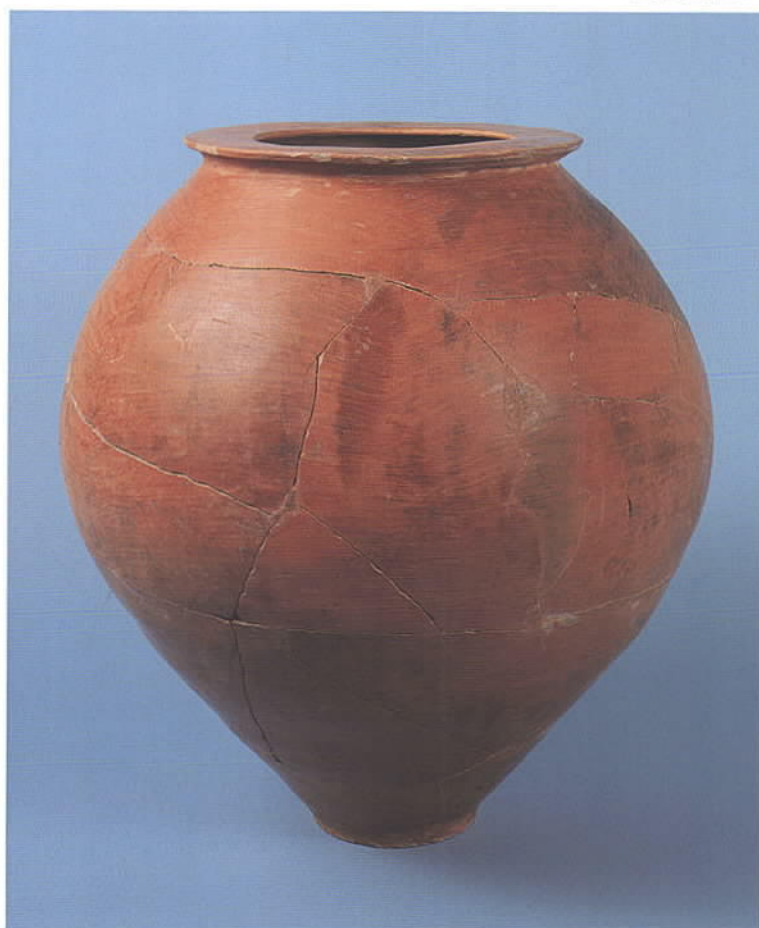
彼 坪 遺 跡 III

－福岡県久留米市北野町今山所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書 第202集

2005

福岡県教育委員会



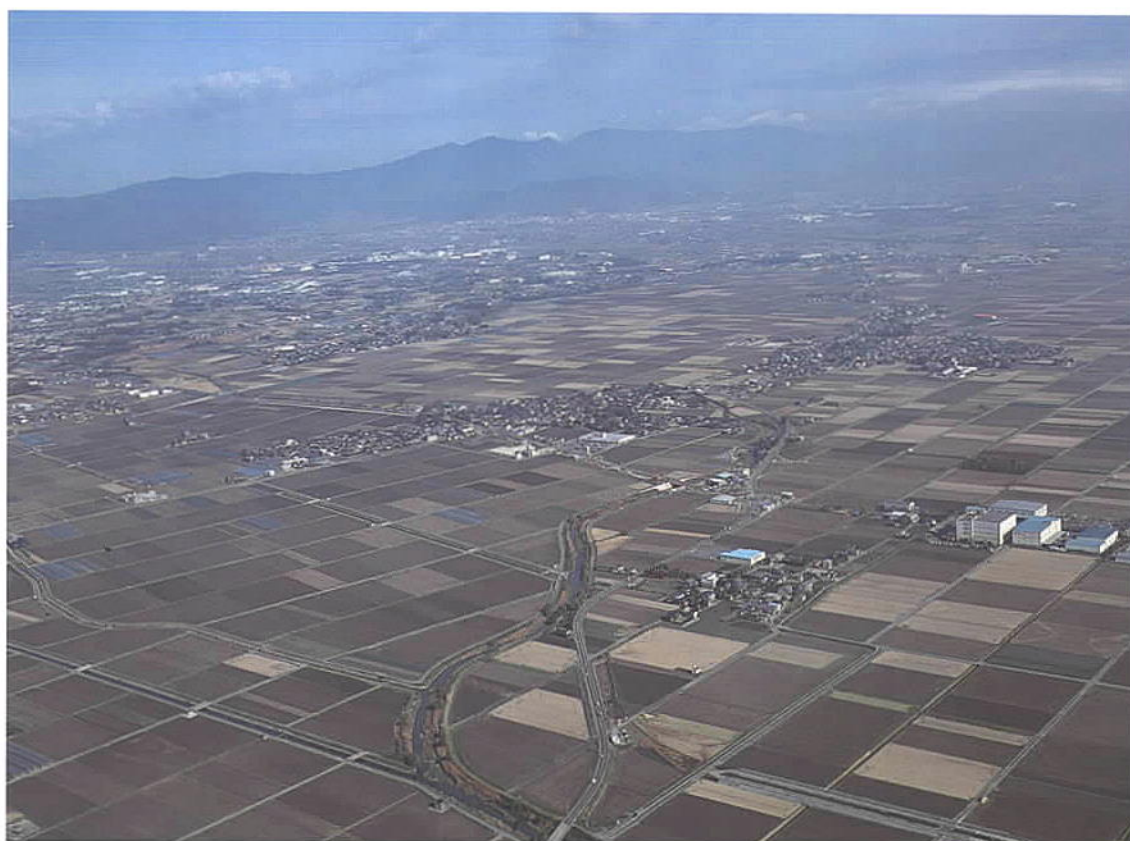
126号土坑出土丹塗甕形土器



彼坪遺跡周辺航空写真



1. 遺跡遠景（南東から）



2. 遺跡遠景（南西から）



1. 第1面全景



2. 第2面全景



1. 第1面全景（西から）



2. 第2面全景（東から）



3. 7号溝（南東から）



4. 31号土坑（北西から）



34号竖穴住居跡出土土器

序

本書は県道久留米筑紫野線の道路改良事業に伴い発掘調査を実施した福岡県久留米市北野町今山に所在する彼坪遺跡の発掘調査報告書の第3冊目にあたります

彼坪遺跡では県道改良事業に伴い平成10～14年に発掘調査を実施しましたが、調査の結果、これまで存在の知られていなかった弥生時代の大集落を明らかにすることができました。本書で報告するように調査では弥生時代前期後半に遡る環濠遺構が検出されており、本集落遺跡が弥生時代前期後半から拠点的な機能を果たしていたことをうかがわせます。遺跡は筑後川の流域に広がる沖積平野中の微高地上に立地しますが、沖積平野への弥生時代集落の進出の様相を物語る貴重な資料と言えるでしょう。

調査は道路幅に限定された上、遺構・遺物も多量であり、十分な調査報告書とは言えませんが、本書が地域史を考える資料として、学術研究・生涯学習等に活用できれば幸いです。最後になりましたが、調査に御協力いただいた諸機関、関係者の皆様に深く感謝する次第です。

平成17年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森山 良一

例 言

1. 本書は平成12・13年度に福岡県教育委員会が主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事に先立って発掘調査を実施した福岡県久留米市北野町今山（旧三井郡北野町大字今山）彼坪遺跡第3次、第4次発掘調査報告書である。なお、福岡県教育委員会がこれまで刊行した彼坪遺跡発掘調査報告書は下記のとおりである。
飛野博文・吉村靖徳編2002 『彼坪遺跡』Ⅰ福岡県文化財調査報告書第167集
飛野博文2003『彼坪遺跡』Ⅱ福岡県文化財調査報告書第182集
2. 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、空中写真は空中写真企画・九州航空に委託した。遺物写真は北岡伸一が撮影した。
3. 掲載した遺構図は調査担当者のほかに、古賀千都子、古賀公子、緒方智恵子、芹田治代の協力を得た。遺物は土器実測図を平田春美・田中典子・棚町陽子・久富美智子・坂田順子・橋之口雅子・堀江圭子・若松三枝子・中村洋子・栗林明美・寺岡和子・荒川妙・西亜沙子が作成し、土製品・磨製石器を吉村靖徳、打製石器（スクレーパー）を吉田東明、打製石器（その他）を重藤輝行が実測した。
4. 製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子がこれを補助した。
5. 使用した方位は主として座標北である。
6. 本書の執筆は第3章の磨製石器・土製品関係を吉村が、打製石器（スクレーパー関係）を吉田が、第4章を古環境研究所が執筆し、他を重藤が担当した。編集は重藤が行った。

目 次

巻頭図版
序
例言
本文目次
図版目次
挿図目次
表目次

1	はじめに	1
1	1. 調査の経過	1
2	2. 調査・整理の組織	2
2	2 位置と環境	4
1	1. 周辺の地形	4
2	2. 久留米市北野町内の弥生時代遺跡	4
3	3. 筑後川流域の弥生時代と彼坪遺跡	4
3	3 調査の内容	9
1	1. 遺跡と調査の概要	9
2	2. 検出遺構と出土土器	9
(1)	(1) 竪穴住居跡	9
(2)	(2) 土坑	41
(3)	(3) 溝	162
(4)	(4) ピットとその出土土器	197
(5)	(5) 包含層と検出面の出土土器	205
3	3. 出土土製品・石器	219
(1)	(1) 土製品	219
(2)	(2) 磨製石器	219
(3)	(3) 打製石器	230
4	4 福岡県彼坪遺跡における自然科学分析	251
5	5 おわりに	257

図版目次

巻頭図版 1	126号土坑出土丹塗甕形土器
巻頭図版 2	彼坪遺跡周辺航空写真
巻頭図版 3	1. 遺跡遠景（南東から） 2. 遺跡遠景（南西から）
巻頭図版 4	1. 第1面全景 2. 第2面全景
巻頭図版 5	1. 第1面全景（西から） 2. 第2面全景（東から） 3. 7号溝（南東から） 4. 31号土坑（北西から）
巻頭図版 6	34号竪穴住居跡出土土器

図版 1	1. 彼坪遺跡周辺航空写真	2. 第 1 面全景
図版 2	1. 第 2 面全景	2. 調査区 (北東から)
図版 3	1. 調査区 (南西から)	2. 調査区 (南東から)
図版 4	1. 第 1 面西部	2. 第 2 面西部
図版 5	1. 第 1 面東部	2. 第 2 面東部
図版 6	1. 彼坪遺跡遠景 (南西から)	2. 彼坪遺跡遠景 (南東から)
	3. 調査区全景 (西から)	
図版 7	1. 第 1 面完掘状況 (東から)	2. 第 2 面完掘状況 (東から)
	3. 第 1 面完掘状況 (西から)	4. 第 2 面完掘状況 (西から)
図版 8	1. 4 号竪穴住居跡 (北から)	2. 8 号竪穴住居跡 (南東から)
	3. 13 号竪穴住居跡 (南西から)	
図版 9	1. 16・18 号竪穴住居跡 (北から)	2. 19 号竪穴住居跡 (西から)
	3. 21 号竪穴住居跡 (北から)	
図版 10	1. 21 号竪穴住居跡 (西から)	2. 22 号竪穴住居跡 (西から)
	3. 23・25 号竪穴住居跡 (北から)	
図版 11	1. 24 号竪穴住居跡 (北から)	2. 25 号竪穴住居跡 (西から)
	3. 26 号竪穴住居跡 (西から)	
図版 12	1. 27 号竪穴住居跡 (北西から)	2. 28 号竪穴住居跡 (北から)
	3. 29 号竪穴住居跡 (北から)	
図版 13	1. 30 号竪穴住居跡 (北西から)	2. 31 号竪穴住居跡 (北西から)
	3. 31・32 号竪穴住居跡 (北西から)	
図版 14	1. 33 号竪穴住居跡 (西から)	2. 34 号竪穴住居跡遺物出土状況 (北から)
	3. 34 号竪穴住居跡 (北から)	
図版 15	1. 32 号竪穴住居跡 (西から)	2. 35 号竪穴住居跡 (南から)
	3. 36 号竪穴住居跡 (北から)	
図版 16	1. 37・39・40 号竪穴住居跡 (北西から)	2. 41 号竪穴住居跡 (北から)
	3. 42 号竪穴住居跡 (北西から)	
図版 17	1. 43 号竪穴住居跡 (南から)	2. 44 号竪穴住居跡 (南から)
	3. 45 号竪穴住居跡 (南から)	
図版 18	1. 47 号竪穴住居跡 (北から)	2. 23 号竪穴住居跡 (西から)
	3. 46 号竪穴住居跡 (南から)	
図版 19	1. 7 号土坑 (東から)	2. 13 号土坑 (北から)
	3. 14 号土坑 (西から)	
図版 20	1. 16 号土坑 (北から)	2. 24 号土坑土層
	3. 27～29 号土坑 (東から)	
図版 21	1. 19・20 号土坑 (北西から)	2. 22 号土坑 (北から)
	3. 24 号土坑 (東から)	4. 25 号土坑 (南東から)
図版 22	1. 27・29 号土坑 (東から)	2. 30 号土坑 (東から)
	3. 30 号土坑土器出土状況	4. 31 号土坑 (北西から)
図版 23	1. 34 号土坑 (北から)	2. 35 号土坑 (東から)
	3. 37 号土坑 (西から)	4. 38 号土坑 (南から)
図版 24	1. 39 号土坑 (北東から)	2. 40 号土坑 (北東から)

	3. 41号土坑 (南から)	4. 43号土坑 (北から)
図版25	1. 46号土坑 (西から)	2. 48号土坑 (北西から)
	3. 49号土坑 (北から)	4. 50号土坑 (西から)
図版26	1. 51号土坑 (北から)	2. 52号土坑 (北から)
	3. 56号土坑 (南から)	4. 59号土坑 (東から)
図版27	1. 54・65号土坑 (北東から)	2. 55号土坑 (北東から)
	3. 56・60号土坑 (南から)	
図版28	1. 60号土坑 (西から)	2. 63号土坑 (東から)
	3. 65号土坑 (北から)	4. 66号土坑 (西から)
図版29	1. 68号土坑 (西から)	2. 72号土坑 (東から)
	3. 73号土坑 (南西から)	4. 74号土坑 (南から)
図版30	1. 75号土坑土層 (東から)	2. 75号土坑 (西から)
	3. 76号土坑 (北から)	4. 78号土坑 (南から)
図版31	1. 71号土坑 (北から)	2. 77号土坑 (南から)
	3. 80号土坑 (南から)	
図版32	1. 83号土坑 (南から)	2. 84号土坑 (北から)
	3. 87号土坑 (西から)	4. 88号土坑 (西から)
図版33	1. 86号土坑 (北西から)	2. 86号土坑土器出土状況 (西から)
	3. 89号土坑 (南から)	4. 90号土坑 (南から)
図版34	1. 91号土坑 (西から)	2. 93号土坑 (西から)
	3. 97号土坑 (北西から)	4. 98号土坑 (東から)
図版35	1. 82号土坑 (西から)	2. 95号土坑 (北西から)
	3. 96号土坑 (南東から)	
図版36	1. 99号土坑 (北から)	2. 102号土坑 (南西から)
	3. 100号土坑 (南から)	4. 101号土坑 (南から)
図版37	1. 104号土坑 (北から)	2. 106号土坑 (北から)
	3. 107号土坑 (南西から)	4. 108号土坑 (東から)
図版38	1. 103号土坑 (北東から)	2. 105号土坑 (南西から)
	3. 109号土坑 (北西から)	
図版39	1. 112号土坑 (東から)	2. 113号土坑 (南から)
	3. 115号土坑 (東から)	4. 118号土坑 (南西から)
図版40	1. 111号土坑 (北から)	2. 116号土坑 (東から)
	3. 126号土坑 (東から)	
図版41	1. 119号土坑 (東から)	2. 120号土坑 (西から)
	3. 121号土坑 (南西から)	4. 122号土坑 (東から)
図版42	1. 123号土坑 (南から)	2. 124号土坑 (南から)
	3. 127号土坑 (北から)	4. 125号土坑 (東から)
図版43	1. 128号土坑 (南東から)	2. 129号土坑 (南から)
	3. 130号土坑 (南から)	4. 134号土坑 (東から)
図版44	1. 133号土坑 (北から)	2. 136号土坑 (北から)
	3. 137号土坑 (北から)	
図版45	1. 139号土坑 (北から)	2. 140号土坑 (北から)

	3. 143号土坑（北から）	
図版46	1. 138号土坑（西から）	2. 142号土坑（東から）
	3. 144号土坑（東から）	4. 141号土坑（西から）
図版47	1. 145号土坑（北東から）	2. 147号土坑（北東から）
	3. 148号土坑（南から）	4. 151号土坑（北から）
図版48	1. 150号土坑土層（北から）	2. 150号土坑（北から）
	3. 152号土坑（北から）	4. 154号土坑（西から）
図版49	1. 146号土坑（北から）	2. 3号溝土層
	3. 5号溝	
図版50	1. 4号溝（北から）	2. 4号溝土器出土状況 1
	3. 4号溝土器出土状況 2	
図版51	1. 6号溝（北から）	2. 7号溝・同上面谷土層
	3. 7号溝下部土層	
図版52	1. 3号溝（北西から）	2. 3号溝（南東から）
	3. 7号溝（南東から）	4. P188（南西から）
図版53	126号土坑出土土器	
図版54	3・21・24・30・32・34号竪穴住居跡出土土器	
図版55	34号竪穴住居跡出土土器（1）	
図版56	34号竪穴住居跡出土土器（2）	
図版57	34・36・42号竪穴住居跡・3・7・9号土坑出土土器	
図版58	9・12・14・16・24・25・27～29号土坑出土土器	
図版59	30・31・34・37号出土土器	
図版60	37・40・42～45・47～50号土坑出土土器	
図版61	50・52・54・55・59・61・63～65号土坑出土土器	
図版62	64～68・71・73号土坑出土土器	
図版63	73・75・76・78・82・85・87号土坑出土土器	
図版64	86・90・97・98号土坑出土土器	
図版65	98・99・102・108・111・113・120号土坑出土土器	
図版66	113・120・122・124・125号土坑出土土器	
図版67	120・125・126号土坑出土土器	
図版68	126・128・129・131～133・135号土坑出土土器	
図版69	136～140・142号土坑出土土器	
図版70	142・144・145号土坑出土土器	
図版71	145・147号土坑出土土器	
図版72	147～150号土坑出土土器	
図版73	150～152・154号土坑出土土器	
図版74	154号土坑・2・3号溝出土土器	
図版75	3号溝出土土器	
図版76	3号溝・4号溝（1）出土土器	
図版77	4号溝出土土器（2）	
図版78	4号溝出土土器（3）	
図版79	4号溝（4）・5号溝出土土器	

図版80	5～7号溝・ピット出土土器	
図版81	ピット・遺構面および包含層出土土器	
図版82	遺構面および包含層出土土器	
図版83	1. 土製投弾	2. 土製紡錘車
	3. 石包丁 (1)	4. 石包丁 (2)
図版84	1. 石鎌等	2. 石製紡錘車
	3. 用途不明磨製石器	4. 管玉
図版85	1. 石鎌・石剣	2. 石斧 (1)
	2. 石斧 (2)	4. 石斧 (3)
図版86	1. 砥石 (1)	2. 砥石 (2)
	3. 砥石 (3)	4. 砥石 (4)
図版87	1. 砥石 (5)	2. 台石・磨石 ???
	3. 台石	
図版88	1. 石鎌 (1)	2. 石鎌 (2)
	3. 石鎌 (3)	4. 石鎌 (4)
図版89	1. 石鎌 (5)	2. 石錐 (1)
	3. 石錐 (2)	4. 石錐 (3)
図版90	1. 石錐 (4)	2. 石錐 (5)
	3. 石核 (1)	4. 石核 (2)
図版91	1. スクレーパー (1)	2. スクレーパー (2)
図版92	1. スクレーパー (3)	2. スクレーパー (4)
図版93	1. スクレーパー (5)	2. スクレーパー (6)
図版94	1. スクレーパー (7)	2. スクレーパー (8)
図版95	1. スクレーパー (9)	2. スクレーパー (10)
図版96	1. 石英・瑪瑙石器 (1)	2. 石英・瑪瑙石器 (2)
	3. 石英・瑪瑙石器 (3)	4. 石英・瑪瑙原石 (1)
図版97	1. 石英・瑪瑙原石 (2)	2. 147号土坑出土石器剥片等
	3. 34号竪穴住居跡出土石器剥片等	4. 調査風景

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/75,000).....	5
第2図	彼坪遺跡の位置 (1/5,000).....	6
第3図	彼坪遺跡調査区周辺地形図 (1/1,500).....	7
第4図	彼坪遺跡遺構配置図 (1/250).....	折込
第5図	4・8号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	10
第6図	4・13・16号竪穴住居跡出土土器実測図 (16は1/3、他は1/4).....	11
第7図	13・16・18号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	12
第8図	18・19号竪穴住居跡出土土器実測図 (5は1/3、他は1/4).....	13
第9図	19・21・22号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	15
第10図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1～3は1/3、他は1/4).....	17
第11図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (25～27は1/6、28は1/8、他は1/4).....	19

第12図	23～25号竪穴住居跡実測図 (1/60)	20
第13図	22～25号竪穴住居跡出土土器実測図 (2・3は1/3、他は1/4)	21
第14図	6・27号竪穴住居跡実測図 (1/60)	22
第15図	28～30号竪穴住居跡実測図 (1/60)	24
第16図	26～33号竪穴住居跡出土土器実測図 (6・7は1/3、他は1/4)	25
第17図	31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)	27
第18図	33号竪穴住居跡実測図 (1/60)	28
第19図	34号竪穴住居跡実測図 (1/60)	29
第20図	34号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/4)	30
第21図	34号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/4)	31
第22図	34号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/4)	32
第23図	34号竪穴住居跡出土土器実測図 (4) (40・41は1/3、他は1/4)	33
第24図	35・36号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34
第25図	37～40号竪穴住居跡実測図 (1/60)	36
第26図	35～38・41・42・44・47号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	37
第27図	41～44号竪穴住居跡実測図 (1/60)	38
第28図	45号竪穴住居跡実測図 (1/60)	39
第29図	46・47号竪穴住居跡実測図 (1/60)	40
第30図	1・3・7～9号土坑実測図 (土7は1/30、他は1/40)	41
第31図	1・3号土坑出土土器実測図 (1/4)	43
第32図	7・8号土坑出土土器実測図 (1/4 1:土8、2～5:土7)	45
第33図	11～15号土坑実測図 (1/40)	46
第34図	9・11～14号土坑出土土器実測図 (1/4)	47
第35図	16・19～21号土坑実測図 (土16は1/30、他は1/40)	49
第36図	16・19号土坑出土土器実測図 (1/4)	51
第37図	22・24・25・27～29号土坑実測図 (土29は1/30、土28は1/20、他は1/40)	53
第38図	24～28号土坑出土土器実測図 (1/4)	54
第39図	26・30・31・34号土坑実測図 (土30・31は1/30、他は1/40)	55
第40図	29・30号土坑出土土器実測図 (3は1/3、他は1/4)	56
第41図	31号土坑出土土器実測図 (1/4)	59
第42図	35～38号土坑実測図 (土35は1/30、他は1/40)	60
第43図	34・35・37号土坑出土土器実測図 (1/4)	61
第44図	39・40号土坑実測図 (1/40)	62
第45図	38～40・42・43号土坑出土土器実測図 (6・7は1/3、他は1/4)	63
第46図	41～45号土坑実測図 (1/40)	64
第47図	46～50号土坑実測図 (1/40)	67
第48図	44・45・47号土坑出土土器実測図 (5は1/6、他は1/4)	68
第49図	48号土坑出土土器実測図 (4は1/6、他は1/4)	69
第50図	49・50号土坑出土土器実測図 (1/4)	71
第51図	51・52・54・55号土坑実測図 (1/40)	72
第52図	52・54号土坑出土土器実測図 (14は1/6、他は1/4)	73
第53図	56～59号土坑実測図 (1/40)	75

第54図	55・57・59・60号土坑出土土器実測図（13は1／3、他は1／4）	77
第55図	60～64号土坑実測図（1／40）	79
第56図	61～67号土坑出土土器実測図（1／4）	81
第57図	65～68・70号土坑実測図（1／40）	83
第58図	68・70・71号土坑出土土器実測図（1／4）	85
第59図	69・71～73号土坑実測図（1／40）	87
第60図	74～77号土坑実測図（土76は1／30、他は1／40）	88
第61図	73～75号土坑出土土器実測図（1／4）	89
第62図	76・78・81号土坑出土土器実測図（1／4）	91
第63図	78～84号土坑実測図（1／40）	93
第64図	85～88・91号土坑実測図（1／40）	94
第65図	82・85～87号土坑出土土器実測図（1／4）	95
第66図	89・90・92・93号土坑実測図（1／40）	97
第67図	90～93・96号土坑出土土器実測図（5は1／6、他は1／4）	98
第68図	94～99号土坑実測図（土98は1／30、他は1／40）	100
第69図	97号土坑出土土器実測図（1／4）	101
第70図	98～100号土坑出土土器実測図（1／4）	103
第71図	100～104号土坑実測図（土102は1／30、他は1／40）	105
第72図	102～105・107号土坑出土土器実測図 （10・11・16・22～24は1／3、15は1／2、他は1／4）	106
第73図	105号土坑実測図（1／40）	107
第74図	106～108号土坑実測図（1／40）	108
第75図	108号土坑出土土器実測図（1） （8～10・26・29・30・34・36・38は1／3、他は1／4）	109
第76図	108号土坑出土土器実測図（2）（1／4）	111
第77図	108号土坑出土土器実測図（3）（1／4）	112
第78図	109～111号土坑実測図（土111は1／30、他は1／40）	113
第79図	111号土坑出土土器実測図（1）（3は1／6、他は1／4）	115
第80図	111号土坑出土土器実測図（2）（1／4）	116
第81図	112・113・115・116・118・119・123号土坑実測図（1／40）	117
第82図	112・113・116・118・119号土坑出土土器実測図 （8・24・25・27・33～35・43・44は1／3、他は1／4）	119
第83図	120～122・124・125号土坑実測図（土121は1／40、他は1／30）	121
第84図	120号土坑出土土器実測図（1）（1／4）	123
第85図	120号土坑出土土器実測図（2）（45は1／6、他は1／4）	124
第86図	120号土坑出土土器実測図（3）（1／8）	125
第87図	120号土坑出土土器実測図（4）（55～59は1／3、他は1／4）	125
第88図	121・122号土坑出土土器実測図（15は1／3、22～24は1／6、他は1／4）	127
第89図	123～125号土坑出土土器実測図（4は1／3、他は1／4）	128
第90図	126・127号土坑実測図（1／40）	129
第91図	126号土坑出土土器実測図（9は1／6、他は1／4）	130
第92図	126号土坑出土木製品実測図（4・5は1／3、他は1／2）	131

第93図	128～130号土坑実測図（土128は1／40、他は1／30）	133
第94図	127～130号土坑出土土器実測図（14・15は1／3、他は1／4）	134
第95図	131～134号土坑実測図（土134は1／40、他は1／30）	136
第96図	131号土坑出土土器実測図（1／4）	137
第97図	132・133・135号土坑出土土器実測図（17・18は1／3、他は1／4）	139
第98図	135～139号土坑実測図（土139は1／30、他は1／40）	140
第99図	136・137号土坑出土土器実測図（10は1／3、他は1／4）	141
第100図	138・139号土坑出土土器実測図（1／4）	143
第101図	140～143号土坑実測図（土140は1／30、他は1／40）	144
第102図	140号土坑出土土器実測図（1／4）	145
第103図	142号土坑出土土器実測図（1）（12は1／3、他は1／4）	147
第104図	142号土坑出土土器実測図（2）（1／4）	148
第105図	144～147号土坑実測図（土145は1／30、他は1／40）	149
第106図	144・145号（1）土坑出土土器実測図（3は1／3、他は1／4）	150
第107図	145（2）・147号土坑出土土器実測図（1／4）	151
第108図	148～152号土坑実測図（土150は1／30、他は1／40）	153
第109図	148・149号土坑出土土器実測図（7・8は1／6、他は1／4）	154
第110図	150号土坑出土土器実測図（1）（1／4）	155
第111図	150号土坑出土土器実測図（2）（1／4）	156
第112図	151・152・155号土坑出土土器実測図（1／4）	157
第113図	154～156号土坑実測図（土154は1／30、他は1／40）	158
第114図	154号土坑出土土器実測図（1）（1／4）	159
第115図	154号土坑出土土器実測図（2）（1／4）	161
第116図	2号溝出土土器実測図（1／4）	162
第117図	3号溝実測図（平面図1／100、土層図1／50）	163
第118図	3号溝出土土器実測図（1）（1・2・19～25は1／3、他は1／4）	165
第119図	3号溝出土土器実測図（2）（29は1／2、他は1／4）	166
第120図	3号溝出土土器実測図（3）（1／4）	168
第121図	3号溝出土土器実測図（4）（1／4）	169
第122図	3号溝出土土器実測図（5）（1／4）	170
第123図	3号溝出土土器実測図（6）（1／4）	172
第124図	3号溝出土土器実測図（7）（180～183は1／3、他は1／4）	173
第125図	3号溝出土土器実測図（8）（194は1／6、他は1／4）	174
第126図	4号溝出土土器実測図（1）（1／4）	175
第127図	4号溝出土土器実測図（2）（31は1／6、他は1／4）	176
第128図	4号溝出土土器実測図（3）（37は1／6、他は1／4）	178
第129図	4号溝出土土器実測図（4）（51・52は1／3、他は1／4）	179
第130図	4号溝出土土器実測図（5）（1／4）	180
第131図	4号溝出土土器実測図（6）（1／4）	181
第132図	4号溝出土土器実測図（7）（147は1／3、他は1／4）	182
第133図	4号溝出土土器実測図（8）（1／4）	184
第134図	4号溝出土土器実測図（9）（194・202は1／6、他は1／4）	185

第135図	5号溝実測図 (1/60)	186
第136図	5・6号溝出土土器実測図 (1・2は1/3、他は1/4)	187
第137図	7号溝平面図 (1/100)	189
第138図	7号溝・7号溝上層谷土層図 (1/100)	189
第139図	7号溝下部土層図 (1/50)	189
第140図	7号溝出土土器実測図 (1) (2は1/3、他は1/4)	191
第141図	7号溝出土土器実測図 (2) (1/4)	193
第142図	7号溝出土土器実測図 (3) (1/4)	194
第143図	7号溝出土土器実測図 (4) (89・90は1/6、他は1/4)	195
第144図	7号溝出土土器実測図 (5) (1/4)	196
第145図	8号溝実測図 (1/60)	197
第146図	ピット出土土器実測図 (1) (16は1/6、他は1/4)	199
第147図	ピット出土土器実測図 (2) (31・37は1/6、他は1/4)	200
第148図	p188実測図 (1/20)	201
第149図	ピット出土土器実測図 (3) (52は1/3、他は1/4)	202
第150図	ピット出土土器実測図 (4) (83~85は1/3、92・94は1/6、他は1/4)	203
第151図	ピット出土土器実測図 (5) (1/4)	204
第152図	遺構面等出土土器実測図 (1) (10・27~30・34は1/3、他は1/4)	207
第153図	遺構面等出土土器実測図 (2) (63は1/3、他は1/4)	208
第154図	遺構面等出土土器実測図 (3) (64・65は1/3、他は1/4)	154
第155図	遺構面等出土土器実測図 (4) (110は1/3、他は1/4)	155
第156図	遺構面等出土土器実測図 (5) (112は1/3、他は1/4)	156
第157図	遺構面等出土土器実測図 (6) (1/4)	213
第158図	遺構面等出土土器実測図 (7) (172は1/3、他は1/4)	214
第159図	遺構面等出土土器実測図 (8) (191は1/3、193は1/6 他は1/4)	215
第160図	遺構面等出土土器実測図 (9) (227は1/3、222は1/6、他は1/4)	217
第161図	遺構面等出土土器実測図 (10) (1/4)	218
第162図	土製品実測図 (1/2)	220
第163図	石器・石製品実測図 (1) (1/2)	221
第164図	石器・石製品実測図 (2) (72・73は実大、他は1/2)	222
第165図	石器・石製品実測図 (3) (1/2)	223
第166図	石器・石製品実測図 (4) (1/2)	224
第167図	石器・石製品実測図 (5) (1/2)	225
第168図	石器・石製品実測図 (6) (1/2)	226
第169図	石器・石製品実測図 (7) (1/2)	227
第170図	石器・石製品実測図 (8) (1/2)	228
第171図	石器・石製品実測図 (9) (1/2)	229
第172図	打製石器実測図 (1) (2/3)	231
第173図	打製石器実測図 (2) (2/3)	232
第174図	打製石器実測図 (3) (2/3)	233
第175図	打製石器実測図 (4) (2/3)	234
第176図	打製石器実測図 (5) (2/3)	235

第177図	打製石器実測図 (6) (2 / 3).....	238
第178図	打製石器実測図 (7) (2 / 3).....	239
第179図	打製石器実測図 (8) (2 / 3).....	240
第180図	打製石器実測図 (9) (2 / 3).....	241
第181図	打製石器実測図 (10) (32~37は 2 / 3 他は 1 / 2).....	242
第182図	打製石器実測図 (11) (38~42は 1 / 2 他は 2 / 3).....	243
第183図	打製石器実測図 (12) (51~55は 1 / 2 他は 2 / 3).....	244
第184図	打製石器実測図 (13) (1 / 2)	245
第185図	打製石器実測図 (14) (2 / 3)	246
第186図	打製石器実測図 (15) (2 / 3)	249
第187図	打製石器実測図 (16) (2 / 3)	250
第188図	彼坪遺跡 3・4次7号溝における花粉ダイアグラム.....	252
第189図	彼坪遺跡 3・4次126号土坑における花粉ダイアグラム.....	254
第190図	彼坪遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵	256
第191図	周辺遺跡の弥生時代中期末の土器 (1 / 6)	260

表目次

第1表	主要地方道久留米筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告一覧	2
第2表	土製品計測表	219
第3表	磨製石器・石製品計測表	228
第4表	打製石器計測表 (1)	230
第5表	打製石器計測表 (2)	236
第6表	打製石器計測表 (3)	237
第7表	打製石器計測表 (4)	247
第8表	打製石器計測表 (5)	248
第9表	打製石器計測表 (6)	250
第10表	彼坪遺跡における花粉分析結果	255

1 はじめに

1. 調査の経過

主要地方道久留米筑紫野線は、久留米市から久留米市（旧三井郡北野町）、大刀洗町、小郡市、朝倉郡筑前町（旧夜須町）東小田を経由して、筑紫野市に至る道路で、福岡県を南北に縦断する国道3号線のバイパスとして交通量が多い。北では主要地方道筑紫野古賀線と連続し、国道200号線ともアクセスがよく、南では九州縦貫自動車道久留米インターチェンジ等とも連絡している。その利便性を高めるため、福岡県では久留米筑紫野線の道路改良工事を進めており、現在、筑紫野市から大刀洗町内までの道路改良がほぼ完了している。

主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事に関する埋蔵文化財の調査は昭和51年の小郡市干潟遺跡に始まり、表1に示すように福岡県教育委員会・大刀洗町教育員会を事業主体として、道路工事の進捗に応じて断続的に実施している。

久留米市（旧三井郡北野町）彼坪遺跡に対しては平成10・11年度にそれぞれ1次・2次調査が実施され、すでに報告書が刊行されている（飛野博文編2001『彼坪遺跡』Ⅰ 福岡県文化財調査報告書第167集、飛野博文編2002『彼坪遺跡』Ⅱ 福岡県文化財調査報告書第182集）。本書で報告する彼坪遺跡3次・4次調査は平成12・13年の2ヶ年にわたり調査次数を分けているが、同一の地点に対する一連の調査で、福岡県教育庁北筑後教育事務所文化財担当職員を主担当として実施した。

3・4次の調査対象は、周辺のは場整備が実施された段階で国道322号線現道南側に沿って、2車線分、約15m程、道路が拡幅予定地として確保されていた地点である。ただ、拡幅予定地は現道に隣接するとともに、水田側には用排水路があるため、隣接する現道、水田用排水路側の調査区の壁の崩落による被害を防ぐため、幅約12m前後、長さ142mの東北―南西方向に細長い調査区となった。調査面積は約1660㎡に達する。ただ、南西側60mは遺物をほとんど含まない粘質土が堆積した谷部であり、部分的なトレンチによる地形・遺構の有無の確認程度の調査にとどめた。

3次調査は隣接する水田の稲刈りが終了した平成12年10月18日に開始した。表土を重機により除去したが、地表面から検出面までの深さが1m以上あり、かつ排土を平成11年度調査実施済みの地点に移動したため、表土除去に時間を要し、平成12年12月12日に完了した。重機による表土除去作業と平行し、10月24日には作業員を雇用し、調査区東北端から調査を開始した。表土を除去したところ標高7m前後の粘質土面で多数の遺構が密集するような状態であり、予想以上に遺構検出、掘削に時間を要した。そこで、久留米土木事務所の御理解をいただき、平成13年度にも延長して調査を実施することとした。この間、平成12年12月18日～平成13年1月9日は年末年始のため、平成13年3月12日～平成13年5月17日は年度末・年度初めの諸事務のため調査を中断した。

平成13年度は年度を違えたため4次調査としたが、平成12年度の調査に引き続いて同一地点の遺構の発掘を行っている。5月18日には調査を再開したが、6月16日には周辺の水田に田植えの準備が進み、調査区南側に沿って走る用水路にも水が流れるようになった。ほぼそれと同じ頃に梅雨が本格化し、梅雨明けの7月19日までは調査区全面に深さ1mを越える水が溜まり、調査が不可能になった。梅雨明けより調査を本格的に再開し、11月2日・12月5日には実機ヘリコプターによる空中写真を株式会社九州航空に委託して撮影した。12月14日には機材を撤収し、足掛け1年を越える調査を完了する事ができた。その後、12月27日までかけて調査区の埋め戻しを行った。

なお、平成13年9月5日から9月13日までの間、同じく主要地方道久留米筑紫野線を原因とする大刀洗町下高橋敷町遺跡の調査を彼坪遺跡の調査と平行して実施した。10月15日には北野町郷土史会の方々が来訪された。また、11月26日には大刀洗町下高橋官衙遺跡で遺構探査を実施されていた独立行政法人奈良文化財研究所の西村康氏が来訪され、御助言をいただいた。11月29日に

第1表 主要地方道久留米筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告一覧

報告書番号	遺 跡 名	所 在 地	調査面積	調査年度	報 告 書	遺跡の内容
1	干潟遺跡1次	小都市大字干潟	約6500㎡	昭和51年度	橋口達也・副島邦弘編1980	古代集落
	干潟遺跡2次	小都市大字干潟	約7500㎡	昭和53年度	『干潟遺跡』Ⅰ福岡県第59集	古代集落・墓地
2	東小田峰遺跡	朝倉郡筑前町東小田	約600㎡	昭和59年度	佐土原逸男・佐々木隆彦編1985	弥生時代墓地
	東小田七板遺跡F区	(旧朝倉郡夜須町大字東小田)	約1300㎡	昭和59年度	『東小田遺跡群』福岡県第70集	弥生・古墳時代集落
3	乙隈天道町遺跡	小都市乙隈・朝倉郡筑前町四三島 (旧朝倉郡夜須町大字四三島)		昭和62年度	児玉真一編1989『乙隈天道町遺跡』 福岡県第86集	弥生・古墳・古代集落
4	干潟遺跡3次	小都市大字干潟字船底・京ノ坪	4450㎡	昭和55年度	伊崎俊秋編1989『干潟遺跡』Ⅱ 福岡県第87集	古代集落
5	宗原遺跡	筑紫野市西小田	2000㎡	平成5年度	水ノ江和同編1994『宗原遺跡』 福岡県第116集	旧石器時代・弥生時代
6	栗崎遺跡1・2次	小都市大字松崎・ 三井郡大刀洗町大字下高橋	7500㎡	平成4年度	馬田弘毅・小川泰樹1995『栗崎遺跡』	縄文時代落し穴・ 古代集落
7	下高橋馬屋元遺跡	三井郡大刀洗町大字下高橋	9200㎡	平成6～8年度	赤司善彦編1997『下高橋馬屋元遺跡』Ⅰ福岡県第129集	弥生時代集落、 古代官衙遺跡
8					赤司善彦編1998『下高橋馬屋元遺跡』Ⅱ福岡県第133集	
9	北大手木遺跡	久留米市北野町今山 (旧三井郡北野町大字今山)	2500㎡	平成9年度	飛野博文編2000『北大手木遺跡』 福岡県第151集	弥生時代集落・ 古代道路
10	彼坪遺跡1次	久留米市北野町今山 (旧三井郡北野町大字今山)	3400㎡	平成10年度	飛野博文編2002『彼坪遺跡』Ⅰ 福岡県第167集	弥生時代集落
11	彼坪遺跡2次	久留米市北野町今山 (旧三井郡北野町大字今山)	2100㎡	平成11年度	飛野博文編2003『彼坪遺跡』Ⅱ 福岡県第182集(上巻)	弥生時代集落
	下高橋敷町遺跡	三井郡大刀洗町大字下高橋	680㎡	平成13年度	岡寺未幾編2003『下高橋敷町遺跡・ 下高橋十ノ江遺跡』福岡県第182 集(下巻)	古墳時代初頭土坑・溝等
	下高橋十ノ江遺跡	三井郡大刀洗町大字下高橋	1280㎡	平成13年度		近世
大刀洗町 調査	下高橋遺跡	三井郡大刀洗町大字下高橋	4300㎡	平成12・13年度	赤川正秀2003『高橋城跡』1 大刀洗町文化財調査報告書第24集 西村智道2003『高橋城跡』2 大刀洗町文化財調査報告書第25集	中世(高橋城推定地)
本 書	彼坪遺跡3次・4次	久留米市北野町今山 (旧三井郡北野町大字今山)	1660㎡	平成12・13年度	本書	弥生時代集落

は古環境研究所に依頼し花粉分析等の資料を採集した。

これら3・4次調査に係る出土遺物の整理を一部、平成13年度に行ったが、主として平成14年度に実施した。当初は平成15年度に報告書を刊行する予定であったが、平成15年7月19日に福岡県地方を襲った豪雨災害の関連で、報告書担当職員の業務が増大したために報告書の印刷・刊行を平成16年度に実施することとした。

2. 調査・整理の組織

各年度の調査・整理の組織は次のとおりである。

	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
総括					
教育長	光安 常喜	光安 常喜	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	森山 良一	森山 良一	三瓶 寧夫	三瓶 寧夫	清水 圭輔
総務部長	岩本 誠	三瓶 寧夫	松本 通憲	清水 圭輔	中原 一憲
文化財保護課長	柳田 康雄	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘
参事兼課長技術補佐	橋口 達也	橋口 達也	橋口 達也	木下 修	木下 修
参事兼課長技術補佐	川述 昭人	川述 昭人	川述 昭人	川述 昭人	川述 昭人
参事兼課長補佐		平野 義峰	久芳 昭文	久芳 昭文	安川 正郷
参事	井上 裕弘				新原 正典
課長補佐兼管理係長	平野 義峰				
庶務					
参事補佐兼管理係長			古賀 敏生	古賀 敏生	
管理係長		三笠 ひとみ			稲尾 茂
事務主査	吉武 祐二	井上 雅之	宮崎 志之	宮崎 志之	宮崎 志之
主任主事	鎮守 俊明	鎮守 俊明	鎮守 俊明	末竹 元	石橋 伸二
	佐藤 雅二		秦 俊二	秦 俊二	末竹 元
主事		秦 俊二			
調査					
参事補佐兼調査第一係長	佐々木 隆彦	佐々木 隆彦	佐々木 隆彦	小池 史哲	小池 史哲
参事補佐			飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
主任技師	岸本 圭(整理担当)	岸本 圭(整理担当)	岸本 圭(整理担当)		
技師	平尾 和久(調査担当)	辻田 淳一郎(調査担当)		坂元 雄紀(整理担当)	坂元 雄紀(整理担当)
北筑後教育事務所主任技師	重藤 輝行(調査担当)	重藤 輝行(調査担当)	重藤 輝行(報告書作成担当)		
福岡教育事務所主任技師				重藤 輝行(報告書作成担当)	重藤 輝行(報告書作成担当)

発掘調査・整理報告書作成では次の方々に御教示・御協力いただいた。記して感謝いたします。

北野町教育委員会本田岳秋氏、大刀洗町教育委員会赤川正秀氏、西村智道氏、田主丸町教育委員会丸林禎彦氏、江島伸彦氏、夜須町教育委員会石井扶美子氏、甘木市教育委員会篠原浩之氏、小郡市教育委員会片岡宏二氏、北筑後教育事務所生涯学習課、福岡教育事務所生涯学習室の皆様。



調査風景

2 位置と環境

1. 周辺の地形

旧三井郡北野町、現久留米市北野町は筑後川北岸の沖積平野中に位置し、現在は起伏の少ない住宅地、水田・畑地等農地を中心とした景観を形成している。彼坪遺跡は久留米市北野町の北西部、三井郡大刀洗町との境に接して位置し、遺跡の北西には筑後川の支流である大刀洗川が南流する。遺跡周辺も標高8mほどで起伏の少ない平坦な水田が広がる。現在では遺跡周辺の水田ではほぼ場整備が完了し、遺跡を横切るように国道322号線が位置している。遺構面は現地表から1m余り下位の標高7m前後の暗褐色粘質土・灰黄褐色粘質土上である。

遺跡の南方300m程の地点には県道久留米筑紫野線建設に先立って調査を実施した弥生時代中期の集落遺跡である北大木遺跡が所在する。また、遺跡の東方3km程の地点には弥生時代の大遺跡良積遺跡、古代の地方官衙遺跡の可能性のある古賀ノ上遺跡が所在する。

2. 久留米市北野町内の弥生時代遺跡

旧北野町内の弥生時代遺跡の状況については『彼坪遺跡』Ⅰ及び、旧北野町で刊行された文化財調査報告書に詳しいため、ここでは弥生時代の主要遺跡について述べる事にしたい。

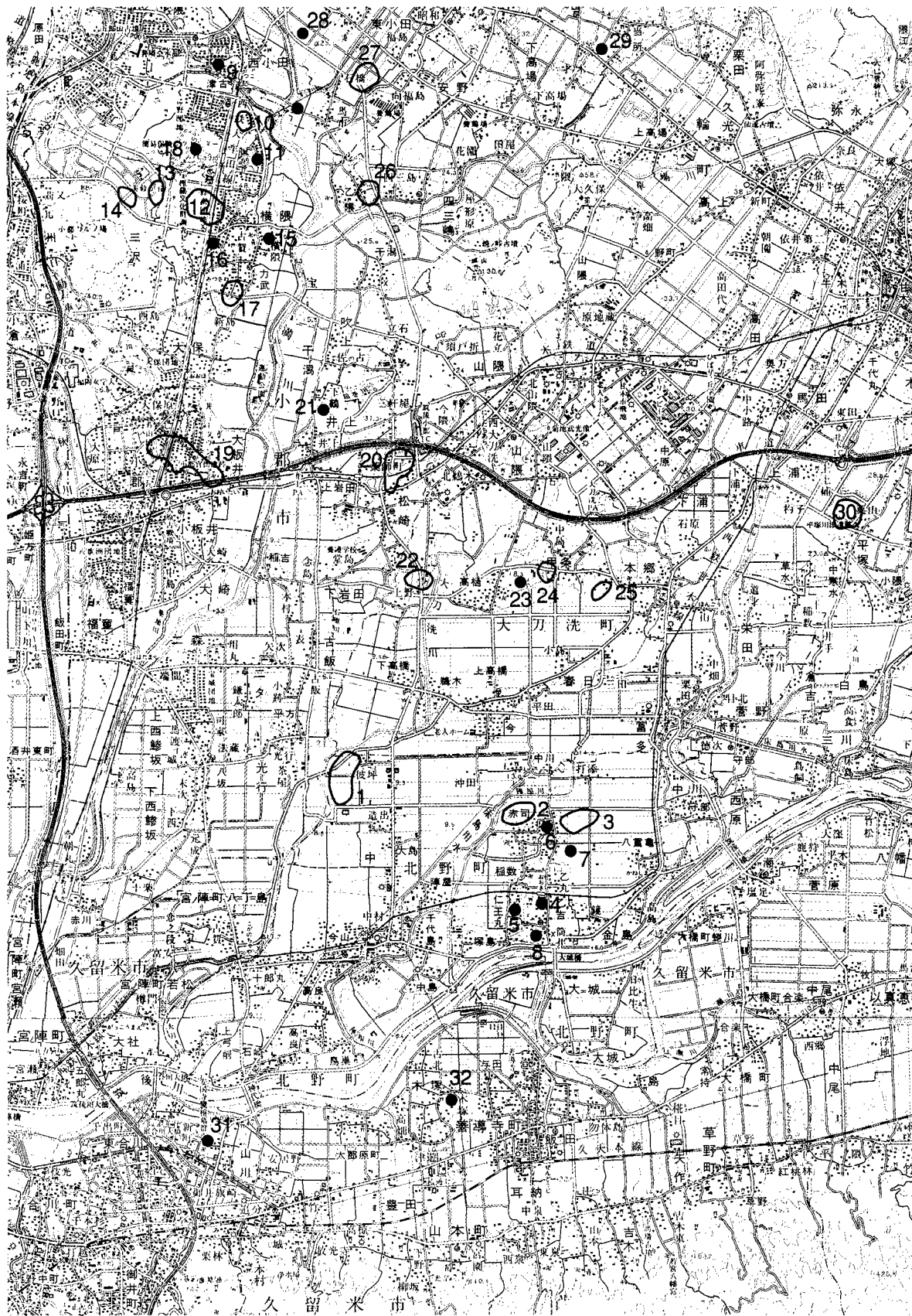
弥生時代前期には環濠集落の良積遺跡（北野町第1・11・12集）があり、壺棺9基が調査された墓地の今寺遺跡（北野町第3集）、瑪瑙石器を出土した八勝負遺跡（北野町第1集）も良積遺跡に隣接する。後述するように彼坪遺跡も前期の中頃には集落の形成が始まる。中期には遺跡が増加し、分布も拡大する。良積遺跡はこの時期も継続するが、他に赤司一区公民館遺跡（北野町第4集）、今寺遺跡（北野町第3集）、大城小学校校庭遺跡、北大手木遺跡（福岡県第151集）が出現する。北大手木遺跡は彼坪遺跡の南に隣接しており、彼坪遺跡から分村した集落の可能性が考えられる。墓地には餅田遺跡（北野町第1集）、土居2遺跡（北野町第6集、遺跡詳細分布調査報告書）、大城中筒井遺跡がある。餅田遺跡では中期前半～後期初頭の甕棺墓43基が検出され、土居2遺跡では中期前半の小児甕棺が2基不時発見された。大城中筒井遺跡は現在は筑後川に隣接しているが、本来は沖積平野中の微高地と推測され、中期初頭～後期初頭の甕棺墓68基、祭祀土坑4基、石棺墓20基が検出された。同遺跡では墓地に隣接して水田跡も検出されている。後期になると良積遺跡は集落規模、住居数が増大し、二重環濠集落を形成し、鏡を副葬した甕棺墓も出現する。一方、彼坪遺跡は集落が後期前葉頃に廃絶され、大木中筒井遺跡の墓地も衰退に向う。

このほかに弥生時代の資料としては、仁王丸遺跡から出土した朝鮮半島系無文土器（北野町第10集）、塚島遺跡の支石墓、日比生遺跡出土と伝えられる銅矛がある。断片的であるが、渡来人の存在、青銅器を所有した首長層の形成をうかがわせ、当地域の歴史を考える上で貴重である。

3. 筑後川流域の弥生時代と彼坪遺跡

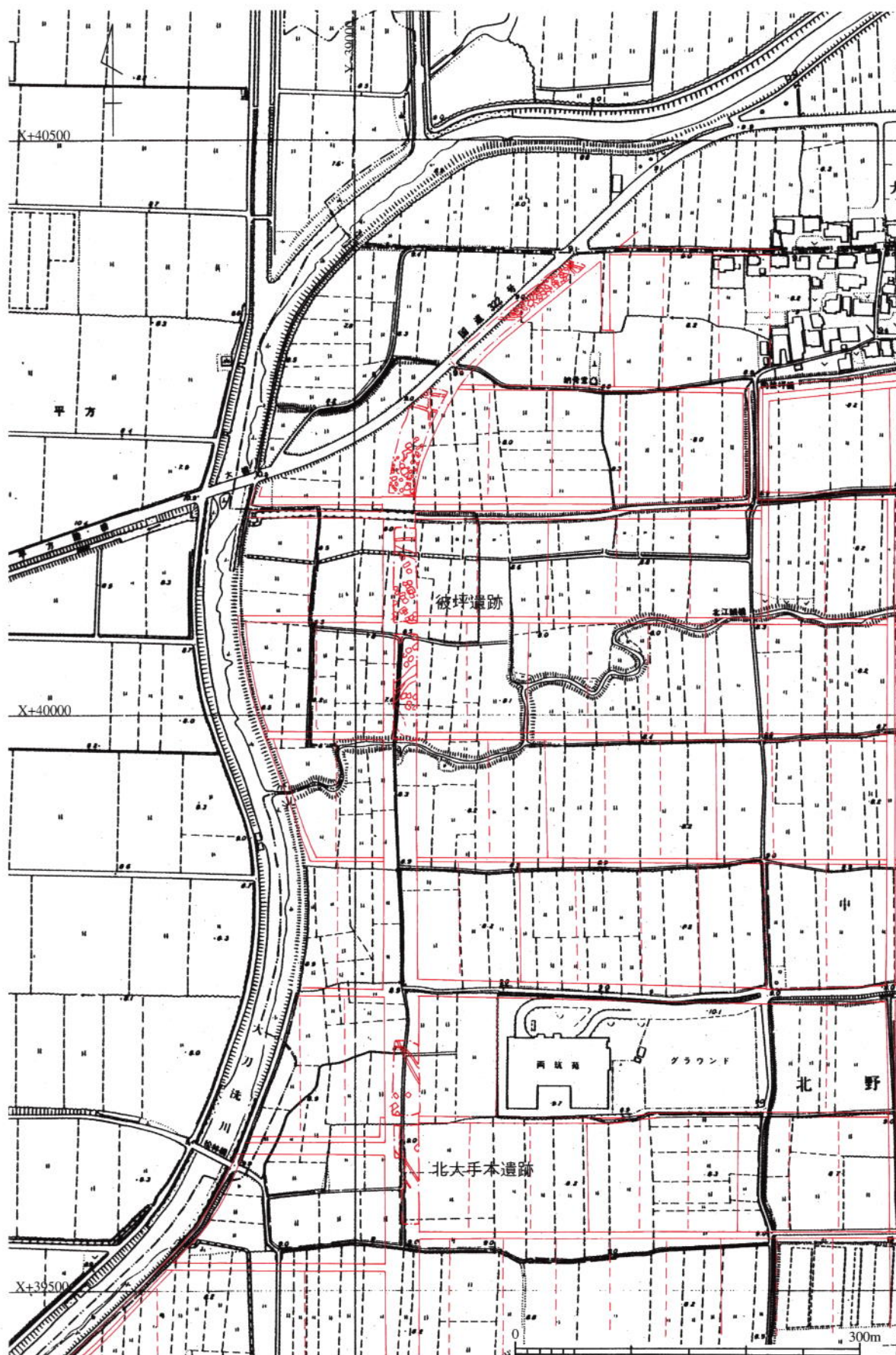
彼坪遺跡は筑後川とその支流により形成された筑紫平野のほぼ中央に位置しているといえる。そこで、筑後川流域の弥生時代遺跡について簡単に述べ、彼坪遺跡の形成を考える材料としたい。

三国丘陵・宝満川西岸 小郡市北方の三国丘陵を中心に弥生時代の遺跡が集中し、隣接する筑紫野市南部にかけて弥生時代遺跡の調査例が充実している。宝満川西岸の沖積平野に望む段丘先端に立地する力武内畑・力武前畑遺跡は弥生時代前期初頭から集落が形成される。隣接して水田への導水のための井堰遺構が検出され、墓地として横隈上内畑遺跡が比定できるため、当地域における弥生時代開始期の集落規模・景観を復元するための貴重な資料である。三国の鼻遺跡でも前期初頭より墓地の形成が始まる。前期前半になると横隈山遺跡5地点、横隈山遺跡6・7地点、三沢北中尾遺



- | | | | | | |
|-------------------|------------|--------------|-------------|-----------------|-----------------|
| 1. 彼坪遺跡 | 2. 良積遺跡 | 3. 八勝負・餅田遺跡 | 4. 今寺遺跡 | 5. 仁王丸遺跡 | 6. 赤司公民館遺跡 |
| 7. 定格遺跡 | 8. 大城中筒井遺跡 | 9. 津古内畑遺跡 | 10. 津古土取遺跡 | 11. 横隈北田・三国の鼻遺跡 | |
| 12. 三沢北中尾・三沢達ヶ浦遺跡 | 13. 一ノ口遺跡 | 14. 北松尾口遺跡 | 15. 横隈上内畑遺跡 | 16. 横隈山遺跡 | |
| 17. 力武内畑遺跡 | 18. 三沢遺跡 | 19. 小郡・大板井遺跡 | 20. 上岩田遺跡 | 21. 井上北内原遺跡 | 22. 下高橋馬屋元・上野遺跡 |
| 23. 高樋塚添遺跡 | 24. 甲条神社遺跡 | 25. 本郷畑築地遺跡 | 26. 乙隈天道町遺跡 | 27. 東小田七板遺跡 | 28. 東小田峯遺跡 |
| 29. 栗田遺跡 | 30. 平塚川添遺跡 | 31. 安国寺遺跡 | 32. 木塚遺跡 | | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/75,000)



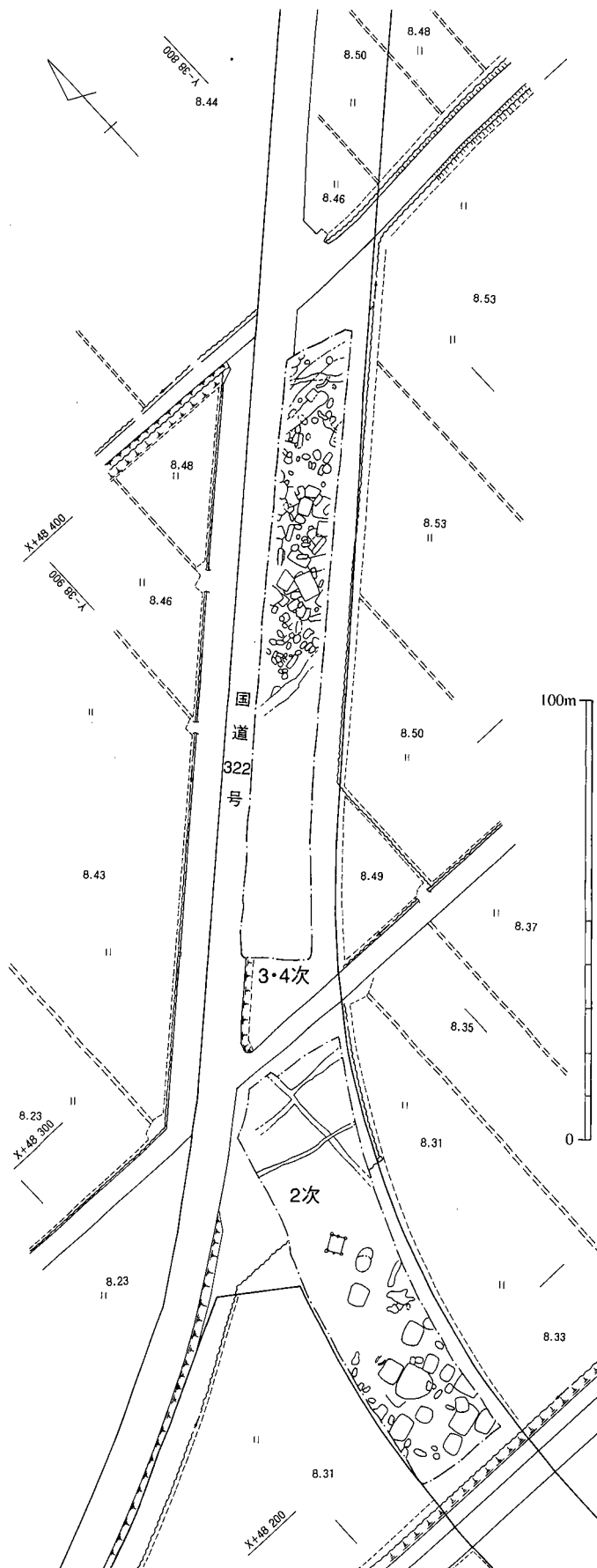
第2図 彼坪遺跡の位置 (1/5,000)

跡1地点、前期後半には横隈北田遺跡で環濠が形成される。この他、前期前半～後半にかけて三国丘陵では津古内畑遺跡、津古土取遺跡、三沢北中尾遺跡、三沢蓬ヶ裏遺跡、三沢一ノ口遺跡、三沢北松尾口遺跡等多数の大規模集落遺跡が存在する。この時期には朝鮮半島系無文土器が集中的に分布する事も注目される。

中期になると三国丘陵の遺跡は減少・縮小に向かう。その一方で、小郡市中心部の大板井遺跡周辺に集落が展開し、多鈕細文鏡2面を出土した小郡若山遺跡、小郡官衙遺跡も含めて、大板井・小郡遺跡群とでも称すべき大集落を形成している。同集落に対応する墓地は大板井遺跡東南部で検出され、周辺では正式な調査例ではないが、中細形銅戈7本も出土している。

後期になると現状では大板井遺跡周辺の大規模な集落は衰退する。その中で三国丘陵の三国の鼻遺跡では沖積平野に面した環濠集落が形成される。

宝満川左岸～城山南麓 上岩田遺跡第9地点で弥生時代早期、夜臼式にまで遡る可能性のある溝が確認され、環濠を構成する可能性がある。また下高橋馬屋元遺跡では早期の壺棺墓、前期の竪穴住居跡が検出された。中期以降になると城山南麓を中心に遺跡が展開し、集落遺跡としては小郡市井上北内畑遺跡、小郡市乙隈天道町遺跡（後期）、大刀洗町下高橋馬屋元遺跡（前期・中期後半）、大刀洗町本郷野開遺跡（後期前半）、大刀洗町本郷畑築地遺跡（後期後半～終末）等がある。墓地は甲条神社遺跡（中期前半～終末；甕棺墓・石棺墓・土壙墓）・甲条北松木遺跡（中期後半～終末；甕棺墓・土壙墓）、高樋塚添遺跡（中期前半；甕棺墓・土壙墓）、高樋小坂遺跡（中期後半；甕棺墓）が調査されている。



第3図 彼坪遺跡調査区周辺地形図（1/1,500）

朝倉郡・甘木市 弥生時代前期の遺跡としては夜須町曾根田川東岸に面した筑前町（旧夜須町・旧三輪町）大木遺跡があり、住居跡・溝等が検出されている。中期になると筑前町、甘木市の低位河岸段丘、扇状地を中心に多くの遺跡が展開するようになる。中でも中期～後期の数百棟もの竪穴住居跡が検出された曾根田川流域の旧夜須町東小田七板遺跡・ヒルハタ遺跡、小石原川流域の甘木市平塚川添遺跡・平塚山ノ上が拠点集落としての役割を担ったと推測される。弥生時代墳墓は甕棺墓が主体であり、旧夜須町東小田峯遺跡、小石原川右岸の平塚川添遺跡に隣接する河岸段丘上の甘木市栗山遺跡、荷原川西岸段丘上の朝倉町大庭久保遺跡、原の東遺跡などがある。副葬品をもつ甕棺墓は少なく、確実な武器形青銅器の副葬例としては旧三輪町栗田の中細形銅矛1本のみである。

旧浮羽郡 弥生時代前期の集落遺跡としてはうきは市（旧吉井町・旧浮羽町）大碇遺跡があり、竪穴住居跡14棟等が検出されている。さらに弥生時代前期末～中期前半になると平野部、筑後川とその支流巨勢川に挟まれた微高地上に立地する旧吉井町仁右衛門畑遺跡、旧浮羽町田島北遺跡、久留米市田主丸町水分遺跡等で竪穴住居跡、貯蔵穴、土坑等からなる集落構造を良く示す調査例が増加する。旧吉井町鷹取五反田遺跡・船越高原遺跡・堂畑遺跡では中期中頃後半～後期の大規模な集落遺跡を形成している。後期の遺跡としては旧吉井町塚堂遺跡、旧吉井町吉井中学校遺跡、旧浮羽町日永遺跡等があり、日永遺跡では広形銅矛1本・広形銅戈1本の埋納遺構が検出された。また、耳納山麓の久留米市田主丸町寺徳古墳の確認調査では弥生時代小形倣製鏡の鋳型が発見されている。寺徳古墳周辺で弥生時代集落は発見されていないが、鋳型の存在から考えて周辺に拠点集落級の当該期の遺跡があると考えられる。

以上のように筑後川流域では弥生時代遺跡の調査例が多く、大規模な拠点集落も判明しつつある。このうち早期～前期に属するそれぞれの地域での初期の集落としては小郡市力武内畑・力武前畑遺跡、久留米市北野町良積遺跡、大刀洗町下高橋馬屋元遺跡、筑前町大木遺跡などがあり、いずれも沖積平野・小河川に面した段丘上、微高地上に立地するという共通点がある。彼坪遺跡は周辺の沖積平野との比高差がほとんどないが、大刀洗川とそれにより形成された沖積地に面する点でそれらの遺跡と類似した立地と言える。このような遺跡立地から考えれば、筑後川に面した前期の墓地遺跡である久留米市善導寺町木塚遺跡周辺、前期末の墓地・集落遺跡である久留米市東屋敷・西屋敷・東櫛原今寺遺跡周辺にも前期前半にまで遡る集落の存在が推測されよう。彼坪遺跡では中期以降、集落規模が拡大し、隣接して北大手木遺跡のような集落も出現する。上述した地域のうち三国丘陵・宝満川東岸では前期後半、他の地域では前期末以降、集落の規模が大形化し、集落数も増加する。彼坪遺跡の変遷を考えると、集落の増加・大形化はこのような前期以来の集落の面的拡大と新たな集落の分村の集積によると言えよう。同様の集落変遷は久留米市北野町良積遺跡周辺でも指摘できる可能性がある。後期になると久留米市北野町良積遺跡のようにさらに規模を拡大する事例、甘木市平塚川添遺跡のように新たに大規模な環濠集落を形成する事例もあり、複雑な様相を呈する。ただ、彼坪遺跡では集落が廃絶され、同様に中期以来の大規模集落であっても小郡市大板井・小郡遺跡などのように後期になり廃絶されるものも多い。

以上のような点で彼坪遺跡における集落の変遷は筑後川流域の弥生時代遺跡の展開を集約したような感がある。また、近年では甘木市平塚川添遺跡のように周辺の沖積平野とのわずかな比高差しかない地形に弥生時代遺跡の立地する例が、筑後川流域で明らかにされつつある。久留米市安国寺遺跡は筑後川に程近い立地の大規模な甕棺墓地であるが、それに対応する集落が隣接すると思われる。彼坪遺跡も同様の立地であり、調査の進展により大規模な集落はさらに増加する可能性が高い。県道久留米筑紫野線に係る彼坪遺跡の発掘調査はちょうど遺跡を縦断するようなトレンチを設定したような状態であり、調査範囲も限られていた。遺跡の形成過程・展開について、周辺地域との比較検討を充実させるためにも、今後、面的な範囲内容確認調査が進むことを期待したい。

3 調査の内容

1. 遺跡と調査の概要

(1) 検出遺構

遺構は旧地表より1.5m程、重機により掘削して露出する標高7.0m前後の暗褐色粘質土の上面で検出できた。暗褐色粘質土下には、基本的に灰黄褐色シルト地山が堆積する。

検出遺構としては竪穴住居跡33基、土坑143基、溝8条がある。ただ、検出面である暗褐色粘質土は遺構覆土と類似していることに加え、遺構間の切合いが複雑であるため、的確に発掘できたか不安が残ることをまずお断りしておきたい。そのため、出土遺物においても1遺構で時期幅が大きく、一括性の判断も慎重を要する遺構が多い。これらの遺構のうち調査区東北端近くの3号溝、調査区中央やや西よりの7号溝は一連のものであり、後述するように断面V字形を呈し、掘削時期が弥生時代前期後半に遡る環濠を形成していた可能性が極めて高い。

(2) 出土遺物

出土遺物はパンケース約270箱と、調査面積に比して極めて多量である。出土した遺物は弥生時代前期～後期初頭の土器、それに伴う打製・磨製石器、玉類、土製品がある。木製品は126号土坑より5点出土している。出土遺物のうち土器・木製品は各遺構の項で説明し、打製・磨製石器、玉類は本章の末尾に一括して詳述することとした。

なお、出土土器のうち粗製品を中心として、石英、安山岩、雲母の角の取れた2～3mm大の礫を多量に含むものが多い。厳密な岩石学的分析及び遺跡周辺の河川に堆積した砂礫の調査を経たわけではないが、本遺跡出土品の主体を構成していることから、これらの砂礫を含む土器が在地で生産されたものと考えておきたい。

2. 検出遺構と出土土器

(1) 竪穴住居跡

1・2・3・5・6・7・9・10・11・12・14・15・17・20号竪穴住居跡は発掘調査中には番号を付したが、調査完了後の検討の結果、住居跡とするよりは包含層等、他の遺構と解釈するのが適当と判断したため、欠番とした。そのため、竪穴住居跡は33基を数える

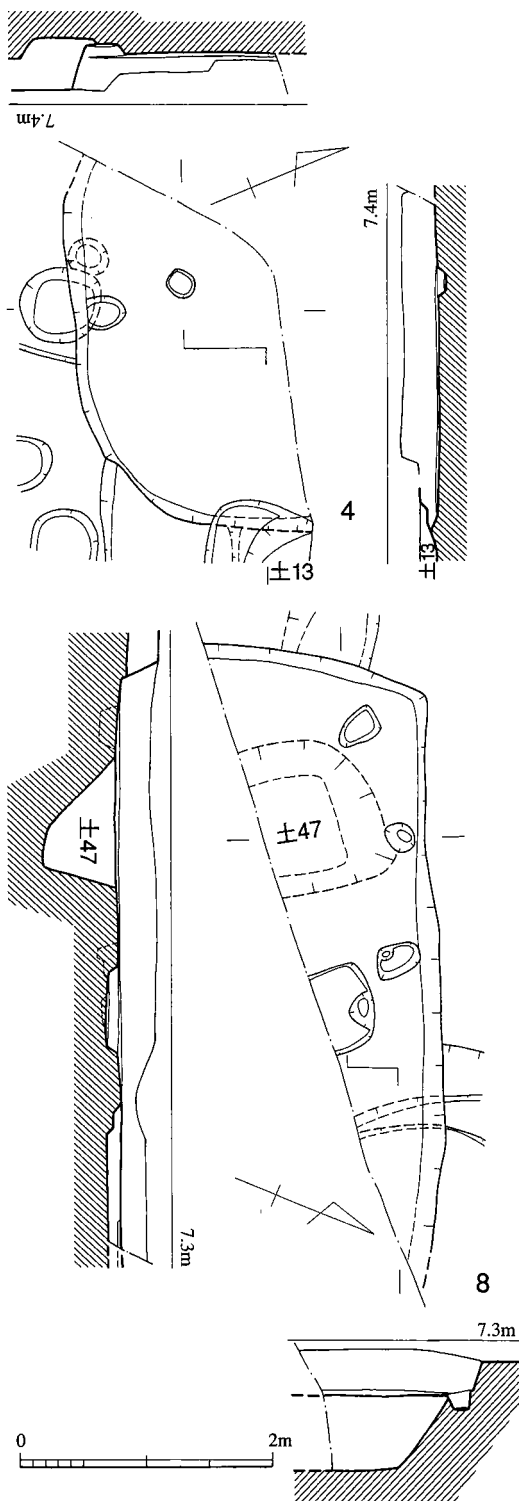
4号竪穴住居跡（図版8、第5図）

A・B区、3号溝の東に所在し、西側に位置する42号竪穴住居跡を切る。住居の南東部分を発掘したもので大半は調査区外にあるが、隅丸方形あるいは楕円形の平面形を呈すると思われる。調査できたのは東西2.9m、南北1.7m程の範囲で、壁は良好な個所で高さ30cm程遺存していた。床面では3基ピットを検出したが、支柱穴とは考えられず、炉跡も検出していない。

出土土器（第6図1～4） 1は外への突出の小さい鋤先口縁甕口縁部で、内外摩滅し、淡褐色を呈す。針状の黒色雲母を胎土に多く含む。2は甕の胴下半～底部破片で内面は摩滅が顕著。淡褐灰色を基調とするが、外面は煤が付着し、内面は黒変する。3は内外摩滅した壺底部片で、褐色を呈し、砂粒を多く含む。4は他より古い時期の壺底部片で、先行する遺構からの混入品か。内外摩滅するが、底部外周に指圧痕が残る。外面灰褐色、内面暗褐色。

8号竪穴住居跡（図版8、第5図）

C区に位置し、大半は調査区南壁の外にある。主軸を北西―南東にとる長方形竪穴住居跡の北西



第5図 4・8号竪穴住居跡実測図
(1/60)

隅付近と考えられ、西壁を長さ1.8m、北壁を長さ4.8mの範囲で検出した。壁は最大で高さ30cm余りが遺存している。床面で4基のピットを検出したが、いずれも浅く支柱穴とするには無理があり、炉痕も検出していない。床面下層では47号土坑が位置している。実測可能は土器はないが、磨製石斧（第166図100）が出土。

13号竪穴住居跡（図版9、第7図）

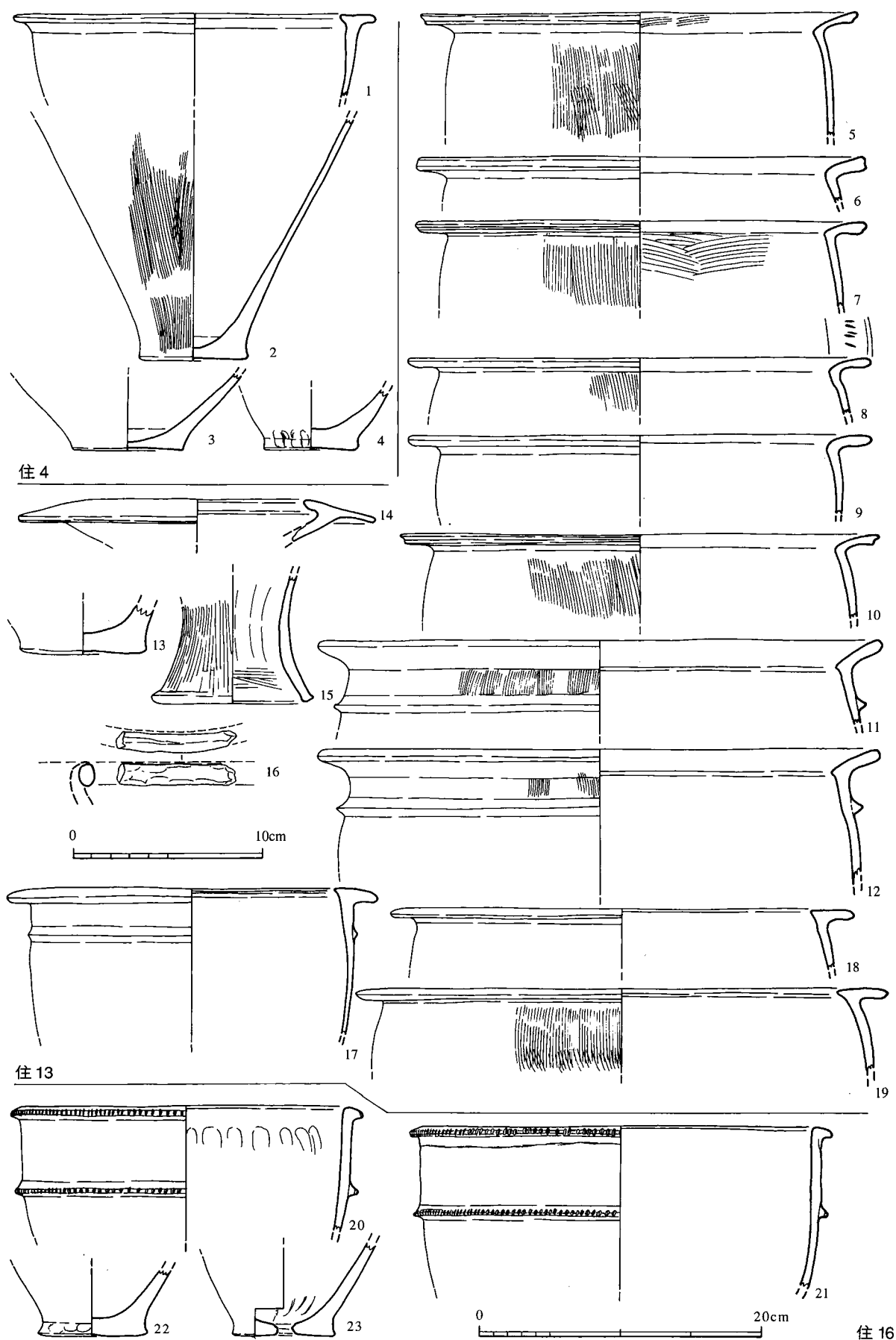
A・B区に所在し、3号溝の南西に位置している。調査区南壁外へと続く楕円形ないしはくずれた円形竪穴住居跡と考えて調査したもので、調査範囲は東西3.4m、南北3.6mを測る。遺存の良好な個所で壁の高さは30cm弱。ただ、調査時には3号溝との切合い関係が確定できず、床面の柱穴の配置にも難があるため、住居跡と断定するには不安を覚える。出土した土器は中期末が主体と思われる。土器の他、安山岩製石鏃（第4表4）が出土。また本遺構と16号土坑の上層から砥石（第167図105）が出土。

出土土器（図版54、第6図5～19） 5～10は外折した甕口縁片である。このうち、5～7・10は口縁端部が凹み、10は特に凹みが顕著である。一方、8・9は口縁端部を丸く仕上げている。8は口縁部上面に工具刺突による意図的な文様が一部に施され、頸部内面に凹みの巡る点が特徴的である。胴部外面は5・7・10が縦ハケを残し、他は摩滅する。胴部内面は5がナデで仕上げ、7は横ハケを施すが、他はいずれも摩滅が進行している。5内面淡黄褐色、5外面・6内面は黄白褐色～白黄褐色、7内面・9は褐色、8は淡灰黄褐色、10は淡灰褐色を基調とする。6内面は使用のためか暗灰黒色、7外面・8外面は煤の付着により暗褐色を呈し、10の口縁部上面は淡橙褐色に変色する。

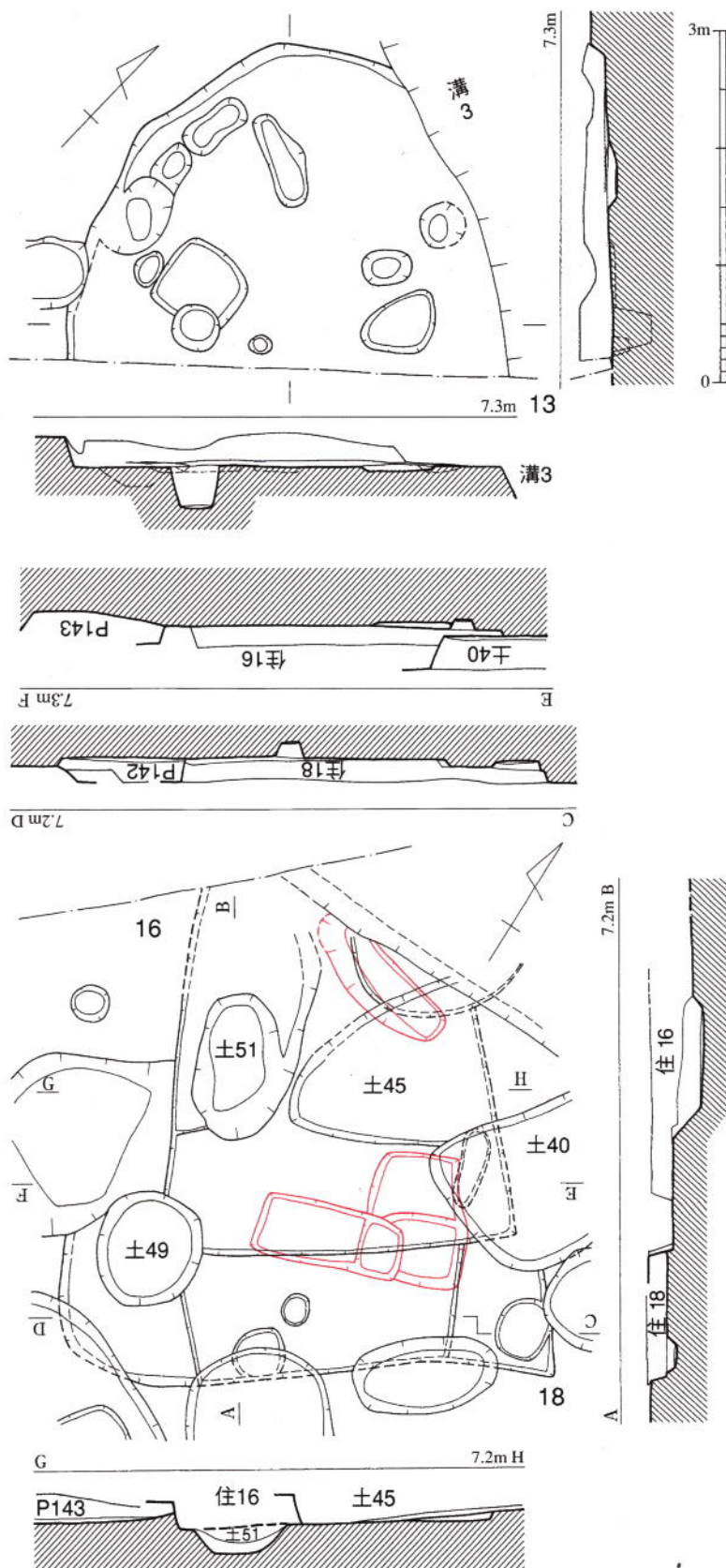
11・12は断面「く」の字を呈し、頸部外面に断面三角形突帯を巡らした大形甕口縁部片である。いずれも口縁端部は丸く仕上げ、内外の調整はほとんど摩滅しているが、口縁下にハケメを残している。11外面淡褐色、12外面淡灰白褐色を呈するが、ともに

内面は二次的に火を受け赤変する。13は甕底部片で、器壁が厚いため先行する時期の遺構からの混入品か。内外ナデ仕上げで、淡褐色を呈す。

14は高杯口縁部片。鋤先口縁を呈し、外方は長く傾斜し、内面の突出も強い。砂粒をほとんど含まない精選された胎土を用い、丹塗を施していた可能性が高いが残存しない。15は器台片で、天地



第 6 図 4・13・16号竪穴住居跡出土土器実測図 (16は1/3、他は1/4 1~4:住4、5~19:住13、20~23:住16)



第7図 13・16・18号竪穴住居跡実測図 (1/60)

不明であるが、裾部として図示した。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、裾近くの内面に横ハケも残る。淡灰黄褐色を呈す。

16は緩く弧を描く粘土紐片で、器形・用途は不明であるが、形態から朝鮮半島系粘土帯無文土器の口縁外面粘土帯部分として図示した。円弧、太さは粘土帯土器と類似するが、石英を多く含む胎土は在地産と推定される他の弥生土器と大差ない。破片の右端部で粘土紐が収束しているようにも見える点、内面に明瞭な剥離痕跡が残らない点は、粘土帯土器と考える場合に難点となる。褐色を呈する。

17～19は本遺構と隣接する16号土坑の上層から出土した甕口縁部片で、5～10と異なりいずれも鋤先口縁であるから、16号土坑に属する可能性が高い。17は胴径に比べ器高の小さい樽形甕の口縁部片と推測される。口縁部は厚く、上面は緩やかに外傾し、胴上部外面に断面三角形突帯が巡る。内外摩滅し、淡褐色～灰褐色を呈す。18・19は口縁上面がほぼ水平で、19は口縁内側への突出がやや強い。18は内外摩滅し、白褐色を呈す。19は外面縦ハケ仕上げである。内面淡黄褐色、外面暗褐色を呈し、砂粒を多く含むが、粘土は比較的精良。

16号竪穴住居跡 (図版9、第7図)

C区に所在し、40・45・49号土坑に切られ、18号竪穴住居跡に後出すると考えて発掘調査した。北西－南東に長軸をとる長方形竪穴住居跡と考えられ、現

状では長さ3.1m以上、最大幅2.9mを測る。ただ、暗褐色粘質土を覆土とするため、周辺の遺構との区別が難しく、北側では幅が減少しており、平面形を適確に把握できていないものと思われる。床面には明確な主柱穴、炉痕は検出されなかった。また、住居跡の床面北西部では51号土坑を検出しているが、住居との前後関係は不明である。土器の他に土製紡錘車（第162図38）、砥石（第168図121）が出土。

出土土器（第6図20～23） いずれも前期末の甕破片であるが、上述のような発掘過程から一括性には不安がある。20・21は口縁部片で、口縁端部、胴やや上部外面に2条の刻目突帯を巡らす。ともに突帯頂部に鋭利な工具により密な刻目を施している。20は内外摩滅が進むが、21は胴部突帯より上の外面～内面はナデで仕上げ、口縁部突帯の下部に接合痕が残っている。20及び21内面は淡黄褐色、21外面は灰黄褐色を呈すが、20外全面、21胴部突帯より下の外面は煤のために暗褐色。また、いずれも胴部突帯より下位の内面にコゲが付着する。

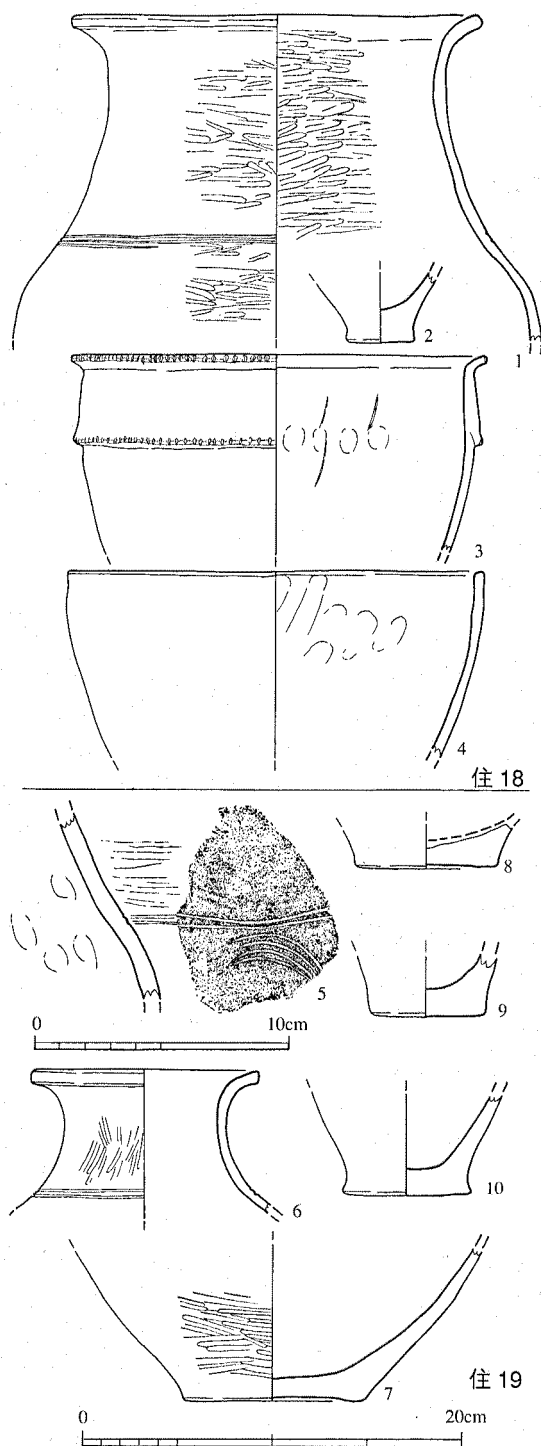
22・23は甕底部片で、23は焼成後に底部に穿孔し、甑として転用している。22は内外摩滅し、外面暗褐色、内面灰黄褐色を呈する。23は内面ナデ仕上げ、外面摩滅する。淡黄褐色を基調とするが、内面は使用により暗褐色に変色する。

18号竪穴住居跡（図版9、第7図）

C区に所在し、16号竪穴住居跡とほぼ同方向に主軸を置く長方形竪穴住居跡と考えた。しかしながら、大半は16号住居跡と重なるため失われ、40・49号土坑、ピット等にも切られており、遺存するのは南短壁と東西長壁の一部である。東西幅は3.0mを測る。壁は高さ10cm程しか残らず遺構の重複が著しいため形態は不安であり、16号竪穴住居跡の覆土の一部を誤認して別住居とした恐れもある。主柱穴、炉痕も検出できなかった。土器の他に柱状片刃石斧（第165図88）が出土。

出土土器（第8図1～4） 前期後半～末の土器

が出土しているが、一括性は不安である。1は中形壺の口縁部～胴上半部片。胴部からゆるやかに頸部が立ち上がり、口縁部は外反し、ほぼ同じ厚さのまま口縁端部に至る。口縁端部は角張った面をなしている。肩部には2条～3条の沈線を巡らし、頸部と胴部を区画する。外面～頸部内面は横ミガキ、胴部内面はナデ仕上げ。内外淡灰黄褐色を呈す。2は小形壺の底部片か。底部は厚く、外



第8図 18・19号竪穴住居跡出土土器実測図
（5は1／3、他は1／4
1～4：住18、5～10：住19）

面は摩滅し、内面ナデ仕上げである。外面暗褐色、内面灰褐色を呈す。3は外反口縁の甕胴部～口縁部片で、口縁端部は直立した面をなし、密に刻目を施す。胴上部は突帯を貼り付けずに粘土接合部を段として、その角に刻目を施す点が特徴的。胴部内面には指頭圧痕が水平に巡り、板状工具痕も残るので、基本的に指押さえ後板ナデ仕上げか。灰白褐色。4は単口縁の鉢口縁部で、砲弾形の器形と推測される。内外摩滅がすすむが、口縁内面には指頭圧痕が残る。外面灰褐色、内面褐色を呈し、口縁内面にはコゲが付着する。

19号竪穴住居跡（図版9、第9図）

C区に所在し、東西に長軸をとる楕円形平面の竪穴住居跡で、東半部は調査区外にある。短軸方向に3.1mを測り、長軸方向に2.1mの範囲を調査した。壁の高さは良好な個所で20cm程。床面では調査区壁際、136号土坑上面に炭化物が集中し、炉痕と考えられ、北側38号土坑の直下で検出したピットが主柱穴と推測される。北壁沿いでは幅10cmあまりの溝が断続的に検出されており、壁溝となるか。上層は38号土坑に切られ、下層には136号土坑が位置する。土器の他に土製紡錘車（第162図28）、砥石（第167図110、床面P4出土）が出土した。

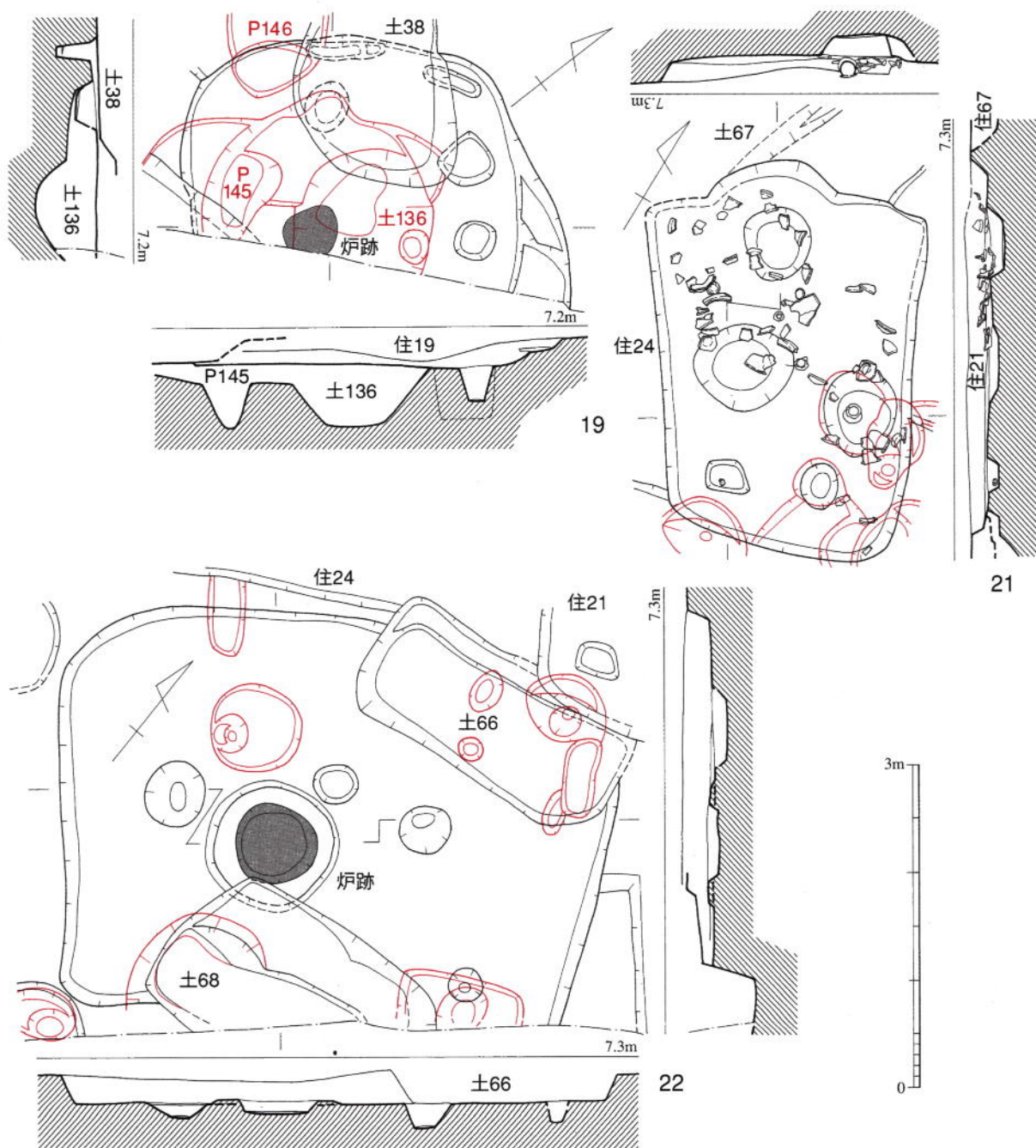
出土土器（第8図5～10） 5は壺胴部小片で、傾きは不安。肩部に2条の沈線を巡らし、その直下に4条の沈線からなる重弧文を施す。外面摩滅するが横ミガキ仕上げと判断され、内面はナデ仕上げ。内外淡褐色。6は壺口縁～頸部片。口縁端部はやや器壁が厚く垂直面をなし、肩部に2条の沈線を巡らす。外面は縦ミガキを施し、内面は摩滅のため調整不明である。黄褐色～黄灰褐色。7・8は壺底部である。7は大きな平底を呈し、内面はナデ仕上げで、外面は横ミガキを施す。外面橙褐色を呈す部分もあるが、淡灰褐色を基調とする。8は7に比べ底径が小さい。外面ナデ仕上げで、内面は剥離する。9・10は甕底部か。9は外面のくびれが弱く、胴部の張りも小さい。内外ナデ仕上げで、内面暗褐色、外面淡黄褐色であるが、外面には煤が付着。10は踏ん張った形の底部で、内面ナデ、外面は調整不明。外面は二次的に火を受け橙褐色、内面灰黄褐色。

21号竪穴住居跡（図版9・10、第9図）

D・E区、22・24号竪穴住居跡東に位置しており、現状では北西－南東方向に主軸を置く、長さ3.7m、幅2.6mの長方形竪穴住居跡となる。壁の高さは20cm前後で、暗褐色粘質土を覆土とする。床面からほぼ水平に土器が出土しているため、竪穴住居跡であることは間違いないが、南東側の幅が狭くなり、床面で検出した5基のピットはいずれも浅く主柱穴とするには無理がある。床面では炉痕も検出されなかったため、平面形も不安である。本住居跡の北に隣接する67・70号土坑、南に隣接する66号土坑との前後関係も確定できなかった。なお、本住居跡東の包含層、北の包含層から石鏃（第4表3・6）、石錐（第6表172・173）が出土した。

出土土器（図版54、第10・11図） 出土土器は多量で、出土状況図を作成しながら取り上げた。ただ、前述のように平面形、切合関係の問題があるため時期の異なる土器が混在している。また、21号竪穴住居跡東側の遺構面・包含層から出土した土器（42～49）もここで報告することにした。

1は小形無頸壺の蓋。口縁部近くの2個所に径7mm程の焼成前穿孔が遺存し、外面縦ミガキ、内面ナデ仕上げ。淡褐色で1～2mm大の砂粒をわずかに含む。2は小形壺底部片で外面丁寧な横ミガキ、内面はナデ仕上げ。暗灰褐色を呈す。3は丹塗無頸壺口縁部片であるが、1／8周程しか残らず、穿孔の有無は不明である。口縁部は短く、丸みをもちつつ外反し、端部を丸く仕上げ、胴部の張りは小さい。内外摩滅が進行するが、外面に一部横ミガキが観察できる。生地は灰黄褐色。4は脚付無頸壺胴部片で、底部外面から脚部と分離し、脚部はほとんど遺存しない。口縁部は胴部から外折し、口縁上面2個所に直径6mm程の穿孔が遺存する。胴部最大径はやや胴下位にある。



第9図 19・21・22号竪穴住居跡実測図 (1/60)

内面はナデ仕上げで、胴下部には指頭圧痕、口縁部内面には一部板状工具による調整が残る。外面は摩滅のため調整不明。丹塗を施した可能性が高いがほとんど遺存せず、生地は淡橙褐色を呈す。

5は鋤先口縁の丹塗広口壺口縁部片。口縁内面の突出は強く、口縁上面は波打ちながらやや外傾し、角張った端部に至る。調整は不明で、生地は白橙色。

6・7は袋状口縁壺。6は口縁から胴中部の破片、7は口縁部～頸部の破片で、いずれも頸部は短く、口縁外面にはかすかな稜が立つことから後期初頭に下る可能性が高い。6は口縁部外面に横ハケが遺存し、内面はナデ仕上げで、胴部外面は調整不明。外面暗褐色、内面灰褐色を呈す。7は口縁が6より内傾し、口縁部外面も丸みが強い。頸部外面には低い断面三角形突帯を巡らし、胴部と区画する。口縁外面横～斜めハケ、頸部外面縦ハケ、内面は一部にハケが遺存するが、ナデ仕上

げ。8は頸部外面に低い三角突帯を巡らし、7と同一個体の可能性が高い壺頸部片。外面は縦ハケ、内面はナデ仕上げ。7・8ともに外面白褐色、内面灰褐色を呈す。

9～11は壺底部片。9・11は内外ナデで、9白黄褐色、11白灰褐色。10は調整不明で、白褐色。

12は口縁部が外に折れ、胴部外面に2条の断面三角形突帯を巡らす甕口縁部小片。口縁端部は面をなし、内外摩滅のため調整不明。内外淡黄褐色。13～24は鋤先口縁甕の口縁部から胴上部にかけての破片。13は口縁が厚く、水平に短く伸びてやや古い傾向をとどめるが、他は水平ないし外側にわずかに傾いて長く伸びるものが多い。22の口縁上面は外に傾くが、外への拡張は小さい。17・18・19・21は頸部内面が直立して口縁内面が突出する形態であるが、13・22・24は胴部内面から緩やかに口縁内面突出部に至る。調整は胴部内面ナデ、口縁部外面ハケ仕上げが基本であるが、14は内外ともナデ仕上げで、13内面・17・19内面、20・22・24は摩滅のため調整不明。13・21・23・24は白黄褐色、14・20は白橙色、15外面・17外面は褐白色、15内面・19外面・22は白灰褐色、16は白褐色、17内面は橙褐色、18内面は淡黄褐色、18外面・19内面は灰黄褐色。16外面・20・21は一部二次的に火を受け赤変する。他に比べ24は砂粒が多く、14・19・23は砂粒が少ない。

25～27は胴部の丸みが強い大形甕の鋤先口縁部片で、28はその胴部片。いずれも胴部から強く内傾して口縁に至るが、25は内面の突出が明瞭であるのに対し、26・27は胴部からゆるやかに口縁部内端に至る。口縁部外面はいずれも直立した面をなし、27はわずかに凹む。28は胴部に三角突帯を巡らし、天地不安。いずれも内外ナデ仕上げが基本であるが、25は摩滅のため調整不明。25外面・26・27は淡黄褐色～黄白褐色、25内面は淡灰褐色、28外面は淡褐色、28内面は白褐色を呈す。

29～31は断面「く」の字の甕口縁部片。29は口縁が丸みを帯びて外反し、胴部の張りが小さい。外面～口縁内面はハケで、胴内面は調整不明。灰黄褐色。胴部外面に煤が付着し、熱のため広範囲器表が剥離する。30・31は胴部の張り、頸部の括れが29に比べ強く、口縁が直線的に外傾。いずれも胴内外ハケ、口縁内外横ナデで、30外面は灰褐色、内面は黄橙色、31は褐灰白色を呈する。

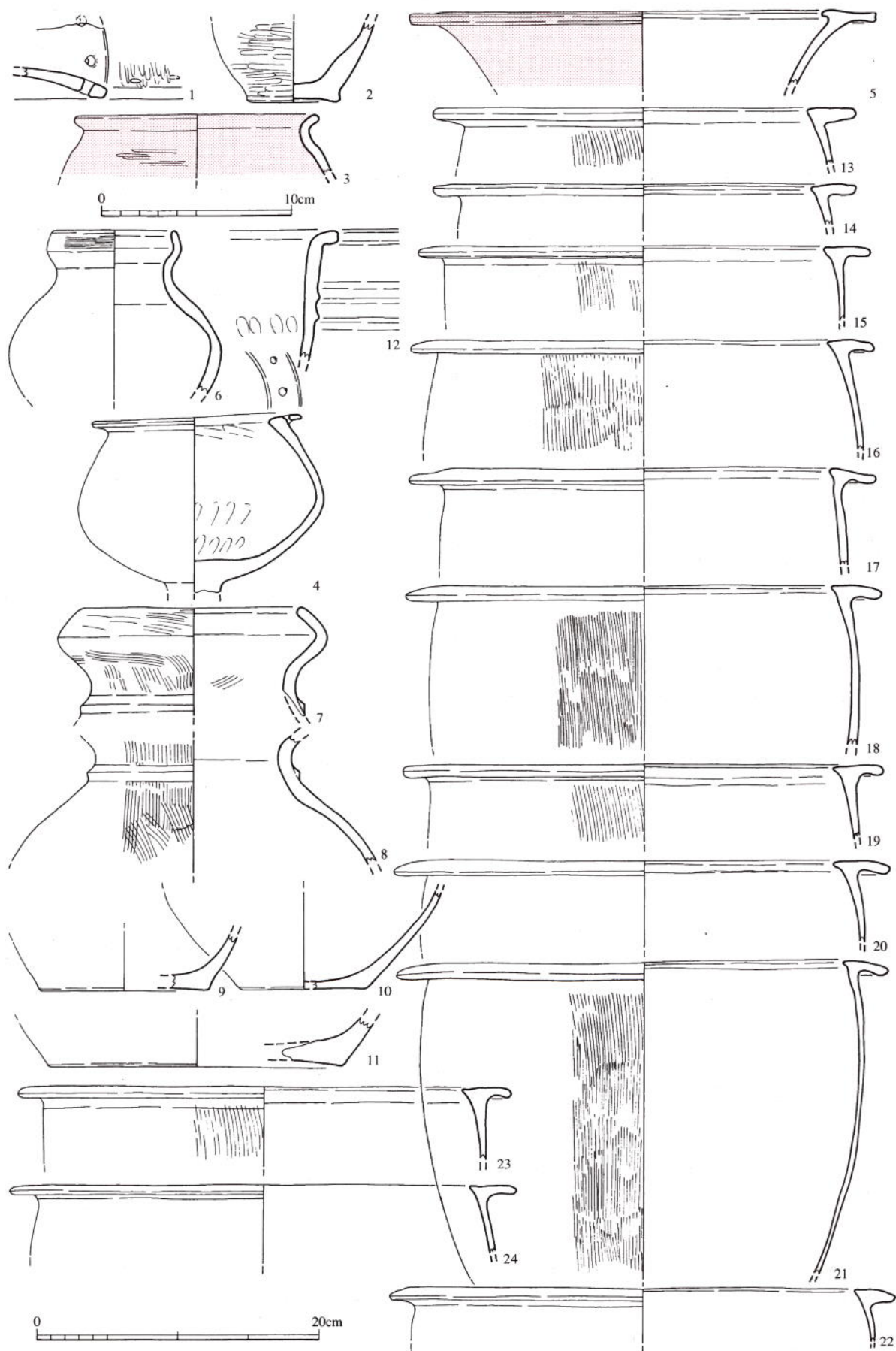
32～36は甕底部片か。32・36は外面摩滅進むが、他は外面縦ハケ、内面ナデ。32は胴の張り、底部外周の括れが強く、34外底面には接合痕と思われる凹みが巡る。32・36は淡灰褐色、33黄褐色、34白黄褐色、35灰黄褐色。33～35外面は煤、35・36は内面コゲが付着し、36外面は火を受け変色。

37は鋤先口縁鉢口縁部片。小片のため傾き不安であるが、口縁上面は強く外傾すると考えられる。内外摩滅し、白褐色。38・39は外面丹塗の高杯脚部片。38は脚裾を失い、外面摩滅、内面には絞りの痕跡をとどめる。39は脚裾端部が丸く摩滅するが、本来角張っていたと推測される。外面には丁寧な縦ミガキ、内面には絞り痕跡が遺存する。生地はいずれも淡橙褐色。40・41はともに白褐色の鼓形器台片。天地は不安があるが、いずれも裾として図示した。40は外面縦ハケ、裾内面粗い横ハケ。41は上部に凹みがあるものとして図示したが、破片面との区別が難しい。外面縦ハケ、内面は裾横ハケ、中間はナデ仕上げである。

以上の土器のうち12は中期前半と推測されるが、他は4・13～28・37等は中期後半、7・8・29～31は後期初頭と大きく2分でき、時期の異なる遺構に本来帰属するものが混在している。

42～50は住居跡東側の遺構面・包含層から出土したもの。42は鋤先口縁広口壺と推測される頸部片で、頸部はゆるやかに外反し、外面に断面M字状突帯を巡らす。内外灰白褐色で、焼成不良。43は内外ハケメ仕上げで、口縁部を胴部から強く内傾させた無頸壺。淡灰褐色～灰褐色を呈す。

44は外折口縁の甕口縁部片。胴部から丸く外反して水平な口縁端部に至る。外面縦ハケ、内面調整不明で、淡褐灰色。45～48は鋤先口縁甕の口縁～胴上部破片。45は口縁部内面に接合痕が巡り、内面ナデ、外面調整不明。46は口縁部が強く外傾し、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。47は口縁上面が内傾し、調整不明。48は口縁部が内外に水平に伸び、端部が角張る。胴部外面にはM字突帯を巡らし、器形から考えて、本来丹塗を施した可能性が高いが、遺存しない。口縁下面は強いナデによ



第10図 21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1~3は1/3、他は1/4)

り沈線が巡っているが、他は摩滅により調整不明。45外面・47は白灰褐色、45内面は淡橙褐色、46は淡灰褐色、48は橙褐色。

49は蓋で、口縁部に向け直線的に開き、端部は面をなす。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、内外灰白褐色を呈す。50は鼓形器台破片で、外面縦ハケ、内面調整不明である。外面は白褐色、内面は黄白褐色を呈す。

22号竪穴住居跡（図版10、第9図）

F区に位置し、66・68号土坑に切られる長方形竪穴住居跡と考えた。ただ、68号土坑出土土器は本住居跡に先行するので、切合いを誤認している。また、66号土坑出土土器は本住居跡と大差なく、住居跡の覆土の一部を土坑として捉えた恐れがある。

68号土坑、21号土坑に北隅を壊され、東隅を掘りすぎているが、南西―北東に主軸を置く長方形竪穴住居跡で、長さ5.1m、幅3.3m程に復元される。中央よりやや南西の床面に黄褐色粘質土を床面から5cm程の高さで環状に積み、炉としている。炉は外側で1.2m、内側で0.7mを測り、内部には炭が多量に堆積していた。長軸方向に炉の脇に位置する2基の直径0.5m程のピットが主柱穴と推測される。覆土は黄灰色シルト土塊を斑状に含んだ暗灰色粘質土。住居跡覆土及び住居跡東外の包含層から打製石鏃石鏃（第4・6表の7・10・165）が出土した。

出土土器（第13図1・2）1は鋤先口縁甕の口縁～胴上部片。口縁は内に強く突出し、上面は丸みを帯びて外方に伸び、端部でやや下方に垂れる。外面縦ハケ、内面調整不明で、口縁内面に接合痕が残る。内外白褐色で、口縁上面は煤が付着により褐色。2は混入品と推測される前期後半～末の無頸壺。口縁部は胴部から短く外反し、端部は板ナデ後、横ナデにより角張った面をなす。胴部外面は頸部下に2条の沈線を巡らし、口縁部と区画し、その下方に2段にわたりピッチの短い無軸羽状文を施す。内外ナデ仕上げで、淡褐色～淡灰褐色。

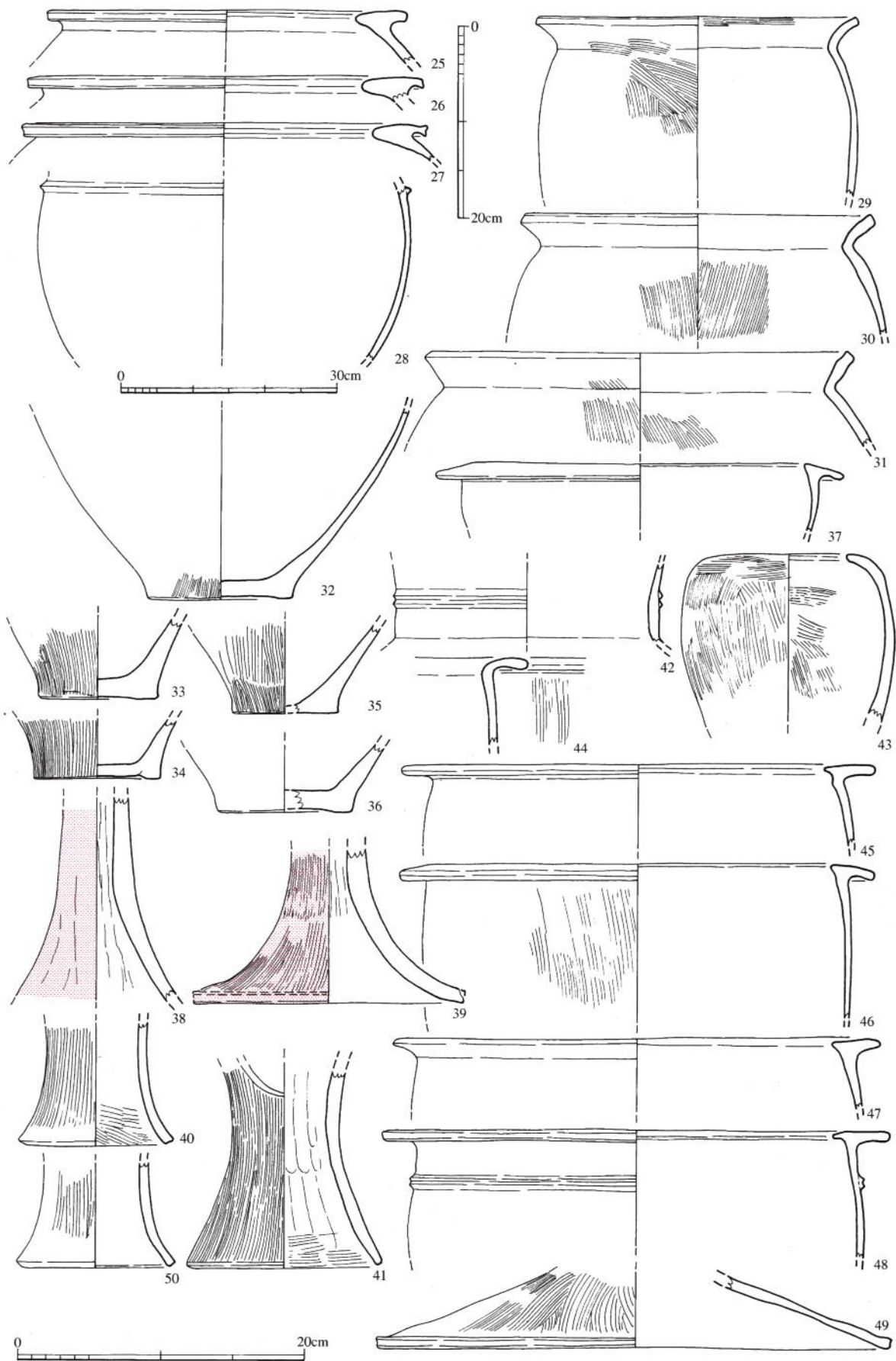
23号竪穴住居跡（図版10・18、第12図）

D・E区、北壁際に位置する。調査区外へと続いているが、北東―南西に長軸をおく楕円形竪穴住居跡と考えて発掘調査を行った。長軸4.1m、短軸方向に現状で1.1mを測り、壁は高さ10cm程しか残存しない。床面では4基のピットを検出したが、規則的な主柱穴の配置はうかがえず、調査範囲では炉痕も検出されなかった。直下には137・143号土坑が位置するため、平面形も不安である。覆土は灰褐色粘質土。土器の他に打製のヘラ状石製品（第164図69）、石錐（第6表の174）が出土した。

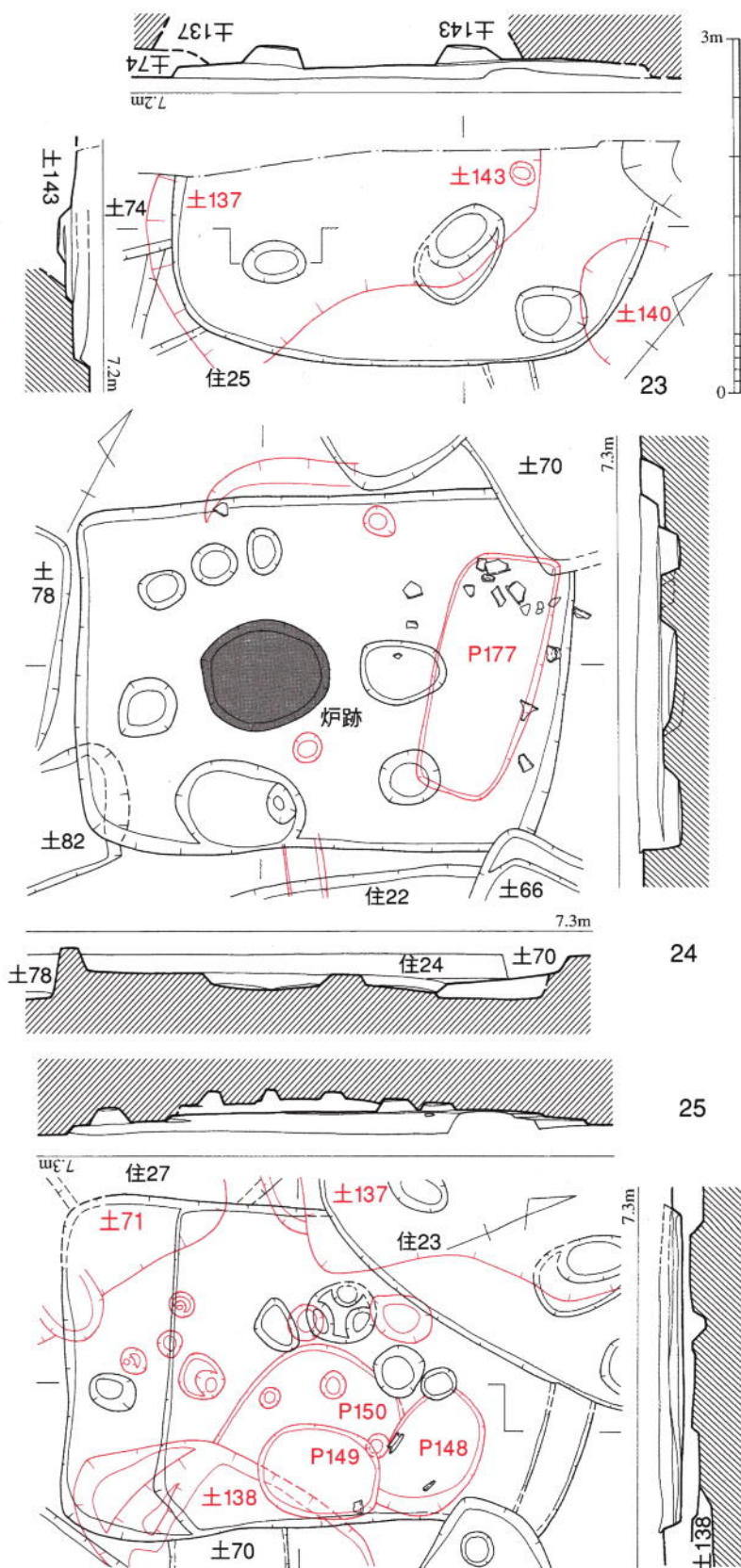
出土土器（図版、第13図3～5）3は中期後半の無頸壺の底部片か。内外摩滅するが、外面に板状工具の稜が残る。4は前期壺底部片。外面は底外周の括れ部に板状工具により水平方向ナデを施し、胴部はミガキ仕上げ。内面は摩滅し調整不明。外面淡黄灰褐色、内面淡灰褐色。5は淡黄褐色を呈す前期の小形鉢。口縁部は緩やかに外反し胴部と区別される。調整は不明であるが、内面にかすかに指頭圧痕が残る。

24号竪穴住居跡（図版11、第12図）

E区、22号竪穴住居跡の北西に位置する。南西―北東に主軸をおく長方形竪穴住居跡で、北隅を70号土坑に切られ、南隅では82号土坑を切っている。長さ4.2m、幅3.0mを測り、壁は20cm余りの高さで遺存する。覆土は灰褐色粘質土。遺構の重複が著しい本調査区の中では比較的、良好に遺存した竪穴住居跡と言える。床面中央やや西よりに長軸1.1m、短軸0.9m、床面からの深さ5cm余りの楕円形平面の炉跡があり、長軸方向にその両脇に位置する2基のピットが主柱穴であろう。炉の南東側の壁直下に長軸1.1m、短軸0.8m、深さ15cmの壁際土坑が設置されている。床面P1より砥



第11図 21号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(25~27は1/6、28は1/8、他は1/4)



第12図 23～25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

塗の高杯脚部片である。脚柱から裾にかけて緩やかに外反し、端部は凹んだ面をなす。外面縦ミガ

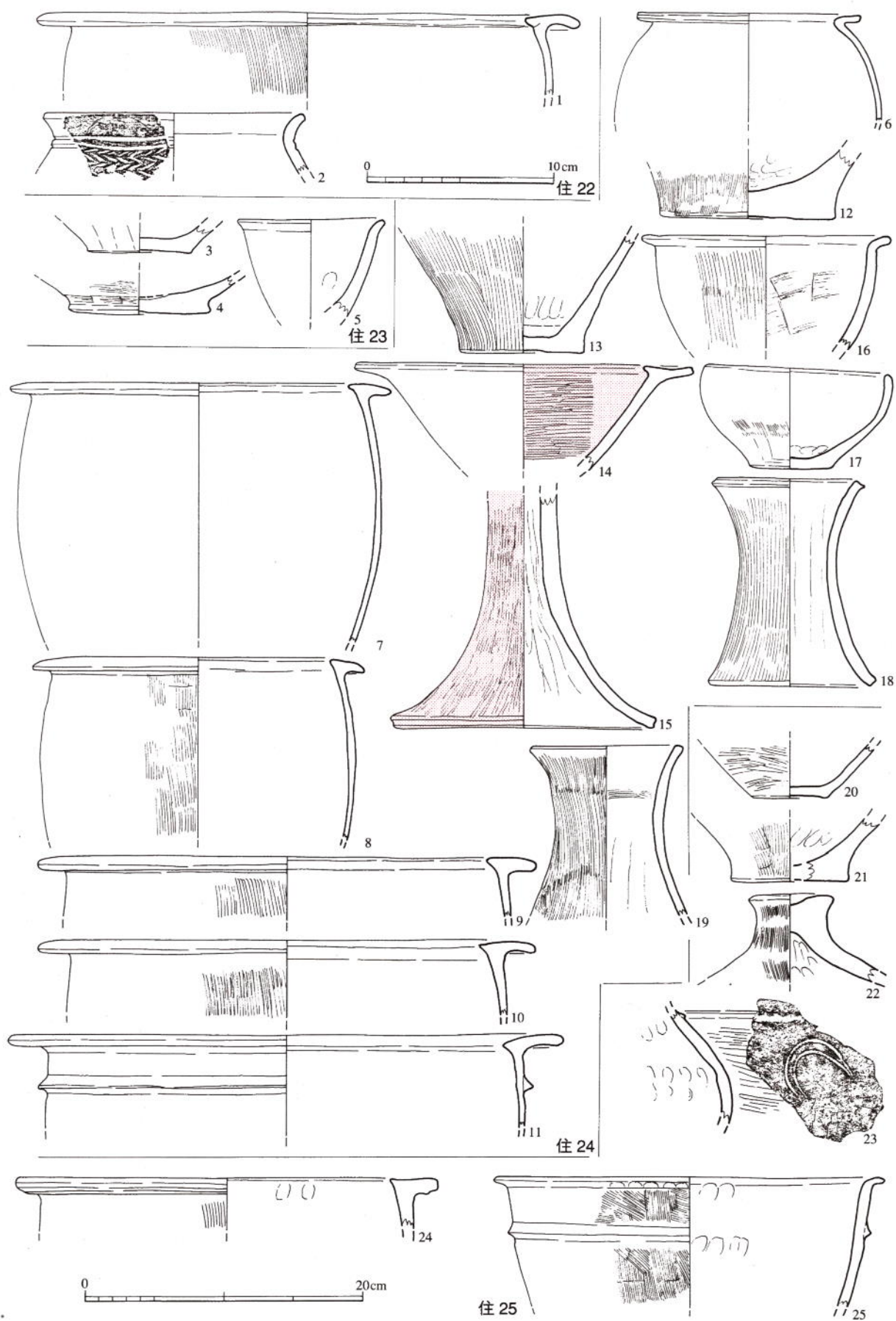
石 (第168図118) が出土。土器の他に住居跡覆土及び住居跡東外の包含層から石包丁 (第163図56)、石鏃 (第4表8・9) が出土した。

出土土器 (図版54、第13図6～19) 住居跡東の遺構面・包含層から出土した12・14もここで報告することにした。6は無頸壺の口縁～胴部片。口縁は外折し、1/4周残存するが、穿孔は残っていない。内外摩滅のため調整、丹塗の有無は不明であり、生地は淡橙褐色。

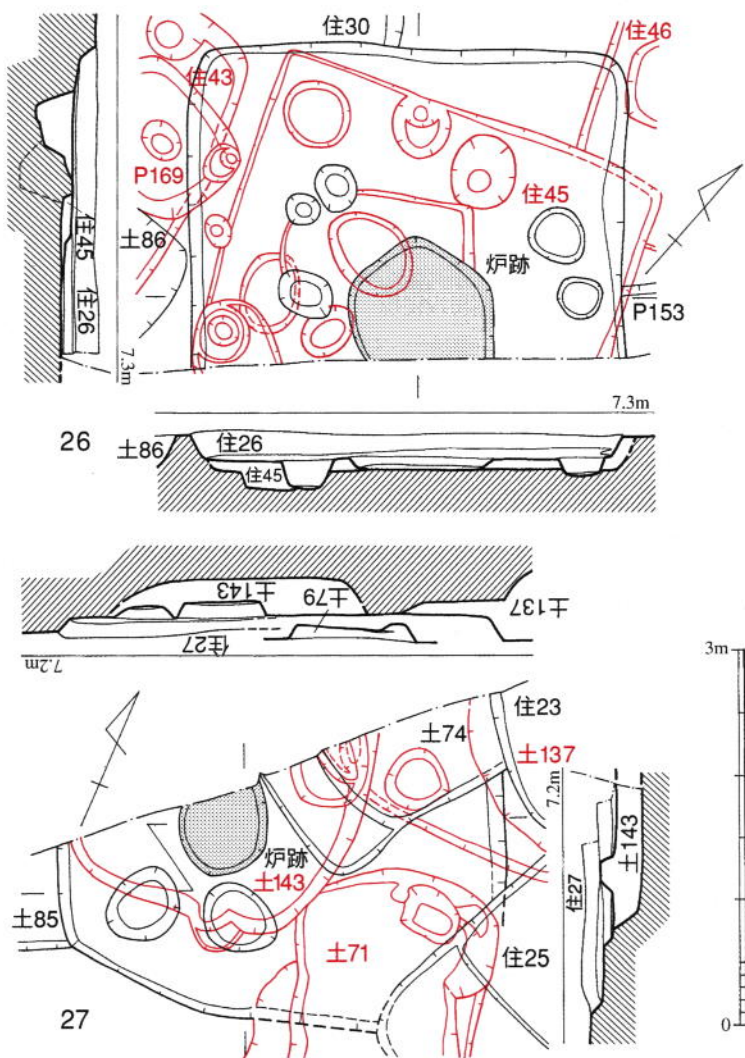
7～11は鋤先口縁の甕口縁部～胴部破片。7・8は口縁は厚く、伸びがやや短い。8外面は縦ハケ仕上げで、7及び8内面は摩滅のため調整不明。9・10は口縁上面がほぼ水平で、外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。11はやや大形で、口縁部上面が内傾し、外方に長く伸び、胴上部外面に断面三角形突帯を貼付する。7・9外面は白黄褐色、8内面・9内面は淡橙褐色、8外面淡褐白色、10・11は淡灰褐色。8は器壁の遺存が良好であるが、煤は付着しない。

12・13は甕底部片。いずれも外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、12は底部が厚く、淡黄褐色。13外面は灰白褐色で煤が付着し、13内面は淡灰黄褐色。

14は高杯杯部片で本来、内外丹塗と思われるが、内面しか遺存しない。器形は深く、口縁部は上面の凹んだ鋤先口縁をなす。内面横ミガキ、外面調整不明で、生地は橙白色を呈し、胎土の砂粒は少ない。15は外面丹



第13図 22～25号竪穴住居跡出土土器実測図（2・3は1/3、他は1/4 1・2：住22、
3～5：住23、6～19：住24、20～25：住25）



第14図 26・27号竪穴住居跡実測図 (1/60)

坑を切っている。主軸をほぼ南北におく長方形竪穴住居跡で、北西隅を23号住居跡に壊されるが、長さ4.4m、幅2.9mに復元できる。覆土は褐灰色粘質土で、壁は高さ15cm程遺存している。南壁に平行し幅0.8m、高さ5cm内外の地山削り出しのベット状遺構がある。南壁沿いほど明瞭ではないが、北壁側にも幅0.3m、高さ5cm弱の段がある。ただ、床面では炉痕が検出されず、床面及び下層では多数の小規模なピットが検出されたため支柱穴の抽出も難しい。北東隅近くの床面直上では石剣剣身部破片(第165図79)が出土した。他に磨製石斧(第166図95)、砥石(第167図101)が出土。

出土土器(第13図20~25) 20は外面ミガキ仕上げの壺底部片。ミガキは外底面にも及び、内面は調整不明。内外淡黄褐色を基調とするが、暗灰褐色に変色した範囲も広い。21も壺底部片で、底部外周の括れが強く、外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。外面淡灰黄褐色、内面橙褐色を呈す。22は白黄褐色の蓋頂部片で、外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。23は混入と思われる前期末~中期初頭の壺肩部片。肩部に低い断面三角形突帯を貼付し、その直下に2条からなる重弧文を施す。重弧文は2本とも貝殻腹縁を刺突した後、右下部を線刻で加筆し完成させたようである。外面ミガキ、内面指頭圧痕を残し、内外暗灰褐色。

24・25は住居跡南の包含層・遺構面から出土したもの。24は鋤先口縁の甕口縁部片で、口縁の外への伸びは短く、上面はほぼ水平である。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、内面淡褐色、外面淡褐

キ、内面絞り後ナデ仕上げで、生地は橙褐色。

16は外反口縁鉢。胴部は丸く、口縁は丸みを帯びて短く外反する。外面粗い縦ハケ、内面板ナデ仕上げ。砂粒が極めて多く、灰褐色を基調とするが外面暗灰色を呈する部分がある。17は単口縁鉢。外面摩滅するが、下方に一部縦ハケ、板状工具の稜がうかがえ、内面はナデ仕上げ。白灰褐色を呈す。

18・19は鼓形器台で、いずれも外面縦ハケ、内面ナデ仕上げであるが、19は上部内面にわずかに横ハケが残る。18はほぼ完形に復元され、口縁及び裾端部は角張る。18外面は二次的に火を受け淡赤褐色、内面は淡褐色。19は外面淡褐灰色、内面淡褐色。

これらの土器は中期後半と考えられる。

25号竪穴住居跡 (図版10・11、第12図)

D・E区に所在し、北西に位置する23号竪穴住居跡に先行すると考えた。南では70・71・138号土

灰色。25は如意状口縁の甕上部片。口縁下面に指頭圧痕が巡る事から、指押さえにより外反させたと推測される。胴上部には三角突帯を貼付するが、口縁端・突帯頂部とも刻目の施文は見られない。外面ハケ、内面ナデ仕上げで、明褐色。

26号竪穴住居跡（図版11、第14図）

E区、南壁沿いに位置する。下層にある45号竪穴住居跡とはほぼ重複しており、平面形を誤認した可能性も高いが、ここでは発掘時の所見をそのまま述べる事にしたい。

主軸を北西－南東に置く長方形竪穴住居跡で、幅3.5m、長軸方向に現状で2.5mを測り、壁は20cm内外の高さで遺存している。東南壁は調査区外に位置し、西隅では30・43号竪穴住居跡を切る。床面中央で直径1.1mの円形に近い炉痕を検出している。床面および下層では多数のピットを検出しているが、支柱穴は抽出しがたい。

出土土器（第16図1・2） 1は口縁部が断面「く」の字に外反する甕破片。胴部外面は摩滅するが、口縁内外横ナデ、胴部内面横ハケ仕上げ。口縁下面は煤が付着する。内面淡褐灰色、外面褐白色を呈す。2は橙褐色を呈す壺底部片。内外摩滅進むが、外面は太いミガキ仕上げと推測される。1の甕から考えて、住居跡は後期初頭と考えられる。

27号竪穴住居跡（図版12、第14図）

E区、北壁沿いに位置し、25号竪穴住居跡、74号土坑に切られ、下層には143号土坑がある。南東部では71号土坑と切合い、遺構検出時には71号土坑が後出すると考えていたが、出土土器から前後関係は逆になる。そのため南東部隅は失われている。このような問題があるが、北西－南東方向に主軸線に向けた方形ないしは長方形竪穴住居跡と復元でき、幅3.6m、長さは現状で2.7mを測る。壁は最大で高さ15cm程遺存する。床面の西寄りで幅0.7m、長さ0.8m以上、深さ10cm強の平面楕円形を呈する炉跡があり、その南東に位置するピットが支柱穴か。土器の他に打製の石錐（第6表200－2）が出土した。

出土土器（第16図1） 前期にまで遡る可能性のある甕底部片で、竪穴住居跡の時期を示すものではない。外面はナデ、内面工具によるナデ上げで、くすんだ黄灰色を呈す。

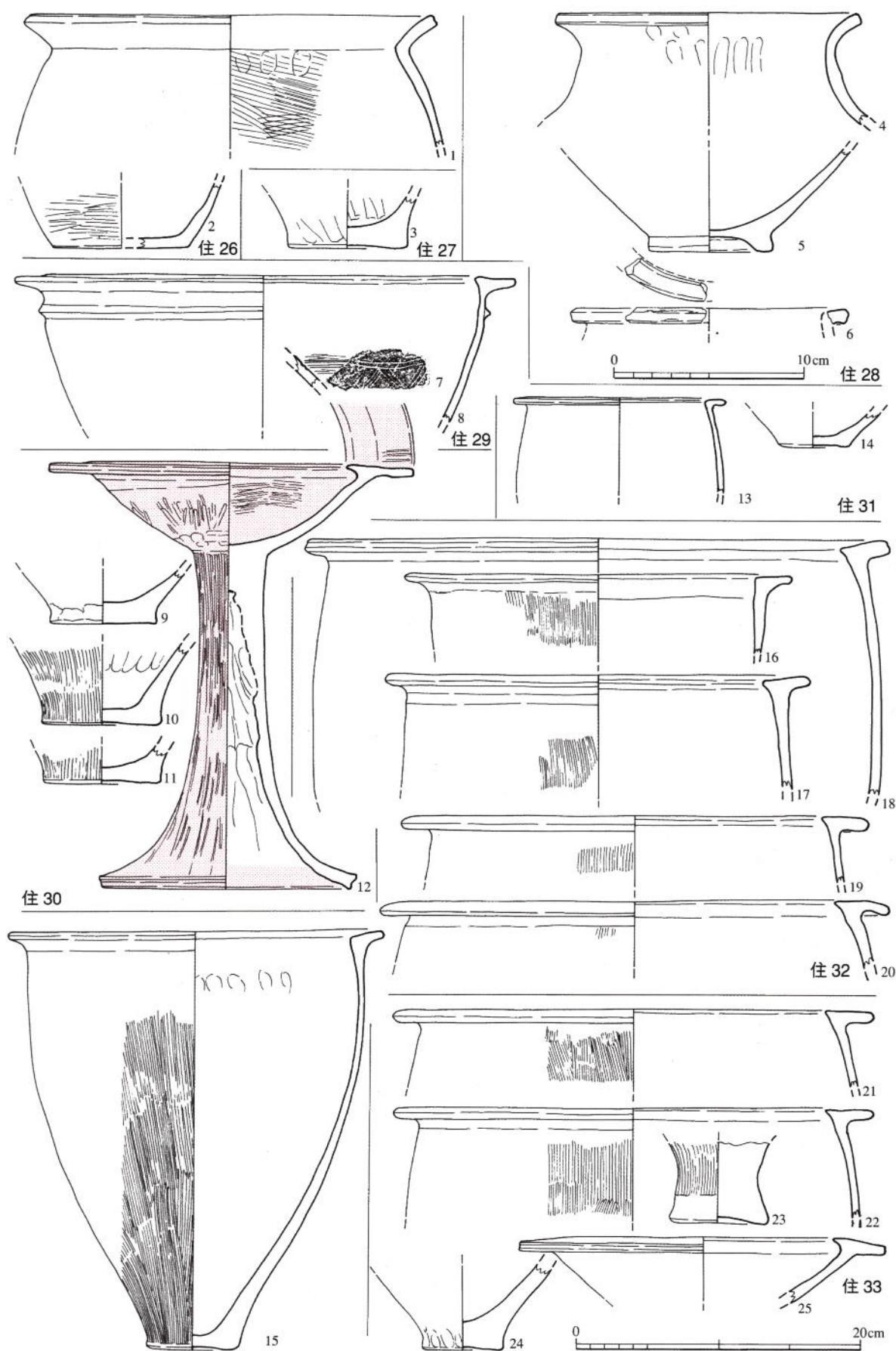
28号竪穴住居跡（図版12、第15図）

E区北壁際に位置し、中央部を76号土坑に、南壁を29号竪穴住居跡に切られると考えて調査を行った。東西方向に主軸を置く長方形竪穴住居跡の東短壁付近のみで、幅3.0m、現状での長さ2.1mを測る。壁は10cm内外の高さで遺存している。床面および下層では北側に3基のピットが検出されたのみで、炉跡もない。土器の他に投弾（第162図7）が出土した。

出土土器（第16図4～6） 4は淡褐灰色の壺口縁部片で、胴部から強く屈曲して口縁部が外反し、角張った端部に至る。内外摩滅進むが、外面指頭圧痕、内面ナデ上げの痕跡をとどめる。5は壺底部か。高台状になる特異な底部形態で、胴部へと直線的に立ち上がる。調整不明で、褐灰色。砂粒が極めて多く、外面には煤が一部、付着。6は円弧をなす粘土紐片で、朝鮮半島系粘土帯無文土器の粘土帯部分として図示した。円弧は粘土帯土器としても矛盾は無いが、上下が面をなし、内面に剥離痕が無い事は難点である。灰色～灰白褐色で、胎土は在地の弥生土器と大差ない。

29号竪穴住居跡（図版12、第15図）

F区北壁際にあり、28号竪穴住居跡を切り、下層には146号土坑が位置する。北西－南東に長軸をおく長方形竪穴住居跡の南東側短壁部分と推測されるが、南西隅は87号土坑の掘り込みにより失



第16図 26～33号竪穴住居跡出土土器実測図（6・7は1/3、他は1/4 1・2：住26、3：住27、4～6：住28、7・8：住29、9～12：住30、13・14：住31、15～20：住32、21～25：住33）

その輪郭を誤認して本住居跡として捉えた可能性も高いが、ここでは調査時の所見をそのまま述べることにしたい。

86号土坑、45号土坑にかなりの範囲を壊されるが、現状では長さ3.6m、幅2.6m遺存している。86号土坑の南及び西では壁は検出できなかった。壁の高さは20cm程である。床面では3基のピットを検出しているが、主柱穴は不明であり、炉跡も検出されていない。土器の他に土製紡錘車（第162図25）、打製石鏃（第4表11・12）が出土した。

出土土器（図版54、第16図9～12） 9は壺底部片か。内外ナデ仕上げで外面暗褐色、内面明褐色を呈す。10・11は甕底部片で、いずれも外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。10は内外とも二次的に火を受け橙褐色を呈す。11は白黄褐色。12はほぼ完形に復元できる丹塗高杯。杯部は浅く、口縁部は内外に長く伸びた鋤先口縁を呈する。口縁上面は放射状に施したミガキ暗文がかすかに残存する。脚はゆるやかに広がり、端部は凹んだ面をなす。杯部内面は横ミガキ、外面は縦ミガキで、脚との接合部の調整は粗い。脚部内面は絞り痕を多く残し、生地は淡橙褐色。これらの土器のうち9以外は中期後半であり、竪穴住居跡もその時期と考えて間違いなからう。

31号竪穴住居跡（図版13、第17図）

F区に位置し、84・89号土坑に切られ、33号竪穴住居跡を切っている。また、下層では47号竪穴住居跡が検出されている。北東隅を84号土坑により失っているが、現状ではほぼ南北に長軸に向けた長さ5.0m、幅2.8mの長方形竪穴住居跡に復元できる。壁の高さは15cm内外で、覆土は灰褐色粘質土である。ただ、北西の壁際に偏った位置で、長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形の炉跡が検出され、主柱穴も抽出できない。床面下層では47号竪穴住居跡他、多くのピット等が位置しているため、平面形を正しく把握したか不安が残る。土器の他に石英質石器（第9表1030・1031）が出土し、遺構北外包含層から石製紡錘車（第164図65）も出土した。

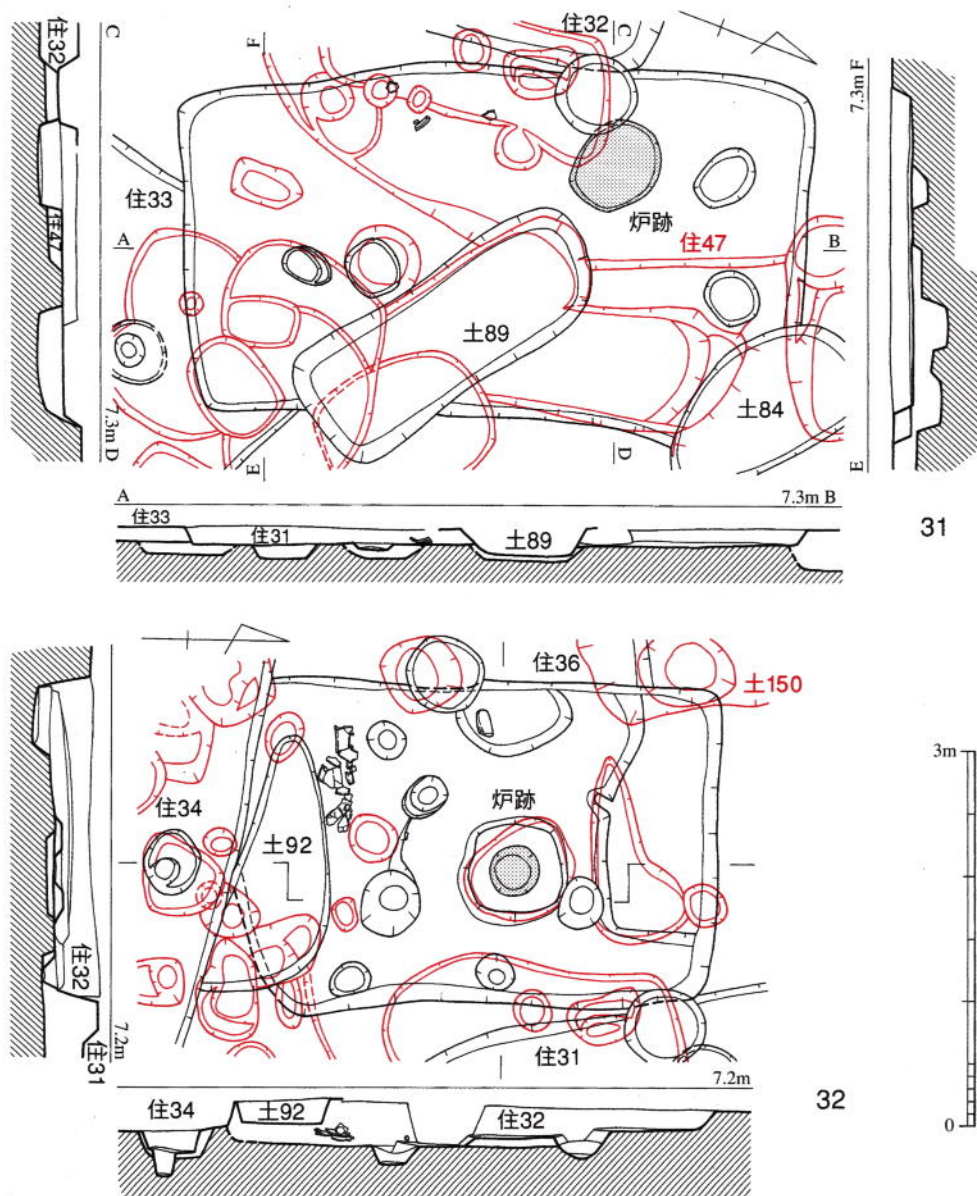
出土土器（第16図13・14） 13は周辺の包含層から出土した無頸壺口縁～胴上半部の破片。口縁は水平に外折し、1／4周遺存するが穿孔は見られない。内外摩滅のため調整は不明で、淡橙褐色を呈す。14は住居跡内より出土した無頸壺底部片。調整は不明であり、灰白褐色を呈す。

32号竪穴住居跡（図版13・15、第17図）

F区、31号竪穴住居跡の西に位置している。南壁を34号竪穴住居跡、92号土坑に切られているが、壁の輪郭線は比較的明瞭で、ほぼ南北に長軸に向けた長方形竪穴住居跡である。南壁は東半分を検出したのみであるが、長さ3.9m、幅2.6～2.7mに復元できる。壁は高さ30cm余り遺存しており、他の住居に比べると深くしっかりしている。覆土は灰褐色粘質土。

床面中央やや北寄りに1辺80cm程の方形の範囲に5cm程の高さで黄褐色粘質土を積み、その中央を直径30cmの円形に掘り凹め、炉としている。炉内からは炭が比較的まとまって出土した。やや東に偏るが、炉の南北脇に位置する直径30～40cm程の2基のピットが主柱穴と考えられる。また、炉に対面する西壁際にある長軸0.9m、短軸0.5mの楕円形平面を呈し、深さ10cm内外の土坑が壁際土坑になろう。土坑からは20cmの大きさの台石が出土した。北壁沿いには幅0.8m、長さ1.9mのベット状遺構があるが、東北隅は途切れている。土器の他に石包丁（第163図45）、扁平片刃石斧（第165図82）、磨製石斧（第165図91）、打製石錐（表6の175、200－3）、石英質石器（第9表1002）が出土した。

出土土器（図版54、第16図15～20） 15はほぼ完形に復元できる甕。口縁部は断面逆L字口縁で、上面は内傾し、鋤先口縁には発達していない。胴部外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、口縁よりやや下内面に指頭圧痕が巡る。褐色で胴部外面に煤が付着。16～20は鋤先口縁の甕口縁～胴上部破片。16

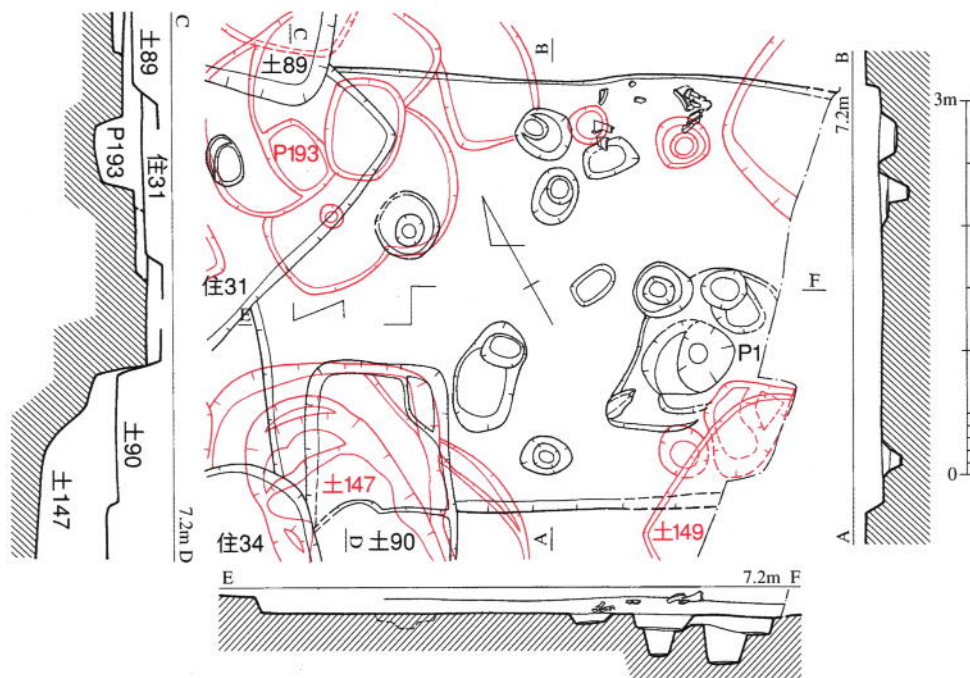


第17図 31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)

～18は口縁部上面がわずかに内傾し、外への伸びも短いのに対し、20は口縁が外方に伸び、上面が丸く外傾。いずれも胴部外面縦ハケ、内面ナデ仕上げを基本とするが、18は摩滅のため外面調整不明。いずれも明褐色～褐色で、16・19外面には煤が付着し、17胴部内面はコゲのためか暗褐色に変色。これらの内、20はやや新しいが、他は中期中頃のほぼ一括と考えて間違いなからう。

33号竪穴住居跡 (図版14、第18図)

F区、南壁際に位置し、長軸を北西－南東方向に向けた長方形竪穴住居跡と考えて発掘調査を実施した。北西隅を31号竪穴住居跡、89号竪穴住居跡に切られ、南西隅を34号竪穴住居跡、90号土坑に切られる。幅は3.4m、長軸方向に現状で4.6mを測り、壁の高さは10cm内外である。覆土は灰褐色粘質土。ただ、床面では炉跡が検出されず、主柱穴の配置も不明確であるため、形態には不安がある。調査区壁際では南北方向に長さ1.3mの土坑状の掘り込みが検出されており、33号住居跡P1として遺物を取り上げた。また、北東の壁際床面ではまとまって土器が出土した。土器のほかに砥石 (第170図133)、石鏃 (第4表13) が出土した。なお、南東部の床面の下層には149号土坑が検出された。



第18図 33号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土土器（第16図21～25） 21・22は鋤先口縁の甕口縁部片。いずれも口縁部は上面がほぼ水平で、外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。22は口縁の内やや上方への突出が強く、口縁下外面の強いナデが特徴的である。21は外面褐灰色、内面明褐色、22は褐色を呈し、外面に煤が付着する。23は甕底部片で、厚く柱状をなす。外面はハケメ仕上げで、淡褐色を呈す。24は壺底部片か。内外ナデ仕上げで淡灰褐色。25は鋤先口縁の高杯杯部。口縁上面が外傾し、内面の突出は短く、外端部が凹面をなす。生地は明褐色を呈し、丹塗した可能性は高いが、内外摩滅のため遺存しない。これらの土器の内、23・24は先行する遺構からの混入品とすれば、21・22・25の土器の示す中期後半でも古い頃に竪穴住居の時期は求められる。

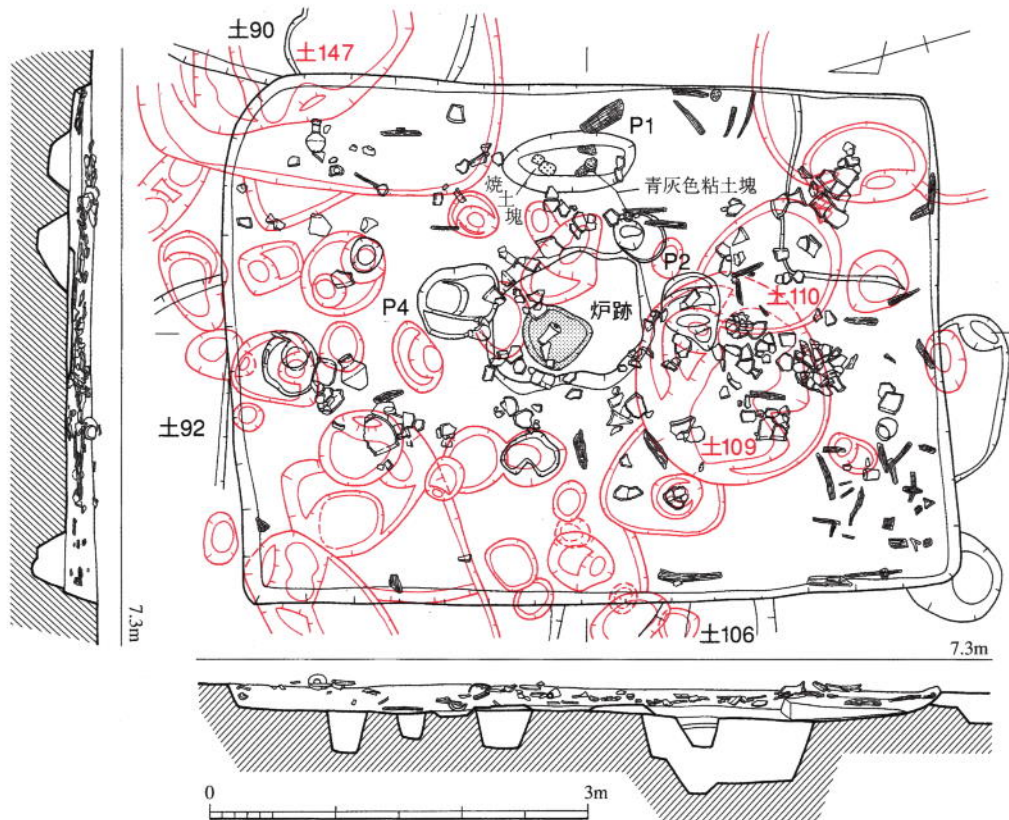
34号竪穴住居跡（図版15、第19図）

F・G区に位置している。後期初頭の土器がまとまって出土しており、他の遺構がほとんど掘り込まれないため、本調査区の遺構の下限の時期に相当すると判断できる。

主軸をほぼ南北に向けた比較的、整った長方形の平面形を呈する。南北長さ5.5m、東西幅4.2mを測る。検出面から床面までの深さは20cm前後。床面中央に南北1.3m、東西1.1mの範囲に5cm前後の高さで黄褐色粘質土を積み、その中央やや東寄りに50cm程のピットを穿ち、炉跡としている。炉の南東側には焼土が分布していた。長軸方向に炉の両脇に位置する直径0.6m、深さ30cmを測るP4、直径0.45m、深さ30cmを測るP2が主柱穴と考えられる。床面南東隅には東西1.45m、南北1.1mのベット状遺構が付設される。

床面ないしはやや浮いて多量の土器が出土するとともに、炭化した木材が多数検出されたため、焼失住居と考えられる。また、東壁中央付近のP1内及びその西側からは焼土ブロック、青灰色粘土ブロックが出土した。土器の他には土製投弾（第162図1・12～16・18）、手捏ね容器（第162図40）、石包丁（第163図42・48）、砥石（第167図111）打製石鏃（第4表14～25）、打製石錐（第6表175）、石英質石器（第9表1003・1004）がある。

出土土器（図版54～57、第20～23図） 1～9は壺。1はほぼ完存の無頸壺で、胴部の張りが強く、口縁部は短く外反し、丸い端部に至る。胴部外面縦ハケ、内面指頭圧痕後板ナデ仕上げ。2は口縁

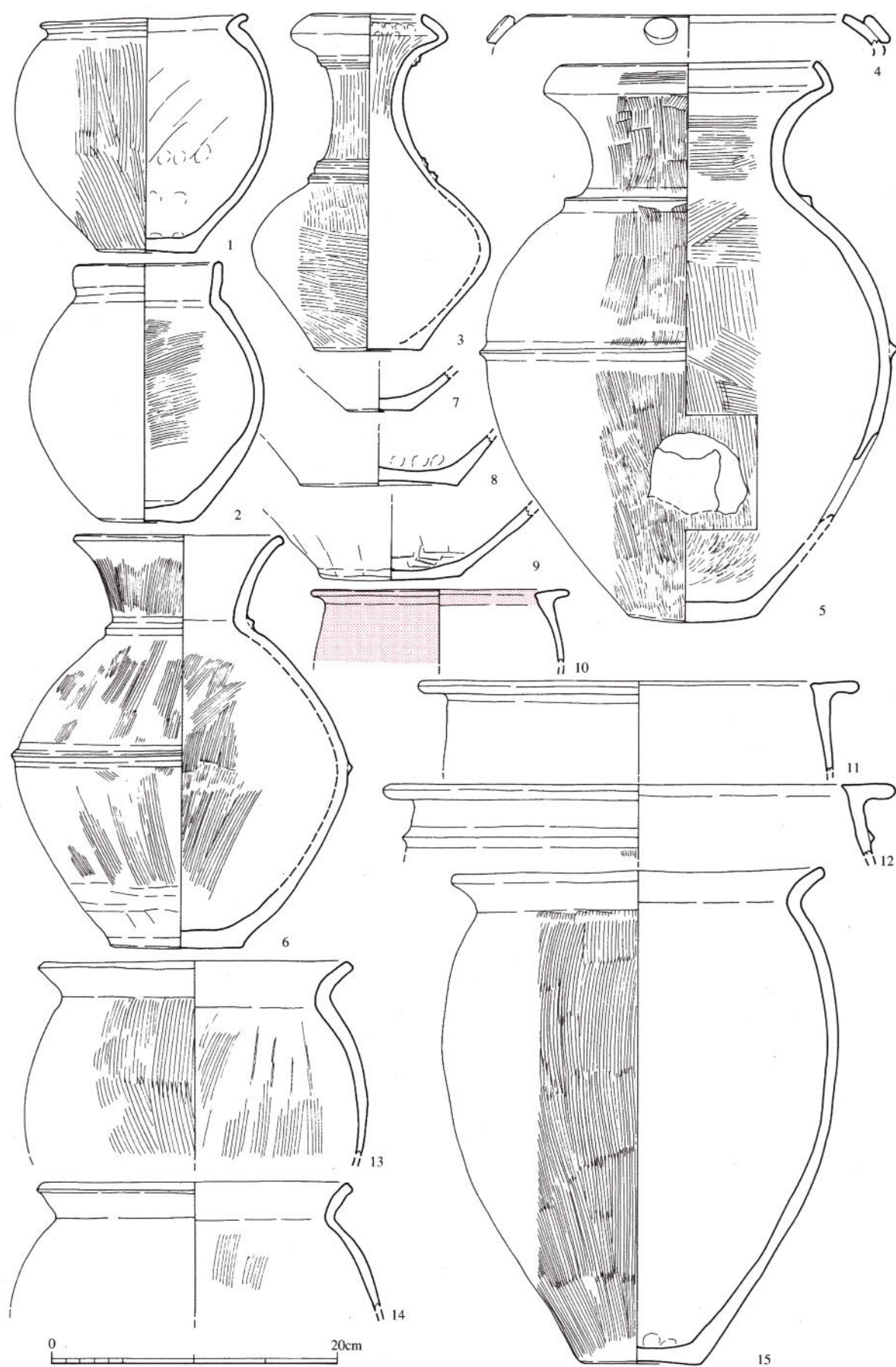


第19図 34号竪穴住居跡実測図 (1/60)

部が短く直立するほぼ完形の中形壺で、外面ナデ、胴部内面斜めハケ。3はほぼ完形の袋状口縁壺。口縁部は強く内傾し、外面屈曲部にかなかな稜が立ち、内面には指頭圧痕が巡る。頸部外面は縦ハケ仕上げで、口縁部との境を1条断面M字状突帯、胴部との境を2条断面M字状突帯で区画する。頸部外面は縦ハケ仕上げ、内面は絞り痕をとどめる。胴部は張りが強く算盤玉形に近い。外面ハケメ仕上げで、内面は完存するため観察が難しい。4は壺複合口縁の上部破片で、強く内傾し、端部は角張る。外面に1個所、直径2.3cm程の円形浮文を貼付する。5はほぼ完形の中形複合口縁壺。口縁部と頸部の境には外面に稜が立ち、口縁端部は角張る。内面はナデ、外面は横ハケが残る。頸部と胴部の境、胴部中間には頂部が丸くなった断面三角形突帯が貼付され、胴下半は意図的なものかやや不安な焼成後穿孔がある。底部はやや凸レンズ状に突出する。頸部～胴部外面は縦ハケ、内面は縦方向を基調としたハケメ仕上げ。6もほぼ完形に復元される直口壺。口縁部は外反し、端部はやや角張る。頸部、胴中間には断面台形突帯を貼付する。胴部～口縁部外面は縦ハケで仕上げるが、底部近くの外面は板ナデ。口縁部内面は摩滅し、胴部内面は縦ハケ仕上げ。7・8は壺底部で、いずれも直線的に胴部が立ち上がる。ともに外面摩滅、内面ナデ仕上げ。9はわずかに外底面が凸レンズ状になる壺底部。内外板ナデ仕上げである。これらの壺は1外面・4・6・8外面・9は淡褐色、1内面は暗褐色、2は淡黄褐色、3は黄灰褐色、5は黄白褐色、7は橙褐色、8内面は褐灰色を呈す。9は二次的に火を受け内外赤色に変色し、2は口縁外面に煤が付着する。

10は径の小さい丹塗の鋤先口縁片で、樽形甕の口縁部となろう。口縁部の内への突出は目立たず、口縁上面は内傾する。内外ナデ仕上げで、胎土の砂粒は少なく、生地は淡褐色。11・12は鋤先口縁甕の口縁片で、いずれも外面淡褐色、内面淡灰褐色を呈す。いずれも口縁部上面は水平で、12は口縁下に断面三角形突帯を巡らす。11は調整不明で、12は内外ナデ仕上げ。

13～23は断面「く」字口縁の甕で、15・16・17・19は完形に復元できる。括れた頸部に緩やかに



第20图 34号竖穴住居跡出土土器实测图 (1) (1/4)

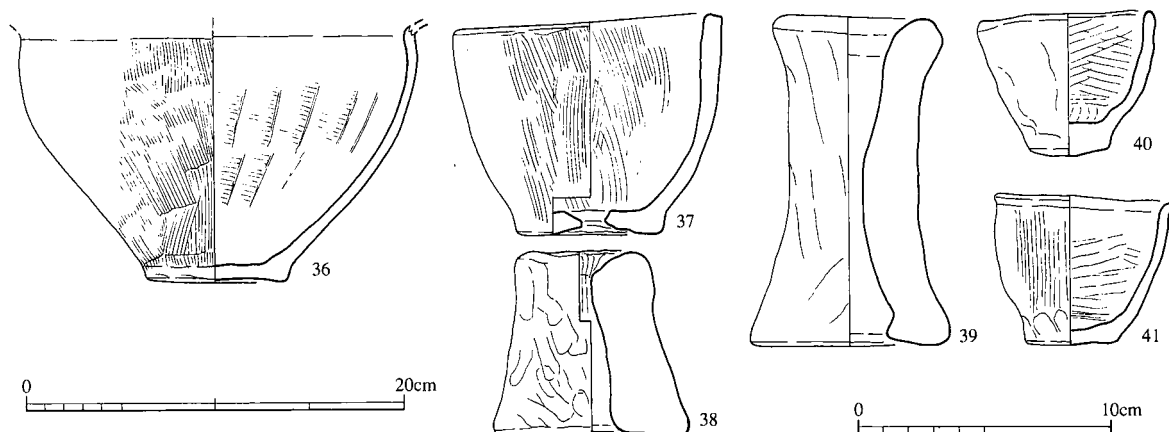


第21図 34号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1 / 4)

外反しながら角張った端部に至る口縁が立ち上がるものが多いが、18・22は直線的に外傾し、17は端部がやや丸みを帯びる。19・23の口縁端部はかすかに凹面をなす。16・17・19は底部がかすかに凸レンズ状に突出。外面縦ハケが基調であるが、14胴部・19胴部下半は摩滅のため調整不明である。内面は底部近くはナデ、胴中部～上部はハケメを残したままのものが多いが、15・17・18はハケをナデ消し、16内面下半はケズリ風の板ナデで仕上げる。20・21・23は口縁内面にもハケメを残す。13外面・14は淡黄褐色、13内面・19は淡橙褐色、15・17・18・20外面・21・23外面は淡灰褐色、16内面は褐灰色、16外面は淡褐黄色、20内面は灰白褐色、23内面は赤褐色を呈する。14・18・19は二



第22图 34号竖穴住居跡出土土器実測図(3)(1/4)



第23図 34号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（40・41は1／3、他は1／4）

次的に火を受け赤変・褐変し、21外面・22外面は二次的な加熱で黒変する。15は底部外面～胴部下半外面に、17は外面に煤が付着する。

24は頸部が緩やかに屈曲して外反し口縁に至る大形甕。口縁端部は角張る。胴部内外にハケメを残し、頸部内面には指頭圧痕あるいは接合痕とも推測される爪形の皺が残る。淡灰褐色～淡褐色を基調とするが、内外面とも煤・二次的な加熱により褐色・黒色に変色する。破片別に色調が異なるため、住居火災時に割れ、火を受けたと推測される。

25は頸部の括れの無い大形甕の胴上部～口縁部片。口縁は直線的に外傾し、かすかに凹んだ端部が特徴的である。胴部外面縦ハケ、胴部内面斜めハケ、口縁部外面横ナデ、口縁部内面横ハケ仕上げ。灰褐色が基調であるが、二次的に火を受け変色する。

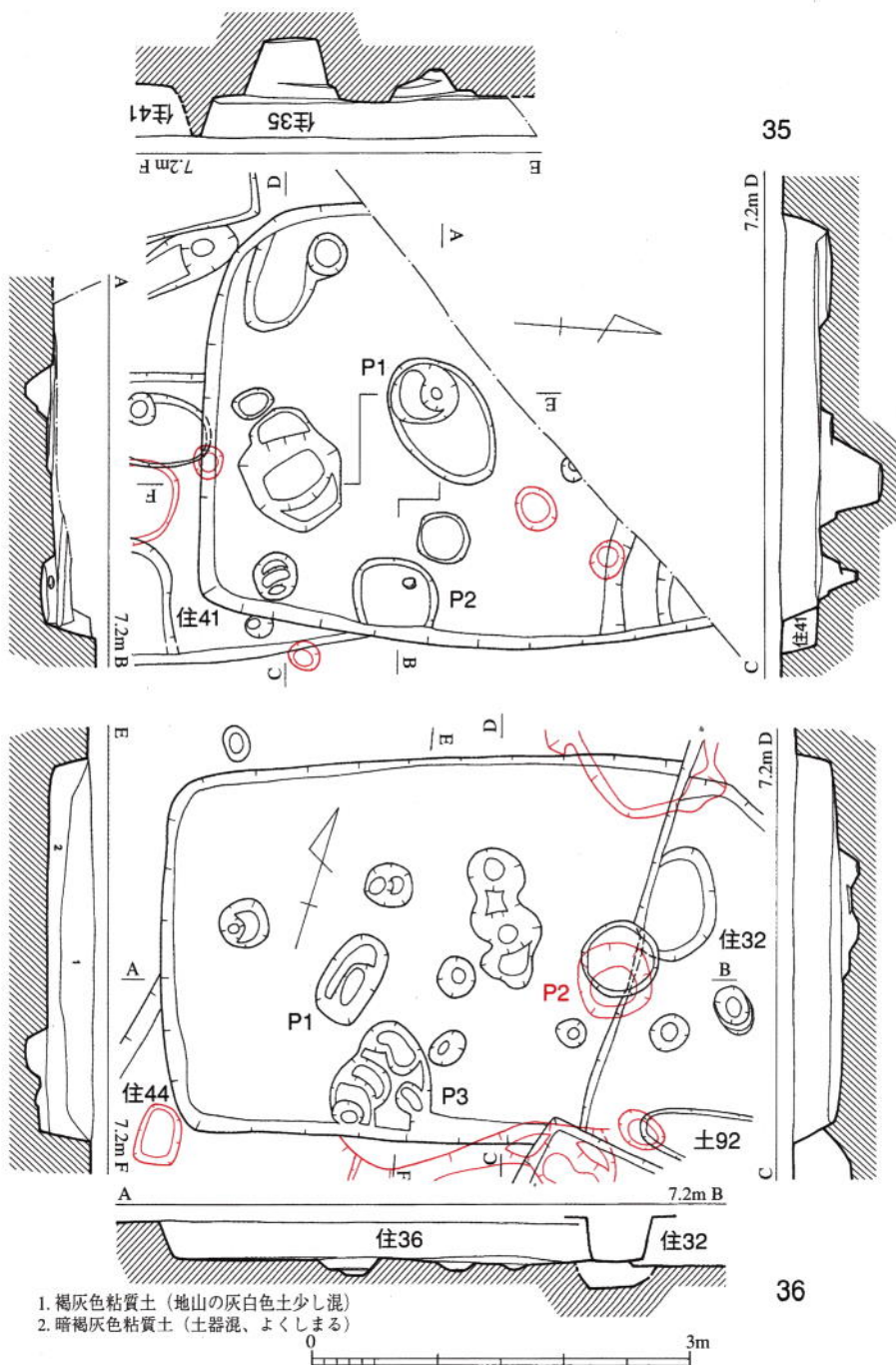
26～32は甕と思われる底部片。外面ハケメが基調であるが、26・27は調整不明。内面は26・27がナデ後ハケメ、28・30・31はナデ、32は板状工具によるナデ上げ痕が残る。29内面は摩滅のため調整不明。26・27・30内面・32は灰褐色、28外面・29外面・30外面は淡褐色、28内面は暗褐色、29内面は褐灰色を呈す。29・30は外面に煤、内面にコゲが付着し、31は二次的に火を受け赤褐色を呈す。

33はほぼ完形に復元される高杯。杯部口縁は内への突出の小さい鋤先口縁をなし、内側に接合痕を残す。杯部は深く、充填法で脚部と接合し、脚部はゆるやかに外反して、角張った端部に至る。内外ともハケメを残すが、脚部内面はナデで仕上げる。二次的に火を受け赤変するが、灰褐色が基調である。34は高杯の杯・脚接合部破片で、脚部外面に断面M字状突帯を貼付する。杯部褐色、脚部淡灰褐色を呈し、杯部と脚部の胎土が異なるようである。

35は口縁部が内傾し、無頸壺に近い形態であるが、鉢としてここに示した。ほぼ完形である。胴部中間に頂部の摩滅した断面三角形突帯を貼付し、底部はかすかな凸レンズ状を呈す。内外ハケメを残し、底部はナデで仕上げる。灰白褐色を呈し、外面は二次的に煤が付着する。

36は口縁部が外反すると思われる鉢。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げであるが、板状工具の小口痕をとどめる。内面暗褐色、外面灰褐色。37はほぼ完形の単口縁鉢で、焼成後穿孔し、甑に転用。口縁は直立して角張り、内外ハケメ。内外暗灰褐色で、二次的に火を受ける。38・39はいずれもほぼ完形の支脚。38は低く、上部がすぼまる形態であるのに対し、39は器高が大きく、上部がゆるやかに外反。いずれも板状工具あるいは指による粗いナデを施し、淡褐色。40は口径7.0cm、器高5.5cm、41は口径7.2cm、器高6.0cmを測るほぼ同形・同大の小形鉢で、いずれも完存し灰褐色。40は外面ナデ仕上げであるのに対し、41は外面にハケメを残す。

以上の土器のうち7・8・10～12・34は中期に遡るもので、先行する遺構から混入したものであろう。他は後期初頭のもので、良好な一括遺物と見做してよからう。



第24図 35・36号竪穴住居跡実測図 (1/60)

35号竪穴住居跡 (図版15、第24図)

G区、調査区北壁際に位置し、41号竪穴住居跡を切る。ほぼ南北に長軸を向ける長方形竪穴住居跡と考えられ、幅3.6m、調査範囲内での長さ4.1mを測り、壁の高さは30cm前後。断面図を作成した中央やや南寄りのピット (P1) が主柱穴と考えられるが、炉跡は検出されていない。東壁際やや南寄りの長さ0.7mのピット (P2) が壁際土坑になるか。地山の黄灰色シルト土ブロックを若干含んだ灰褐色粘質土を覆土とする。土器の他に砥石 (第167図102)、打製石鏃 (第4表18・19)、石英質石器 (第9表1035) が出土した。出土土器 (第26図1～4) 1は如意状口縁で、胴部外面に高い断面三角形突帯を貼付する甕片。

角張った口縁端部、

突帯頂部に刻目を施す。外面はハケをナデ消し、口縁下面にはかすかな指頭圧痕が巡る。突帯上はナデが強く沈線が巡る。口縁内面に横ハケ、頸部内面に指頭圧痕が微かに残り、胴部内面はナデ仕上げ。内外黄褐色を呈し、外面に煤が付着する。2～4は鋤先口縁の甕口縁部片。いずれも口縁の内外の拡張は小さく、口縁上面は水平か微かに内傾する。内面～口縁外面はナデ仕上げであるが、4は胴部外面にハケメが残る。3・4は口縁下に摩滅により低くなった断面三角形突帯を貼付する。2は明褐色、3は外面灰色、内面淡灰褐色、4は淡褐色。1は中期初頭以前に遡ると思われるが、2～4の示す中期中頃が竪穴住居の時期となるか。

36号竪穴住居跡（図版15、第24図）

F・G区に位置し、32・34号竪穴住居跡に切られ、44号竪穴住居跡を切る。検出面では平面形は比較的明瞭であり、ほぼ東西に長軸をおく長方形竪穴住居跡と復元される。幅3.1mを測り、長軸方向は32号住居跡が位置するため完存しないが、現状で長さ4.1mを測る。壁は30～40cm遺存し、覆土の上層は地山灰白色土を少し雑えた褐灰色粘質土、下層では緻密で硬い暗褐灰色粘質土を覆土とする。床面では9基のピットを検出したが、P1、P2が支柱穴と推測される。南壁際には床面に小穴を掘り込んだP3が検出されており、壁際土坑と推測される。ただ、炉跡は検出できなかった。土器の他に住居内及び住居跡北外の包含層から打製石鏃（第4表28～31）が出土した。

出土土器（図版57、第26図5～8） 5～7は底部片。5は外面板ナデ、内面ナデ仕上げで、底部ケズリにより上げ底となる点が特徴的。6は摩滅のため調整不明。7は外面下部は横方向板ナデが残るが、他は調整不明。5・6は黄褐色、7は外面淡褐灰色、内面灰褐色。8は直径4.5cm、遺存高6.0cmを測る小形支脚状土製品。上部に直径8mm程の棒状工具を差し込んだ穿孔がある。淡褐色を呈す。これらの土器はいずれも小片で、時期を決定する資料としては取り上げがたい。

37号竪穴住居跡（図版16、第25図）

G区中央に位置し、94・96号土坑に切られ、39号竪穴住居跡を切っている。現状ではほぼ東西に主軸を向けた長さ2.9m、幅2.3mの長方形竪穴住居跡となる。壁の高さは15cm内外で、覆土は灰褐色粘質土。ただ、他の住居跡に比べ小形であり、炉跡も検出されず、床面の規則的な柱穴配置も抽出できないため、住居跡と断定するには不安が残る。壁も低く、平面形は不確実とせざるを得ない。土器の他に打製石鏃（第4表32・33）が出土した。

出土土器（第26図9・10） 9は如意状をなす甕口縁部片。口縁端部は角張り、やや太い刻目を施す。10は口縁部を鋤先状に内外に小さく拡張した甕。口縁端部には刻目を施すが、摩滅のため胴部外面三角突帯頂部の刻目の有無は不明。外面ハケ、内面ナデ仕上げで、口縁内面には強いナデにより凹線が巡る。灰黄褐色を呈するが、外面突帯下は煤の付着により暗褐色に変色し、突帯よりやや下の胴部にはコゲが付着する。これらの土器はいずれも前期末に位置づけられよう。

38号竪穴住居跡（第25図）

F区北壁際に位置し、ほぼ南北に主軸を向けた長方形ないしは方形竪穴住居跡の南東隅付近のみを検出した。南壁は長さ1.4m、東壁は2.1m程検出し、壁は高さ30cm内外遺存。覆土は褐灰色粘質土。床面及び床面下層に4基のピットがあるが、調査範囲内に炉跡は検出されなかった。

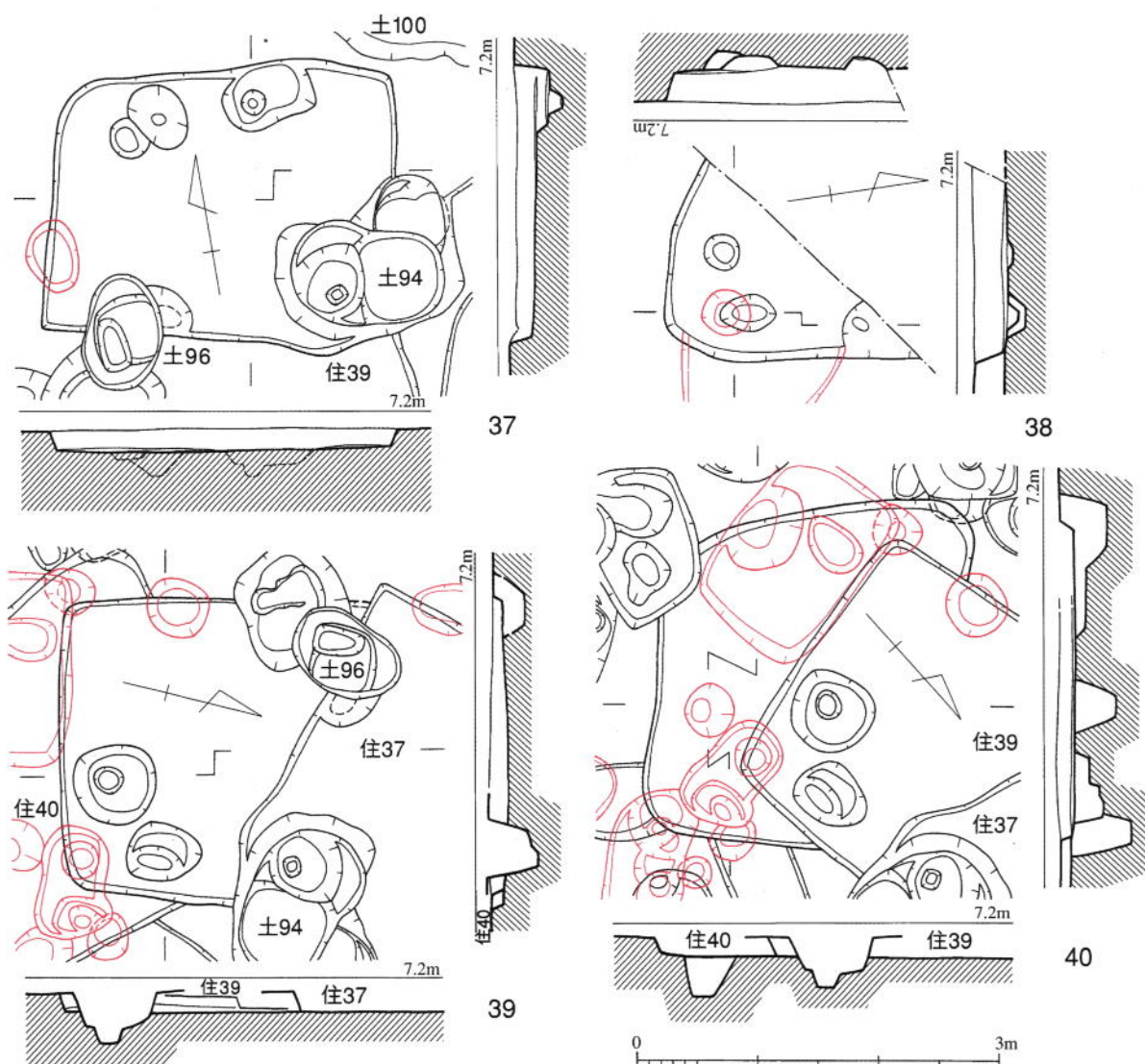
出土土器（図版、第26図11） 蓋の頂部片で、器高は高いと考えられる。外面縦ハケ、内面板状工具によるナデ。外面淡黄褐色、内面明褐色。

39号竪穴住居跡（図版16、第25図）

G区に位置し、37号竪穴住居跡に切られ、40号竪穴住居跡を切る。長軸をほぼ南北に向けた長方形竪穴住居跡で、幅は2.5m、長軸方向は、現状で長さ2.5mを測る。壁は高さ15cm内外。37号住居跡と同様に小形に属し、住居跡とは断定しにくい遺構である。南東隅に位置するピットは住居跡上面から掘り込まれ、床面ではピット・炉跡は検出できなかった。図示できる出土遺物はない。

40号竪穴住居跡（図版16、第25図）

G区に位置し、39号竪穴住居跡に切られる。北東－南西方向に主軸をとる幅2.6m、長さ3.0mのやや歪な長方形プランに復元できるが、39号竪穴住居跡と同様に小形で、住居跡か不安を残す。壁も



第25図 37～40号竪穴住居跡実測図（1／60）

高さ10cm程しか残らず、平面形も不安。床面下層でピットを検出したが、炉・支柱穴は検出できなかった。覆土は地山のシルトを若干含んだ、褐灰色粘質土。図示できる土器はない。

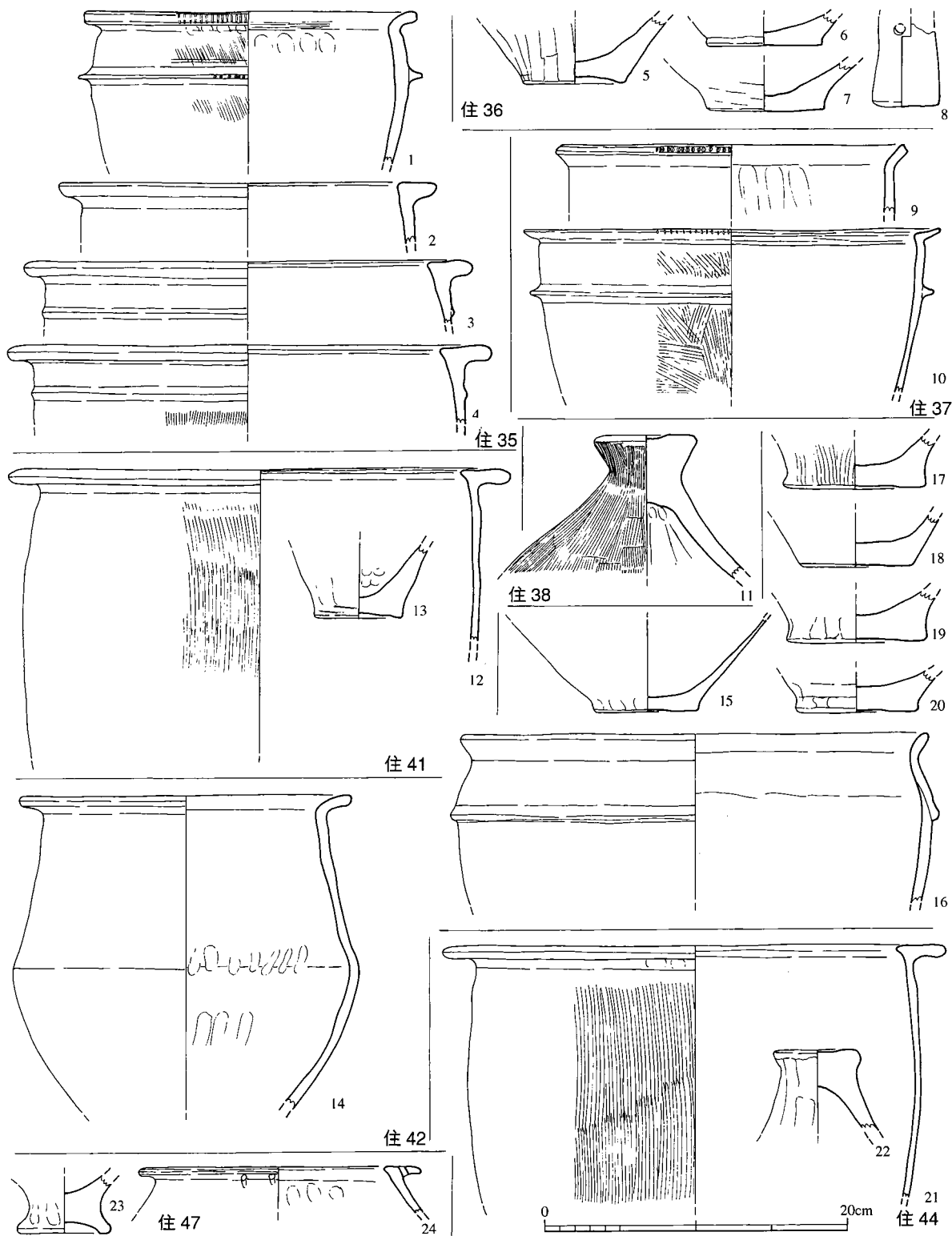
41号竪穴住居跡（図版16、第27図）

G区に位置し、35号竪穴住居跡に切られる。長軸をほぼ東西に向けた長方形竪穴住居跡と復元される。幅2.5m、長さは現状で2.9mと小形であるが、輪郭は比較的明瞭であった。壁は高さ30cm程遺存し、覆土は褐灰色粘質土。床面および下層で3基のピットを検出したが、東壁付近を大きく35号住居跡により削られるため支柱穴配置は不明確である。炉跡は検出できなかった。南壁際中央床面から土器が出土した。また、貼り床を掘りすぎたため、西壁沿いは中央に比べ3～5cm程低くなっている。土器の他に打製石鏃（第4表34）、石英質石器（第9表1007・1041）が出土した。

出土土器（第26図12・13） 12は鋤先口縁甕胴上部片。口縁内への突出は明瞭で、外へも水平に伸びる。胴部外面縦ハケ、内面ナデで、淡褐色。13は41号住居跡西側包含層から出土したもので、甕底部片か。外面は工具によるナデ、内面はナデで、橙褐色。外面は火を受け淡赤褐色。

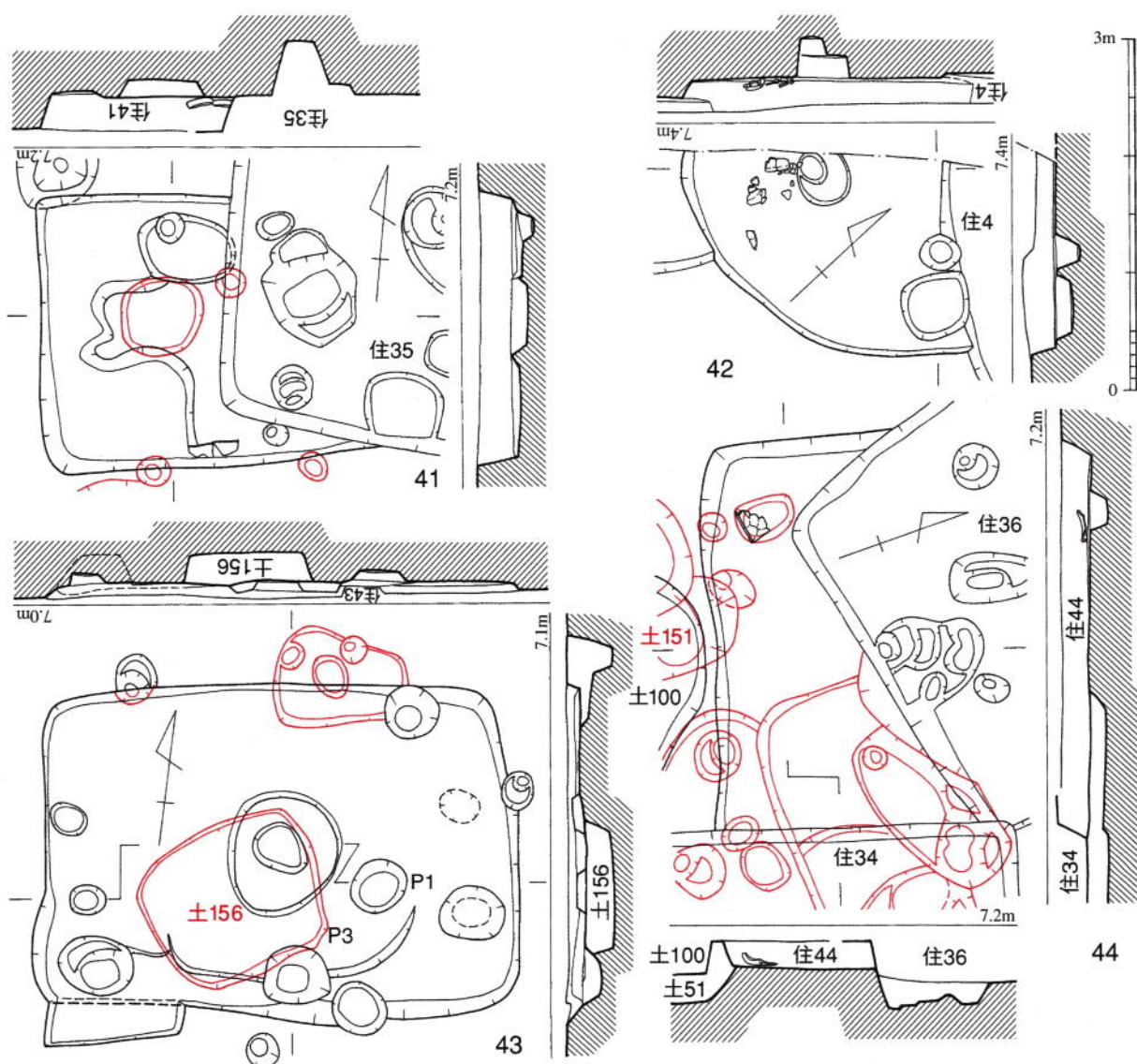
42号竪穴住居跡（図版16、第27図）

B区、調査区北壁沿い、3号溝の外側に位置し、調査区外へと続いている。東北側は4号竪穴住



第26図 35～38・41・42・44・47号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4 1～4：住35、
5～8：住36、9・10：住37、11：住38、12・13：住41、14～20：住42、21・
22：住44、23・24：住47）

居跡に切られるが、円弧状の壁が検出されており、直径4 m前後の円形竪穴住居跡になるか。壁は良好な所で20cm余りの高さが遺存していた。覆土は褐灰色粘質土で、調査区壁際の床面から土器がまとまって出土した。土器の他に砥石（第167図108）、凹石（第171図139）、石英質石器（第9表



第27図 41～44号竪穴住居跡実測図（1／60）

1009・1029）が出土した。

出土土器（図版57、第26図14～20） 14は壺の口縁～胴下部にかけての大きな破片。胴は中間で稜をなして屈曲し内傾する頸部となり、口縁部は強く屈曲して外反する特徴的な器形で、前期末に遡るか。器表は摩滅するが、内面の胴部屈曲部に深い指頭圧痕が巡り、胴下部は浅い指によるナデ上げ痕が残る。外面灰白色、内面灰黄褐色。15は壺底部片。内外摩滅し、淡黄褐色を呈す。

16は胴上部が屈曲し、口縁が外反する甕で、形態は縄文時代晩期末の深鉢に近い。口縁部は緩やかに屈曲して外反し、胴上部の粘土接合部で段をなして屈曲。内外摩滅が進行するが、胴部内面は板ナデらしき痕跡が残る。灰白褐色が基調であるが、二次的に火を受け、広範囲で桃色に変色。17～20は甕底部か。摩滅の進むものが多いが、17外面、19外面・20外面は指頭圧痕が残る。19の底部外面には刳圧痕も明瞭に遺存。18は二次的に火を受け赤褐色、17・19は黄褐色、20は褐灰色。

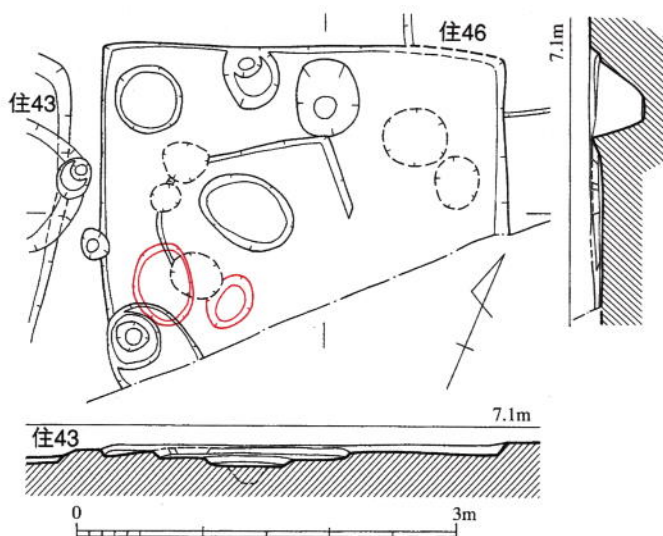
これらの土器のうち14・16は前期後半にまで遡ると考えられ、注目される。

43号竪穴住居跡（図版17、第27図）

E・F区に位置している。86号土坑と本住居跡の南辺が一致しており、86号土坑自体、43号竪穴住居跡の一部を土坑と誤認した恐れがある。また、前述したように上層に位置する30号竪穴住居跡自体も本住居跡の輪郭を誤認した恐れもある。

このような問題があるが、ほぼ東西に長軸を向け、長さ4.0m、幅2.7～2.8mの整った長方形竪穴住居跡である。床の中央では黄褐色粘質土を直径1.0mの範囲で円形に積み、中央を径0.4mの範囲で掘り凹め炉としている。炉内部からは炭がまとまって出土。主柱穴は炉の東脇に位置する

P1と推測されるが、これに対応する西側の主柱穴は下層にある156号土坑覆土と区別が困難で、検出できなかった。また、南壁際中央に位置するP3は小形であるが、壁際土坑になるか。図示できる土器はないが、石包丁（第163図59）、石英質石器（第9表1010）が出土した。



第28図 45号竪穴住居跡実測図（1/60）

44号竪穴住居跡（図版17、第27図）

G区に位置し、34・36号竪穴住居跡に切られる。軸を北東－南西に向けた長方形ないしは方形平面形と推測されるが、34・36号竪穴住居跡に切られ、南壁を長さ3.3m、西壁を長さ1.6m検出したにとどまる。壁の高さは30cm弱で、覆土は地山に由来するシルトを多く含んだ褐灰色粘質土。床面下層でピットを検出しているが、主柱穴は不明で、残存する範囲からは炉跡も検出できなかった。土器の他に打製石鏃（第4表35～40）、石英質石器（第9表1011～1014・1049）が出土。

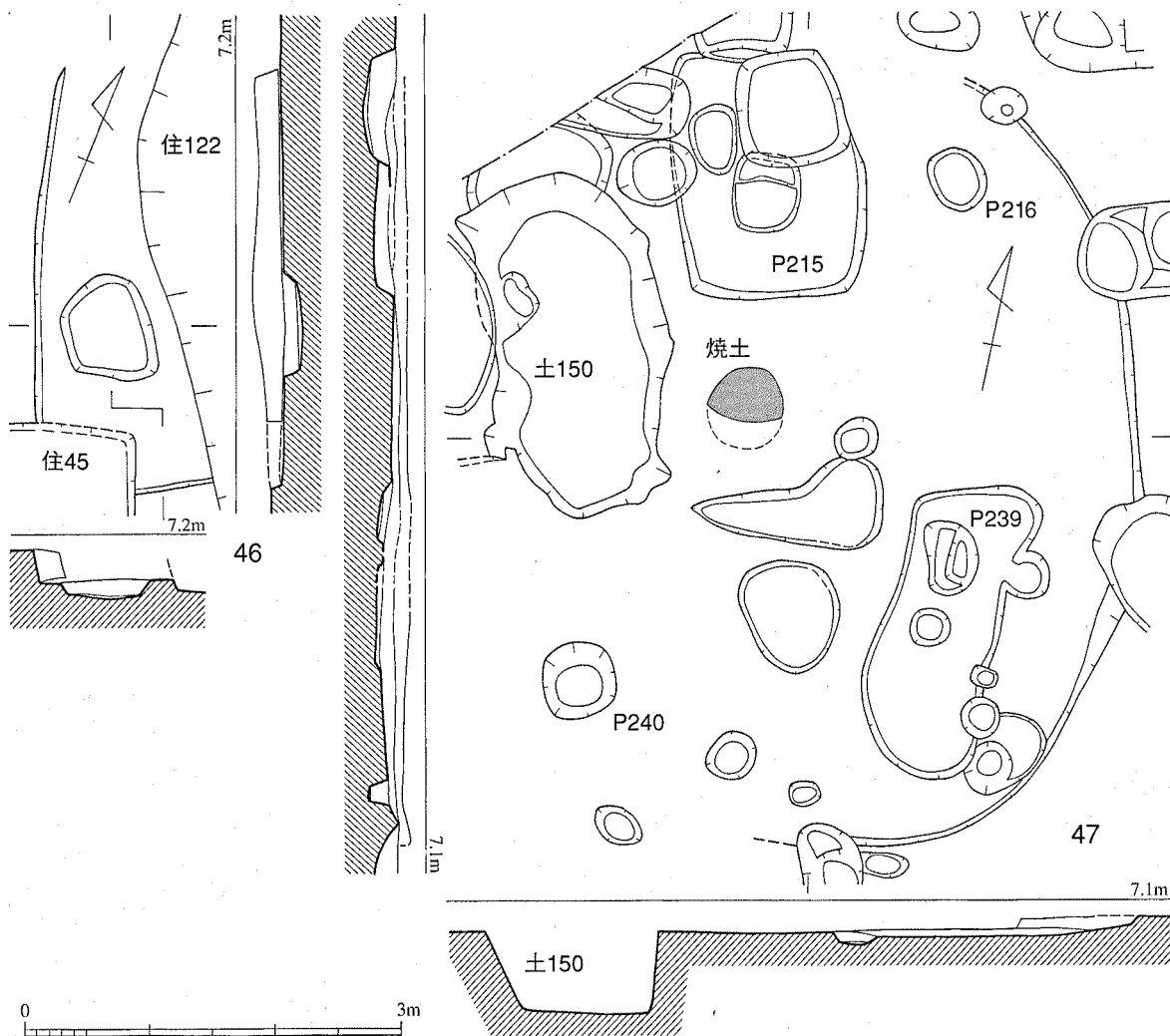
出土土器（第26図21・22） 21は鋤先口縁甕胴上部片。口縁はやや厚く、上面はほぼ水平。外面縦ハケで、内面は調整不明。外面淡黄褐色、内面淡褐色を呈す。22は44号住居跡西の包含層から出土したもので、蓋か。内外摩滅するが、外面は板ナデの痕跡が微かに残る。褐色～褐白色。

45号竪穴住居跡（図版17、第28図）

E区、43号竪穴住居跡の東、26号竪穴住居跡の下層で検出した住居跡で、前述したように26号住居跡自体、本住居の輪郭を誤って捉えた可能性がある。また、46号竪穴住居跡を切っている。主軸を北西－北東方向に向けた方形ないしは長方形の竪穴住居跡で、北東隅を誤って掘り過ぎたため記録できなかったことを除けば、輪郭は明瞭であった。現状で東西幅3.1m、南北長さ2.7mを測る。26号住居跡の下層で検出したため壁の残りは悪く、高さ5cm余りしか遺存しない。覆土は灰褐色粘質土で、鉄分を多く含んでいた。図示できる土器はない。

46号竪穴住居跡（図版18、第29図）

E区、22号竪穴住居跡の西に位置し、26・45号竪穴住居跡に切られる。なお、調査時には45号より新しいと考えていたが、その後の検討で、45号住居跡に先行すると判断した。現状では主軸をほぼ南北にむける方形ないしは長方形竪穴住居跡の南西隅付近の壁を一部検出したのみであり、西壁は長さ2.8m、南壁は長さ0.6m遺存する。壁は良好な個所で高さ30cm弱遺存し、覆土は褐灰色粘質土であった。図示できる遺物はない。



第29図 46・47号竪穴住居跡実測図（1／60）

47号竪穴住居跡（図版18、第29図）

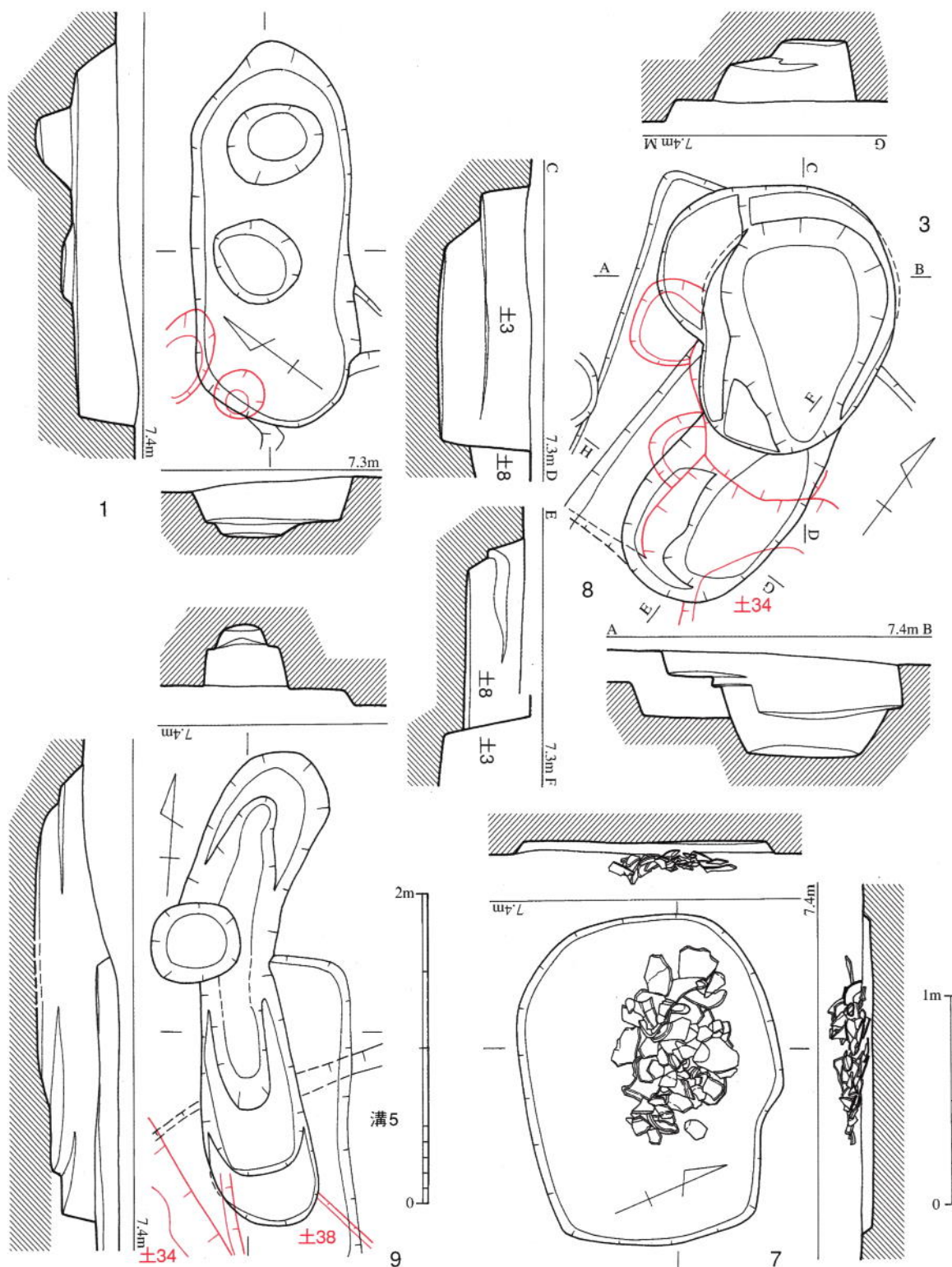
F区、31・32号竪穴住居跡の下層に位置し、中央部を32号竪穴住居跡に破壊されている。また、壁もほとんど残っていないが、円弧状に輪郭が捉えられたため、円形住居跡の一部と判断した。円の西側では150号土坑等の新しい遺構による削平を受け、壁は半円形を呈する。残存部でも壁の高さは5cm内外である。円弧から復元されるほぼ中心部において、直径0.6mの範囲で焼土面が確認され、炉跡となるか。その場合、円形住居は直径6～7mに復元することができる。円形住居の場合、床面から20cm程掘り込まれたP215、P216、P239、P240が主柱穴を構成したと推測される。覆土は褐灰色粘質土で、炭を若干、含んでいた。土器の他に打製石錐（第5表177、200－4）が出土した。

出土土器（第26図23・24） いずれも小片で、本住居に確実に伴うとは断定しにくい。23は厚い甕の底部片として図示したが、蓋の可能性もあろう。外面ナデ仕上げで内面は摩滅する。黄白褐色。24は中期後半の無頸壺口縁部片で、2個所に穿孔が遺存する。口縁部は上面が水平な鋤先口縁。内外調整不明で、丹塗も確認できない。

(2) 土坑

土坑は前述のように143基あり、調査区全域に及んでいる。

なお、2・4～6・10・17・18・23・32・33・53・114・153号は現地で番号を付したが、調査完了後の検討の結果、ピット・包含層等とするのが適当と判断されたため、欠番とした。



第30図 1・3・7～9号土坑実測図（土7は1/30、他は1/40）

1号土坑（第30図）

B区に位置する。現状では北東―南西に長軸を向けた長さ2.5m、幅1.0mの楕円形を呈し、床面までの深さ30～40cmを測る。床面では2基のピットを検出した。ただ周辺では遺構の切合いがあるため形態は不安で、床面も少し掘りすぎた可能性が高い。覆土上層は褐灰色粘質土で、下層は暗褐灰色粘質土であった。

出土土器（第31図1） 図示できる土器は1点のみである。如意状の甕口縁部の小片で、口縁は短く外反する。端部は丸く仕上げ、端部下よりに先端の丸い工具により太い刻目を施す。褐色～褐灰色を呈している。

3号土坑（第30図）

C区に位置し、8号土坑の北側に掘り込まれた北西―南東方向の楕円形平面の土坑である。上面では長さ1.8m、幅1.25mを測るが、下層の南側で立ち上がりを検出しているため、本来は長さ2.1m程と復元される。壁の中間に幅の狭いテラスが巡っているが、掘り過ぎによる。深さは最大で65cmを測り、覆土は暗黒灰色粘質土。土器の他に石包丁（第163図46）、磨製石斧（第166図94）が出土。

出土土器（図版57、第31図2～16） 2・3は甕胴上部破片。いずれも口縁は外折し、外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、胴部内面が使用により変色する。2の口縁は水平に伸びるのに対して、3は弱く外反しながら伸びる。2は頸部内面に指頭圧痕が巡り、外面には煤が付着する。2は明褐色、3は外面淡灰褐色、内面淡黄褐色を呈す。

4～9は底部及び胴下部破片。4・7は胴部の立ち上がりから、壺底部と考えられ、他は甕か。9は胴部中間にやや高い断面台形の突帯を貼付する。7は底部外面に環状の凹みがあり、接合痕を反映すると推測される。全体として外面ハケ、内面ナデ仕上げが基本であるが、6・7内面は調整不明、8・9は指頭圧痕を残す。4外面・5外面・9外面は灰褐色、4内面・9内面は灰黄褐色、5内面・8は淡黄褐色、6は白黄褐色、7外面は暗灰褐色、7内面は暗褐色を呈し、7は煤が外面全体に付着する。

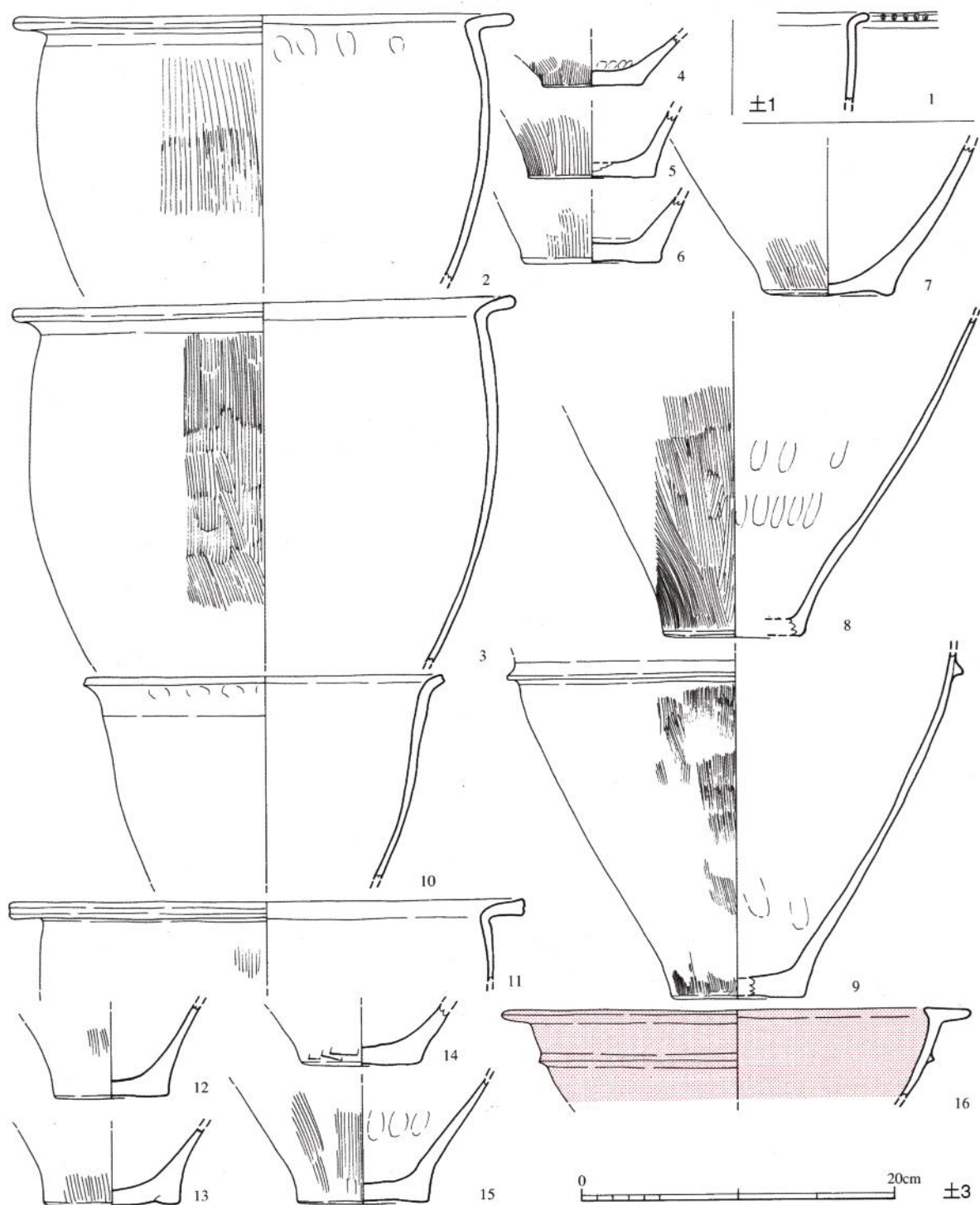
10～16は3号土坑南の遺構面・包含層からの出土品。10は如意状口縁の甕胴上部。口縁部は弱く外反し、口縁端部は面をなすが、刻目の無い事は確実である。外面に指頭圧痕が微かに遺存するが、摩滅により調整不明。胎土に砂粒を多く含み、外面暗褐色、内面黄灰褐色。11は外折した甕口縁部。口縁部は強く屈曲し、端部は凹面をなす。外面にハケメが微かに遺存するが、摩滅が進む。外面淡褐色、内面灰褐色。12～15は甕底部片。外面は14が板状工具痕を残す以外はハケメ仕上げ。内面は12・15がナデで、他は調整不明。12外面・13外面・15外面は淡黄褐色、12内面・13内面は灰黒色、14内面灰黄褐色、14外面暗褐色、15内面は褐灰色。

16は丹塗鋤先口縁高杯杯部。口縁の内外への突出は小さく、外へはほぼ水平に伸びる。深い器形をなし、口縁下に断面三角形突帯を貼付する。生地は灰黄褐色。

7号土坑（図版19、第30図）

B区北側に位置する。3号溝の上層で検出し、土器が一括して出土した。現状では長さ1.6m、幅1.25mの楕円形を呈する。ただ、深さは5cm程と浅く、遺構の輪郭は不明瞭であった。検出面に露出した土器の周囲を遺構として捉えたに過ぎないが、弥生時代後期初頭～前葉の土器が出土しており、その一括性は良好と評価できる。

出土土器（図版57、第32図2～5） 2・3は複合口縁壺で、4は同様の器形の胴下部と思われる。2は完形に復元できる。口縁は頸部から丸く屈曲し、頸部との境は稜が目立たない。口縁端部は丸く仕上げ、口縁内面に接合痕が段となって残る。頸部には頂部の丸い断面三角形突帯を口縁部との



第31図 1・3号土坑出土土器実測図（1／4 1：±1、2～16：±3）

境に1条、胴部との境に2条貼付する。頸部内面でも口縁部、胴部との境の稜が比較的明瞭である。胴部は張りが比較的強く、中間からやや下がったところに、2条の断面三角形突帯を巡らす。外面は摩滅し、内面は完形に復元できるため調整の観察が難しいが、胴部外面にハケメが遺存する。3は胴上部が1／3周欠損する。2とは異なり口縁部と頸部の境外面に稜があり、口縁端部はやや角張る。2と同様に頸部と胴部の境界、胴中間からやや下がった位置にそれぞれ2条の頂部の丸い断

面三角形突帯を巡らす。頸部と口縁部の境の突帯はない。外面はハケ仕上げで、口縁外面も横ハケをとどめる。内面は頸部にハケメが残り、口縁部、胴下部はナデ仕上げ。胴上部内面は雑な板状工具のようなハケを施し、粘土の接合痕も残る。4は2・3と同様に胴部に2条の頂部の丸い断面三角形突帯を巡らす。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。2は淡黄褐色、3は外面灰褐色、内面褐色、4は外面淡褐黄色、内面淡褐色を呈す。

5は断面「く」の字口縁の甕で底部まで完存する。口縁部は直線的に外傾し、端部が凹面をなす。頸部は括れ、底部はやや上底気味である。外面縦ハケ、内面は胴上部斜めハケ、他はナデ仕上げである。外面褐色、内面淡黄褐色が基調であるが、外面は褐白色に変色が進み、胴部内面は焼成不良のためか黒変する。

8号土坑（第30図）

B・C区、3号土坑の南に所在する土坑である。3号土坑により北側を失うが、現状で幅0.9m、長さ0.9mを測り、南北方向に主軸に向けた楕円形の平面を呈する。深さは検出面から40cm強で、底部の西側にテラスがつく。

出土土器（第32図1） 内に緩やかに内湾した口縁部片で、無頸壺あるいは鉢となるか。口縁端部は角張り、摩滅のため調整は不明。灰白褐色。

9号土坑（第30図）

B区に所在する。平面形は比較的明瞭であったが、5号溝・38号土坑の北に位置するため、南端は平面形が不安で、それらに本来帰属する遺物が混入した恐れがある。細長く屈曲しているが、長軸をほぼ南北に向けた土坑で、長さ3.1m、幅0.55～0.7mを測る。壁の中間に不自然にテラスをつけて掘り上げてしまったが、底部・壁は本来、船底状であった可能性が高い。検出面からの深さ40cm強で、暗黒灰色粘質土を覆土とし、土器を多く含む。土器の他に打製石鏃（表4の41）が出土した。

出土土器（図版57・58、第34図1～11） 1～7は鋤先口縁甕の胴上部破片。口縁は水平に伸びるものが多く、3・6は口縁内面の一部に接合痕が残り、4は口縁上面の一部にハケメが残り、7は口縁が厚くやや古相の印象を受ける。外面縦ハケ、内面ナデが基本であるが、3の内外、7の内面は摩滅のため調整不明。1・3・6内面は淡黄褐色、2は淡灰黄褐色、4・7外面は淡褐色、5は淡褐白色、6外面・7内面は淡灰褐色を呈し、1・7は外面に煤が付着。

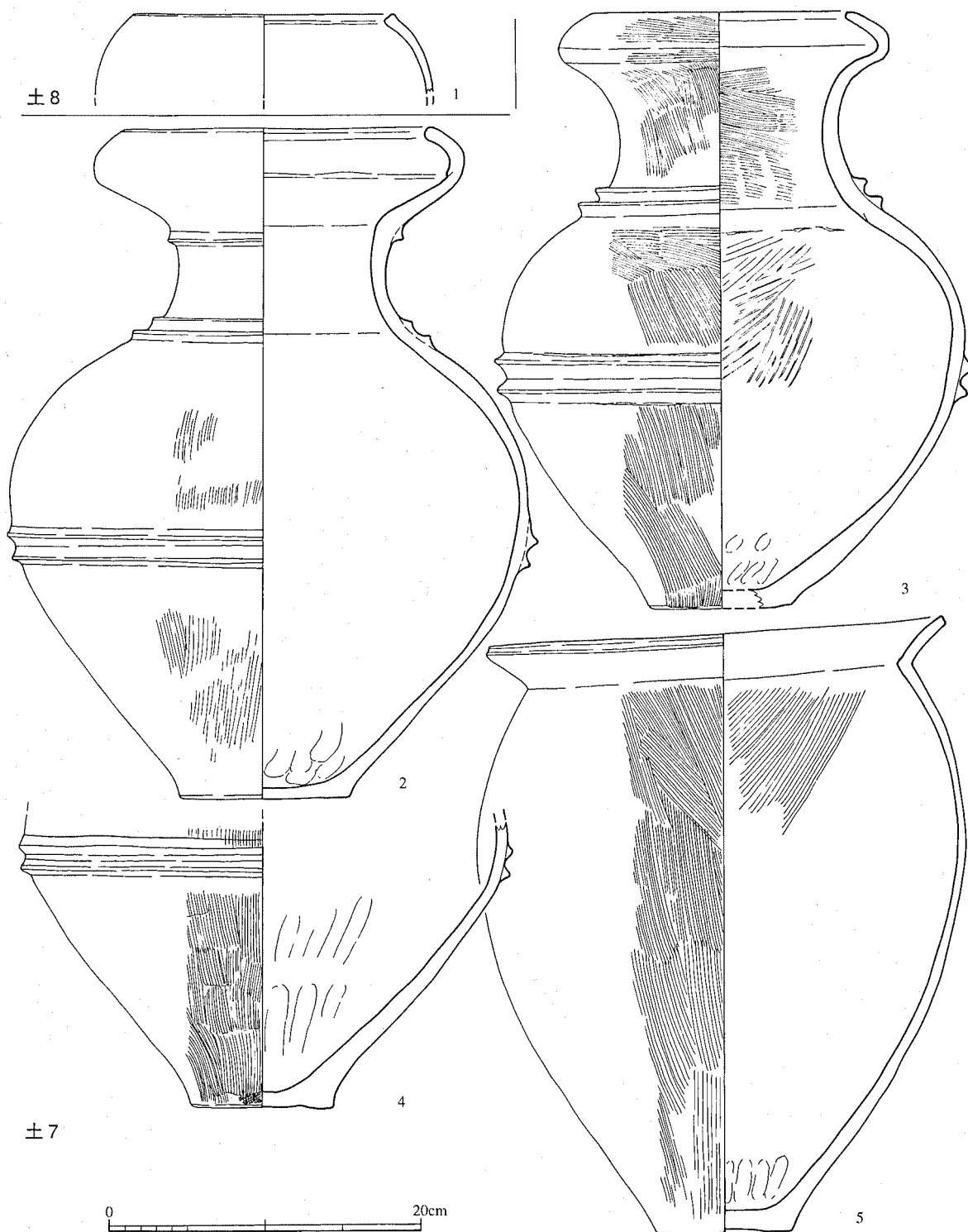
8～11は底部片。8は底形が大きく壺底部であるが、焼成後穿孔により甑として転用する。他は甕底部か。11は外底面が環状に凹み、粘土接合の名残か。いずれも外面ハケメ、内面ナデを基本とするが、9外面・11内面は摩滅により調整不明。8は外面白褐色、8内面・10内面・11は灰白褐色、9内面灰黒色、9外面淡灰黄褐色、10外面淡灰褐色を呈し、10・11は外面に煤が付着する。

以上の土器は中期後半でも古い頃に位置づけることができよう。

11号土坑（第33図）

A区、3号溝の上面に掘り込まれた土坑と考えたが、3号溝覆土と区別できずに深く掘り下げてしまった。現状では長軸を北東―北西に主軸に向けた長さ1.95m、幅1.4mの楕円形を呈し、深さは45cm内外であるが、北東側の壁中間テラスより下は掘りすぎた部分である。暗灰色粘質土を覆土とし、微細獣骨片を含んでいた。

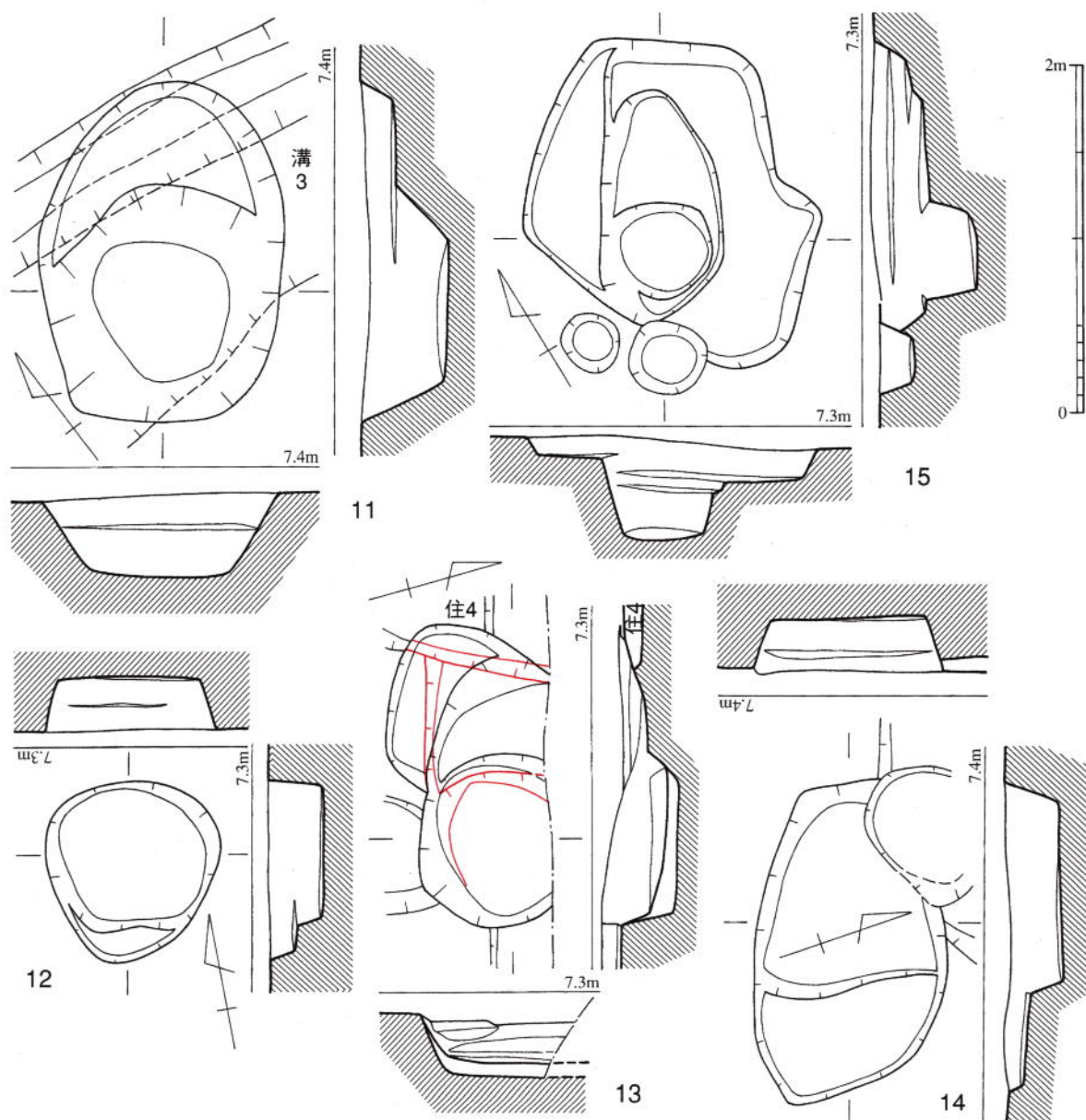
出土土器（第34図12） 甕の底部と考えられるが、底部外周が外に踏ん張った形態で特徴的。内外ナデ仕上げで、灰白褐色を呈す。



第32図 7・8号土坑出土土器実測図（1／4 1：±8、2～5：±7）

12号土坑（第33図）

A区に所在する。現状では直径1.1m程のほぼ円形を呈し、南側に幅20cm程のテラスがつき突出しているが、細部の平面形は不安がある。深さは30cm余りで、覆土は褐灰色粘質土ないしは暗褐灰色粘質土であった。



第33図 11～15号土坑実測図 (1/40)

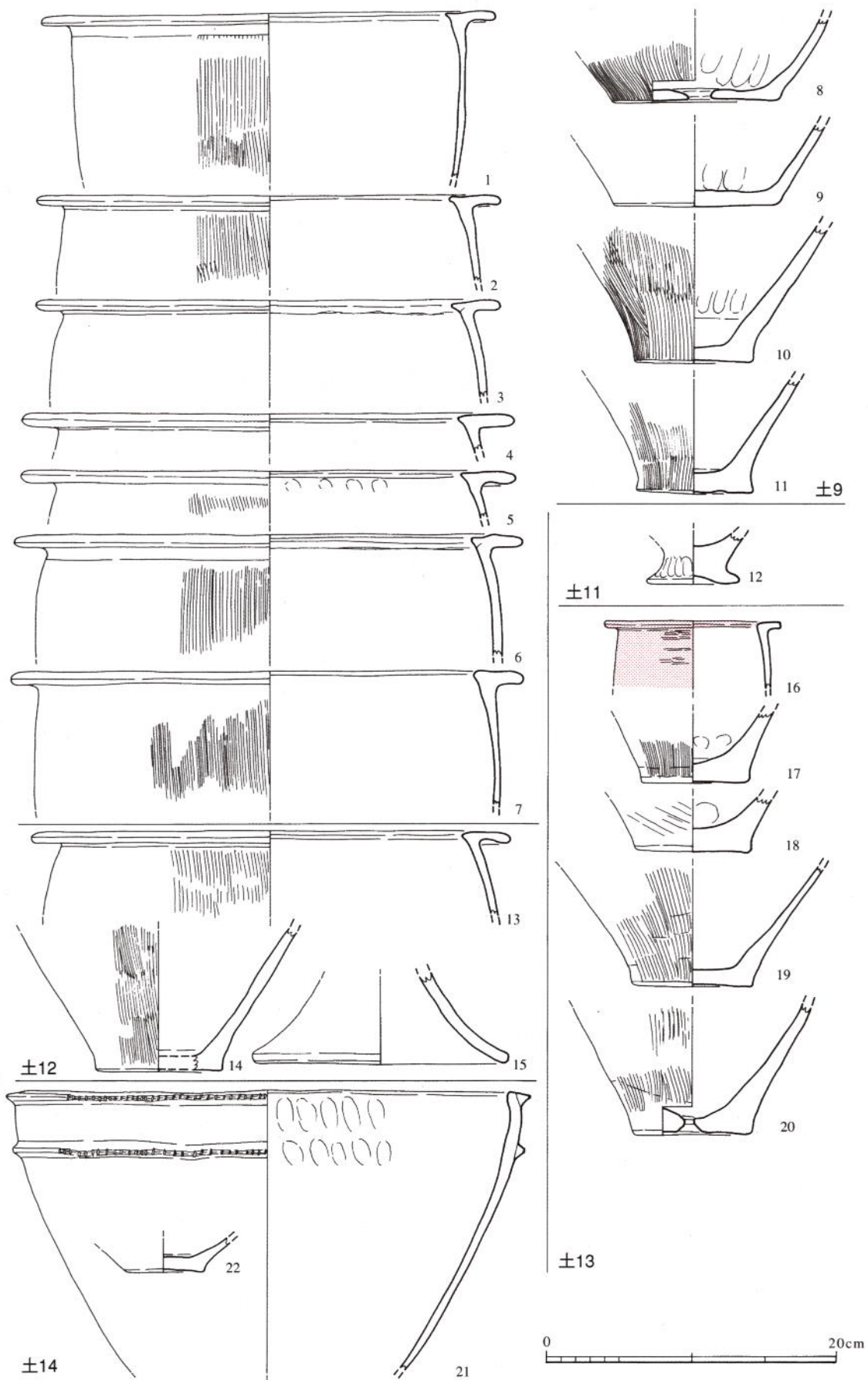
出土土器 (図版58、第34図13～15) 13は鋤先口縁の甕胴上部片である。口縁部は水平に外へ伸び、端部近くでやや垂れ下がる。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、白黄褐色。

14は甕底部か。内面は摩滅し、白黄褐色を呈す。高さ5cmより上は外面に煤、二次的な火による変色、内面にコゲの付着が顕著である。

15は高杯脚裾で、緩やかに広がり、やや角張った端部に至る。内外の摩滅が顕著のため調整、丹塗の有無は不明である。生地は橙褐色。

13号土坑 (図版19、第33図)

A区に所在する。覆土上層は暗灰色土で、北に隣接する4号竪穴住居跡の区別が困難であった。そのため、調査時には4号住居跡を切ると判断したものの、切合いは不安であり、出土遺物も周辺遺構に帰属するものと混乱した恐れがある。4号住居跡に切られ、東は調査区外へと続くため全形も不明であるが、現状では主軸をほぼ東西に向けた長さ1.5m、幅0.7mの楕円形を呈す。東側下部



第34图 9·11~14号土坑出土土器实测图 (1/4 1~11: ±9、12: ±11、13~15: ±12、16~20: ±13、21·22: ±14)

は直径0.9mの円形を呈し、1段深くなっている。深さは最深部で検出面から45cmを測り、覆土の下部は暗黒灰色土であった。

出土土器（第34図16～17） 16は小形の丹塗無頸壺か。外面ミガキで他はナデ仕上げ。生地は暗褐色～暗い淡褐色を呈する。

17～20は甕底部で、20は焼成後穿孔により甑に転用している。18外面が板状工具による斜めナデ仕上げとなる以外は外面縦ハケ、内面ナデ仕上げである。17は黄白褐色、18は淡黄褐色、19は灰白褐色、20は暗褐黄色を基調とする。17外面・20外面は二次的に火を受け赤変・褐変し、20内面にはコゲが付着する。

14号土坑（図版19、第33図）

B区に所在し、3号溝の東外に位置する。周辺の包含層、遺構等との区別が難しく、形態は不安であるが、現状では主軸をほぼ東西に向けた楕円形の平面を呈し、長さ1.8m、幅1.1mを測る。東にテラスがあり、西側が深くなるが、最深部で検出面から深さ35cm程である。上層からは土器が出土したが、下層からは少ない。覆土は灰色粘質土。

出土土器（図版58、第34図21・22） 21は口縁部、胴上部外面に断面三角形の刻目突帯を貼付した甕。胴下部からはほぼ直線的に開き、口縁部近くで直立させている。刻目は鋭い工具により密に施される。内外摩滅のため調整不明であるが、口縁内面に微かに指頭圧痕が巡る。淡褐色～明褐色を呈し、下部は外面煤、内面コゲが付着する。22は小形の無頸壺底部。摩滅のため、調整・丹塗の有無は不明であるが、生地は橙褐色で精良な胎土を用いる。21は前期末、22は中期後半であり、時期の隔たりが大きい。

15号土坑（第33図）

B区に所在する。誤って周辺を広く掘り下げているが、中央の長さ1.35m、幅0.7mの楕円形部分が土坑本体になる。主軸は北東－南西方向。南側下部がピット状に深くなり、検出面からの深さ60cm余り。暗褐色粘質土を覆土とし、上部はやや灰色を帯びる。図示できる出土遺物はない。

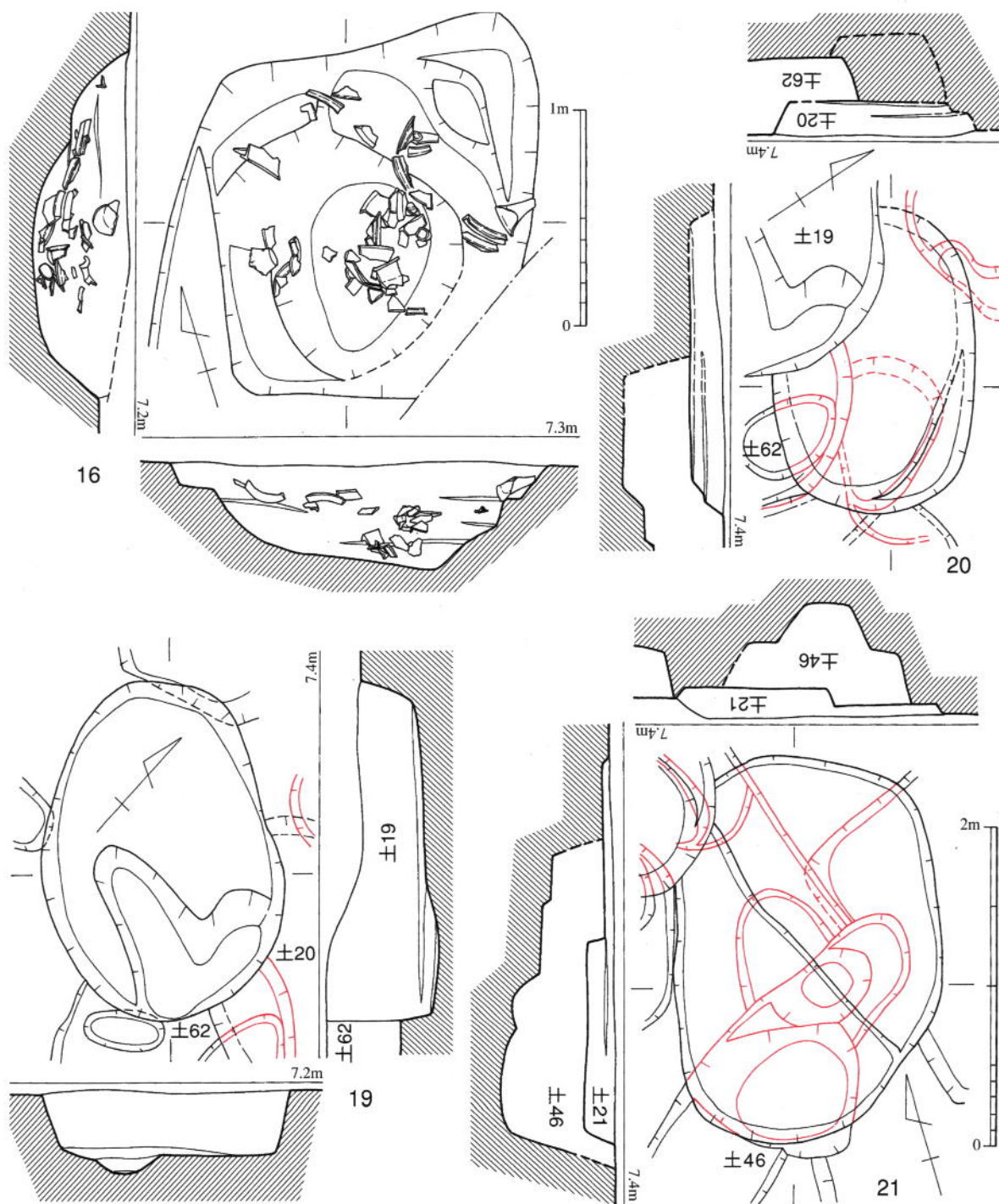
16号土坑（図版20、第35図）

B区、調査区の南壁際に位置する。上面の形態が掘り間違いや上面遺構のために乱れているが、下部では明確に捉える事ができた。上面は南北1.8m、東西1.6mの長方形に近い平面形で、中間にテラスが巡り、下部は幅長さ1.15m、幅0.9mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深部で90cm程である。土器の他に磨製石剣（第165図77）が出土。

出土土器（図版58、第36図1～23） 1・2は中形の鋤先口縁広口壺口縁部片。いずれも口縁の内への突出は弱く、1は上面が外傾し、2は水平に伸びる。1は外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、灰白色を呈し、内面は煤で変色。2は内面ナデ仕上げ、外面調整不明で、白黄褐色を呈し、外面は煤で変色。いずれも砂粒は少ない。3は小形の鋤先口縁広口壺胴上部～口縁の破片。口縁部は上面が外傾するが、突出は小さい。内面ナデで、ナデ上げの痕跡を残し、外面は摩滅。灰黄褐色。

4～11は鋤先口縁甕の口縁部～胴上部破片。口縁は水平に延びるものとやや外傾し端部の垂れ下がるものが相半ばする。7は厚く外への突出が短い口縁部で、口縁端部にやや疎らな刻目を施す。9は口縁上面の内寄りに凹みの巡る点が特徴的である。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げが基本であるが、7は外面ナデ仕上げ。4・8・11は淡灰黄褐色、5外面・9外面は褐色、5内面・6は淡灰褐色、7は灰白褐色、9内面は淡橙褐色、10は白黄褐色を呈す。

12～16は底部片。15は外面縦ハケ、内面工具によるナデ仕上げで、灰白褐色。煤の付着、二次的



第35図 16・19～21号土坑実測図（±16は1／30、他は1／40）

に火を受けたことによる変色が顕著である。12～14・16は甕底部で、12は内外ナデ仕上げ、13は内外摩滅、14、15は外面縦ハケ、内面工具によるナデ上げか。底外周が踏ん張る形態の12は古い様相がうかがえるが、他は中期後半でも古い頃と考えられる。12内面は黄褐色、12外面は灰褐色、13は灰白褐色、14は淡灰褐色、16は灰白色を呈す。12外面は二次的に火を受け橙色に変色し、16外面煤で褐色に変色する。

17・18は鋤先口縁大形鉢の口縁部。口縁部はいずれも外傾し、内への突出も明瞭で、口縁下の胴部外面に低い断面三角形突帯を貼付する。いずれも内外ナデ仕上げで、18は突帯部分の内面に指頭

圧痕が巡る。17は黄白褐色、18は淡褐色を呈し、18外面は煤の付着のためか暗褐色に変色。

19は単口縁の高杯杯部片、20は高杯杯下部～脚の破片で、同一個体の可能性が高い。19は深い杯部で、口縁端部はやや角張る。内面は摩滅し、外面には微かに横ミガキが残る。20は脚上部に粘土円盤を充填したと考えられ、脚裾は緩やかに広がり、丸みを帯びた端部に至る。内面はナデ仕上げであるが、脚柱部には絞り痕を残し、外面は板ナデあるいはミガキと思われる縦方向の稜が残る。

以上の土器は12を除けば、ほぼ中期後半の一括遺物として考える事ができよう。

22・23は16号土坑東の包含層から出土したもの。22は甕底部として図示したがあるいは蓋頂部か。底とした場合、高台状の底部が特徴的である。外面ハケ、内面ナデ仕上げで、淡黄褐色を呈す。23は蓋上半部の破片で、頂部はわずかに凹む。内外摩滅するが、下部内面に指頭圧痕が残る。外面淡褐色、内面褐黄色で、下部内面にコゲが帯状に付着する。

19号土坑（図版21、第35図）

D区に所在し、62号土坑を切っている。現状では北西－南東に長軸を向けた長さ2.1m、幅1.5mの楕円形を呈するが、周辺遺構との区別が難しく、細部の形態には不安がある。検出面からの深さ70cm余りで、覆土は上部が褐灰色粘質土、下部は暗褐灰色粘質土であった。土器の他に砥石（第167図103）が出土。

出土土器（第36図24～31） 24は中期初頭以前の壺口縁部片で、25は壺肩部片。24は頸部から緩やかに口縁が外反し、端部は角張る。内外調整不明で、外面褐灰色～灰褐色。25は肩部に2条の沈線を巡らし、外面縦ミガキ、内面指ナデ上げ。外面暗褐色、内面灰褐色を呈す。

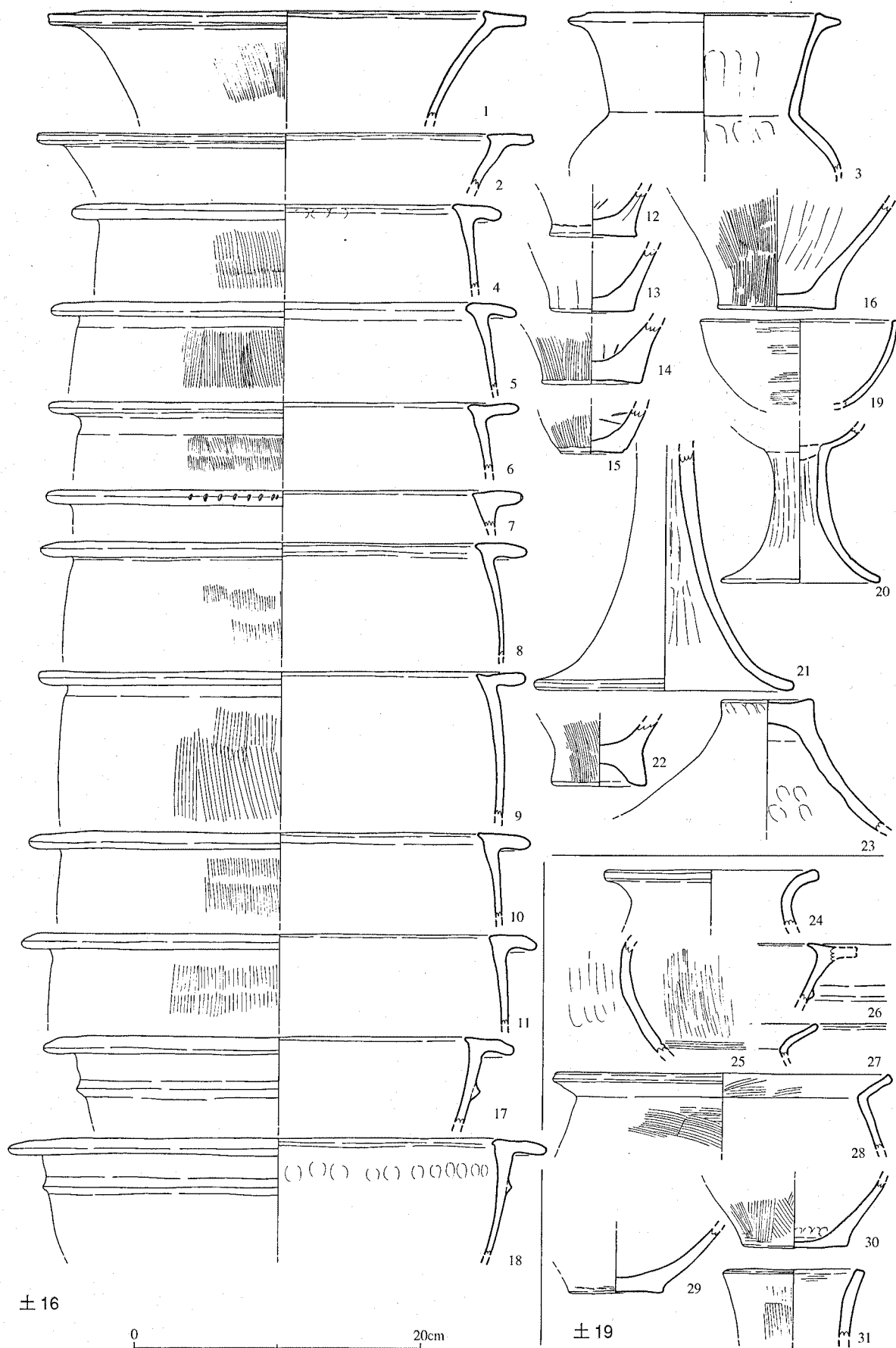
26～31は中期後半でもやや新しい頃のものか。25は鋤先口縁の壺あるいは高杯口縁部小片。口縁外端は欠損するが、内への突出は明瞭で鋭く、口縁下外面に低い断面三角形突帯を貼付する。内外摩滅で、生地は橙褐色を呈す。27・28は「く」の字口縁の甕口縁部。27は小片で傾きに不安があり、調整不明。28は口縁が直線的に外傾し、端部を上になぞりに拡張させ、面を形成する。外面～口縁内面はハケメを残し、胴部内面は摩滅する。27は淡黄白褐色、28は淡褐色を呈す。29・30は壺底部片。29は内面ナデ、外面は調整不明であり、内外褐色。30は外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、底部と胴部境界の内面に指頭圧痕が巡る。内面淡黄褐色、外面褐色を呈し、外面は二次的に火を受ける。31は鼓形器台で天地不安。外面は縦ハケ、内面はナデ仕上げであるが、口縁部にはわずかに横ハケが残る。外面淡褐色、内面灰褐色。

20号土坑（図版21、第35図）

D区に所在する。北西－北東に長軸を向けた楕円形の平面形を呈するが、北西部を大きく19号土坑に切られ、南東部では62号土坑を切るなど他の遺構との切合いがあるため、平面形は不安が大きい。現状では長さ1.9m、幅1.25m、深さ25cm内外であり、覆土は鉄分を多く含んだ灰褐色粘質シルト。図示できる遺物はない。

21号土坑（第35図）

D区に所在し、46号土坑を切ると考えたが、下層では46号土坑を始めとして複数の遺構が複雑に切合っており、これらの遺構を誤認して本土坑として捉えた恐れが大きい。現状では長軸を南北方向に向けた長さ2.4m、幅1.7m楕円形を呈する。西南部が段をなして深くなり、深いところで検出面から20cm弱である。灰褐色粘質シルトが覆土の主体を構成する。出土遺物は極めて少く、図示できるものはない。



第36图 16・19号土坑出土土器实测图 (1/4 1~23: ±16、24~31: ±19)

22号土坑（図版21、第37図）

B区に所在する。上面での輪郭は不安であるが、他遺構との切合いもないため明瞭に検出できた。主軸を北西－南東に向けたややゆがんだ楕円形の土坑で、底部は船底状を呈する。長さ1.5m、幅1.0mを測る。検出面からの深さは45cmで、覆土は黒褐色粘質土。図示できる遺物はない。

24号土坑（図版20・21、第37図）

D区に所在する。当初、9号竪穴住居跡と番号付けしたが、掘り下げる途中で土坑と判断した。主軸をほぼ東西方向にむける長方形の土坑で、東側は掘りすぎのためテラスを図示しているが、本来は土層断面図に示すように壁は直立ないしはやや上方がすばまっていたと判断される。床面はほぼ平らである。現状では長さ2.45m、幅1.45mを測り、検出面からの深さは60cm前後。覆土は灰褐色粘質土を基調とするが、床から高さ20cmほどのところに厚さ5cm弱の炭層が形成されていた。土器の他に砥石（第168図126）が出土。

出土土器（図版58、第38図1～7）1は壺口縁部で頸部から緩やかに口縁が外反し、端部はやや角張る。内外横ミガキで、淡白橙色～灰白褐色。2は如意状口縁の甕。口縁部は短く外傾し、端部外面にやや太めの刻目が施される。内外摩滅が進むが、胴部外面にミガキ、頸部外面に指頭圧痕が残る。3は口縁に断面三角形突帯を貼付し、内にも肥厚させた甕の口縁～胴下部破片。口縁外端には柔らかいうちに太く先端の丸い工具で刻目を施す。内外ナデで、内面にはナデ上げの微かな凹みが残る。4～6は甕底部片。4は外面ハケあるいは板ナデ、内面ナデ仕上げで、内面淡黄褐色、外面淡灰褐色。5は外面ハケメ、内面摩滅し、白褐色。6は内外摩滅し、明褐色を呈するが、内面は使用のため暗褐色。7は蓋体部片。直線的に裾へと開き、端部は角張る。外面板ナデ、内面ナデ仕上げで、黄白褐色。内面裾近くにはコゲが付着する。これらの土器は前期末に比定できよう。

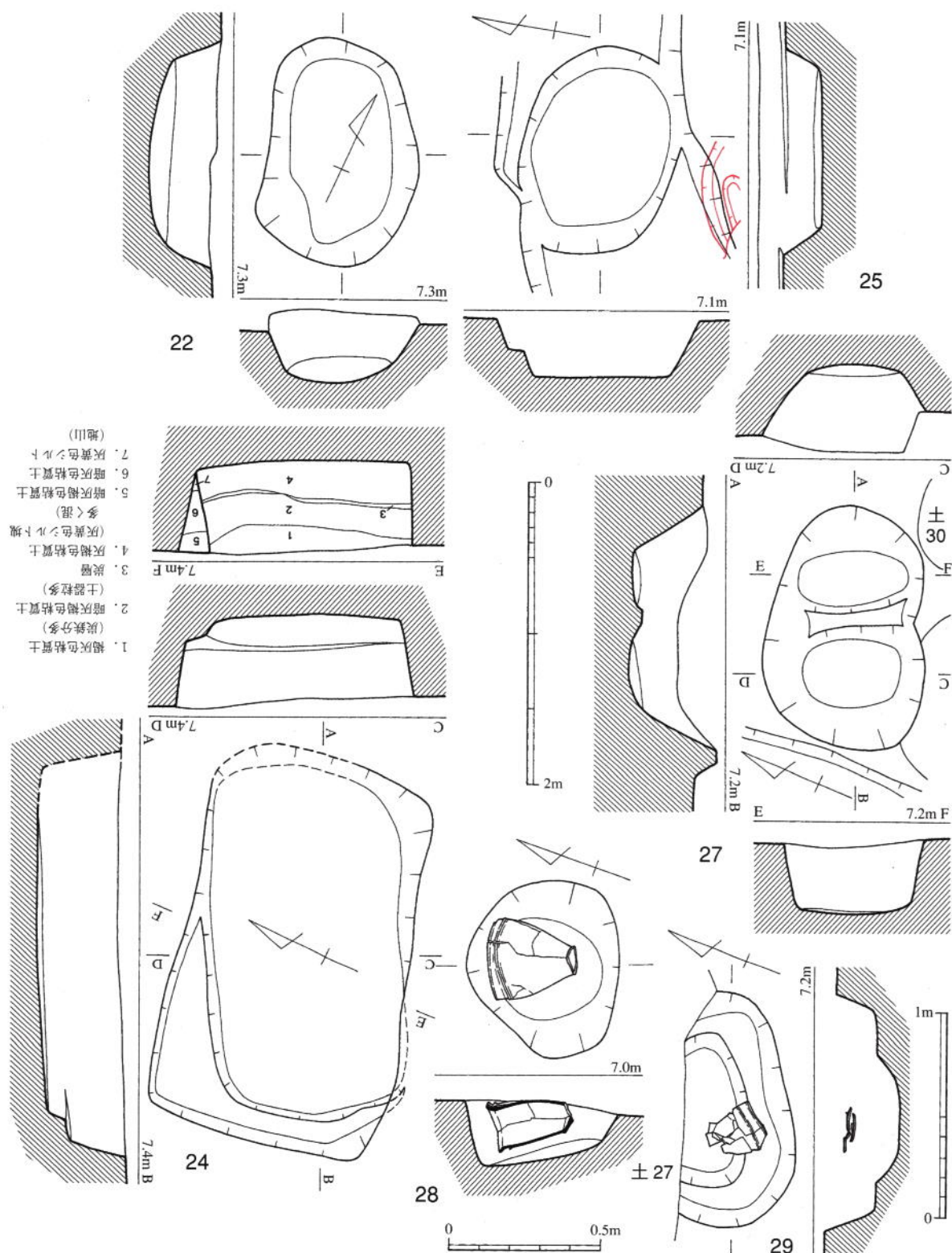
25号土坑（図版21、第37図）

C区、5号溝の下層で検出した土坑である。上面は5号溝による掘削を受けるが、平面形はほぼ確実で、主軸をほぼ東西にむけた楕円形を呈する。長さ1.35m、幅1.05mを測り、5号溝床面からの深さは、25cm程である。

出土土器（図版58、第38図8～10）8は口縁に刻目突帯を貼り付けた甕。口縁は直立し、摩滅のため外への突出も小さい。刻目は摩滅によりほとんど遺存しないため復元的に図示している。内外ナデ仕上げで、口縁内面に横方向の板ナデ痕が残る。黄灰褐色を呈すが、外面は煤のために暗褐色。9は如意状口縁の甕口縁部片。口縁部は緩やかに外反し、端部に密に刻目を施す。外面摩滅、内面ナデで指頭圧痕を残す。内面淡黄褐色、外面淡灰褐色を呈すが、いずれも煤、コゲのために褐変する。10は高杯杯部片。口縁部は強く外反させ、端近くで下方に垂下し、端部は面をなす。内外摩滅が進むが、外面にミガキ、縦ハケ、内面に横～斜めミガキが微かに残る。口縁下には断面三角形突帯を巡らす。脚との接合状態は不明であるが、境界の外周に低い断面三角形突帯を貼付し、頂部に刻目を施すようである。口縁端、口縁下の突帯は摩滅のため、刻目を施文したかどうかは不明。外面黄褐色、内面黄灰褐色。これらの土器はいずれも前期末に比定できよう。

26号土坑（第39図）

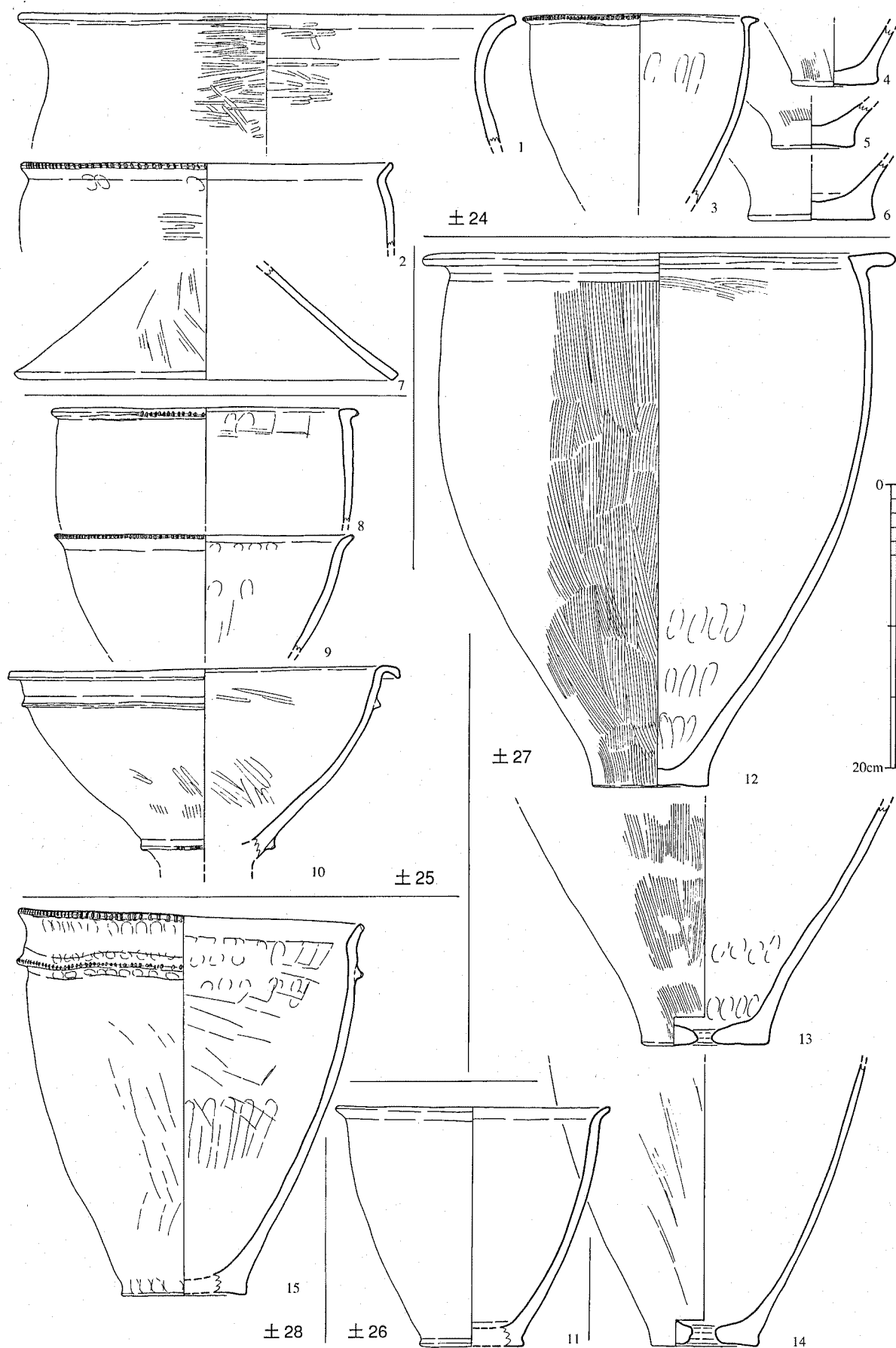
C区、44号土坑の上層で検出された。周辺は44号土坑を始め、遺構の切合いが激しく、平面形を正確に捉えたか不安を覚える。現状ではほぼ東西方向に主軸を向け、やや西側がすばまる楕円形を呈し、長さ1.8m、幅1.15mを測る。検出面からの深さは30cm弱で、床面は平らに掘り上げているが、下層の遺構覆土を若干掘りすぎた恐れがある。埋土中には炭が多く含まれ、床面には焼土が堆積し



第37図 22・24・25・27～29号土坑実測図 (土29は1/30、土28は1/20、他は1/40)

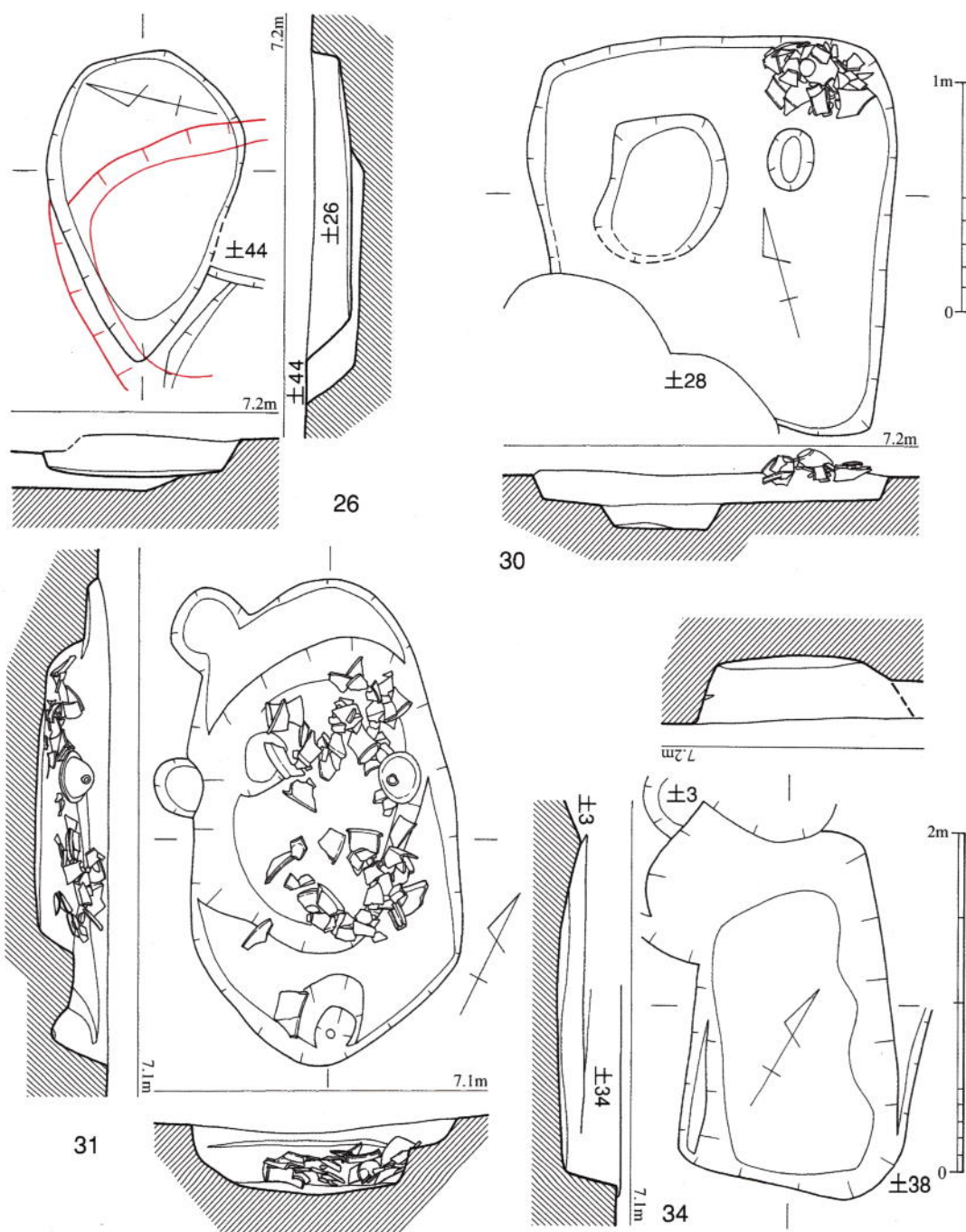
ていた。本土坑の上層から黒曜石製石鏃 (第4表2) が出土している。

出土土器 (第38図11) 26号土坑と44号土坑の上層の包含層から出土した如意状口縁甕。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げて刻目はない。底部は復元よりも小さい可能性もある。内外ナデ仕上げで淡褐灰色を呈するが、外面胴中央は煤が付着し、内面胴部はコゲで変色。



第38図 24~28号土坑出土土器実測図

(1 / 4 1 ~ 7 : ±24、8 ~ 10 : ±25、11 : ±26、12 ~ 14 : ±27、15 : ±28)

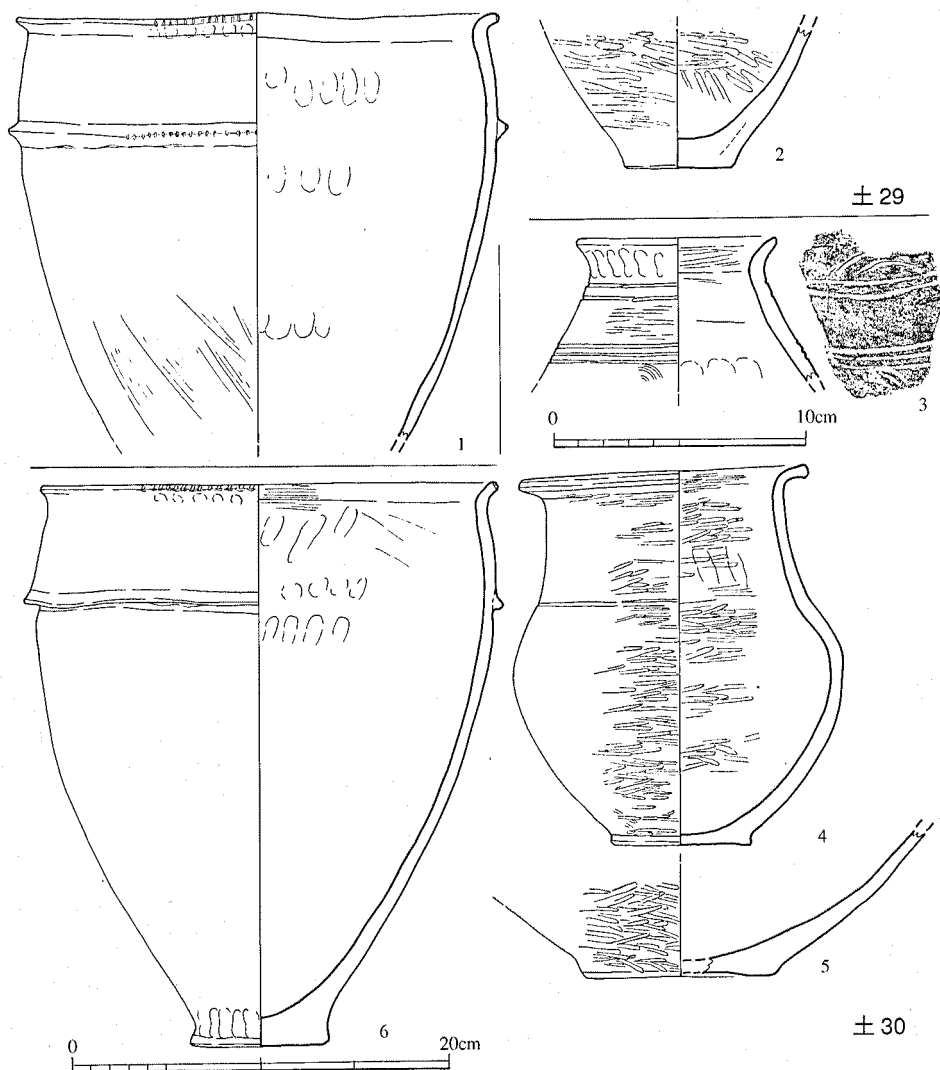


第39図 26・30・31・34号土坑実測図（土30・31は1/30、他は1/40）

27号土坑（図版20・22、第37図）

B区に所在する中期の土坑で、29号土坑を切っている。主軸をほぼ東西に向けた長さ1.6m、幅1.05mの楕円形平面を呈するが、床面は中央が高く、東西が低いピット状になるため、2基のピットの切合いと考えたほうが適当か。検出面からの深さは50cm程である。覆土は黒褐灰色粘質土。

出土土器（図版58、第38図12～14） 12はほぼ完形に復元できる鋤先口縁甕。口縁部はほぼ水平に伸び、内への突出は弱い。外面縦ハケ仕上げで、内面は摩滅するが、口縁直下にハケメが残り、底部近くは指頭圧痕の凹みが顕著である。外面淡黄褐色、内面灰褐色を呈し、外面は煤が付着する。13・14は甕底部で、焼成後穿孔により甑に転用する。13は外面縦ハケ、内面ナデで底部近くの指頭



第40図 29・30号土坑出土土器実測図（3は1／3、他は1／4
1・2：±29、3～6：±30）

圧痕が顕著である。淡黄褐色を呈し、外底部は焼成不良のため黒変する。14は外面板ナデ、内面ナデ仕上げ。灰黄褐色を呈すが、外面は煤のためか褐色になる。12は中期中頃と考えられる。

28号土坑（図版20、第37図）

B区に所在する隅丸の三角形に近い平面形の小形土坑で、検出面での輪郭は明瞭。長さ0.6m、幅0.5mを測り、深さ20cm余り。壁は斜めに立ち上がり、床面は北側に向けてやや低くなる。土坑中央から底部を意

図的に打ち欠いた甕が横倒しの状態で出土した。土器の他に打製石鏃（第4表42）が出土している。
出土土器（図版58、第38図15） 如意状口縁で、口縁端部、口縁下の突帯に刻目を施す甕。口縁は短く外傾し、外面には微かな指頭圧痕が巡る。突帯上下には接合を強めるための指頭圧痕が残る。刻目は口縁端、突帯上とも柔らかいうちに、先端の丸い工具により施される。胴部外面は板ナデ仕上げ。胴部内面は調整が良好に観察可能で、ナデ後板ナデにより仕上げる。淡黄褐色を呈し、外面突帯下には煤が付着し、内面下部には薄いコゲが带状に遺存する。前期後半と考えられる。

29号土坑（図版20・22、第37図）

B区に所在する。長軸を北東－南西方向に向けた楕円形平面に復元できるが、北側は27号土坑に切られている。現状で長さ1.15m、幅0.55mを測り、検出面からの深さは35cm前後である。覆土は暗灰黒色シルトで、弥生前期の甕胴部が押しつぶされたような状態で出土した。

出土土器（図版58、第40図1・2） 1は如意状口縁で胴部外面に刻目突帯を貼付する甕。口縁部は短く外反し、外面に微かな指頭圧痕が巡る。口縁端部、断面三角形の突帯頂部の刻目は摩滅が進み、かすかに残るのみ。外面下部板ナデ、上部ナデ、内面はナデ仕上げで、突帯に対応する位置に

は微かな指頭圧痕が残る。褐灰色を呈し、突帯より下の外面にはうっすら煤が付着する。2は壺胴下部破片。底部外周の括れは小さく、緩やかに胴部が立ち上がり、胴部の張りは大きくない。内外ミガキ仕上げと思われ、淡褐灰色。1の甕は前期後半に位置づけられる。

30号土坑（図版22、第39図）

B区に所在する。南北方向に主軸をむけたほぼ正方形の平面形を呈し、南北1.75m、東西1.65mに復元できる。深さは15cm程であるが、底部中央やや北寄りに2基の楕円形のピットがある。覆土は暗灰褐色粘質シルト。輪郭は明瞭であったものの、重複する28号土坑との切合いは、現地では十分な確認ができなかった。

出土土器（図版59、第40図3～6） 3～5は壺。3は小形の壺肩部～口縁部の破片で、口縁部は強く外反し、なだらかに肩部へと続く。口縁端部は摩滅するが、やや角張る。口縁下には2条の沈線、肩部には3条の沈線を巡らし、肩部沈線の下には重弧文を配置する。外面～口縁内面ミガキ、頸部内面板ナデ、胴部内面指頭圧痕の残るナデで、暗褐色。4は図上ではほぼ完形に復元される壺。口縁は強く外反させ、端部近くでは水平になり、端部はやや角張る。頸部から肩部へは滑らかに続き、境界を2条の細い沈線で区画する。底部は低いが円板状をなし明確である。外面～内面底部近くまでミガキ仕上げで、頸部内面には指頭圧痕がかすかに残る。灰黄褐色を呈すが、外面下部は煤が付着したためか暗褐色。5は大形壺底部。外面ミガキ、内面調整不明で、淡灰褐色。

6は如意状口縁をなし、胴部外面に突帯を貼付した甕で、ほぼ完形に復元される。口縁は短く外反し、端部に先端の丸い工具による小さな刻目が施され、外面には指頭圧痕がかすかに残る。胴部突帯は摩滅のため、刻目の有無は確認できない。口縁内面には横ハケが残り、胴部内面はナデで、上部には水平方向の指頭圧痕が巡る。外面は調整不明。淡黄灰褐色を呈すが、外面は煤のため暗褐灰色に変色し、胴下部にはコゲが付着。これらの土器は前期後半～末に位置づけられよう。

31号土坑（図版22、第39図）

B区に所在する。隣接する4号溝との切合関係は不明であったが、図示したように覆土下部から出土した土器は良好な一括遺物と判断される。主軸を北西－南東方向に向けた楕円形のプランを呈し、長さ2.15m、幅1.15mを測る。底部は中央が北西、南東端部より15cm程低くなり、検出面から底部までの深さは30cm内外。覆土は暗灰褐色粘質シルト。

出土土器（図版59、第41図） 1は無頸壺あるいは小形の広口壺胴部と推測されるが、胴部に高い断面三角形突帯を巡らす点でやや特異な器形。胴部外面縦ハケ、内面は指頭圧痕を残すナデ仕上げで、外面灰褐色、内面淡褐色を呈す。底部を焼成後穿孔し、甑に転用。

2・3は鋤先口縁甕。いずれも頸部がやや内傾し、口縁部は水平に外へと伸びる。外面縦ハケ、内面ナデで、2は外面淡灰褐色、内面淡黄褐色、3は白褐色を呈し、外面は使用のためか褐変。

4～8は外折した口縁の甕。4・6は斜めに口縁が伸び、端部を丸く仕上げる。特に4の端部は器壁が厚い。一方、5・7・8は頸部で強く屈曲して開き、端部では上面が水平に近くなる。端部は面をなす7と凹面をなす5・8に分かれる。外面縦ハケ、内面ナデを基本とするが、4は外面ナデ仕上げ、7は内外摩滅で調整不明。4・7内面・8は淡灰褐色、5内面・6は淡褐色、5外面は白褐色、7外面は淡黄褐色で、4外面は煤が付着し、5口縁上面は二次的に火を受け赤変する。

10～12は丹塗高杯杯部片。10は口縁が外折し、杯部が深い。摩滅のため調整は不明で、生地は灰白色～灰白褐色を呈す。11・12は鋤先口縁の杯部。11は歪みのためか口縁部上面は内傾する。杯部と脚部の接合のため脚上端に粘土を充填し、脚上部外周に頂部の摩滅した断面M字状突帯を貼付する。内外摩滅により調整不明で、生地は砂粒が少なく橙褐色を呈す。12は口縁部が水平に伸び、脚

上端には粘土を充填していない点が11と異なる。調整不明で、生地は淡橙褐色。

13～16はほぼ同形同大の鼓形器台でいずれもほぼ完形に復元される。14・15は口縁・裾端部を凹ませるか面をなして仕上げるが、13・16は上下にわずかにつまみ上げる。外面はいずれも縦ハケであるが、内面は13・15がナデで整形した後、口縁・裾近くに横ハケ、14は口縁近くをナデで仕上げる。16は筒部も縦ハケで仕上げた後、口縁・裾近くに横ハケを施す。13は淡黄褐色、14は褐白色～白褐色、15は淡灰褐色、16は淡褐色を呈す。

以上の土器が中期後半でも新しい時期の一括品として捉えられるのに対して、17・18は前期に遡り、周辺遺構からの混入品であろう。17は小形の如意形口縁甕。口縁部は短く外反し、柔らかい内に丸い工具で太い刻目を施す。内外ナデ仕上げで、胴部内面にはナデ上げの痕跡が明瞭に残り、外面には接合痕が観察される。黄灰褐色を呈すが、外面は煤が付着。18は甕の底部として図示したが、あるいは蓋か。内外ナデ仕上げで、外面橙褐色、内面灰褐色。

34号土坑（図版23、第39図）

C区に所在し、3号土坑に切られ、38号土坑を切っている。現状では長軸を北西－南東方向に向けた略長方形を呈するが、北西部が広くなり、時期の異なる2基の土坑を一連のものとして掘り上げた可能性が高い。現状では長さ2.3m、最大幅1.3mで、検出面からの深さ35cmを測る。覆土上部は暗黒灰色粘土、下部は灰褐色粘質土であった。

出土土器（図版59、第43図1～3） 1は壺口縁～頸部。頸部から緩やかに口縁が外反し、端部はやや角張り気味である。内外摩滅進むが横ミガキを施す。明褐色。2は外折した口縁の甕で、口縁部は直線的に伸び、端部は丸い。外面縦ハケ、内面ナデで頸部内面にはかすかな指頭圧痕が巡る。淡褐色であるが、外面には煤、内面にはコゲが付着。3は蓋頂部か。頂部は凹み、ナデ仕上げで、淡橙褐色を呈す。1は中期初頭、2は中期後半でも新しい頃と隔たりがあり、時期の決定が難しい。

35号土坑（図版23、第42図）

B区に所在する。輪郭は明瞭で、長軸を北東－南西方向に向けた楕円形を呈し、長さ1.0m、幅0.85mを測る。底部は検出面から25cm余りで平坦であるが、北東側床面は2基のピットが切合うかのように深くなり、最深部は検出面からの深さ45cmを測る。暗灰褐色粘質土を覆土の主体とし、上部から弥生前期の壺が一括で出土した。

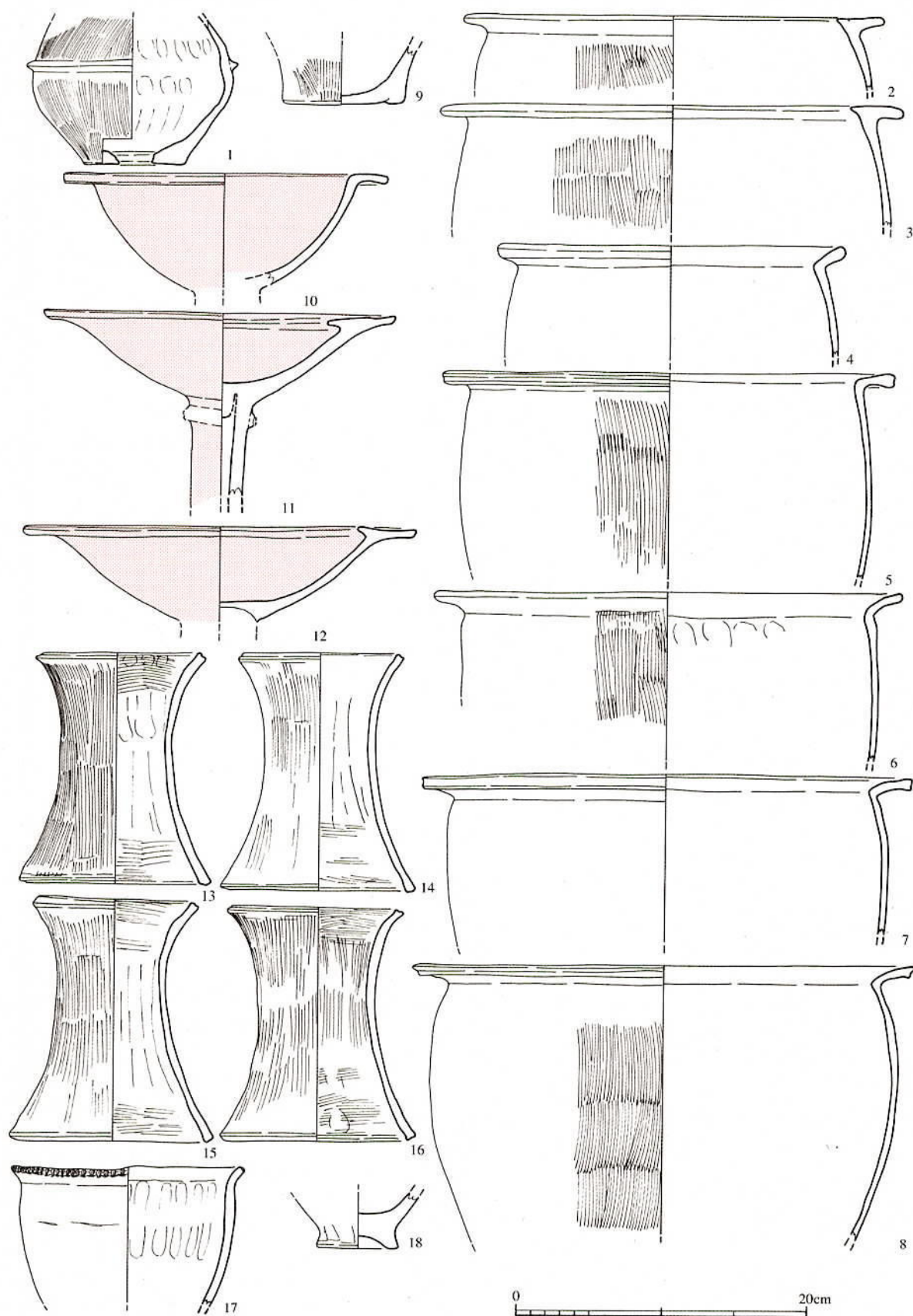
出土土器（第43図4～5） 4は淡褐色を呈す壺胴部～口縁部片。頸部は強く括れ、口縁部は緩やかに外反する。端部は角張り、口縁下面には指頭圧痕が残る。肩部は2条の沈線を巡らす。内外摩滅するが、胴下部外面にミガキ、頸部内面にナデ上げの痕跡が確認できる。5は甕底部か。底外周の括れが明瞭で、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。黄灰褐色～黄褐色で、内面にはコゲが付着する。6は径が大きく壺底部となるか。胴部外面縦ハケ、底部外面粗い板ナデ、内面ナデで仕上げ、灰黄褐色。

36号土坑（第42図）

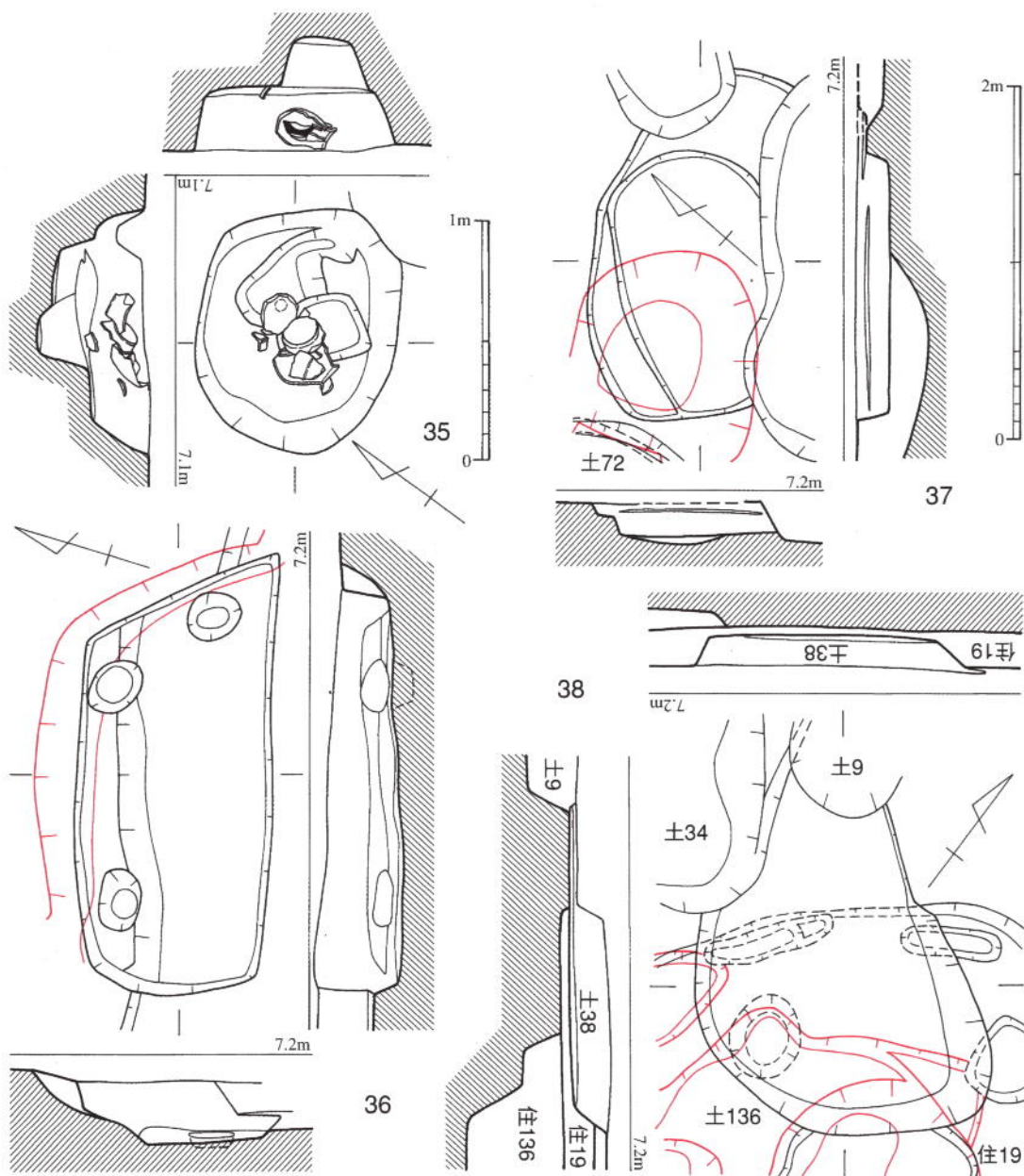
C区に所在し、4号溝の北岸とほぼ重複しているため、平面形はやや不安である。現状では主軸をほぼ東西に向けた長さ2.4m、幅1.1mの歪な四辺形を呈する。床面は凹凸が顕著で、北及び東の壁沿いに3基の小ピットが掘り込まれていた。検出面からの深さ35cm程で、覆土は暗灰褐色粘土。図示できる土器はないが、砥石（第167図107）が出土。

37号土坑（図版23、第42図）

C区に所在し、16・18号竪穴住居跡の南側を壊して掘り込まれたと判断したが、周辺は遺構の切合



第41图 31号土坑出土土器实测图 (1 / 4)

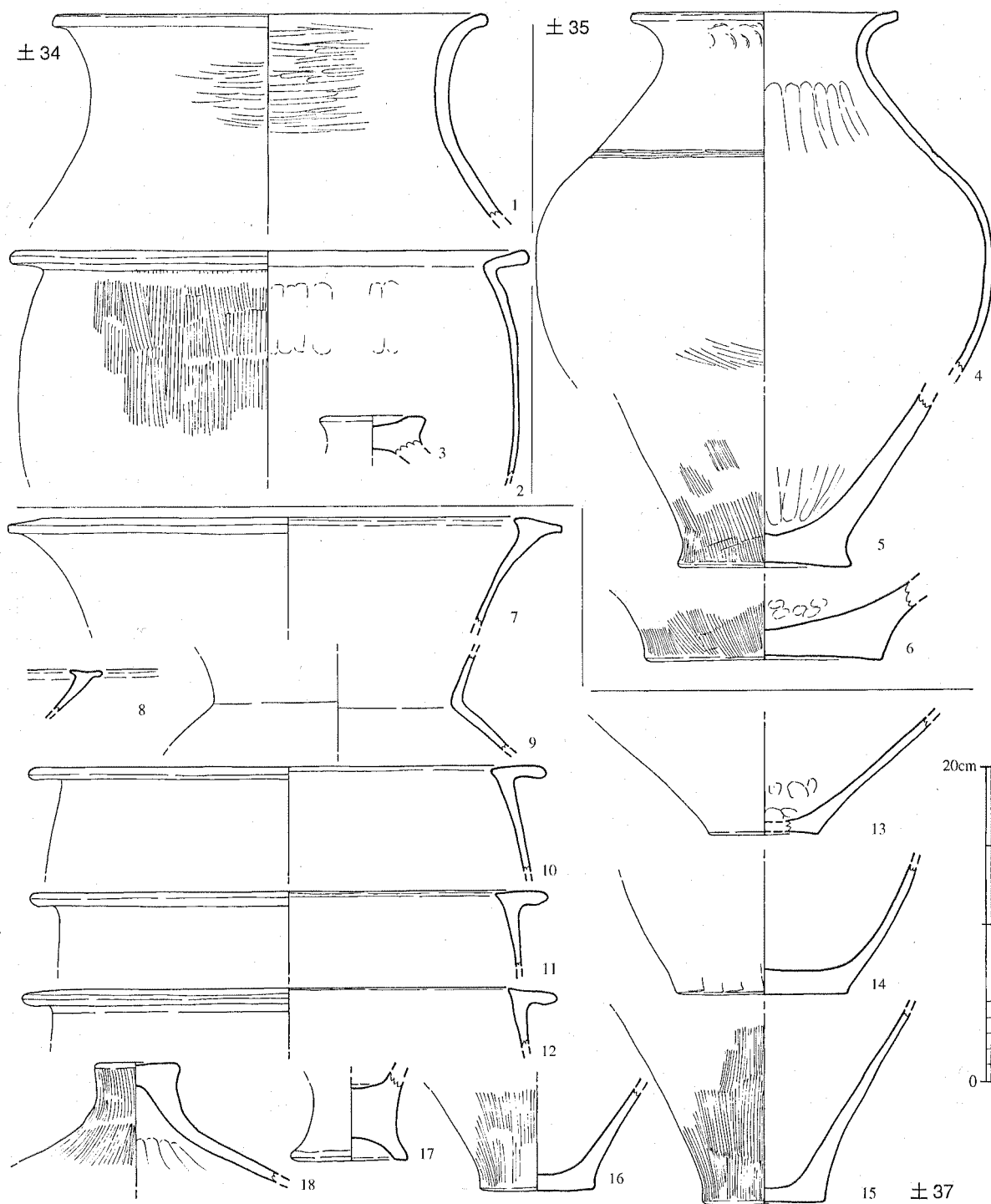


第42図 35～38号土坑実測図（±35は1/30、他は1/40）

いが複雑であり、平面形は不安を覚える。主軸を北東－南西方向に向けた楕円形の平面形に復元できるが、南側を新しい遺構に壊され全容は不明である。現状で長さ1.95m、幅0.9mを測る。検出面からの深さ20cm弱で、中央が1段深くなる。覆土は褐灰色粘質土。土器の他に敲石（第171図140）が出土。出土土器（図版59・60、第43図7～18） 7は鋤先口縁広口壺口縁部。口縁上面は外傾し、内への突出が強い。8は剥離のため傾き、断面形は不安であるが、広口壺口縁として図示した。9は広口壺の肩部。いずれも摩滅のため調整不明で、7は灰白褐色～褐白色、8・9は淡褐色を呈す。

10～12は鋤先口縁甕。いずれも口縁部片で、内外摩滅のため調整は不明。10は口縁が大きく外に伸びるのに対し、11・12は短く、口縁の器壁が厚い。10・11は白褐色～灰白褐色、12は淡黄褐色。

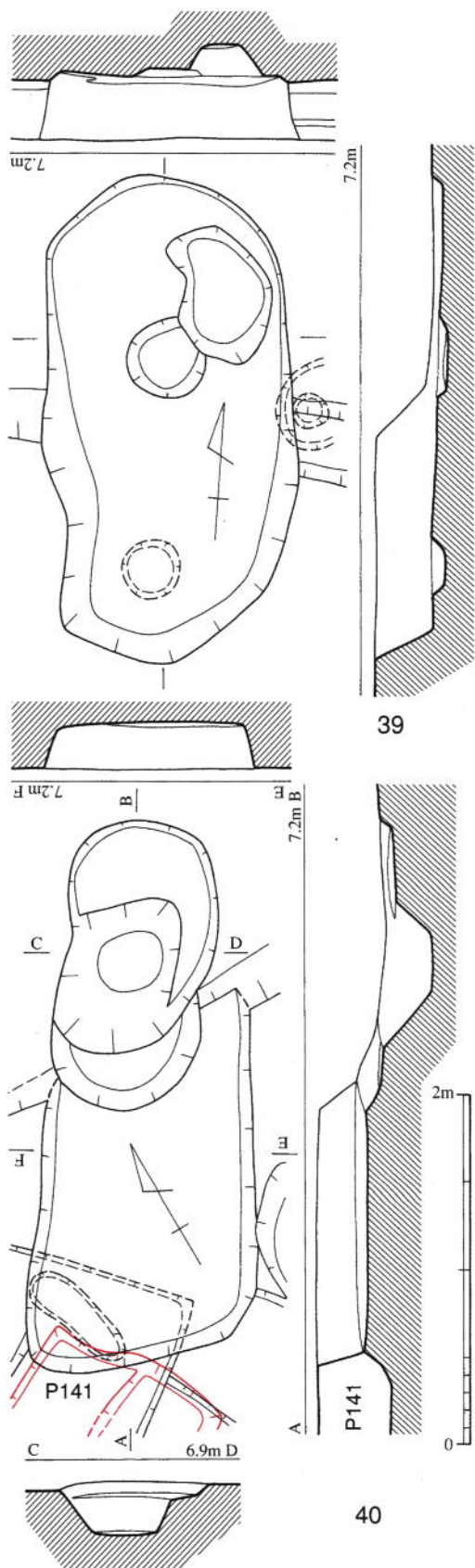
13～17は底部片。13は壺底部で、やや上げ底となる。内外の調整は不明で、灰褐色～灰黄褐色。14は底径の大きな壺底部か。内外ナデで、内面淡灰褐色、外面黄白褐色。15・16は甕底部で、外面縦ハケ、内面調整不明であるが、16内面にはかすかに指頭圧痕が残る。15は淡黄褐色を呈し、外面



第43図 34・35・37号土坑出土土器実測図（1／4 1～3：±34、4～6：±35、7～18：±37）

に煤、底部内面にのみコゲが付着する。16は淡黄灰褐色。17は上層包含層から出土したもので、本土坑に伴うか不安である。上げ底の厚い底部で、内底部に明瞭な平坦面をなすことが特徴的である。灰黄褐色を呈す。

18は蓋頂部近くの破片。外面縦ハケ、内面ナデで仕上げ、外面淡灰褐色、内面淡褐色。これらの土器は17を除けば中期後半でも古い時期と考えられる。



第44図 39・40号土坑実測図 (1/40)

38号土坑 (図版23、第42図)

C区、5号溝の下層で検出され、9・34号土坑に切られると判断した。また、下層には19号竪穴住居跡が位置している。以上のように遺構の重複が顕著であり、掘り間違いや周辺遺構に本来帰属する遺物が混入した恐れがある。

現状では主軸を北西-南東方向に向けた平面楕円形に復元できるが、北西側は9・34号土坑により失われている。現状では長さ2.1m、幅1.6mを測り、検出面からの深さ20cm程である。床面は平らに掘り上げているが、下層に19号竪穴住居跡が位置するため、正確に形態を捉えたとは言い難い。覆土は暗褐色粘質土。

出土土器 (第45図1) 図示できるのは甕底部片1点のみである。外面は縦ハケ、内面はナデで調整し、底部外周が突出する。黄灰褐色～灰黄褐色。

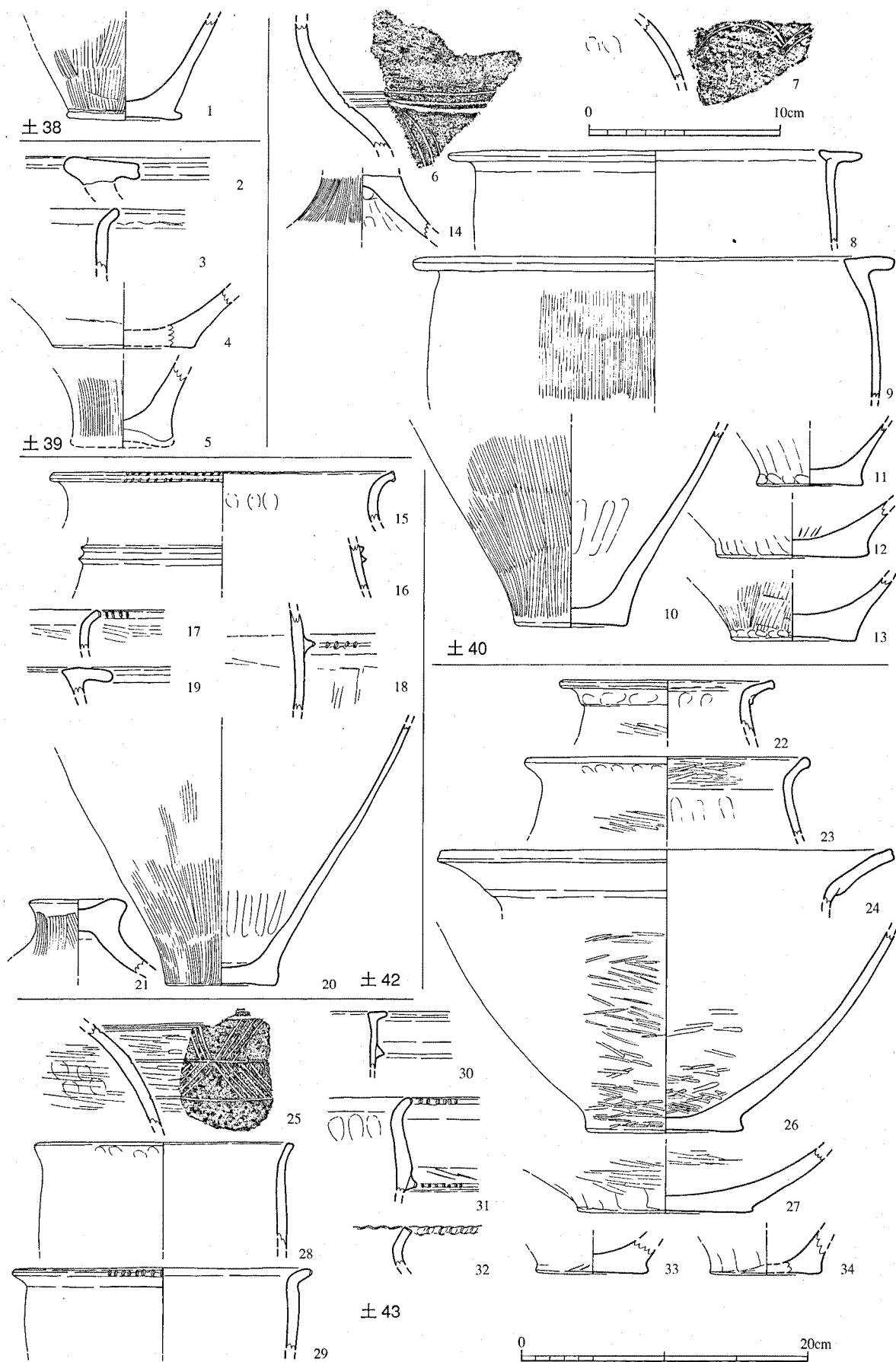
39号土坑 (図版24、第44図)

C区、40号土坑の東南に所在する。4号溝に切られているが、遺構の輪郭は比較的明瞭であった。主軸をほぼ南北に向けた楕円形を呈し、長さ2.8m、幅1.45mを測る。北側は4号溝に切れ、壁はほとんど残らないが、南は検出面からの深さ30cm程で、覆土は褐灰色粘質土ある。床面では3基のピットが検出された。

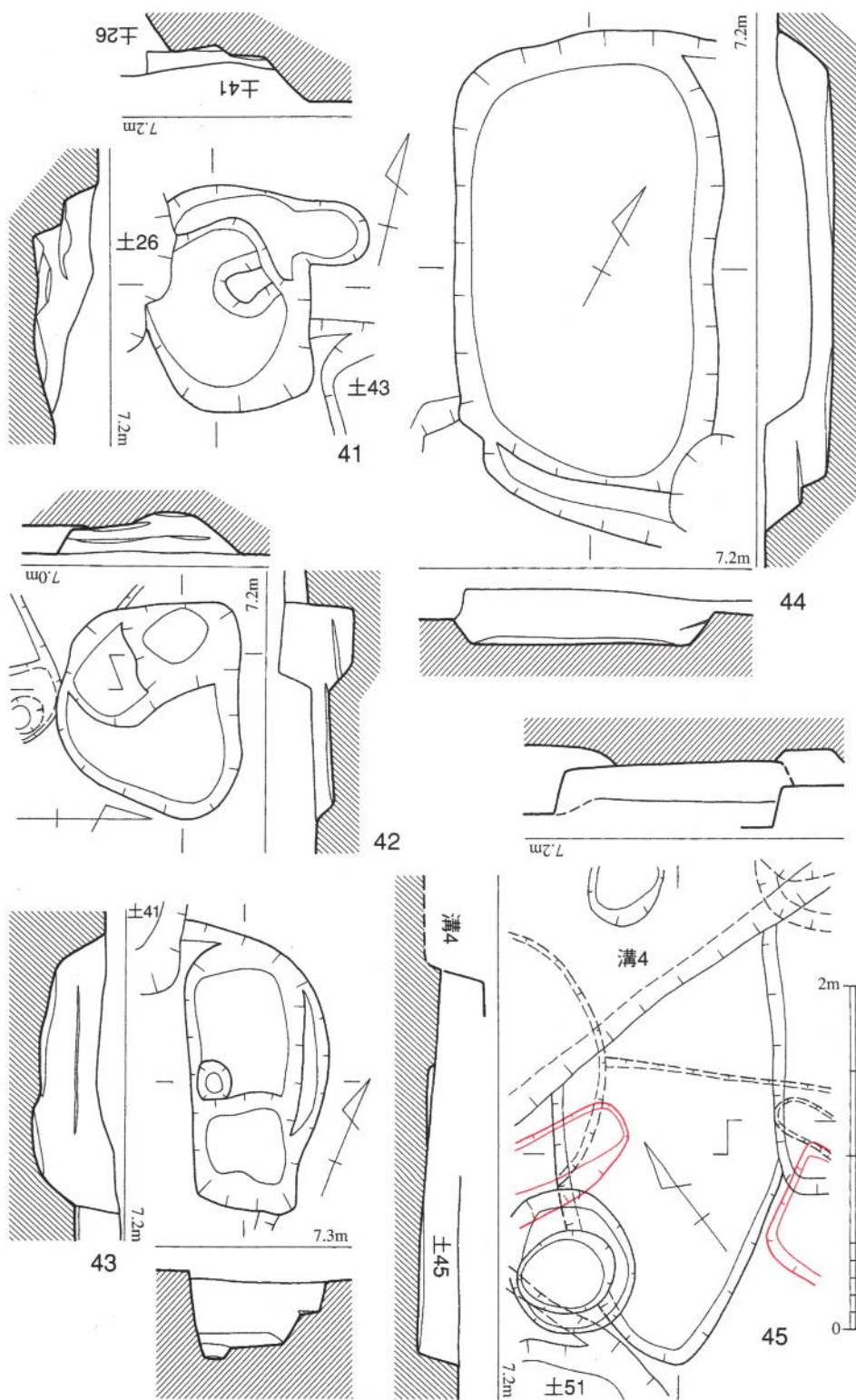
出土土器 (図版24、第45図2～4) 図示できるのはいずれも小片のみ。2は鋤先口縁の大形甕口縁部。淡黄褐色を呈す。3は如意状の甕口縁部。内外に雑なナデを施し、口縁外面にはナデにより生じた皺が残る。暗褐色。4は壺底部片で、内面ナデ、外面板状工具の痕跡をとどめる。褐白色を呈すが、内面は焼成不良で黒変。5は厚い甕の底部と思われるが、底の粘土が剥離している。外面縦ハケ、内面ナデを施す。明褐色であるが、内面はコゲが付着する。これらの土器は時期幅が大きく、土坑の時期を決定する資料とするのは難しい。

40号土坑 (図版24、第44図)

C区に位置する。4号溝に切れ、16・18号竪穴住居跡を切っていると判断したが、上部は褐灰色粘質土で周辺の遺構と区別しがたく、輪郭を誤った恐れがある。現状では南側床面が高く、北側



第45図 38~40・42・43号土坑出土土器実測図（6・7は1/3、他は1/4 1：±38、2～5：±39、6～14：±40、15～21：±42、22～34：±43）



第46図 41～45号土坑実測図 (1/40)

8・9は鋤先口縁甕の胴上部破片。いずれも口縁上面は水平で、8は強く内側に突出させ、口縁下部に接合痕を残す。8は内外調整不明で淡黄白褐色～白褐色。9は外面縦ハケ、内面摩滅で、淡褐色～淡灰褐色。

が低くなるが、北側の部分のみを土坑と捉えるべきであったか。長さ3.1m、南側で幅1.2mを測るが、北側は主軸を北東-南東方向に向けた長さ1.7m、幅0.8mの楕円形。北側楕円形部分では中央がピット状に深くなり、黒褐色粘質土を覆土としていた。

出土土器 (図版60、第45図6～13) 6・7は前期壺の肩部破片。3条の水平方向沈線で胴部と頸部を区画するが、最下段の沈線はかすかな段に重なる。区画沈線の下には3条からなる沈線重弧文の断片が残る。外面摩滅、内面ナデ仕上げで、灰褐色。7は2条の沈線からなる重弧文が残る。内外摩滅するが内面には指頭圧痕が残る。淡褐色。

10～13は底部片。10は外面縦ハケ、内面ナデで、外面灰黄褐色、内面淡褐色。内底にはコゲが付着し、外面は二次的に火を受ける。11は外面板ナデ、内面ナデ仕上げで、外面淡灰褐色、内面淡黄褐色。12・13は壺底部片。12は内外ナデで、内面には板状工具の痕跡が残る。淡褐色～淡褐灰色。13は外面縦ハケ、内面摩滅し、底部外周には指頭圧痕が残る。外面黄灰褐色、内面黄白褐色。

41号土坑（図版24、第46図）

C区に所在する土坑で、輪郭は比較的明瞭であり、26号土坑に切られる。長軸をほぼ南北に向けた長さ1.3m、幅0.95mの楕円形に復元できるが、北東部は重複するピットによりやや広がり、北側には幅15～20cm程のテラスがつく。検出面からの深さ30cm程で、壁の傾斜は緩やかである。暗褐灰色粘質土を覆土とする。平面形は確実か。図示できる出土遺物はない。

42号土坑（第46図）

C区に所在しているが、形態から考えていくつかのピットが切合うのを間違えて掘り上げた恐れがある。現状では長軸を東西に向けた長さ1.25m、幅1.05mの隅丸四辺形を呈している。床面は東が深く、検出面からの深さは40cm余りである。覆土は暗褐灰色粘質土。なお、周辺の上部の包含層を42号土坑上層として取り上げたが、時期の異なる土器が混在している。

出土土器（図版60、第45図15～20） 16・18・19は土坑上層出土。15・17は如意状の甕口縁部小片。15は径及び傾きは不安であるが、口縁を外反させ、端部上下に刻目を施すことが特徴的。内外横ナデで、褐色を呈し、外面は煤のため暗褐色。17は短く口縁を外反させ、端部に刻目。内外板ナデの可能性ある。褐灰色。16は中期後半の甕胴部片か。2条の断面三角突帯を貼付するが、天地・径は不安。内外摩滅し、淡褐色。19は鋤先口縁小片で、淡褐色。18は前期後半～末の甕突帯部。断面三角形突帯の頂部に柔かい段階に刻目を施す。内外板ナデと考えられ、外面暗褐色、内面黄褐色。20・21は42号土坑と46号土坑の間の包含層から出土。20は中期後半の甕胴下部片で、外面縦ハケ、内面指ナデ痕。内底部に煤が付着し、淡黄褐色。21は蓋頂部片。内面ナデで、黄褐色。

43号土坑（図版24、第46図）

C区に所在する。遺構の輪郭はほぼ確実で、長軸をほぼ南北に向けた隅丸長方形を呈し、長さ1.6m、幅0.8mを測る。東壁に幅の狭いテラスがあり、床面は南側が深く、検出面からの深さ50cm程である。灰褐色粘質土を覆土とし、上部に炭が堆積していた。

出土土器（図版60、第45図22～34） 22～24は壺口縁部。22は小形で、口縁外面が段をなして頸部と区分される。口縁は強く屈曲して外反し、丸く肥厚させた端部に至る。内外にミガキがわずかに残るが、口縁部内外は指頭圧痕が明瞭。褐色。23は中形で、口縁は直線的に外傾し、端部は丸く仕上げる。内外にミガキが残るが、頸部内面、口縁外面は微かな指頭圧痕も観察される。24は大形で径及び傾きは不安。口縁外面は明瞭な段により頸部と区分され、緩やかに外反しながら角張った端部に至る。内外横ナデ仕上げで、淡褐灰色～淡灰褐色。

25は壺肩部小片。頸部と胴部を2条以上の沈線で区画し、胴部最大径付近の沈線とその間の沈線により、肩部に上下2段の文様帯を区画する。上段には3～4条、下段は7条ほどの斜行沈線に鋸歯文風の文様を充填する。器表の残りが良好で、外面ミガキ後沈線による施文、内面指頭圧痕後ミガキと確認できる。褐黄色。

26・27は壺胴下部～底部片。26は底部外周の括れが明瞭である。内外摩滅が進行しているが、細いミガキが残る。淡褐色～淡黄褐色。27は底部外周の括れが小さく、内外に微かにミガキが残る。淡灰黄褐色を基調とするが、焼成不良のため暗褐色の部分も多い。

28～31は甕口縁部小片。28はわずかに如意状に口縁を外反させ、端部に刻目は施されない。内外ナデ仕上げで、外面に煤、内面にコゲが付着。橙褐色であるが、二次的に火を受け所々、赤変する。29は如意状口縁の甕で端部に刻目を施す。口縁は短いながらも強く外反し、端部は鋭い工具により刻目を施す。内外ナデ。灰黄褐色を基調とするが、焼成不良及び二次的に火を受けたため黒、赤に変色した部分もある。30は口縁に粘土を貼り付け内外に突出させ、胴上部外面に三角形突帯を貼付したもの。摩滅のため調整及び口縁端部・突帯上の刻目の有無は確認できない。淡褐色。31は如意状口縁で胴部外面に刻目突帯を貼付したもの。傾きは不安であるが、突帯は下向きに貼付されているようである。摩滅のため刻目は復元的に図示しているが、全体はナデ仕上げで、突帯上面には板状工具の痕跡が残る。外面褐黄色、内面暗褐色。32は如意状口縁の甕であるが、口縁端面が外傾し、そこに柔らかい段階で先端の丸い工具により刻目を施す。摩滅のため調整不明。褐灰色を呈すが、内面はコゲのためか暗褐色。33・34は甕底部で、いずれも内外ナデ仕上げ。ともに黄褐色を基調とするが、内面は使用のためか暗褐色。

これらの土器は30がやや新しい様相を示すが、他はいずれも前期後半であり、小片ながらも良好な一括遺物を形成している。

44号土坑（第46図）

C区に所在する。輪郭は明瞭で、長方形のしっかりした土坑。主軸を北西－南東方向に向けた隅丸長方形を呈し、長さ2.65m、幅1.55mを測る。床面はほぼ平らで、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は褐灰色粘質土が主体で、灰黄色シルト地山ブロックを極めて多く含んでいた。

出土土器（図版60、第48図1・2） 1は鋤先口縁広口壺の口縁部片。口縁部は水平に伸び、頸部内面に断面三角形突帯を貼付する。内外摩滅のため調整不明で、外面淡灰褐色、内面淡黄褐色。2は完形の鼓形器台。口縁・裾端部はいずれもわずかに角張る。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、明褐色～淡褐色を呈す。

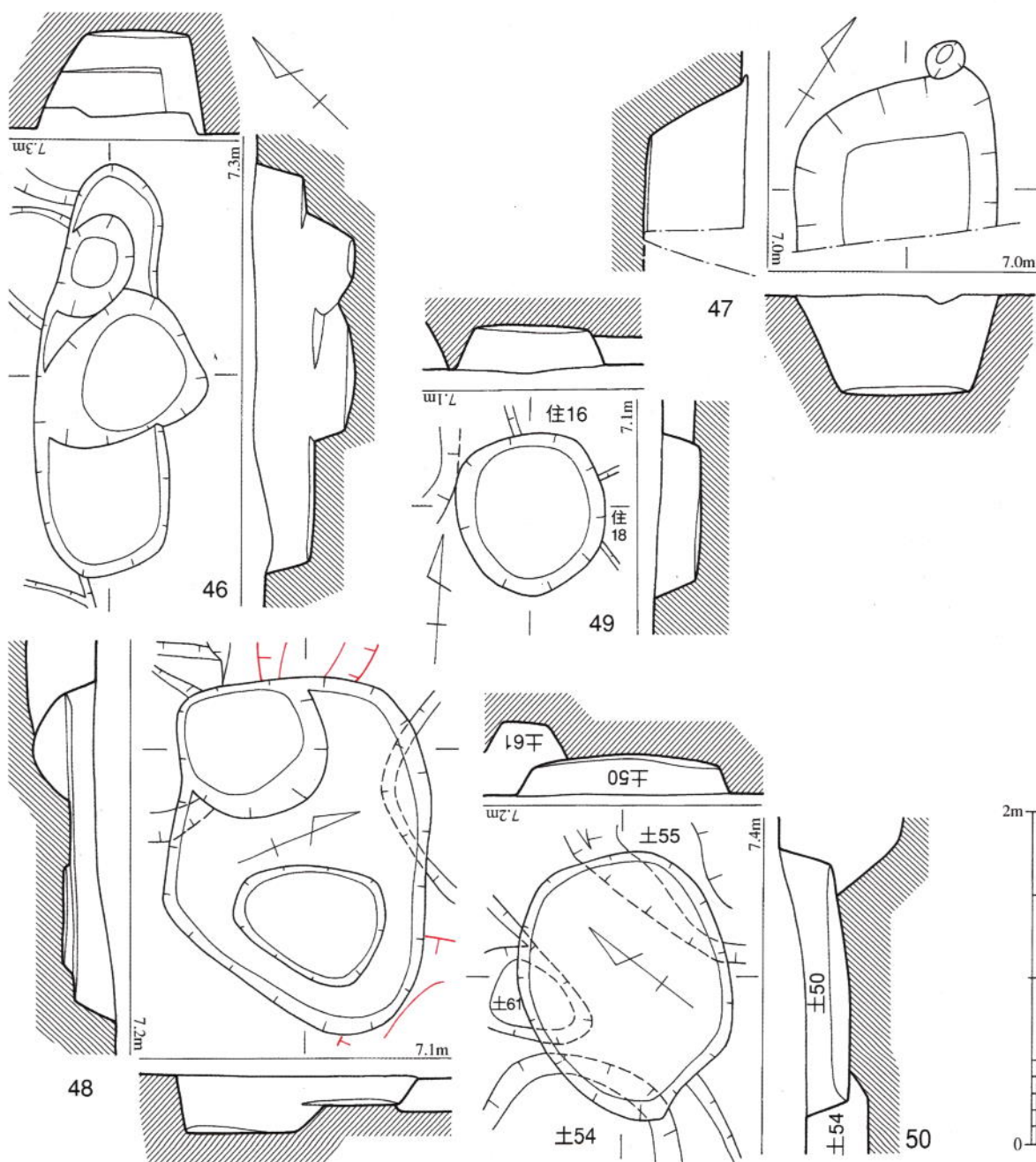
45号土坑（第46図）

C区、40号土坑の北に所在する。4号溝及びピット等多数の遺構に切られ、形態は不安で、出土遺物の一括性も疑わしい。長軸を北東－南西に向けた楕円形の平面と考えたが、北東側が4号溝等に切られ、全容は不明である。現状で長さ2.5m、幅1.3mを測る。検出面からの深さ25cm程で、床面は平らであるが、確実に検出したとは言えない。

出土土器（図版60、第48図3～7） 3は壺底部で、底部から直線的に胴部が立ち上がる。外面摩滅、内面ナデ仕上げ。1～3mm大の砂粒をわずかに含むのみで胎土は精選されており、淡褐色。4は甕の鋤先口縁部。口縁上面はわずかに内傾し、内への突出も明瞭。内外摩滅し、淡褐色を呈す。5は胴部が強く張り、頸部の括れの強い大形甕。口縁部は内へ大きく突出し、上面がわずかに外傾した鋤先口縁。口縁直下に1条、胴部最大径付近に2条の頂部の丸くなった断面三角形突帯を貼付する。内外ナデ仕上げで、胴部外面にわずかにハケメが残る。暗灰褐色。6は甕底部。外面縦ハケ、内面ナデで、コゲのため高さ5cm程まで内面が黒変する。7はほぼ完形の鼓形器台。口縁部は角張り、裾端部は丸みを帯びる。外面縦ハケ、内面は口縁部ナデ、中間部ナデ上げ、裾部横ハケで、褐灰色。

46号土坑（図版25、第47図）

D区に所在する。主軸を北東－南西に向ける長楕円形の土坑と考えたが、中央が東に突出しており、底部中央北東寄りが2基のピット状に凹んでいるため、複数の遺構を1基の土坑とした恐れがある。長さ2.45m、幅1.05mを測り、最下部は検出面から深さ60cm程である。出土土器は少なく、



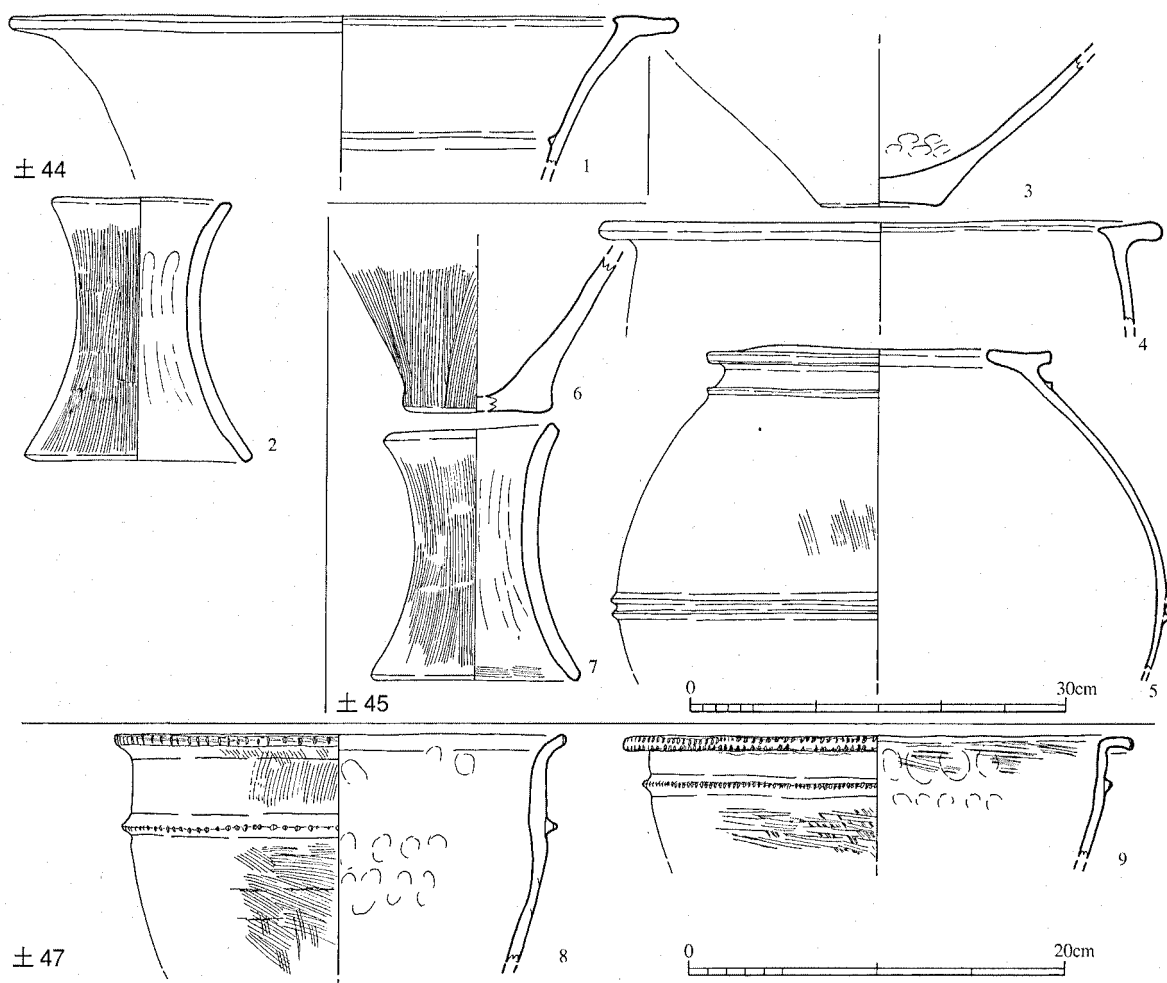
第47図 46～50号土坑実測図（1／40）

図示できる遺物はない。

47号土坑（第47図）

8号竪穴住居跡の下層、調査区南壁際に位置し、調査区外へと広がっている。形態は明瞭であり、出土遺物の一括性も確実かと思われる。主軸を北西―北東に向けた方形ないしは長方形に復元され、現状で幅1.2m、長さ0.95mを測る。8号住居跡の床面からの深さは60cmを測り、暗青灰色粘土と炭が互層をなして堆積していた。

出土土器（図版60、第48図8・9） 8は如意状口縁で、胴部外面に刻目突帯を貼付する甕。口縁部は緩やかに外反し、端部は工具によるナデで面をなし、先端の尖った工具による浅い刻目を施す。



第48図 44・45・47号土坑出土土器実測図（5は1／6、他は1／4 1・2：土44、3～7：土45、8・9：土47）

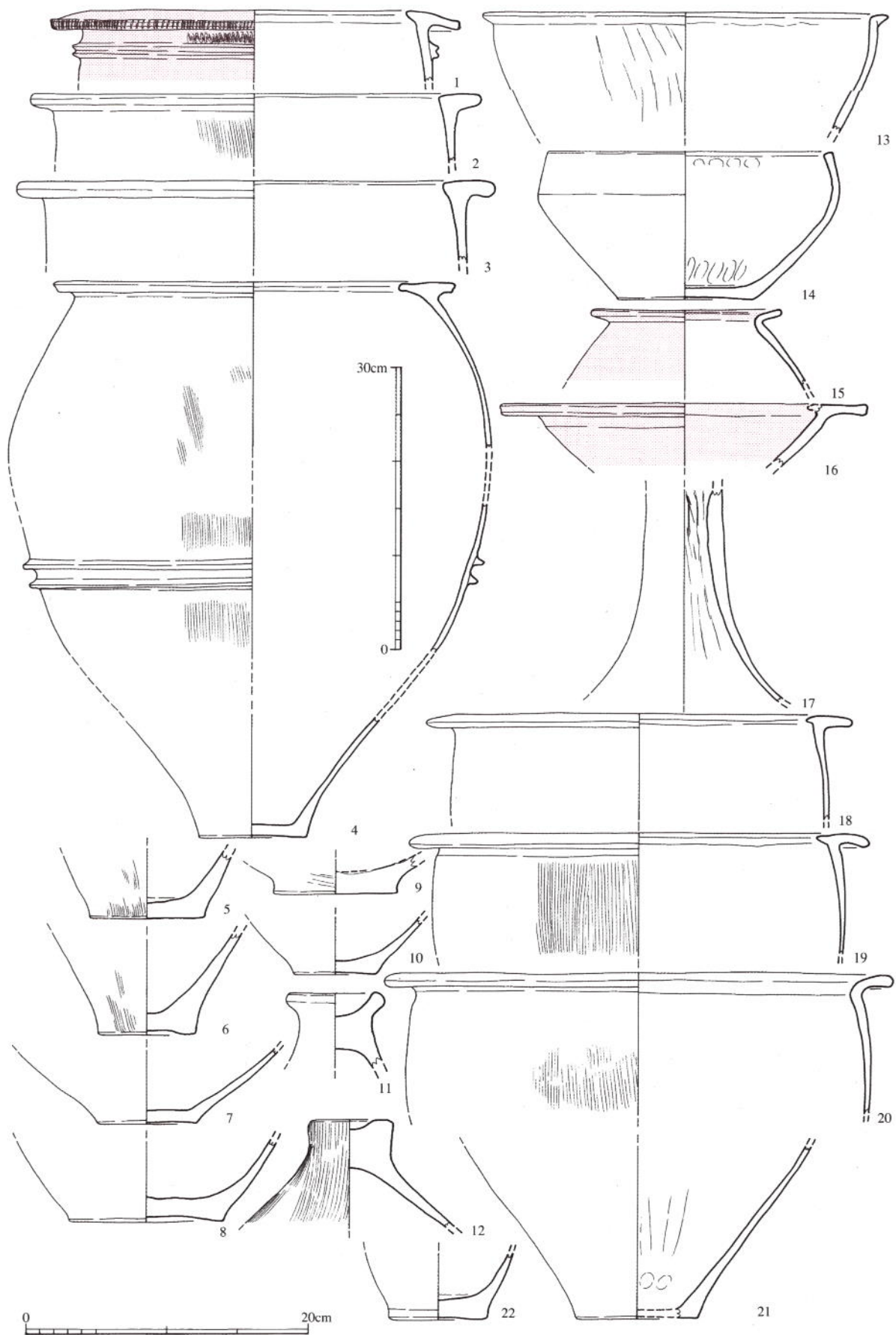
刻目突帯は断面三角形で、上下に丁寧なナデを施す。頂部には先端の鋭利な工具による深い刻目を施す。外面縦ハケで、突帯下には粘土紐接合痕を残す。内面はナデで、突帯、口縁部付近には指頭圧痕が残る。黄褐色を呈すが、外面は煤による黒変が顕著。9は口縁が外折し、胴上部に断面三角形の刻目突帯を貼付したもので、鉢か。口縁上面は水平に近く、端部は角張り、その上下2方向から刻目を施す。口縁下には指頭圧痕が顕著に残る。外面は板ナデ後ミガキ、内面は口縁部板ナデ、胴部ナデ仕上げで、先行する指頭圧痕もかすかに残る。これらの土器は前期末に相当するか。

48号土坑（図版25、第47図）

C・D区に位置する。長軸をほぼ東西方向に向けた歪んだ楕円形と考えたが、周辺の遺構の切合いが複雑なため形態は不安である。現状では長さ2.15m、幅1.55mを測る。床面では2基の大きなピット状の凹みがあり、複数の遺構が切合っていたか、南西部のピット状凹みが深く、検出面から40cm程である。

出土土器（図版60、第49図） 48・50号土坑の上層から出土した土器（15～22）もここで報告することにした。

1～3は鋤先口縁甕。1は外面丹塗。口縁部は上面が外傾し、内へ強く突出させ、外端が角張った面をなす。端部には先端の鋭利な工具により密な刻目を施す。口縁直下の外面には断面M字状突



第49図 48号土坑出土土器実測図（4は1／6、他は1／4）

帯を貼付。突帯と口縁部の間はミガキによるピッチの小さい波状文を充填。内面ナデで、外面は摩滅。生地は淡橙褐色。2・3は口縁部上面が水平で、内への突出が弱い。2は外面ハケメ、内面ナデで、外面淡褐色、内面橙褐色。外面には煤付着。3は内外摩滅で、外面淡灰褐色、内面橙褐色。

4は鋤先口縁の大形甕。破片は48・50・55号土坑から出土しており、口縁部、胴部、底部に分かれるが、図上で復元して図示した。口縁部は内外に強く突出し、上面は水平で、内端部は丸みを帯び、外端部は凹面をなす。頸部は括れ、胴部は丸味を帯びる。胴下部に高い断面台形突帯を2条貼付。内外摩滅が進むが、外面には縦ハケが残る。

5～10は底部片、5・6は甕、7～10は壺である。5・6は外面ハケ、内面ナデ仕上げ。5は外面淡褐色、内面淡黄褐色。外面煤、二次加熱で赤片、黒変する。6は褐白色を呈すが、内面はコゲのため黒変。7～10は内面ナデで、摩滅する7以外は外面ナデ仕上げ。9は外面に板ナデと思われる横方向の条痕が残る。いずれも淡黄褐色～淡黄白褐色で、10内面は二次的に火を受けて剥離。

11・12はいずれも頂部が凹む蓋。11は内外摩滅で、白灰褐色。12は外面縦ハケ、内面ナデで褐色。13・14は鉢。13は口縁部に粘土を貼付し、断面三角形。外面板ナデ、内面ナデ。外面橙褐色、内面淡黄灰褐色で、外面は煤付着。14は口縁部が内傾し、端部が角張り、底部径が大きい特徴的な器形。内外摩滅するが、口縁内面及び底部近くに指頭圧痕が残る。外面白褐色、内面淡褐色。

15は丹塗無頸壺で、口縁部は「く」の字に外傾し、端部はやや角張る。内外摩滅するが、口縁上面にはハケメ風条痕。16は丹塗高杯杯部片である。口縁は鋤先状であるが、内への拡張部を欠損。内外摩滅のため調整不明で、生地は褐灰色。7は高杯杯部片で、外面摩滅、内面絞り痕を残す。裾部の器壁は比較的薄く、生地は精良で橙褐色を呈することから丹塗した可能性が高いが、摩滅のため確認できない。18・19は鋤先口縁甕で、いずれも口縁上面がわずかに外傾し、内への突出が強い。19外面に縦ハケが残る以外は、器表は摩滅し調整不明。18は灰白褐色、19は褐灰色。20は口縁が外折する甕である。外面ハケメ、内面摩滅する。褐色～明褐色を呈する。21・22は甕底部、いずれも内外摩滅するが、21内面にはかすかな指頭圧痕が残る。21は砂粒が少なく橙褐色、22は外面褐色、内面淡黄褐色を呈する。

49号土坑（図版25、第47図）

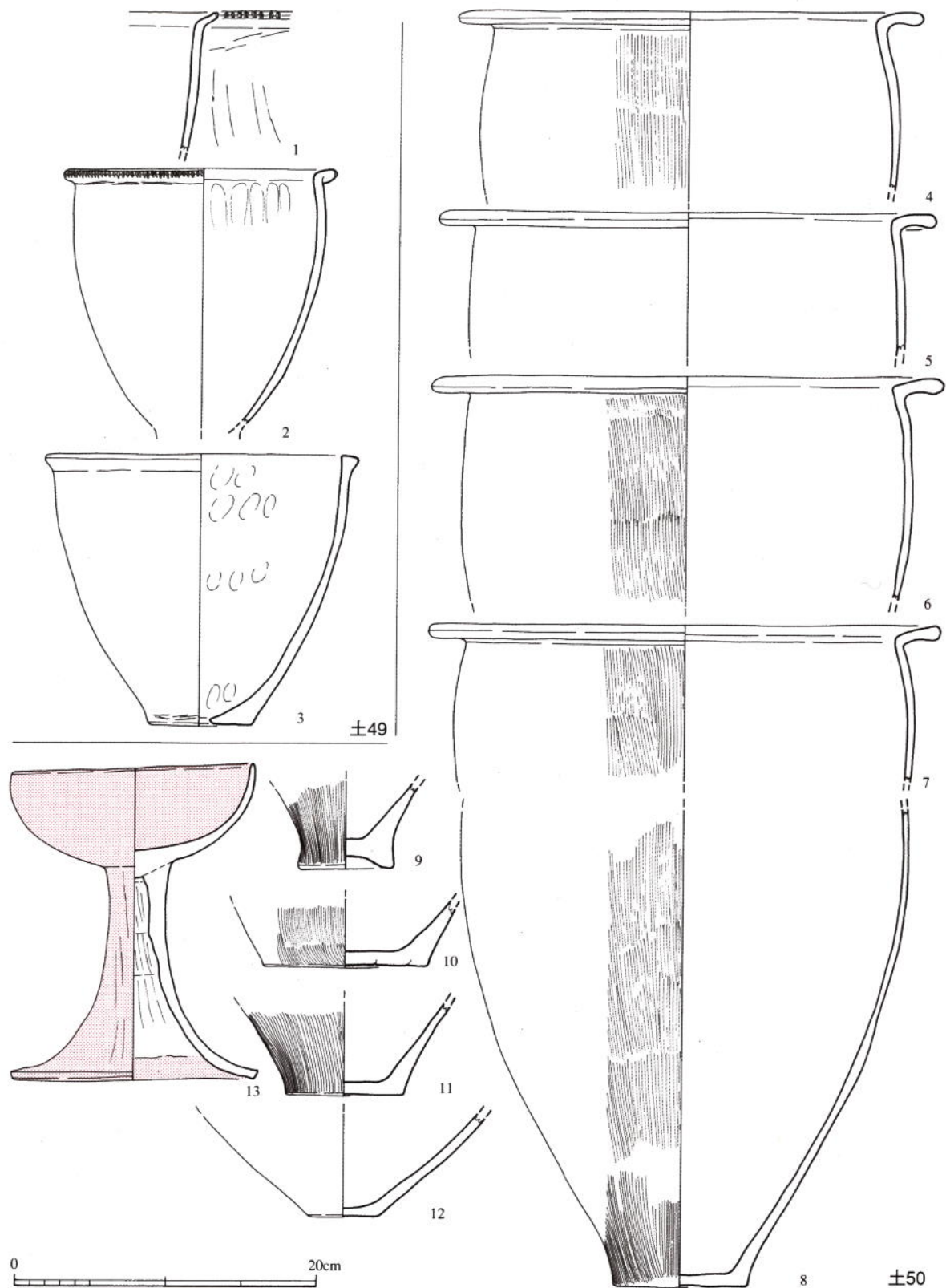
C区、16・18号竪穴住居跡の西側上層で検出したものであるが、遺構の切合いは不安である。直径1.0m弱の円形を呈し、検出面からの深さ30cm弱。覆土中から赤色顔料が少量、出土した。

出土土器（図版60、第50図1～3） 1は如意状口縁の甕口縁部小片。口縁はゆるやかに外反し、端部には先端の丸い工具による刻目を施す。外面は板状工具によるナデ、内面は摩滅。淡灰褐色～褐灰色を呈し、外面には煤が付着する。2は口縁部に粘土を貼付し、丸く肥厚させた甕。口縁端部には先端の尖った工具による密な刻目を施す。胴部はわずかに張りをもつ。外面摩滅、内面ナデ仕上げで、口縁部内面にはナデ上げの凹みが残る。外面褐色、内面淡黄褐色だが、コゲで褐変する。3は口縁部断面三角形の甕。底部は焼成後穿孔し、甑に転用している。口縁端部は摩滅しており、刻目の有無は不明。内外摩滅し、内面には指頭圧痕が残る。外面淡黄褐色、内面淡褐色を呈し、内面にはコゲが付着。これらを一括として捉えるならば、中期初頭になるか。

50号土坑（図版25、第47図）

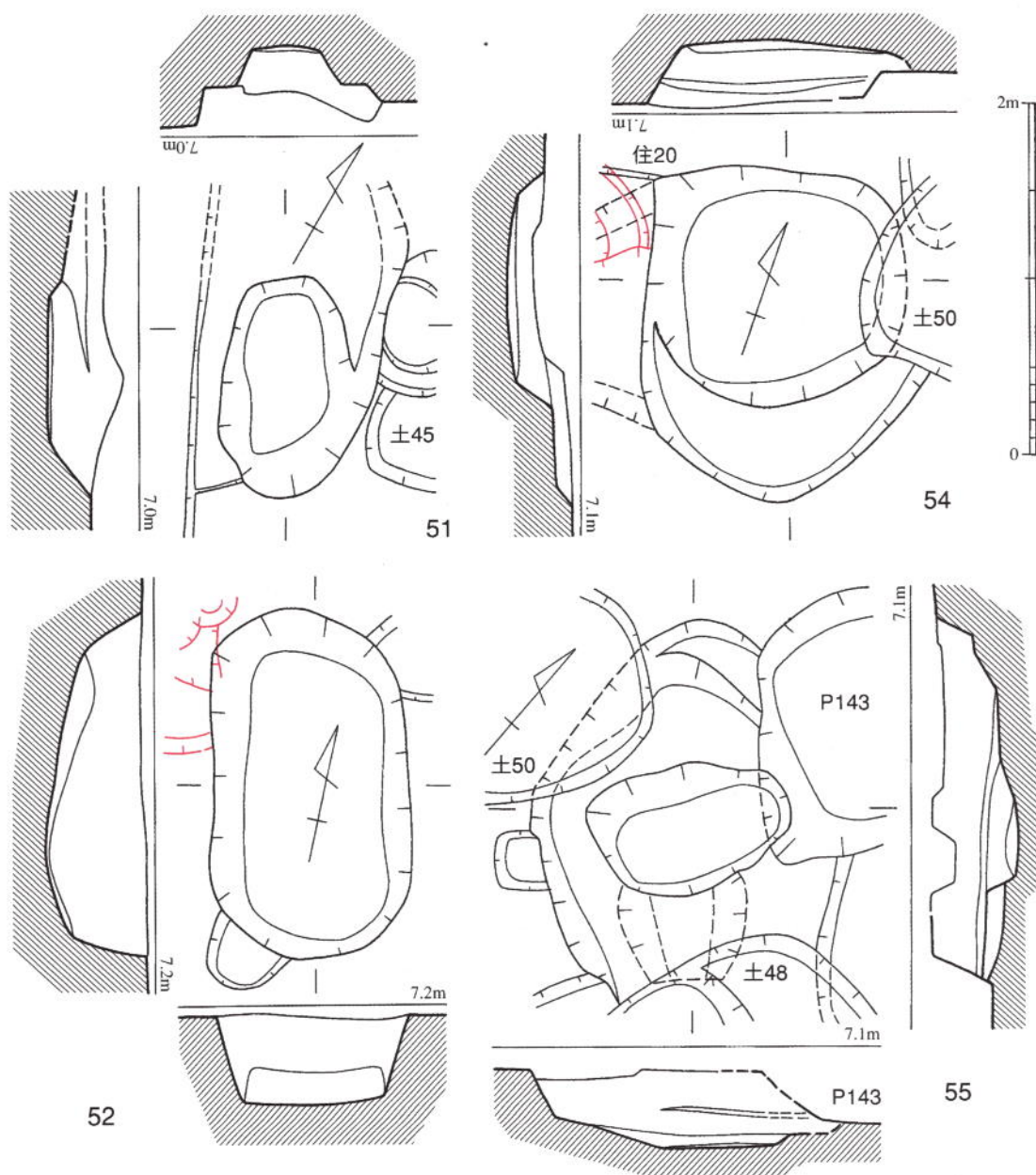
D区に所在し、54・55・61号土坑を切っている。切合いのため形態の細部には不安があるが、現状では長軸を北東―南西方向に向けた楕円形を呈し、長さ1.6m、幅1.25mを測る。検出面からの深さ40cm余りで、黒褐色粘質土を覆土とする。

出土土器（図版60・61、第50図4～13） 4～7は口縁を外折した甕胴上部破片。4～6は緩やかに



第50図 49・50号土坑出土土器実測図 (1/4 1～3：±49、4～13：±50)

外反しながら水平に口縁が伸び、7はやや直線的に外傾し口縁端部を肥厚させる。外面ハケメ、内面ナデ仕上げが基本であるが、5は内外摩滅、7は内面摩滅。4外面・5・7は橙褐色、4内面は淡黄



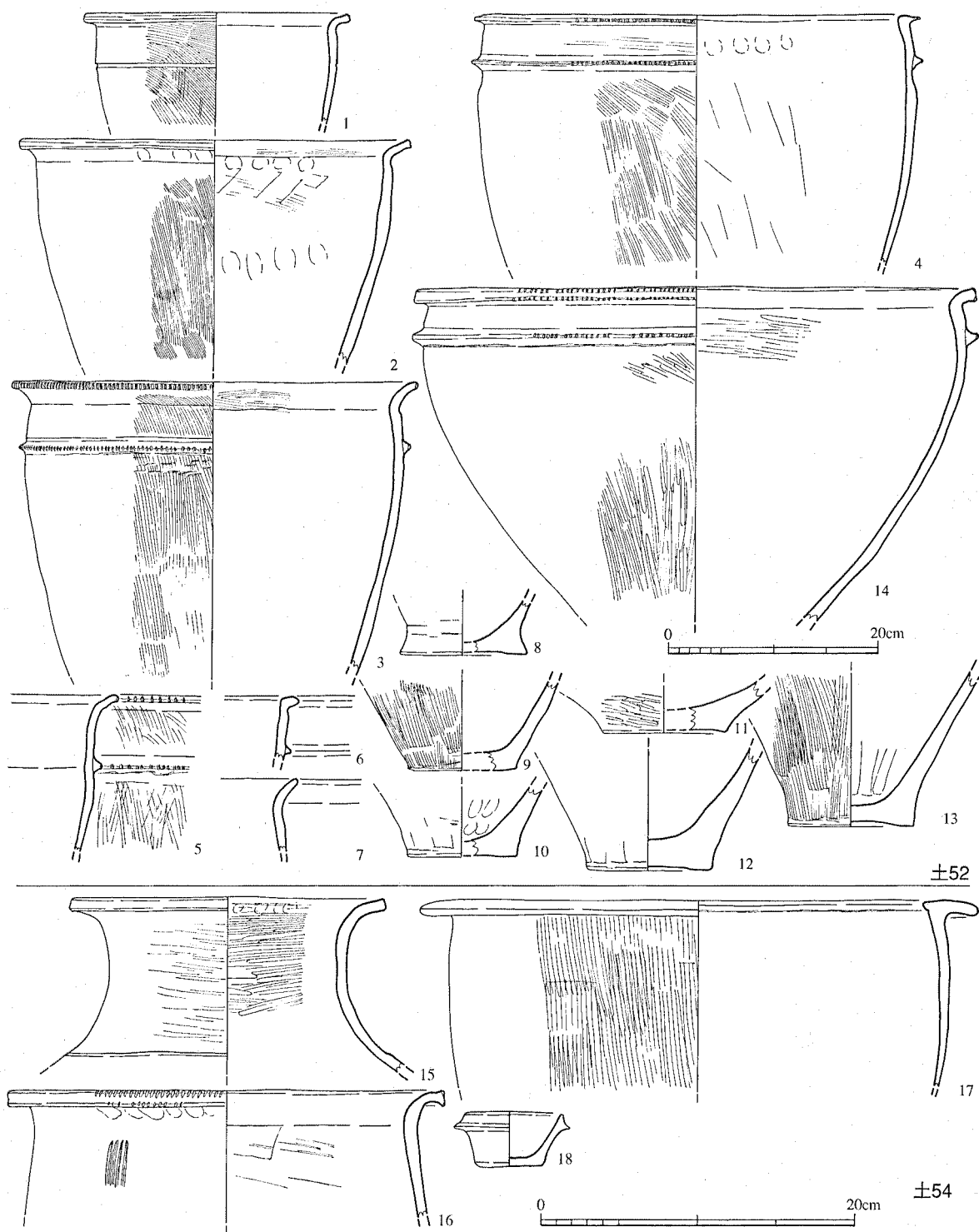
第51図 51・52・54・55号土坑実測図（1/40）

褐色、6は淡灰褐色で、4外面には煤が付着し、7内面は二次的に火を受け広範囲にわたって赤変。8は甕胴部～底部の破片。外面縦ハケ、内面摩滅し、内外橙褐色。底部見込みにはコゲが付着する。

9～12は底部片で、9・11は甕、10・12は壺と思われる。9～11は外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、12は外面摩滅、内面ナデ仕上げである。9は上底で、蓋の可能性もある。10は底部外面に同心円状に2条の凹みが巡り、底部製作時の粘土接合痕を反映しているか。9内面は橙褐色、外面は淡灰褐色、10外面は灰褐色、内面は褐色、11は褐色。12は二次的に火を受け赤変、黒変する。11内面にはコゲが付着する。

13は完形に復元できる丹塗碗形杯部高杯。杯部は半球状で、口縁部は厚さを減じ直立する。裾は緩やかに開き、端部は角張る。杯内外は摩滅し、脚外面は縦ミガキと思われる稜、脚内面は絞り痕が残る。生地は橙褐色。

これらの土器は中期前半に遡る9を除けば、中期後半でも新しい頃の一括遺物と考えられる。



第52図 52・54号土坑出土土器実測図（14は1／6、他は1／4 1～14：±52、15～18：±54）

51号土坑（図版26、第51図）

C区、16号竪穴住居跡の床面下層で検出したが、住居跡との切合いは確定できなかった。北西～南東方向に長軸を向けた楕円形を呈し、長さ1.25m、幅0.8mを測る。壁は遺存の良好な個所で、高さ40cm余りである。図示できる遺物はない。

52号土坑（図版26、第51図）

D区に所在する。長軸をほぼ南北に向けた楕円形を呈し、長さ2.0m、最大幅1.15mを測る。底部は北が高く、南に緩やかに傾斜し、最深部で検出面から深さ55cmを測る。いくつかのピットと切合うものの、輪郭は明瞭で、出土土器の一括性は高いと思われる。

出土土器（図版61、第52図1～13） 1～7は甕口縁部～胴上部片。1～3・5・7は如意状口縁甕。1は小形で口縁下に沈線が巡り、3・5は断面三角形の刻目突帯を貼付。1は口縁部を強く外反させ、口縁直下まで外面ハケを施した後沈線を巡らす。内面摩滅。2は口縁部が直線的に外傾し、端部は角張る。外面ハケメ、内面ナデであるが、胴上部内面に斜め方向の板ナデ痕が残る。3・5は口縁端部と胴部突帯頂部に刻目。3は先端の鋭利な工具で密に刻目を施し、5は摩滅のため刻目の遺存状況が悪い。いずれも外面ハケメ、胴部内面ナデで、3は口縁内面にもハケメが残り、外面突帯下には工具痕と思われる水平方向の短い沈線が観察できる。7は小片で、刻目の有無、調整は不明。4・6は口縁外面を断面三角形に肥厚させ、胴部に突帯を貼付。4は口縁端部、突帯頂部に先端の鋭利な工具で刻目を施す。外面ハケメ、内面ナデで、口縁と突帯の間の外面には横ハケ、胴部内面には板ナデ痕、指頭圧痕が残る。6は摩滅のため口縁端部・突帯の刻目の有無及び調整不明。1内面は淡黄褐色、1外面・2外面・3外面・4・5外面・7は淡褐色、2内面・3内面・6は灰褐色、5内面は淡褐灰色で、1・2の外面及び3・5の突帯下外面は煤が付着する。

8～13は底部片で、11は壺、他は甕。11は外面ミガキ、内面ナデ。8は底外周が突出し、内外摩滅。9・13は外面縦ハケ、内面ナデ。10・12は外面板ナデ、内面ナデ。8外面は淡灰褐色、8内面・9・10は淡褐色～褐色、11は白褐色、12・13は淡黄褐色で、9・12内面にはコゲが付着。

54号土坑（図版27、第51図）

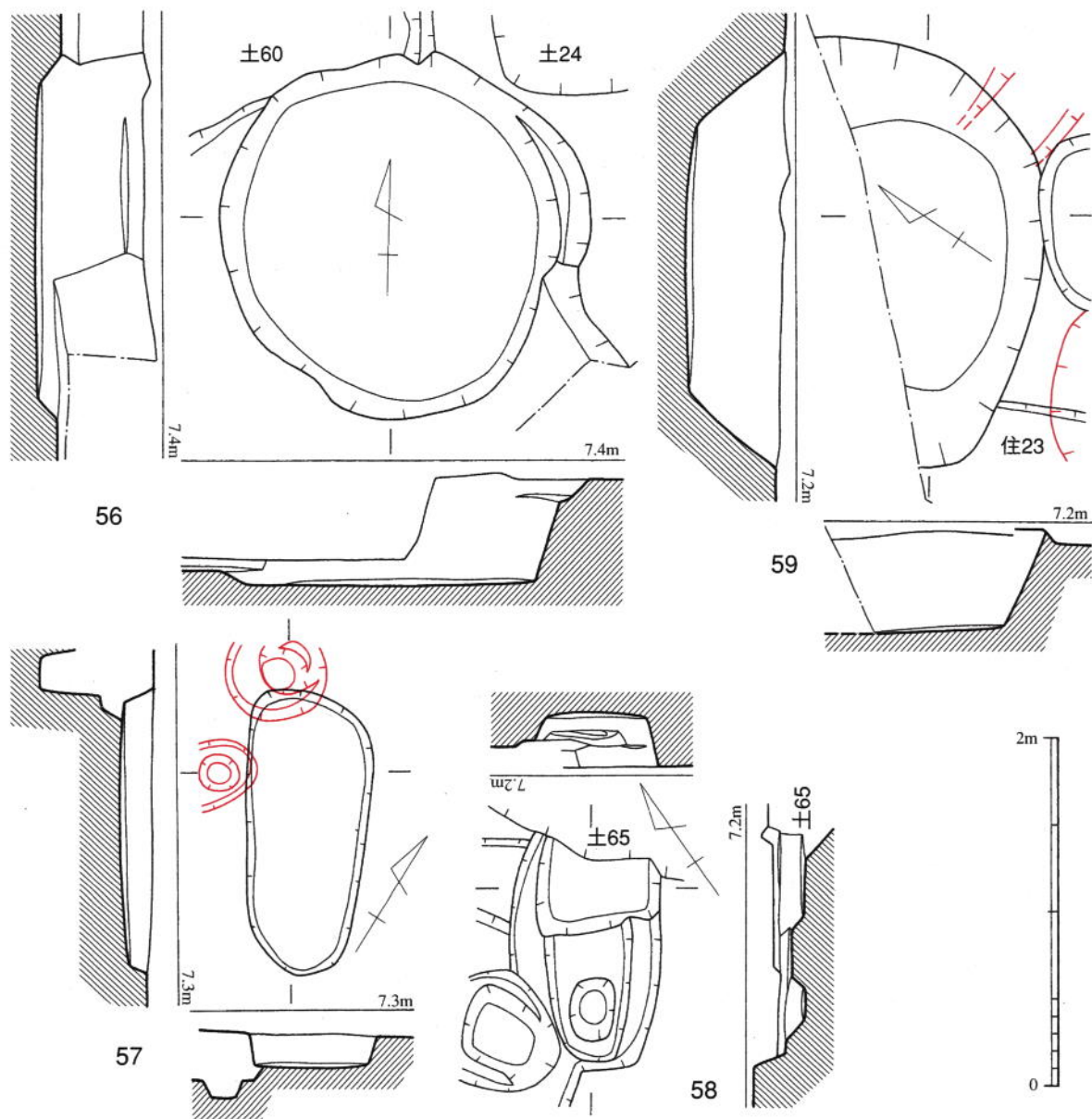
D区に所在し、20号竪穴住居跡を切り、50号竪穴住居跡に切られると考えたが、切合いは不明確。北側は南北1.25m、東西1.45mの隅丸方形を呈し、南に幅広のテラスが接する。両者を同一遺構と考えたが、複数の遺構が重複していた恐れもある。検出面からの深さは30cm余りで、暗褐灰色粘質土を覆土とし、厚さ3cm程の炭層を含む。土坑北外包含層より石鏃（第4表5）が出土。

出土土器（図版61、第52図15～18） いずれも54号土坑北の包含層から出土したもので、直接、本遺構に伴うものではない。15は壺肩部～口縁部片で、肩部の微かな段と重なるように沈線を施し、口縁は緩やかに外反して、角張った端部に至る。内外横ミガキで、口縁部内面には微かな指頭圧痕が残る。器表はスリップのためか橙褐色を呈すが、器肉は灰褐色。16は頸部の括れの小さい壺。口縁部は短く、強く屈曲。端部上面に強くナデを施しわずかに凹ませるとともに、拡張させて垂直面をなし、上下から刻目を施文。胴部外面には4条の垂直方向沈線文。内外摩滅するが、口縁下には指ナデ痕、胴部内面には板ナデ痕を残す。黄白褐色。17は鋤先口縁甕。口縁は内への突出が明瞭で、内面に接合痕が残り、上面は丸味を帯びて外傾。外面ハケメ、内面摩滅で、淡褐色～褐白色。18は口縁下に突帯を巡らした小形鉢。口径6.0cm、高さ3.4cm。内外ナデ仕上げで白褐色。

55号土坑（図版27、第51図）

東に位置するP143と重複し、図化の不十分な部分がある。また、48号土坑、50号土坑に切られるため、形態は不安である。土坑の上部は北西－南東方向に長軸を向けた楕円形に復元される。南東端を48号土坑により失い、現存値では長さ2.15m、幅1.6mを測り、検出面からの深さ35cm弱。ただ、床面には北東－南西方向に長軸を向けた長さ1.1m、幅0.7m、深さ5cm程の掘り込みがある。この掘り込みの上部の輪郭を間違え、北西－南東方向の楕円形と捉えた恐れもあろう。

出土土器（図版61、第54図1～9） 1は如意状口縁の甕。口縁は直線的に外傾し、端部ややした



第53図 56～59号土坑実測図（1／40）

よりに細い刻目を密に施す。外面工具によるナデ、内面ナデ仕上げで、外面暗褐色、内面淡灰黄褐色を呈す。2は鋤先口縁甕で、口縁は内側への突出が顕著で、上面は緩やかに外傾。外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、淡褐黄色。3は外折した口縁の甕胴上部片。口縁部は緩やかに外反して、端部に向けて厚さを増し、端部は丸く仕上げる。外面ハケ、内面ナデ。淡灰褐色を呈し、器表の遺存が良好であるにも係らず、外面の煤は観察できない。

4～8は底部片で、4・5・7は壺、他は甕か。4は底部円板状をなし、外面摩滅、内面ミガキを施す。外面は淡褐白色、内面は黒褐色である。5は内外ナデ仕上げで、外面淡黄褐色、内面灰色。6は胴部外面板ナデ、底部外周指ナデで、内面はナデ。内面コゲで暗褐色を呈し、外面は淡黄褐色。7は底径が大きく、外面縦ハケ、内面ナデ。内外灰白褐色。8は外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで外面淡黄褐色、内面淡褐灰色を呈す。9は灰白褐色の蓋頂部である。上面はかすかに凹み、内外ハケメ仕上げである。

56号土坑（図版26・27、第53図）

D区に所在し、輪郭は明瞭であった。西から南にかけて攪乱により大きく削平されるが、直径2.0mの円形に近い形態を呈している。検出面からの深さは60cm余りで、覆土は褐灰色粘質土を主体とし、灰黄色地山土ブロックを斑状に30%程含む。床面は平らである。形態から貯蔵穴と推測される。図示できる土器はないが、石英質石器（第9表1054）が出土した。

57号土坑（第53図）

D区に所在し、長軸を北西－南西方向に向け、南西側がややすぼまる長楕円形を呈している。長さ1.6m、幅0.75m測る。検出面からの深さは20cm弱と浅く、出土遺物も少ないため形態には不安が残る。覆土は褐灰色粘質土。

出土土器（第54図10） 甕底部片。外面縦ハケ、内面ナデで、外面煤が付着し、内面は暗褐色。

58号土坑（第53図）

D区、65号土坑の南西に位置し、65号土坑に切られる。上面で暗褐色粘質土が分布する範囲を土坑と考え、北東－南西方向に長軸を向けた楕円形と推測した。しかし、他遺構と切合う上、輪郭不明瞭で、床面でもいくつかのピットが検出された。複数の遺構の切合いの可能性も高いが、現状では長さ1.35m、幅0.85mを測り、検出面からの深さは30cm程。図示できる出土遺物は無い。

59号土坑（図版26、第53図）

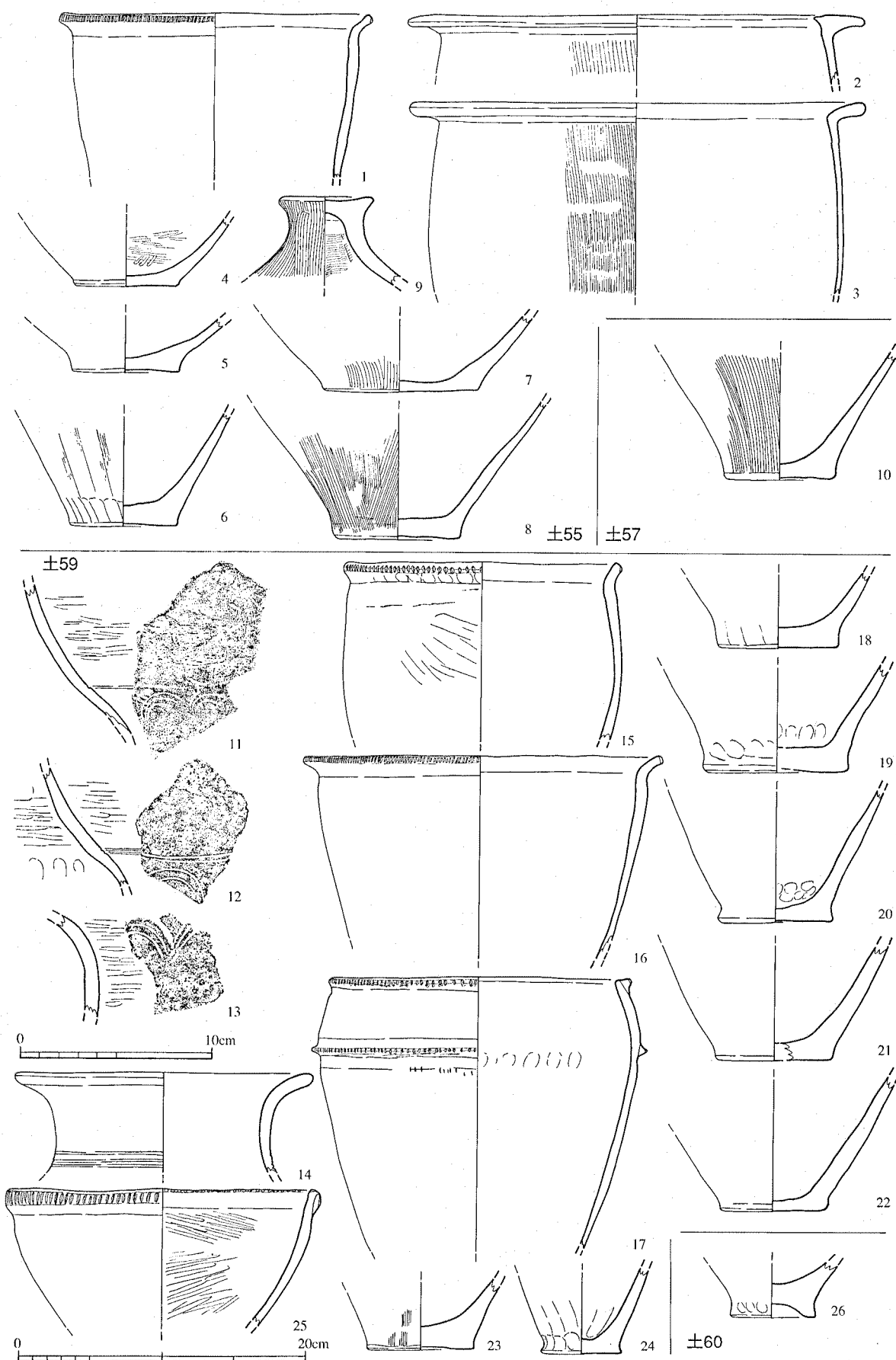
D区、23号竪穴住居跡の北東に所在。23号住居跡を切ると考えたが、輪郭は不安で、切合いも十分に確認できなかった。そのため、覆土上層は周辺遺構に帰属する遺物も混在すると考えられる。現状では主軸を北東－南西にむけた楕円形に復元できるが、調査区外へと続くため全容は不明。現存値は長さ2.45m、幅1.3m、深さ60cm弱。土器の他に打製石鏃（第4表45）が出土。

出土土器（図版61、第54図11～24） 20は覆土上層から出土した。

11～13は壺肩部片。11は肩が微かな段をなし、段下に二枚貝の刺突による3条の重弧文を配置している。12は肩部に2条の沈線を巡らし、その下に2条の沈線で重弧文を施す。13は3条の沈線による重弧文を配置する。いずれも外面ミガキ仕上げで、11・13は内面ナデ、12は内面上部は板ナデ、肩部内面は横ミガキ、胴部内面はかすかな指頭圧痕を残す。11外面は褐色、11内面は暗褐色、12は淡褐色、13は外面黄灰褐色、内面淡黄褐色。14は壺口縁部～肩部破片で、肩部には3条の沈線を巡らす。口縁は緩やかに外反し端部を丸く仕上げる。内外摩滅のため調整不明で、淡褐灰色～灰黄褐色を呈すが、二次的に火を受けた一部の破片は淡黄褐色に変色。

15～17は甕。15は短く外傾させた如意状口縁を呈し、口縁端下部に丸い工具による太い刻目を施す。胴上部はわずかに括れ、胴部外面は板ナデを施し、口縁部外面に指頭圧痕。内面はナデ。内外灰褐色を呈すが、一部の器表は化粧土のためか橙褐色。16は胴部が緩やかに広がり、短く外反させた如意状口縁に至る。口縁端部は角張り、刻目を密に施す。内外ナデで、外面に煤が付着し、内面は褐灰色。17は口縁部、胴上部に断面三角形の刻目突帯を貼付。刻目は太く、やや柔らかい時期に施文。胴部突帯の刻目は勢いが強く、直下の胴部にあたりが観察される。調整不明であるが、突帯貼付部内面には指頭圧痕が巡る。淡黄褐色を呈するが、焼成不良で黒変する部分もある。

18～24は甕底部。18～20・24は底部外周の括れが強い。外面は18・20・21・24がナデ、23は縦ハケで、19・21は摩滅する。内面はナデ仕上げがほとんどであるが、22は摩滅。18外面・22は淡褐色、18内面・23は灰黄褐色、20内面は淡黄褐色、20外面は灰褐色、21は黄白褐色、24外面は淡褐灰色を呈す。19・20外面は二次的に火を受け赤変し、19・22・23の内面にはコゲが付着。



第54図 55・57・59・60号土坑出土土器実測図 (13は1/3、他は1/4 1~9: 土55、10: 土57、11~25: 土59、26: 土60)

25は口縁部に粘土を貼付し肥厚させた単口縁鉢。口縁部外面は丸く、外面に先端の丸い工具で長い刻目を施すとともに、上面内側にも同じ工具で刻目を施す。外面摩滅し、内面ミガキ仕上げ。褐色を基調とするが、内外とも二次的に火を受け赤変。胎土の砂粒は多い。

これらの土器は覆土上部から出土した21をのぞき、前期後半の一括と考える事ができるか。

60号土坑（図版27・28、第55図）

D区、56号土坑の北東に所在。東西に長軸を向けた長さ2.1m、幅0.9m余りの長方形に復元されるが、西端、北壁東側では掘り過ぎにより不自然なテラスが生じてしまった。深さは25cm内外。輪郭は明瞭であったが遺物は少量で、斑状に灰白色土が混じった褐灰色粘質土を覆土とする。

出土土器（第54図26） 上げ底の甕底部。外面摩滅し、内面はナデ仕上げ。淡褐色～淡黄褐色を呈し、内面にはコゲが付着する。

61号土坑（第55図）

D区、調査区北壁際に所在する。50号土坑に切られ、西に位置する20号竪穴住居跡を切ると考えたが、輪郭は不安で、切合いも確定できなかった。北側は調査区外へと延びるため全容は不明であるが、ほぼ南北に長軸を向けた楕円形と想定され、現存値は長さ2.15m、幅0.75m。深さ20cm程であるが、南端ではさらにピット状に15cm程深くなる。覆土は灰褐色粘質土。

出土土器（図版61、第56図1・2） 1は甕底部片である。やや上げ底状で内外摩滅する。外面灰黄褐色、内面黄褐色。2は甕胴下部～底部片で、底部は焼成後穿孔し、甑に転用している。内外ハケメであるが、底部近くの胴内面に指頭圧痕が巡る。外面黄褐色、内面灰褐色。

62号土坑（第55図）

D区に所在。19・20号土坑に切られる土坑と判断したが、床面にピットがいくつかあり、複数のピットの切合いを誤認した恐れがある。現状では直径1.6m程の円形に復元でき、検出面からの深さ30cm余り。さらに床面には深さ5～10cm程のピットが3基、確認された。覆土は褐灰色粘質土。

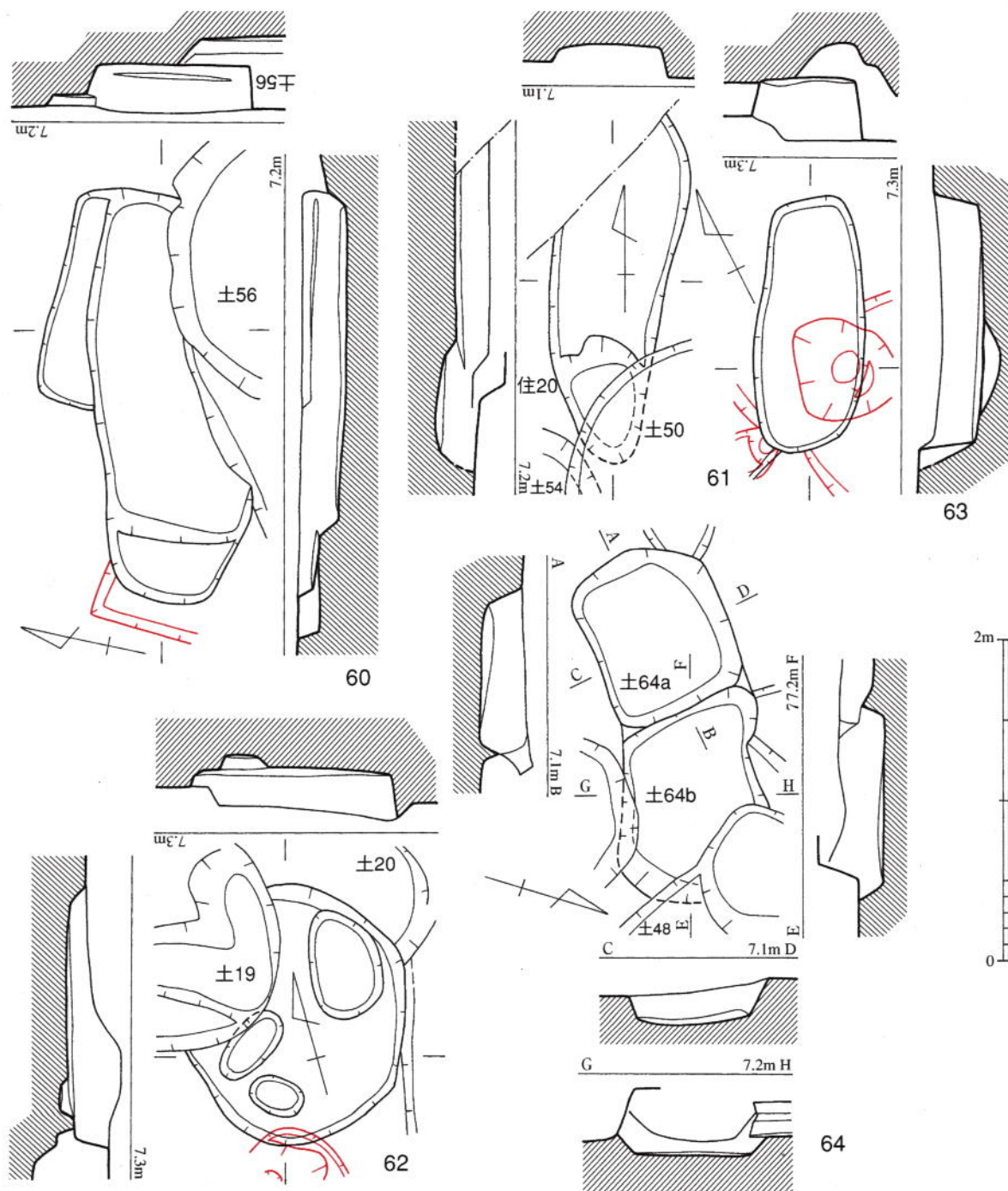
出土土器（第56図3） 甕底部片で底部外面には環状の凹みが見られる。外面ハケメ、内面調整不明で、淡黄褐色を呈す。外面には煤、内面にはコゲが付着。

63号土坑（図版28、第55図）

D区に所在し、144号土坑覆土を掘削したと考えているが、輪郭不安で掘り間違った可能性が高い。現状では長軸を北東－南西に向けた長楕円形を呈し、長さ1.55m、幅0.7m、検出面からの深さ30cm弱である。暗褐色粘質土を覆土とする。土器の他に磨製石斧（第166図98）が出土。他に63号土坑と64号土坑の間の包含層より打製石錐（第6表200－5）が出土した。

出土土器（図版61、第56図4～8） 4は丹塗壺の胴～底部片。胴部の張りが強く、最大径よりやや下がったところに断面三角形の突帯を巡らす。外面摩滅し、内面はナデで、指でナデ上げた痕跡が残る。生地は橙褐色である。5は壺底部か。外面は底部までミガキ、内面摩滅で、外面灰褐色、内面灰黄褐色を呈す。6は甕底部。内外摩滅するが、底部外周には工具痕、指頭圧痕が残る。淡黄褐色を呈する。

7・8は63・66号土坑周辺の包含層から出土。7は蓋で、体部は直線的に開き、裾端部は角張る。黄白褐色が基調であるが、口縁内外は褐変。8は鋤先口縁甕で、口縁上面は内端で内傾するが、外端は屈曲してわずかに垂下する。外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。外面褐色、内面灰褐色。



第55図 60～64号土坑実測図（1／40）

64号土坑（第55図）

D区に所在する。本来は2基の土坑、64号土坑a、64号土坑bに分かれるが、出土遺物は区別せずに取り上げてしまった。64号土坑a、64号土坑bは上部では切合っていたと考えられるが、現状では隅丸長方形の64号土坑aと、歪んだ四辺形に近い平面形の64号土坑bが接している。64号土坑aは長軸を北東－南西に向け、長さ1.05m、幅0.85mを測り、検出面からの深さ25cm余り。64号土坑bは長軸をほぼ東西に向け、長さ1.35m、幅0.9mを測り、検出面からの深さ40cm余りである。覆土は暗褐灰色粘質土で、床面近くでは炭粒を多く含んでいた。土器の他に打製石鏃（第4表44）が出土した。

出土土器（図版61・62、第56図9～13） 9は無頸壺の蓋。頂部は平らで、緩やかに外反しながら開き、端部は丸い。直径6mm程の穿孔が4個所に残る。内外ナデ仕上げで淡白褐色。10は壺口縁部片。頸部は直線的に内傾。口縁部は大きく屈曲して外反し、丸く仕上げた端部に至る。内外摩滅し、淡褐色。11は口縁・底部に2分した破片を図面上で合成し、完形として提示したが、本来は少し器高が小さいか。頸部の括れが強く、口縁部は短く直線的に外傾した如意状口縁で、端部には細い刻目が施される。底部は括れが強く、外端が踏ん張るような形となる。内外調整不明であるが、口縁外面には微かに指頭圧痕が残る。外面淡黄褐色、内面灰白褐色。12は底径の大きい壺底部。外面ミガキ、内面ナデで、灰褐色を呈すが、内面は焼成不良で暗褐色。13は甕底部か。外面は底部まで板ナデを施し、内面はナデ仕上げ。外面淡黄褐色、内面灰褐色で、外面には煤が付着。

以上の土器は9は中期後半と考えられるが、他は前期後半と考えられる。

65号土坑（図版28、第57図）

D区に所在する。北西－南東方向に長軸を向けた長方形の平面形であるが、床面は中央部が低くなる。全長1.65m、幅0.9mを測り、検出面からの深さ35cm余りである。灰褐色粘質土を覆土とし、平面形は明瞭であった。床面から土器がまとまって出土した事に加え、図示していないが覆土中間からサヌカイト・姫島産黒曜石の原石がまとまって出土した。両原石は整理中に所在不明となり図化できていないが、15cm大であり、特に姫島産黒曜石による明確な製品は、本遺跡からは出土していないので貴重である。他に土製紡錘車（第162図37）が出土した。

出土土器（図版62、第56図14～18） 14～16は口縁部を短く折り返し、端部に刻目を施すとともに、胴上部に刻目突帯を貼付した甕。14は胴上部を強く屈曲させ、口縁端部を折り返すように作り出す。口縁端部、胴部突帯には先端の鋭い工具により深い刻目を施す。口縁部外面～胴部はナデ仕上げで、屈曲部より上の内面には指頭圧痕が巡る。胴部外面は板状工具の痕跡を良くとどめる。高さ13cm程のところから口縁まで煤が付着し、胴部内面にはコゲが残るが、高さ6～10cmの付近は帯状にコゲの少ない部分が巡る。外面淡褐色、内面淡黄褐色。15、16は短く口縁を外反させ、口縁端部、突帯頂部に太い刻みを施す。15は内外ナデ仕上げで、突帯、口縁の内面に指頭圧痕が巡る。淡灰褐色で、外面には煤が付着。16は調整不明で、外面灰黄褐色、内面淡褐色を呈し、外面には煤が付着。

17は甕底部か。底部外周には指頭圧痕が残るが、外面は摩滅。内面はナデ仕上げで、コゲが付着。外面褐灰色、内面淡黄褐色。18は壺底部。外面ミガキ、内面ナデで、淡黄褐色を呈す。

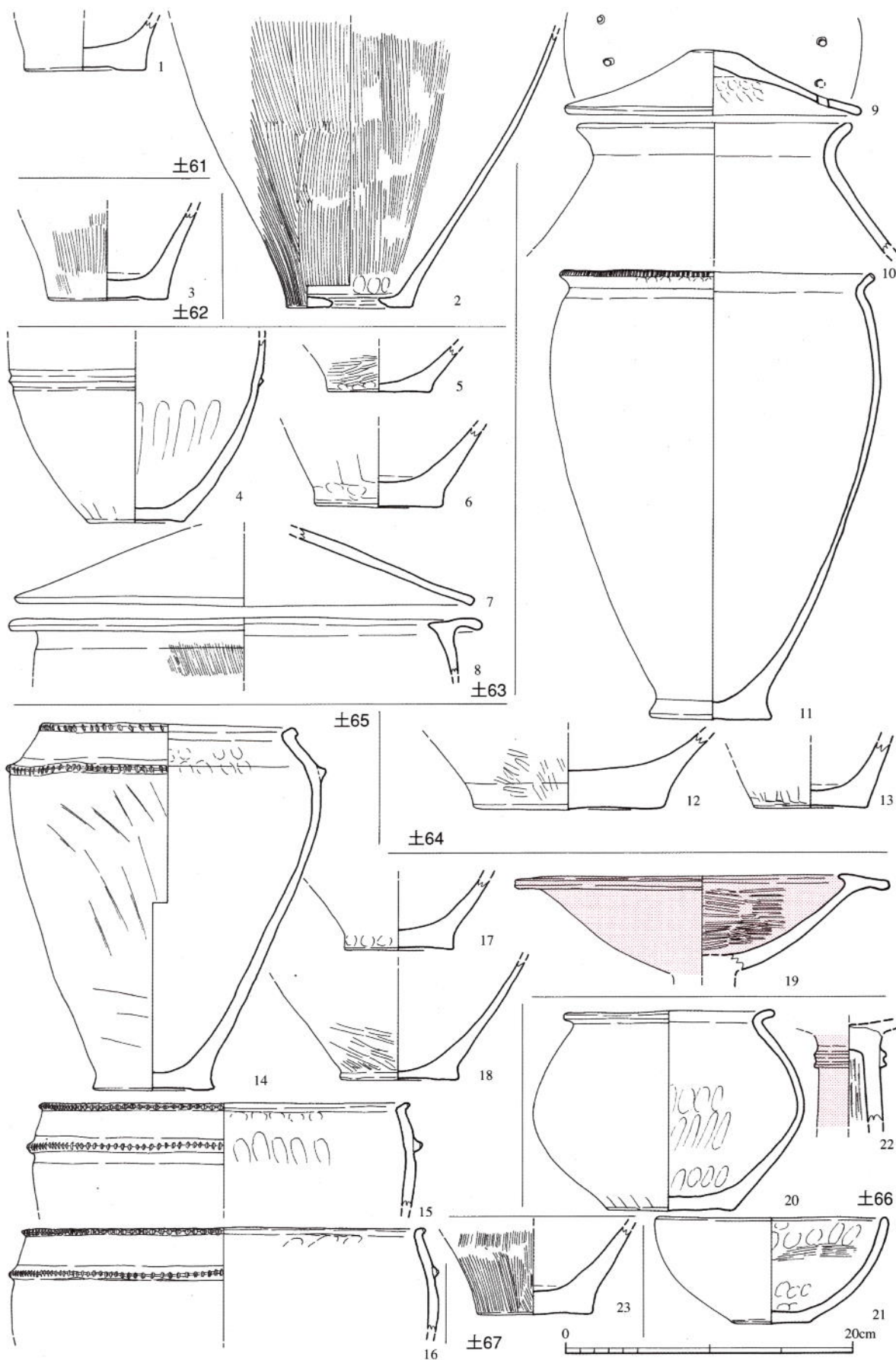
19は覆土上層から出土した丹塗高杯杯部片で混入品と推測される。口縁は鋤先状をなし、断面の内への突出が顕著で、上面は外傾する。内面はミガキ仕上げであるが、口縁上面から外面は摩滅が進行している。生地は淡橙褐色。

混入の19を除けば前期後半の一括遺物と考えられる。

66号土坑（図版28、第57図）

E区に所在し、21・22号竪穴住居跡を切ると考えて発掘調査した。しかしながら、輪郭が22号住居跡と一致するため、22号住居跡の一部を土坑と誤認した可能性も考慮する必要がある。完掘状況をそのまま報告するならば、土坑は長軸をほぼ東西に向けた長方形を呈し、北壁に幅15cm程のテラスが取りつく。テラスを除けば長さ2.55m、幅0.95m、検出面からの深さ20cm余りであり、底部はほぼ平坦であった。覆土は灰褐色粘質土。土器の他に石包丁（第163図57）が出土。

出土土器（図版62、第56図20～22） 20は完形の無頸壺。胴部最大径はやや下位にあり、口縁部は短く外反して丸い端部に至る。口縁部への穿孔は見られない。外面摩滅、内面はナデで、胴下部には指頭圧痕が良く残る。淡褐色～褐灰色。21は単口縁鉢。内面はナデで仕上げるが、胴中間付近に



第56图 61~67号土坑出土土器实测图 (1/4 1·2:±61、3:±62、4~8:±63、9~13:±64 14~19:±65 20~22:±66 23:±67)

横ハケが残る。外面は調整不明。白褐色を呈す。22は丹塗高杯の脚上部。外面に断面M字状突帯を貼付する。外面摩滅で、内面は絞り痕を残す。生地は淡黄褐色。

67号土坑（第57図）

D区に所在する。70号土坑と一連のものとして発掘調査を進めたため、両者の遺物が混在してしまった。あるいは下層に位置する138号土坑を誤認した可能性もある。完掘状況のままを述べれば、長軸をほぼ南北に向けた長方形に復元され、北側にテラスが巡るが、掘り間違いの可能性が高い。テラスを除けば、現存で長さ1.45m、幅1.2m、遺構面からの深さ25cm内外である。黒褐色粘質土を覆土とする。

出土土器（図版62、第56図23） 甕底部片。外底部は環状に凹みが巡る。外面縦ハケ、内面ナデで、見込みにはコゲが付着する。外面淡黄灰褐色、内面淡灰褐色。

68号土坑（図版29、第57図）

E区、南壁際に所在し、22号竪穴住居跡を切るものと考えて発掘調査を実施した。ただ、土坑下部から中期初頭以前の土器が出土しており、22号竪穴住居跡のプランを誤認した上、前期の土坑と区別できずに掘り上げたと考えるべきか。現状では主軸を東西に向けた長方形土坑の東に幅0.6m程のテラスが付設したような形態を呈するが、土坑本体は長方形部分のみと捉えるべきである。長方形部分は長さ1.9m、幅0.8m、検出面からの深さ60cm内外。北側下層では半円形の掘り方が確認されており、中期後半の土器が出土した。北側は中期後半の土坑で、22号竪穴住居跡の屋内土坑であった可能性も想定される。比較的、均質で粘性の強い灰褐色粘質土を覆土とする。土器の他に石包丁（第163図58）、打製石鏃（第4表46）が出土した。

出土土器（図版62、第58図1～8） 1は小片のため傾き不安であるが、内傾し、波打った口縁部片で、穿孔のあることから無頸壺として図示した。口縁端部は丸みをもち、径10mm程の穿孔がある。外面はミガキ仕上げで、接合痕を一部に残す。内面はナデ。明褐色。2は壺頸部～底部。頸部は括れが小さく、肩部に断続的に施文した2条の沈線を巡らす。胴部は張りが強く、底部は厚い。外面の頸部～胴上部は縦・斜めミガキ、胴下部は摩滅、底部外周は指ナデ仕上げ。内面は頸部ミガキ、胴部上部摩滅で、胴下部は板ナデ痕・指頭圧痕を残す。淡褐色を呈すが、広範囲に灰色に変色。

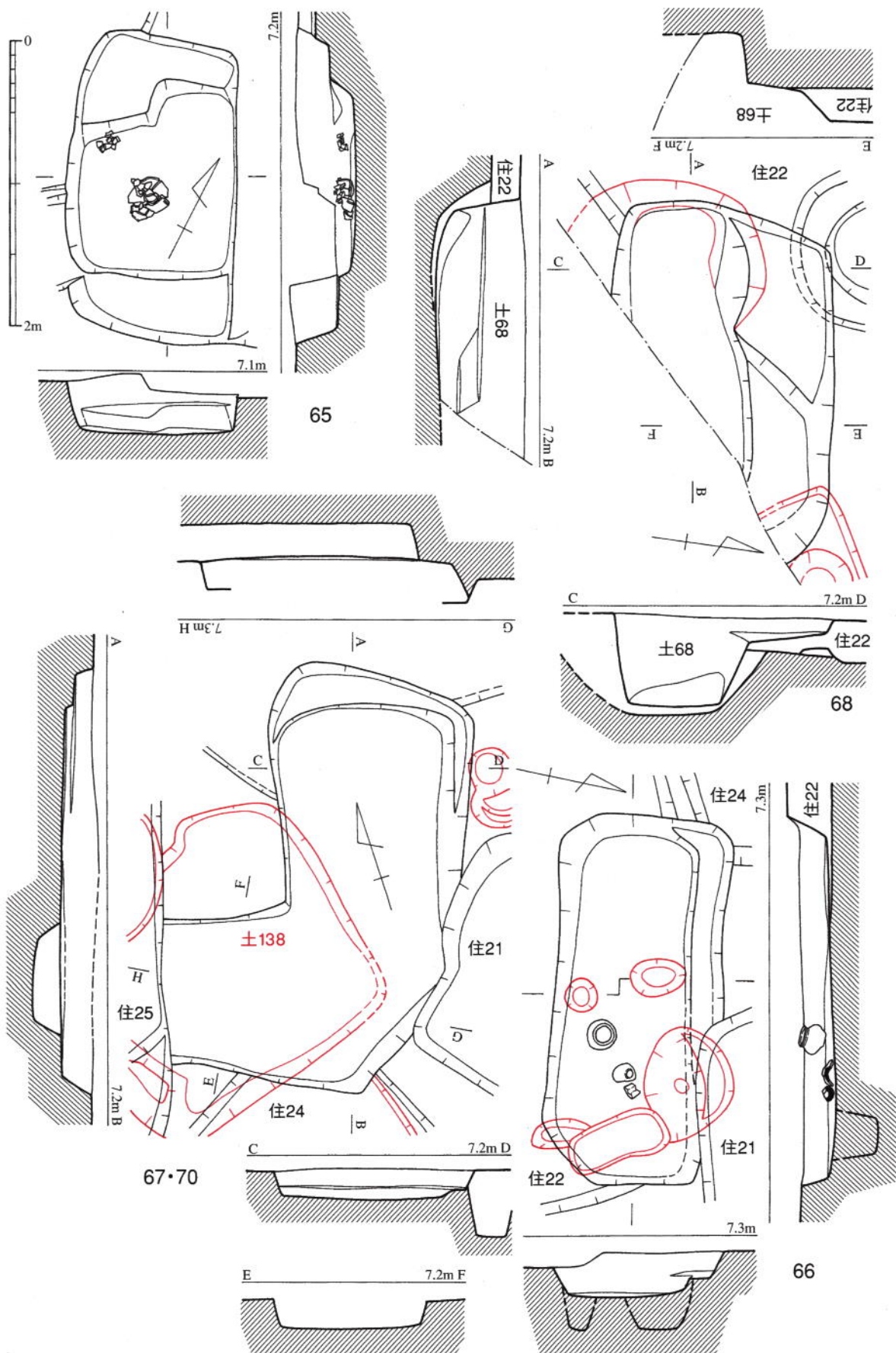
3は甕で、胴部は直線的に開き、口縁部は短く外傾した如意状口縁をなす。口縁端部はやや角張るが、刻目は施されない。胴外面は下部が板ナデ、上部がハケ後ナデ。内面はナデ仕上げであるが、口縁部内面に指頭圧痕、胴中部に板状工具の当たり痕が残る。外面灰褐色、内面淡黄褐色を呈し、外面上部は煤が付着し、内面は口縁から5cm程下がった所までコゲが付着。4は口縁部、胴上部に刻目突帯を貼付した小形甕。口縁端部、突帯頂部とも鋭利な工具による細い刻目を施文する。外面は突帯下が板ナデ、口縁外面ナデ、内面ナデで、口縁内外に指頭圧痕が残る。

5～8は底部。5は内面工具によるナデ、外面ナデ。淡褐白色を呈し、外面に煤が付着する。6は指頭圧痕の残る底部外周を除けば、外面は底部まで板ナデ仕上げ。内面はナデで、淡褐灰色～褐色。7は外面板ナデ、内面摩滅でコゲが付着。灰褐色～褐色。8は底径の大きい壺底部片で、焼成後穿孔される。外面ハケメ、内面摩滅で淡褐色。

これらの土器は中期後半の8を除けば、中期初頭以前のもののか。

69号土坑（第59図）

D区、58・65号土坑の西に位置し、58号土坑、ピットに切られる。灰褐色粘質土の分布範囲を土坑として捉えたが、輪郭は不明瞭であったため、平面形、切合関係は不安である。現状では東西方



第57図 65～68・70号土坑実測図（1／40）

向に長軸を向けた四辺形の西側に略半円形のテラスが付く形態として復元できる。テラスを含めた長さ2.3m、幅0.8m程で、検出面からの深さ20cm前後。図示できる遺物はない。

70号土坑（第57図）

D区に位置している。前述のように隣接する67号土坑と一連に掘り上げてしまい、遺物が混乱している。24号竪穴住居跡を切り、25号竪穴住居跡に切られると考えたが、切合関係は不安である。現状では主軸を東西に向けた長方形プランに復元でき、長さ0.9m、幅1.2m、検出面からの深さ20cmを測る。覆土は黒褐色粘質土。土器の他に打製石鏃（第4表47）が出土した。土器の他に凹石（第171図138）が出土した。

出土土器（第58図9～12） 9は鋤先口縁甕である。口縁部上面は外傾し、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。黄白褐色。10は厚底の甕底部。外面ハケメ、内面ナデ仕上げで板状工具痕が残る。底部中央は内外から、直径10mm弱のドリル状工具による穿孔があるが、貫通しないので、甕に転用しようとして穿孔を試みたが、割れて放棄されたものか。褐色～黄褐色。11は上げ底の甕底部。外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、外面黄褐色、内面暗褐色。12は底径の大きな壺底部片。外面縦ハケ仕上げで、底部外周には工具静止痕を残す。内面は指頭圧痕を残すナデ。白褐色～淡灰褐色。

71号土坑（図版31、第59図）

E区、25・27号竪穴住居跡の下層に位置する。遺構検出時は27号竪穴住居跡より新しいと考えていたが、下層では前期末以前の土器がまとまって出土しており、切合関係は逆と考えるべきであろう。新しい遺物は本来27号住居跡に帰属するものか。長軸を北西－南東に向けた長方形の土坑であるが、南部は誤って掘り過ぎたため、壁の傾斜が緩やかとなり上面が広がる。また、北東部も広がっているが、ピット等切合う他の遺構が存在していたと推測される。土坑本体は長さ1.65m、幅1.0mを測る。覆土は上部では褐灰色～褐色粘質土、下部は暗灰褐色粘質土で炭を多く含む。土器の他に土製紡錘車（第162図26）、石包丁（第163図50）が出土した。

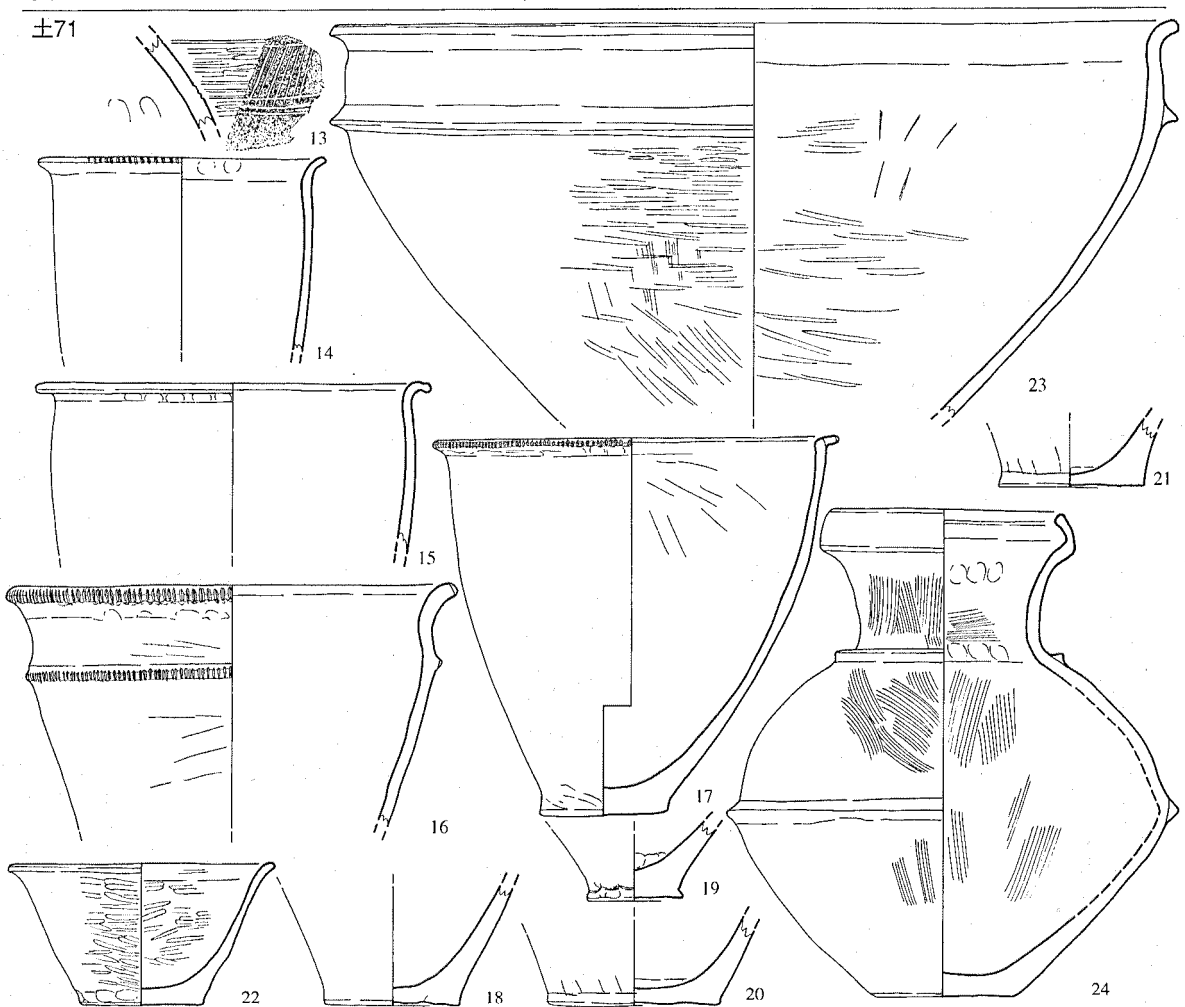
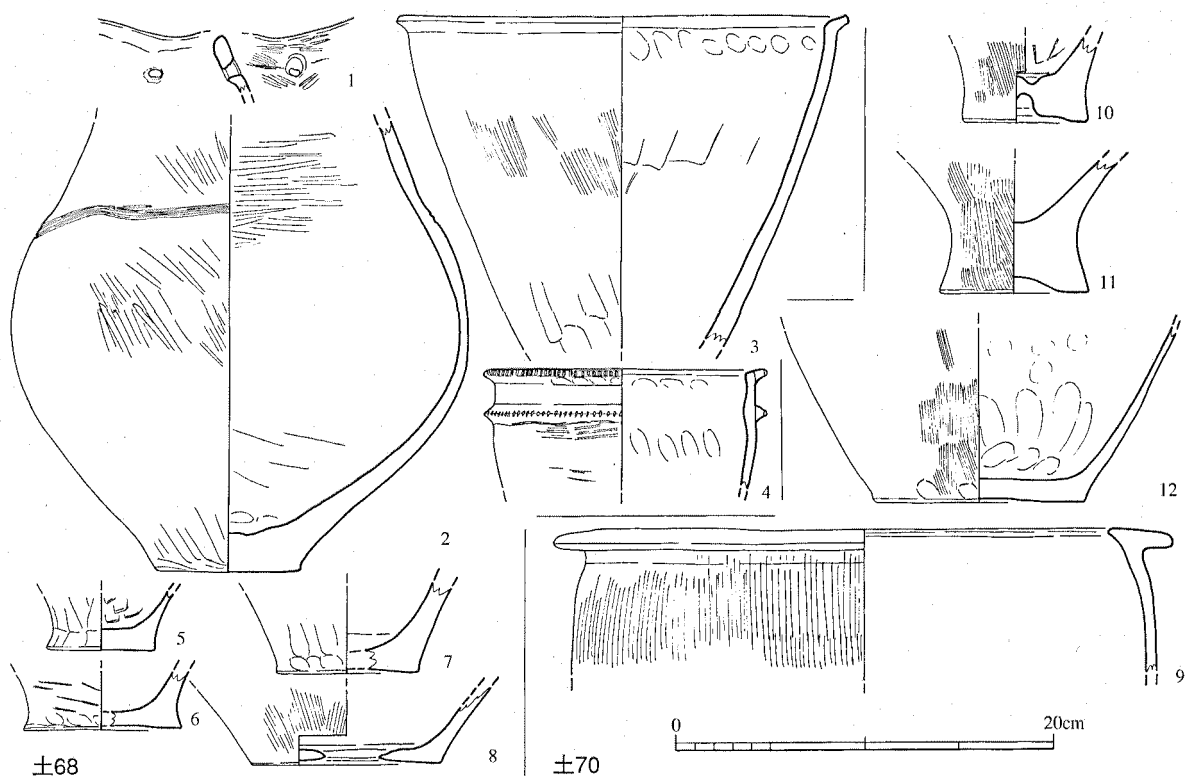
出土土器（図版62、第58図13～24） 18・21・24は覆土上部から出土した。

13は壺肩部片。頸部に1条沈線、胴部に3条の沈線を巡らし、その間に斜行沈線を配置する。外面ミガキ、内面ナデ仕上げで、淡灰褐色～黄灰褐色を呈す。

14～17は甕。14・15は如意状口縁のもの。14は小形品で、緩く外反した口縁をなし、端部に細い刻目を施す。外面摩滅、内面ナデで、口縁内面にコゲが帯状に巡る。二次的に火を受け、内外とも赤褐色。15は強く屈曲させた口縁で、摩滅のため刻目の有無不明。調整不明であるが、口縁下に指頭圧痕が残る。外面黄褐色、内面赤褐色。15は胴上部の内に粘土を接合し、外反した口縁部を作る甕。胴上部の粘土接合部の突出した外面に刻目を施し、刻目突帯状の効果を出す。口縁端部、胴部の刻目とも細い工具により深く施文。外面板ナデ、内面摩滅。褐色を呈し、外面には煤、内面屈曲部より下にコゲ付着。17は粘土を貼付し外折口縁とした甕で、器壁の歪みが顕著であるが、図上で完形に復元。口縁は直線的に外傾し、端部に先端のやや広がった工具により刻目を施す。外面は摩滅するが、口縁下面及び底部外周に指ナデの痕跡が残る。口縁内面～胴内面は板ナデ、胴下部はナデ。褐色～淡褐色で、外面には煤、内面の口縁下から高さ9cm程の所までの間にコゲが付着。

18～21は底部片。18は内外ナデで、底部外面が環状に凹む。淡灰褐色を呈し、内面にコゲが付着。19は内外ナデで、底部外周の括れ部に接合痕が残る。明褐色。20は外面板状工具によるナデ、内面摩滅で褐灰色。21は内外摩滅し、淡褐色。

22はほぼ完形の小型鉢。如意状口縁で、内外ミガキ、黄褐色～黄灰褐色。23は大型鉢。口縁部は強く外反し、口縁直下に断面三角形の突帯を貼付するが、口縁端部、突帯とも刻目は施文されない。



第58图 68・70・71号土坑出土土器实测图 (1/4 1~8:±68、9~12:±70 13~24:±71)

内外ミガキ仕上げであるが、一部にミガキに先立つ板状工具痕が残る。暗褐色。

24の口縁は大きく欠損するが、図上で復元できた複合口縁壺。口縁部は稜で頸部と区分され、端部は角張る。頸部は緩やかに広がり、胴部境に断面三角形突帯。胴部は張りが強く、中間に断面三角形の突帯を巡らす。外面縦ハケ、頸部内面ナデ、胴部内面ハケメ。外面淡褐色、内面淡黄褐色。

これらの土器は上層から出土した土器に中期後半～後期前葉のもの（18・24）を含むが、他は前期末以前に遡る。

72号土坑（図版29、第59図）

C区に位置する。主軸を北東―南西に向けた長楕円形を呈し、北東側は若干、幅が広がり深くなる。長さ2.6m、幅1.2mを測る。平面形は確実であるが、図示できる遺物はない。褐灰色粘質土を覆土とする。

73号土坑（図版29、第59図）

E区に位置する。主軸をほぼ南北に向けた長方形の土坑で、北側に半円形のテラスが付く。テラスを含めた長さ1.8m、幅0.75mを測り、検出面からの深さ30cm弱である。覆土は褐灰色粘質土で、後期初頭の土器がまとまって出土した。土器の他に打製石鏃（第4表48）、打製石錐（第6表166）も出土している。

出土土器（図版62・63、第61図1～7） 1・2は複合口縁壺。いずれも微かな稜で口縁部と頸部が区別され、口縁端部は角張る。1は頸部と胴部の間が摩滅しているものの、断面M字状の突帯で区分される。外面は摩滅するが、頸上部にはハケメが残り、内面は口縁がナデ、頸上部に横ハケ、頸下部に縦ナデの痕跡が残る。

2は頸部と口縁部の間に断面台形の突帯が巡り、突帯下には補強のための1cm大の粘土粒が不規則に貼付される。外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、口縁部内面には指頭圧痕が残る。1は淡黄褐色であるが二次的に火を受け、橙変し、2は灰褐色。

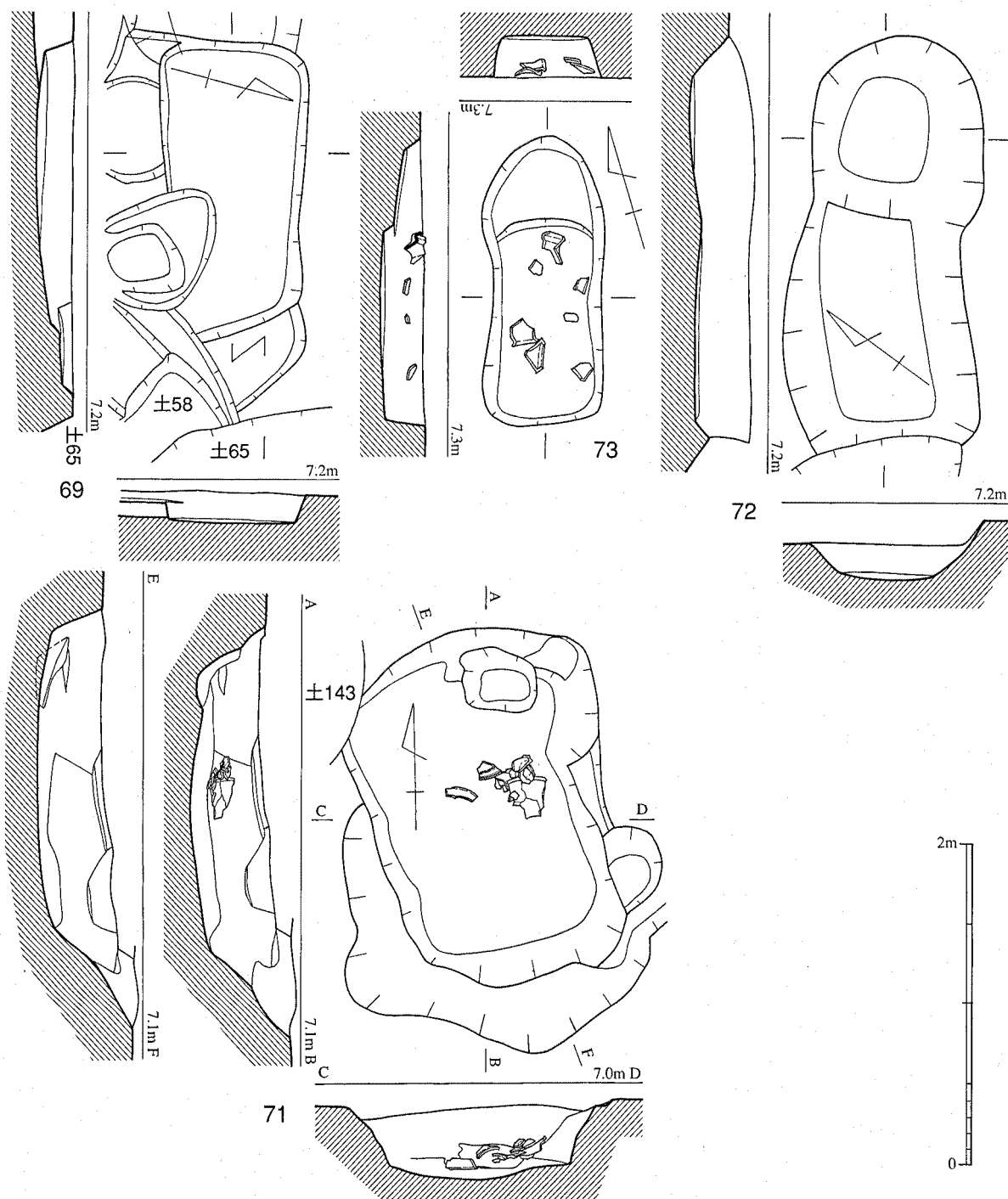
3～5は甕。3・4の口縁部は外反しながら断面「く」の字を呈し、端部が角張る。頸部は括れ、胴の張りも強い。胴部は内外ハケメ仕上げで、3は淡褐色、4は淡褐色～淡黄褐色。5は外折し端部が丸みを帯びた口縁で、頸部の括れは小さい。外面及び口縁部内面はハケメが残り、胴部内面は板ナデ仕上げ。灰褐色を呈するが、外面には煤がべっとり付着する。6は甕底部片で、外面ハケ、内面ナデ仕上げ。褐色～黄灰褐色を呈す。

以上の土器は後期初頭の一括と捉えられるが、7の鉢は前期末以前のものと推測される。口縁部は如意状に外反し、角張った端部にやや太い刻目を施す。外面ハケメが残り、口縁下面にも横方向のハケメ工具のあたりが観察できる。内面はナデ仕上げで、指頭圧痕が残る。外面淡褐色、内面黄灰褐色で、外面下部には煤が付着。

74号土坑（図版29、第60図）

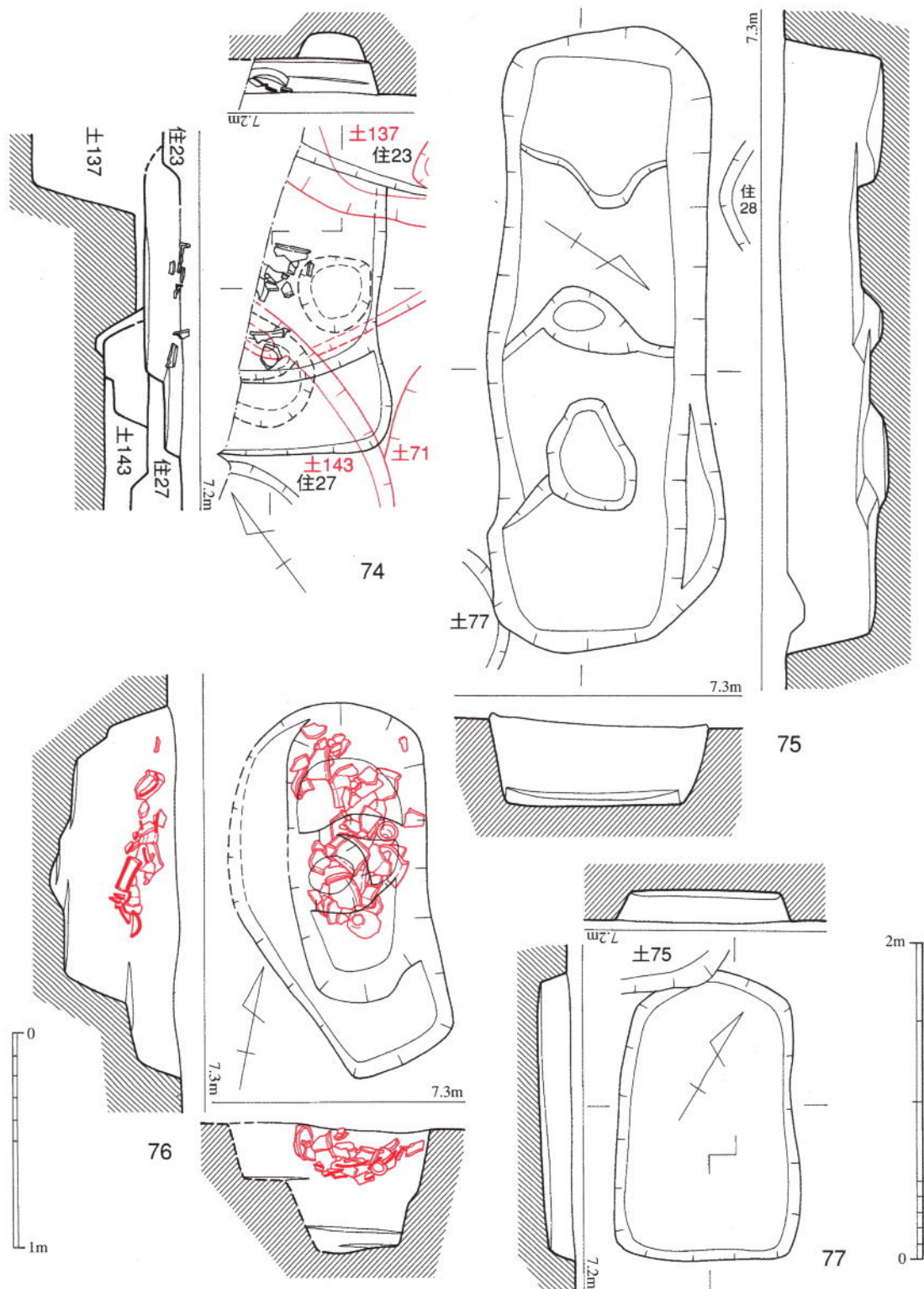
E区、北壁際に位置し、27号竪穴住居跡覆土に掘り込んでいる。切合関係は間違いないと考えられるが、下層に137・143号土坑などの遺構があるなど、切合いが複雑であり、細部の形態は不安が残る。調査区外へと延びているが、現状では北東―南西に主軸に向けた長方形ないしは方形の平面形に復元することができる。現存する範囲で長さ2.4m、幅1.05mを測る。床は南西側にテラスが付き、検出面からの深さ10cm余り、深い部分では後面から20cm前後である。覆土は暗褐色粘質土が主体で、焼土塊、炭を多く含む。土器の他に磨製石斧（第166図93）、打製石鏃（第4表49）も出土した。

出土土器（第61図12～14） いずれも甕口縁部片。12は外面丹塗甕で、口縁は鋤先状。口縁部は内



第59図 69・71～73号土坑実測図 (1/40)

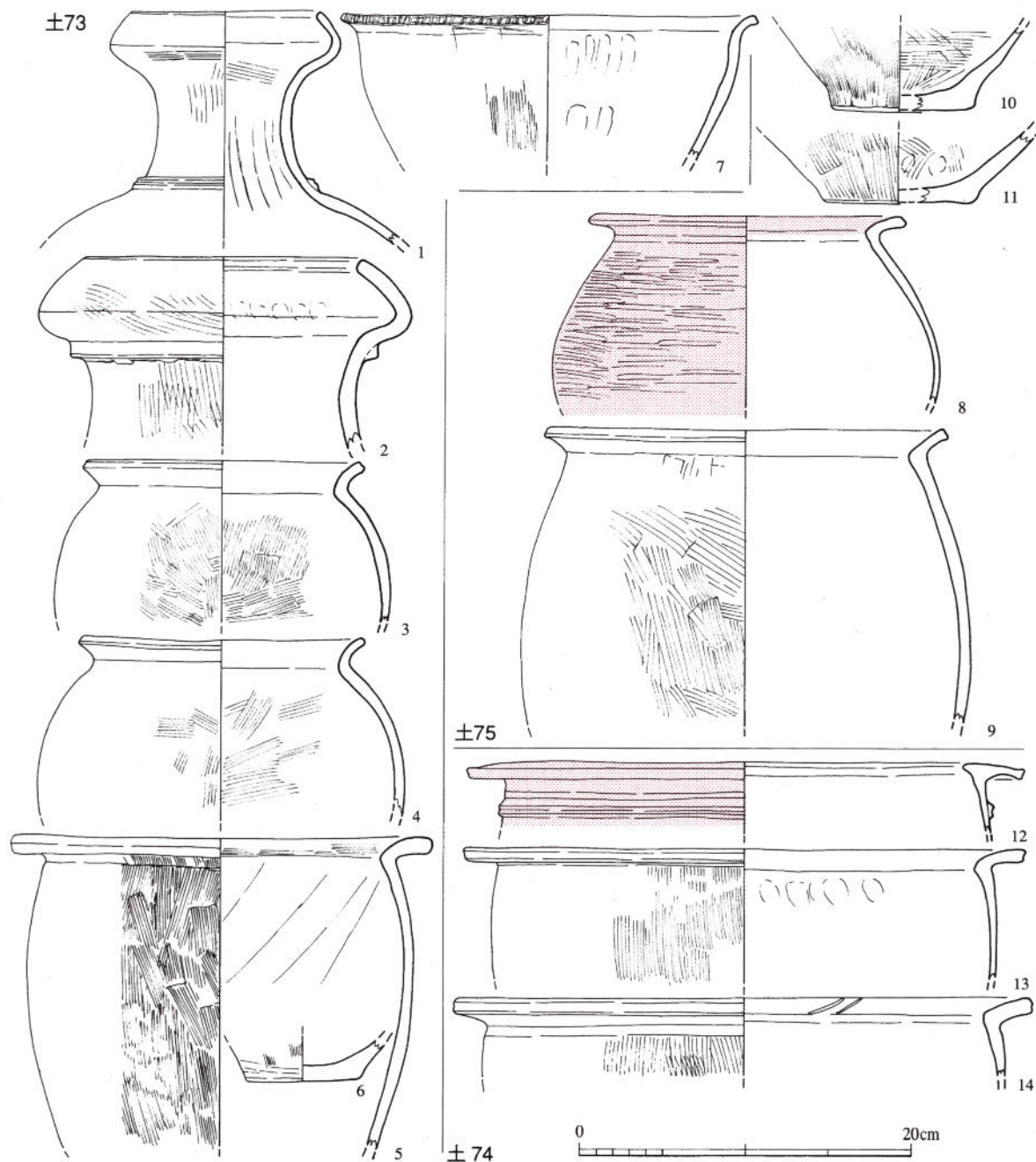
に強く突出し、上面は外傾する。口縁端部は摩滅するが本来は角張っていたと推測され、斜め方向の刻目を施す。口縁下に断面M字状突帯が巡る。内外摩滅し、生地は淡橙褐色。13・14は口縁部を外折させた甕で、いずれも端部はやや凹んだ面をなし、白褐色。外面はともに縦ハケ、内面は13がナデで、14は摩滅する。14は口縁部上面に2本の平行する意図的な沈線があり、頸部内面が細い面をなす事が特徴的である。



第60図 74～77号土坑実測図（土76は1／30、他は1／40）

75号土坑（図版30、第60図）

E区、28号竪穴住居跡の南東に位置する。他の遺構と切合いが少なく平面形はほぼ確実と考えられた。北東－南西方向に長軸を向けた長大な長方形を呈し、長さ3.9m、幅1.4mを測る。北東部は掘りすぎにより、広がっている。床面はピット状の凹みがあるが、全体的に平坦で、検出面からの



第61図 73～75号土坑出土土器実測図 (1/4 1～7:土73、8～11:土75 12～14:土74)

深さ50cm内外である。覆土は上部が黒褐色粘質土、下部が灰褐色粘質土であった。最下部には均質な暗褐灰色粘質土が推積していた。

出土土器(図版63、第61図8～11) 8は外面～口縁部内面を丹塗した無頸壺。口縁部は「く」の字に外傾し、1/3周残存するが穿孔はない。外面ミガキ、内面ナデ仕上げで、生地は灰褐色。

9は「く」の字口縁の甕。口縁は直線的に外傾し、端部は角張る。外面雑なハケ、内面ナデ仕上げ。明黄褐色が基調であるが、胴部内面コゲ、外面煤が付着。

10・11は壺底部片で、いずれも内外ハケメ仕上げ。10は煤、コゲのためか内外暗褐色。11は灰褐色を呈し、胎土に黒色針状の雲母が目立つ。これらの土器は中期末～後期初頭と考えられる。

76号土坑（図版30、第60図）

E区に位置し、28号竪穴住居跡覆土に掘り込んでいます。掘り間違いのため、西から南にかけて不整形のテラス状の段が付いたようになるが、土坑本体は主軸を南北に向けた長楕円形を呈する。楕円形部分は長さ1.4m、幅0.65mを測る。中央部に向かい緩やかに傾斜し、中央部でピット状に深くなる。検出面から最深部までの深さは60cmを測る。黒褐色粘質土を埋土とし、覆土上部から一括で後期初頭～前葉の土器が出土した。

出土土器（図版63、第62図1～10） 1～4は「く」の字状口縁甕。1・2は口縁端部が角張り、頸部の括れが強い。いずれも図上で完形に復元したもので、胴部内外、口縁部内面ハケメ仕上げ。1は口縁部外面にナデ、ハケメ工具のあたりの稜が残る。ともに灰褐色を呈し、二次的に火を受けて、外面赤変、内面褐変する破片があることも共通する。3は頸部の括れが弱い点で、1・2と異なる。胴部外面及び口縁部内面ハケ、口縁部外面ナデで、胴部内面はハケメをナデ消している。褐灰色を基調とするが、煤、コゲにより暗褐色に変色。4は胴部の張りが強い大形甕。口縁端は丸く、内外ハケメで、胴部外面は特に粗い工具を用いる。外面淡黄褐色、内面褐色～橙褐色。5～7は壺底部。5は外面板ナデ、内面ナデで、黄灰褐色。6は外面ミガキの精製品で、内面は摩滅。外面淡褐色、内面黄褐色。7は胴部が小さく外面縦ハケ、内面指頭圧痕の残るナデ。淡褐色～褐灰色。8～10は指ナデ仕上げの粗製支脚。8は上部を深く穿ち、上げ底状。9は鼓形を呈すと考えられるが、内面は剥離。10は上部がすばまり器高の低いもの。上部は筒状で、下部は大きく凹む。8・9は淡褐色、10は外面淡褐黄色、内面灰褐色。いずれも砂粒は少なく、8・10はスサを多く含む。

77号土坑（図版31、第60図）

E区、75号土坑の南東に位置する。切合いが少なく平面形はほぼ確実と考えられ、長軸を北西－南東に向けたやや歪んだ長方形を呈し、床面はほぼ平坦である。長さ1.8m、幅1.2m、検出面からの深さは20cm内外である。覆土は灰褐色粘質土。図示できる遺物はない。

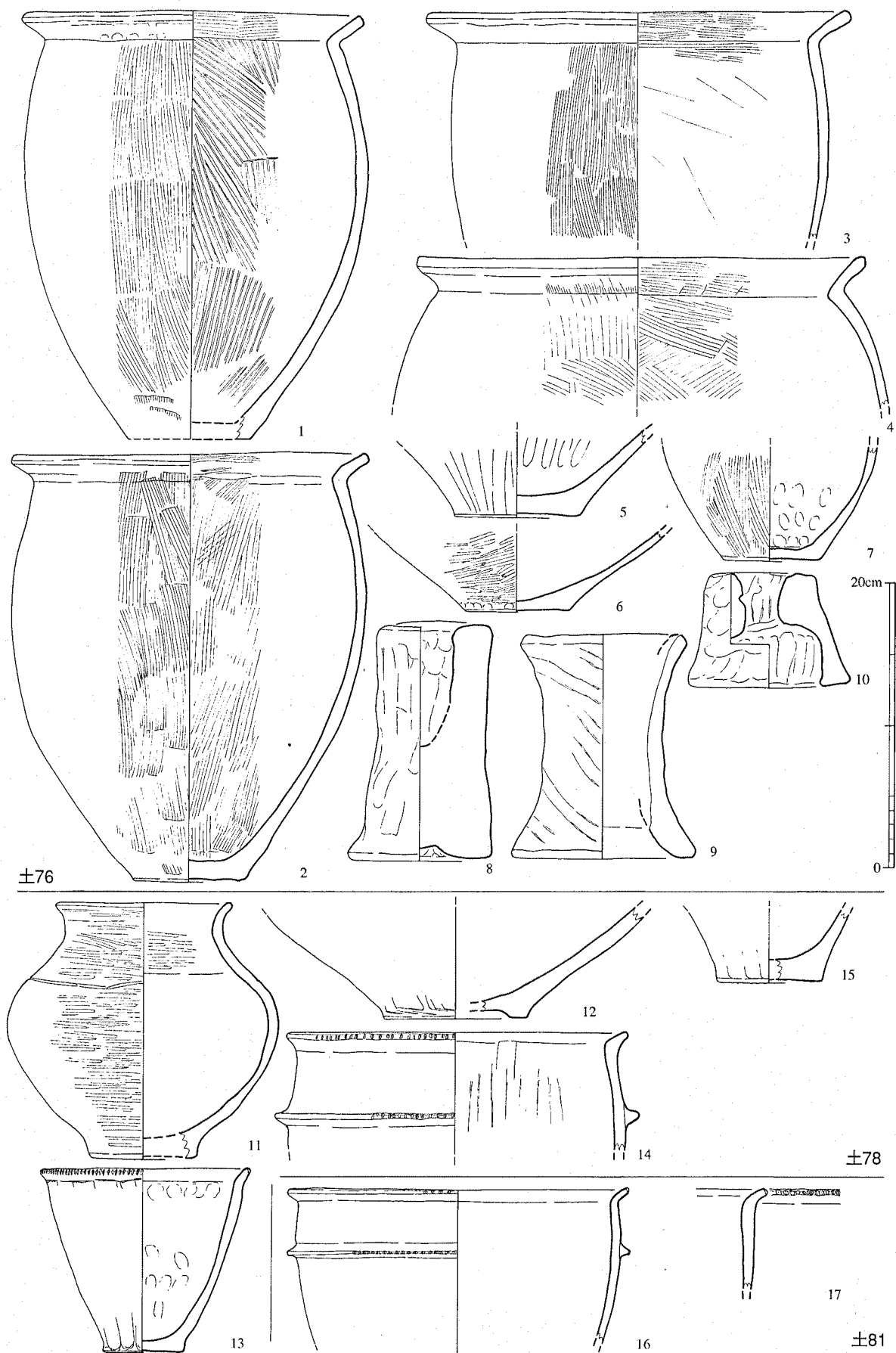
78号土坑（図版30、第63図）

E区、24号竪穴住居跡の西に位置し、82号竪穴住居跡を切る。長軸を北西－南東方向に向けた長方形の土坑本体の南東側に半円形の幅0.45mのテラスが付く。テラスまで含めた全長は2.55m、幅1.6mを測る。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さ45cm弱である。覆土は上部が暗褐灰色粘質シルト、下部が灰褐色粘質シルトと暗褐灰色粘質土が互層をなしていた。輪郭は明瞭であったため、出土遺物の一括性は良好と評価できる。

出土土器（図版63、第63図11～15） 11は底部を欠損する壺。口縁部は緩やかに外反し、胴部の張りが強く、底部は円板状に突出していたと思われる。肩部に1条の沈線を断続的に施文して巡らす。外面～頸部内面は横ミガキ、胴部はナデで仕上げ、淡灰褐色。12は大形壺底部片。底部は高台状で、内外摩滅するが、底部外周に板状工具の痕跡が残る。黄褐色。

13は如意状口縁甕で、口縁は短く外傾し、端部に細く深い刻目を施す。内外ナデ仕上げで、頸部外面には板状工具のあたり、内面には指頭圧痕が残る。淡褐色で、外面には煤、二次加熱による黒変が見られる。14は如意状口縁で胴部に突帯を巡らした甕。摩滅により形態は判然としないが、口縁端部、突帯頂部に刻目を施す。内外ナデ仕上げで、内面には工具による縦方向の微かな稜が残る。灰褐色～淡褐白色を呈し、外面には煤がうっすら付着。15は内外摩滅した甕底部片。黄褐色を呈し、外面は煤が付着。

これらの土器は前期後半の一括と考えられる。



第62图 76·78·81号土坑出土土器实测图 (1/4 1~10: ±76、11~15: ±78 16·17: ±81)

79号土坑（第63図）

E・F区に位置する。主軸を北東－南西に向けた歪んだ四辺形を呈し、長さ1.15mを測り、幅0.9mに復元できる。覆土は暗褐灰色粘質土で、輪郭は明瞭であったが、図示できる土器はないが、打製石鏃（第4表50）・砥石（第169図129）が出土。

80号土坑（図版31、第63図）

E・F区に位置し、81号土坑に切られ、平面形、切合関係は不安である。主軸を北西－南東に向けた歪んだ楕円形が本体であるが、掘り過ぎのため、東西に不自然なテラス状の段が生じてしまった。本体部分で長さ1.5m、幅0.8m、検出面からの深さ30cm内外である。覆土上部は暗褐灰色粘質土、下部は灰褐色粘質土。図示できる遺物はない。

81号土坑（第63図）

F区に位置し、80号土坑を切り、83号土坑に切られると考えて、遺構を検出したが、輪郭、切合関係は不安である。北西－南東方向に主軸を向けた幅広の楕円形と復元できるが、南東部は83号土坑に切られ、全容は不明である。現状で長さ1.15m、幅0.7m、検出面からの深さ15cmを測る。炭を多く含む暗褐灰色粘質土が覆土の主体であった。

出土土器（第62図16・17） 16は刻目を施す如意状口縁、胴部刻目突帯の甕。刻目は摩滅するが、いずれも幅広い。内外ナデで、外面淡褐色、内面灰黄褐色を呈し、外面突帯下に煤付着。17は如意状甕口縁部で、端部に幅広の浅い刻目を密に施す。内外ナデで、外面黄白褐色、内面灰白褐色。

82号土坑（図版35、第63図）

E区に位置し、78号土坑、24号竪穴住居跡に切られる。長軸を北東－南西に向けた歪んだ長方形の平面形を呈す。長さ1.55m、幅1.15mを測る。床面はほぼ平坦で検出面からの深さ45cm内外であるが、南西部に長楕円形のピット状凹みがある。平面形、切合いはほぼ確実で、暗褐灰色粘質土を覆土とする。

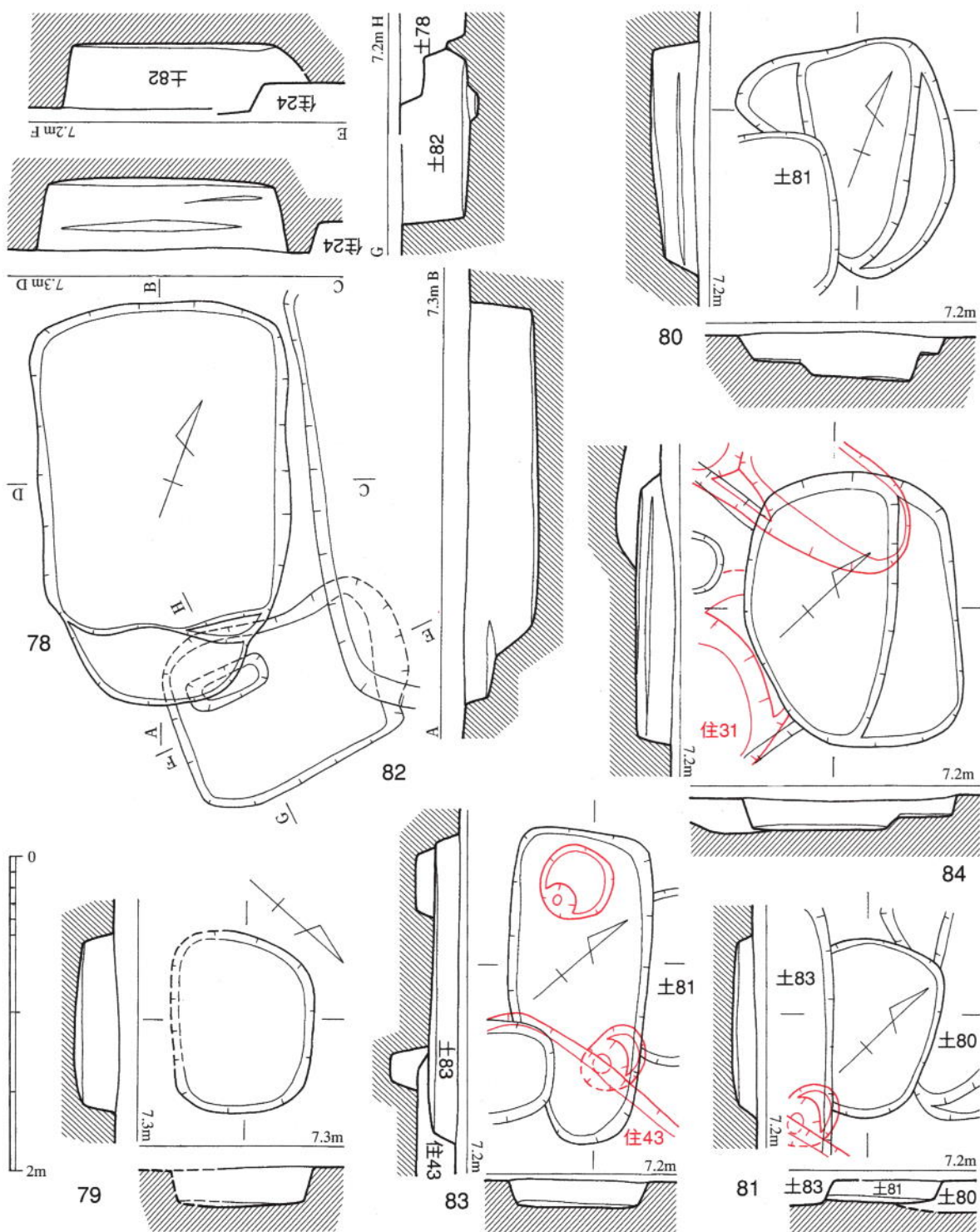
出土土器（図版63、第65図1・2） 1は壺胴部片で傾き、径は不安。底径も図示したほど大きくない可能性がある。肩部に2条の沈線を巡らし、胴上部に重弧文を配置する。重弧文は二枚貝腹縁を押し付けた後、右下に沈線を加筆し完成させる。外面ミガキ、内面は頸部ミガキ、胴上部ナデ、胴下部ミガキ仕上げ。黄灰色を呈す。2は壺底部で外面ミガキ、内面ナデ。灰白褐色を呈す。以上の土器はいずれも前期末以前か。

83号土坑（図版32、第63図）

F区に位置し、81号土坑を壊して掘り込んでいると考えたが、輪郭、切合いは不安である。現状では主軸を北西－南東に向け、北西壁が直線的な長楕円形に近い形態である。長さ2.0m、幅0.9mを測り、検出面からの深さは20cm弱である。南東側下層には43号竪穴住居跡が検出された。覆土は褐灰色粘質土。図示できる土器はないが、土製紡錘車（第162図31）が出土した。

84号土坑（図版32、第63図）

F区に位置し、31号竪穴住居跡を切っている。主軸を北西－南東に向けた楕円形の平面と考えた。北東側にはテラス状の広がりを図示しているが、掘り過ぎたためである。土坑本体部分では長さ1.75m、幅0.95mを測り、検出面からの深さ20cm内外。遺構の切合いが顕著なため、輪郭は不安であり、遺物も少なく、図示できない。

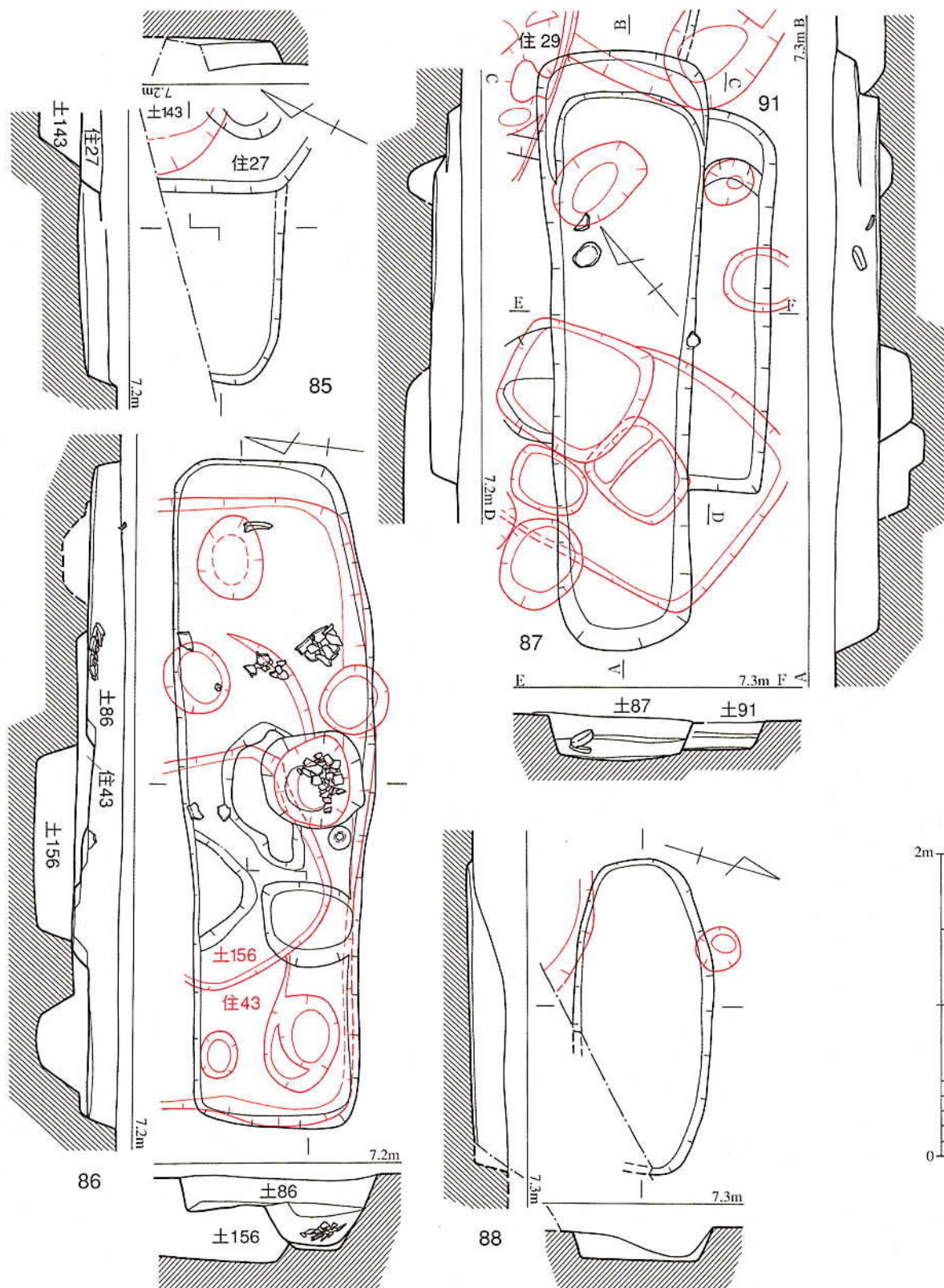


第63図 78～84号土坑実測図 (1/40)

85号土坑 (第64図)

E区の北壁際に位置し、27号竪穴住居跡に切られる。調査区外に延びることに加え、27号住居跡に切られるため全容は不明であるが、北東-南西方向に主軸を向けた長方形ないしは方形の平面形と考えられる。現状で長さ1.25m、幅0.85m、検出面からの深さ20cm弱である。

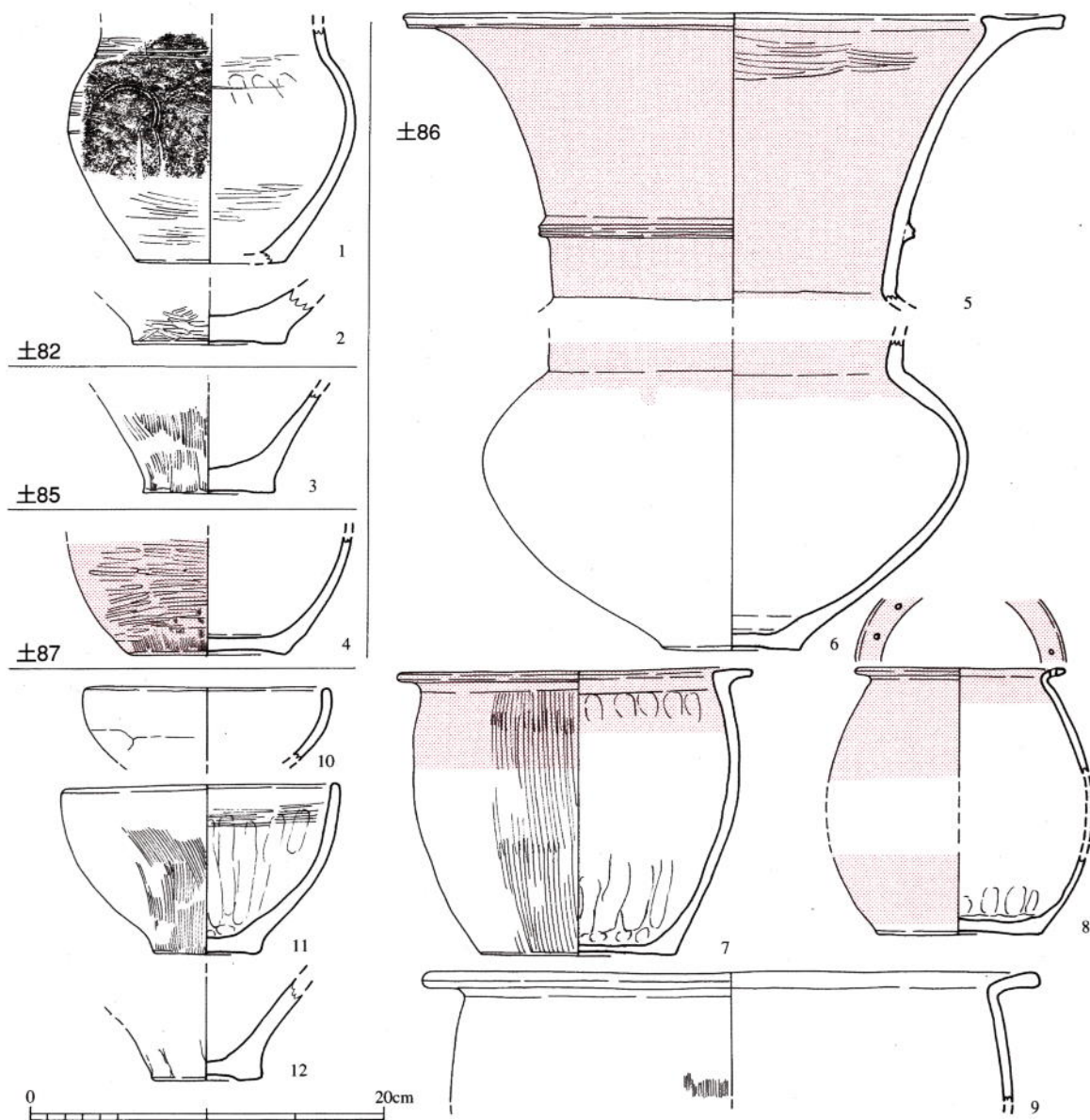
出土土器 (第65図3) 甕底部で外面ハケ、内ナデ。明褐色だが、内面は焼成不良で暗灰褐色。



第64図 85～88・91号土坑実測図（1／40）

86号土坑（図版33、第64図）

E・F区に位置し、30・43号竪穴住居跡を切ると考えて発掘調査した。ただ、本土坑と下層で検出し



第65図 82・85～87号土坑出土土器実測図（1／4 1・2：土82、3：土85、4：土87、5～12：土86）

た43号竪穴住居跡の南辺が一致しており、43号竪穴住居跡の一部を土坑と誤認した恐れがある。このような問題はあるが、ここでは調査段階での所見をそのまま報告する事にしたい。土坑は主軸をほぼ東西方向に向けた長さ4.4m、幅1.1～1.3mのほぼ長方形を呈す。床面では南壁中央に土器がまとまって出土したピットがあり、その北側に黄褐色粘質土積土が広がっていた。

このピットは43号住居跡の壁際土坑とも一致しており、本土坑が43号住居跡の一部であった可能性を強めている。検出面から床面までの深さは20cm内外であるが、南壁中央ピット床面は深さ45cmを測る。下層では156号土坑も検出された。

出土土器（図版64、第65図5～12） 5は広口壺口頸部片、6は広口壺胴部片で、接合しないが同一個体と推測される。丹塗は肩部内外までで、胴部外面には及ばない。口縁部上面はほぼ水平で外端部は角張り、頸部外面に断面M字状突帯が巡る。胴部は張りが強い。内外ナデ仕上げであるが、内面口縁下に横ミガキが残る。胴部内外は摩滅のため調整不明。いずれも淡黄褐色を呈す。

7は外面ハケ、内面ナデ仕上げの樽形甕。完形に復元でき、口縁内外に丹塗する点が特異である。口縁は外折し、上面はわずかに内傾した面をなす。口縁部内面、胴下部内面に指ナデの痕跡が残る。外面淡黄褐色、内面褐色。8は口縁部と底部に分離しているが同一個体と考えられる丹塗無頸壺。口縁部は強く屈曲して外反し、上面に3箇所穿孔が残る。内外摩滅するが、胴下部内面に指頭圧痕が残る。外面橙褐色、内面灰褐色を呈し、外面に二次的に火を受けたためか煤が付着。9は外折した口縁の甕。口縁部は直線的に外傾し、端部は丸みを帯びる。内外摩滅で、淡褐色。12は甕底部。弱い上げ底状をなし、内外ナデ仕上げで、外面には板状工具の稜が残る。黄灰褐色を呈すが、二次的に火を受け橙褐色に変色。

10・11は単口縁の鉢。10は口縁部片で内外摩滅し、白黄褐色。11は完形で、口縁部は直立する。外面縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴上部横方向板ナデ、胴下部指によるナデ上げ。明褐色を呈す。

これらの土器は中期後半でも新しい時期の一括と捉えられる。

87号土坑（図版32、第64図）

F区に位置し、29号竪穴住居跡、91号土坑を切る。長軸を北東－南西方向に向けた北東側がやや幅広くなる長方形を呈す。長さ4.0m、最大幅1.15mを測るが、北東壁際のテラス部分は掘り過ぎの可能性があるので、若干短くなるか。床面は平坦で、深さ30cm内外。炭の多い暗褐色粘質土を覆土とし、平面形はほぼ間違いがないが、切合いが複雑で、周辺遺構の遺物が混入した恐れがある。

出土土器（図版63、第65図4） 外面丹塗の無頸壺底部片で、底部は弱い上げ底状になる。外面は底部外周縦ハケ、胴部横ミガキで、内面はナデ。生地は淡橙褐色。

88号土坑（図版32、第64図）

F区調査区南壁際、86号土坑の南に位置する。平面形はやや不安であるが、ほぼ東西方向に長軸に向けた楕円形を呈し、長さ2.1m、幅0.95mを測る。覆土は暗灰褐色粘質土で、検出面からの深さ20cm前後。図示できる出土遺物はない。

89号土坑（図版33、第66図）

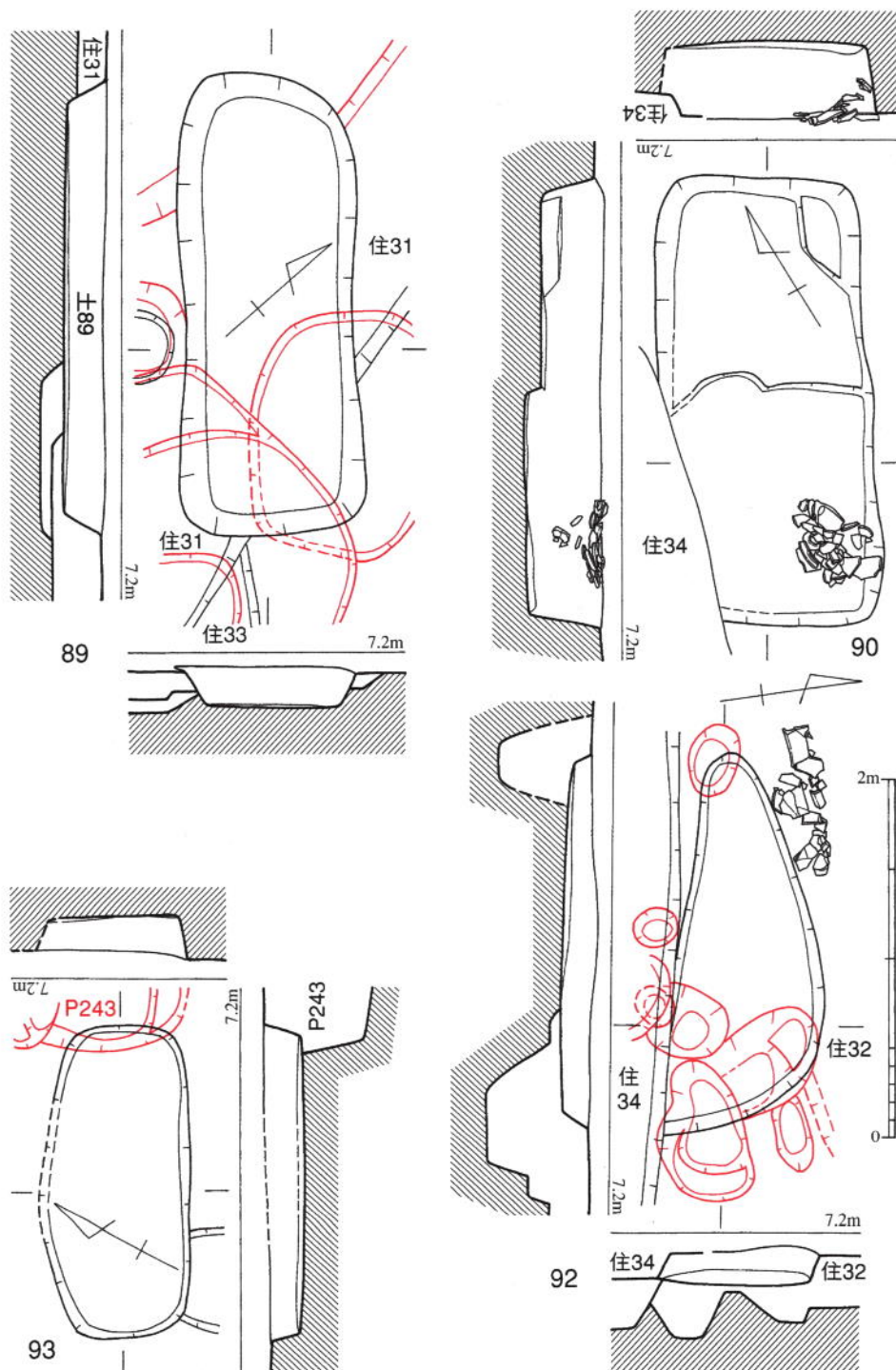
F区に位置し、31号竪穴住居跡覆土に掘り込まれている。長軸を北西－南東に向けた長方形を呈し、長さ2.55m、幅1.0m、検出面からの深さ20cmを測る。平面形は確実であるが、遺物は少なく、図示できない。炭を少し含む灰褐色粘質土を覆土とする。

90号土坑（図版33、第66図）

F区に位置し、34号竪穴住居跡に切られ、33号竪穴住居跡を切ると考えて発掘調査した。長軸を北東－南西に向けた長方形を呈し、長さ2.5m、幅1.2mを測る。北東隅には踏み段状のテラスがある。床面は南西半分が深くなるが、少し掘り過ぎたためである。検出面からの深さは本来、35cm内外で、床面は平坦であったと考えられる。南東隅の上部から土器がまとまって出土した。覆土は灰褐色粘質土を主体とするが、下部は炭を多く含む。土坑内及び南外の包含層より打製石鏃（第4表51・52）が出土した。

出土土器（図版64、第67図1～8） 1～3は内外丹塗の広口壺口縁部。1・2は頸部近くで破損し、口縁はさほど長く伸びない事が分かる。1は内外摩滅するが、外面に暗文風縦ミガキが残る。2は内外横ミガキの後、暗文風縦ミガキを分割して施文する。3は摩滅が顕著で、かすかに内面に横ミガキが残るのみ。1の生地は淡黄褐色で、二次的に火を受け赤変。2・3の生地は淡褐色～灰褐色。

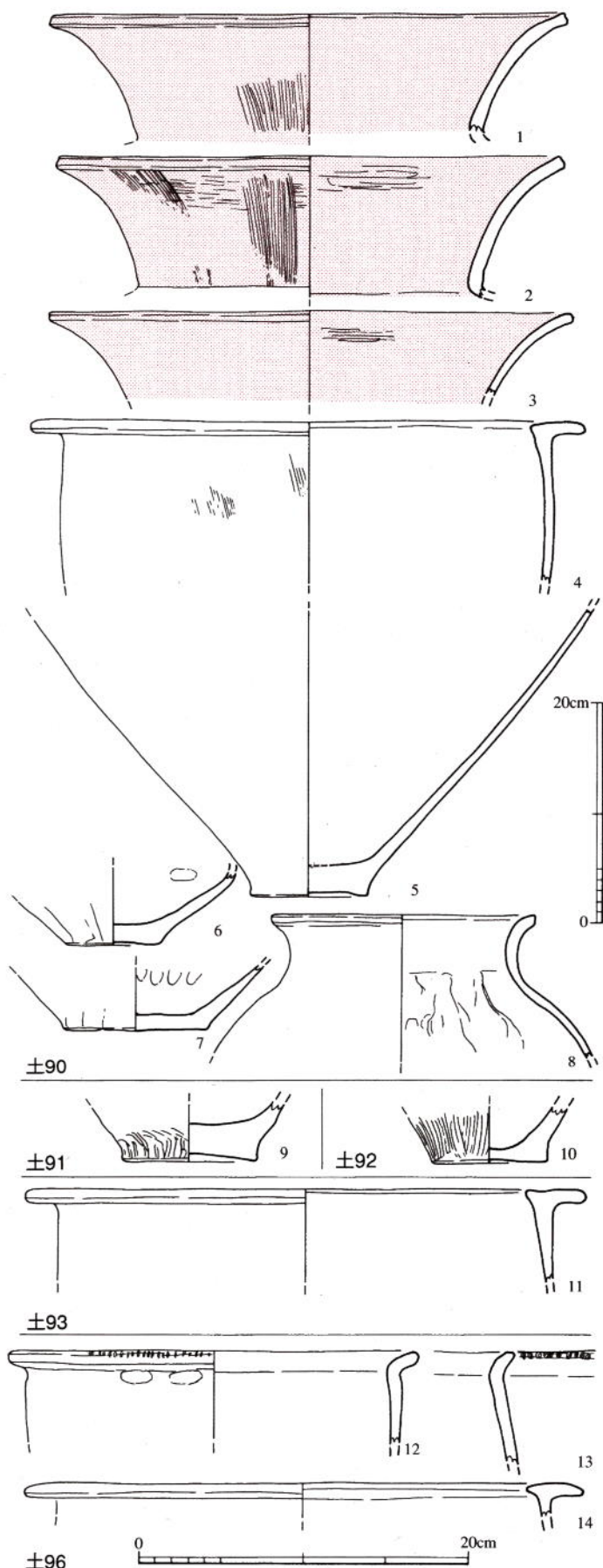
4は鋤先口縁甕。口縁部はほぼ水平で、内への突出は弱い。内外摩滅が顕著であるが、外面には縦ハケが遺存。黄白褐色を基調とするが、二次的に火を受け、赤変、黒変する。5は大形甕の胴下部～底部



第66図 89・90・92・93号土坑実測図（1/40）

片。底部は厚くやや上げ底状で、胴部は直線的に開く。内外ナデ仕上げで、外面には擦痕が残る。外面明褐色、内面淡灰褐色で、内底部近くはコゲが帯状に付着。6・7は壺底部。6はわずかに上げ底で、底径が小さいため、無頸壺かと推測される。内外ナデ仕上げで、外面は板状工具による稜が残る。褐白色。7は内外摩滅するが、内面に指頭圧痕が残る。黄白褐色で、底は二次的に火を受け赤変。以上の土器は中期中頃の一括遺物と考えられる。

8は90号土坑南の包含層から出土した壺。胴部から緩やかに外反しながら頸部がのび、やや角張った



第67図 90～93・96号土坑出土土器実測図（5は1/6
他は1/4 1～8：±90、9：±91、
10：±92、11：±93、12～14：±96）

口縁端部に至る。外面は摩滅するが、口縁部の横ナデは丁寧である。内面は絞り後ナデ。淡灰褐色。

91号土坑（図版34、第64図）

F区に位置し、87号土坑に切られると考えたが、形態は不安である。主軸を北東－南西に向けた長方形を呈し、北東側にテラスがつく。

現存する範囲で長さ2.5m、幅0.5mを測る。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さ20cm余り。覆土は暗褐灰色粘質土であった。土器の他に打製石鏃（第6表165－2）が出土した。

出土土器（第67図9） 壺底部。底部外周はわずかに括れ、底部は上げ底状になる。外面粗いミガキ、内面ナデで、淡灰褐色を呈する。

92号土坑（図版、第66図）

F区、32号竪穴住居跡南壁の上面に位置し、34号竪穴住居跡に切られている。覆土は暗褐色粘質土で、その上層に炭が堆積する範囲を土坑と捉えたが、輪郭は不明瞭で、平面形は不安であった。現状では長軸を東西に向け、東が幅広になる楕円形に近い平面であり、長さ2.1m、現存最大幅0.85mを測る。検出面からの深さ20cm弱で、床面はほぼ平坦であった。土器の他に石鏃（第164図62）、打製石鏃（第4表53～55）が出土した。

出土土器（第67図10） 甕底部。外面縦ハケ、内面ナデ。淡黄褐色を呈するが、外面は二次的に火を受ける。

93号土坑（図版34、第66図）

F・G区に所在し、34号竪穴住居跡の南に位置する。長軸を北東－南西に向けた隅丸長方形を呈し、長さ1.75m、復元幅0.85mを測る。検出面からの深さ20cm余りで、覆土は灰褐色粘質土。

出土土器（第67図11） 鋤先状の甕口縁部片。口縁上面はほぼ水平で、内への突出は弱い。調整不明で、白褐色を呈す。

94号土坑（図第68図）

G区に位置し、37号竪穴住居跡を壊して掘り込まれている。長軸をほぼ東西に向けた楕円形を呈しているが、床面で2基のピットが切合うよう東西が凹んでおり、2基のピットの切合いと捉えるべきであったか。また、北東側では別のピットと切合っている。現状で長さ1.55m、幅1.0mを測り、検出面から西側最深部までの深さ60cmである。覆土は灰褐色粘質土が主体であるが、下部には黄灰色地山シルトブロックが含まれる。図示できる遺物はない。

95号土坑（図版35、第68図）

G区、97・99号土坑の間に位置する。長軸をほぼ南北に向けた楕円形を呈し、長さ1.25m、幅0.85mを測る。床面は南北端にテラスが付き、中央に2箇所、ピット状の凹みがある。検出面から最深部までの深さ35cmを測る。褐灰色粘質土を覆土とする。周辺の包含層より打製石鏃（第4表56）、打製石錐（第6表167）が出土したが、図示できる土器はない。

96号土坑（図版35、第68図）

G区に位置し、37号竪穴住居跡を切っている。主軸をほぼ南北に向けた小形の楕円形を呈し、南ではP126を切っている。長さ0.95m、幅0.6mを測り、検出面から床面までの深さ60cmを測る。灰褐色粘質土を覆土とする。

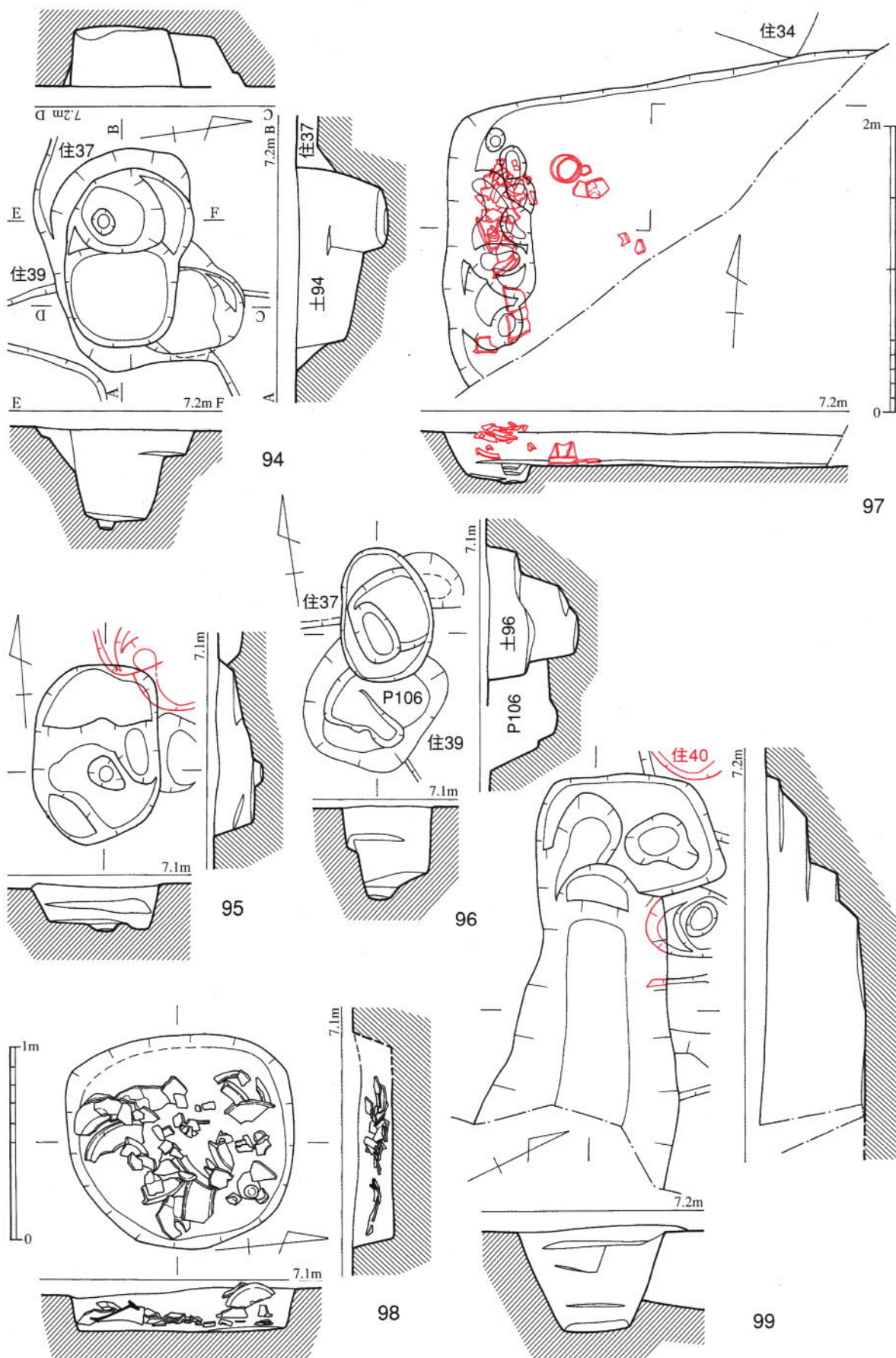
出土土器（第67図12～14） 12・13は如意状の甕口縁部。12は口縁部が直線的に外傾し、端部上方から細く鋭利な工具で刻目を施す。内外ナデ仕上げで、外面口縁下にかすかな指頭圧痕が残る。外面暗褐色、内面淡褐灰色。13口縁は緩やかに外反し、端部に太く先端の丸い工具の刻目を施す。淡灰褐色～褐色で、外面に煤付着。14は鋤先口縁甕小片。口縁部上面は丸みをもって外傾し、内への突出も顕著。内外摩滅し、淡灰褐色。以上の土器は12・13が前期末以前、14は中期後半と時期幅が大きく、遺構の時期決定は困難。

97号土坑（図版34、第68図）

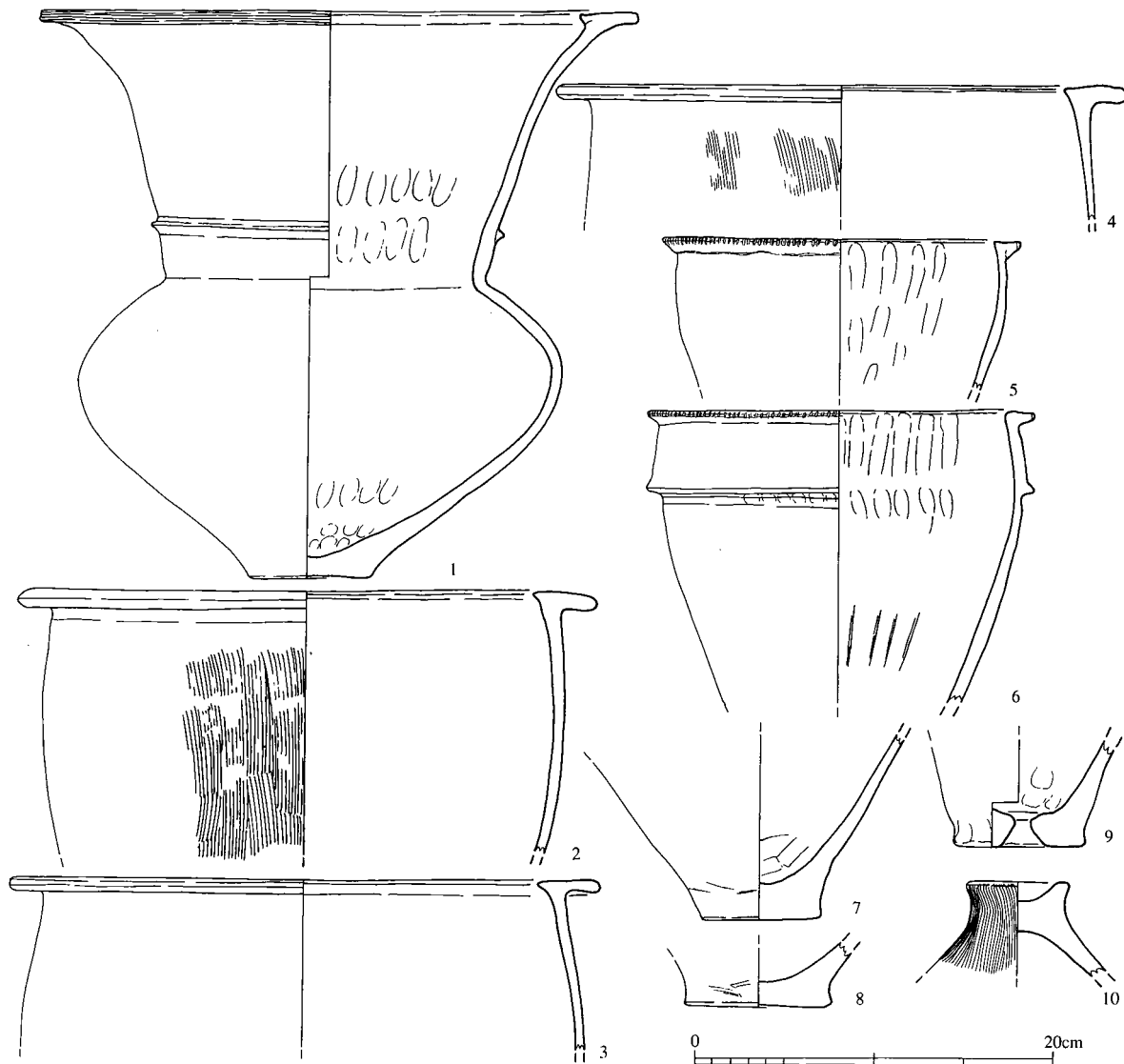
G区、34号竪穴住居跡の南の調査区壁際に位置する。ほぼ東西に主軸を向けた方形ないしは長方形の土坑と考えたが、中期後半の土器と前期末の土器が出土しており、時期の異なる土坑が切合っていた可能性が高い。中期後半の土器（1～3）は西壁際から上部からまとも出土しており、その直下の床面は凹凸が顕著であった。西壁際に南北方向に主軸を向ける中期の土坑が位置していた可能性が高い。一方、その東では中期の土器の出土は少なかったため、東西方向に主軸を向け、平坦な床面の前期末の土坑があったと推測される。西壁際の最深部は検出面から深さ35cmを測る。覆土中には30cm大の青灰色粘土塊が含まれていた。土器の他に砥石（第168図120）が出土。

出土土器（図版64、第69図） 1は図上で完形に復元できる鋤先口縁広口壺。口縁部は上面が水平で、内面への突出は小さいながらも明瞭。頸部外面には断面三角形の突帯を貼付する。頸部は内外とも明瞭な稜をなし、胴部の張りは顕著。内面はナデ仕上げで、頸部内面、底部近くに指頭圧痕が巡る。外面黄褐色、内面淡褐色を呈し、砂粒を多く含む。

2～4は鋤先口縁甕の胴上部破片。2の口縁上面はわずかに外傾するが、他は水平で、内への突出も明瞭である。外面はいずれもハケメ仕上げで、内面は2ナデ、他は摩滅で不明。2は淡灰褐色、3は淡褐色、4は外面淡黄褐色、内面白褐色を呈し、4は二次的に火を受け赤変する。



第68図 94～99号土坑実測図（土98は1／30、他は1／40）



第69図 97号土坑出土土器実測図（1／4）

5・6は口縁に刻目突帯を貼付した甕。5は口縁部を水平に拡張し、端部に細く深い刻目を施す。外面ナデ、内面ナデ上げで、外面灰褐色、内面淡黄褐色を呈する。6は口縁部を水平に拡張し、先端の丸い工具で刻目を施す。突帯頂部は摩滅のため、刻目の有無不明。外面は摩滅するが、突帯下には指頭圧痕が残る。内面は上部にナデ上げ、指頭圧痕が残る、下部には板状工具の擦痕が観察できる。淡褐色を呈し、突帯より下部の内面にはコゲが付着。

7～9は前期末に遡る甕底部で、9は焼成後穿孔により甑に転用している。いずれも外面は摩滅するが、7は板状工具によるナデ、8はミガキが底部外周に残る。内面はいずれもナデ仕上げ。7外面・9外面は褐色、7内面・8は淡灰褐色、9内面は淡黄褐色。

10は外面暗褐色、内面淡灰褐色の蓋で、外面ハケ、内面ナデにより仕上げる。頂部の大きく凹む点が特徴的である。

98号土坑（図版34、第68図）

G区に位置し、111号土坑を切り、平面形はほぼ間違いないと考えられる。直径1.15mの円形に近い平面形で、検出面からの深さは20cm余り。褐灰色粘質土を覆土とし、内部から多くの土器が出土したが、土器周辺には炭化物を多く含む黒色土が堆積していた。

出土土器（図版64・65、第70図1～14） 1～3は大形広口壺の破片で、4・6はその底部となろう。1～3はいずれも頸部から大きく開き、上面が外傾し、内への突出が顕著な鋤先口縁。3は口縁内面に接合痕が観察できる。1は頸部に1条、3は胴上部に2条の断面三角形突帯を貼付する。いずれも調整は摩滅する部分が多いが、1内面・3胴部内面・4内面はナデ仕上げで、1内面・3胴部内面・6底部近く内面には指頭圧痕が残る。1外面・2・3は淡黄褐色、1内面は暗褐色、4は二次的に火を受け赤褐色、6外面は淡灰褐色、7内面は淡褐白色を呈す。

5は無頸壺。口縁が外折し、上面は水平である。1／4周遺存するが、穿孔は見られない。外面摩滅、内面ナデ仕上げで、黄灰褐色。砂粒が少なく、丹塗を施した可能性が高いが遺存せず。

7・8は鋤先口縁甕。口縁部はわずかに内傾し、外への突出が小さい。いずれも胴部外面縦ハケ、内面摩滅で、7は淡橙褐色、8は淡褐灰色。8は二次的に火を受け、内面の一部が橙褐色に変色。

9・10は鋤先口縁の高杯杯部片。9は口縁上面が水平に近く、内外摩滅。黄灰褐色～黄褐色を呈し、摩滅のため丹塗は確認できない。10は口縁上面が外傾し、内への突出も顕著。内面ミガキで丹塗するが、外面は摩滅のため丹塗は遺存せず。生地は白褐色～淡褐色を呈すが、二次的に火を受け、赤変、煤付着が見られる。11は高杯杯下部～脚部破片。杯部は充填法で脚部と接合し、裾に向けて緩やかに広がり、裾端部は角張る。脚内面上部に絞り痕が残るが、他は摩滅し、丹塗も確認できない。二次的に火を受けたためか、生地は赤褐色。

12・13は壺底部片。12は摩滅のため調整不明で、白灰褐色。13は外面摩滅、内面ナデで、淡黄褐色を呈す。14は小形の甕底部か。外面縦ハケ、内面ナデ。灰白褐色～灰黄褐色を呈し、外面には煤がうっすら付着。

7・8は中期前半でも新しい頃と考えられるが、他は中期後半でも古い頃の一括と捉えられる。

99号土坑（図版36、第68図）

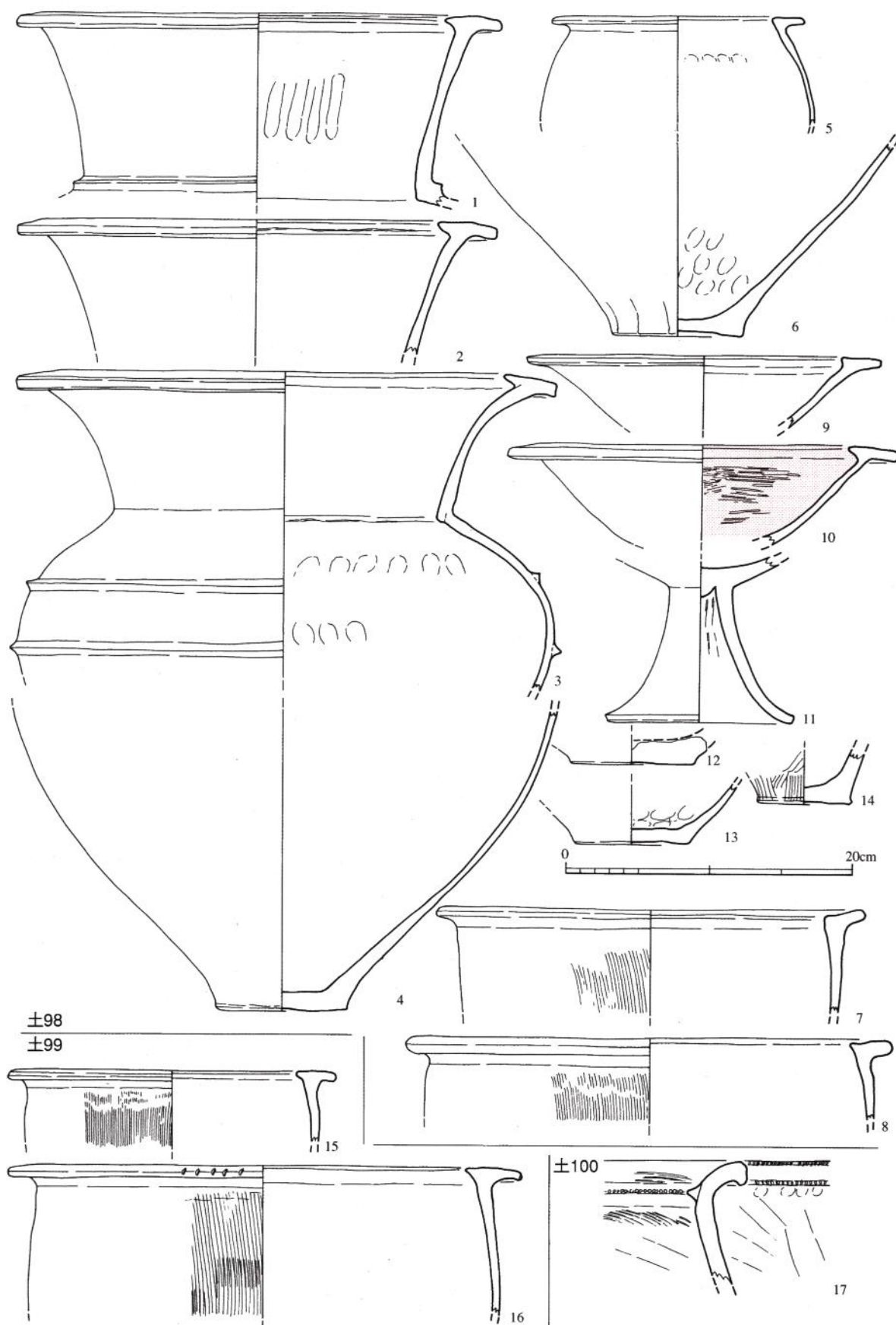
G区の調査区南壁際、40号竪穴住居跡の南に位置する。調査区外へと延びているが、主軸をほぼ北西－南東方向に向けた長楕円形を呈する。南北方向に主軸を向けたP46を完掘したところ、その床面で、北西端を検出したので、平面形はほぼ確実と考えられる。土坑本体は中軸線上で現存長1.75m、最大幅1.3mを測る。床面は検出面からの深さ70cmを測る。覆土上部は灰褐色粘質土、下部はよくしまった黒褐色粘質土。土器の他に碧玉製管玉（第164図72）が出土。

出土土器（図版65、第70図15・16） 15・16は甕胴上部破片で、ともに99号土坑西外の包含層から出土した。口縁部は鋤先状で、いずれも上面はわずかに外傾し、内への突出も顕著。16は口縁端部の一部にのみ刻目が施される。いずれも外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。15は外面淡灰褐色、内面淡黄褐色。16は外面褐色、内面黄白褐色で、外面には煤が付着。

100号土坑（図版36、第71図）

G区、34号竪穴住居跡に切られ、37・44号竪穴住居跡の間に位置する。現状で主軸を北西－南東に向けた歪んだ楕円形を呈し、南東端は34号住居跡の下層に位置するため十分な記録ができなかった。現状で長さ2.6m、幅1.7mを測る。床面は南東部がやや深くなり、3基のピット状の凹みがある。南東部の床面は検出面からの深さ40cm前後で、ピット状凹みはいずれも5～10cm程の深さ。灰褐色粘質土を覆土とし、黄色地山シルト、炭を少し含む。土器の他にヘラ状石製品（第164図70）、石英質石器（第9表1016・1017）が出土した。

出土土器（第70図17） 大形壺の口縁部小片。傾きは不安であるが、口縁部は強く外反し、下に拡張させてやや角張った端部を形成する。端部は上下角に浅い刻目を施す。口縁内面には断面三角形突帯を貼付し、その頂部にも浅く太い刻目を施す。外面は板ナデ仕上げで、口縁下面には指頭圧痕



第70図 98~100号土坑出土土器実測図 (1/4 1~14: 土98、15・16: 土99、17: 土100)

も残る。内面は上部が粗いハケメ、下部が板ナデ仕上げ。外面淡橙褐色、内面淡黄褐色。

101号土坑（図版36、第71図）

H区に所在し、111号土坑の西に位置する。主軸を北西―南東に向けた歪んだ楕円形を呈し、西側はピットに切られている。長さ1.45m、幅1.05mを測る。全周にテラスが巡るが、壁の上部を直に掘り過ぎた可能性が高い。中央部は楕円形に深くなり、床面は検出面からの深さ60cmを測る。覆土は黄褐色シルト塊を少し含んだ灰褐色粘質土。図示できる遺物はない。

102号土坑（図版36、第71図）

H区に位置し、103号土坑に切られている。東側、壁上部に幅広いテラスが付くように図化しているが、掘り間違いによるものであり、土坑本体は主軸をほぼ東西に向けた長さ1.9m、幅1.45mの幅広い楕円形を呈する。床面では東に低いテラスが付き、ピット状の凹みが4個所にある。ピット状の凹みの最深部で検出面からの深さ60cm、床面全体は深さ50cm前後を測る。比較的、均質な暗褐色粘質土を埋土とする。土器の他に砥石（第167図106）、打製石錐（第6表168）が出土した。

出土土器（図版65、第72図1～6） 1～3は如意状口縁の甕。いずれも口縁部は短く外反し端部に刻目を施す。1は太く疎らに刻目を施し、2は摩滅のためほとんど刻目は遺存しない。3は鈍角な先端の工具で太い刻目を施す。1は外面板状工具によるナデで、口縁外面には粘土の盛り上がりが残る。内面は摩滅するが、ハケメが一部に残る。2は内外摩滅。3は外面板状工具によるナデ、内面ナデ。1は暗褐色、2は褐色、3は外面暗褐色、内面淡黄褐色で、いずれも内面にはコゲが付着。

4～6は甕底部。4は内外摩滅で、他は内外ナデ仕上げ。4は二次的に火を受け外面明褐色、内面白褐色、5は褐灰色で、外器表のあれが顕著。6は外面暗褐色、内面灰褐色。

103号土坑（図版38、第71図）

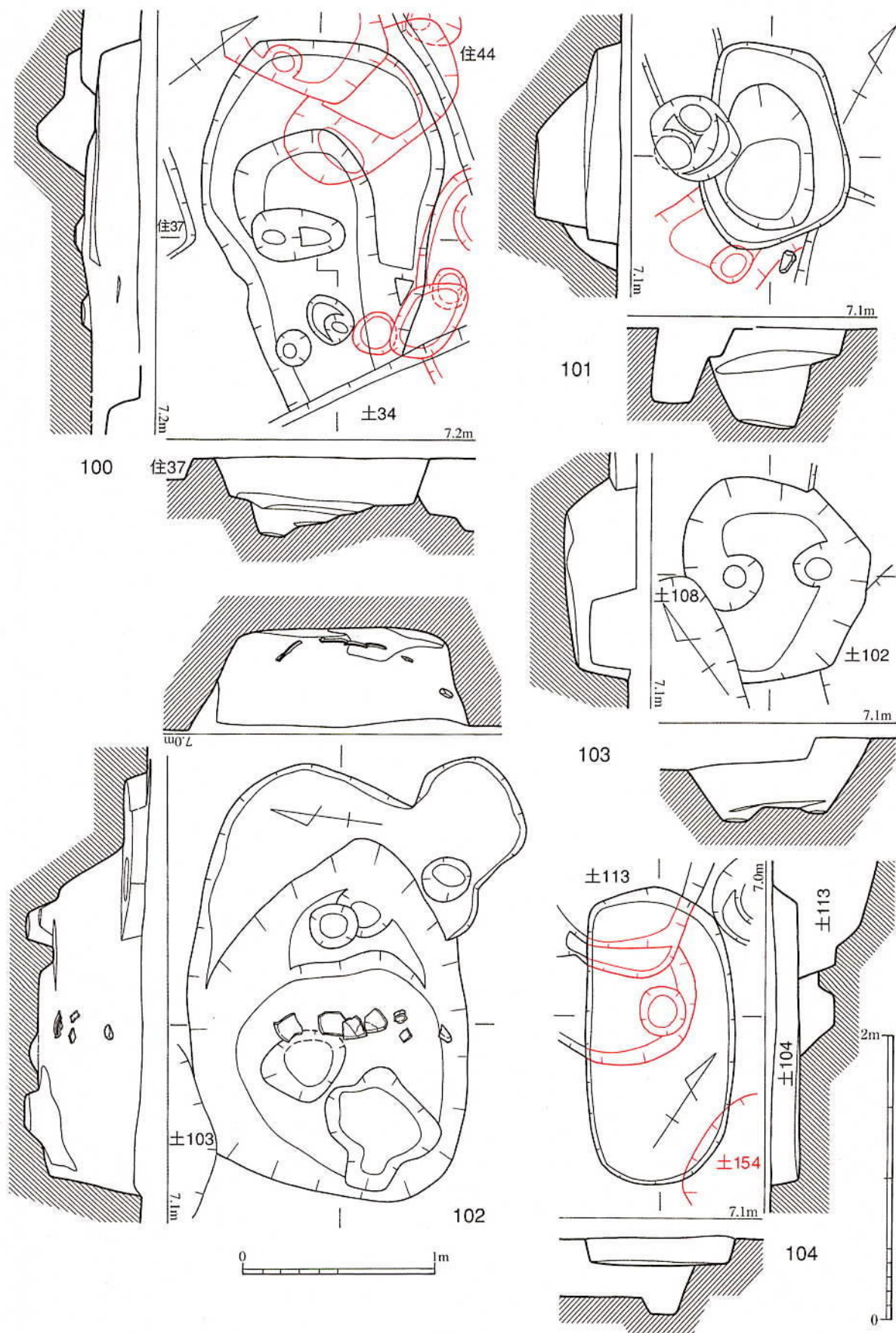
H区に位置する。108号土坑に先行し、102号土坑に後続すると考えられる。やや角張った直径1.35mの円形に近い形態で、壁の立ち上がりは緩やかである。床面には2個所にピット状凹みがある。覆土は灰褐色粘質土で、炭・地山塊が斑状に混入する。

出土土器（第72図7） 如意状口縁甕。口縁端部には細い刻目を巡らす。外面摩滅、内面ナデで、褐灰色～褐黄灰色を呈す。

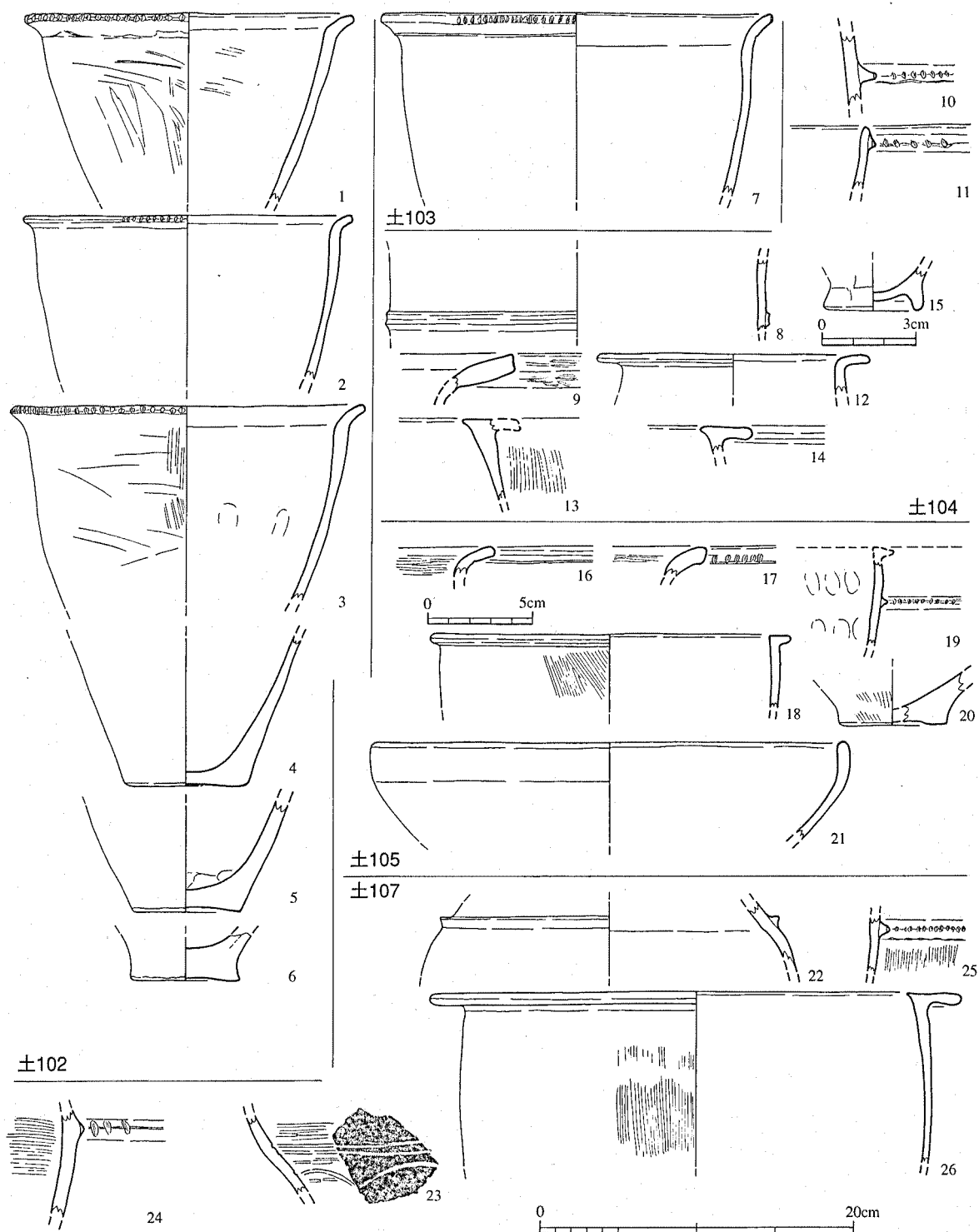
104号土坑（図版37、第71図）

H区に位置し、113号土坑を壊して掘り込まれた土坑と考えたが、浅いため輪郭を間違った可能性が高い。現状では主軸を北西―南東に向けた長楕円形を呈し、長さ2.1m、幅1.05m、検出面からの深さ20cm内外を測る。覆土は褐灰色粘質土。

出土土器（第72図8～14） 104号土坑南外の包含層から出土した土器（9・10・13・14）もここで報告する事にしたい。8は中期後半の広口壺頸部片か。外面に断面断面M字状突帯を貼付。内外摩滅で褐黄色。9は前期の壺口縁部で、外面を肥厚させる。外面ミガキ、内面摩滅で淡褐色～淡灰褐色。10は甕の胴部刻目突帯付近の破片か。外面ナデ、内面摩滅で、明褐色。11は口縁部からやや下に刻目突帯を貼付した甕口縁部で、前期前半に遡る可能性もあろう。刻目は柔らかいうちに先端の丸い工具により深く施される。淡褐色で外面には煤が付着。12は口縁を外反させた小形甕口縁部か。内外横ナデ仕上げで、灰褐色。13・14は鋤先口縁甕小片。13は口縁外端部を欠損し、外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。淡褐色で内面コゲ付着。14は淡褐色。15は底径3.2cmの小形の鉢底部か。底部は高台状になり器壁は薄い。内外ナデ仕上げで淡黄褐色。これらの土器は時期幅が大きく、遺構の時期決定は困難。



第71図 100～104号土坑実測図（±102は1／30、他は1／40）



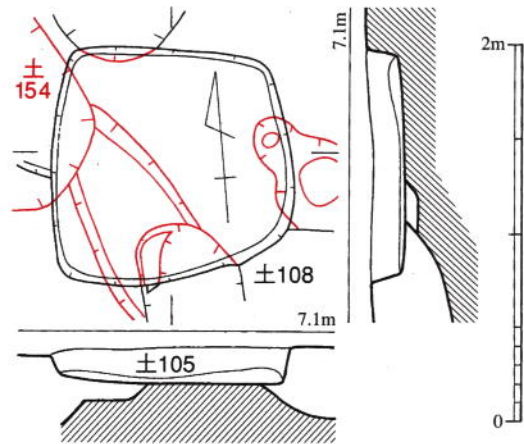
第72図 102～105・107号土坑出土土器実測図（10・11・16・22～24は1／3、15は1／2、
他は1／4 1～6：±102、7：±103、8～15：±104 16～21：±105、22～26：±107）

105号土坑（図版38、第73図）

H区に位置し、154号土坑を切る。浅く、出土遺物は少ないが、輪郭は確実と考えた。ほぼ東西、南北に主軸を向けた歪んだ方形を呈し、1辺1.25m前後を測る。床面は平らで、検出面からの深さ

15cm前後。土器の他に土製紡錘車（第162図34）、打製石錐（第5表105）が出土した。

出土土器（第72図16～21） 16は小形壺口縁部小片。外面はかすかな段をなし、外面横ナデ、内面ミガキ。褐色。17は大形壺口縁部か。口縁端部は面をなし、下部に浅い刻目が施される。外面横ナデ、内面ハケメ仕上げで、灰褐色。18は口縁部に粘土を貼付し拡張させた甕。口縁部外端は丸く、刻目は施文されない。外面ハケ、内面ナデ仕上げ。褐色を呈し、外面には煤が付着。19は胴部に刻目突帯を貼付した甕胴部片。内外ナデ仕上げで、外面灰褐色、内面淡褐黄色。20は壺底部か。外面ハケメ内面ナデ仕上げで、淡灰褐色～淡黄褐色。21は径の復元には不安があるが、比較的大形で、口縁部が直立する鉢。口縁部外面は稜が立ち、口縁端部は丸く肥厚する。調整不明で、淡灰褐色。これらの土器は前期末以前と考えられる。



第73図 105号土坑実測図（1／40）

106号土坑（図版37、第74図）

G区、35号竪穴住居跡の西に位置する。現状では、1辺1.45m前後を図る隅丸方形を呈し、軸をほぼ東西－南北の方向に向いているが、南側で遺構の切合いが顕著であり、平面形は不安を感じている。底面には北側中央にピットがあるが、総じて検出面から20cm弱と浅い。出土遺物も少なく、図示できるものはない。

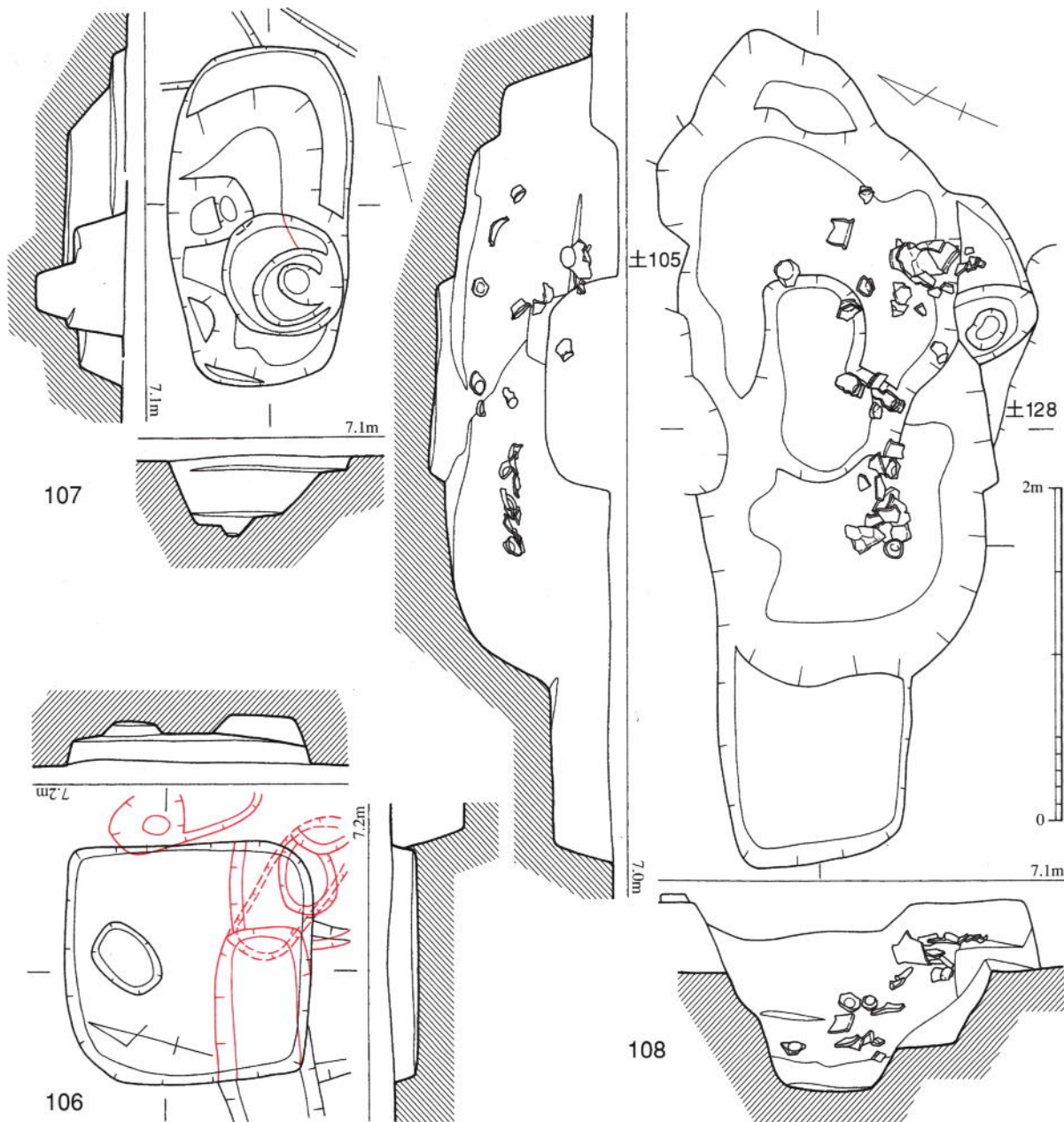
107号土坑（図版37、第74図）

H区、101号土坑の西に位置する。主軸をほぼ南北にむけた隅丸長方形を呈し、南寄りで直径0.7m余りのピットに切られる。長さ2.0m、幅1.1mを測る。北側では幅20cm前後のテラスが壁上部に巡り、西壁際底面にピット状の掘り込みがある。検出面から床面までの深さ35～40cm。暗褐灰色粘質土を覆土とし、下部に炭が5cmの厚さで堆積していた。土器の他に石包丁（第163図53）、柱状片刃石斧（第165図87）が出土した。

出土土器（第72図22～26） 22・23は壺肩部破片。22は肩部に断面三角形突帯を貼付する。内外摩滅するが、ミガキを施さない可能性がある。外面暗褐灰色、内面暗灰黒色。23は肩部に2条の沈線を巡らし、その下部に沈線で重弧文を施文する。外面ミガキ、内面摩滅で、灰褐色。24・25は甕の胴部刻目突帯部破片。24は外面摩滅、内面ハケメで、橙褐色。25は外面ハケメ、内面ナデで、黄灰褐色を呈す。26は鋤先口縁甕。口縁部は長く外に伸び、上面は水平である。外面ハケメ、内面摩滅で、白黄褐色～灰褐色を呈す。外面には煤が付着する。

108号土坑（図版37、第74図）

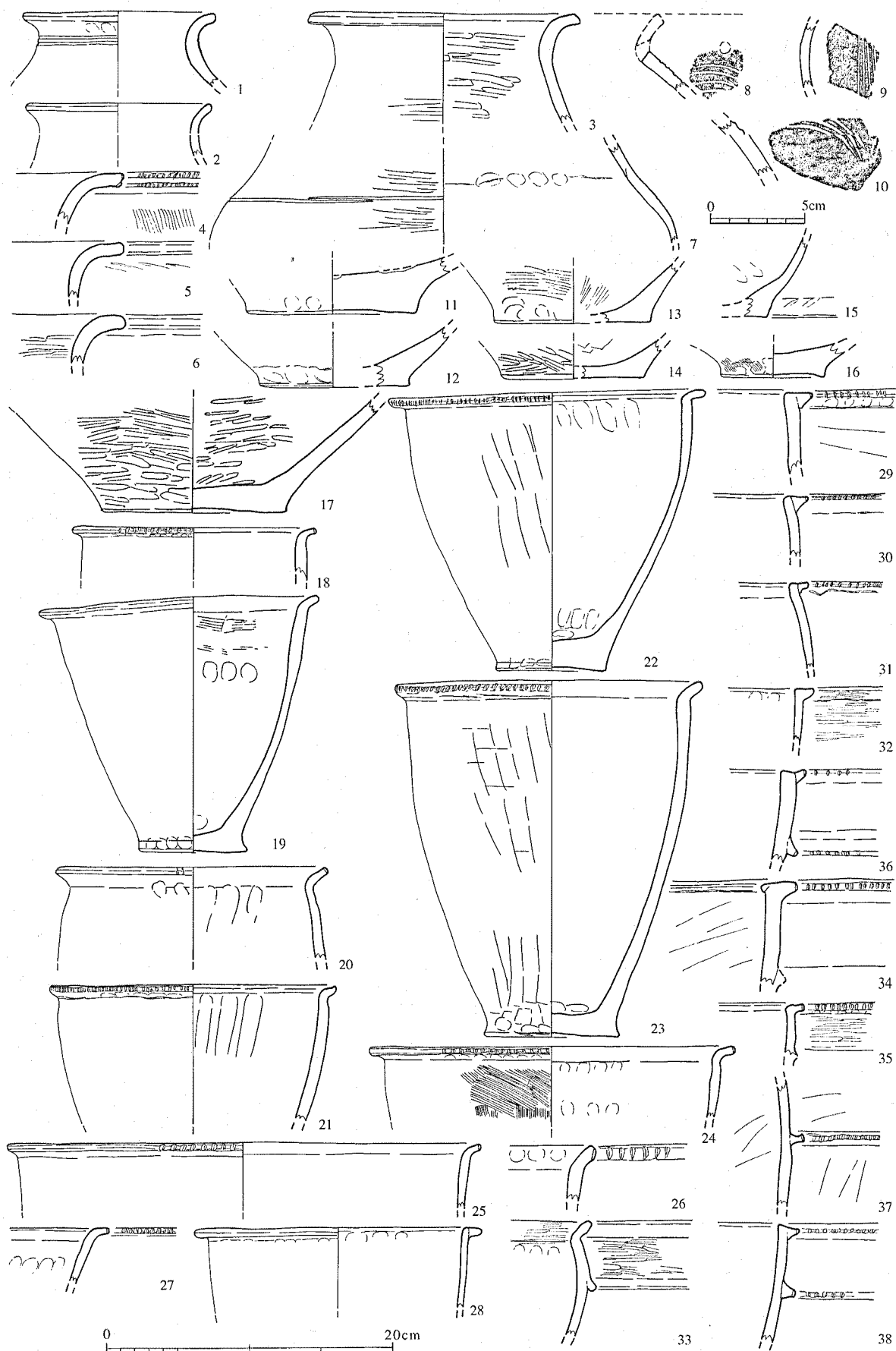
H区、105号土坑の南、128号土坑の北に位置する。長軸を北東－南西に向けた隅丸方形の土坑が本体であり、北東端部が半円形に突出する。方形に突出した南西端は掘りすぎによるものであり、南壁中央の膨らんだ部分は別の遺構と切合っていた可能性が高い。北東部の突出まで含めた土坑本体は長さ4.0m、幅1.7mを測る。中央部は楕円形に深くなり、最深部で検出面からの深さ110cmを測る。上部からは若干、中期後半の土器が出土したが、中～下部からは前期末を中心とする土器のみが出土した。覆土上部は暗褐灰色粘質土、覆土下部は炭を多く含んだ暗褐色粘質土である。



第74図 106～108号土坑実測図（1／40）

出土土器（図版65、第75～77図） 1～6は壺口縁部。口縁部は強く外反し端部が角張る。2・3は頸部括れが弱く、端部は丸く仕上げ、3は下部にやや垂れ下がる。4～6は口縁端近くの小片。6は丸く仕上げるのに対し、4・5は角張り、4は端部の上下に小さな刻目を施す。1は外面ナデ、内面摩滅で、灰黄褐色。2は内外摩滅し、二次的に火を受け内外赤変。3は外面微かにミガキが残るが、口縁付近はナデ、内面ミガキ。白褐色～白灰褐色。4は外面ハケ、口縁外面～内面ナデで白黄褐色。5は内外ナデで明褐色。6は内面にミガキが残る。明褐色～明褐灰色。

7～10は壺肩部。7は肩部に沈線巡らし、外面ミガキ、内面ナデ。淡黄褐色～淡灰褐色。8は頸部に穿孔があり、その直下に重弧文を施す。外面ミガキの可能性があり、黄灰褐色。9は縦方向に4本の沈線を施す。外面ミガキ、内面ナデで灰褐色。10は3本を1単位とする重弧文を施文。内外摩滅し灰褐色。



第75図 108号土坑出土土器実測図(1)(8・10・26・29・30・34・36・38は1/3、他は1/4)

11～17は壺底部。外面は11・12・15がナデ、13・14・17がミガキ、16はハケ。内面は11・12・14～16はナデで、14内面には板状工具の痕跡が残る。13・17は内面ミガキ。11・13・14内面は淡褐灰色、12外面は白褐色、12内面は灰黒色、14外面・16・17外面は淡褐色、15は灰黄褐色、17内面は灰褐色を呈す。

18～27は如意状口縁甕で、19・22・23は完形に復元できた。19は口縁端部刻目は無いが、他は刻目を施文。26は浅い縦長の刻目が特徴的。内外ナデ仕上げのものが多く、22、23は外面に板状工具痕を残す。24は外面ハケメ。19は胴上部内面に板状工具痕が残る。20は内外摩滅。18は淡褐色、19外面・22・23外面は淡褐色、19内面・20・24内面・25外面・27内面は淡灰褐色、21・24外面は暗褐色、23内面は黄灰褐色、25内面・26内面は淡黄褐色、27外面褐灰色。19は外面胴中央部に煤が付着し、胴下部は二次的に火を受け変色。胴上部内面はコゲが帯状に付着。22は外面下部が二次的に火を受け若干、赤変し、18・23・24は外面に煤、21・23は内面にコゲが付着し、20は二次的に火を受け外面赤変。

28～32は口縁が断面三角形のもの。28は摩滅のため刻目の有無は不明であるが、32は刻目は施文されない。他は口縁端部に刻目施し、31は細く鋭利な工具による。内外ナデのものが多く、28・40は外面摩滅し、29は外面板ナデ、32は外面ミガキ仕上げ。31胴部外面にハケメ状の条痕が残るが、あるいは刻目工具のあたりか。28は淡灰褐色、29外面・30内面は暗褐色、29内面・30外面は褐灰色、31外面は灰褐色、31内面は淡黄褐色、32は淡褐色。

33は口縁部が外反し、胴部外面に突帯状の隆起が巡る。粘土の貼付か、粘土接合部を突出させたものか不明。胴部外面～口縁部内面ミガキ、胴部内面摩滅で、外面淡黄褐色、内面灰褐色。34・35は外反させた口縁端部に刻目を施し、胴部に突帯を貼付。34は口縁部内面に粘土を貼付して突出させ、特徴的。34は先端の丸い工具で刻目を施し、外面ナデ、内面板ナデ、外面褐灰色、内面淡灰褐色。35は外面ミガキ、内面ナデで、淡褐灰色～淡灰褐色。

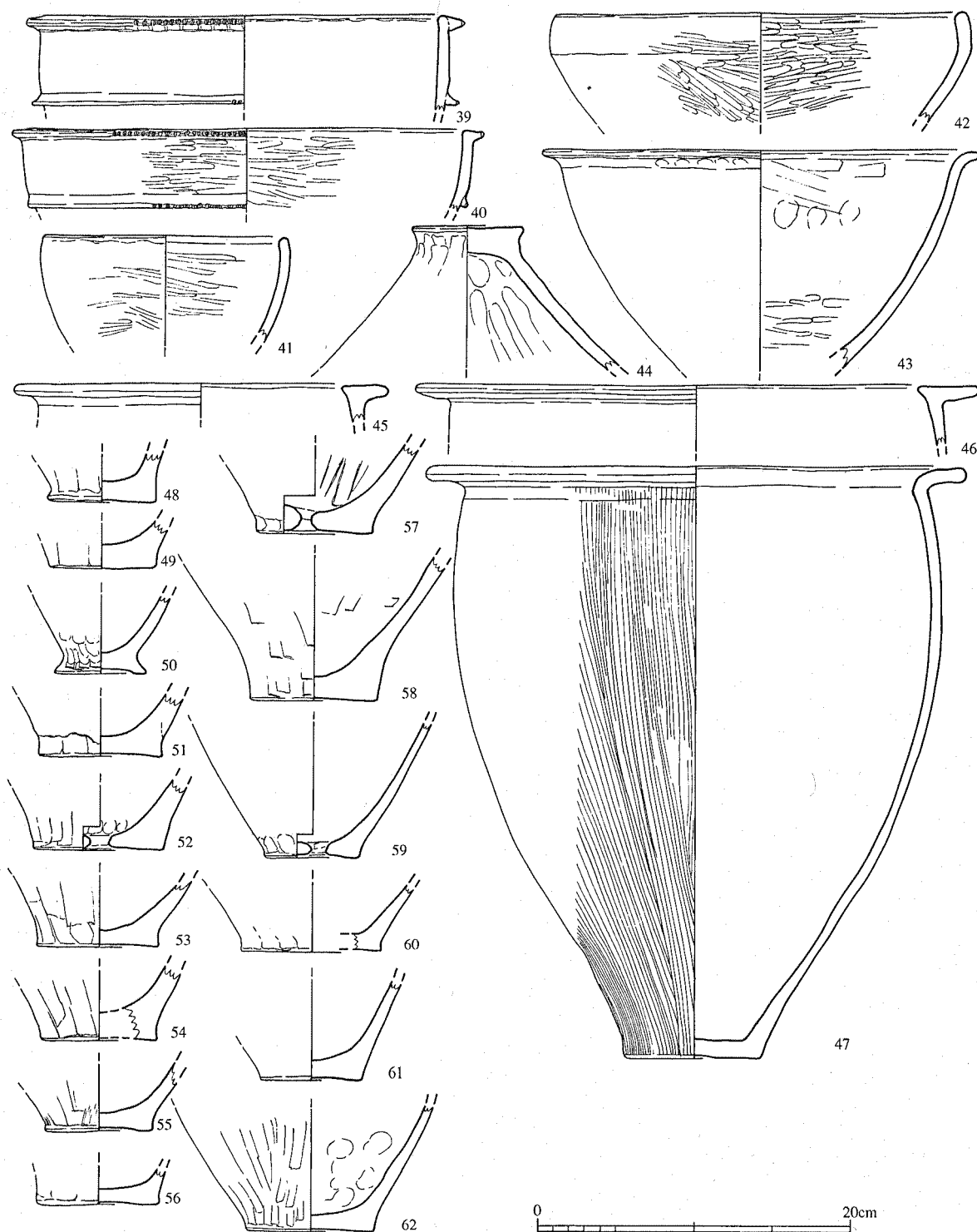
36～40は口縁断面三角形で、胴部に刻目突帯を貼付するもの。36は口縁部上面が凹み、38の刻目は先端の丸い工具による。内外ナデ仕上げのものが多く、37内外は板ナデ、40は内外ミガキ。36外面・38外面は褐色、36内面・38内面・39内面・40は淡黄褐色、37外面は褐灰色、37内面・39外面は淡灰褐色、36外面・37突帯下外面・38外面に煤が付着。

41～43は鉢。41は小形直口鉢。内外ミガキで褐色を呈す。42は胴部が屈曲し、口縁部が直立する鉢。内外ミガキで外面暗褐色、内面淡黄褐色。43は口縁が短く外反する。内外ナデを基調とするが、内面下部に雑なミガキ、内面上部に板ナデ痕が観察される。外面淡褐色、内面褐灰色。

45～47は中期後半の甕で覆土上部に切り込んだ遺構に伴うものか。45・46は鋤先口縁をなし、内外ナデ仕上げ。46は外面暗褐色、内面暗灰褐色。46は外面灰褐色、内面淡褐色。47は口縁部が外折するもの。外面縦ハケ、内面ナデ。外面褐白色、内面明褐色。

48～62は甕底部で、52・57・59は焼成後穿孔を施す。50は底部外周が突出し、若干の上げ底を呈す。内外ナデ仕上げを基調とするが、48・49・52～55・58・62は外面に板ナデが残り、57・58は内面に板状工具痕が残る。50・61は外面摩滅。48・49内面・51外面・53外面・54外面・55・57外面・58外面・59・61内面・62外面は褐色～淡褐色、49外面・51内面・54内面・61外面は褐灰色、52・53内面・58内面・62内面は淡黄褐色、56・57内面は灰褐色、53～55は外面に煤が付着、50・52・60は二次的に火を受け赤変する。

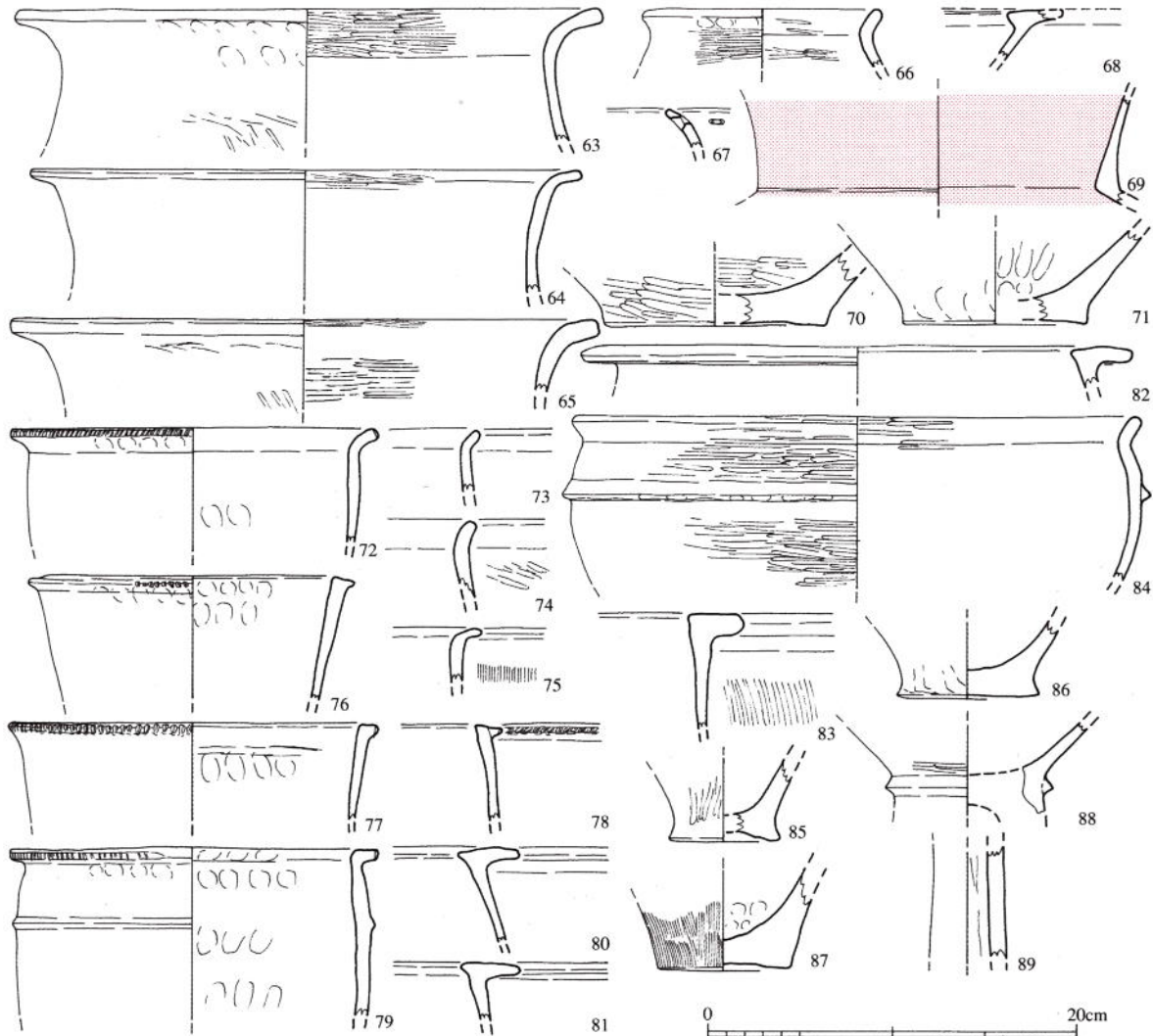
63～89は108号土坑上層からの出土遺物。63～66は口縁部が外反する壺。63～65は大形で、口縁端部が角張る。いずれも内外にかすかにミガキが残る。65口縁外面は調整が粗く、接合部が十分にナデ消されずに皺として残り、口縁上面には板ナデ痕が観察される。66は小形の壺で、口縁端部は丸く、内外ミガキ。63・65・66外面は褐色、64・66内面は灰褐色。67は口縁部の内傾する無頸壺で、



第76図 108号土坑出土土器実測図(2)(1/4)

端部近くに穿孔がある。内外摩滅、灰褐色。68は鋤先状をなす壺口縁部。内外摩滅し、淡橙褐色。69は丹塗広口壺の頸部片。内外摩滅し橙褐色。70・71は壺底部。70は内外ミガキで、外面褐灰色、内面淡灰褐色。71は内外ナデで、外暗褐色、内面褐灰色。

72～73は如意状の甕口縁部。72は端部に細い刻目を施文するが、他は確認できない。外面は73ナデ、74ミガキ状の痕跡、75ハケメ、内面はいずれもナデであるが、74は内外摩滅する。76～78は口



第77図 108号土坑出土土器実測図(3)(1/4)

縁断面三角形の甕。77・78はいずれも粘土の乾燥が進行しないうちに刻目を施し、77は先端が鋭利な工具、78は先端が丸い工具による。76外面は摩滅するが、他はナデ仕上げ。77は口縁部内面に板ナデの痕跡が残る。76は灰褐色、77淡褐灰色、78外面は褐色、内面は淡黄褐色で、76は煤、コゲが内外に付着する。79は口縁部が外折し、胴部に突帯を貼付。口縁端部の角張る部分には刻目を施すが、口縁端部の丸味を帯びる部分、突帯には刻目が施文されないようである。内外ナデで褐灰色。80～83は鋤先口縁の甕。いずれも淡褐色。85～87は甕底部。外面は85ミガキ、86板ナデ、87はハケメで、いずれも内面はナデ。85・87は褐色、86は灰黄褐色。

84は鉢か。口縁が外反し、胴部外面に断面三画突帯を巡らす。口縁端部、突帯には刻目はない、外面～口縁内面ミガキ、胴部内面摩滅。突帯下は調整雑で微かに指頭圧痕が残る。外面淡黄褐色、内面灰褐色。

88は高杯杯下部か。括れ部に断面三角形突帯を貼付。外面にはミガキが微かに残るが、他はナデ。外面淡褐色、内面暗褐色。89は高杯脚柱部。外面摩滅、内面ナデで、橙褐色。

109号土坑(図版38、第78図)

G区、34号竪穴住居跡の下層に位置し、110号土坑に切られている。長軸をほぼ東西に向けたやや

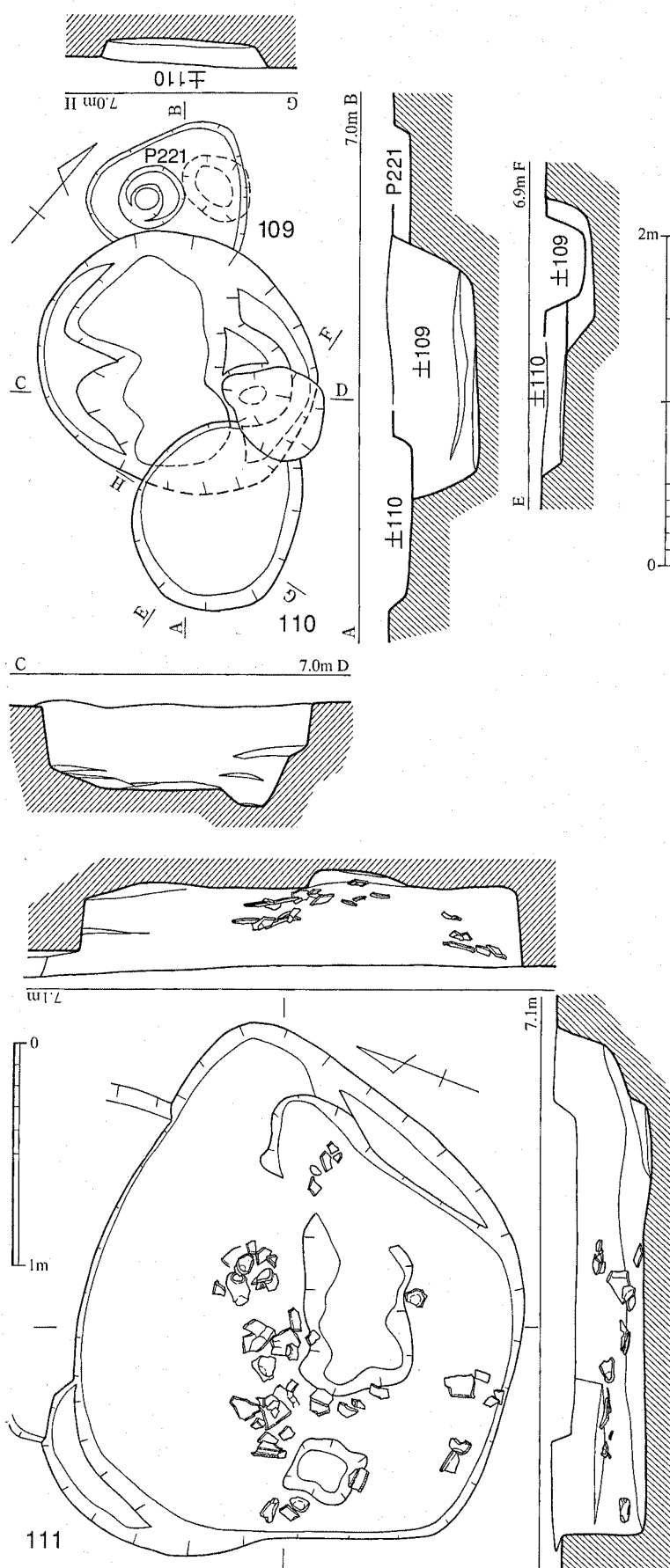
幅広の楕円形を呈し、長さ1.7m、幅1.5mを測る。床面には東西に低いテラスが付き、中央の最深部で、検出面からの深さ55cmを測る。覆土は褐灰色粘質土を主体とし、地山シルト、鉄分を多く含む。図示できる遺物はない。

110号土坑（第78図）

G区、34号竪穴住居跡の下層に位置し、109号土坑を切る。34号住居跡床面のピットに北端を切られているが、長軸をほぼ南北に向けた幅広の楕円形を呈し、長さ1.1m、幅1.0m、検出面からの深さ10cm余りである。地山シルトを多く含む褐灰色粘質土を覆土とする。図示できる遺物はない。

111号土坑（図版40、第78図）

G区に位置し、98号土坑に切られる。上層から多くの遺物が出土したが、掘り下げた段階で初めて輪郭が確定できた。平面形はやや歪んだ隅丸四辺形を呈し、東西長さ2.3m、南北幅2.0mを測る。床面は中央若干凹むが、全体的にはほぼ平坦であり、検出面からの深さ35cm前後。図示した土器以外にも上層からかなりの土器が出土したが、上層出土品には周辺遺構に帰属するものを含む恐れがある。上層は灰褐色粘質土を覆土とし、下部は炭化物を多く含む。土器の他に土製投弾（第162図5）、石製紡錘車（第164図67）、打製石鏃（第4表57・58）、打製石錐（第6表169）が出土した。また、土坑北外の包含層より石英質石器（第9表1018）が出土している。



第78図 109～111号土坑実測図（土111は1/30、他は1/40）

出土土器（図版65、第79・80図） 4・6・10・11・23・27・30・は上層から出土し、周辺の包含層に帰属する可能性のあるもの。

1～3は口縁の外反する壺。1は頸部から強く外反し、角張った端部に至る。内外摩滅。2は端部の角張る壺口縁部で、内外横ナデ。3は大形壺。頸部は直立し、口縁部は短いながらも強く外反し、上面はやや外傾した面をなす。端部は角張る。頸部外面、口縁部内面に断面三角形の突帯を巡らす。刻目は施されない。1は淡褐色、2・3は淡黄褐色。4は中期中頃の無頸壺で混入品か。口縁部は上面がわずかに内傾する鋤先口縁をなし、2個所に径7mm程の穿孔がある。橙褐色。

5～10は壺底部。5・6は小形で、8は底部に焼成後穿孔がある。9は底部が薄く、蓋の可能性もある。外面調整は5横ミガキ、6縦ミガキ、7～10縦ハケで、内面調整は5・7～10はナデ、6は微かなミガキが見られる。5・10は黄白褐色、6外面・9は淡灰褐色、6内面・8は淡黄褐色、7は淡黄灰褐で、8外面は二次的に火を受け、変色、煤の付着が見られる。

11～25は甕。11～13は如意状口縁の甕で、いずれも内外ナデ。11・12は口縁端部は角張り、やや太い刻目を施す。11は小片のため、径・傾きは不安。13は口縁端部が丸く、刻目は確認されない。口縁部外面及び胴部内面には微かに指頭圧痕が巡り、胴部外面には一部にハケメも残る。

14は口縁部に刻目突帯を貼付したもの。口縁部は水平に拡張し、端部にやや太い刻目を密に施す。外面縦ハケ、指ナデ後、板状工具によるナデ。15は刻目を端部に施した如意状口縁をなし、胴部にも刻目突帯を貼付した甕。口縁部は強く外傾。口縁端部、突帯頂部には先端の丸い工具により太い刻目が施文される。内外ナデであるが、口縁外面には、ナデに先立つハケメが一部に遺存する。

16～19は口縁部に粘土を貼付し、刻目突帯状に突出させ、胴部外面にも刻目突帯を巡らすもの。16は口縁部の拡張が小さく断面三角形で、端部には小さな刻目を施す。胴部の突帯は完全に剥離する。17・18は口縁端部、突帯頂部のいずれの刻目も小さい。18口縁は外上方に直線的に伸びる。19は口縁端部、突帯頂部とも先端の鋭利な工具により深い刻目が施文される。外面ハケ、内面ナデを基調とするが、16・17・19は内面に微かに指頭圧痕が巡り、19内面には粗い条痕として板ナデの痕跡が観察できる。

20～25は甕口縁部小片。いずれも口縁外面に粘土を貼付し、突帯状に突出させる。20は胴部外面にも刻目突帯が巡る。20～22・25はいずれも細い刻目で、22は先端の鋭利な工具によることが観察できる。23・24は口縁外端部が丸味を帯びて刻目は施されず、24は内への突出も明瞭。外ハケメ、内面ナデが基調であるが、25外面は横ナデ仕上げ。

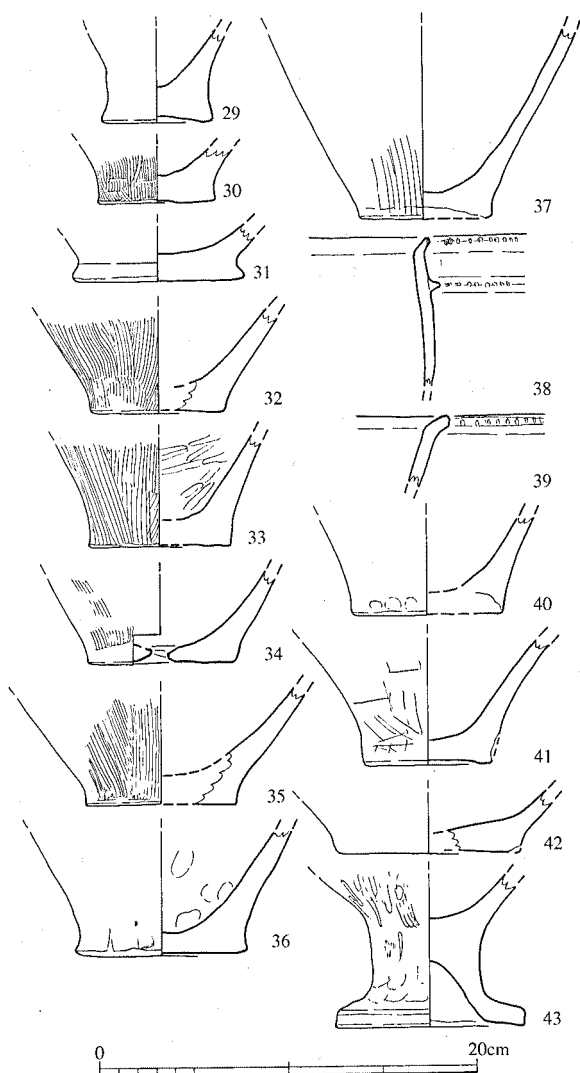
11・13・16・19内面・21・22は淡黄褐色、12は淡白褐色、14外面・15・17内面・18・20・25内面は淡灰褐色、14内面は黄灰褐色、17外面・23・25外面は淡褐色、19外面は淡灰黄褐色、24は暗褐色。11～14・16・23は外面全面に、17～19は突帯下外面に煤が付着し、17・19は突帯付近まで内面にコゲが付着。

26～27は鉢。26は端部に刻目を施した如意状口縁で、口縁下に断面三角形の刻目突帯を巡らす。刻目は細く鋭利な工具による。胴部外面縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴部内面摩滅するが微かに指頭圧痕が残る。外面淡褐色、内面灰黄褐色。27・28は口縁外面に粘土を貼付して刻目突帯状に突出させ、胴部外面にも突出の大きい断面M字の刻目突帯を巡らすもの。28は口径48.2cmに復元される大形品。いずれも刻目は太く、密に施され、外面横～斜めハケ、内面ナデ仕上げ。27は淡黄褐色、28は淡灰褐色。

29～37は甕底部。29のように底の厚いものもあるが、薄いものが主体。31は底部外周の括れが明瞭で、37は底部外面の粘土接合部より剥離する。34は焼成後穿孔により甑に転用される。外面縦ハケ、内面ナデのものが多く、29は外面摩滅、31は外面ナデ、37は内面摩滅。33は内面にヘラ状工具の条痕が観察される。29外面・33内面・37内面は淡褐色、29内面は暗灰褐色、30・33外面は白黄



第79図 111号土坑出土土器実測図 (1) (3は1/6、他は1/4)



第80図 111号土坑出土土器実測図(2)
(1/4)

褐色、31は淡灰褐色、32は淡褐黄色、36外面は橙褐色、36内面・37外面は淡黄褐色。34は二次的に火を受け外面橙褐色、内面暗褐色を呈し、35は内面にコゲが付着。

43は鉢の脚台部。脚は強く外反し、角張った端部に至る。外面は鉢部ミガキ、脚部ナデ、内面はナデ仕上げで、淡灰褐色を呈す。

これらの土器は一部の混入品を除いて、前期末の一括と考えられる。

38~42は111号土坑西側の包含層からの出土。38は端部に刻目を施した如意状口縁甕で、胴部にも刻目突帯が巡る。口縁部は直線的に外傾し、端部やや下寄りに刻目。口縁端部、突帯とも刻目は摩滅するが、先端の比較的丸い工具による。淡褐色。39は如意状の甕口縁部で、端部に細く深い刻目。内外ナデで、黄灰褐色~褐色。40・41は甕底部。40は内外ナデで、外面褐灰色、内面淡黄褐色。41は外面板ナデ、内面ナデで黄褐色。42は壺底部。内外摩滅し、淡黄褐色~褐色。底部は内面に粘土を貼り付けた接合痕が見える。

112号土坑(図版39、第81図)

H区、104号土坑の南に位置する。長軸を北東~南西に向けた隅丸長方形を呈し、長さ1.55m、幅0.85m、検出面から深さ30~35cmを測る。鉄分を多く含んだ褐灰色粘質土を覆土とする。

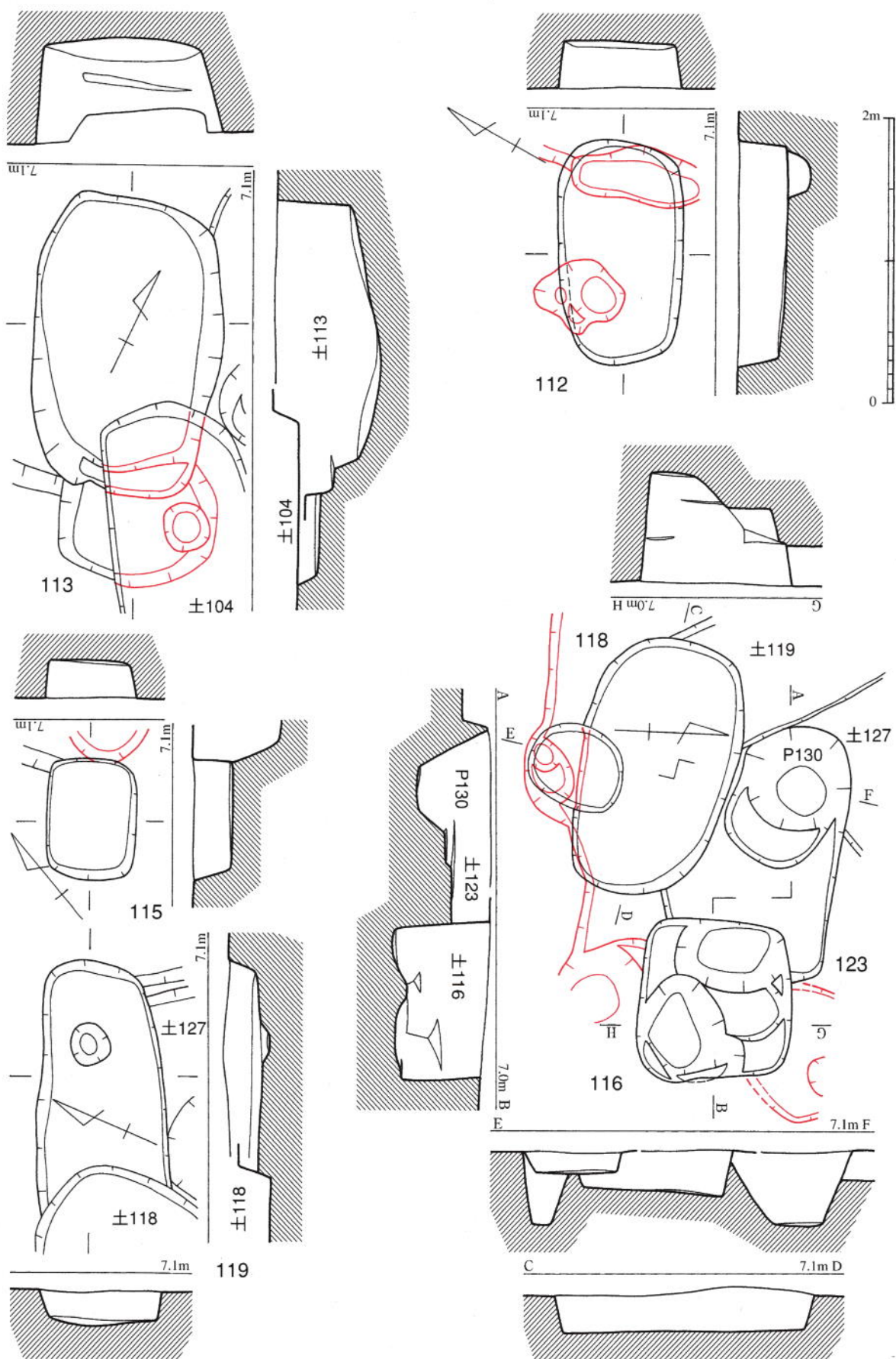
出土土器(第82図1~7) 中期初頭と中期後

半の土器が混在する。1・3が中期初頭と推測されるもの。1は壺口縁で、内傾する頸部から口縁が外反し、丸味を帯びた端部に至る。内外ナデ仕上げで、二次的に火を受けて桃色。3は如意状口縁甕。口縁部は緩やかに外反し、端部は角張る。胴部外面やや下方に沈線が巡る。外面上部ハケメ痕が残し、下部は板ナデか。内面はナデで指頭圧痕が観察される。

2は丹塗広口壺口縁端部片。端部は角張り、内面ミガキ、外面摩滅。4~6は鋤先状の甕口縁部小片。いずれも口縁上面はほぼ水平で、5・6は内への突出が強い。4は口縁上面外寄りの微かな凹み特徴的。4外面は淡褐色、4内面・5は淡褐白色、6は灰黄褐色。7は壺底部片で内外ナデ仕上げ。灰白褐色。

113号土坑(図版39、第81図)

H区に位置し、104号土坑に切られる。輪郭は比較的明瞭であり、長軸を北西-南東方向に向けた隅丸長方形を呈し、長さ2.05m、幅1.3mを測る。南東側ではピットを切っている。南東壁中間に幅の狭いテラスが付き、床面は中央に向かって低くなる。検出面から最深部までの深さ65cmを測る。地山シルトブロックと炭を多く含んだ褐灰色粘質土が覆土の主体であった。



第81图 112 · 113 · 115 · 116 · 118 · 119 · 123号土坑实测图 (1/40)

出土土器（図版65・66、第82図8～20）8は朝鮮半島系の粘土帯無文土器口縁部片か。口縁部に断面円形の粘土紐が貼付される。口縁内面、粘土紐の外面にハケを施す点、頸部内面に稜が立つ点は、粘土帯無文土器と比べるとやや特異で、弥生土器の影響が考えられる。口径は16cm前後に復元される。灰黄褐色を呈する。

9は緩やかに外反した壺口縁部小片。頸部内面にミガキが見えるが、他はナデ仕上げ。褐色～灰褐色を呈する。

10・11は如意状口縁の甕。いずれも口縁は短く、端部に刻目は施されない。10は胴部外面板ナデ、口縁部外面～内面ナデ仕上げ。淡褐色を呈し、外面には煤が付着。胴部外面ハケで、内面は指頭圧痕が顕著に残る。外面灰褐色、内面淡褐色を基調とし、外面全面に煤、内面底部より口縁下5cmの所までコゲが付着する。

12～14は口縁外面を突出させた甕である。12・14は口縁端部に刻目を施し、胴部にも刻目突帯を巡らす。12の刻目はハケメ工具、14は先端の丸い工具による。いずれも外面ハケ、内面ナデ仕上げである。13は外面ミガキ、内面ナデ仕上げで、口縁端部は丸く刻目も観察されない。12・13外面・14は褐色、13内面は灰褐色を呈し、14外面には煤が付着する。15は鋤先状の甕口縁部片。調整不明で、褐白色を呈す。

16～18は底部片で、16は壺、17は甕か。16・17は内外ナデ、18は外面下部板ナデ、上部ミガキで、内面はナデ。18の外底面はケズリの調整で上げ底状になる。16・18内面は褐灰色、17・18外面は明褐色で、16内面にはコゲが付着。

19は口縁部を折り返し垂下させた特異な器形。口縁部内外はナデ仕上げで、外面にはミガキも残る。淡褐色で、口縁内面に煤が带状に付着。

20は脚付鉢で、口縁はわずかしかなかったが、図上で完形に復元できた。鉢部は深く、口縁は直立。脚部は短い。内外ナデで仕上げるが、括れ部外面にハケメが微かに残る。褐黄色。以上の土器は15を除けば、中期初頭前後に位置づけられ、粘土帯無文土器もその時期として矛盾はない。

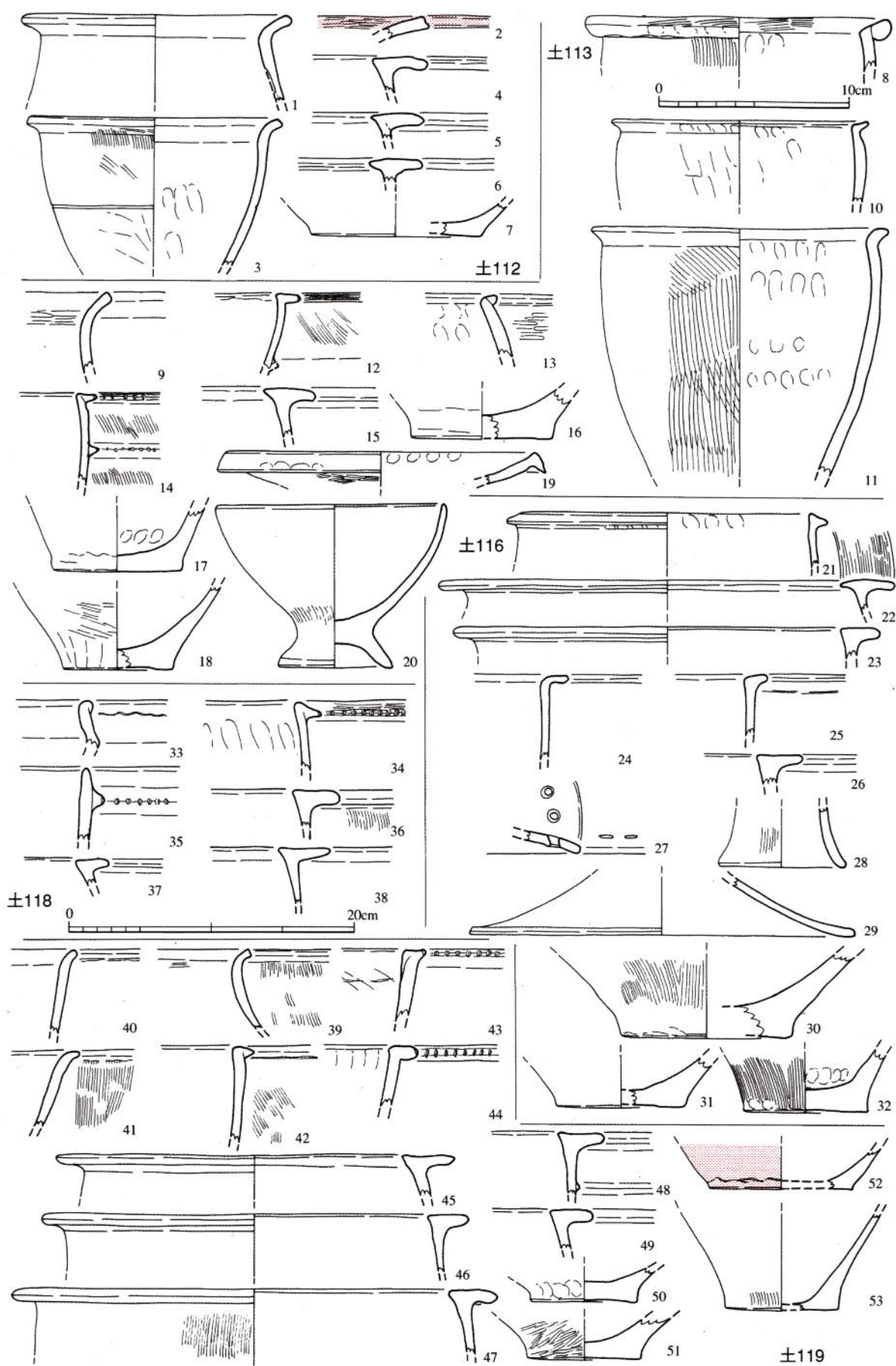
115号土坑（図版39、第81図）

H区、127号土坑の南に位置する。長軸を北東－南西に向けた小形の長方形土坑で、長さ0.85m、幅0.5mを測る。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さ35cm余りである。褐灰色粘質土を覆土とし、下部に地山シルトブロックが混入する。図示できる遺物はない。

116号土坑（図版40、第81図）

H区に位置し、123号土坑覆土を掘り込んでいる。主軸をほぼ東西、南北に向けた1辺0.95～1.1mの方形を呈し、底部は3基のピットが切合ったかのように凹凸が顕著である。検出面から最深部までの深さ75cmを測る。地山シルトブロック、鉄分を多く含む灰褐色粘質土が覆土。土器の他に石英質石器（第9表1019）、東外包含層から土製紡錘車（第162図39）が出土。

出土土器（第82図21～32）21は口縁断面三角形の甕口縁部。摩滅のため口縁端部の刻目の有無は不明。内外摩滅するが、口縁外下面、口縁内面に指頭圧痕が確認される。外面端褐灰色、内面淡褐色。22・23・26は鋤先状の甕口縁部小片。22は上面が水平で、内への突出が際立つ。外面摩滅、口縁上面ハケメ、内面ナデ。淡黄褐色～灰黄褐色。23は口縁部の内外への伸びが小さい。内外摩滅で淡褐色～淡黄褐色。26は内外摩滅で褐色。24・25は如意状の甕口縁部小片。いずれも摩滅のため調整、刻目の有無は不明。24外面・25は淡褐色、24内面は淡灰褐色。27は小形無頸壺蓋口縁部小片。直径7mm程の穿孔があり、内外摩滅で調整不明。橙褐色を呈し、丹塗していた可能性がある。28は器台裾部片。外面縦ハケ、内面摩滅で、淡橙褐色。これらの土器の時期は幅があり、遺構の時期



第82図 112・113・116・118・119号土坑出土土器実測図（8・24・25・27・33～35・43・44は1/3、他は1/4 1～7：土112、8～20：土113、21～32：土116 33～38：土118、39～53：土119）

決定は困難である。

29～32は116号土坑の東・北外側の包含層からの出土。29は蓋で、頂部は欠損。ゆるやかに外反しながら開き、角張った端部に至る。内外とも粗いナデ仕上げ。明褐色で裾部内面にコゲが付着する。30～32は底部片で、30・31は壺、32は甕。30は大形で外面縦ハケ、内面摩滅。淡褐色。31は内外摩滅で、黄灰褐色。32は外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、外面暗褐色、内面淡褐白色。

118号土坑（図版39、第81図）

H区に位置し、119・123号土坑を切ると考えた。しかし、輪郭は不明瞭で、浅い事から平面形を誤った恐れがある。現状ではほぼ東西に主軸を向けた楕円形を呈し、長さ1.8m、幅1.1mを測る。検出面から最深部までの深さは30cm。地山シルトを多く含む褐灰色粘質土が覆土。土器の他に土製投弾（第162図8）、打製石錐（第6表170）が出土した。

出土土器（第82図33～38） 33・34は118号土坑西外の包含層からの出土。33は鉢口縁部か。胴上部で屈折して、直立した口縁部に至る。口縁部は丸く、外面が玉縁状に粘土を巻き込む。内外摩滅し、暗褐色～暗灰褐色。形態からは前期前半に遡る可能性がある。34は断面三角形口縁の甕口縁部。口縁外端に刻目を施し、口縁上面は横ハケが残る。内外ナデ仕上げ。淡褐色。

35～38は118号土坑覆土から出土。34は口縁端部からやや下に刻目突帯を貼付した甕口縁部小片。刻目は先端の丸い工具による、内外摩滅し、淡灰黄色～淡灰褐色。36～38は鋤先状の口縁部小片。いずれも口縁部上面は水平で、37はあるいは無頸壺口縁か。36は外面ハケ、内面摩滅で暗褐灰色。37は内外摩滅し、淡黄褐色。38は内外横ナデで、外面褐灰色、内面淡褐色。

119号土坑（図版41、第81図）

H区に位置し、127号土坑を切り、118号土坑に切られると考えて発掘調査を実施した。ただ、輪郭は不安であり、平面形を誤認した可能性が高い。現状ではほぼ東西に長軸を向けた長楕円形を呈し、長さ1.75m、幅0.9mを測る。底面は検出面から深さ25cm前後でほぼ平坦であり、東寄りに浅いピット状の凹みが確認された。よく締まり鉄分を多く含んだ褐灰色粘質土を覆土とする。

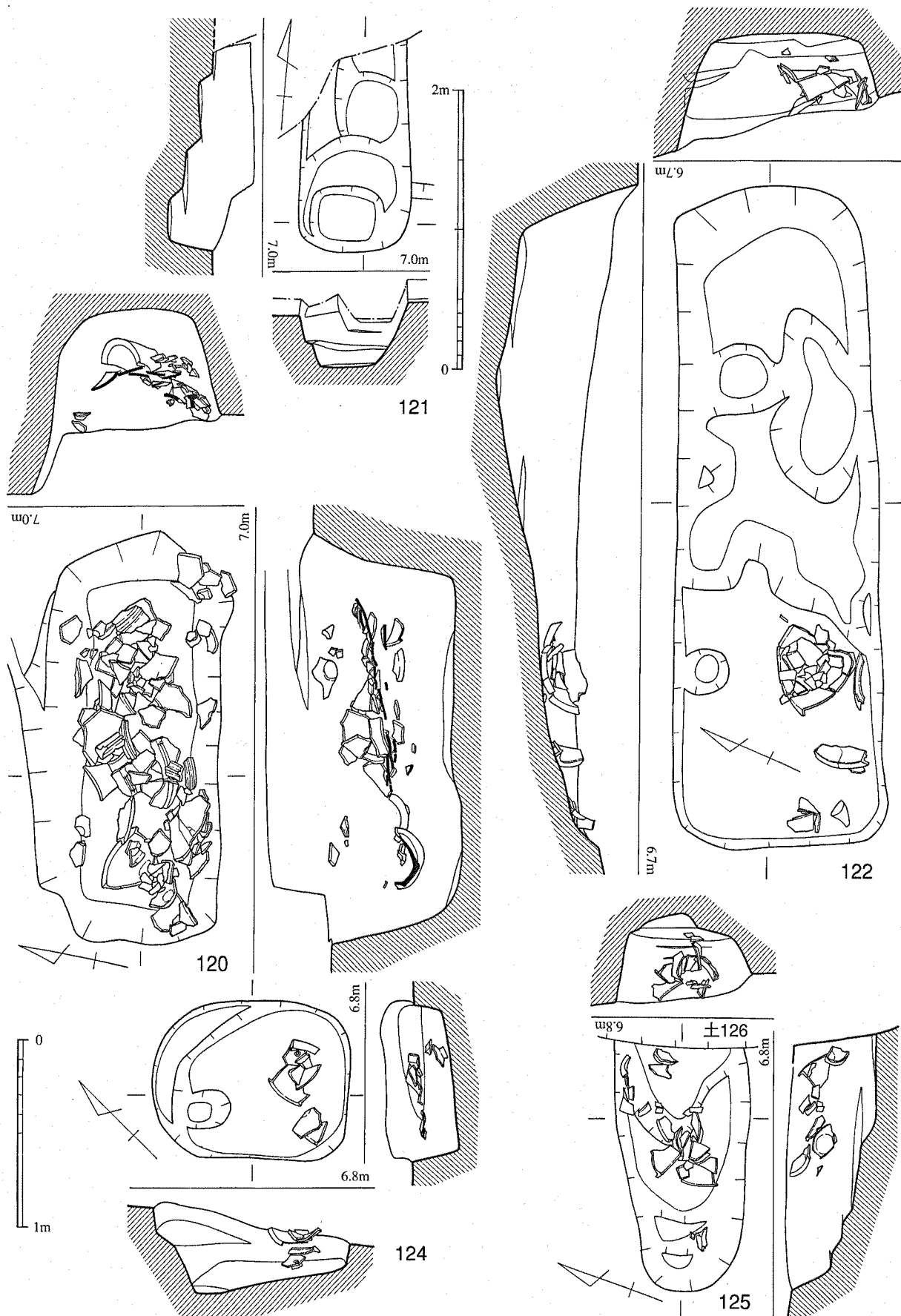
出土土器（第82図39～51） いずれも土坑東外の包含層から出土。39は壺口縁部。内傾した頸部から短く口縁が外反し、端部は角張る。外面ハケメ、内面ナデで、灰白褐色。40・41は如意状の甕口縁部。口縁は短く、端部刻目はない。41外面ハケメ以外は調整不明。40は淡灰褐色。41は外面褐色、内面橙褐色。42～44は口縁端部を突出させた甕で、42外面にハケメが残る以外は調整不明。42は摩滅のため刻目の有無は不明。43は如意状口縁の内側に粘土を貼り付けた特異な器形。刻目はやや幅広。44は口縁部が厚く、端部は丸みを帯び、鋭利な工具で刻目。42外面黄白褐色、42内面暗褐灰色、43は灰褐色、44は褐色で、42・44は外面に煤、43は内面にコゲが付着。

45～49は鋤先状の甕口縁部小片。いずれも口縁上面は水平で、45は口縁内端よりやや下に微かな稜が立つ。いずれも摩滅が進むが、46内面は丁寧なナデ、47外面はハケメが確認できる。45外面・47・49外面は淡褐白色、45内面は淡灰褐色、46は淡褐灰色、48は淡褐色、49内面は橙褐色で、46・48は二次的に火を受け赤変、黒変する。

50～52は壺底部、53は甕底部。摩滅のため調整不明のものが多いが、50内面ナデ、51外面ミガキ、53外面下部にハケメが確認できる。50は黄灰褐色、51は外面白褐色、内面淡灰褐色、53は橙褐色で外面丹塗。53は淡黄褐色で、外面は二次的に火を受け赤変。

120号土坑（図版41、第83図）

H区、128号土坑の南に位置する。主軸をほぼ東西に受けた長方形を基本とするが、東壁、西壁



第83図 120～122・124・125号土坑実測図（土121は1/40、他は1/30）

は掘り過ぎ等により乱れている。長さ2.2m、幅1.05m、検出面から最深部までの深さ1.05mを測る。覆土の下部は灰褐色粘質土が主体で、中間程の深さから、ほぼ全面にわたり多量の土器が出土した。なお、付近の上面から出土した遺物全体を120号土坑上層として取り上げ、それぞれの輪郭のはっきりした段階で遺構への帰属を区別した。そのため、上層出土遺物は周辺遺構に帰属するものが混入する。土器の他に土製紡錘車（第162図32）も出土した。

出土土器（図版65～67、第84～87図） 1・4～7・9～11・16・18・28・30・31～33・36～41・43・47・49～53・55～57・59は上層からの出土である。多量の土器が出土しており、一部の混入品を除けば、中期後半でも古い時期の一括遺物と評価できる。

1は広口壺口縁部、2はその口縁部～胴部破片。1は口縁内側に厚く粘土を貼付し、上面が水平の鋤先口縁をなす。内外ナデで、褐色。2は頸部から大きく口縁部が外反し、内に突出させて鋤先状とする。口縁上面は外傾。頸部は明瞭に括れ、胴部の張りが強い。胴部は中央部に2条の断面三角形突帯を貼付。外面～口縁内面ナデ、頸部～胴上部内面ハケ後ナデ、胴下部ナデで、突帯付近の内面に指頭圧痕が巡り、印象的。淡褐色～淡黄褐色を呈すが、二次的に火を受け黒変する破片もある。3は2よりも小形の広口壺胴部～頸部。口縁は頸部から外傾し、胴部の張りが強い。胴上部に2条の断面三角形の突帯を巡らすが、下の1条は完全に剥離する。底部はやや上げ底気味。内外全面ナデ仕上げで、淡褐色。4は丹塗広口壺口縁端部片。内外摩滅し、生地は淡橙褐色。

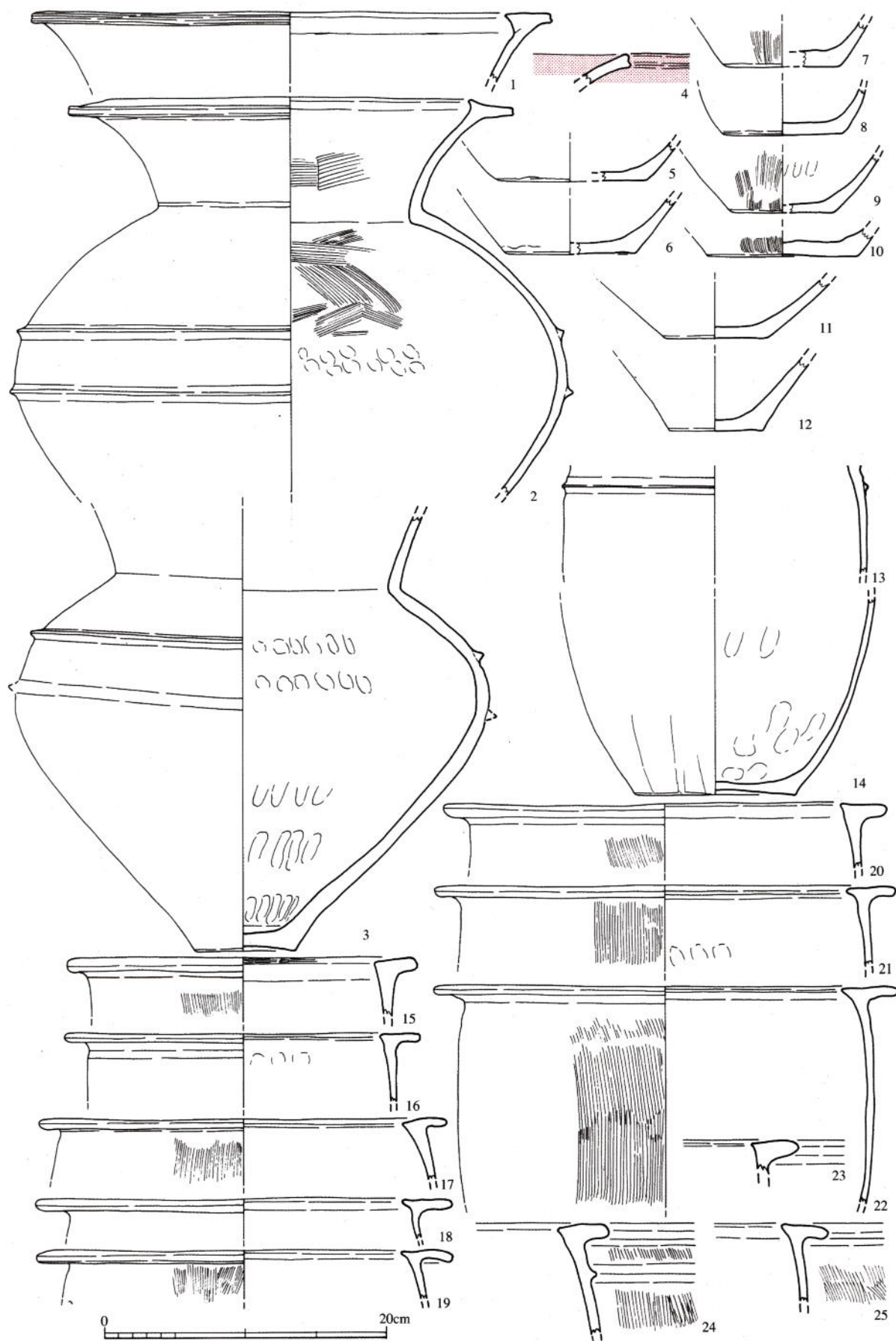
5～12は壺底部。外面は5・6・8・11はナデ、7・9・10は縦ハケで、他は調整不明。内面は調整不明の5・8以外はナデ。5淡黄褐色、6・11橙褐色、7外面白褐色、7内面灰色、8・12褐色、9外面褐灰色、9内面黄白褐色、10暗褐灰色。8は胎土精良で、外面に煤、内面にコゲ付着。

13は樽形甕口縁部、14は樽形甕胴下部～底部片。両者は同一個体の可能性があるが、接合しないため別個体として図示した。13は鋤先口縁で、内へわずかに突出し、上面は丸味を帯びて外へ伸びる。頸部付近の外面には断面三角形突帯を巡らす。15は底径が大きく、わずかに上げ底。いずれも器表の残りが良好、内外ナデで、14底部近くは外面板状工具の縦方向稜、内面指頭圧痕が残る。13黄灰褐色、14外面淡褐色、内面黄灰褐色。15～29は鋤先口縁甕。19・25・26・29は口縁部上面がわずかに外傾するが、他はわずかに内傾ないし平坦。15・20・23・24・29は口縁部に厚みがある。24は口縁下外面に三角形突帯を巡らし、大形品か。外面縦ハケ、内面ナデが基本となるが、16・18は外面ナデ。15・19・20・25内面は褐色、16外面灰白褐色、16内面・24外面黄白褐色、17・22外面・25外面・26・27外面は淡黄褐色、18・28白褐色、22内面灰黄褐色、23淡褐黄色、24内面・27内面淡灰褐色。22・26は胴部外面に煤、28は内面に煤、19は外面～口縁上面まで煤、胴部内面にコゲが付着。30～32は外折口縁甕。30・31は外面縦ハケ、内面ナデで、褐色。32は内外摩滅し、白褐色。

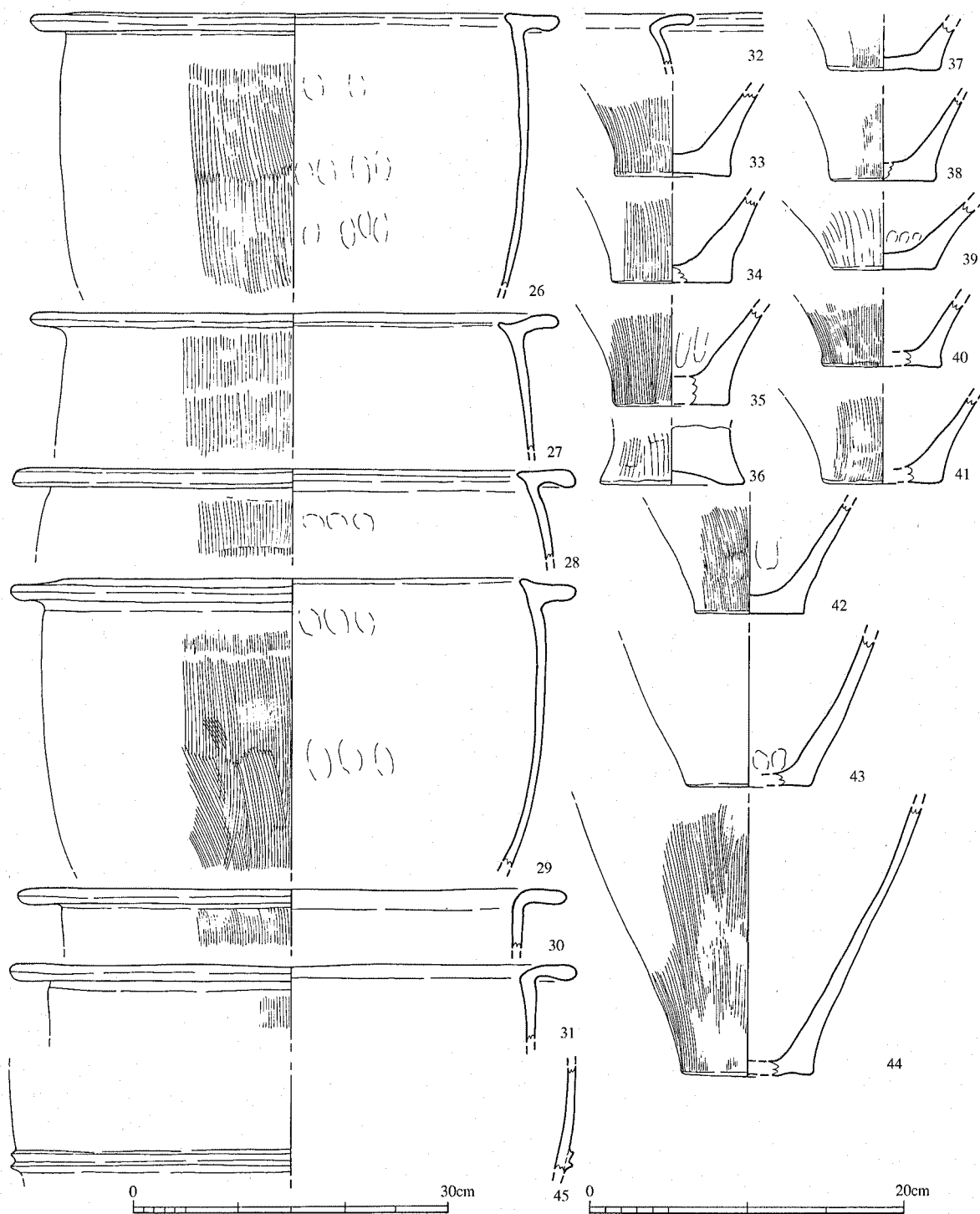
33～44は甕底部片。36がやや上げ底状で厚いが、他は平底。外面ハケメ、内面ナデ仕上げを基調とするが、39は外面板ナデ、43は内外摩滅。33・37・40・41・44内面は淡黄褐色、34外面・35内面は褐灰色、34内面・35外面・43は淡褐色、36は黄灰褐色、39は橙褐色、42・44外面は淡灰褐色を呈す。33・34・44は外面に煤、34・38・44は内面にコゲが付着。38・42は外面二次的に火を受け赤変。

45は大形の甕胴部片で、胴下部に低い断面M字状突帯を貼付。内外ナデで黄褐色。46は器高97cm、口径65cmの大形甕で、成人用甕棺と同形態。口縁は内への突出が顕著な鋤先状で、器形は砲弾形。頸部外面、胴下部外面に低い断面M字状突帯を巡らす。内外ナデで、灰白褐色。

47・48は鋤先口縁鉢。47は口縁部で、口縁上面は水平をなし、内への突出も顕著。内外摩滅で、外面淡黄褐色、内面灰褐色。48はほぼ完形で均整のとれた器形をなす。口縁部は上面が凹み、外端が上方へ反り上がる。口縁直下に断面三角形の突帯を巡らすが、その接合部のナデはやや雑。内外ナデ仕上げで、胴下部内面に指頭圧痕が巡る。淡黄褐色～明黄褐色。外底部～胴下部にコゲ・煤が付着し、二次的に火を受けた可能性がある。



第84图 120号土坑出土土器实测图 (1) (1/4)

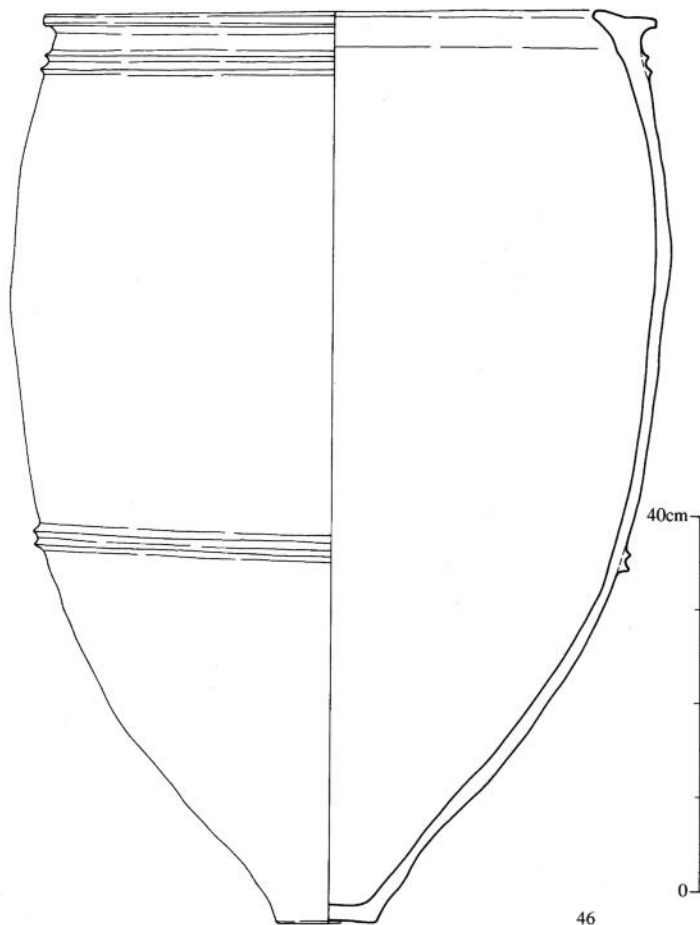


第85図 120号土坑出土土器実測図（2）（45は1／6、他は1／4）

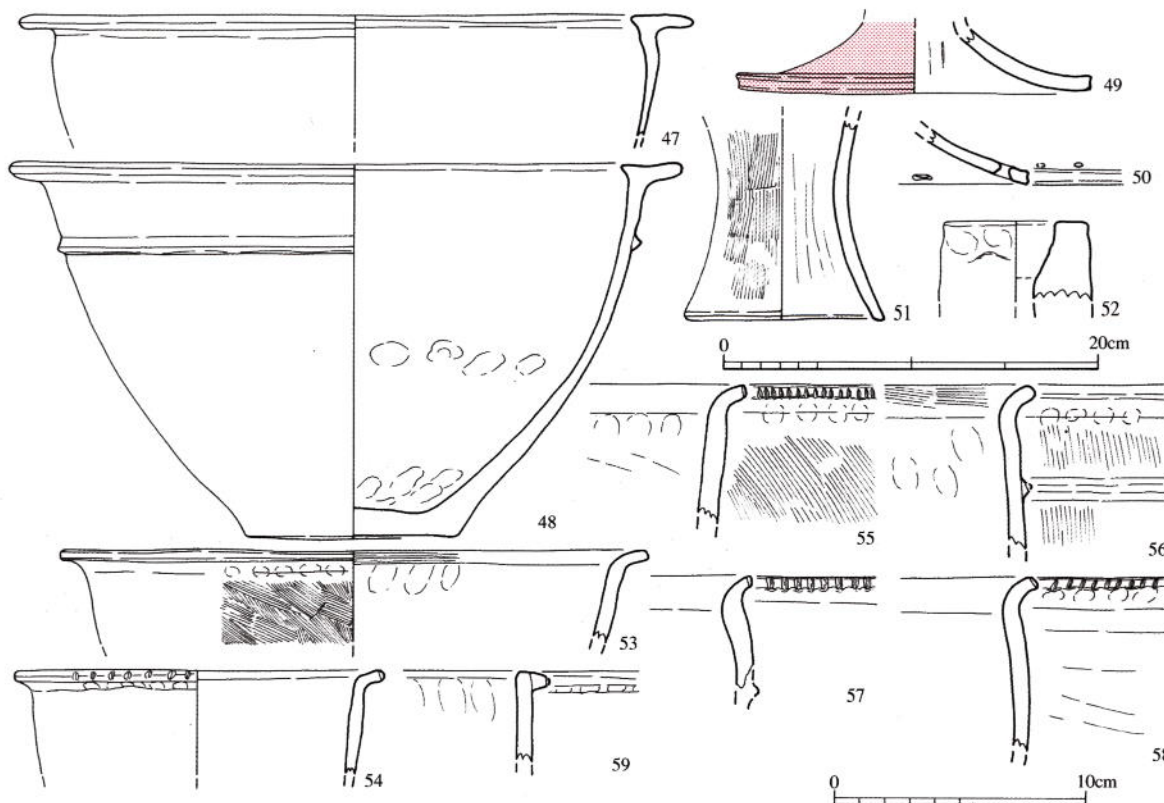
49は丹塗高杯脚裾。裾は緩やかに広がり、端部が凹面をなす。内外ナデで、淡黄褐色。50は無頸壺蓋。内外摩滅し、2個所に穿孔が残る。明褐色。51は鼓形支脚。外面縦ハケ、内面ナデ上げで、淡黄褐色～淡褐灰色を呈す。外面には煤が付着。52は支脚。内外粗いナデ仕上げで、淡褐色。

以上の土器が中期後半でも古い頃の一括遺物と捉えられるのに対して、53～59は前期末以前と推測されるもので、混入品か。53～58は如意状の甕口縁部で、56は胴部外面に突帯を巡らし、57も突帯を貼付した可能性がある。54・55・57・58は口縁端部に刻目を施す。54は太く、55は細く深い刻

目。57・58は細い刻目を粘土が柔らかい時点で施し、57の工具先端は丸いと分かる。53は口縁端部が角張り、刻目の無いのは確実であるが、56は口縁部、突帯頂部とも摩滅し、刻目の有無は不明である。53・55・56は外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、いずれも口縁外面、頸部内面に指頭圧痕が微かに巡る。53は口縁上面にもハケメ。58は外面板ナデ、内面摩滅。54・57は内外摩滅。57は口縁外面に粘土を貼付し、肥厚させた甕。摩滅のため刻目の有無は不明。53は黄白褐色、55・58内面は褐色、56・57・58外面・59内面は淡黄褐色、59外面は灰褐色。53・55～57は外面に煤が付着し、54は二次的に火を受け赤褐色。



第86図 120号土坑出土土器実測図 (3) (1/8)



第87図 120号土坑出土土器実測図 (4) (55～59は1/3、他は1/4)

輪郭は明瞭で、長軸を南北に向けた長方形の平面形であるが、北側は調査区外へと広がり全容は不明である。現状で長さ1.5m、幅0.65mを測る。床面は階段状に南に向って深くなり、最深部は周囲の検出面からの深さ60cmを測る。灰褐色粘質土を覆土とし、上部は地山シルトブロックを多く含んでいた。**出土土器**（第88図1～3） 1は如意状口縁甕。摩滅のためか口縁端部刻目は確認できない。外面摩滅、内面ナデで、外面淡褐灰色、内面黄白褐色。2・3は鋤先状の甕口縁小片。2は外面摩滅、内面ナデで淡褐色。3は内外ナデ仕上げで、外面に煤が付着。淡褐色。

122号土坑（図版41、第83図）

H・I区に位置する大形長方形の土坑で、検出面での輪郭は明瞭であった。長軸をほぼ東西に向け、長さ3.55m、幅1.1mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、底面は東から西にむかって緩やかに深くなる。最深部で周囲の検出面からの深さ75cmを測る。褐灰色粘質土で土器を多く含み、西南壁際からまとまって土器が出土した。土器の他に扁平片刃石斧（第165図81）がある。

出土土器（図版66、第88図4～27） 4は無頸壺。口縁は上面が水平の鋤先状を呈すが、残存範囲には穿孔はない。内外摩滅で明褐色。5は丹塗広口壺口縁部の小片。端部は角張り、内面ミガキ、外面縦ミガキの暗文が残る。生地は灰褐色。

6は丹塗鋤先口縁甕。口縁部は内への突出が明瞭で、上面がやや外傾し、端部は拡張気味で角張る。胴上部に断面M字状突帯を貼付。口縁上面には放射状、口縁部と突帯の間には密な平行斜線、胴部外面にはやや粗い鉛直方向平行線のミガキ暗文を全面に施す。内面はナデ。生地は淡灰褐色で砂粒少ない。7は外折口縁の甕で完形。口縁部は直線的に外傾し、端部は角張り、底部外面には凹みが巡る。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、口縁内面には強いナデによる稜線、胴下部内面にはナデ上げ痕が観察できる。明褐色で、胴部外面に煤、内面にコゲが付着。8～11は鋤先状の甕口縁部片。いずれも口縁部はほぼ水平に伸び、9は端部上方に太い刻目を施す。いずれも口縁部～内面はナデ、外面縦ハケ。8・10は淡灰褐色～淡褐灰色、9・11は明褐色。12・14は甕底部片。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、14底部外面に接合痕が残る。12は灰褐色、14は淡褐色で内面にコゲ付着。

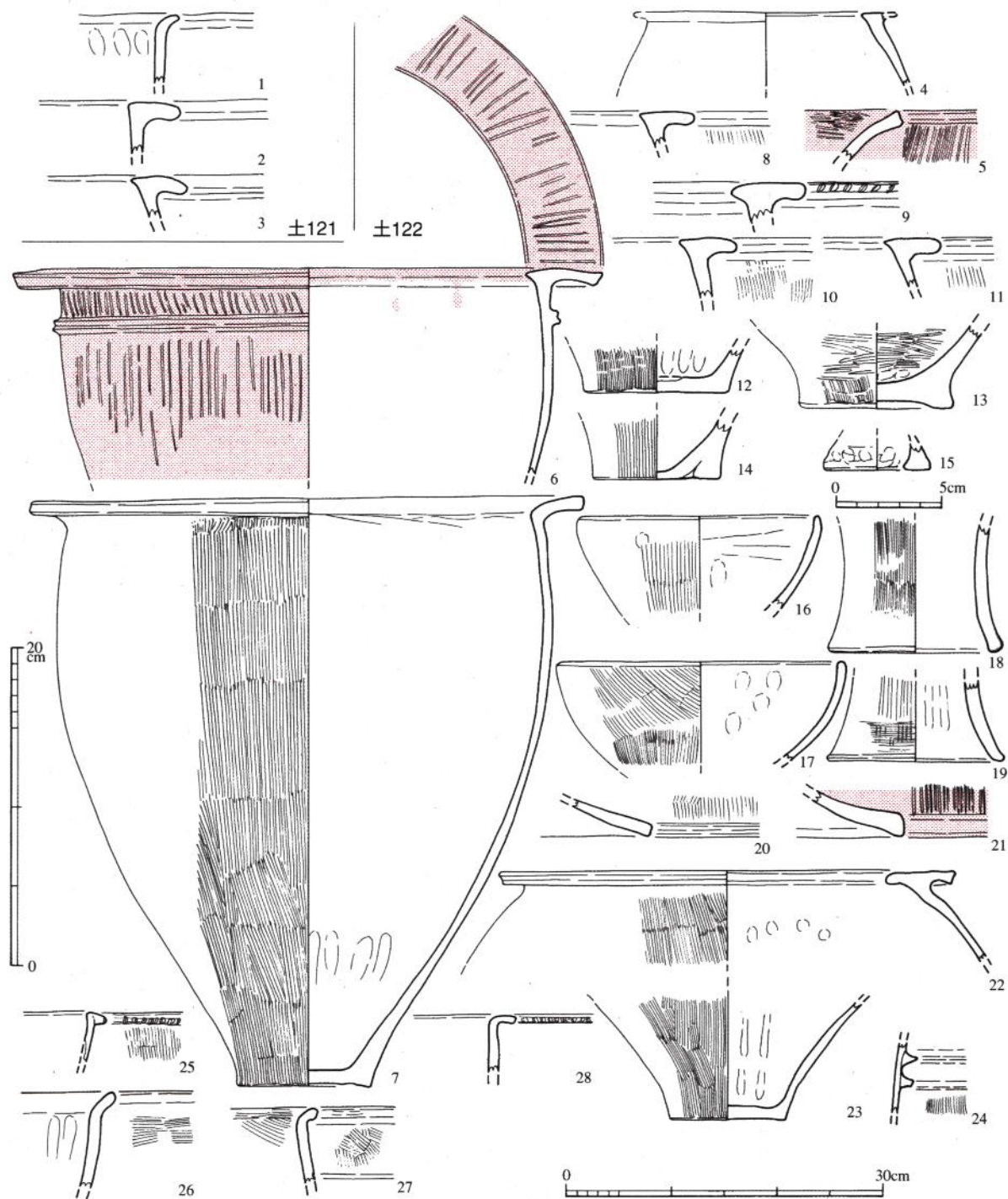
15は土製品脚部で支脚状になるか。粗いナデで、淡黄褐色。16・17は単口縁鉢。いずれも外面ハケ、内面ナデで、16内面上部に板状工具の痕跡。15白黄褐色、17淡褐色。18・19は支脚片。18は外面縦ハケ、内面摩滅し、淡褐色～淡黄褐色。19は外面縦ハケ、内面ナデで、外面裾部の横ハケあるいは板ナデの調整が特徴的。20は蓋裾端部で角張る。外面縦ハケ、内面ナデで、淡灰褐色。外面には煤付着。21は丹塗の高杯あるいは器台脚裾。内面ナデ、外面ミガキ暗文で、淡橙褐色。

22～24は大形甕で、接合しないが同一固体か。22口縁部は鋤先状を呈し、頸部は大きく括れる。24は胴突帯部破片。いずれも器表が良好に遺存し、外面縦ハケ、内面ナデで、淡灰褐色。

13・25～28は中期初頭以前に遡るもの。13は壺底部。底部外周の括れが明瞭で、やや上げ底気味。内外ミガキ仕上げであるが、外面下部にはハケが観察できる。外面淡黄褐色、内面褐灰色。25～28は甕口縁部小片。25は口縁断面三角形で、外端部に太い刻目を施す。26～28は如意状口縁。28は角張った端部に浅い刻目を施すが、26・27は刻目は無いようである。27は胴部に沈線あるいは突帯貼付のための強いナデによる凹みが巡る。外面は28が摩滅する他は、ハケメ仕上げ。内面はナデ仕上げであるが、27は口縁内面にハケメが残る。25は淡褐色、26は灰褐色、27は褐白色、28は外面灰白褐色、内面褐色で、26・28外面に煤、25内面にコゲが付着。

123号土坑（図版42、第81図）

H区に位置し、116・118号土坑に切られる。東北部はP130が位置しており、全容は不明で、平面形にも不安があるが、東西に主軸に向けた長方形土坑と考えた。なお、本土坑とP130との切合い

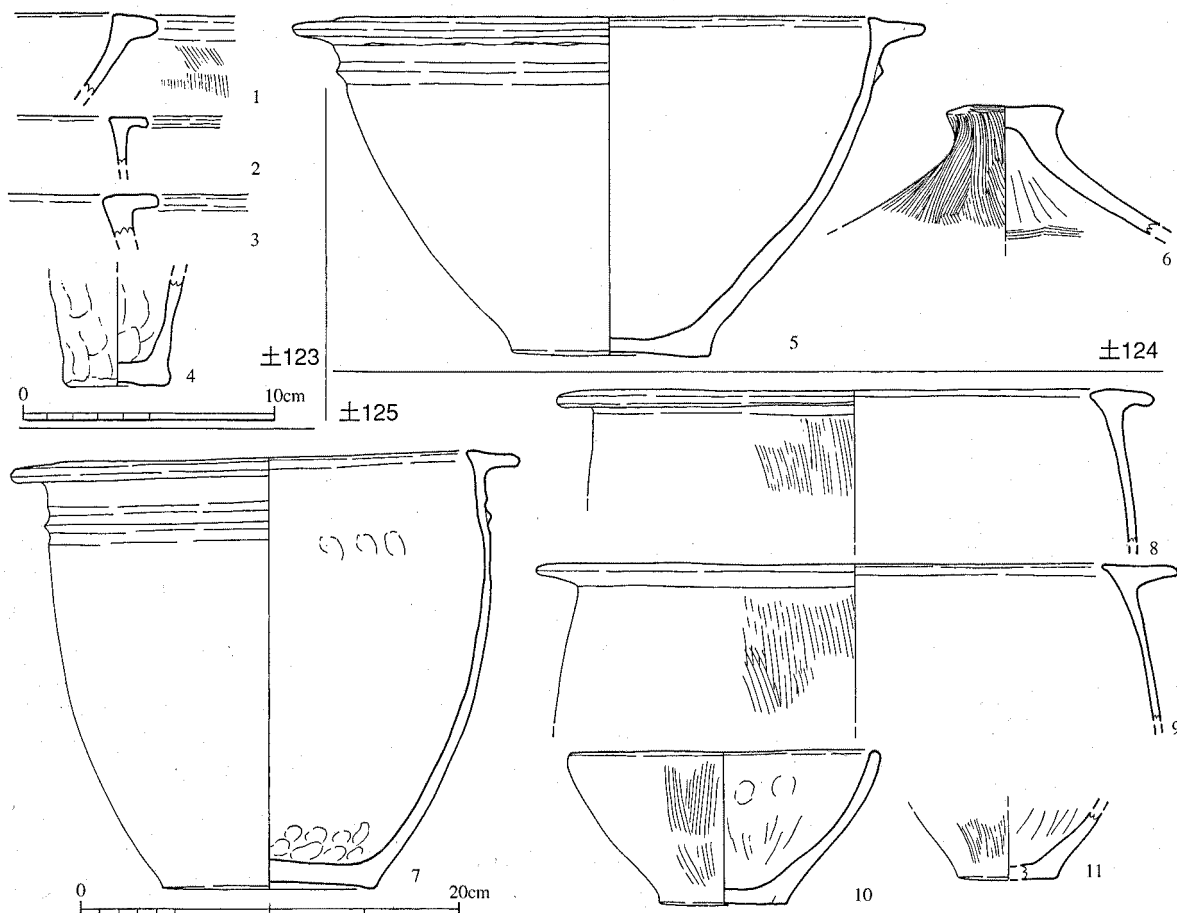


第88図 121・122号土坑出土土器実測図 (15は1/3、22~24は1/6、他は1/4
1~3:土121、4~28:土122)

も確定できなかった。東西は1.2mを測り、検出面からの深さ30cm前後。覆土は褐灰色粘質土で、地山シルト塊を少量、鉄分を多量に含む。

出土土器(第89図1~4) 1は傾き不安であるが、鉢か。口縁部を外に拡張させる。外面縦ハケ、内面摩滅。2・3は外折した甕口縁部小片で、3は器壁が厚い。2は調整不明、3は内外ナデ。4は小形深鉢のような器形の胴下部か。内外粗いナデ仕上げで、淡黄褐色。

いずれも小片であるが、時期不明の4を除外すれば、中期前半か。



第89図 123～125号土坑出土土器実測図（4は1／3、他は1／4 1～4：±123、
5・6：±124、7～11：±125）

124号土坑（図版42、第83図）

I 区に位置している。126号土坑と接しているが、切合関係は不明である。北西－南東に長軸を向けた隅丸長方形で、長さ1.05m、幅0.9mを測る。北壁に緩やかに傾斜をもった狭いテラスが付き、床面は北西方向に向って低くなる。検出面から最深部までの深さ50cmを測る。灰褐色粘質土を覆土とし、鉄分を多く含んでいた。

出土土器（図版66、第89図5・6） 5は鋤先口縁の鉢で、口縁部と底部の接合しない破片を図上で合成したものである。口縁部は内を上方につまみ上げ、鋤先状とする。口縁直下外面に断面三角形突帯を貼付する。内外ナデ仕上げで、淡黄褐色～淡黄白褐色。6は蓋頂部縁。外面縦ハケ、内面上部板ナデ、下部横ハケ。頂部外面は平坦で、丁寧なハケで仕上げる。淡黄褐色を呈し、胎土の砂粒は少ない。

125号土坑（図版42、第83図）

I 区、126号土坑の西に位置する。126号土坑に切られると図示したが、検出面では両者の切合いは不明瞭であった。現状では主軸をほぼ東西に向けた長楕円形の平面を呈し、長さ1.3m、幅0.75mを測る。床面は階段状に西に向って低くなり、最深部で深さ45cm弱。暗灰褐色粘質土を覆土とし、覆土の上部からまとまって土器が出土。

出土土器（図版66・67、第89図7～11） 7は図上で完形に復元できる樽形甕。上面がほぼ水平の鋤先口縁をなし、胴外面上部に断面三角形突帯を貼付する。内外ナデ仕上げで、突帯部及び胴部と底部の接

合部内面に指頭圧痕が巡る。8・9は鋤先口縁甕胴上部破片。いずれも口縁部は水平で、9の内への突出部は尖り気味。外面縦ハケ、内面ナデで、8は淡灰褐色、9は淡褐色。10は単口縁の鉢。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、胴下部内面には板状工具による縦方向稜が残る。外面淡橙褐色、内面淡黄褐色。11は無頸壺底部片か。外面ハケメ、内面工具によるナデ仕上げで、橙褐色。

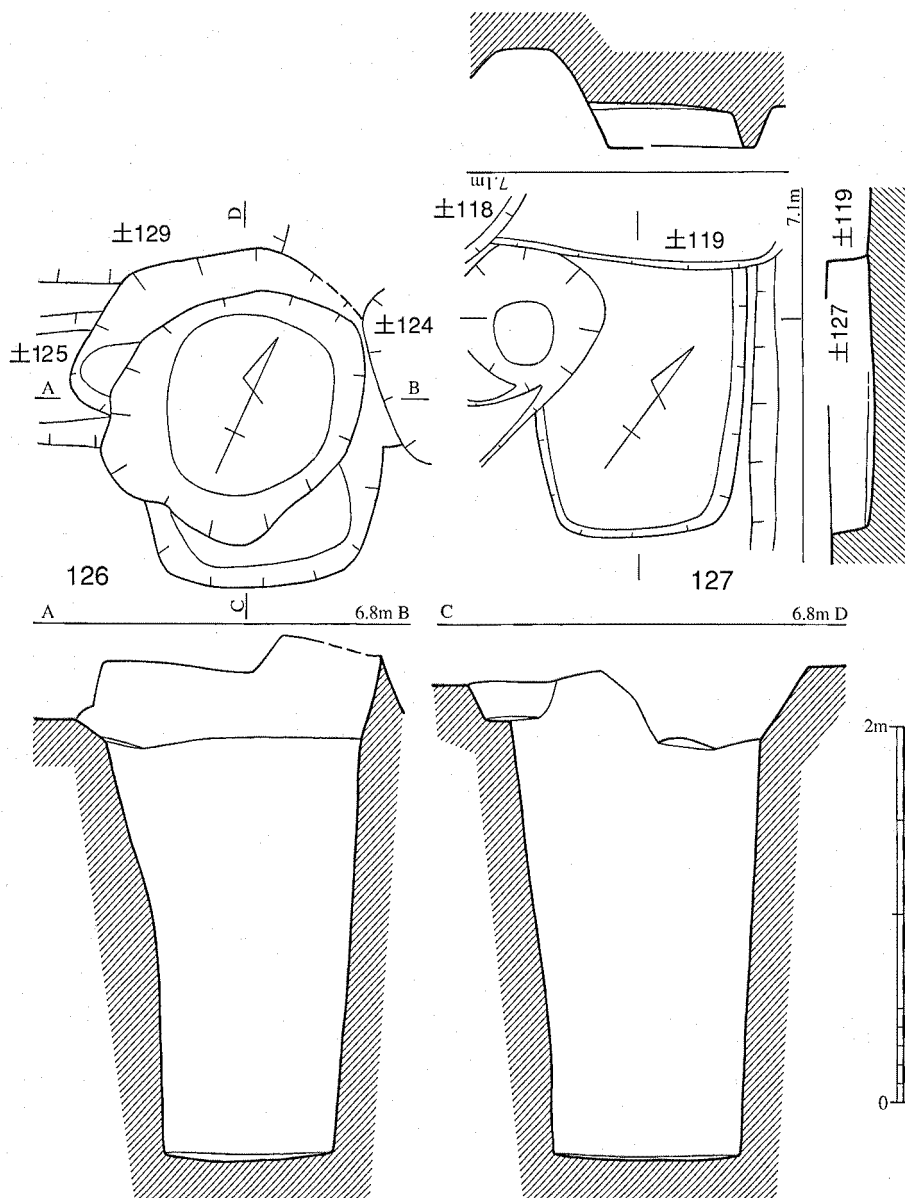
126号土坑（図版40、第90図）

I 区に位置し、125号土坑を切ると考えたが切合いは不安である。上面は1.5m程の円形でさほど大きくないが、床面は標高3.95m前後で、湧水点まで到達しており、

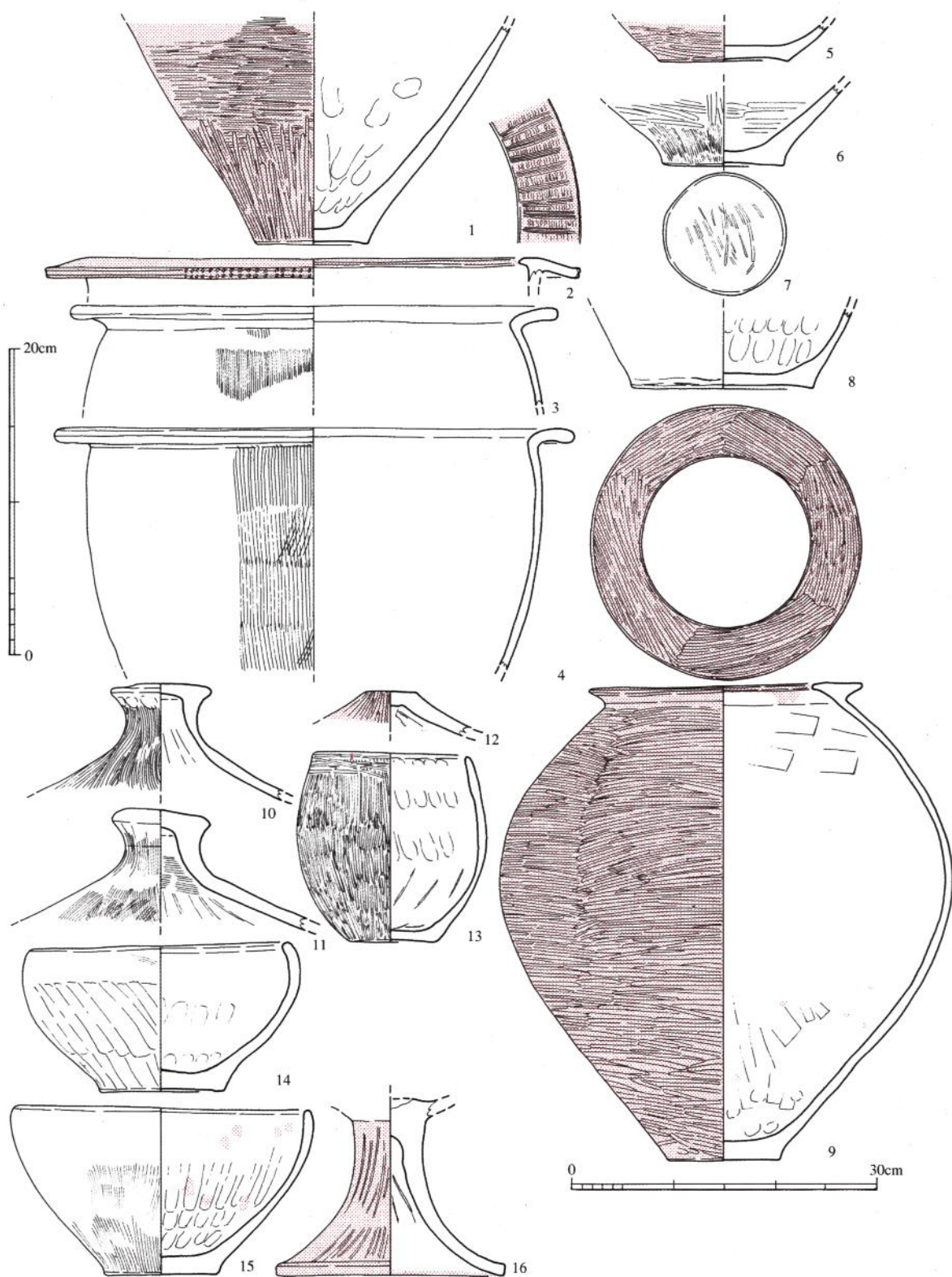
井戸の可能性が高い。南側にはテラス状の平坦面、北西側は上面の広がりを図示しているが、これは遺構の輪郭が不明瞭で、掘り過ぎたためである。環濠である7号溝、西側の谷状の地形に隣接しており、井戸の掘削に当たり、湧水点の高い微高地縁辺部を選地したと推測される。埋土は全体的に水分を多く含んだ暗灰色粘質土で、任意の深さで上・中・下の3層に細分して遺物を取り上げたが、土質の差は小さい。中層、標高4～5mのところで木製品、丹塗大形甕等の遺物が出土している。

出土土器（図版67・68、第91図） 水分を含んだ埋土であったため、いずれも器表が良好に遺存。

2～4は甕口縁部～胴上部破片。2は丹塗鋤先口縁甕の口縁部小片。口縁部上面は大きく外傾し、内への突出も明瞭。端部が凹面をなすが、上下端に一連の浅い刻目を施文する。口縁上面にはミガキの後、幅5mmを1単位とする分割暗文を施す。1は丹塗甕胴下部で、2と同一固体か。外面は横ミガキ後底部近く縦ミガキで、内面ナデ。内面には丹塗の飛沫が付着。1・2とも生地は橙褐色で砂粒が少ない。



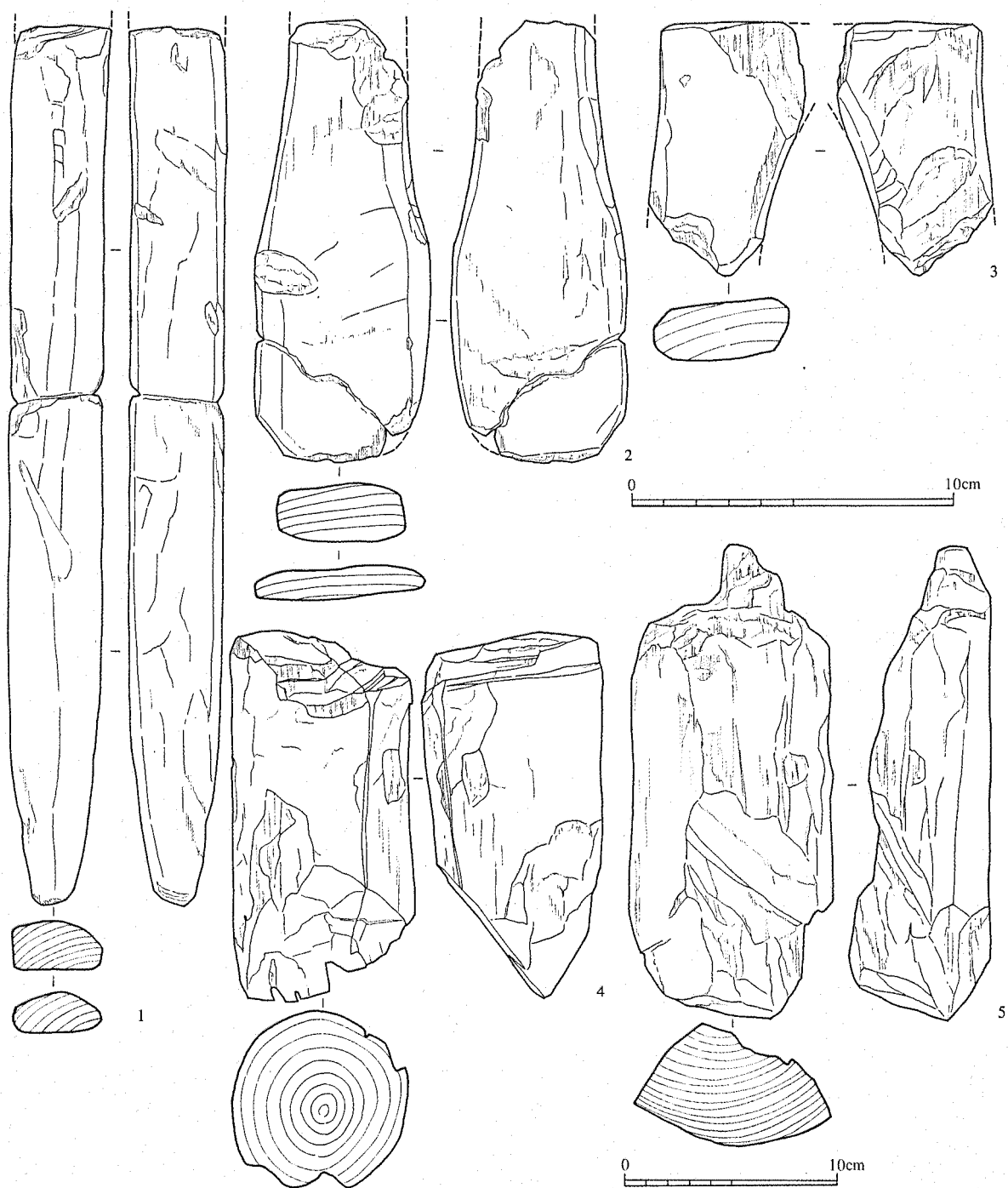
第90図 126・127号土坑実測図（1／40）



第91図 126号土坑出土土器実測図（9は1／6、他は1／4）

3・4は外折口縁の甕。いずれも口縁端部は丸く、胴部外面縦ハケ、口縁部～内面ナデ。3は白褐色、4は外面淡灰褐色、内面暗褐色。

5～8は壺底部。5は外面丹塗で、外面ミガキ、内面摩滅。生地は白褐色。6は外面縦ハケ後ミ



第92図 126号土坑出土木製品実測図（4・5は1／3、他は1／2）

ガキ、内面ミガキで、底部外面にもミガキが及ぶ。外面褐灰色、内面灰褐色を呈し、外面には煤が付着。中期初頭以前の土器の混入品か。8は底径が大きいもの。内外ナデで、内面には指頭圧痕が観察できる。淡褐色～灰褐色。

9は器高46.2cm、胴部最大径44.2cm、口径26.8cmを測る丹塗大形甕。出土時より割れていたが、完形に復元できる優品。口縁部は内への突出が強い鋤先状をなす。頸部は括れが強く、胴部の張りが大きく、底部はやや厚い。外面～口縁上面は丁寧なミガキで、遺存も良好。胴部内面はナデを基本とするが、胴上部内面、胴下部内面に板状工具痕が残る。

10～12は蓋。10・11は外面縦ハケ、内面ナデの粗製蓋。いずれも頂部は平らで外面の括れが強い。

11は内面上部にハケメが残り、頂部外面に直線の沈線が見られる。10は灰褐色、11は淡褐色を基調とするが、いずれも内外に煤、コゲが付着。12は外面丹塗の無頸壺蓋頂部。外面は縦ミガキ、内面ナデで、生地は灰褐色。

13は完形の丹塗深鉢。口縁はやや内傾して立ち上がり、胴部の張りが強い。底部はかすかに上げ底。外面は縦ミガキ後口縁部横ミガキ、内面は上～中部指頭圧痕、下部板ナデ。生地は黄褐色。

14・15はいずれも完形になる粗製の単口縁鉢で、器面調整が良好に遺存する。14は胴部外面板ナデ、口縁外面～内面ナデ。淡黄灰褐色。15は外面下部縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴部内面指ナデ上げ。内面に丹の飛沫が付着。外面灰褐色、内面明褐色。16は丹塗高杯脚部。脚は低く、ゆるやかに外反して角張った端部に至る。外面縦ミガキ、内面ミガキ仕上げで、生地は灰褐色。

出土木製品（図版53、第92図） 5点を図化した。この他に加工の見られない木材も1点、出土している。いずれも土坑下部からの出土である。

1は広葉樹の棒状木製品で、上端は折れているが、現存で長さ27.4cm、幅3.0cm、厚さ1.5cmを測る。表面は丸く、側面・裏面は平滑。先端はすぼまり、上部表面にかすかに整形痕を残す。

2は広葉樹の杓子状木製品で、上端は折れている。長さ14.0cm、幅5.5cmを測り、上端に向って幅が狭くなる。厚さは上端が厚く、2.0cmを測るのに対し、下端は薄く1.1cm。表裏とも滑らかに仕上げ、表面右側及び、左側面に整形痕を残す。下端は何か打ち付けたかのようにつぶれる。

3は広葉樹の厚い板状木製品。下端及び右上方は欠損しているが、側面は本来の形態をとどめている。上端は折損している可能性もあるが、現状のように直線的に仕上げていたと考えて図示した。長さ7.8cm、幅4.8cm、厚さ2.5cmを測る。表裏とも滑らかに仕上げる。

4は上下を斧で切断した広葉樹の建築部材。下端切断面は片側から斜めに面的に仕上げているが、上端は不定方向から粗く切断したままである。表面は樹皮がかなりの範囲に遺存しており、本来樹皮を残したまま使用したと考えられる。長さ17.3cm、幅・厚さ8.5cm程になる。

5は広葉樹の建築部材か。上端は粗く左右から削り細くなり、下端は切断したような形態である。また下部表面は丸く削ったように大きく凹んでいる。裏面は平面的に仕上げている。長さ22.1cm、幅9.5cm、厚さ6.6cmを測る。

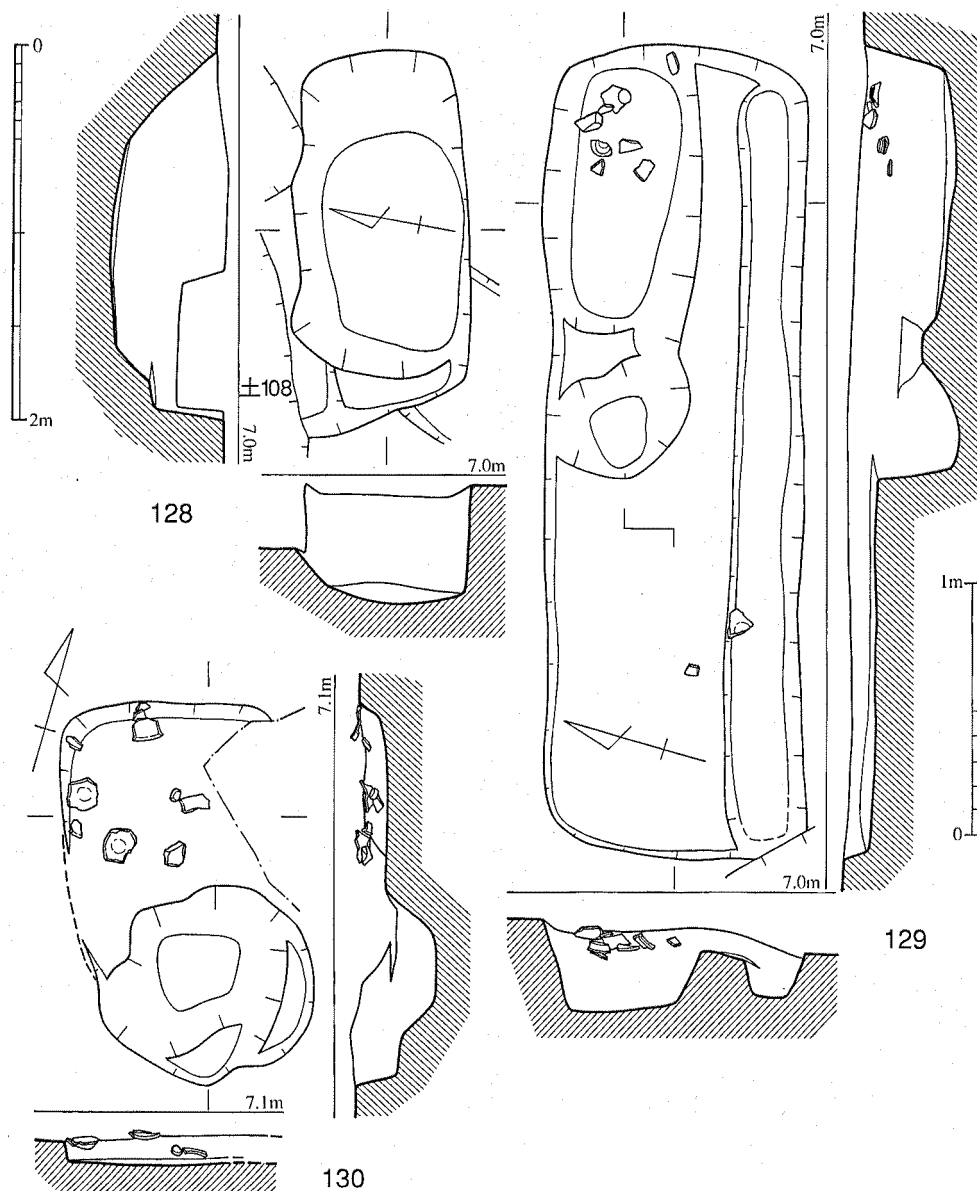
127号土坑（図版42、第90図）

H区に位置し、遺構検出段階では119号土坑に切られると考えたが、輪郭は不明瞭で、切合関係、平面形態は不安である。現状では主軸を北西－南東に向けた長方形と推測され、北西が119号土坑により失われる。現状で長さ1.45m、幅1.05m、検出面からの深さ25cm内外。地山シルト塊、鉄分を多く含んだ褐灰色粘質土を覆土とする。

出土土器（第94図1～5） 1は広口壺胴上部片で、頸部は粘土接合面に沿って剥離。胴部外面には低い断面M字状突帯を巡らす。内外ナデ仕上げであるが、頸部内面に接合痕、指頭圧痕を残す。淡褐色。2は鋤先口縁甕で上面はほぼ水平。外面縦ハケ、内面ナデで、淡黄褐色。3・4は甕底部。3は内外ナデ、黄灰褐色を呈し、外面に煤付着。4は外面縦ハケ、内面ナデで、コゲ、煤のためか暗褐色を呈す。5は傾き不安であるが、壺口縁部か。壺口縁部は外反し、端部はわずかに上下に拡張させて角張った面をなす。内外ミガキで淡黄褐色。

128号土坑（図版43、第93図）

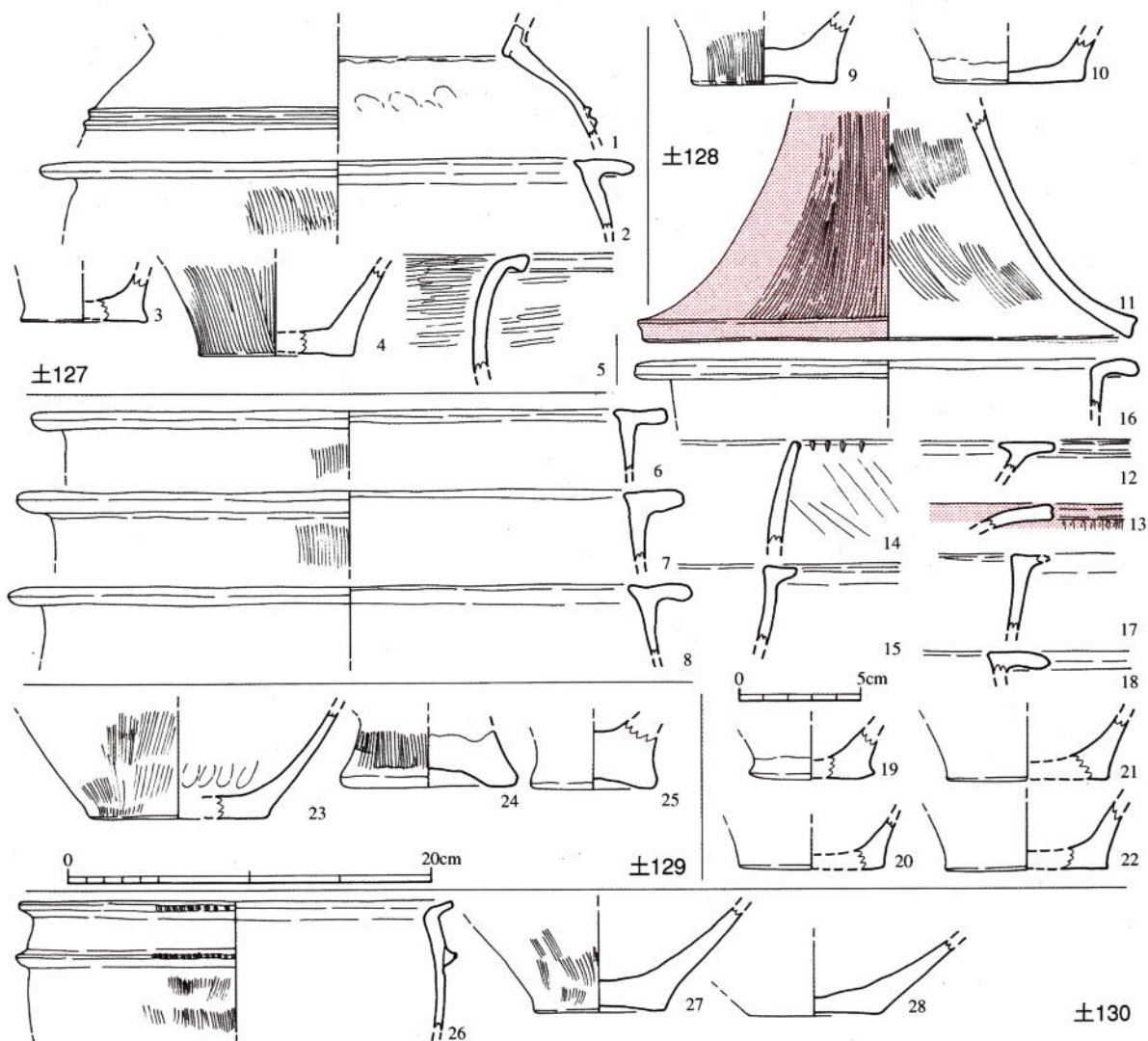
H区、108・120号土坑の間に位置する。長軸を北西－南東方向に向けた隅丸長方形の土坑である。南東壁に沿って幅15cm程のテラスがあるが、掘りすぎによる。本来は北東壁と同様に南東壁も緩やかに立ち上がっていたと推測される。これに基づき復元すれば長さ2.0m、幅1.45m程。南東壁の立



第93図 128～130号土坑実測図（土128は1／40、他は1／30）

ち上がりか直に近い事も注目される。下部褐灰色粘質土、上部灰褐色粘質土を覆土とし、比較的均質。出土土器（図版68、第94図6～22） 6～8は鋤先状の甕口縁部。いずれも上面は水平で、7は口縁部の器壁が厚い。6は外面ハケ、内面ナデで白褐色。7は外面ハケメ、内面摩滅し、褐色。8は内外摩滅し、淡黄褐色を基調とするが、内面は二次的に火を受け赤変する。9・10は甕底部。9はわずかに上げ底状を呈す。9は外面ハケ、内面ナデ、10は内外ナデ仕上げで、いずれも褐色を呈し、内面にはコゲ付着。11は丹塗筒形器台の脚裾か。緩やかに外反して裾に至り、端部は上下につまみ出しつつ凹面をなす。外面縦ミガキ、脚裾内面ナデ、筒部内面ハケメで、生地は橙褐色。

12～22は128号土坑の上層から出土したもの。12は鋤先口縁で、壺ないしは高杯か。内外摩滅するが、生地は橙褐色で、本来、丹塗であった可能性も高い。13は端部がやや角張る広口壺口縁部。外面ミガキ暗文がわずかに残る他は摩滅する。生地は淡褐色。14は直口甕小片で、端部外面に鋭利な工具で刻目を施す。外面板ナデ、内面ナデで、暗褐色。前期前半まで遡る可能性があるか。15は断面三角形に外面を拡張した甕口縁。内外摩滅し、刻目の有無不明。16は外折した口縁の甕。端部は



第94図 127～130号土坑出土土器実測図 (14・15は1/3、他は1/4 1～5：±127、6～22：±128、23～25：±129、26～28：±130)

上面が緩やかに丸みをもって外へ伸び、端部は面をなす。内外摩滅で、褐色。17は鋤先口縁小片で、口縁の伸びが短く、胴部が内湾することから鉢か。内外摩滅し、調整不明。淡褐色。18は鋤先口縁甕小片。内外摩滅で淡黄褐色。19～22は甕底部。19は底部外周の括れが強い。19外面・21内面は淡褐色、19内面・20内面は暗褐色、21外面は淡黄褐色、22は淡黄灰褐色で、20・21は外面が二次的に火を受ける。いずれも摩滅のため調整不明。

129号土坑 (図版43、第93図)

I 区に位置している。検出面では長軸をほぼ東西に向けた長さ3.25m、幅1.05mの隅丸長方形の土坑と考えた。しかし、掘り下げると北西隅の長方形土坑と、南壁沿いの長い溝が確認でき、両者の間に包含層が形成されていたと考えるべきであった。北西部は長さ1.7m、幅0.6mの土坑で、東端のピット状の部分とそれ以外の2基の遺構が切合う可能性がある。褐灰色粘質土が堆積し、検出面からの深さ45cmを測る。南壁沿いの溝は幅0.25m程で、検出面からの深さ15cm程である。土器の他に砥石 (第167図116) が出土。

出土土器 (図版68、第94図23～25) 23は大形の壺底部。外面縦ハケ、内面ナデで、白褐色。24・

25は厚く、上げ底状になった甕底部。24より古く、中期初頭か。24は外面ハケ、淡白黄褐色。25は内外ナデで灰黄褐色。

130号土坑（図版43、第93図）

H区に位置する。主軸をほぼ南北に向けた方形ないしは長方形の土坑と推測したが、東は杭が位置していたため十分に記録ができず、南は新しいピットに壊されるため全容は不明である。現存する範囲で、長さ0.75mを測り、幅0.9m程に復元できる。底面は平らで、検出面からの深さ15cm弱と浅く、輪郭も不安である。覆土は灰褐色粘質シルト。土器の他に凹石（第171図137）が出土。

出土土器（第94図26～28） 26は如意状口縁をなし、胴外面に突帯を巡らす甕。口縁端部、突帯頂部に細い刻目を施す。突帯下外面縦ハケ、口縁外面～胴内面ナデで暗褐色。27・28は壺底部。27は外面ハケ、内面ナデで、淡黄褐色。28は内外摩滅し、白褐色。

131号土坑（第95図）

H区、120号土坑の南に位置する。東西方向に主軸を向けた楕円形の南東部、北東部が張り出したような形態である。断面図作成の主軸方向で長さ1.9m、幅1.45mを測る。覆土の上部より相当量の土器が集中して出土したが、かなり掘り下げるまで遺構の輪郭は判明しなかった。そのため壁の高さは5cm程しか遺存しない。床面は東から西にかけて緩やかに低くなる。土器はかなり浮いて出土しているが、一括性はかなり良好と評価される。覆土の主体は褐灰色粘質土であった。131・132号土坑の上層からは打製石錐（第6表200－7）が出土した。

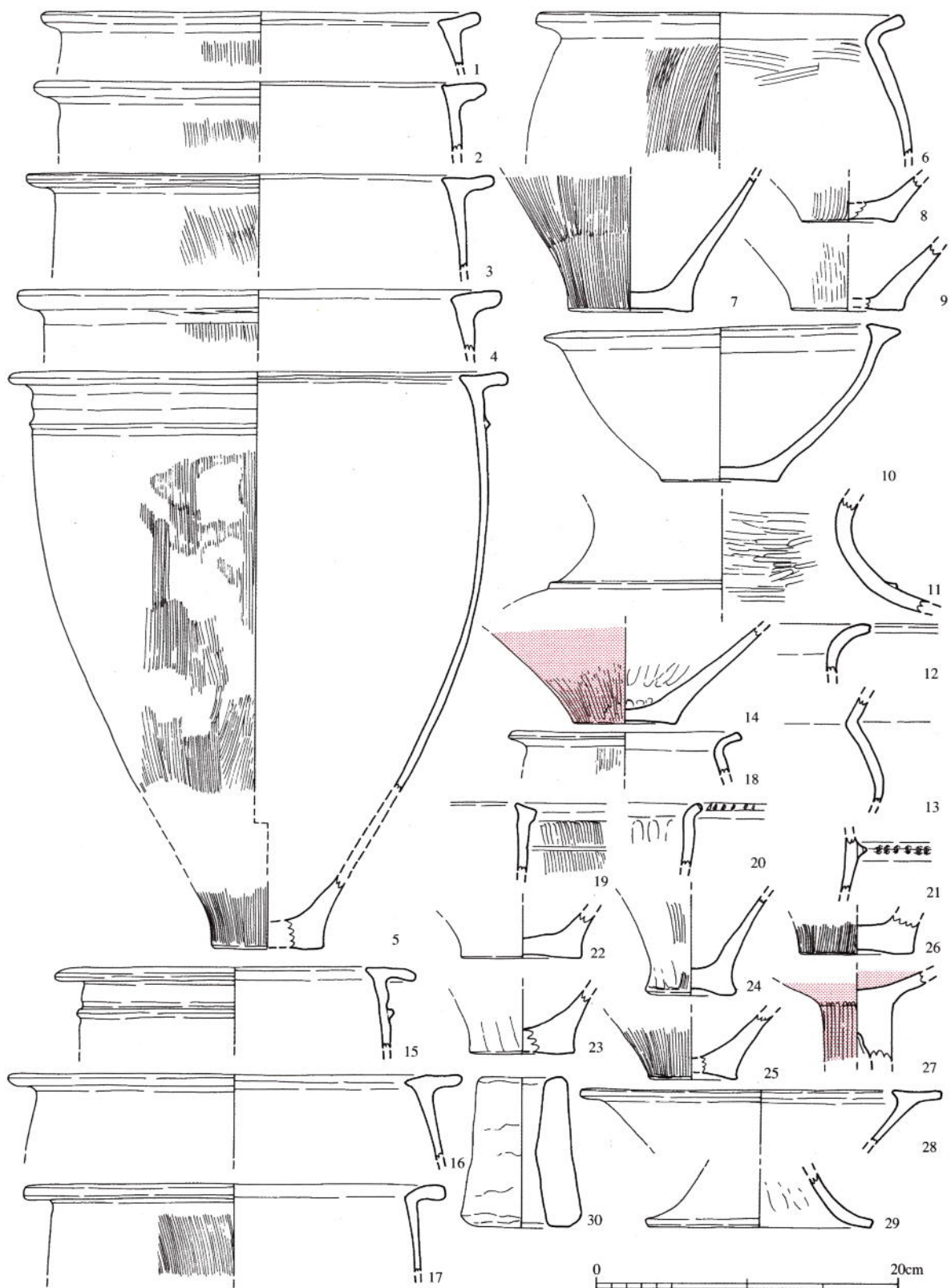
出土土器（図版68、第96図） 1～5は鋤先口縁の甕。5は底部と胴部が接合しないが、底部まで遺存する。口縁部はいずれも内傾し、5を除けば内への突出が弱い。5は胴上部外面に突帯を巡らし、底部はやや厚い。外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、4口縁下にはハケメ工具静止痕が残り、5突帯部内側には指頭圧痕が巡る。6は外反口縁の甕。頸部の括れが強く、口縁部は緩やかに外反しやや角張った端部に至る。外面縦ハケ、内面は横ハケの残る頸部内面を除けばナデ仕上げ。1・2外面・3は淡褐色、2内面は灰褐色、4は灰黄褐色、5外面は暗褐色、5内面・6は淡褐黄色。5は外面突帯下まで煤が付着し、内面は底部から胴中間までコゲが付着。3は内面焼成不良で灰色を呈し、2は割れた後に二次的に火を受け、赤変した破片もある。

7～9は底部片。7は甕で底部外面に環状に凹みが巡る。8・9は壺。9は外面摩滅するが、いずれも外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。7は淡黄褐色で、内外煤、コゲが付着。8は黄白褐色～白褐色で、外面煤が付着。9は淡褐色。

10は鋤先口縁の鉢。口縁上面が外傾し、内上方へ強く突出する。内外摩滅で淡白褐色。

11～29は131・132号土坑の上層から出土し、どちらに帰属する区別できないもの。11・12は中期初頭以前の壺肩部及び口縁部破片でいずれも淡黄褐色。11は肩部破片で、頸部は括れ、肩部に断面三角形突帯を巡らす。内面横ミガキ、外面摩滅。12は角張った口縁端部。内外摩滅。13は傾き不安であるが、中期後半の広口壺頸部か。内外ナデ仕上げで、淡褐色。14は丹塗壺底部。外面縦ミガキ、内面ナデ仕上げで、生地は淡黄褐色～明褐色。

15・16は鋤先口縁甕。15は胴部外面に頂部の丸い突帯を巡らす事から樽形甕か。内外ナデ仕上げで、淡灰褐色。16は内外摩滅で、淡黄褐色。17・18は外折した口縁の甕。17は強く外反した口縁で端部が厚く角張り、18は緩やかに外反する。いずれも外面ハケ、内面ナデ。17は褐色、18は外面淡黄褐色、内面淡灰褐色。19は断面三角形の甕口縁。内面は凹み、外面には沈線が巡る。外面縦ハケ、内面摩滅。淡黄褐色。20は如意状の甕口縁で、端部に先端の丸い工具により細い刻目を施す。黄褐色で、外面に煤付着。21は甕胴部刻目突帯部分の破片。内外ナデで、粘土の乾燥が進む前にかなり



第96図 131号土坑出土土器実測図（1／4）

132号土坑（第95図）

H区、調査区南壁際に位置し、131号土坑に切られている。主軸は断面図作成方向とはずれているが、北東－南西方向に向けた楕円形に近い平面形に復元できるかと考えられる。長さ2.25m、幅

1.5mに復元できる。検出面からの深さ45cm程であるが、西南部では壁の遺存が良くない。大形の甕等がまとまって出土した。覆土は褐灰色粘質土。

出土土器（第97図1～16） 1は広口壺口頸部。口縁部は内に粘土を継ぎ足し、上面水平の鋤先口縁とする。内外ナデで褐色。2は底径の大きい壺底部。外面縦ハケ、内面摩滅で、黄白褐色。

3～5は鋤先口縁甕。いずれも口縁上面は水平であるが、3は上面内側にかすかな凹みが巡り、5は内・外への突出の弱い厚い口縁をなす。3は外面ハケメ、内面ナデで、淡灰褐色～淡褐白色。4は丹塗で、胴部外面に断面M字状突帯を貼付。内外摩滅のため調整不明。生地は橙褐色。5は外面摩滅、内面ナデで褐色を呈す。口縁下面にうっすら煤が付着。

6・7は大形甕。6は復元口径37.0cm程で、胴部は丸味を帯び、頸部の括れが強い。口縁部は内への張り出しが弱い鋤先状で、胴部外面に断面三角形突帯を巡らす。内外ナデ。7は口径70.4cmに復元できる。口縁は内上方へ強く突出させ、鋤先状とし、口縁下の外面に断面M字状突帯を貼付。外面ハケメ、内面ナデで、口縁下部外面には板状工具のあたりによる溝が観察できる。外面灰褐色。

8は口縁部を欠損した鼓形器台。外面縦ハケ、内面ナデ後脚裾にハケメを施す。淡褐灰色。9は丹塗高杯脚上部破片。破損面の形態から、杯との接合は充填法によるものと推測される。外面縦ミガキで、低いM字状突帯を巡らす。内面は絞り痕。生地は橙褐色を呈すが、内面は焼成不良のため黒変。10は単口縁鉢。内外ハケメを施した後、口縁部は横ナデ。黄褐色。

以上の土器は中期後半でも古い時期に位置づけられる。

11～16は132号土坑東南外の遺構面からの出土。11は外折口縁甕。外面ハケ、内面ナデ仕上げで、淡黄褐色。12～16は底部片。13は階底部中央が凹み、上げ底状。外面は12・15縦ハケ、14・16板ナデ、13摩滅。内面は摩滅する15以外はナデ仕上げ。12は灰黄褐色、14は褐黄色、15・16は淡黄褐色で、12は外面煤、内見込みコゲが付着する。13は内外の二次加熱による変色が顕著。

133号土坑（図版44、第95図）

C区に位置し、長軸をほぼ東西に向けた隅のやや丸くなった台形を呈する。長さ1.15m、幅1.0mを測る。床面は東が高く、半円形のテラス状になり、西が低い。検出面からの深さ35cm余り。土器底部片等がまとまって出土した。土器の他に石英質石器（第9表1061）も出土している。

出土土器（図版68、第97図17～21） 17は前期後半の小壺頸部～口縁部破片。内傾した頸部から口縁部が外反し、丸味を帯びた端部に至る。淡褐灰色。18は3条の沈線からなる重弧文を施した壺肩部。外面摩滅、内面ナデで、灰褐色～淡褐色。19は内外摩滅の甕底部。淡黄褐色で外面に煤付着。20は中期後半の壺胴下半部。内外摩滅するが、胴部内面には指ナデ痕が残る。灰褐色。21は単口縁の鉢。内外摩滅、黄褐色。17～19は前期末以前に遡るが、20・21は中期後半で、土坑は後者の時期か。

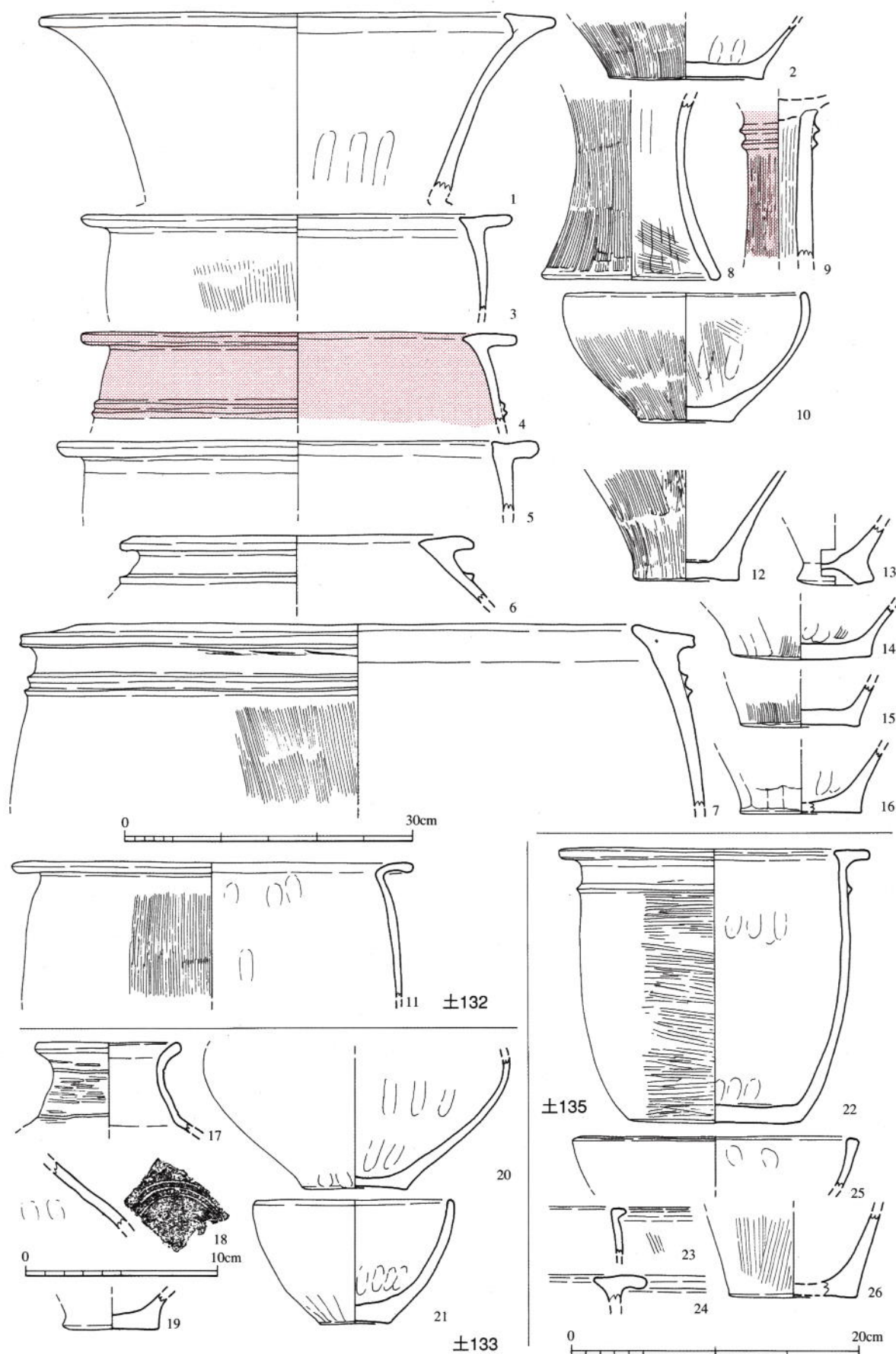
134号土坑（図版43、第95図）

B区に位置する。輪郭は明瞭で、長軸をほぼ東西に向けた細長い長方形を呈するが、西端及び南壁を31号土坑、ピットに切られる。長さ1.85m、幅0.55mを測り、検出面からの深さは20cmである。図示できる遺物はない。

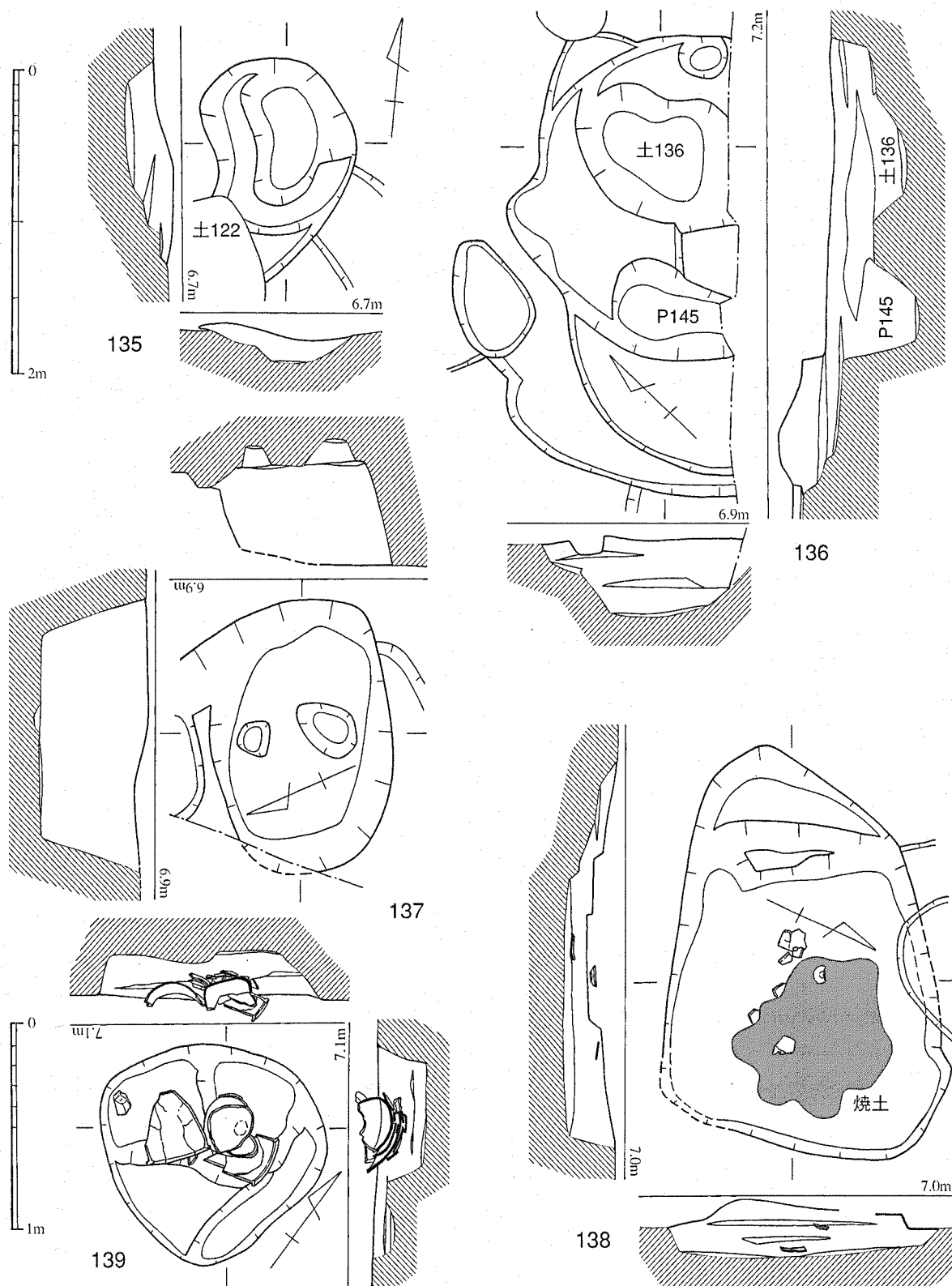
135号土坑（第98図）

H区に位置し、122号土坑に切られる。長軸を南北方向に向け、西の輪郭が凹んだ楕円形を呈する。長さ1.45m、幅0.9mを測る。西から南にかけてテラスが巡り、北東部が楕円形に深くなる。検出面から最深部までの深さは40cmを測る。覆土は褐灰色粘質土。

出土土器（図版68、第97図22～26） 22は図上で完形に復元できた樽形甕。口縁部は厚い鋤先口縁で、胴部外面には三角形突帯を貼付。胴部外面はミガキ、他は摩滅。外面淡褐色、内面淡赤褐色を

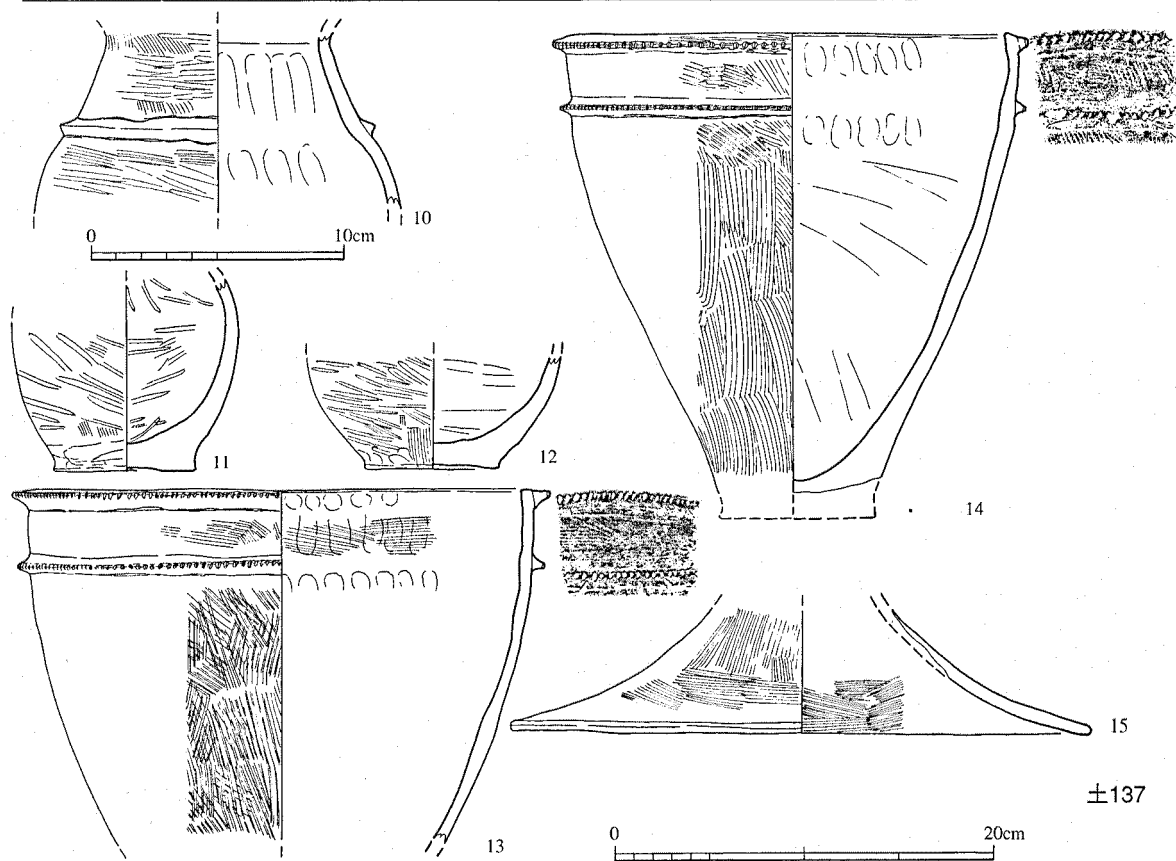
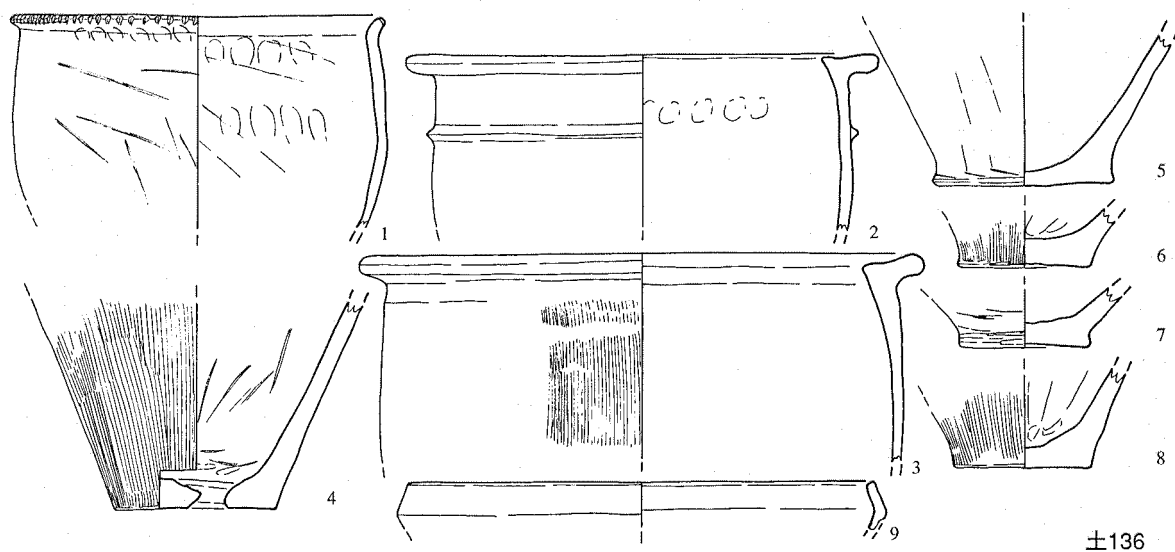


第97図 132・133・135号土坑出土土器実測図 (17・18は1/3、7は1/6、他は1/4
1~16: 土132、17~21: 土133、22~26: 土135)



第98図 135～139号土坑実測図 (±139は1/30、他は1/40)

呈し、粘土はやや粗く針状黒雲母が目立つ。23は断面三角形の甕口縁部小片で、口縁端部に刻目はない。外面ハケメ、内面ナデで淡褐色。24は鋤先状の甕口縁小片である。内外ナデで白褐色。25は単口縁鉢の口縁部か。口縁端部は肥厚させて凹面をなす。外面淡灰褐色、内面褐色。26は外面縦ハ



第99図 136・137号土坑出土土器実測図（10は1／3、他は1／4 1～9：±136、10～15：±137）

ケ、内面ナデ仕上げ。淡黄褐色を呈し、内面にはコゲが付着。22は中期中ごろ、24は中期後半でも古い時期かと推察される。

136号土坑（図版44、第98図）

C区の南壁際、19号竪穴住居跡の下層に位置する。検出当初は南西に位置するP145まで含めた大きな半円形のプランと考えたが、掘り進めると両者は別として区別すべきと判断した。136号自

体は主軸をほぼ北西―南東にむけた楕円形を呈すると推測されるが、東南部は調査区外へと続いている。長さ0.95m、幅1.3mを測る。北東壁にテラス、ピットがあり、西南部が深くなり、最深部は検出面から深さ50cm。覆土は暗褐灰色粘質土であるが、覆土の上層ではP145の遺物が混入してしまった。土器の他に磨製石斧（第166図96）、打製石錐（第6表200―8）が出土した。

出土土器（図版69、第99図1～9） 1は如意状口縁の甕。頸部はやや括れ、口縁部が短く外反する。口縁端部には柔らかいうちに、幅広の刻目を施す。内外板ナデ仕上げで、内面にはそれに先行する指頭圧痕が残る。外面淡黄褐色、内面明褐色。2・3は鋤先口縁の甕。2は胴部外面に断面三角形突帯を巡らし、内外ナデ仕上げすることから樽形甕か。橙褐色。3は口縁部上面が内傾し、胴部外面ハケ、内面ナデ。淡橙褐色で、外面煤付着。4～8は底部片。4は底部穿孔し、甑に転用する。外面縦ハケ、内面は板状工具の痕跡が残るナデ仕上げ。淡褐色～淡褐黄色を呈すが、外面は使用で暗褐色。5は外面板ナデ、内面ナデで、外面褐灰色、内面淡褐黄色。5は外面縦ハケ、内面ナデで灰白褐色。7は底部の括れが明瞭で、外面ミガキを施す壺底部。胴部外面板ナデ、内面ナデ。淡黄褐色～淡灰褐色。8は外面ハケ、内面ナデで淡褐色。外面には煤が付着。9は口縁部が屈曲して内傾する鉢か。内外横ナデ仕上げで、淡褐色を基調とするが、コゲ・煤が付着。

137号土坑（図版44、第98図）

E区、23号竪穴住居跡下層に位置する。長軸をほぼ東西に向ける楕円形の土坑と考えられるが、西端は調査区外にあり、全容は不明である。復元するならば長さ1.8m、幅1.2mを測る。壁は急な角度で立ち上がり、床面は比較的平坦で、検出面からの深さ70cm。床面の中央付近に2基のピットが確認された。覆土は暗褐灰色粘質土。

出土土器（図版69、第99図10～15） 10は壺頸部～肩部片。傾き不安であるが、頸部は緩やかに内傾し、胴部との断面三角形突帯を貼付。外面ハケ後横ミガキ、内面ナデ上げ。11・12は壺胴部～底部片。いずれも外面縦ハケ後ミガキで、11は内面ミガキ、12はナデ。10・12灰黄褐色、11灰褐色。13・14は口縁部と胴部に刻目突帯貼付の甕。いずれも外面粗いハケ。13は内面ナデで、口縁近くに指頭圧痕後ハケメ風条痕が観察できる。褐色で、外面突帯下煤付着。14は器表が良好に遺存し、内面上部指頭圧痕の残るナデ、下部は板ナデ。明褐色で、突帯下の外面に煤、内面にコゲ付着。15は蓋。内外ハケ仕上げで淡褐色。これらの土器は一括性が高く、前期末に位置づけられよう。

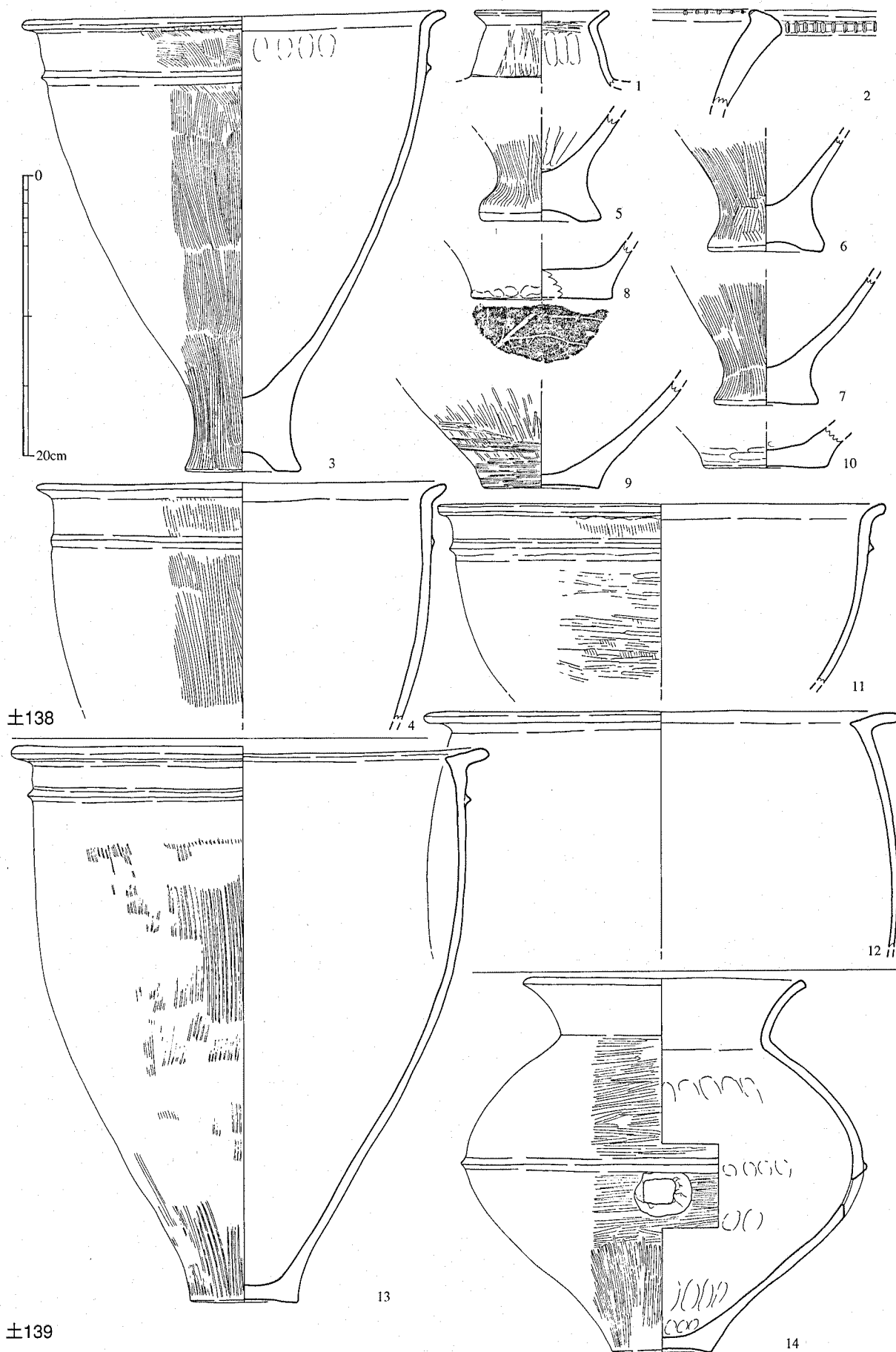
138号土坑（図版46、第98図）

D・E区、70号土坑の下部に位置する。主軸を北東―南西に向けたやや歪な四辺形が土坑本体であり、その西側でテラスが取りつく。テラスまで含めた長さ2.7m、幅1.8mを測る。床面はほぼ平らで、検出面からの深さ35cm内外。中央やや東の床面から15cm程浮いて、焼土・炭が集中的に出土した。覆土は暗灰褐色粘質土。土器の他に打製石錐（第6表171）が出土した。

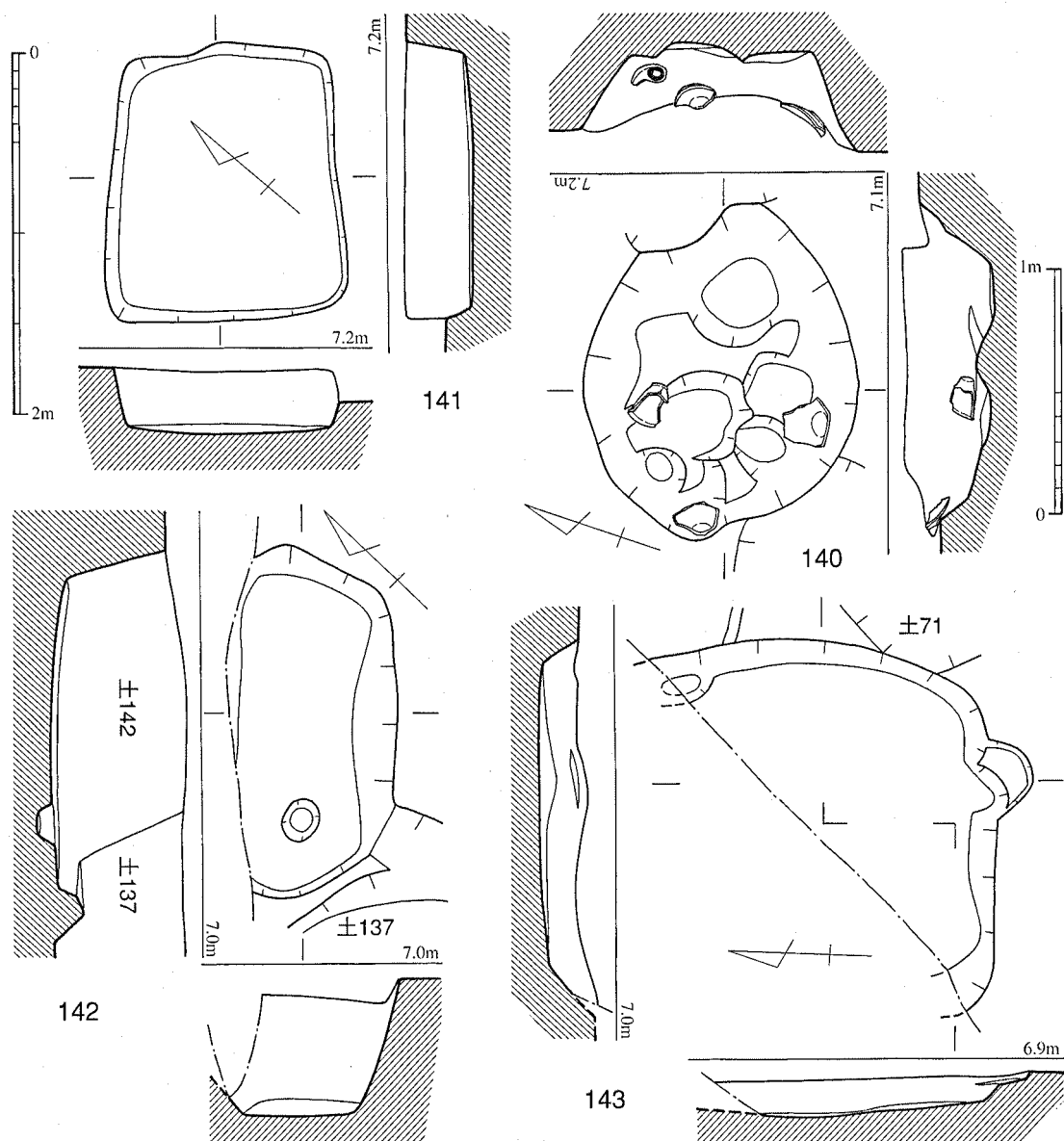
出土土器（図版69、第100図1～12） 1は小形壺口縁部。頸部は上が括れ、直線的に外へ口縁部が外傾する。外面縦ミガキ、口縁部横ナデ、頸部内面ナデ後上部のみミガキを施す。外面淡灰褐色、内面暗灰褐色。2は大形壺口縁部か。口縁端部を内上方に肥厚させ、内上端、外端に刻目を施す。内外ナデで、外面端黄褐色、内面端褐灰色。

3・4は如意状口縁で胴部外面に突帯を巡らす甕。3は底部まで遺存する。いずれも口縁端部、突帯頂部に刻目は施されず、3の底部は厚い上げ底となる。3・4とも外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、3外面口縁下にはハケメに先立つ指頭圧痕が微かに残る。3は外面灰褐色、内面淡褐色、4は淡黄灰褐色を呈すが、二次加熱のため外面器表は赤褐色。

5～10は底部片で、5～8は甕、9・10は壺か。5～7は底が厚く、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。5・6は上げ底であるが、7は平底。8は底が厚く、外底面に木の葉の圧痕が残る。内外ナデ



第100図 138・139号土坑出土土器実測図 (1 / 4 1~12: 土138、13・14: 土139)



第101図 140～143号土坑実測図（±140は1/30、他は1/40）

仕上げ。9は外面ミガキ、内面ナデ仕上げ。10は内外ナデ。5外面・9は黄白褐色～灰白褐色、5内面は白褐色、6外面は淡黄褐色、6内面・7は淡褐色、8外面淡灰黄褐色、8内面・10は淡灰褐色で、6・7内面はコゲ付着、7外面は二次的に火を受け赤変。

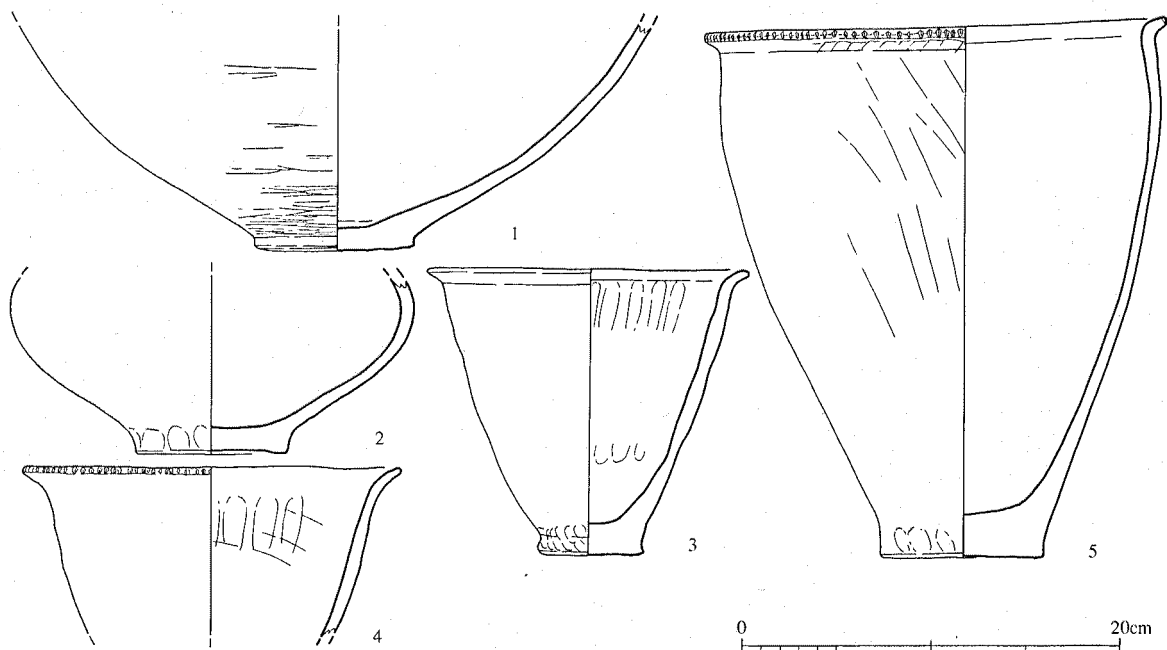
11は如意状口縁で胴部外面に断面三角形突帯を巡らす大形鉢。口縁部は強く外反して、端部は角張る。胴部外面横ミガキ、突帯～口縁外面縦ハケ、胴部内面ナデ仕上げ。灰白褐色。

12は鋤先口縁甕で、他に比べ新しい。調整不明で、外面白橙褐色、内面淡橙褐色でコゲ付着。

1・12以外は中期初頭頃の一括遺物として考えられるか。

139号土坑（図版45、第98図）

D区に位置する。直径1.1m程のやや歪な円形を呈し、東に溝状の凹みがあるとともに、西北部が低くなる。最深部は検出面からの深さ25cmを測る。中央部の床面からやや浮いた状態で甕、壺が出土しており、一括性は良好と評価できる。暗褐色粘質土を覆土とする。



第102図 140号土坑出土土器実測図（1／4）

出土土器（図版69、第100図13・14） 13は完形の甕。口縁は厚く内傾した鋤先状を呈し、口縁下外面に断面三角形突帯を巡らす。外面縦ハケ内面ナデ。外面褐色、内面淡褐灰色で、底部から胴中央付近まで外面煤、内面コゲ付着。14は広口壺で、図上で完形に復元。口頸部はこの種の器形としては短く、端部が角張る。胴部は張りがあり、最大径付近に断面三角形突帯を貼付し、突帯直下に焼成後穿孔。底部はやや上げ底。胴部外面横ミガキ後底部付近を縦ミガキ、胴部内面はナデ。口縁部は摩滅のため調整不明。外面淡褐色、内面暗褐灰色。2点とも中期前半でも新しい時期か。

140号土坑（図版45、第101図）

D区、23号竪穴住居跡の東に位置する。長軸を北東－南西に向けた楕円形を呈し、長さ1.4m、幅1.15mを測る。壁の傾斜は緩やかで、床面は凹凸が著しい。検出面から最深部までの深さ35cm余りを測る。床面よりやや浮いて土器が出土した。褐灰色粘質土を覆土とし、炭を若干含む。

出土土器（図版69、第102図） 1・2は壺。ともに底部は円板状に突出し、胴部の張りが強い。1・2は内外摩滅するが、1は外面下部にミガキ、2は底部外周に指頭圧痕が残る。1は外面灰褐色、内面淡褐色、2は淡黄灰褐色。3～5は如意状口縁の甕で、4・5は口縁端部に刻目施文。3は内外ナデ仕上げで、底部外周、内面に指頭圧痕が残る。4は外面摩滅、内面板ナデ後ナデ。外面淡褐灰色、内面暗褐色で、外面は二次加熱による変色、煤の付着が確認される。5は完形。口縁端部の刻みはやや幅広である。胴外面上部は板ナデ、内面ナデ、胴外面上部は板ナデ仕上げで、口縁下面にも板工具のあたりが残る。底部外周には指頭圧痕。外面淡褐色、内面黄褐色で、胴部内面全体にコゲが付着する。

これらの土器は前期後半の一括遺物と考えられる。

141号土坑（図版46、第101図）

E区に位置する。長軸を北東－南西に向けた隅丸長方形の整った形を呈する。長さ1.5m、幅1.35mを測る。床面はほぼ平らで検出面からの深さ35cmである。覆土は褐灰色粘質土で、地山シルト塊、炭を多く含む、床面にも炭が堆積していた。図示できる出土遺物はない。

142号土坑（図版46、第101図）

D区、23号竪穴住居跡の下層に位置する。長軸を北東―北西に向けた長楕円形を呈すると思われるが、調査区北壁にかかるため、全容は不明である。長さ1.95m、現存幅0.9mを測る。底面はほぼ平らで検出面からの深さ75cmを測り、床面南西部にピットが1基、確認された。暗灰色粘質土、炭を多く含む。土器の他に砥石（第169図132）が出土。

出土土器（図版69・70、第103・104図） 1～4は壺。1は胴の上下で接合しないが、同一個体か。胴部から頸部に緩やかに移行し、肩部には沈線を巡らす。口縁部は短く外反し、端部は丸い。内外とも摩滅が進むが、胴部外面に所々ミガキが残る。2は口縁部～胴上部破片。胴部は張りが強く、頸部は内傾。口縁部は短く外反し、端部を丸く肥厚させる。肩部を4条の沈線で区画し、その下に貝殻腹縁刺突による2条1単位からなる重弧文を配置。肩部区画上には2条1単位の右上がり平行線を間隔をおいて配置するが、一部、三角文を連ねるところもある。口縁端部も含め内外全面ミガキ仕上げ。3は胴部の張りが小さく、頸部がやや細身の壺。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。底部は円盤状。肩部は2条の沈線で区画し、その下に交差する3条1単位の曲線、「×」字条の文様を沈線で描く。外面ミガキ、内面ナデで、頸部・胴上部内面には指頭圧痕が顕著。4は頸部が緩やかにすばまり、口縁端部は角張る。肩部には3条の沈線を施す。内外横ミガキ仕上げ。1外面・2内面は灰褐色、1内面・4は淡黄褐色、2外面は淡灰黄褐色、3外面は淡褐色、3内面は灰色。

5～11は壺底部。5・6は底部が円盤状に突出し、8や外底面がかすかに凹み基筈底状。摩滅するものが多いが、6は内外ミガキ、8は底部外周板ナデ、9は外面板ナデ後ミガキ、10は微かに板ナデが残る。5外面は暗灰褐色、5内面・7外面・8・11内面は淡褐色、6外面・7内面・9は淡黄褐色、6内面は灰黄褐色、10・11外面は淡灰褐色。8は二次的に火を受け広範囲に赤変。

12～15は如意状口縁の甕で、端部に刻目を施す。刻目は13は先端のやや鋭い工具によるが、他は先端の丸い工具により柔らかい時点に施文される。12は小形で外面ハケ、内面ナデ。13・14は内外ナデ仕上げであるが、13は口縁外面に横方向の板ナデらしき稜線が残り、14は口縁内面、胴部内面に指頭圧痕が巡る。15は完形に復元できるもの。内外板ナデの微かな稜線が全面に残るが、底部外周・頸部内面・底部内面に指頭圧痕が観察できる。12・14外面は黄褐色、13外面は褐色、13内面・15内面は灰黄褐色、14内面は淡灰褐色、15外面は暗黄褐色。いずれも外面に煤が付着し、14内面・15の胴中間から口縁部までの内面にはコゲが付着。13～15は二次的に火を受けた事による変色、器面の剥離も顕著。

16～21は甕底部片。18・21は焼成後穿孔し、甑に転用。摩滅するものが多いが、17内外・18外面下部・19外面下部・20内面は板状工具によるナデの痕跡が観察できる。16外面・17内面・20内面は淡灰褐色、16内面は淡褐黄色、17外面・20外面は淡褐色、18・21は淡灰黄褐色、19は暗灰色。18外面は煤、18内面・21内面はコゲが付着。

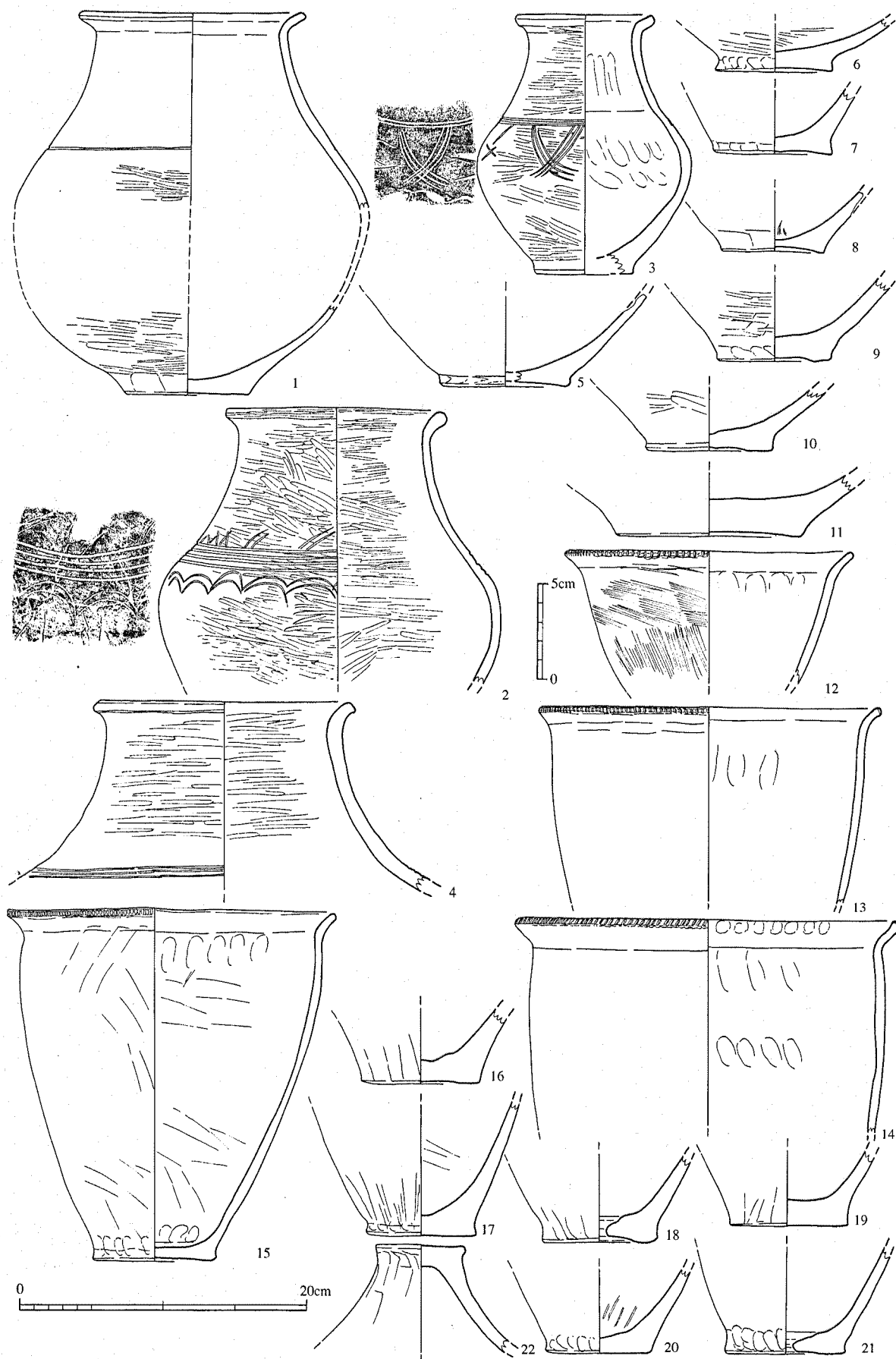
22は蓋頂部片。外面板ナデ、内面ナデ仕上げで、灰黄褐色を呈す。23は甕底部か。外面板ナデ、内面ナデで、灰褐色。外面は二次的に火を受け、一部赤変。

24～27は鉢。24は如意状口縁の大形鉢。口縁部は短く外反し、端部に細い刻目を施す。内外ミガキ仕上げで、口縁部外面に皺が残る。淡褐色。25～27は単口縁の鉢。25は外面下部に粗いミガキが残り、内面はナデ。外面淡灰褐色。内面褐色。26は小形で内外ナデ仕上げ。淡灰褐色。27は口縁部が大きく開く。内外ミガキ仕上げで、外面黄褐色、内面淡褐色。

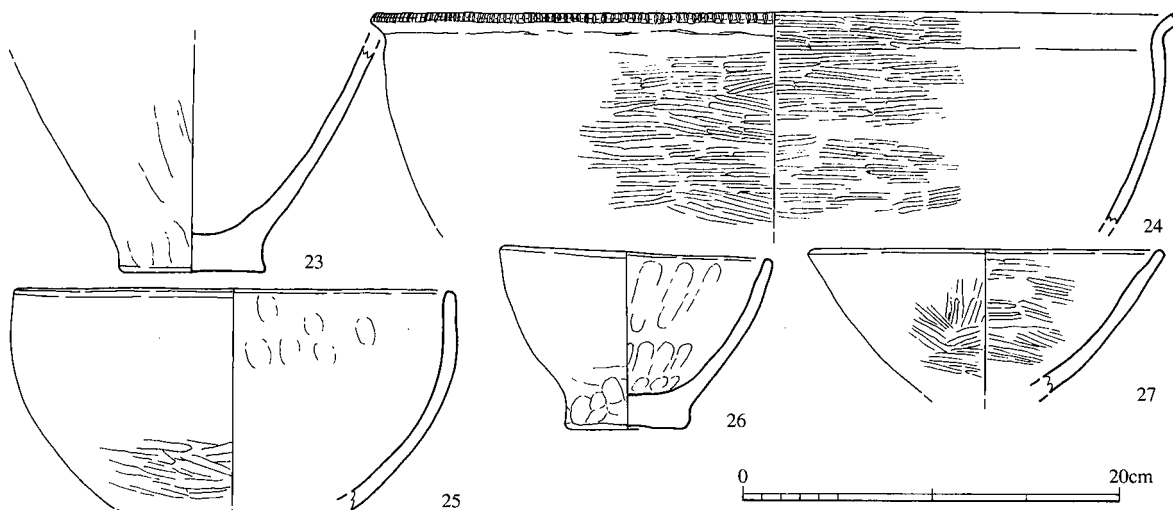
これらの土器は前期後半の良好な一括遺物を構成すると考えられる。

143号土坑（図版45、第101図）

E区北壁際、27号竪穴住居跡の下層に位置する。主軸をほぼ南北に向けた隅の丸い方形ないしは



第103図 142号土坑出土土器実測図 (1) (12は1/3、他は1/4)



第104図 142号土坑出土土器実測図（2）（1／4）

長方形の平面形と推測されるが、調査区外へと広がり全容は不明である。現状で南北方向に長さ1.9m、幅2.05mを測る。床面はほぼ平らで、検出面からの深さ20cm弱である。灰褐色粘質土を覆土の主体とし、地山シルトを多く含む。なお、南壁の突出する部分は、本土坑と切合うピットであるが、両者の切合関係は十分に確認できなかった。図示できる遺物はない。

144号土坑（図版46、第105図）

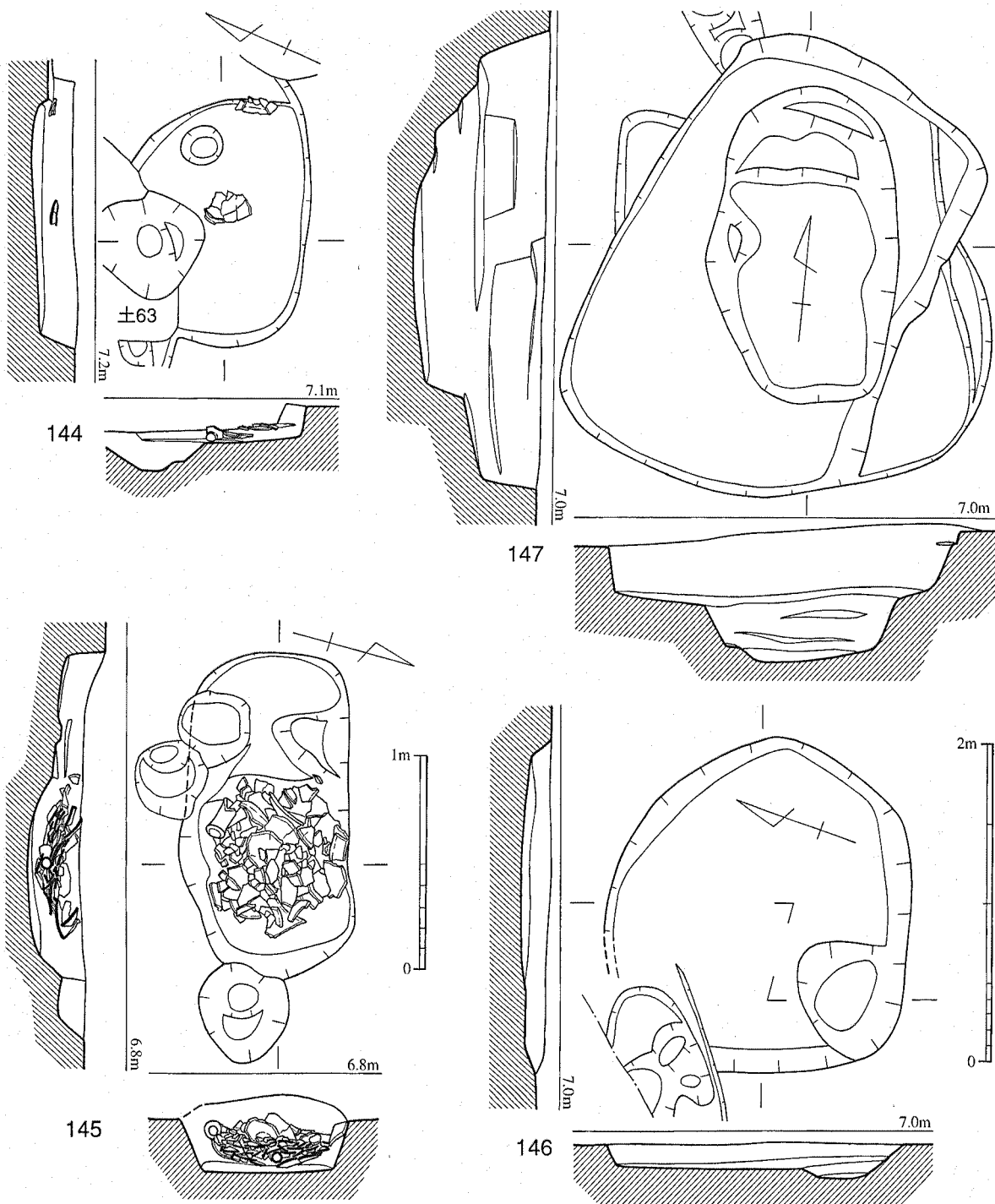
D区に位置し、63号土坑に切られる。平面形は明瞭で、長軸を北東－南西方向に向けた楕円形プランと想定されるが、北西部を63号土坑の掘削により失うため、全容は不明である。現状で長さ1.55m、幅1.1mを測る。床面は平らで検出面からの深さは25cm前後。床面北東部にピットが1基確認され、床から若干浮いて、土器がまとまって出土した。灰褐色粘質土を覆土とし、床面全面に炭が分布していたことも特筆される。

出土土器（図版70、第106図1～3） 1は如意状口縁の甕で図上で完形に復元。頸部の括れが弱く、口縁は緩やかに外反する。端部はやや角張り、先端鈍角の工具で刻目施文。胴下部外面ナデ、胴上部内面板ナデ、口縁外面指頭圧痕、胴部内面ナデ。外面暗褐灰色、内面淡黄灰褐色で、高さ6cm付近から口縁部まで煤、胴上部帯状にコゲが付着。2は口縁断面三角形の甕口縁部。口縁端部には細い刻目を施文。外面板ナデ、内面指ナデで、外面淡褐色、内面淡灰黄褐色。3は鉢口縁部として図示したが、傾き不安で無頸壺の可能性もある。外面には3本の沈線を1単位とする鋸歯文を施文するようである。外面摩滅、内面ナデ仕上げ。外面淡橙褐色、内面灰色。これらの土器は前期後半～末と推測される。

145号土坑（図版47、第105図）

G区、36号住居跡の下層で検出した土坑である。長軸をほぼ東西に向けた隅丸長方形を呈するが、南西部の壁が新しいピット2基により壊され、東端部もピットと切合う。長さ1.55m、幅0.8mを測る。床面には北西側に踏み段状のテラスがあるとともに、東半分が西半より10cm程深くなる。検出面から最深部までの深さ25cmを測る。西半では中期前半の土器が多量に一括投棄されていた。暗灰褐色粘質土を主体とし、地山シルト・炭を多く含む。

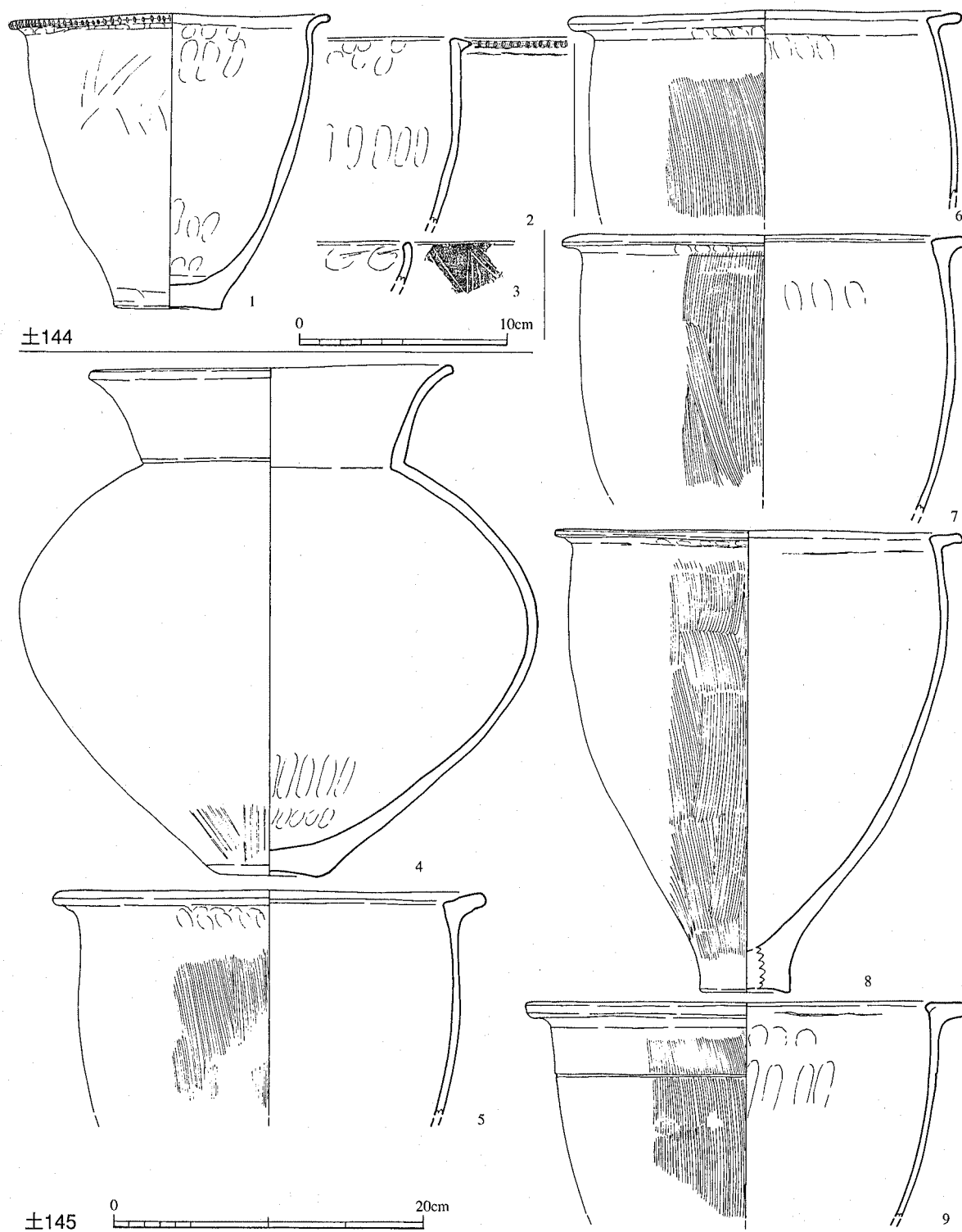
出土土器（図版70、第106図4～9・第107図10～19） 4は広口の鋤先口縁壺。胴部は張りが強く、口頸部は緩やかに外反してやや角張った端部に至る。底部はわずかに上げ底。内外摩滅するが、胴



第105図 144～147号土坑実測図（土145は1／30、他は1／40）

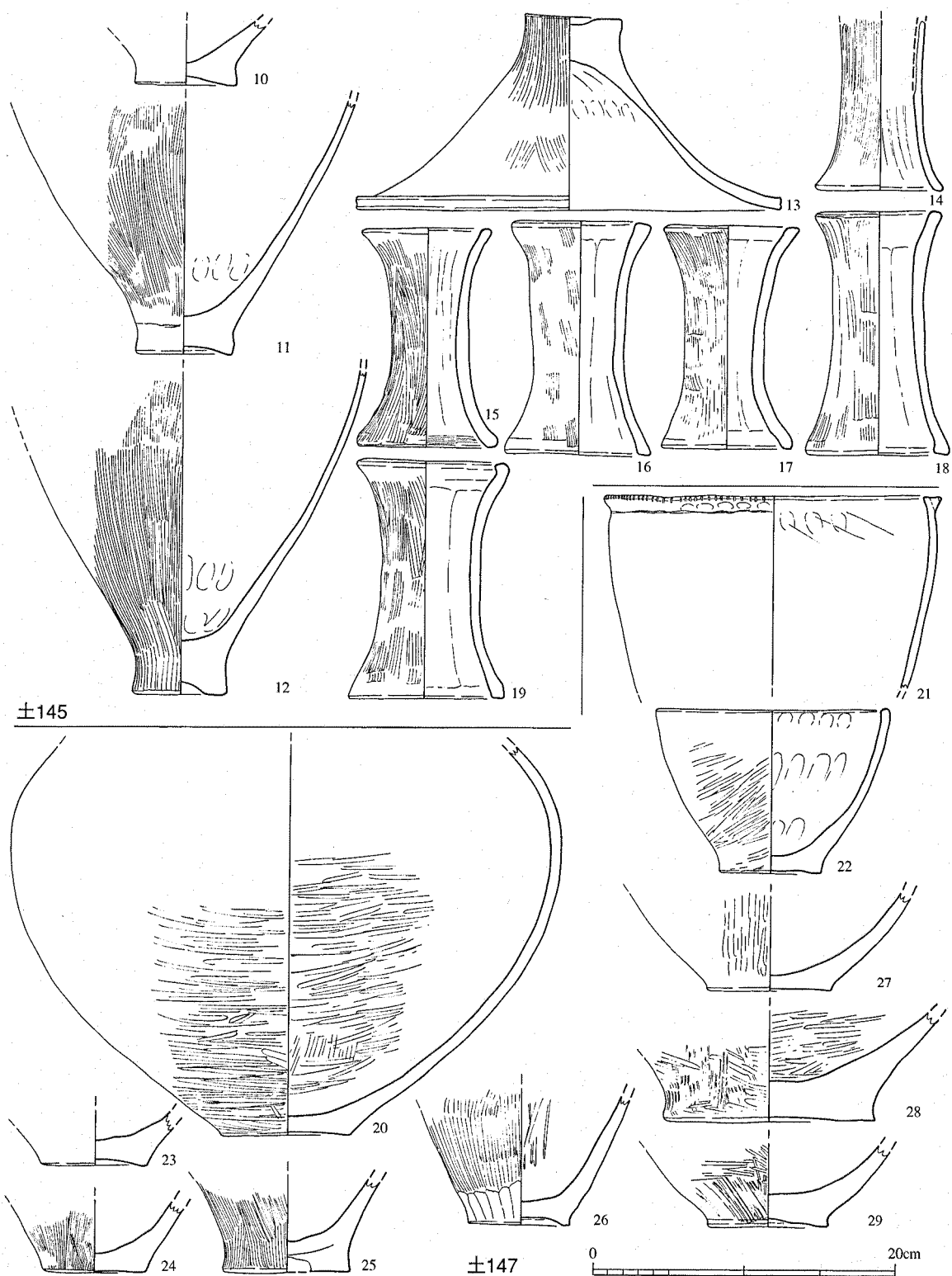
下部外面に粗いハケ、胴下部内面に指頭圧痕が残る。白褐色。

5～9は甕。いずれも厚い鋤先口縁で、上面が内傾する。5は内への突出が弱く、6は他に比べ口縁が薄手。8は底部まで遺存し、底部は厚く、かすかに上げ底状。9は胴部外面に沈線が巡る。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げを基調とするが、5は内面摩滅。5～8は口縁外面にかすかに指頭圧痕が観察でき、8・9は口縁部内面に接合痕が残る。10～12は甕底部。いずれも底部は厚く、わずかに上げ底で、12は底部外面が半球状に凹む。10は内外摩滅するが、他は外面縦ハケ、内面ナデ。



第106図 144・145号(1) 土坑出土土器実測図(3は1/3、他は1/4 1~3:土144 4~9:土145)

5・6内面・7内面・8外面・9外面・10内面・12は淡黄褐色～黄褐色、6外面は淡灰黄褐色、7外面・9内面・11外面は灰褐色、8内面は褐色、11内面は褐灰色。5～9・11・12は外面に煤が付着し、6内面全面・7内面下部にはコゲが残る。12は内面にコゲが付着するが、高さ12～15cmのあたりは带状にコゲの付着が少ない。10外面は二次的に火を受け赤変。



第107図 145 (2) ・147号土坑出土土器実測図 (1 / 4 10~19: 土145、20~29: 土147)

13は完形の蓋。頂部外周は直立し、頂部上面はわずかに凹む。裾部に向って緩やかに開き、端部は凹面をなす。外面縦ハケ、内ナデ仕上げ。淡黄褐色を呈し、裾部内面に帯状にコゲが付着。

14~19は鼓形の器台。14は口縁部を欠損するが、他は完形に復元できほぼ同形同大。口縁部、裾

端部はいずれも安定した設地面をなし、18裾部・19口縁は内にわずかに拡張する。外面縦ハケ、内面ナデ、口縁・裾周囲は横ナデでを基本とするが、15裾内面にはハケメが残る。14内面は板状の工具によるナデで仕上げたようである。17は他に比べると仕上げの雑な印象を受ける。14外面・15・16内面・18は淡灰褐色、14内面は淡黄灰褐色、16外面は淡黄褐色、17は褐灰色、19は黄灰褐色。

146号土坑（図版49、第105図）

F区、29号住居跡の下層に位置する。長軸を北東―南西に向けた楕円形の西側が広がった平面形で、西壁はやや直線的である。長さ2.1m、幅1.9mを測る。29号住居跡の下層に位置するため壁の遺存は良くなく、検出面から床面までの深さは15cm余り。床面の南西部にピットが確認された。

147号土坑（図版47、第105図）

F区、33・34号竪穴住居跡の下層に位置する。上半部は遺構検出を誤ったため北東―南西方向に長軸を向けた長方形の掘り方になったが、その東寄りの長軸をほぼ南北に向ける長楕円形掘り込みが土坑本体である。土坑本体の長さは2.05m、幅1.2mを測る。北壁側では2段のテラスが斜面中間に付設され、西壁中央には踏み段状の小さなテラスがある。床はほぼ平らで検出面からの深さ80cm余り。覆土は上層は褐灰色粘質土、下層は炭、地山ブロックを多く含む暗灰色粘質土が主体であった。図示できる遺物はない。

出土土器（図版71・72、第107図20～29） 20は胴部最大径35.6cmを測る大形壺胴部片。21は口縁断面三角形の甕。口縁は上面が凹み、端部に細い刻目を施す。外面は丁寧なナデ仕上げで、口縁下面に微かな指頭圧痕を残す。胴部内面はナデ仕上げであるが、口縁近くには指押さえ後板ナデの痕跡が残る。外面黒色、内面褐灰色。22は直口の鉢。外面は摩滅するがミガキが残り、内面はナデ仕上げで指頭圧痕を残す。淡褐白色で、黒色針状の雲母が目立つ。

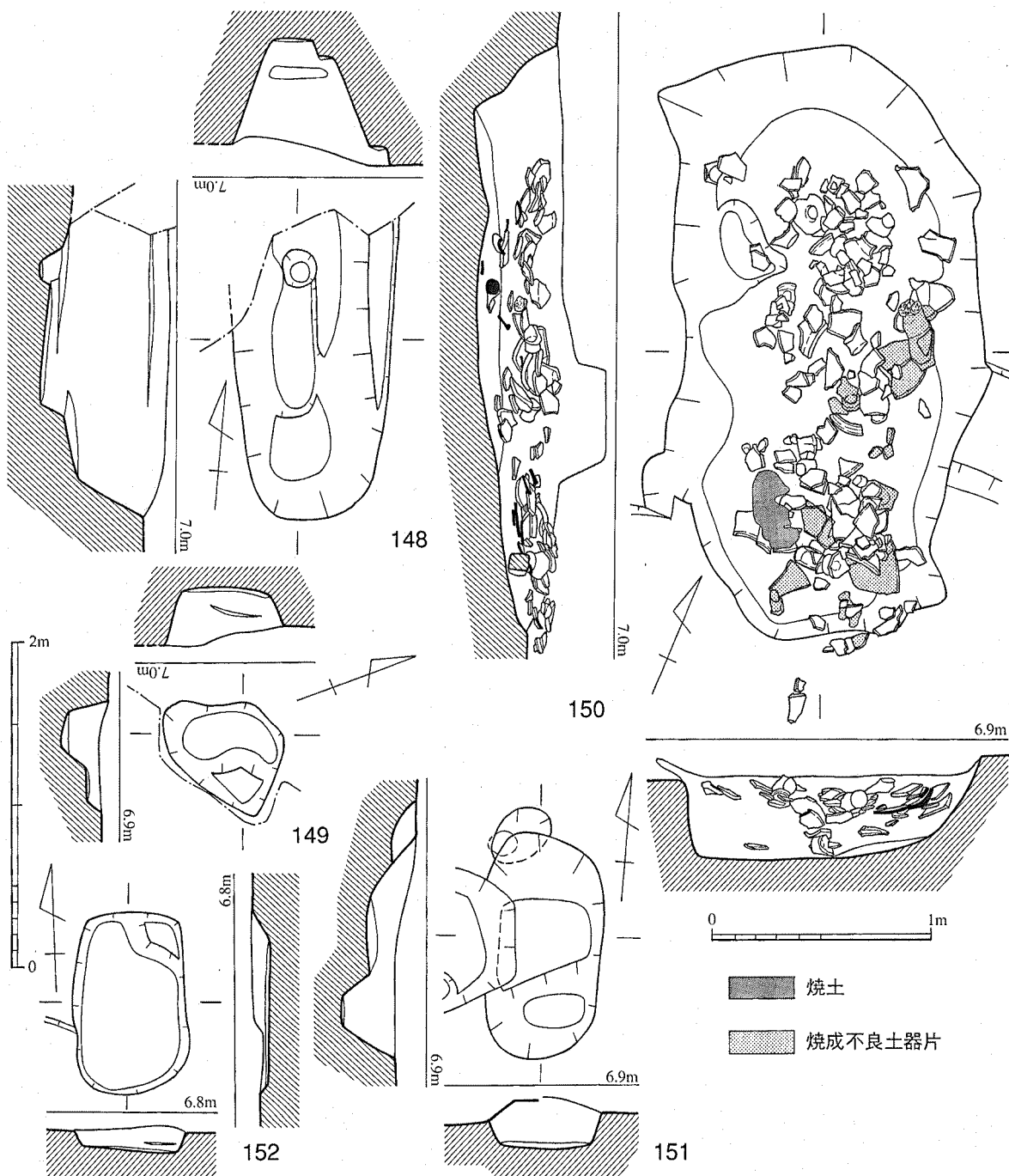
23～29は底部片。23～28は甕。23は内外摩滅。24は外面縦ハケ、内面摩滅。25は外面縦ハケ、内面摩滅。26は胴部外面ハケメの後、底部外周に板ナデを施す。内面は板ナデの擦痕が残る。外面煤が付着。27は外面ミガキ、内面摩滅。28は外面縦ハケ後ミガキ、内面ミガキ。29は外面縦ハケ後ミガキ、内面摩滅。23外面・24外面・29内面は淡褐灰色、23内面は淡褐色、24内面・25は暗褐色、26は淡黄白褐色、27・29外面は淡灰黄褐色、28は淡灰褐色。25は外面煤、24は内面コゲ付着。

148号土坑（図版47、第108図）

H区、調査区北壁際に位置する。主軸をほぼ南北に向けた長楕円形を呈する。調査区外へと続き全容は不明であり、東壁上部のテラスは掘り間違いによるもので、土坑本来の輪郭はその内側と考えられる。東壁のテラスを除いた土坑本体は、現存値で長さ1.9m、幅0.85mを測る。床面は凹凸が顕著であるが、検出面から最深部までの深さは80cmを測る。褐灰色粘質土が覆土の主体であった。

出土土器（図版72、第148図1～6） 1～3は甕。1・2は口縁断面三角形で、胴上部に低い突帯を巡らす。1は口縁外端部、突帯頂部に先端の丸い工具で刻目。内外ナデで、口縁外面下面、突帯部の丁寧なナデが特徴的。外面上部煤付着、下部二次的に火を受け変色する。器高6.5～20.5cm付近の内面は帯状にコゲ付着。外面淡褐灰色、内面淡褐色。2は口縁外端部、突帯頂部の刻目の摩滅が顕著。胴下部外面摩滅するが、突帯下にハケメが残る。口縁外面～胴部内面ナデ。外面突帯下に煤、内面下半にコゲ付着。外面淡黄褐色、内面褐灰色。3は外折口縁甕。口縁は上面水平で短く外側に伸びる。焼成後穿孔し、甕に転用。底部外周板ナデ、胴下部粗いハケ、胴上部細かいハケ、口縁部内外横ナデ、胴部内面ナデ上げ、胴下部摩滅するが板ナデ痕が残る。淡灰褐色～淡黄褐色。

4・5は底部片。4は外面縦ハケ、内面ミガキ。明褐色～褐灰色。5は底部外周が張り出し、内



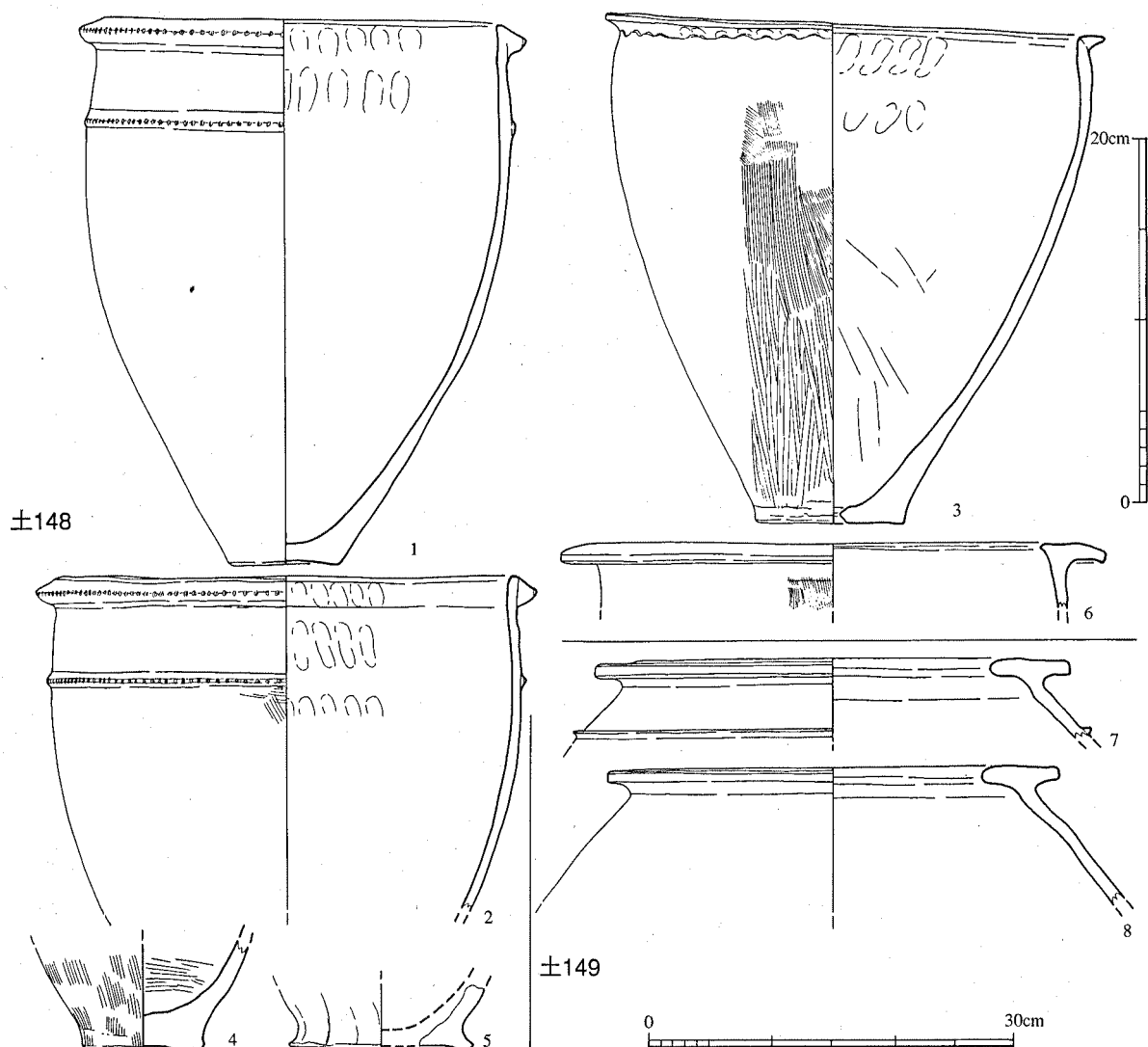
第108図 148～152号土坑実測図（土150は1／30、他は1／40）

面剥離する。外面ナデ仕上げで、淡黄褐色。

以上の土器は前期末に位置づけられるが、鋤先状の甕口縁部4は混入品で中期後半。外面ハケ、内面ナデで、内外明褐色。

149号土坑（第108図）

F区、33号竪穴住居跡の下層に位置する小形の土坑。主軸を北東－南西方向に向けた楕円形の東側に三角形の突出部が取りついたような形態である。北東－南西方向の長さ0.75m、幅0.75m、検出面から最深部の深さ30cmを測る。褐灰色粘質土を覆土とする。



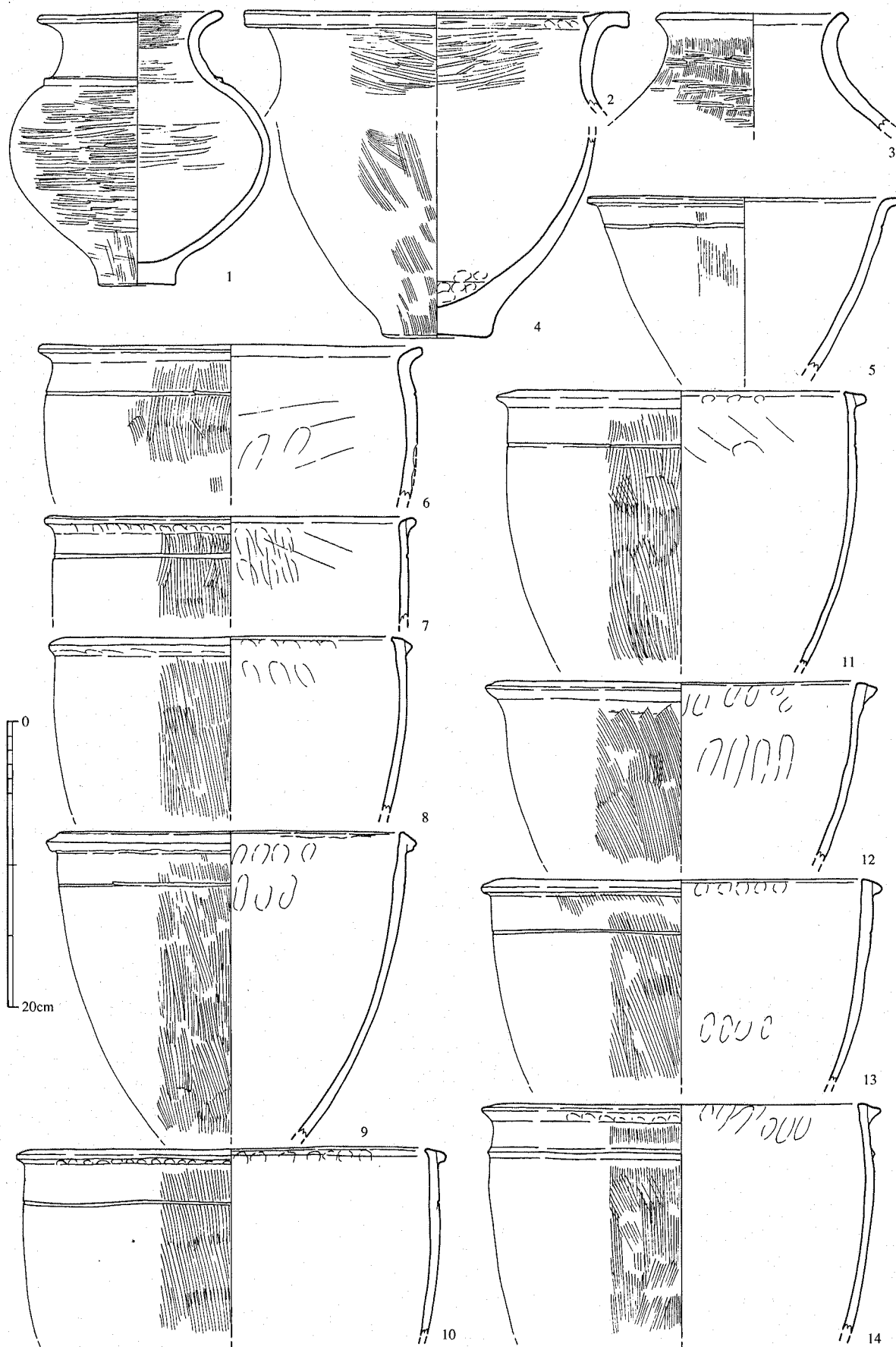
第109図 148・149号土坑出土土器実測図（7・8は1/6、他は1/4 1～6：土148、7・8：土149）

出土土器（図版72、第149図7・8） 7・8は大形で、胴部が丸く張り、頸部の括れが強い甕。7は口径39.2cm、8は口径37.2cm。いずれも口縁部は内への拡張が顕著で、外端部は角張る。7は胴部外面に断面三角形突帯を貼付。いずれも内外ナデ仕上げ。7は淡褐色、8は褐色を呈す。

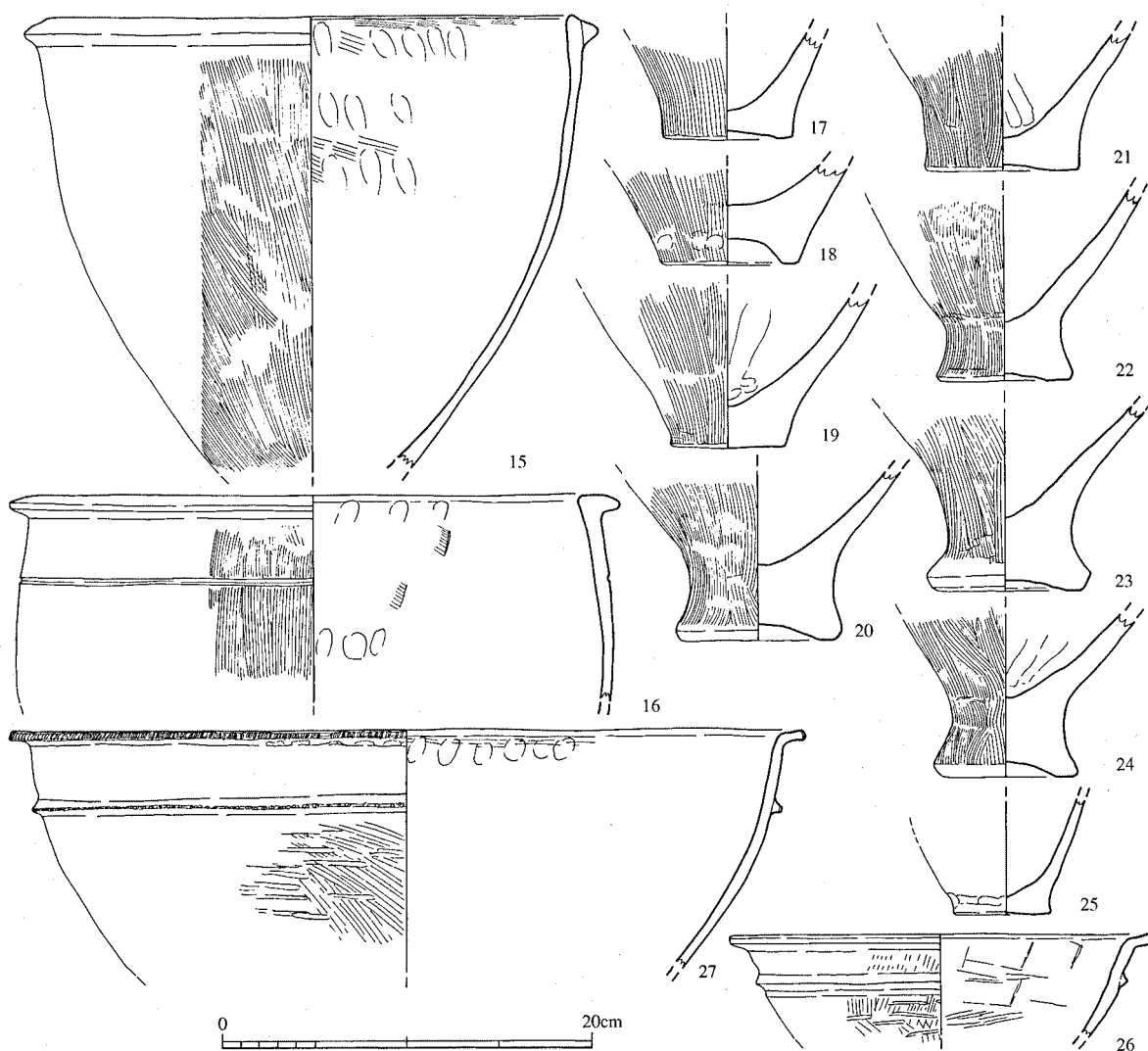
150号土坑（図版48、第108図）

F区に位置し、32・36号竪穴住居跡に切られている。北西－南東方向に長軸を向けた長楕円形を基本とするが、長壁は他遺構との切合いのため輪郭に乱れが生じている。長さ2.85mを測り、幅1.4m前後。床面は南東から北西に向ってゆるやかに低くなり、北西部にはピット状の凹みが確認された。ピット状の凹みを除く遺構面から最深部までの深さは85cmを測る。覆土のほぼ中間ほどの深さで多量の土器が出土したが、その中には焼成不良で灰白色粘土に近い焼きの土器片が含まれている。また、土坑の南西部近くでは焼土塊も出土した。上部の埋土は暗褐灰色粘質土、下部は灰黒色粘質土で、土器の他に砥石（第169図130）、打製石鏃（第4表59）、石英質石器（第9表1021）が出土した。

出土土器（図版72・73、第110・111図） 1～3は壺で、4は壺胴下部か。1は小形の壺でほぼ完形。底部は厚く、胴部の張りが強い。頸部に三角突帯を巡らし、頸部から口縁部にかけて丸く外反



第110图 150号土坑出土土器实测图 (1) (1 / 4)

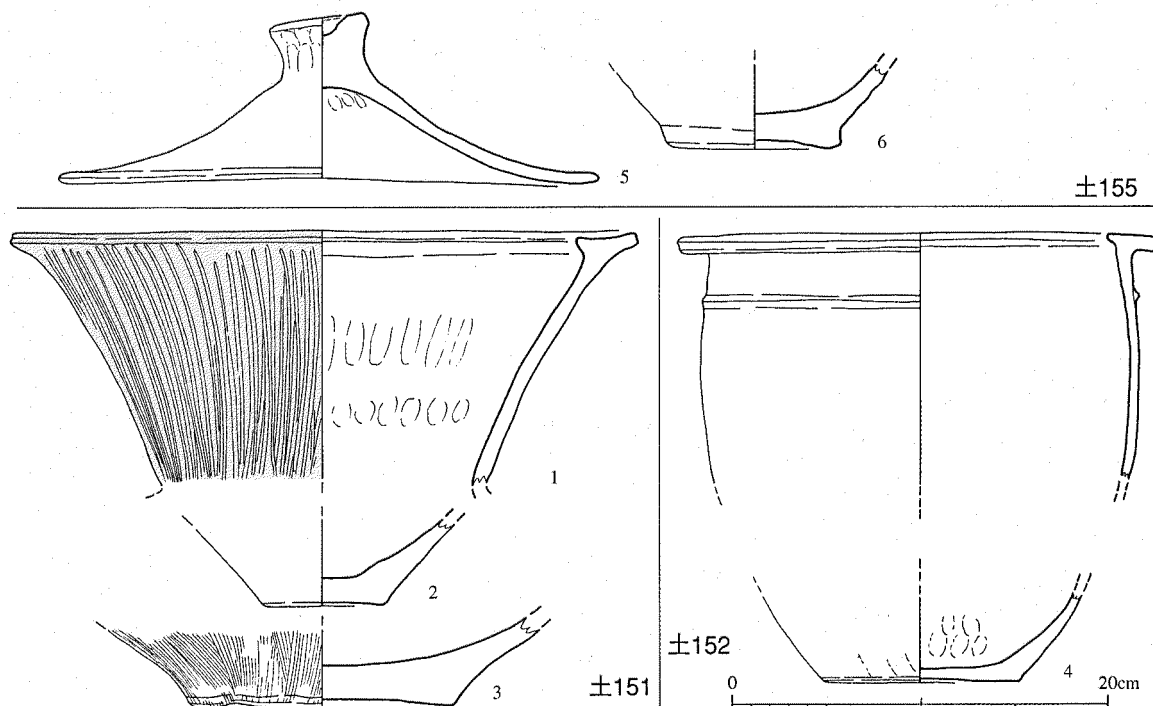


第111図 150号土坑出土土器実測図(2)(1/4)

する。内外ミガキ仕上げであるが、胴下部外面にはミガキに先立つ縦ハケが観察できる。2は口径26.8cmを測る大形品。口縁内面に断面三角形突帯を貼付し、口縁端部は角張る。3は頸部・口縁部が短く外反し、端部は角張る。器壁が厚く、外面ミガキを施すが縦ハケを残し、器壁も厚い粗製品。内面はナデ。4は底部が厚く、胴部に張りがある。外面ハケメ、内面摩滅。胴部最大径付近に煤、胴下部内面に帯状にコゲが付着する。1・4は灰褐色、2は淡褐色～淡黄褐色、3は灰白褐色。

5～16は甕胴上部破片。5～7は如意状口縁を呈し、8～16は口縁断面三角形のもので、16はやや大形。5・6は端部が角張り気味で、7は口縁端部外面に粘土を貼付して短い如意状に整形する。8・10・11は口縁内面にわずかに突出させる。5～7・9～11・13・16は胴部外面に1条の沈線を巡らし、14は断面三角形突帯を貼付する。外面縦ハケ、内面ナデが基本で、口縁内外に指頭圧痕を残すもの(7外面・8内面・9内面・10内外・11内面・12内面・13内外・14内面・15内面)も多い。また、6・7・11は内面に板ナデ痕、15・16は内面にハケメを残す。5は内外の摩滅が顕著。5外面・6は淡灰褐色、5内面・8内面・13外面は淡黄灰褐色、7は灰白褐色、8外面・12外面は淡褐灰色、9外面・13内面は褐黄色、9内面は淡褐色、11・14内面・16は淡黄褐色、12内面・15外面は灰褐色、14外面は暗灰褐色、15外面は灰黄褐色を呈す。5外面・9外面・11外面・12外面には煤が付着し、9内面・13内面はコゲが付着する。

17～24は甕底部。17・21以外は底部が厚く、18は外底部が凹み、20・22～24はやや上げ底気味で、



第112図 151・152・155号土坑出土土器実測図（1／4 1～3：土151、4：土152、5・6：土155）

底部外周の括れが明瞭。全て外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。17・20・22・23・24外面は淡黄褐色、18・19は灰白褐色、21・24内面は淡褐色。17・21は外面に煤、22・23は内面にコゲが付着し、17・19は外面が二次的な火により赤変する。25は小形の壺あるいは鉢の底部か。外面摩滅、内面ナデ。灰褐色を呈するが、二次的に火を受け変色する部分も広い。26は高杯杯部片か。口縁部は外傾し、外面に断面三角形突帯を巡らす。外面縦ハケ、内面板ナデの後、内外に粗いミガキを施す。内外淡褐黄色で、突帯より下には煤付着。27は大形の鉢。口縁部は如意状で端部に鋭利な工具により、細い刻目を施す。胴部は断面三角形突帯を貼付し、太い刻目を施す。胴下部ハケ後ミガキ、口縁部外面横ナデ、口縁部内面指ナデ後ハケ、胴部内面ナデ。外面黄白褐色、内面淡灰褐色。

これらの土器は良好な中期初頭の一括遺物を構成すると言える。

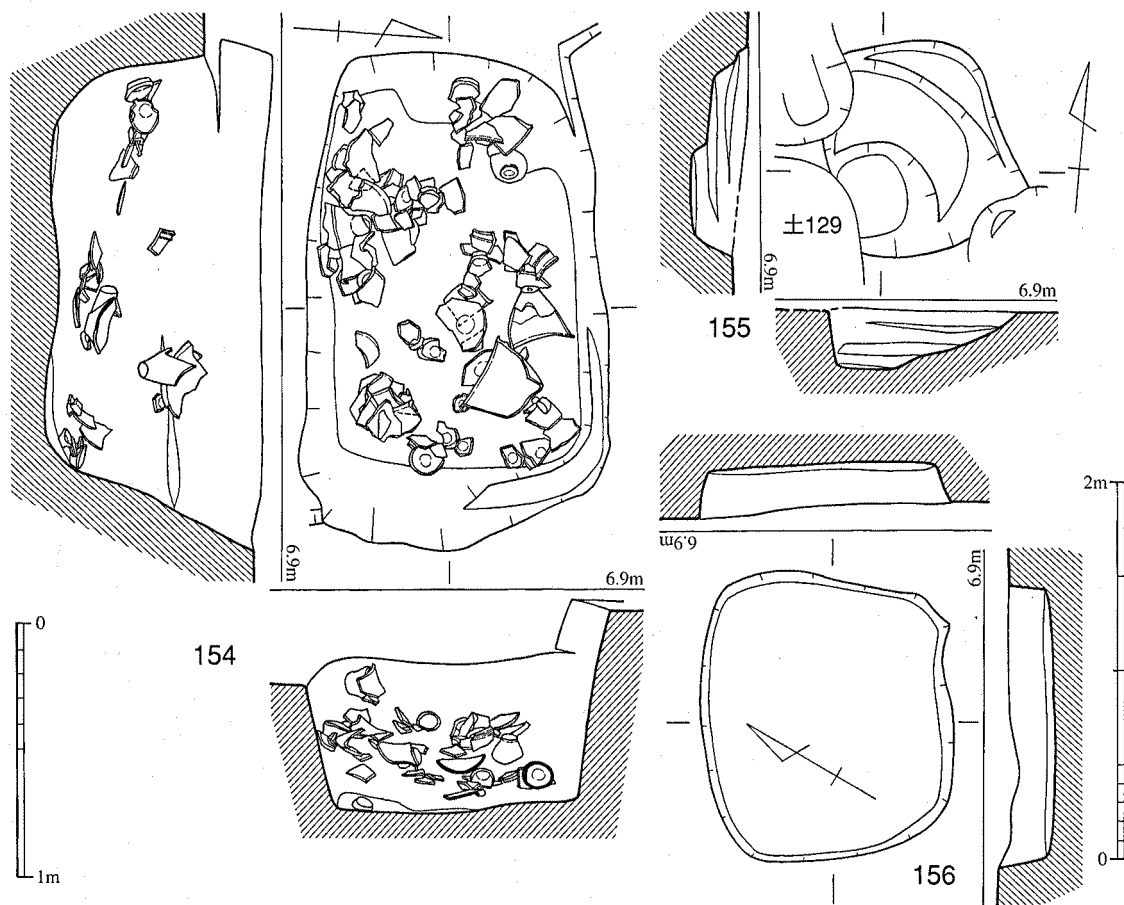
151号土坑（図版47、第108図）

G区、44号竪穴住居跡、100号土坑の下層に位置する。西壁は2基のピットと切合うが輪郭は明瞭で、長軸をほぼ南北にむけた楕円形を呈する。長さ1.4m、幅0.75mを測る。床面は中間に段があり、南半が北半に比べ15cm程深くなり、最深部で検出面からの深さ45cmを測る。覆土は灰褐色粘質土であった。

出土土器（図版73、第112図1～3） 1は広口壺口頸部で、外面を黒塗りした可能性がある。口縁は内傾した鋤先状をなし、外端部は角張る。内外ナデ仕上げで、外面にはミガキで全面に縦方向の暗文を施文。内面には帯状に指頭圧痕が巡る。外面淡褐灰色、内面褐色～灰褐色。2はわずかに上げ底状の壺底部。内外摩滅し、白黄褐色を呈す。3は底径の大きな大形壺底部。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げ。白黄褐色。これらの土器は中期後半でも古い頃と推測される。

152号土坑（図版48、第108図）

H区、123・127号土坑の南に位置する。輪郭は明瞭で、主軸をほぼ南北に向けた隅丸長方形を呈し、



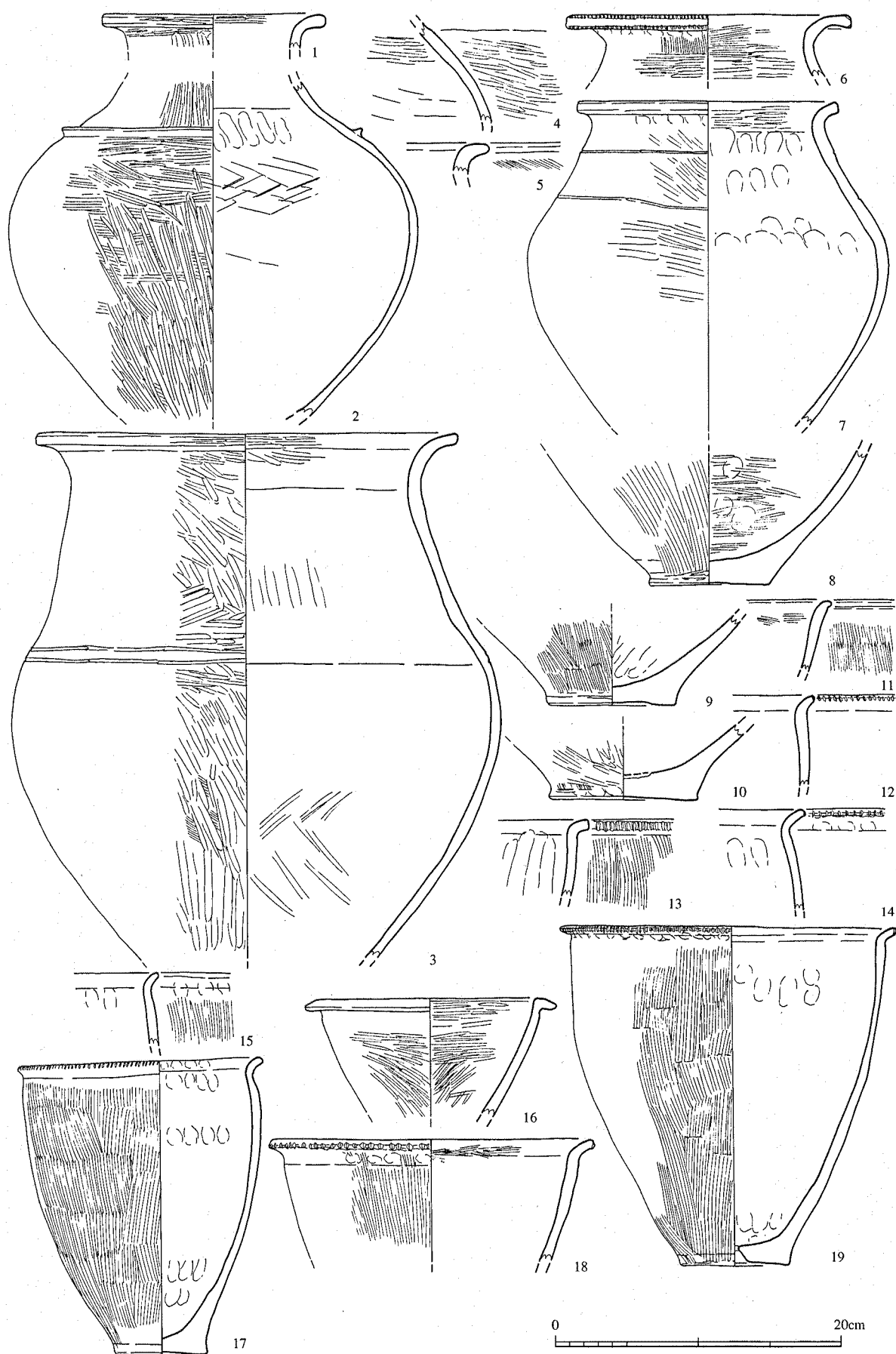
第113図 154～156号土坑実測図（土154は1／30、他は1／40）

長さ1.0m、幅0.7mを測る。北東隅壁の中間に高さ3cm程の低いテラスがあることを除けば床面は平坦であり、検出面からの深さ15cm前後。覆土は地山シルト塊を多く含んだ灰褐色粘質土であった。出土土器（図版73、第112図4） 底部と胴部分かれて接合しないが、同一個体と考えられる樽形甕である。口縁部はわずかに外傾し、胴上部に断面三角形突帯を貼付。底部はわずかに中央が凹む。内外ナデ仕上げで、底部内面に指頭圧痕を巡らす。淡灰白褐色を呈す。中期後半でも古い時期と推定される。

154号土坑（図版48、第113図）

H区に位置し、104・105・112号土坑に切られる。主軸をほぼ東西に向けた長方形プランを呈し、長さ1.95m、幅1.2mを測る。東壁は緩やかであるが、他の壁は傾斜がきつい。北東隅のテラスは掘り過ぎによるものである。床面は東が緩やかに低くなり、検出面からの深さ85cmを測る。覆土上部は暗褐灰色粘質土、下部は炭の多く混じった灰褐色粘質土であった。床面からやや浮いて多量の土器が出土し、打製石鏃（第4表60）も出土した。

出土土器（図版73、第114・115図） 1～7は壺で、8～10は壺底部破片。1は口縁部小変で、端部は角張る。頸部縦ミガキ、口縁内外横ミガキで2と同一個体の可能性が高い。2は頸部～胴部の破片。肩部に高い断面三角形突帯を巡らす。外面はハケ後ミガキ。内面はナデであるが、肩部内面に板状工具によるナデが残る。3は口縁部～胴部破片。口縁端部は丸味をもち、頸部の括れが小さい。肩部には2条の沈線を巡らす。胴部ハケ後外面～口縁内面をミガキ。内面はナデ仕上げであるが、胴下部内面は雑にミガキを施すようである。4は肩部破片で、胴部と頸部の境に低い明確な段が巡る。外面ミガキ、内面上部ミガキ、下部板ナデ。5は口縁部小片で、端部はナデにより面を



第114图 154号土坑出土土器实测图 (1) (1/4)

なす。外面ハケ、内面摩滅。6は角張った口縁端部の上下に小さな刻目を施文。内外ともハケ後ミガキ。7は口縁部が短いながら強く外反し、端部は角張る。頸部と肩部に2条の沈線を巡らす。外面～口縁部内面ミガキ、胴部内面指頭圧痕の残るナデ。8は外面縦ハケ、内面ミガキ仕上げ。9は若干上げ底状で外面縦ハケ、内面ナデ。10は外面ミガキであるが、先行する縦ハケが確認できる。内面ナデ。1外面・2外面・3・4外面・6・10内面は淡褐色、1内面・2内面・10外面は灰褐色、4内面は灰黄褐色、5・7外面・8・9内面は淡黄褐色、7内面は淡橙褐色、9外面は淡褐灰色、3は廃棄後に二次的に火を受けて変色した破片もある。

11～27は口縁部が如意状あるいは外折するもので、17・19はほぼ完形に復元できたもの。19底部には焼成後穿孔がある。11・15・16・27は刻目はないが、他は端部に刻目を施す。11・12は口縁部が短く外反し、16・27は口縁部が外折する。刻目を施すもののうち、14・18は口縁端部やや下寄りに施文。13は先端の丸い工具、14は先端の鋭利な工具で刻目を施すことが確認され、18は刻目が太い。外面ハケ、内面ナデを基調とするが、小形の16は内外にミガキを丁寧に施し、12は内外摩滅。18は口縁部外面に指頭圧痕があるが、ハケメより後に施されたようである。11・13・15・17～20は淡褐色～明褐色、14は淡黄褐色、16は黄褐色、13・17上部・18・19は外面に煤、15・18はコゲが付着。17・20は胴内面中間部に帯状にコゲが厚い。12は二次的に火を受けて内外とも黒変し、14外面・17下部外面は橙変・赤変する。

21～26は口縁断面三角形のもので、22はほぼ完形品。24は口縁上面が外傾し、端部に刻目は確認されない。他は端部に刻目施文。21は先端の鋭利な工具で刻目を施し、26は先端がやや鈍角の工具による。23は水平をなす口縁上面が特徴的。22は外面板ナデ、25・26は外面ナデ、他は外面ハケメ仕上げ。21口縁外面には板状工具のあたりが残る。内面はいずれもナデ仕上げであるが、21は板ナデ、ハケメも一部に確認できる。21・22外面・23外面・24・26内面は淡褐色～明褐色、23内面・26外面は暗褐色、25外面は橙白褐色、24内面は灰褐色。

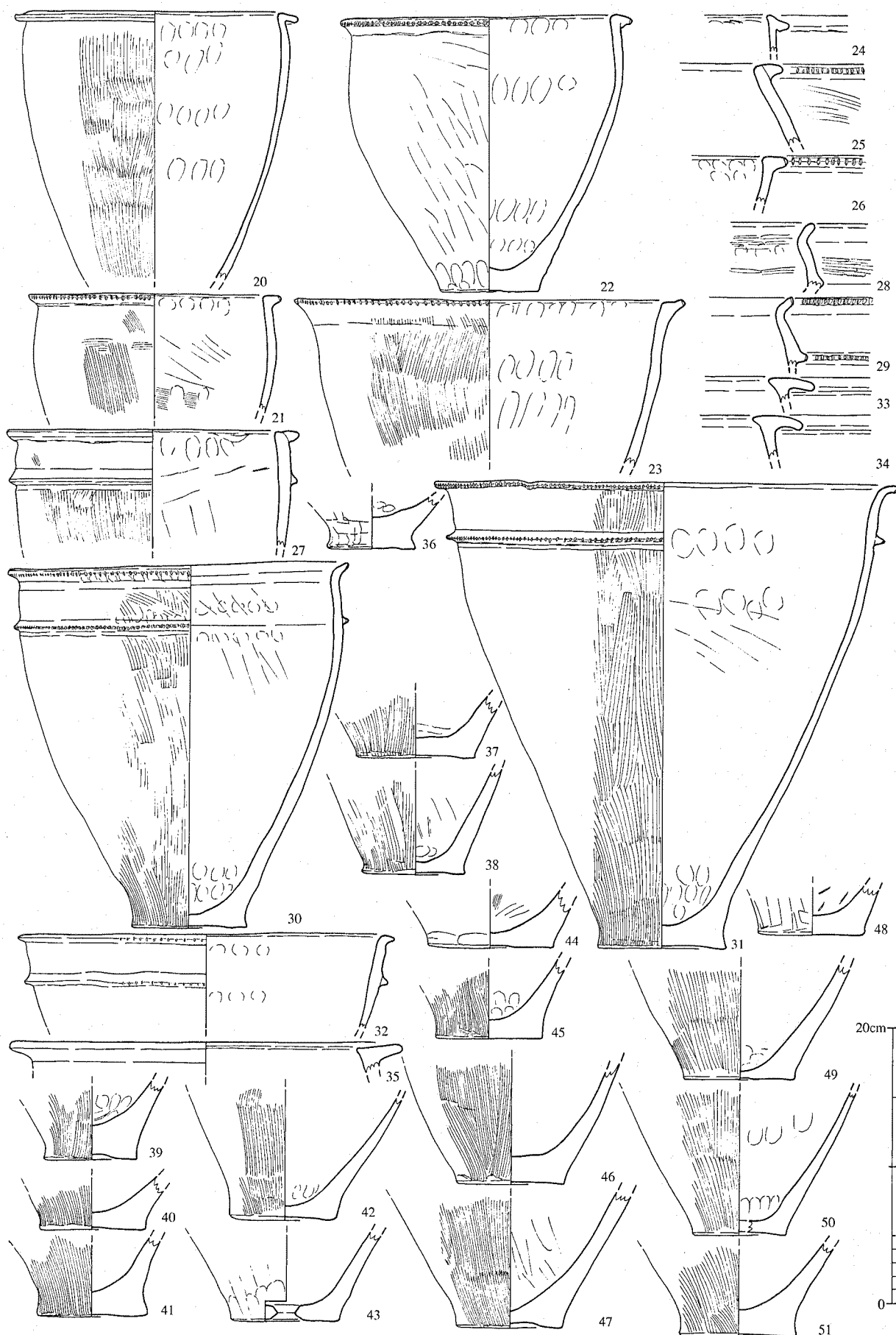
27は口縁断面三角形で、胴部にも断面三角形突帯を巡らす。口縁端部、突帯頂部には刻目は施文されない。口縁内面には指を押し付けたような凹みが1個所にある。突帯下外面ハケ、口縁外面～胴部内面ナデであるが、内面下部には板状工具のナデ痕が残る。灰褐色で外面に煤が付着。

28～32は口縁部が如意状に外反し、胴部に突帯を巡らすもので、30・31はほぼ完形品。28は口縁端部、突帯頂部に刻目はないが、他は刻目を施文。29は先端の丸い工具で刻目を施文し、30は口縁端部やや下寄りに刻目。32は刻目が摩滅するため、復元的に図示した。28は内外横ミガキ、29は内外ナデで、30・31は外面縦ハケ、内面ナデ。30・31とも内面上部に板ナデ痕が観察できる。32は内外摩滅。28は明黄褐色、29・30・31・32内面は褐色、31外面は淡灰褐色。31は突帯下に煤が付着し、30は突帯より下の胴部内面、31は胴下部内面にコゲが付着。32は二次的に火を受け、内外赤変・黒変。なお、30の底面に靱圧痕が3個所、観察できる。

33～35は鋤先状の甕口縁部破片で、混入品。いずれも内外横ナデで、33は外面褐白色、内面橙褐色、34は外面褐色、内面黄灰褐色、35は外面褐色、内面淡橙褐色。

36～51は甕底部片。36は底部が厚く、底部外周の括れが強い。43は底部中央を焼成後穿孔する。43は外面縦ハケ、内面ナデが基調となるが、36・43・48は外面板状工具のナデ、44は外面雑なナデ。38は外面ハケの後板ナデを施す。38・44・47・48は内面に板ナデの痕跡が残る。36外面・37内面・38外面・42内面・48内面は淡黄褐色、36内面・49・50は褐灰色、37外面・38内面・42外面・43外面・45内面・51は淡褐色～明褐色、39外面・44内面・48外面は灰褐色、39内面は灰黄褐色、40は赤褐色、41は暗褐色、43内面・44外面は淡黄白褐色、45外面は褐灰色、46は淡橙褐色。39・42・46・47・49・50は外面煤、41・51は内面にコゲが付着。40・50は外面二次的に火を受けて赤変する。

以上の土器は一部の混入品を除けば前期末に位置づけられよう。



第115图 154号土坑出土土器实测图(2)(1/4)

155号土坑（第113図）

I区に位置し、129号土坑に切られると考えた。長軸をほぼ南北に向けた長方形の平面形と考えて遺構検出したが、他遺構との切合いがあり、全形は不明である。長さ1.1m、幅0.95mを測る。南西隅が深くなるが、別遺構と切合っていた可能性が高く、それを除く床面までの深さは30cmを測る。暗褐灰色粘質土を覆土とする。

出土土器（第112図5・6） 5は蓋。頂部が厚く、中央が大きく凹む。裾部は大きく開き、端部はやや角張る。裾部外面～内面はコゲが付着。外面明褐色、内面淡褐色。6は壺底部。底部はやや厚く、上げ底状。内外摩滅し、黄白褐色。これらは中期初頭か。

156号土坑（第113図）

F区、43号竪穴住居跡の下層に位置する土坑である。主軸を北東―南西に向けた、やや歪な隅丸方形を呈し、長さ1.55m、幅1.3mを測る。床面はほぼ平らで検出面からの深さ20cm前後。図示できる出土遺物はない。

（3）溝

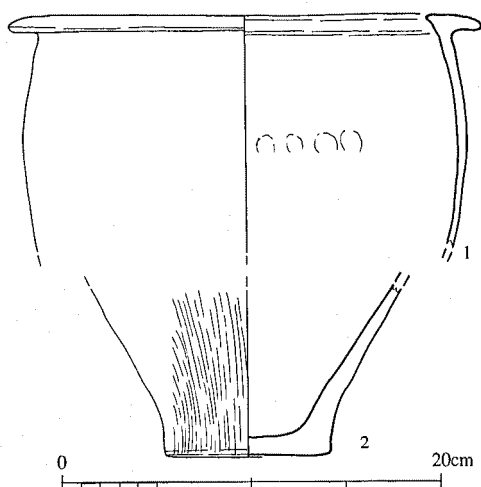
1号溝（第4図）

B区に位置し、蛇行しつつ調査区を横切るように走る浅い溝である。幅0.6m、深さ10cm程を測り、埋土は鉄分を含む灰褐色粗砂。弥生土器の小片が出土したが、図示できる遺物はない。他の溝を切っており、弥生土器を出土するものの、時期の新しい遺構と考えられる。

2号溝（第4図）

B区に位置し、調査区中央から始まり、南は調査区外へと延びると考えた。ただ、付近では土坑、竪穴住居跡が切り合っていて、平面形は不安である。

出土土器（図版74、第116図） 1は鋤先口縁甕の胴上部。口縁部は上面が外傾し、内への突出が顕著。内側突出部下の微かな段が特徴的。外面摩滅、内面はナデで、胴部に微かな指頭圧痕が巡る。淡黄灰褐色。2は甕底部。外面縦ハケ、内面摩滅。外面淡褐色、内面灰白色を呈し、見込みにコゲが付着する。



第116図 2号溝出土土器実測図（1／4）

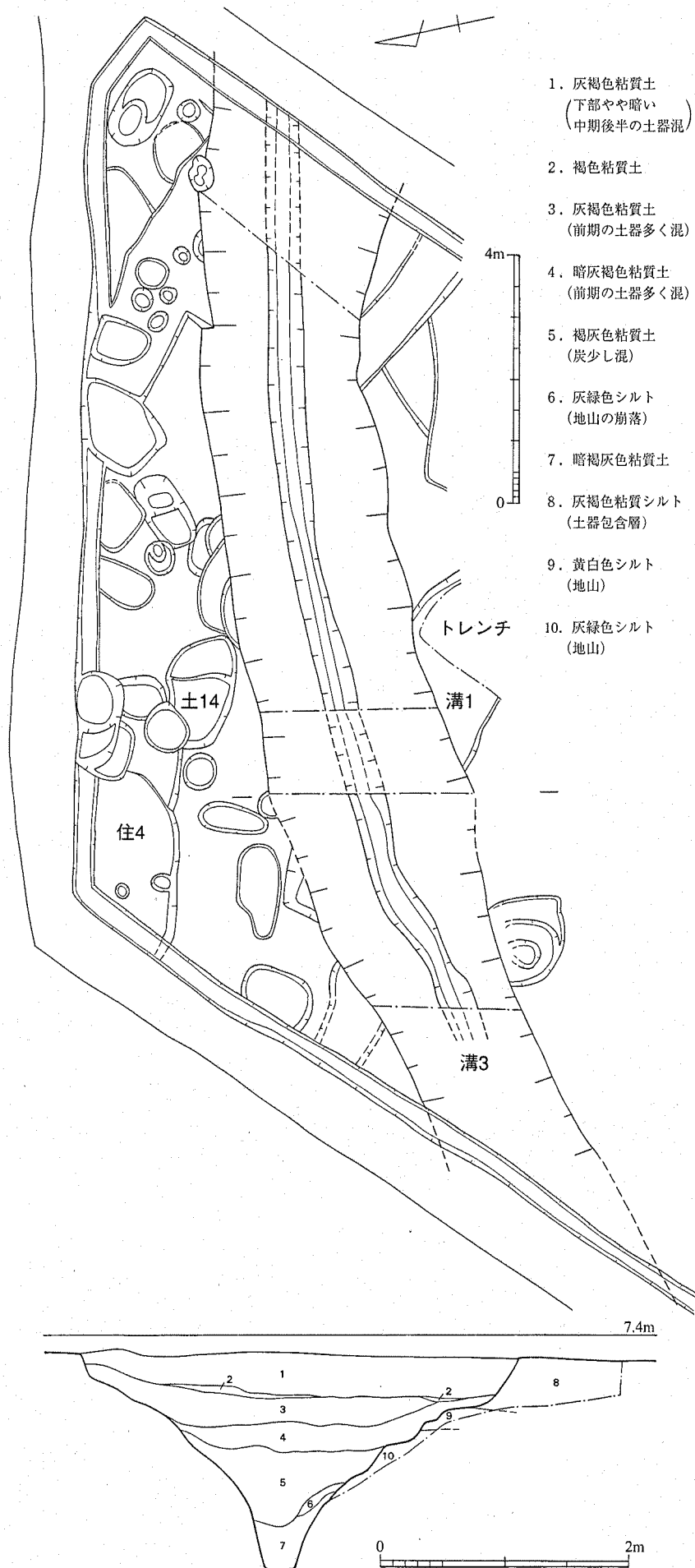
3号溝（図版49・52、第117図）

A・B区に位置する弥生時代の断面V字溝で、調査区外へと続いている。調査区の西南に位置する7号溝と対をなし、弥生時代の環濠を形成すると考えられる。幅は2.1～3.1mで、東西方向に17.2mの長さを検出している。検出面からの底面までの深さは1.4m～1.7m、標高では5.8～5.5mで、西側に向って底面は低くなっている。断面は上部が緩やかに立ち上がるが、下部は急激に深くなり、底面で幅20cm余りの平坦面を形成する。上部は弥生時代中期後半の土器を多く含む灰褐色粘質土が堆積するが、周辺の遺構との区別が難しかった。下部は弥生時代前期の土器を多く含む褐灰色粘質土が堆積する。発掘時には雨水等が堆積しやすい環境で、十分に遺物を分層して発掘することができなかった。

土器の他に土製紡錘車（第162図30・36）、石包丁（第163図44・49・55・60）、扁平片刃石斧（第165図80・84）、砥石（第167・168図109・114・119・123）、敲石（第171図141）、打製石鏃（第5表61・62・164）、打製石錐（第6表178）が出土している。

出土土器（図版74～76、第118～125図） 1は縄文土器深鉢口縁部片。口縁部には2条の凹線を巡らし、低い波状口縁をなす。外面ミガキ、内面ナデで、外面淡黄褐色、内面褐色。御領式か。

2～13や前期後半～中期初頭の壺。2はほぼ完形であるが、外面の剥離が顕著で、胴下部には意図的かどうか不明の穿孔がある。肩部には4条の沈線による穿孔を巡らし、その下には3条1単位の重弧文を配置。外面～口縁部内面ミガキで、胴部内面はナデ。3は肩部に3条の沈線を巡らし、底部は基筒底状。内外丁寧なミガキ。4は短く口縁を外反させ、頸部4個所に焼成前穿孔を施す。底部は高く、中期初頭と推測される。内外細いミガキ。5は頸部の括れが小さく、



第117図 3号溝実測図（平面図1/100、土層図1/50）

口縁部外面は粘土貼付けの段をなし、口縁部はゆるやかに外反する。端部は角張る。胴部外面にはやや太めの沈線を巡らす。胴部外面～口縁部内面ミガキ、胴部内面ナデ。6～8は頸部が内傾して立ち上がり、口縁部が短く外反する。いずれも端部を丸く仕上げる。6は肩部内外に微かな稜が立つ。外面摩滅するがミガキが微かに残り、頸部内面ナデ、胴部内面摩滅。7は内外ミガキ、8は外面摩滅、内面横ミガキ。9は胴下部片で外面ミガキ、内面粗いミガキあるいは板ナデ仕上げ。10は胴部破片。肩部は微かな段をなし、その直下の3条の沈線と胴部の3条の沈線で文様帯を区画する。文様帯内には3～4条を単位とする沈線重弧文を配置するが、1箇所重弧文間を乱れた平行斜線で連結する部分がある。外面摩滅、内面ナデ。

11・12は大形壺。11は口縁端部内外を肥厚させ、角張った端部をなすことが特徴的。胴部外面も段をなす。内外ナデ仕上げで、口縁内面は一部に板ナデの稜が観察できる。12は口縁部外面に段をなし、外面摩滅、内面粗いハケメ仕上げ。13は口縁部を強く外反させたもので、端部は角張る。口縁直下に2条の沈線を巡らし、その下に縦方向に5条1単位の平行沈線文を施文。外面縦ミガキ、内面ナデ。

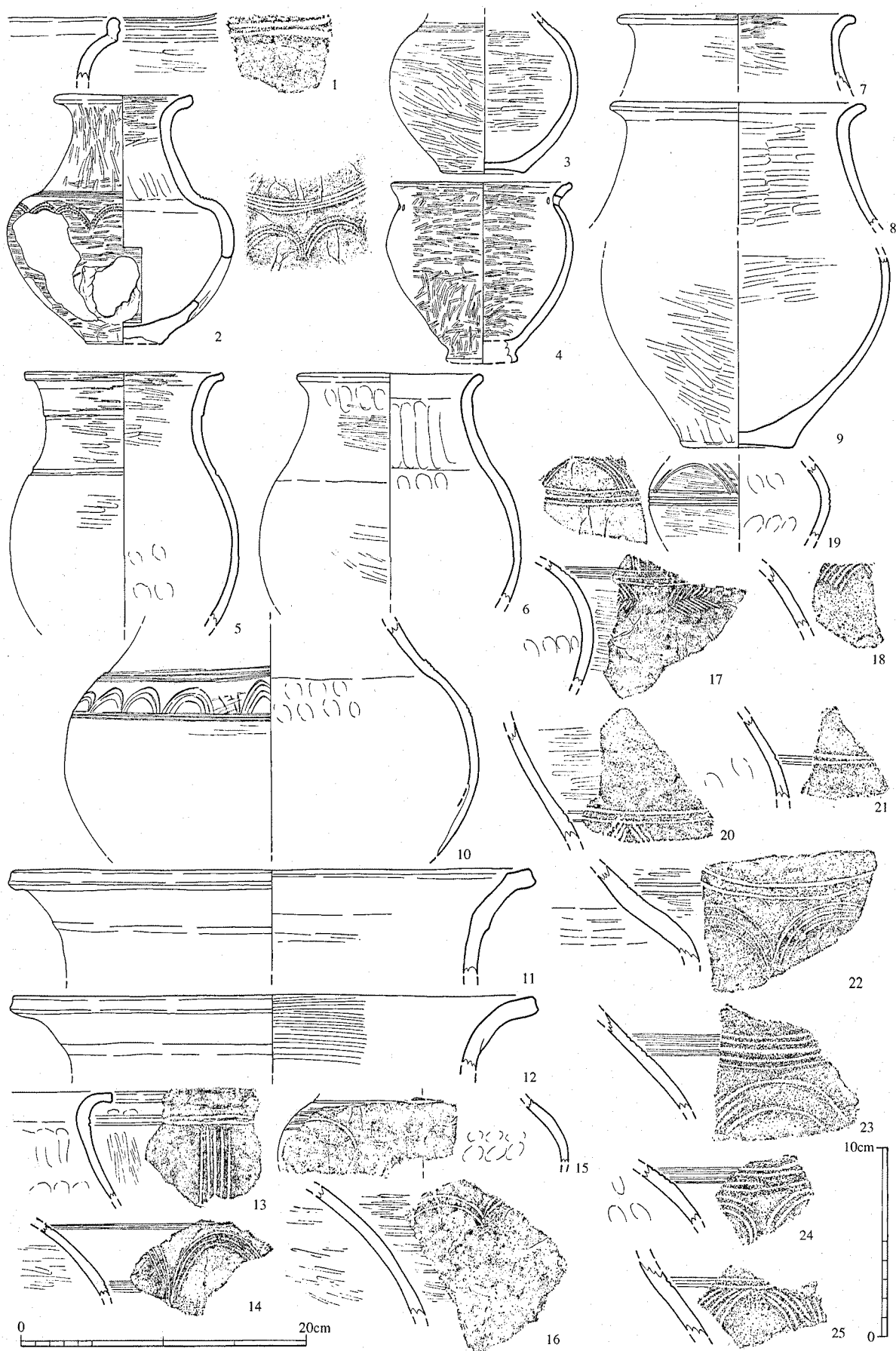
14～25は前期後半～中期初頭の壺肩文様部片。14は肩部の2条の沈線、胴部最大径付近の3条の沈線で区画し、その間に沈線重弧文を配置。15は肩部1条の沈線、その下に1条を1単位とする弧文を間隔を空けて配置するようである。16は2条1単位の重弧文。17は肩部を3条の沈線で区画し、その下に間隔を空けて無軸羽状文を配置。3条沈線の上にはさらに4条1単位の縦方向の沈線文が断片的に残る。18は5条の平行線文で山形の文様を形成するか。19は胴部に3条の沈線を巡らし、その上に大きな4条1単位の連弧文を配置。20は肩部2条沈線、その下に4条1単位の山形文を施文。21は肩部に2条沈線文。破損面に接合痕が残る。22は肩部に2条の沈線を巡らし、その下に3条1単位の重弧文を施す。23は肩部に5条の沈線を巡らし、その下に大きな5条からなる重弧文を施す。24は肩部に4条の沈線を巡らし、その下に3条1単位とする重弧文。25は肩部に2条の沈線、その直下に6条1単位とする山形文を配置。外面ミガキ、内面ナデのものが多く、14・16は内面横ミガキ、18・25は内外摩滅、21・23・24は外面摩滅。

以上の壺は2・19は暗褐色、3外面・10外面は淡黄灰褐色、3内面・4・5外面・14内面・16・17は淡黄褐色、5内面・10内面・13・15内面は灰黄褐色、6外面・8内面・9内面・15外面・21外面・22外面は淡褐色、6内面・14外面・22内面・24外面は淡灰褐色、7・23は淡黄白褐色、8外面・11は淡灰白褐色、9外面・20外面・24内面は淡褐灰色、12・18は淡橙褐色、20内面・21内面は淡褐白色。18・25は二次的に火を受け赤変する。19は黒塗りと推測される。

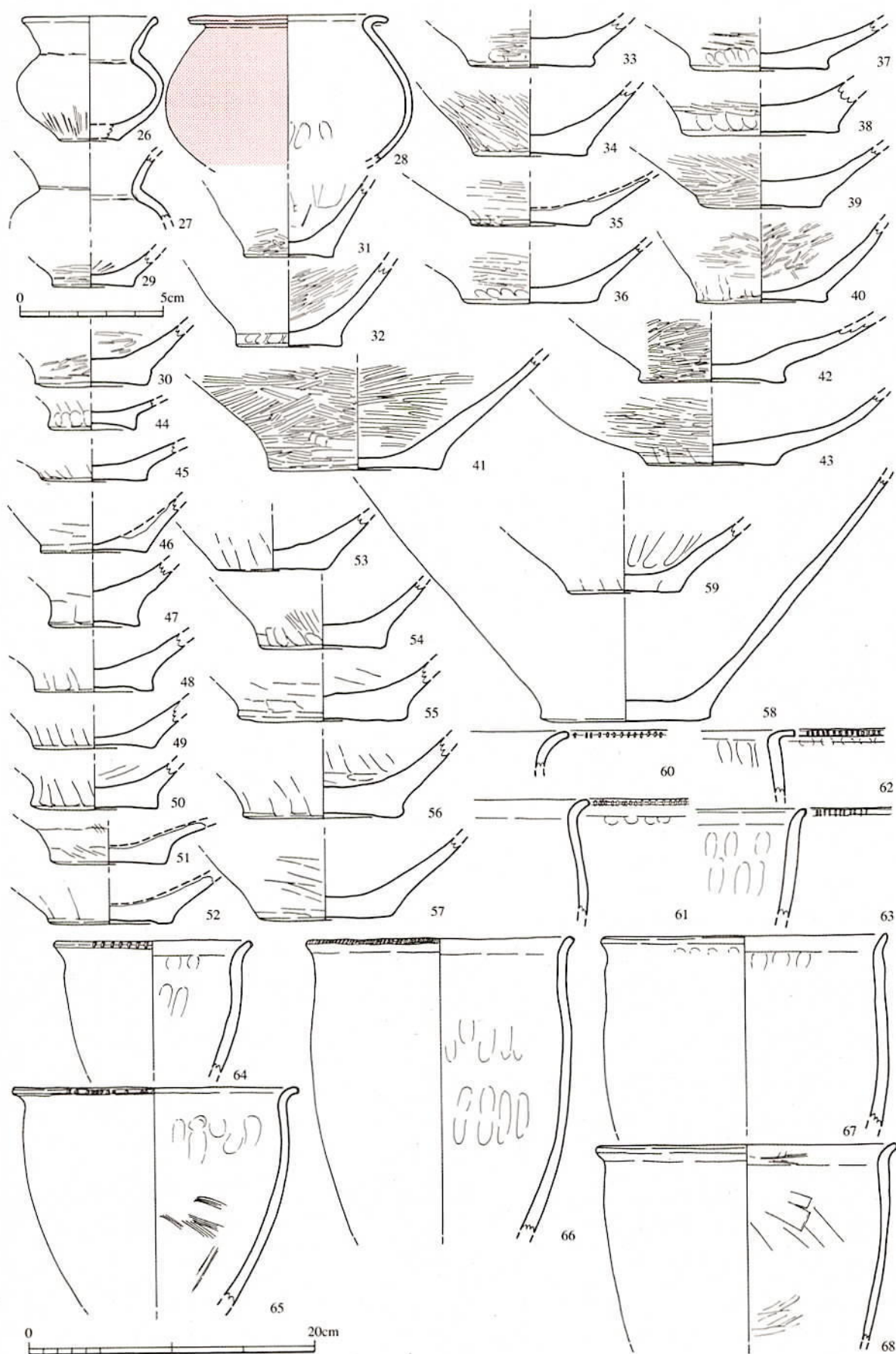
26・27は中期前半の小形壺。内外ナデを主体とするが、いずれも頸部内面に接合痕をとどめ、27胴外面下部には板ナデが残る。

28は中期後半の丹塗無頸壺。口縁部が強く外反し、上面がやや外傾する。胴部最大径はやや下がった位置にある。1／3周残存するが、穿孔は見られない。内外摩滅し、胴内面下部に微かな指頭圧痕が残る。生地は橙褐色。

29～59は壺底部片。29は小形品で、底径2.9cmの小形品で器壁が薄い。42・44・47・48・52はかすかな上げ底状を呈し、47は底部が厚い。58・59は形態から中期後半のものと推測される。外面はミガキのもの（29～31・33～43）とナデのもの（44～48・50～52・54・57）があるが、51・54は底部外周に板ナデ痕が残り、35はミガキに先立つ板ナデ痕も観察できる。32・49・53・55・56・58・59は外面が摩滅する。内面はナデのものがほとんどであるが、30・32・40・41は内面にミガキを施し、31は板ナデ痕が残る。29・34～37・42・51～53・58は内面が摩滅する。29外面・31外面・32内面・39・42・43・44外面・45内面・48内面・49・50・51内面・53・56内面・57・59外面は淡黄褐色、29内面・32外面・34外面・35内面・38内面・44内面は淡灰褐色、30・31内面・36内面・46内面は淡黄



第118図 3号溝出土土器実測図(1)(1・2・19~25は1/3、他は1/4)



第119図 3号溝出土土器実測図(2)(29は1/2、他は1/4)

灰褐色、33・47は白褐色～褐白色、34内面は暗褐灰色、35外面・55・56外面は淡褐灰色、36外面・58は淡灰黄褐色、37は淡黄橙褐色、38外面・54は灰白褐色、40・45外面・46外面・59内面は淡褐色、41・51外面・52は暗黄褐色、50は黄白褐色。58は下部に煤が付着。32・54・57は二次的に火を受け赤変・黒変し、39底部外面には靱圧痕が見える。

60～83は如意状口縁甕。72は完形品。67・68は摩滅するものの刻目は無いようであるが、他は刻目を施す。63は口縁が短い特徴的な器形で、刻目は先端の鋭利な工具による。64は小形品。66は胴部が長く、口縁部は短い。端部は先端の丸い工具による浅い刻目を密に施す。79は乾燥前に深い刻目を口縁端部下寄りに施文。69は先端の鋭い工具、73・77・80・82は先端が丸い工具による刻目。75は口縁部が強く外傾し、76は口縁が短く直立気味。77は胴部外面に粘土貼付けの段がある。摩滅するもの（61内外・62外面・63外面・67内外・68外面・69外面・75外面・78内外・79内外・80内外）も多いが、内外ナデが基調と思われる。82は内外、69・73・75・78・79・83は外面、65・68は内面に板状工具痕が残り、71外面は板状工具風のハケメ。72・75・78・80は口縁外面に横方向の工具痕、68は胴内面下部にミガキ痕が観察できる。60外面・63は橙褐色、60内面・64内面・66内面・67・68内面・71内面・72・73・75内面・76内面・79内面は淡黄褐色、61は白橙色、62・68外面・69内面・77は淡灰黄褐色、64外面・69外面・75外面は暗褐色、65内面・70・71外面・78は淡灰褐色、65外面は褐灰色、66外面・74・76外面・79外面・81は淡褐色を呈す。65・66・68・70・71・73・74・76・80・81の外面、64頸部外面、75口縁部外面には煤、63下部・64下部・65・70・73・74・80の内面にはコゲが付着。65・80外面、74口縁内外は火を受け変色し、67・81は胎土中に針状黒雲母が多く含まれる。

84～87は口縁外面に粘土を貼付け突出させたもの。84は口縁断面三角形で、端部に鋭利な工具で深く大きな刻目を施す。内外ナデで外面暗褐色、内面淡黄褐色。85～87は口縁断面逆し字状をなす。85は鋭い工具で刻目を施し、内外ナデ。外面暗灰褐色、内面淡灰黄褐色。外面に煤付着。86は先端の丸い工具で細長い刻目を施文し、口縁下部まで外面板ナデ、内面摩滅。外面褐白色、内面褐灰白色。87は先端の丸い工具で小さな刻目を施し、外面～内面板ナデ。二次的に火を受け、内外赤褐色。

88～101は口縁部が如意状に外反し、胴部外面に刻目突帯を巡らすもの。89・93・97は口縁部が緩やかに外反し、88・92・100・101は頸部で強く外折する。90・95・99は端部が幅広の面をなす。90・91・99は先端の丸い工具により、100は先端の鋭利な工具による刻目。98は口縁端部は細く深い刻目、胴部突帯はハケメ工具小口による刻目で、異なる工具を使用した可能性が高い。91口縁端部・93口縁端部及び突帯・97口縁端部及び突帯の刻目はほとんど摩滅し、復元的に図示。内外ナデによるものが多いが、91は外面～口縁内面ハケ、97は外面ハケメ、92は外面板ナデ、95・96・99は外面摩滅、88・93・100・101は内外摩滅。89は突帯上の指押さえが印象的で、98は突帯上面にも接合痕が残る。88内面は黄白褐色、88外面・90外面・91外面・92外面・99内面・100外面・101外面は暗褐色、89外面・95内面・96外面・97外面・98外面は淡褐灰色、89内面・93・96内面・100内面は淡灰黄褐色、90内面・91内面・94外面・97内面は淡褐色、92内面は暗灰黄褐色、94内面は褐黄色、95外面は淡灰黄色、98外面・99外面は淡褐灰色、101内面は淡橙褐色～淡黄褐色。90～92・96突帯下、99・100・101外面には煤が付着する、96・99内面にはコゲが付着。

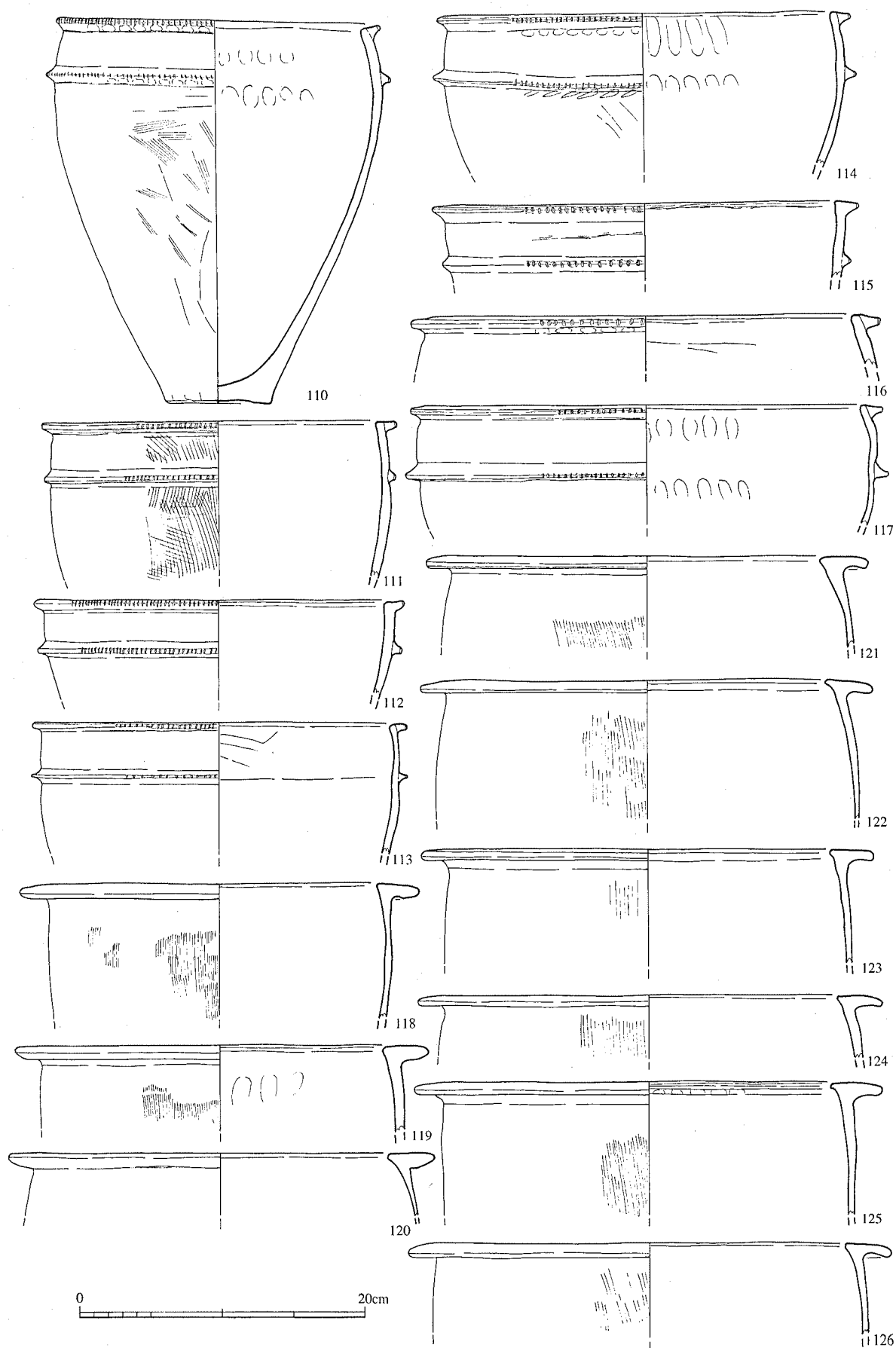
102～117は粘土を貼付して口縁外面を拡張し、胴部に突帯を巡らすもので、いずれも口縁端部・突帯頂部に刻目を施す。110はほぼ完形に復元できるもので、先端の鋭利な工具による細い刻目を施文。108の刻目は細いが先端の丸い工具により、104・109・112・113は先端の鋭利な工具による深い刻目。105は先端が鈍角の工具により、浅く細い刻目を施す。115はわずかに突出した口縁部内面が特徴的。内外ナデのものが多いが、111は外面ハケメ、105～107内面・115外面には板ナデが残る。110外面下部はハケメ状の条痕が一部に残る板ナデ仕上げ。114は突帯下面にナデによると思わ



第120图 3号溝出土器実測図(3)(1/4)



第121图 3号沟出土器实测图(4)(1/4)



第122图 3号溝出土土器实测图(5)(1/4)

れる斜行した凹みが巡る。106外面・108外面・109内面・113内外・114外面は摩滅する。109は外面器表の遺存状況がとりわけ良好。102外面・105・106外面・107外面・108外面は淡褐色、102内面・104・109内面・110外面・113内面は淡灰黄褐色～褐黄灰色、103外面・106内面・107内面・115・117は淡黄褐色、103内面・111外面・112外面・116は淡褐色、108内面は淡褐黄色、109外面は暗褐色、112内面・114外面は灰褐色、110内面・111内面は淡灰褐色、113は淡黄灰褐色。112・107・108・113・114突帯下、110胴上部の外面には煤、109・110下部の内面にはコゲが付着。108内面には刳圧痕がある。

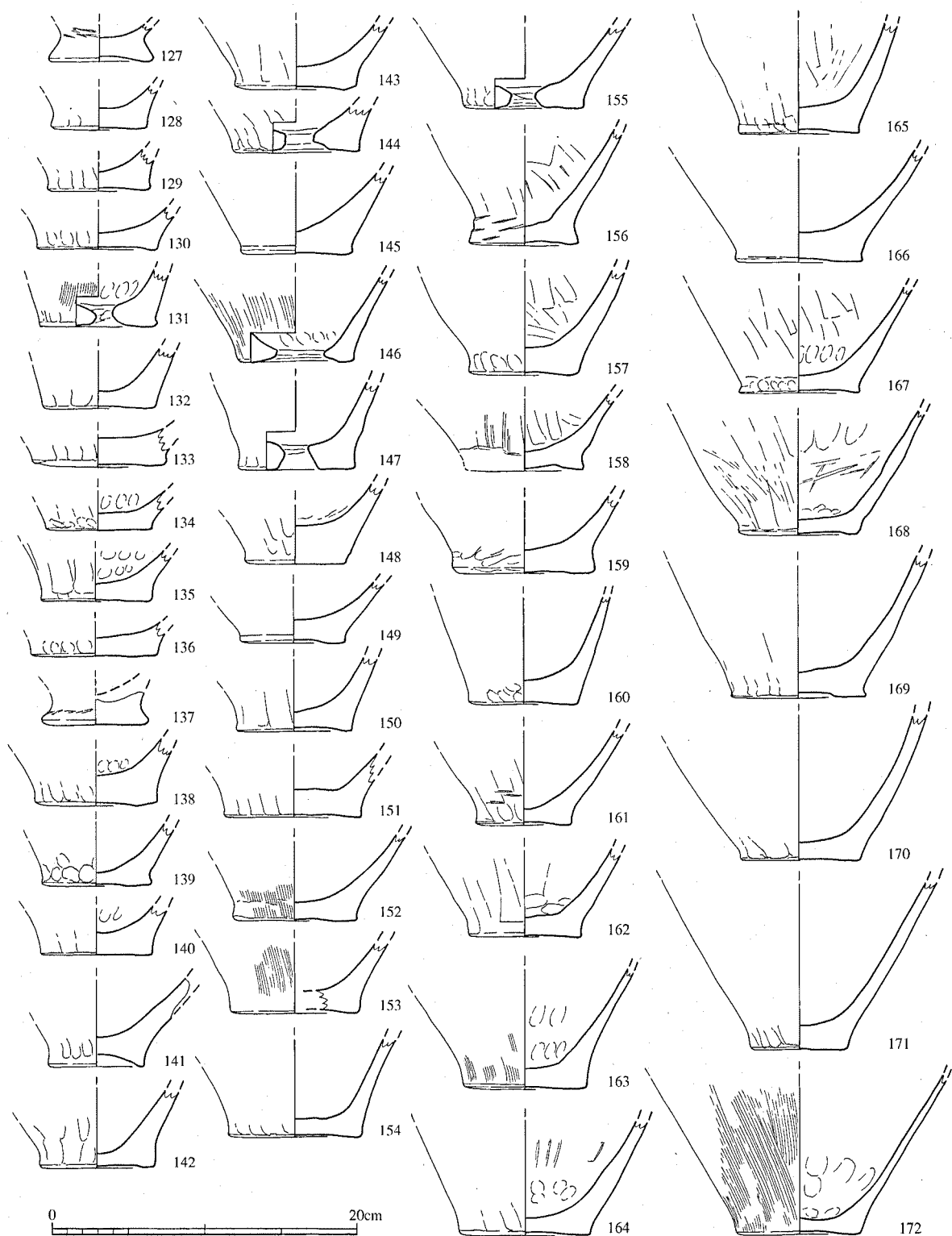
118～126は鋤先口縁の甕。119・120は口縁部が厚く、122は口縁部の内への突出が顕著。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げを基本とするが、118内面・120内外・121内面・122内面・126内面は摩滅。118は褐黄色、119は黄褐色～褐色、120・126は白褐色、121外面は淡褐灰色、121内面は灰褐色、122は黄白褐色、123・124内面は淡黄褐色、124外面・125外面は淡褐色、125内面は灰白褐色。118・119・123の外面には煤が付着。125は胎土中の黒色針状の雲母が目立つ。

127～172は甕底部片。127・137は底部外周の括れが明瞭で、141・169は上げ底気味。158は底部外周が粘土接合面より剥離し、底部外面に環状に凹みが巡る。131・144・146・147・155・158は焼成後の穿孔により、甕に転用したと思われる。外面はナデ（127～130・133・134・136・138・139・141・144・147～149・151・154・155・157・159・169）、板ナデ（135・137・142・143・156・158・161・162・166～168）、縦ハケ（131・146・152・153・163・172）に分かれ、132・140・145・150・160・164・165・170・171は摩滅する。内面はナデ仕上げのものが多く、156～158・164・165・167・168は板ナデ、129・132・142・143・147・153・154・166・171は摩滅。127は底部外面のケズリ風板ナデが特徴的。

127外面・129・133外面・135内面・145外面・172外面は褐灰色、127内面・139内面・140外面・142内面・144内面・145内面・146外面・149・150内面・154内面・156内面・157内面・159内面・163内面・168・170内面・172内面は淡黄褐色、128内面は暗灰褐色、128外面は淡褐黄色、130外面・131・134外面・135外面・139外面・142外面・144外面・150外面・152・153外面・154外面・155・156外面・158外面・161外面・164外面・165外面・167内面・170外面は淡褐色、130内面・136・143外面・164内面・169は灰褐色～淡灰褐色、132外面・141・143内面・151外面・158内面・171は淡黄灰褐色～淡灰黄褐色、132内面・162内面・167外面・169は黄白褐色、133内面・137・147・151内面は淡橙褐色、134内面・140内面・165内面は淡褐白色、138・159外面・160・162外面は赤褐色、146内面・157外面・161内面は暗褐色、148・153外面は白灰褐色～灰白褐色、163外面は暗黄褐色。131・133・146・152・154・166は外面に、162は底部の外周に煤が付着し、130・136・146・155・167は内面にコゲが付着。141・151・160・168・172の外面、169・171の内面は二次的に火を受け赤変する。

173～177は外反口縁の大形鉢。173～175は如意状口縁で、いずれも内外ナデ仕上げ。173は小片のため傾き不安で、口縁部には刻目は確認されない。外面下部板ナデ、口縁部外面～内面ナデ。外面下部には煤、内面下部にはコゲが付着し、淡黄褐色～淡褐色。174・175はいずれも口縁端部に刻目を施し、内外ナデ仕上げ。174は先端の丸い工具により太い刻目を施し、175は刻目が太い。174は外面灰黄褐色、内面暗褐灰色。175は外面暗褐灰色、内面淡黄褐色。176は口縁外側に粘土を貼付して拡張したもので、いずれも端部に刻目施文。176は外面板ナデ、内面ナデで、外面褐灰色、内面黄橙色。外面には煤が付着。177は内外摩滅、淡黄灰褐色を呈し、外面に煤付着。

178・179は中形の鉢で、178は直口で外面ミガキ、内面ナデ仕上げ。外面褐色、内面赤褐色。外面には煤が付着し、全体に二次的に火を受けて赤変。179は外反口縁で、外面下部ハケメ、外面上部及び胴部内面板ナデ、胴下部内面ナデ仕上げ。淡黄褐色。180～183は小形の底部片で鉢状の器形を



第123図 3号溝出土土器実測図(6)(1/4)

なすか。いずれも内外ナデ仕上げ。180は白灰褐色、181は淡黄褐色、182・183は淡褐色。

184は頂部の厚い蓋と考えたが、天地逆の可能性もある。外面摩滅、内面ナデ。褐白色を呈し、胎土中に赤色の石英粒が目立つ。

185は丹塗蓋。2個所に穿孔が残るが、片方は貫通した孔の外側脇に貫通しない孔がある。内外白褐

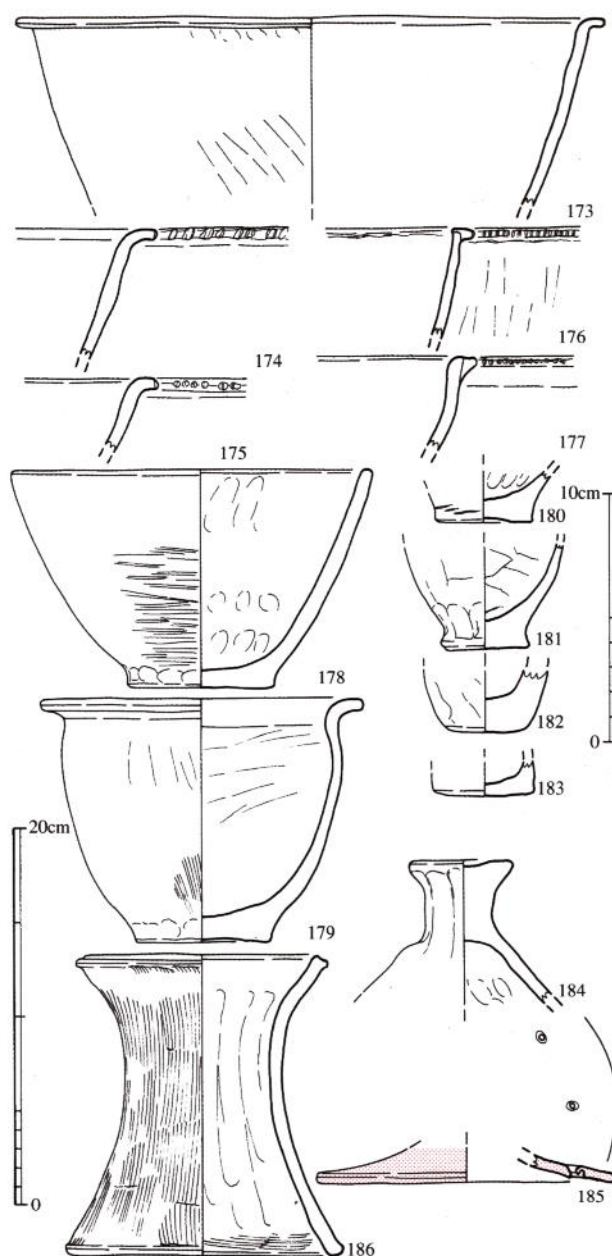
色。186は鼓形器台。口縁端部を外側に少しつまみ出す。外面縦ハケ、内面口縁部ナデ、中間ナデ、脚裾横ハケ。白灰褐色。

187～201は3号溝北側上層、202～211は3号溝中央部上層より出土した。

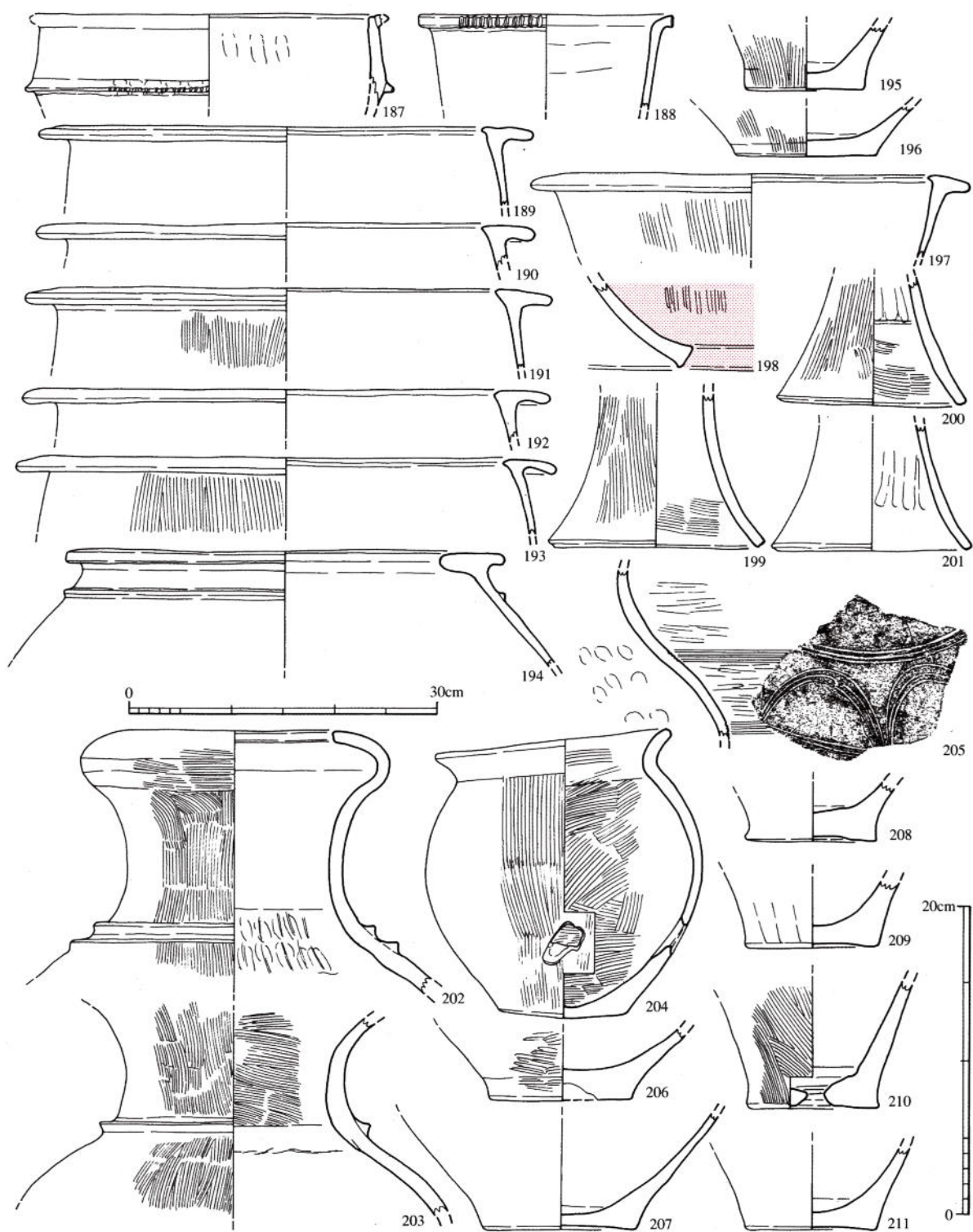
187は口縁外面と胴部外面に突帯を貼付した甕。突帯は刻目を施すが、口縁部外面は摩滅のため刻目の有無不明。188は如意状口縁の小形甕。口縁は短く外反し、端部に先端が鈍角の工具で乾燥前に刻目施文。外面摩滅、内面板ナデで褐灰色。189～193は鋤先状口縁の甕。摩滅するものが多いが、190は内外横ナデ、191・193は外面ハケ、192は外面ナデ。189・190内面・193は淡褐色、190外面は淡褐灰色、191外面は黄白褐色、191内面は白褐色、192は灰褐色。194は口径42.4cmに復元される大形の鋤先口縁甕。外面摩滅、内面ナデで、灰褐色～灰黄褐色。195は甕底部で外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。淡灰褐色で外面煤付着。196は壺底部か。外面縦ハケ、内面摩滅で、内外淡褐色。197は鋤先口縁の鉢。口縁部上面は外傾し、内への突出が顕著。外面縦ハケ、内面摩滅し、内外褐白色。198は丹塗筒形器台の脚裾。内外摩滅する。199～201は鼓形器台裾部。外面ハケ、内面ナデ仕上げであるが、199・200内面は横ハケが残る。199・200は淡褐色、201は白褐色。

202は後期初頭～前葉の袋状口縁壺口縁部～肩部片で、203は口縁部を欠損するが同様の器形か。202は口縁部外面がやや面をなし、頸部外面には断面三角形突帯2条を貼付。外面ハケメ、内面ナデで、頸部内面には絞り痕をナデ消した痕跡が顕著。外面は化粧

土のためか明褐色を呈し、内面は明褐灰色。203は肩部に断面三角形突帯を巡らし、外面～頸部内面ハケメ、胴部内面ナデで、頸部内面に接合痕が残る。内外淡黄褐色。204は後期初頭～前葉の小形甕。括れた頸部から口縁部がゆるやかに外反し、底部はやや凸レンズ状。胴下部に穿孔があるが、意図的かは不明。胴部内外ハケメ、口縁部内外横ナデ。淡褐色～明褐色。205は肩部に3条沈線、胴部に3条沈線を巡らし、その間に3条1単位の重弧文を配置。外面淡灰黄褐色、内面淡黄褐色。206・207は壺底部。206は外面ミガキ、内面摩滅で、淡黄褐色～白黄褐色。207は内外摩滅。淡黄褐色で、外面は二次的に火を受け桃色を呈す。208～211は甕底部。208は外面ナデ、内面摩滅。灰黄褐色で外面に煤付着。209は内外摩滅するが、外面にハケメの稜線が残る。淡黄褐灰色を呈し、外面やや二次的に火を受け変色。210は底部を焼成後穿孔し、外面ハケ、内面摩滅。外面灰褐色、内面



第124図 3号溝出土土器実測図(7)(180～183は1/3、他は1/4)

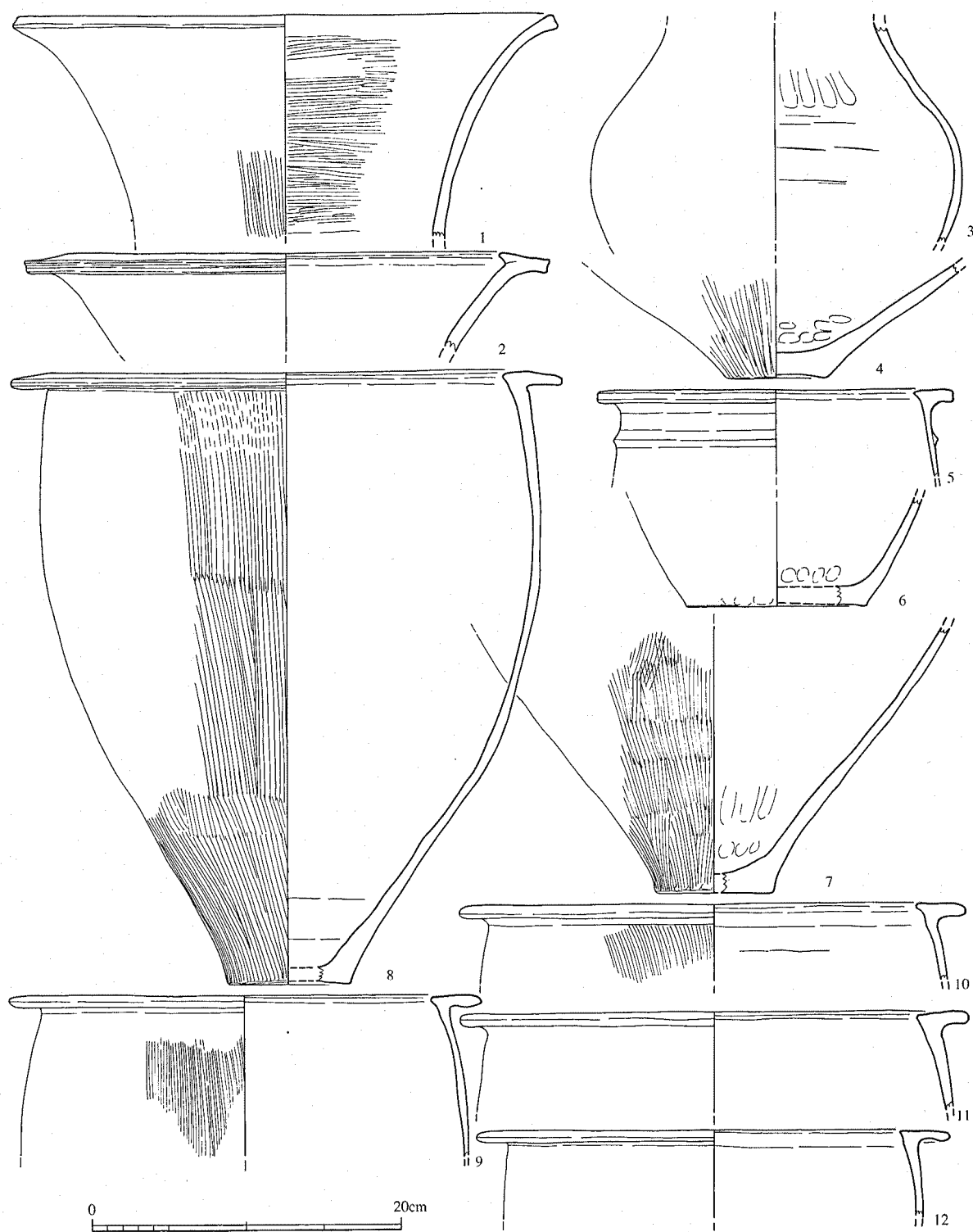


第125図 3号溝出土土器実測図(8)(194は1/6、他は1/4)

暗黄褐色であるが、外面は二次的に火を受けて赤変。211は外面摩滅、内面ナデ。淡黄白褐色を呈すが、内面はコゲが付着。

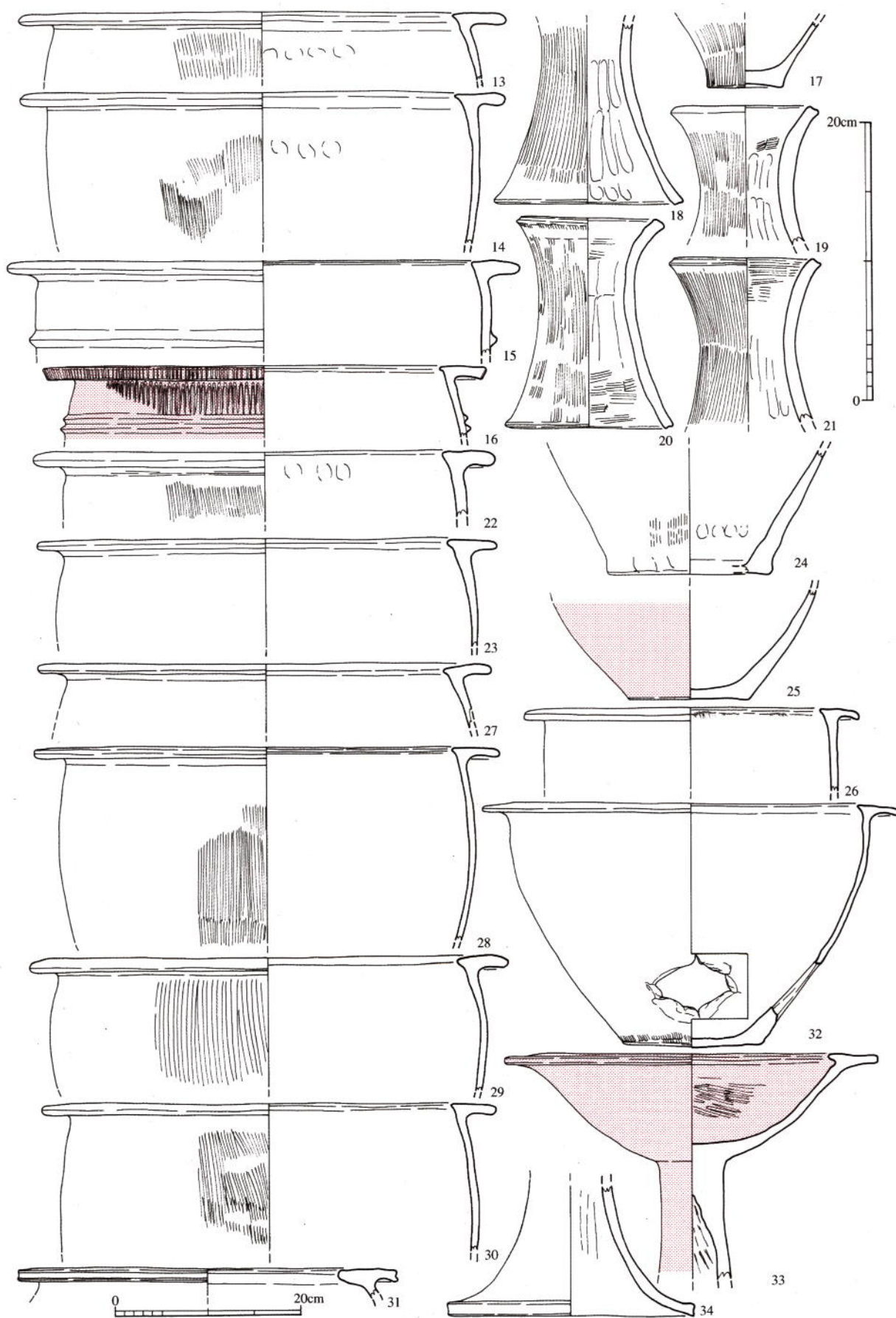
4号溝(図版50、第4図)

B・C区に所在し、調査区北西壁から始まり、東へ延び、調査区中央で収束する幅2.5m前後、深



第126図 4号溝出土土器実測図(1)(1/4)

さ0.3m前後の逆台形の溝と考えて発掘調査した。ただ、付近では土坑等の遺構の切合いも濃密であり、検出面の土質も暗褐色で遺構とそれ以外の個所の判別さえ悩む状態であった。そのため、複数の遺構の切合いを溝と誤認した可能性も考えられる。土器の他に、扁平打製石斧(第165図90)、砥石(第167図117・第170図134)、が出土し、下層の遺構及び4号溝北・東南の包含層から土製投弾(第162図11)、土製紡錘車(第162図19・20)、安山岩製石鏃(第4表1・43)、打製石錐(第6表179)、



第127図 4号溝出土土器実測図(2)(31は1/6、他は1/4)

石英質石器（第9表1078）が出土した。

出土土器（図版76～79、第126～134図） 1～18、19～21、22～24、25～34、35～37、38～45はそれぞれ近接して出土した群に分かれるが、いずれも中期後半の土器を主体とする。

1は口頸部が大きく開く広口壺。外面下部縦ミガキ、外面上部摩滅、内面ミガキで橙褐色。2は鋤先口縁広口壺。口縁部は外傾し、内面に突出する。内外摩滅し、淡褐白色。3は前期末～中期初頭の壺か。内外ナデであるが、胴部内面に板状工具痕が残る。外面淡褐色、内面淡灰褐色。5は若干、上げ底状になった壺底部。外面縦ミガキ、内面ナデで褐色。

5は樽形甕口縁部。鋤先口縁は上面がわずかに内傾し、外面に断面三角形突帯を巡らす。内外ナデ。6は樽形甕底部か。内外ナデで、褐黄色。7は大形甕の胴下部～底部。外面ハケメ、内面ナデ。褐灰色で外面上部に煤付着。8は鋤先口縁甕。胴上部と下部で接合しない破片であるが図面上で合成した。口縁は内へやや突出して、外面ハケメ、内面ナデ。胴下部のナデの段が特徴的。淡褐色を呈し、外面下部に帯状に煤が付着。9～16は鋤先口縁甕。11は口縁が厚く、上面が内傾し、内への突出が弱い。16は丹塗で胴部外面には断面M字状の突帯を巡らす。口縁端部には刻目、口縁下外面にはピッチの狭い波状のミガキ暗文を巡らす。15は口径がやや大きく、胴部外面に断面三角形突帯。器表の摩滅するものが多いが、9・13・14は外面ハケ、9・10・12・13・14・16は内面ナデ。9・12・13外面・14内面は淡黄褐色、10外面・15外面は淡褐色、10内面・11・15内面は淡褐白色、13内面は淡灰褐色、14外面は褐灰色を呈す。17は甕底部で、外面縦ハケ、内面ナデ、灰黄色を呈す。

18は鼓形器台。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、外面白黄褐色、内面淡灰褐色。

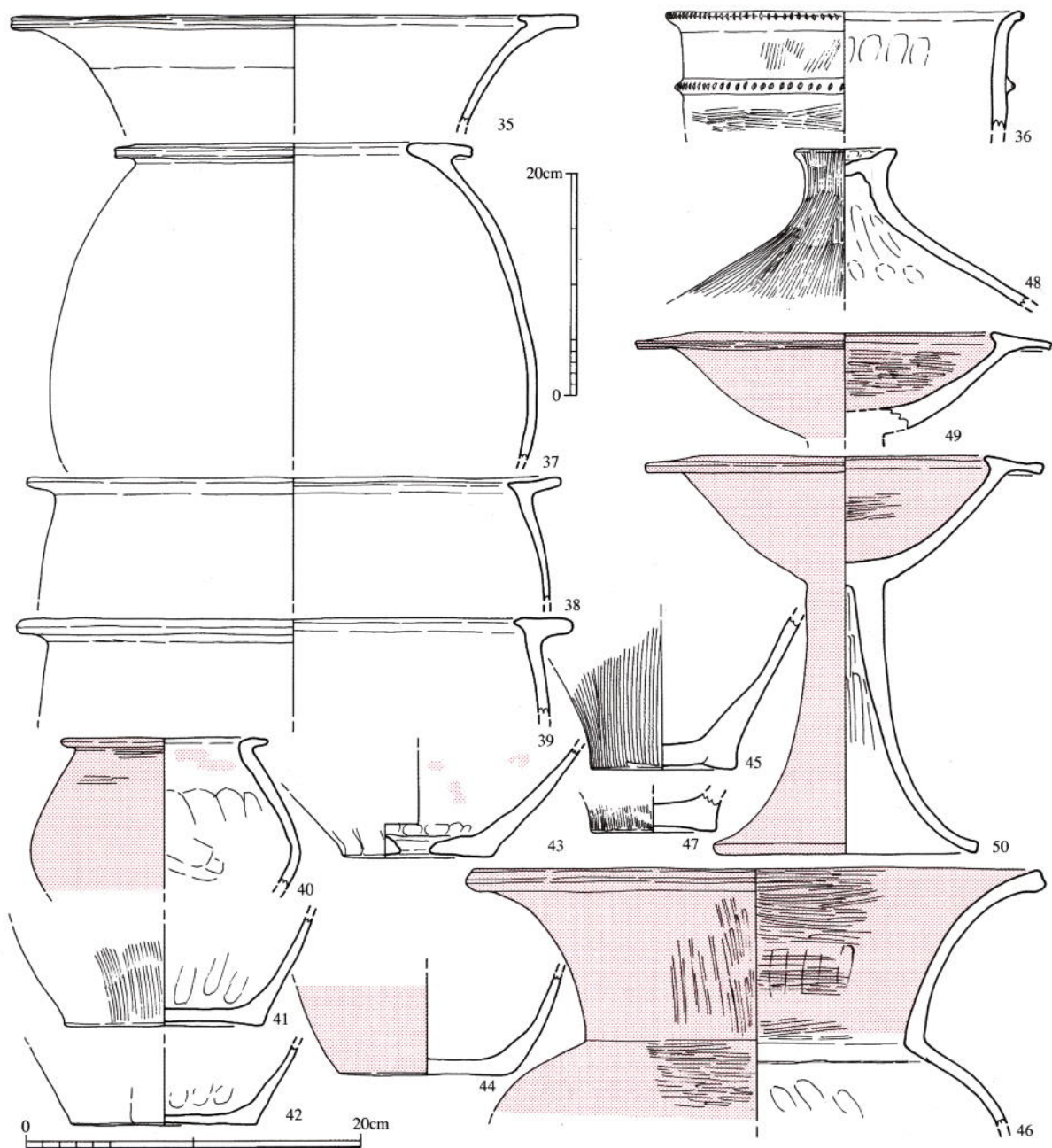
19～21は鼓形器台で同形同大。いずれも外面縦ハケ、口縁・裾内面横ハケ、中間部内面ナデ。19は淡褐白色、20は淡灰褐色、21は淡黄褐色。

22・24は鋤先口縁の甕。22が口縁部がやや厚いのに対して、23は端部に向って薄くなる。22は外面縦ハケ、内面ナデで、淡灰褐色～灰黄褐色。23は内外摩滅し、白褐色。24は甕底部。外面ハケが摩滅し、内面はナデ仕上げ。白褐色を呈するが、内面は焼成不良で黒変。

25は丹塗壺の底部。内外摩滅し、黄白褐色を呈すが、内面焼成不良のため黒変。26～30は鋤先口縁甕胴上部片。27～29は内への突出が顕著で、29は頸部の括れが強い。28～30外面はハケ、29・30は内面ナデで、他は摩滅。26外面は淡黄褐色、26内面は淡灰褐色、27外面は淡褐色、27内面は橙褐色、28・30内面は淡灰黄褐色、29は白褐色、30外面は淡褐灰色。31は大形甕の口縁部小片。内への突出が顕著で外端部が凹面をなし、内外ナデ。外面黄白褐色、内面褐白色。32は鋤先口縁鉢。口縁は薄く、わずかに外傾し、底部は大きい。内外ナデ仕上げであるが、底部外周にハケメ工具静止痕が残る。胴下部に焼成後の穿孔がある。外面淡黄褐色、内面淡灰黄褐色。33は丹塗高杯杯部～脚上部片。杯部内面はミガキ、脚部内面は絞り痕が観察できるが、他は外面の摩滅が顕著。生地は淡褐色を呈す。34は高杯脚裾部破片で、脚裾が緩やかに広がり、端部は凹面をなす。内外摩滅顕著であるが、内面にはナデの稜が残る。外面淡灰褐色、内面褐色。

35は鋤先口縁広口壺。口縁部上面は水平で内への突出は明瞭。内外摩滅し、外面にはかすかな段が巡る。褐色。36は口縁部如意状で、外面に突帯を巡らす甕。口縁端部、突帯頂部に刻目を施し、外面ハケメ、内面ナデ。淡褐黄色を呈し、外面に煤付着。37は口縁鋤先状で、頸部の括れ、胴部の張りが強い大形甕。口縁部はわずかに外傾し、内へ大きく突出する。内外摩滅で淡褐色。

38・39は鋤先口縁甕。38は口縁上面がやや凹みながら内傾し、外面摩滅、内面ナデ。淡褐色。39は口縁部内面の突出が顕著。内外摩滅するが、頸部外面に工具のあたりによる皺が残る。灰白褐色。40は丹塗無頸壺。口縁部は強く屈曲して外折し、1/2周弱残存するが、穿孔は確認されない。摩滅進むが、胴上部外面にミガキ、胴下部内面は強いナデによる稜が残る。生地は淡黄褐色。41～44は壺底部。41は外面縦ハケ、内面ナデ。淡黄褐色を呈すが、内面焼成不良のため灰色。42は内外摩

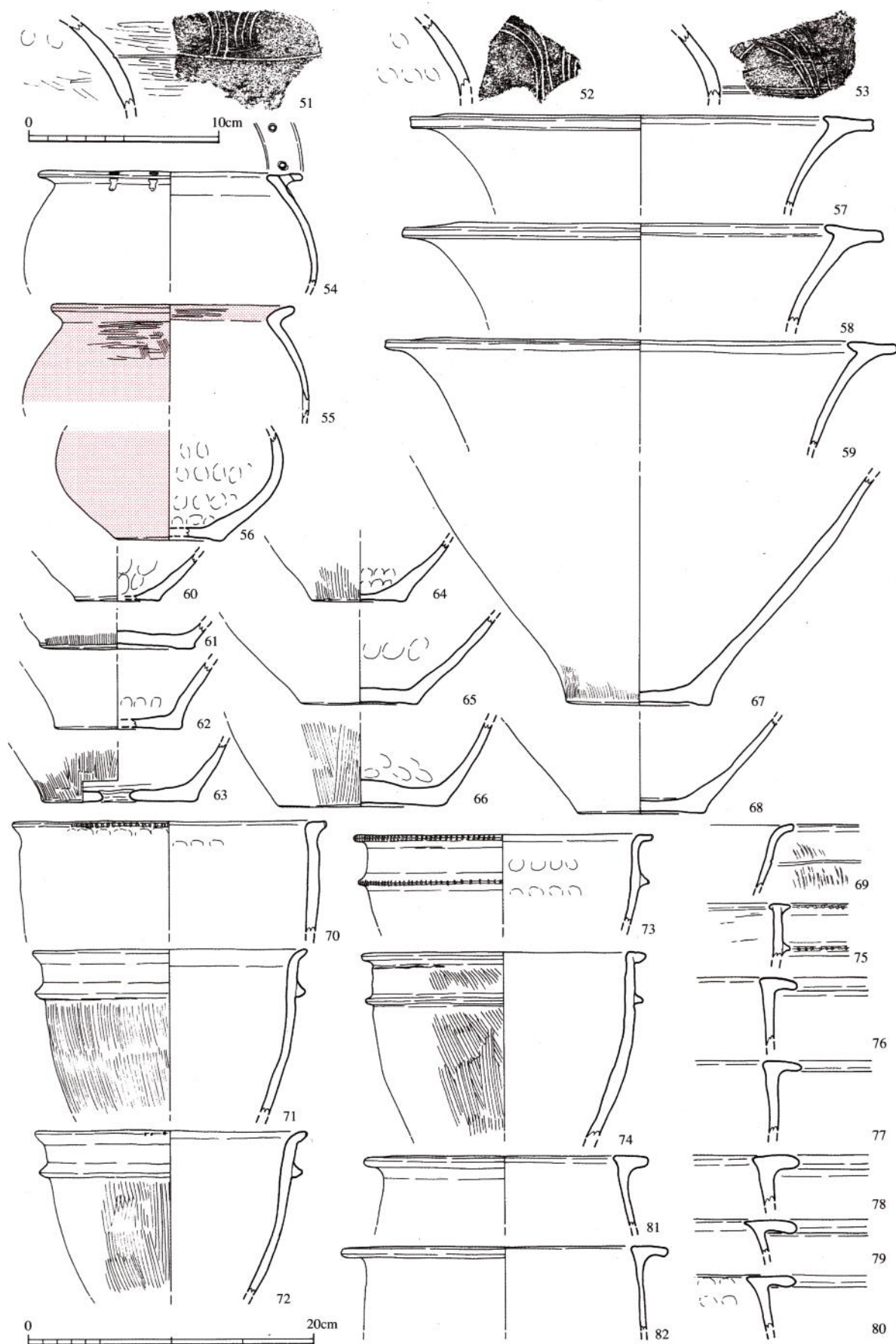


第128図 4号溝出土土器実測図(3)(37は1/6、他は1/4)

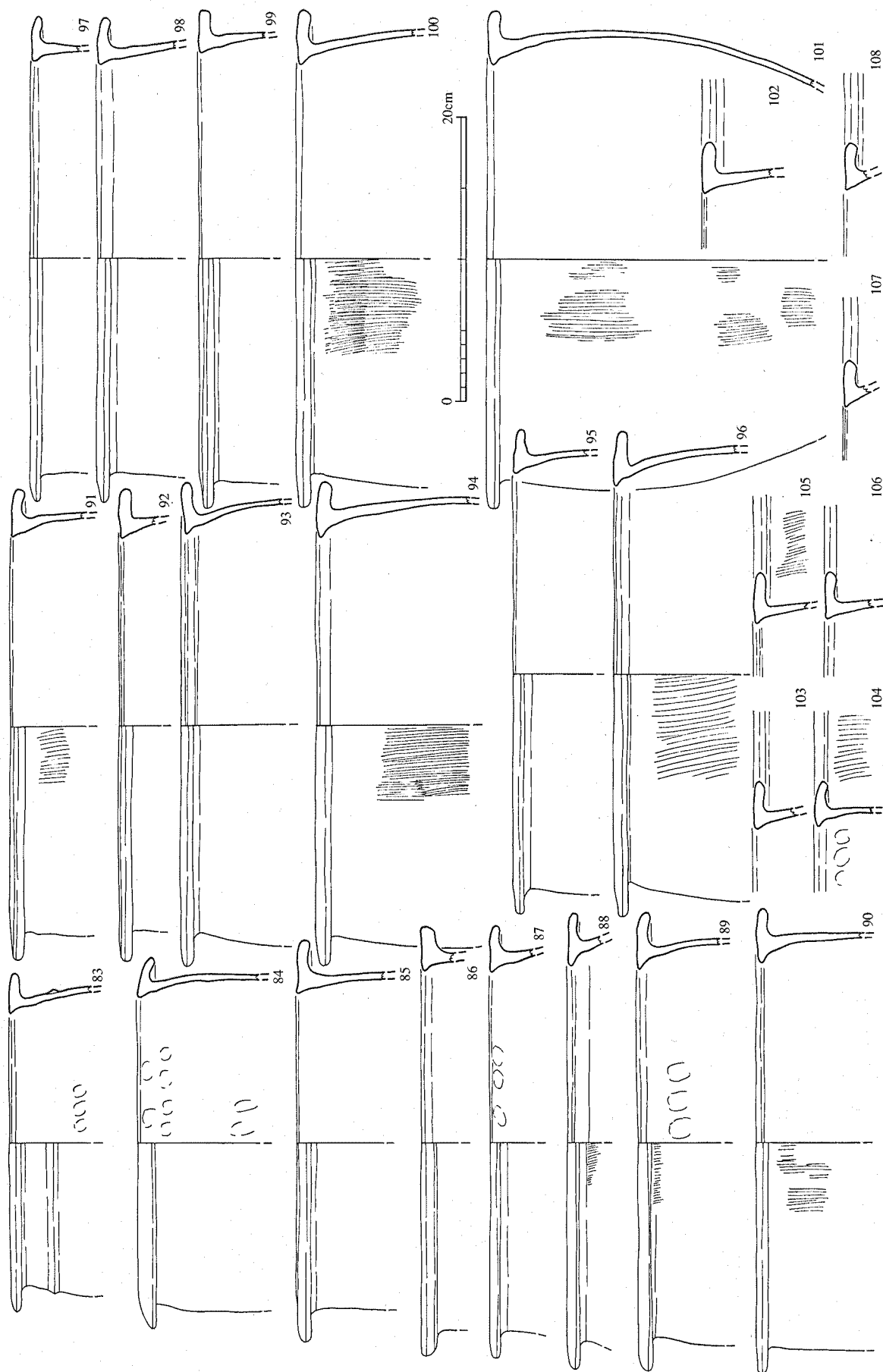
減で、外面黄白褐色。43は底部を焼成後穿孔。外面摩滅、内面ナデで、淡黄白褐色。胴部内面には丹塗の飛沫が付着。44は丹塗で、内外摩滅が顕著。生地は淡黄褐色。45は甕底部で、底部外面が環状に凹み、接合を反映すると思われる。外面縦ハケ、内面ナデで淡灰褐色。外面に煤付着。

46は丹塗広口壺の口縁～胴上部。口縁は頸部から大きく外反し、端部はやや角張る。胴部外面横ミガキ、口頸部外面暗文風の縦ミガキ、口頸部内面横ミガキ。口頸部内面、胴部内面には指頭圧痕が観察され、頸部内面に接合痕を残す。生地は橙褐色。49・50は丹塗高杯で、49は杯部片、50は完形品。49は内外丹塗で、外面ナデ、内面ミガキ。生地は淡橙褐色。50は外面～杯部内面を丹塗り。杯部内面にミガキ、脚部内面に絞り痕が残るが、器表の摩滅が進む。生地は黄白褐色。

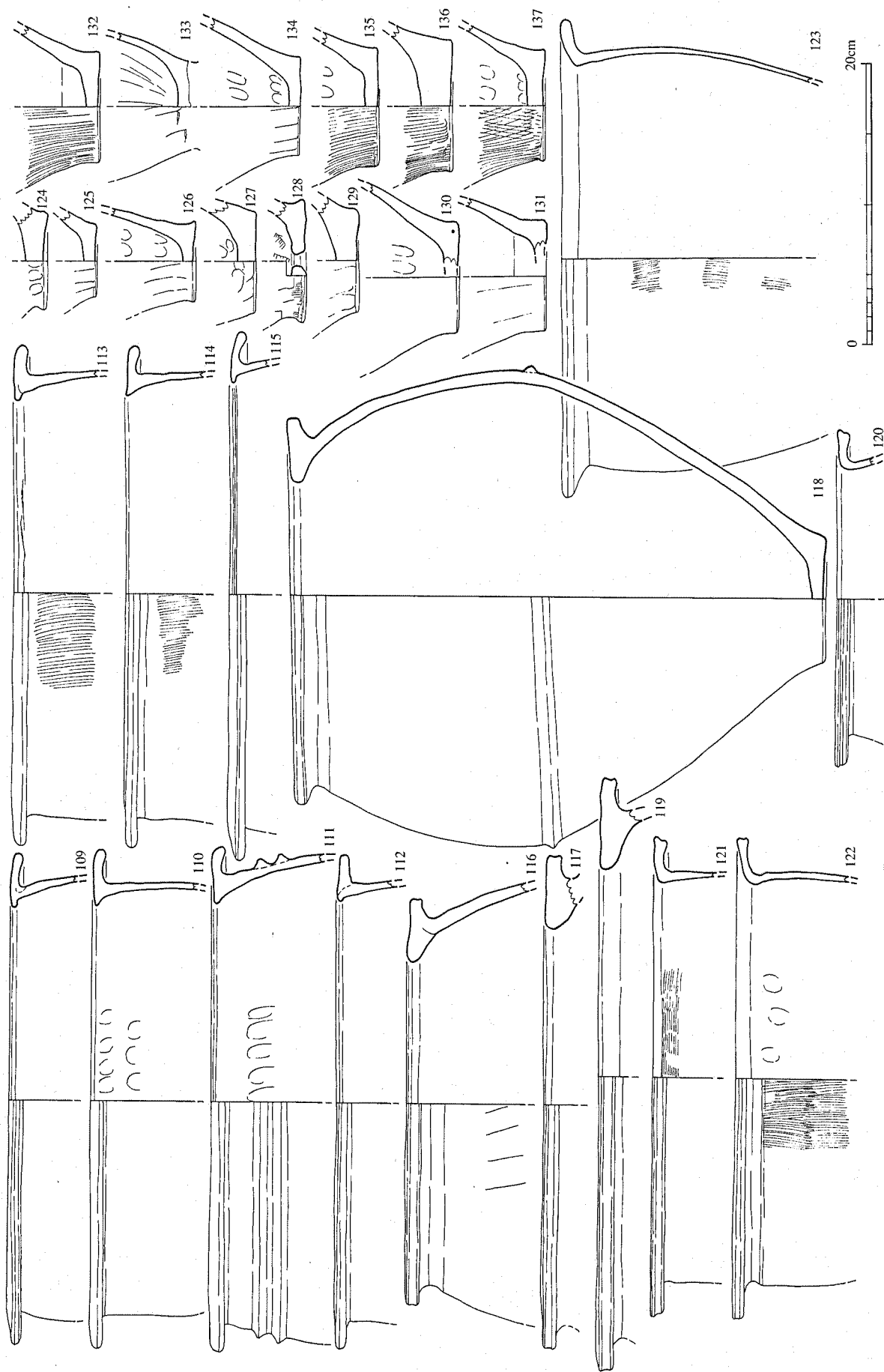
51～178は4号溝の各所から出土したもので、中期後半の土器を主体とするが、前期に遡る遺物も含まれる。51～53は前期の壺肩部破片。51は胴部外面に1条の沈線を巡らし、その上部に3条を



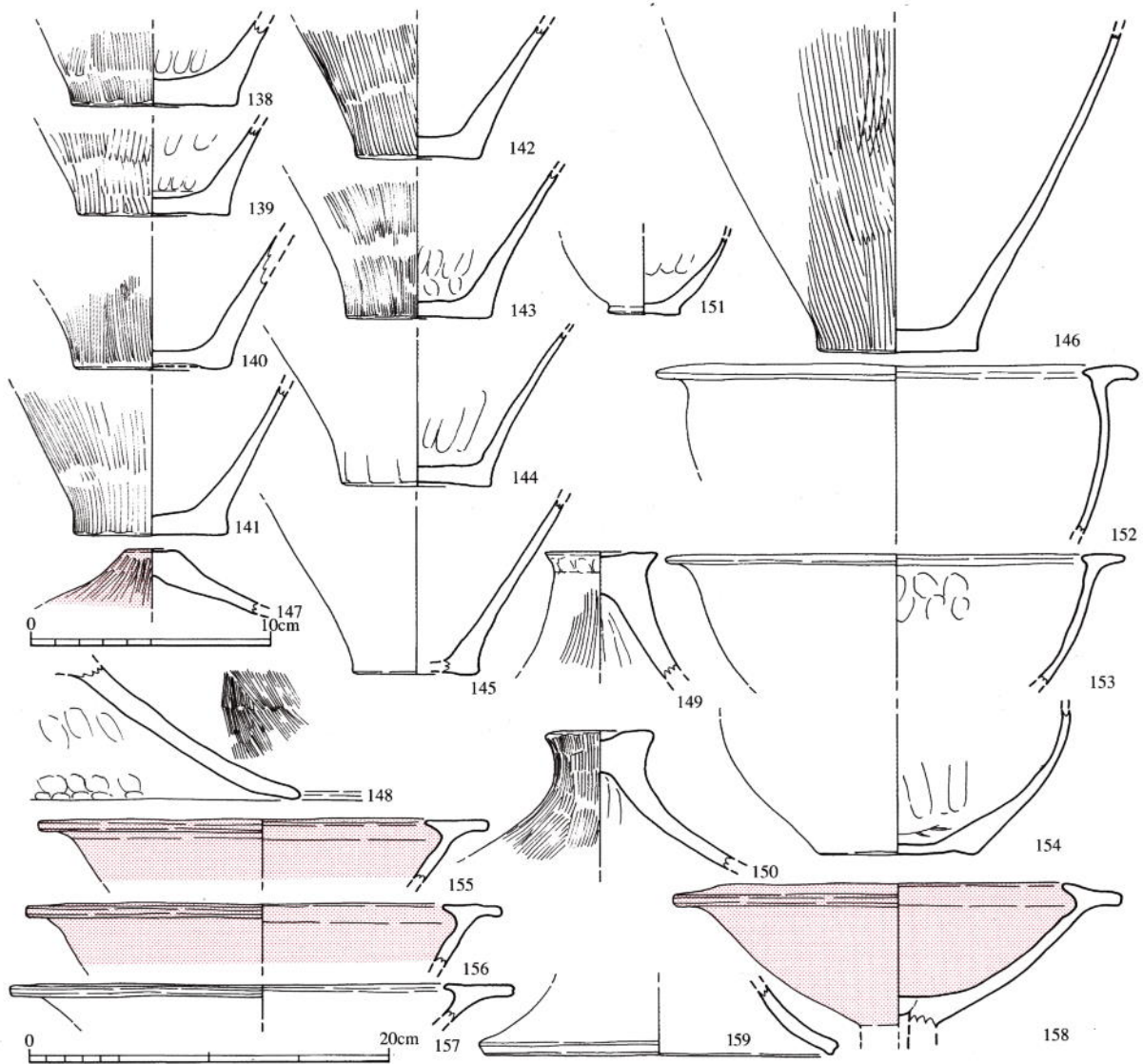
第129図 4号溝出土土器実測図(4)(51・52は1/3、他は1/4)



第130图 4号沟出土器实测图(5)(1/4)



第131图 4号沟出土器实测图(6)(1/4)



第132図 4号溝出土土器実測図(7)(147は1/3、他は1/4)

1単位とする重弧文を施文。52は逆U字形に近い3条の沈線を1単位とする重弧文破片。53は胴部に2条の沈線を巡らし、その上に粗雑な重弧文を施文する。51は外面ミガキ、内面ナデで、褐色。52は外面摩滅、内面ナデで黄灰褐色。53は外面摩滅、内面ナデで、灰褐色～褐灰色。

54・55は無頸壺で、56は無頸壺胴下部破片か。54は鋤先口縁をなし、上面はほぼ水平。口縁部上面に直径6mm程の焼成後穿孔を2個所に施し、穿孔の下端は胴部外面を抉っている。内外摩滅し、調整不明。淡褐色を呈し、口縁～内面は二次的に火を受けて褐変。55は丹塗で、口縁部は「く」の字に外反する。口縁部は3/4周残存するが、穿孔はない。外面～口縁部内面にミガキを施し、胴部外面ではミガキに先行するハケメも観察できる。図示していないが、胴部外面破損部は、意図的な焼成後穿孔の可能性がある。生地は淡黄褐色。56は底部がやや上げ底で、外面摩滅、内面指頭圧痕を不規則に残したナデ。生地は淡黄褐色。

57～59は鋤先口縁広口壺。口縁上面はいずれもわずかに外傾し、58・59は内への突出が顕著。57は外面摩滅、内面ナデ、58は内外ナデ、59は内外摩滅。57外面は淡褐灰色、57内面・58外面は灰褐色、58外面・59内面は淡褐色、58内面は白褐色。60～68は壺底部片。63は焼成後穿孔し、67は底部外面に凹みが巡る。外面は61・63・64・66縦ハケ、60・62・65・67・68摩滅であるが、67は底部外

周に縦ハケが残る。内面は64・65・68はナデで、他は摩滅するが、60・62・64～66は指頭圧痕が微かに残る。60・66・68内面は淡褐白色、61外面・67外面は褐色、61内面・63内面・64内面は灰褐色、62は淡黄褐色、63外面・64外面・68外面は灰白褐色、65は橙褐色、67内面は褐黄色。

69～74は中期初頭以前の甕。69は口縁部が如意状に外反し、端部が角張る。胴部外面には沈線を巡らす。胴部外面ハケ、内面摩滅。70は口縁外面に粘土を貼付し拡張したもの。端部には刻目を施文し、内外ナデ。71～73は口縁部が如意状に外反し、胴部にも断面三角形突帯を巡らすもの。72は口縁端部に刻目がわずかに残るが、71の口縁端部・突帯頂部、72の突帯頂部は摩滅のため刻目の有無不明。一方、73は口縁端部、突帯頂部に細い刻目を施文。71は外面縦ハケ、内面摩滅。72は外面縦ハケ、内面ナデ。73は外面摩滅、内面ナデ。74・75は口縁断面三角形で、胴部外面にも突帯を巡らすもの。74は口縁端部、突帯頂部とも刻目は施文されない。これに対して、75は口縁端部・突帯頂部とも刻目を施文し、口縁部内面を内へ突出させる。74は外面ハケメ、内面ナデ。75は外面横ナデ、内面板ナデ。69は橙褐色、70外面は暗褐黄色、70内面は暗灰褐色、71外面・74内面は淡褐色、71内面は淡灰褐色、72は灰黄褐色、73外面は淡灰白褐色、73内面は黄白褐色、74外面は暗褐色、75は褐灰色～灰褐色。74突帯下外面には煤が付着し、69は二次的に火を受け褐変・赤変する。

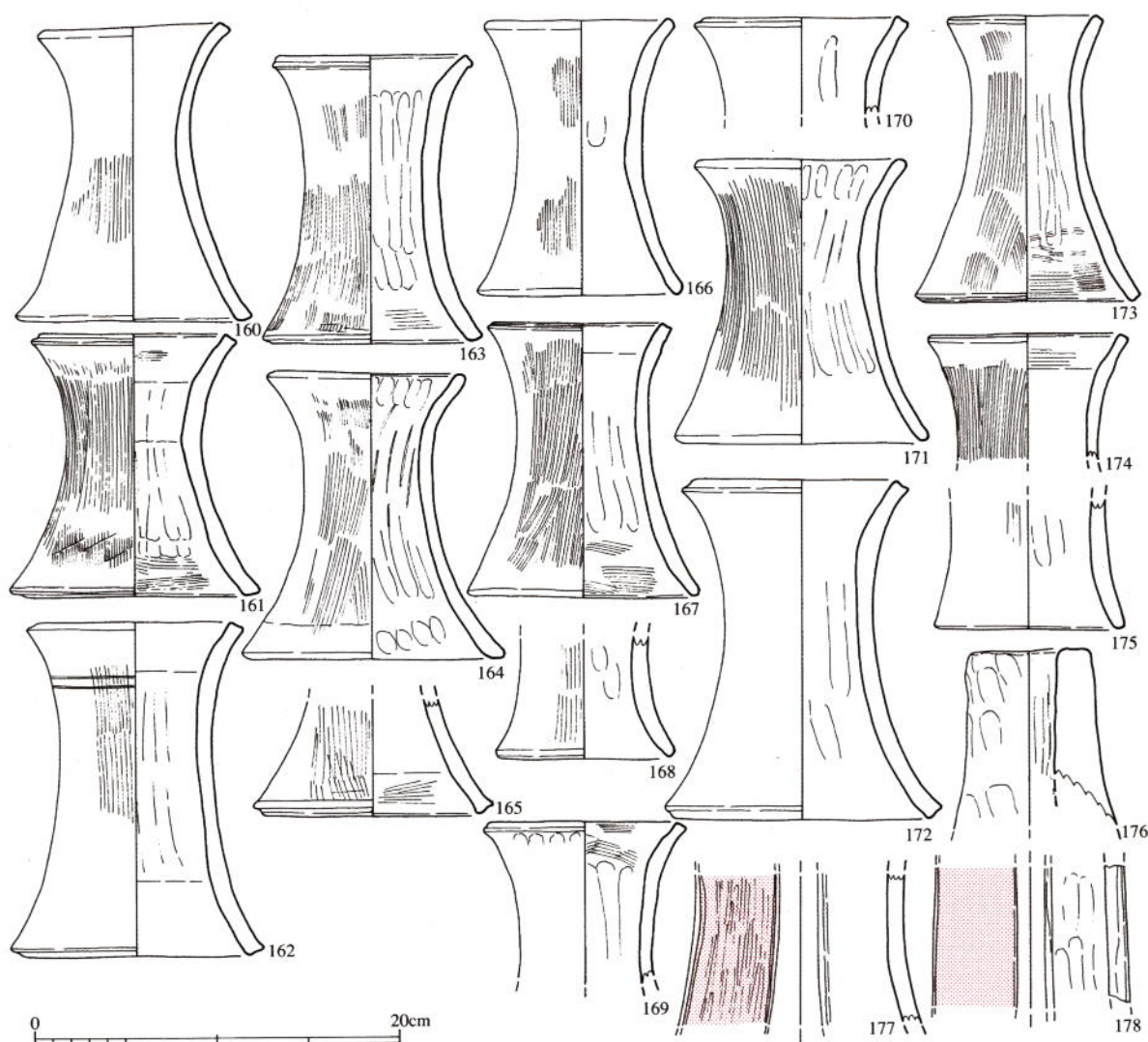
76～115は鋤先口縁甕小片。76～80はいずれも内外摩滅し、76は淡褐白色、77は白黄褐色、78は淡黄褐色、79は褐白色、80外面暗灰褐色、80内面淡黄褐色。81～115は鋤先口縁甕胴上部片で、83は胴部外面に1条、111は2条の断面三角形突帯を貼付。外面縦ハケ、内面ナデが基本であるが、83・86は外面ナデ、81・82・84・85・89・93・97～99・102・107～109・112・115は内外面、87・92・95・110は外面、88・91・96・103・105・106は内面が摩滅。113は口縁部内面に接合痕が残る。81外面・93・95内面・97外面・104・110外面・115は淡褐白色、81内面は淡橙褐色、82・84外面・91内面・92内面・94・101は淡灰褐色、83・86・87内面・91外面・98内面・99外面・103外面・105外面・111外面・114外面は淡褐色、85・88外面は灰白褐色、87外面・104内面は淡灰黄褐色、89・96・100は白褐色、90・95外面・108内面・109・112外面・113は褐灰色～淡褐灰色、92外面・102・107・108外面・110内面・112内面は淡黄褐色、99内面・103内面は淡黄白褐色、106・111内面は褐黄色～淡褐黄色。83・95・101は外面に煤が付着し、96外面は二次的に火を受け桃変する。

116～119は頸部の括れ、胴部の張りが強い大形甕で、118はほぼ完形に復元できる。いずれも口縁部は内への突出が強く、内端が丸みを帯び、外端が角張る。118は摩滅が顕著であるが、他は内外ナデで、116外面は淡褐色、116内面・118外面・119は褐白色、117・118内面は淡灰褐色。

120～123は口縁部が外折する甕。120は内外摩滅で、淡黄灰褐色。121は内外摩滅するが、胴部内面上部にハケメが微かに残る。淡橙褐色。122は外面縦ハケ、内面摩滅。外面淡黄褐色、内面灰褐色。123は内外摩滅するが、外面に縦ハケがわずかに残る。淡褐色～淡黄褐色。

124～146は甕底部。128は焼成後、ドリル状工具で穿孔を施し、133は外底面が剥離する。外面はナデのもの（124・127）、板ナデのもの（125・128・133・）、縦ハケのもの（132・135～143・146）に分かれるが、126・129・130・131・134・144・145は摩滅。内面はナデのものが多く、128・133は板ナデ痕を残し、129・131・135・140～143・145は摩滅。124・130・131内面・135内面・136内面・146は灰褐色～淡灰褐色、125は灰黄褐色、126外面・127外面・136外面・138は淡褐灰色、127内面は黄灰褐色、128外面・133・135外面・141は淡黄褐色、129外面・131・134は淡褐色、129内面は暗灰色、133内面は暗灰褐色、136外面は褐灰色、137・139・143外面・144外面・145外面は灰白褐色、143内面は淡褐白色、144内面は黄白褐色、145内面は淡褐黄色。142・143外面全面、146は外面上部に煤、132・140・141・145見込み及び139内面にコゲが付着する。130・139・140外面は二次的に火を受け赤変し、126内面は焼成不良で黒色。

147は丹塗の無頸壺蓋。外面縦ミガキ、内面ナデで、生地は白黄褐色。148は蓋裾部、外面ハケ、



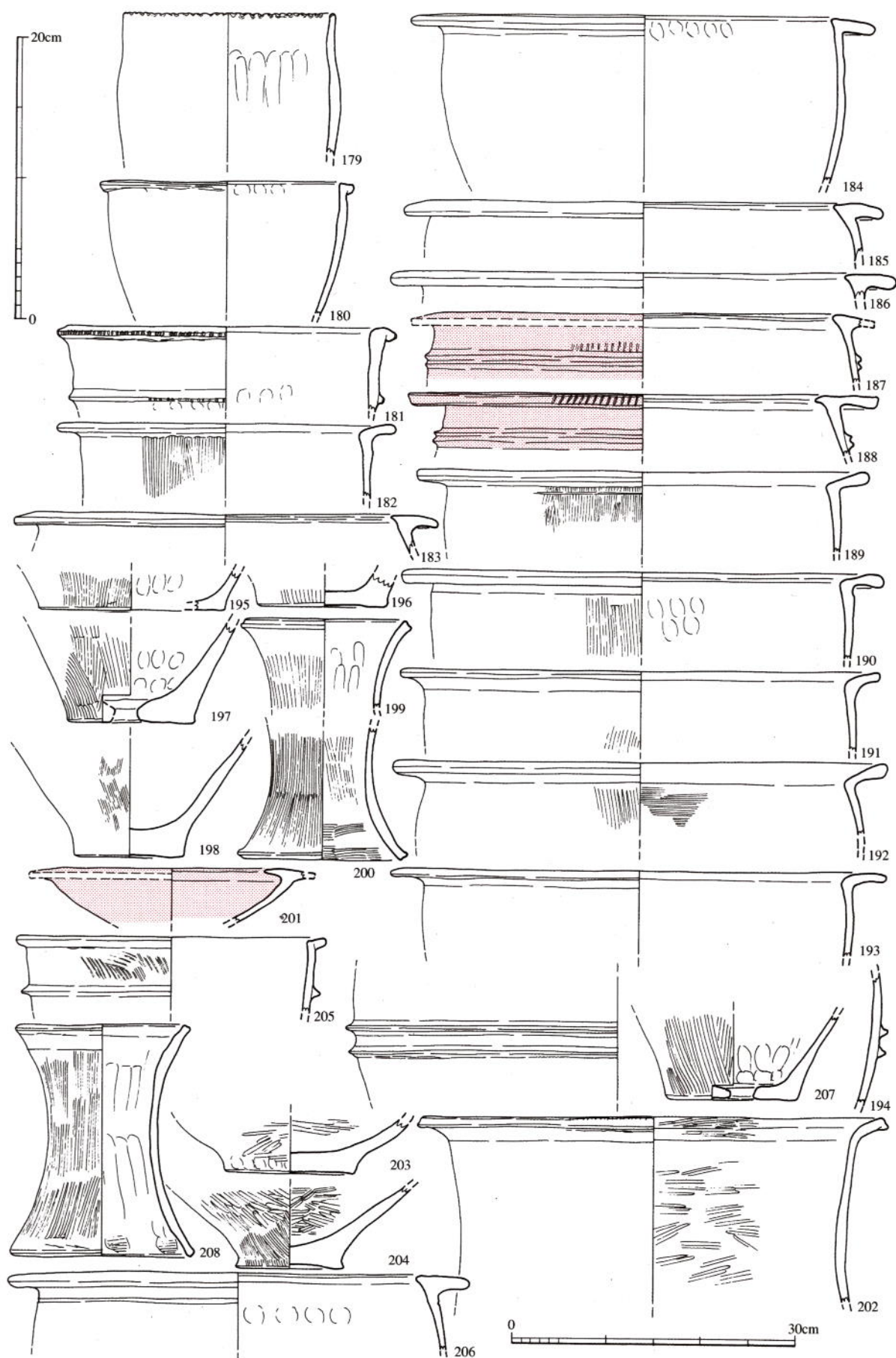
第133図 4号溝出土土器実測図(8)(1/4)

内面ナデで、器壁が厚い。外面暗褐色、内面暗灰褐色を呈す。149・150は蓋頂部で、いずれも外面ハケ、内面ナデ仕上げ。149は淡黄褐色、150は白褐色。151は小形の鉢底部か。内外摩滅で、器壁は薄い。淡褐色。152・153は鋤先口縁鉢で、154は鉢の底部と考えた。152・153はいずれも内外摩滅し、淡黄白褐色。154は外面摩滅、内面ナデで、内面下部にはハケメ工具静止痕が残る。外面黄白褐色、内面淡橙褐色。

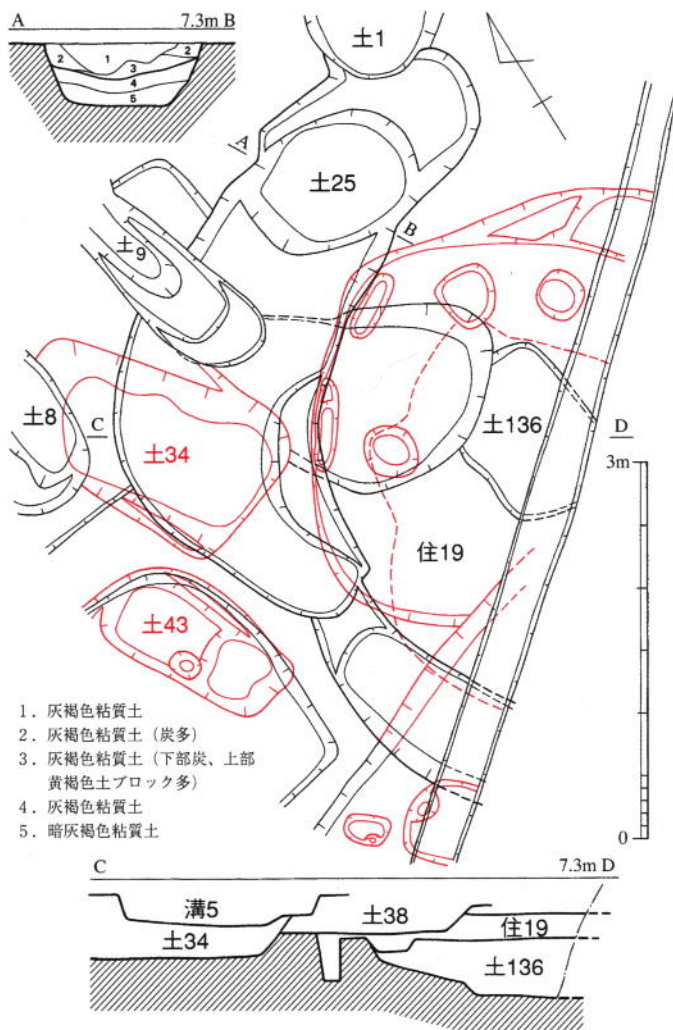
155～158は鋤先口縁の高杯杯部。157は摩滅のため確認できないが、他は内外丹塗。いずれも内外摩滅し、生地は155・156が褐灰色、157・158は淡黄褐色。159は高杯脚裾部で、脚部にむかって緩やかに広がり、端部は下方へわずかにつまみ出す。内外摩滅し、生地は橙褐色。

内外摩滅し、淡黄灰褐色を呈し、外面は煤が付着。181は口縁断面三角形を呈し、胴部外面に刻目突帯を巡らすもの。刻目は先端の丸い工具による。外面横ナデ、内面ナデで、外面灰褐色、内面暗灰黄褐色。182は中期後半の口縁が外折する甕。外面ハケメ、内面ナデで、褐黄色。

183～188は鋤先口縁甕で、丹塗の187・188は胴部外面に断面M字状突帯を巡らす。いずれも内外摩滅するが、187突帯上にはミガキの暗文が残り、188口縁端部は細い刻目を施文。183外面は褐白色、183内面は淡褐色、184は灰褐色、185・186内面・188生地は淡黄褐色、186外面は暗褐色、187生地は褐白色を呈する。



第134図 4号溝出土土器実測図(9)(194・202は1/6、他は1/4)



第135図 5号溝実測図 (1/60)

189～193は口縁部が外折する甕。外面ハケ、内面ナデのものが多いが、189内面・193外面は摩滅し、192内面は横ハケを施す。189胴部外面は強いナデにより沈線が巡る。189・191内面は淡灰黄褐色、190は黄白褐色、191外面は暗灰色、192は灰白褐色、193は淡褐色。194は大形甕の胴部片で、断面三角形突帯を2条貼付する。内外摩滅し、淡褐白色を呈する。

195～198は底部片で、196は壺、他は甕か。197は底部を焼成後穿孔し、甑に転用する。いずれも外面ハケ、内面ナデで、195淡黄白褐色、196褐灰色、197外面暗灰褐色、197内面淡黄褐色、198外面灰黄褐色、198内面淡褐色。

200は鼓形器台。内面中間部縦ハケ、裾部横ハケが特徴的である。外面は縦ハケで、白黄褐色。201は丹塗高杯杯部片。口縁は内への突出が強く、外端部は欠損する。生地は淡黄褐色。

202は大形の壺。頸部は直立し、口縁部は短く外反。口縁端部は凹面をなし、上端に刻目が確認できる。口縁下面には接合痕が残る。外面摩滅、内面ミガキで、淡褐色。203・204は壺底部片。いずれも内外ミガキであるが、204底部外周にはミガキ前のハケメが残る。

205は口縁部外面に粘土を貼付して拡張し、胴部外面に断面三角形突帯を巡らしたもので、口縁端部・突帯頂部に刻目は確認されない。外面ハケ、内面ナデ仕上げで、外面暗褐色、内面淡褐色を呈す。

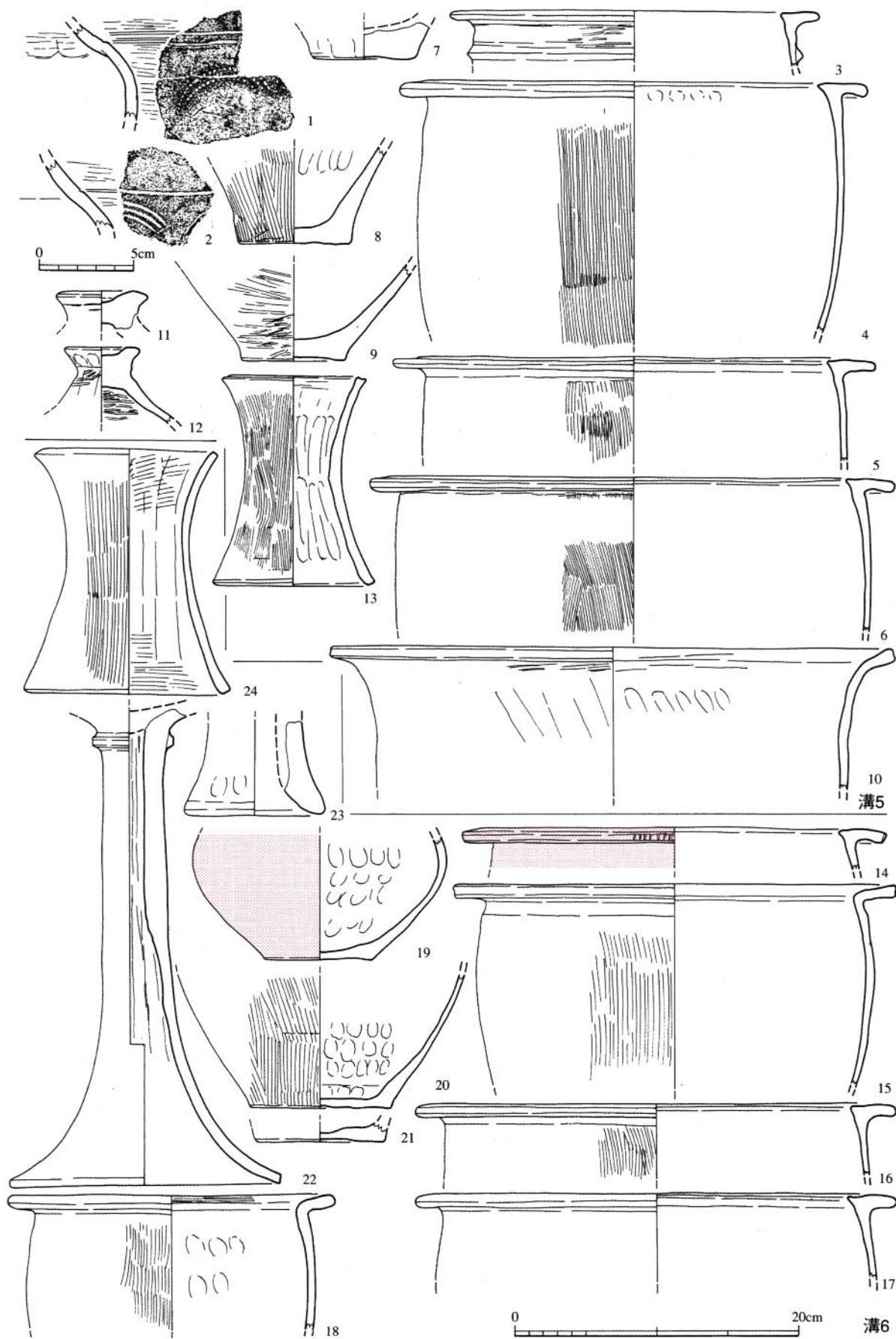
206は鋤先状の甕口縁部。内外摩滅するが、口縁部直下の胴外面に強いナデによる沈線が巡る。淡褐色。207は底部焼成後穿孔の甕底部。外面ハケ、内面ナデで、外面白褐色、内面褐灰色。

208はほぼ完形の鼓形器台。外面縦ハケ、内面ナデであるが、裾部内面にハケメが微かに残る。外面淡灰黄褐色、外面淡黄褐色。

5号溝 (図版49、第135図)

C区南壁際に位置する。下層に25・34・38号土坑、19号竪穴住居跡が位置し、遺構の切合い、平面形の確認等は不安であるが、円弧状に延びるため、円形周溝の可能性を想定して発掘調査した。ただ、円形周溝としても、北東部は連続しないため、不安が残る。幅1.5m、深さ25cmを測る。円形周溝とした場合外周の径6.0m、内側の径4.6m前後となる。

出土土器 (図版79・80、第136図1～13) 1・2は前期壺の肩部。1は肩部に2条の沈線を巡らし、下の沈線は微かな段に重なるように施文する。胴部は3条を1単位とする2枚貝腹縁刺突の連弧文を配置する。外面及び頸部内面ミガキ、胴部内面ナデ仕上げ。頸部内面には接合痕も残る。淡黄灰



第136図 5・6号溝出土土器実測図（1・2は1/3、他は1/4 1~13：溝5、14~24：溝6）

褐色。2は肩部に1条の沈線を巡らし、その下に3条1単位の重弧文を施す。外面ミガキ、内面ナデで、外面明褐色、内面灰黄褐色を呈す。

3～6は鋤先口縁の甕。3は口縁下に断面三角形の突帯を巡らし、外面ミガキ、内面ナデで、樽形甕口縁部の可能性がある。外面灰黄褐色、内面灰褐色。4～6は外面ハケメ、内面ナデ。4は淡褐色～淡褐灰色、5は外面褐灰色、内面褐黄色。6は褐黄色を呈し、外面には煤が付着。

7～9は底部片。7は内外摩滅で淡黄灰褐色。8は外面縦ハケ、内面ナデで、外面暗褐色、内面暗黄色。9は外面ミガキ、内面ナデで淡黄褐色。

10は大形壺口縁部。頸部は直立に近く、緩やかに外反しながら凹面をなす端部に至る。内外ナデで、頸部外面には縦方向の板ナデの痕跡、口縁下部には横方向の工具痕、口縁部内面には横方向の板ナデ痕を残す。淡黄褐色。

11・12は蓋頂部。いずれも上面がわずかに凹む。11はナデで褐灰色。12は内外ミガキで外面淡黄褐色、内面暗褐色。13は鼓形器台。外面縦ハケ、内面ナデで淡黄褐色。

6号溝（第4図）

B区、溝4の東に位置する蛇行した細い溝と考えて発掘調査した。ただ、周辺の遺構の切合いが複雑であり、正確に捉えられたかは大いに疑問である。幅0.5～0.8m、深さ15cm前後。

出土土器（図80版、第136図14～22） 14～18は甕胴上部破片で、15・18は外折口縁、他は鋤先口縁。14は丹塗甕。口縁端部には刻目を残すが、内外摩滅。生地は橙褐色。15は外面縦ハケ、内面摩滅し、淡黄褐色～淡灰褐色。16は外面縦ハケ、内面摩滅で、淡褐色。17は外面摩滅、内面ナデで褐色。18は外面縦ハケ、口縁部内面横ハケ、胴部内面ナデ。外面淡黄灰褐色、内面淡橙褐色。

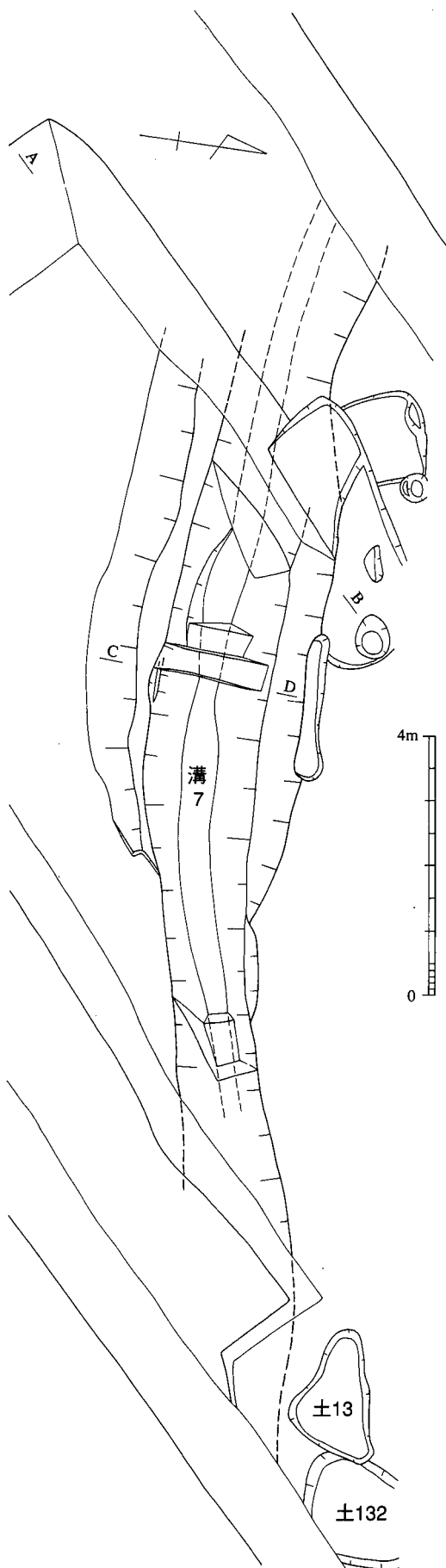
19は丹塗無頸壺の胴下部破片か。外面摩滅し、内面は指頭圧痕の顕著なナデ。生地は外面灰黄褐色、内面赤褐色。20は外面縦ハケ、内面ナデの壺胴下部破片。淡黄褐色。21は薄い底部片。内外摩滅し、橙褐色を呈す。

22は脚柱部の長い高杯脚部。杯部との接合は充填法により、脚上部外面に断面M字条突帯を巡らす。丹塗の可能性は高いが、摩滅のため確認できない。内面は絞り痕を残す。生地は外面他黄褐色、内面焼成不良で黒色の範囲が広い。23は土製支脚。内外雑なナデで仕上げ、内面は剥離する。橙褐色を呈し胎土にクサリ礫を多く含む。24は鼓形支脚。外面縦ハケ、内面口縁・脚裾横ハケ、内面中間部縦方向のナデ。外面淡黄褐色、内面淡橙褐色を呈す。

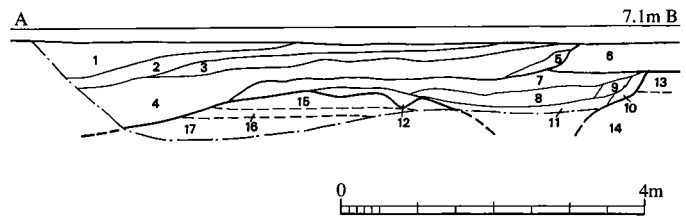
7号溝（図版51・52、第137～139図）

調査区の西南部H・I区に位置し、検出面から遺構の途切れる調査区西南の谷への傾斜面に沿って走る弥生時代の断面V字溝。前述のように、3号溝と調査区外でつながり、弥生時代前期後半以来の環濠を形成するものと思われる。溝上面には調査区西側の谷状地形に堆積した灰黄色シルト、暗灰色シルト、褐色粘質シルトが覆っている。溝の肩は内側では周辺遺構と同レベルで検出されているが、外側はこの谷状地形の堆積土下面で検出した。本来、谷に面した斜面に沿って溝が巡っていた可能性が高い。溝上部の遺物は谷に堆積した遺物、谷の堆積途中に掘り込まれた遺構に含まれる遺物と十分な区別ができなかった。

幅は1.3～2.2mで、東西方向に18.8mの長さを検出している。検出面からの深さは深いところで2.3mであるが、谷下面で検出された南西側肩からは深さ1.5m前後。下面標高は4.6～4.7mで、わずかなではあるが西側が低い。3号溝と比べると下面は1m程低くなる。溝下部は急激に立ち上がるV字状をなし、下面は幅30cm前後の平坦面をなして、3号溝と同様の形態を呈する。下部には地山シルトが大きな塊で崩落し堆積した土層が目立つ。土器の他に土製紡錘車（第162図23）、磨製石鏃（第



第137図 7号溝平面図 (1/100)



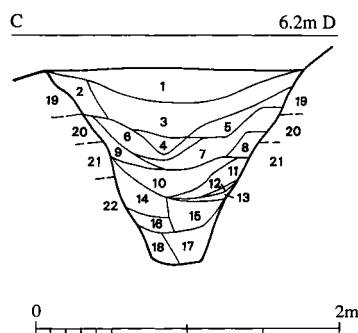
1. 灰褐色粘質シルト (遺物少)
2. くすんだ灰黄色シルト (遺物少)
3. 暗灰色シルト (遺物少)
4. 褐色粘質シルト (遺物少)
5. 灰褐色粘質シルト (遺物少)
6. 暗褐色粘質土 (土器多、中期後半の遺構?)
7. かなり暗い暗褐色粘質シルト (溝7上面に広く堆積?)
8. 褐色粘質シルト (かなりしまる)
9. 黄褐色粘質シルト
10. 褐色粘質シルト (30%程地山シルト混)
11. 褐灰色粘質土
12. 黒褐色粘質シルト (しまりない、溝7に先行する遺構?)
13. 黄白色シルト
14. 淡黄褐色シルト
15. 灰黄色シルト
16. 淡黄褐色シルト
17. 灰色粘質シルト (かなりしまりガチガチ)

谷埋土

溝7埋土

地山

第138図 7号溝・7号溝上層谷土層図 (1/100)



1. 褐灰色粘質土 (炭多く混・青灰色土混)
2. 褐灰色粘質土 (黄色粘土・暗灰黄色土ブロック混)
3. 暗灰褐色粘質土 (地山シルト・灰少し混)
4. 灰褐色粘質土 (地山シルトブロック混)
5. 暗灰褐色粘質土 (地山シルト少し混)
6. 暗灰褐色粘質土 (炭少量混)
7. 灰褐色粘質土 (3~5cm大地山ブロック多く混)
8. 灰褐色粘質土 (地山シルト多く混)
9. 暗灰褐色粘質土 (炭・青灰色土少し混)
10. 暗灰褐色粘質土 (炭・2cm大地山ブロック混)
11. 地山シルトブロック (暗灰褐色粘質土少し混)
12. 暗灰褐色粘質土
13. 地山シルトブロック (暗灰褐色粘質土少し混)
14. 地山シルトブロック (暗灰褐色粘質土多く混)
15. 暗灰褐色粘質土 (地山シルトブロック・炭混)
16. 地山シルトブロック (暗灰褐色粘質土少し混)
17. 地山シルトブロック (わずかに暗灰褐色粘質土混)
18. 地山シルトブロック (暗灰褐色粘質土多く混)
19. 黄灰色粘質シルト (鉄分多)
20. 灰褐色粘質シルト
21. 暗灰色シルト (かなりしまりガチガチ)
22. 22より暗い暗灰色シルト (かなりしまりガチガチ)

地山

第139図 7号溝下部土層図 (1/50)

165図75)、砥石(第168図122・127)が出土。

出土土器(図版80、第140～144図)谷に堆積した遺物と十分に区別できなかったため、時期幅が広く前期～中期末までの遺構が含まれるが、下部からは前期に遡る遺構が主体であった。

1～27は主として溝下部から出土したもの。

1・2は壺肩部。1は肩部に2条の沈線を巡らし、その直下に3条1単位からなる重弧文を施す。2は壺胴部に1条の沈線を巡らし、その上に4条1単位からなる重弧文を配置。いずれも外面ミガキで、1は内面ナデ、2は内面下部ミガキ、上部ナデ。1は淡灰褐色、2外面は褐灰色、2内面は淡黄褐色。3は小形壺の口縁部～胴部破片。肩部に3条の沈線を巡らす。頸部は内傾し、口縁部は短いながら強く外反する。外面～頸部内面横ミガキで、胴部内面はナデ。暗灰褐色～暗褐色。4は壺底部。外面ナデ、内面剥離し、淡黄褐色。5は大形壺の口縁部～肩部破片。頸部は内傾し、口縁部は緩やかに外反して凹面をなした端部に至る。口縁外面には低いながら明瞭な段がある。肩部には1条の沈線を巡らす。外面～頸部内面横ミガキ、胴部内面板ナデで、淡黄褐色を呈す。

6～11は前期末以前の甕。6～8は口縁部が如意状に外反し端部に刻目を施す。6は先端のやや丸い工具により刻目を施文。外面は6ナデ、7板ナデ、8摩滅で、8口縁外面にはハケメ工具の静止痕を残す。6外面・7外面・8外面は暗褐色、6内面は灰黄褐色、7内面は褐黄色、8外面は淡黄褐色。7・8外面には煤、6・7内面にはコゲが付着する。9は口縁外面に粘土を貼付し拡張したもので、10も同様と思われるが口縁端部が剥離する。9は口縁端部に先端の丸い工具による深い刻目を施す。器表の残りが良く、内外板ナデ仕上げで、口縁外面は板状工具による横ナデの後、指押さえを施すことが確認できる。暗黄褐色。10は内外ハケメ仕上げで、口縁部付近はナデ。外面灰褐色、内面黄褐色。11は口縁部、胴部に断面三角形の刻目突帯を巡らしたものの。口縁下面、突帯下面には指頭圧痕を残す。外面ナデ、内面板ナデ仕上げで、外面灰褐色、内面淡黄褐色。

12は鋤先口縁の甕。胴上部外面に断面三角形突帯を巡らし、突帯部内面が大きく凹む外面縦ハケ、内面ナデで、褐黄色～明褐色。

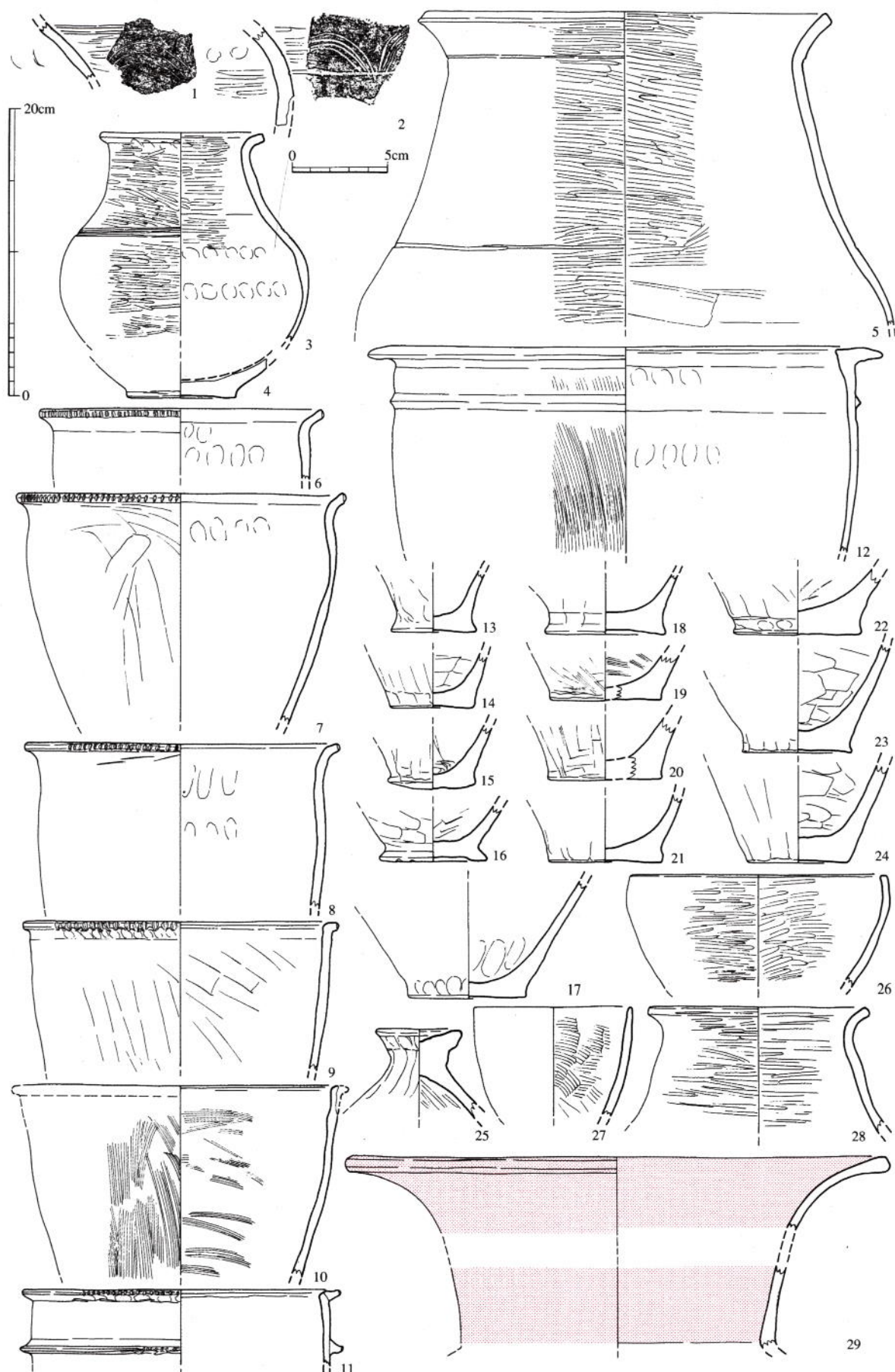
13～24は甕底部片。16は底部が高台状になり、13・18・22は外部外周の括れが明瞭。外面はナデのもの(13・17・21・23)と板ナデのもの(14～16・18～20・22・24)があり、内面も同様にナデのもの(13・15・17・18・20・21)と板ナデのもの(14・16・19・22～24)がある。16外面は茎のようなものの圧痕が残る。13・14外面・16外面・18外面・21は淡褐色～明褐色、14内面・19・23・24は淡黄褐色、15は褐黄色、16内面は黄灰褐色、17内面・18内面・22は灰褐色～淡灰褐色、20は褐灰色。13・15・24の外面は煤、18・21の内面はコゲが付着する。

25は蓋。頂部は凹み、器高は高いようである。外面～内面板ナデで、黄褐色～褐色。外面は二次的に火を受け変色、煤の付着が見られる。26・27は単口縁鉢。26は内外ミガキで、外面黄白褐色、内面明褐色。27は小形で深い器形。外面ナデ、内面粗いハケメ仕上げで、淡黄褐色。外面には煤が付着。

28～126は溝上部・谷堆積土出土遺物が混在する。

28は前期壺の口頸部。頸部は内傾し、口縁部が短く外反する。外面～内面横ミガキで、外面淡黄褐色、内面淡黄橙色。29・33・34は中期後半の広口壺口頸部。29は丹塗で、内外摩滅し、生地は淡橙褐色。33は内外摩滅し、丹塗は確認できない。橙褐色。34は外面丹塗で、内外摩滅のため調整不明。生地は淡褐色。30・31は中期後半の壺胴部～底部。30は外面丹塗で、無頸壺胴下部か。内外摩滅が進むが、外面胴下部にハケメ工具の稜が残る。生地は橙褐色。31は胴部に2条の突帯を巡らしたものの。外面ミガキを丁寧に施すが、突帯間はミガキを施さない。内面は随所に指頭圧痕が水平に巡るナデ仕上げ。外面黄褐色、内面明褐色を呈し、底部内面はコゲが付着。

32は後期前葉の複合口縁壺口縁部。頸部は外反が大きく、稜をなして反転し口縁部が立ち上がる。口縁端部はやや角張る。淡褐灰色。



第140図 7号溝出土土器実測図 (1) (2は1/3、他は1/4)

35～52は壺底部。35・36・40・41・43・44・46は外面ミガキで、43は底部外周にミガキに先行するハケメが残る。38・45・49は外面ナデであるが、38は底部外周にミガキ、45は底部外周に縦ハケが残る。39・45・48～52は外面ハケ、37・42・47は外面摩滅。内面は35・36・41・42がミガキ、43は板ナデ。37～40・44～52はナデで、48はナデに先立つハケメ工具痕が残る。35外面・52内面は灰黄褐色、35内面・37外面・38外面・42内面・43内面・46外面・47内面・48内面・50内面・51外面は褐色～淡褐色、36外面は白黄褐色、36内面は橙褐色、37内面は褐黄色、39・42外面・44は淡褐灰色、40は暗黄褐色、41内面・46内面・48外面・51内面・52外面は灰褐色～淡灰褐色、43外面は淡褐白色、45・47外面・49外面・50外面は淡黄褐色、49内面は暗褐色を呈す。44外面は煤が付着し、二次的に火を受け赤変する。40・44は内面にコゲが付着。

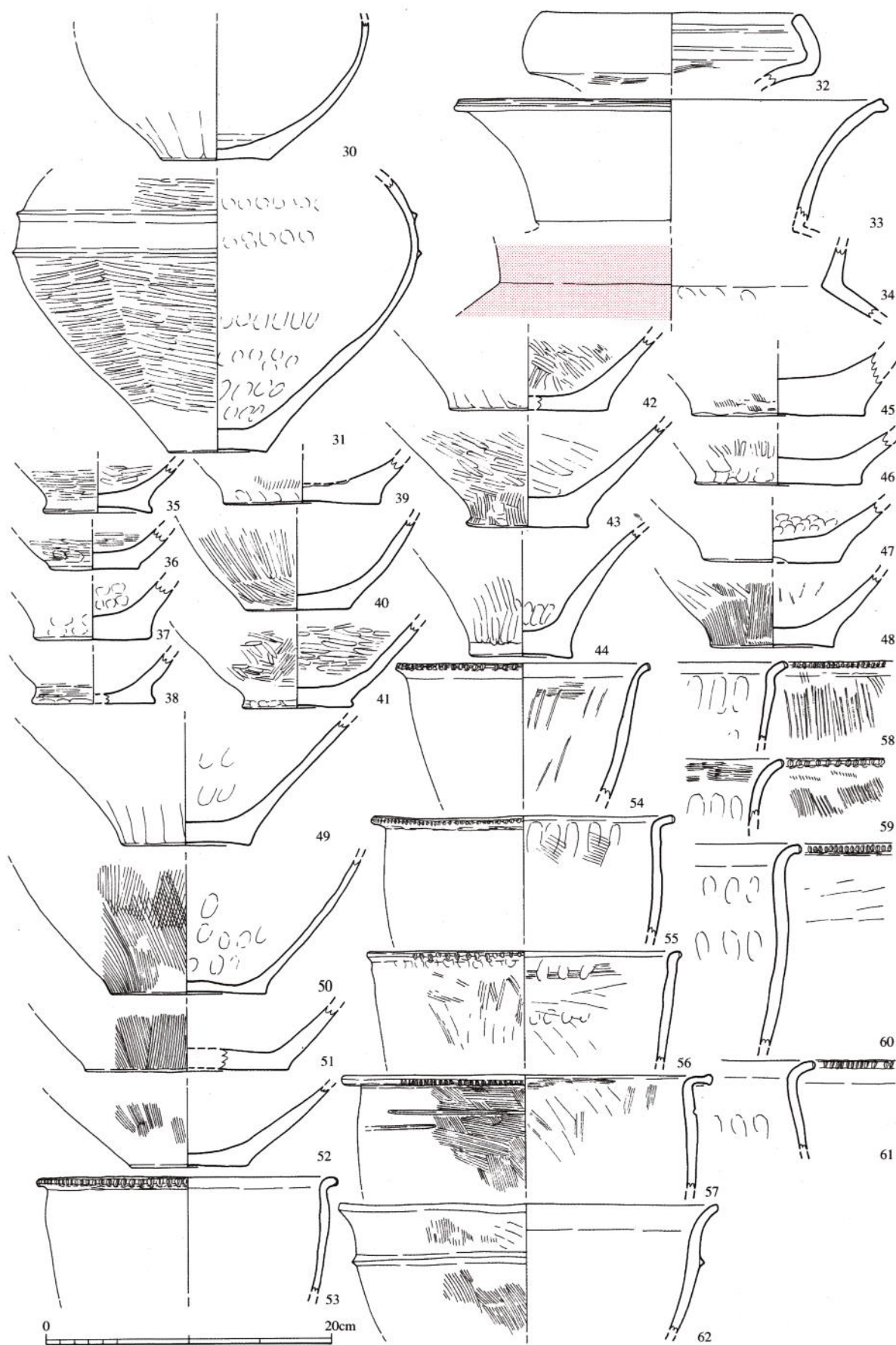
53～67は口縁部が如意状に外反するもので、61～67は胴部に突帯を巡らす。53～61は口縁端部に刻目を施文。53は短い口縁部を強く外反させ、端部には柔らかいうちに刻目を施文。54は小形の甕。55は口縁部の外面に整形時に生じた皺、溝が残る。56は口縁部を短く外反させ、端部に比較的、柔らかい段階で先端の丸い工具により深い刻目を施す。口縁外面には指頭圧痕が巡るが、その上に刻目の粘土が被さるため、指押さえ後刻目と分かる。57は口縁端部を上下につまみ上げ、端部にハケメ工具により、柔らかい段階で深い刻目を施す。胴部外面には深い沈線を巡らす、接合しない。58はかなり先端の鋭利な工具による刻目。61は小片で、傾き不安。62～64は口縁端部・突帯頂部とも刻目は施さないことは確実。これに対して、65は胴部突帯は剥離するが、口縁端部に先端が鋭利な工具で刻目を施文。66は口縁端部・突帯頂部とも鋭利な工具による刻みを施す。67は胴部に2条のハケメ工具による刻目突帯を巡らす、口縁端部は刻目を施文しない。外面は55・61・63・64・66ナデ、56・60板ナデ、57～59・62・65・67ハケメ、53・54は摩滅。67の外面ハケメは剥離個所の観察から突帯下面にも施されることが分かる。内面はナデ仕上げのものが多く、54～57は板ナデ痕が観察でき、56は指頭圧痕後板ナデと分かる。59は口縁内面ハケメ。53は暗褐灰色、54外面は灰褐色、54内面・55・56内面・60内面・61外面・66外面・67は褐色～淡褐色、57・61内面・64外面・66内面は淡黄褐色、58・60外面は暗褐色、62は淡橙色、63・65内面は褐灰色～淡褐灰色、64内面は淡黄褐色、65外面は淡褐黄色を呈す。55外面・62突帯下外面・63突帯下外面には煤が付着、62下部内面・63内面・66口縁上面にはコゲが付着。

68・69は口縁断面三角形のもの。68は口縁外面には刻目が無く、胴部外面に沈線を巡らす。外面ハケ、内面板ナデで、淡黄褐色を呈す。胴部外面には煤付着。69は口縁端部に先端の丸い工具で密に刻目を施す。内外ナデで、淡褐色を呈す。外面には煤付着。

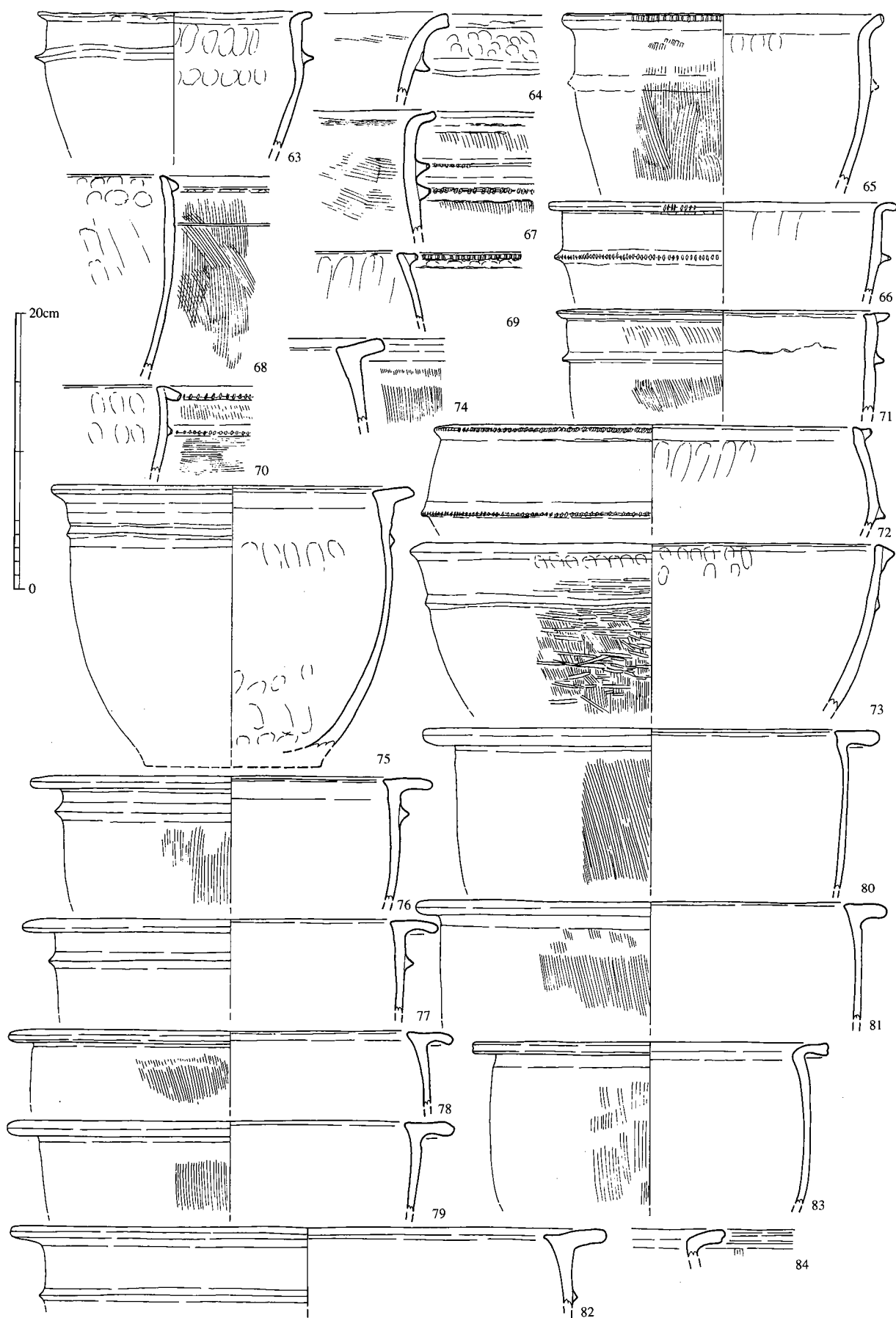
70～73は口縁を粘土貼付けにより拡張し、胴部に断面三角形突帯を巡らすもの。70は口縁外面が垂れ下がり、口縁端部及び突帯頂部に鋭利な工具で細い刻目を施す。外面縦ハケ、内面ナデで、淡褐色。外面突帯下には煤が付着。71は口縁端部、突帯頂部とも刻目が施文されない。口縁は内へ明瞭に突出し、胴部内面には水平に接合痕が残る。外面縦ハケ、内面ナデで褐色～淡褐灰色。72は胴部突帯付近で大きく屈曲し、口縁部内面に凹みの巡る点が特徴的。外面摩滅、内面ナデで、外面淡褐灰色、内面淡黄褐色。73は口縁端部及び胴部突帯には刻目は施されない。外面ハケ後ミガキ、内面ナデで淡灰褐色。

75～82は鋤先口縁甕。75～77・82は胴部外面に断面三角形突帯を巡らし、75は樽形の甕。外面縦ハケ、内面ナデのものが多く、75・77・82外面はナデ、79内面は摩滅。75外面・77外面・79・80・81は褐色～淡褐色、75内面は暗褐色、76は灰褐色～淡灰褐色、77内面は淡黄褐色、78外面は褐灰色、78内面は褐白色を呈す。80～82の外面は煤、82内面はコゲが付着。75は外面に煤が付着し、突帯より下が二次的に火を受け変色する。

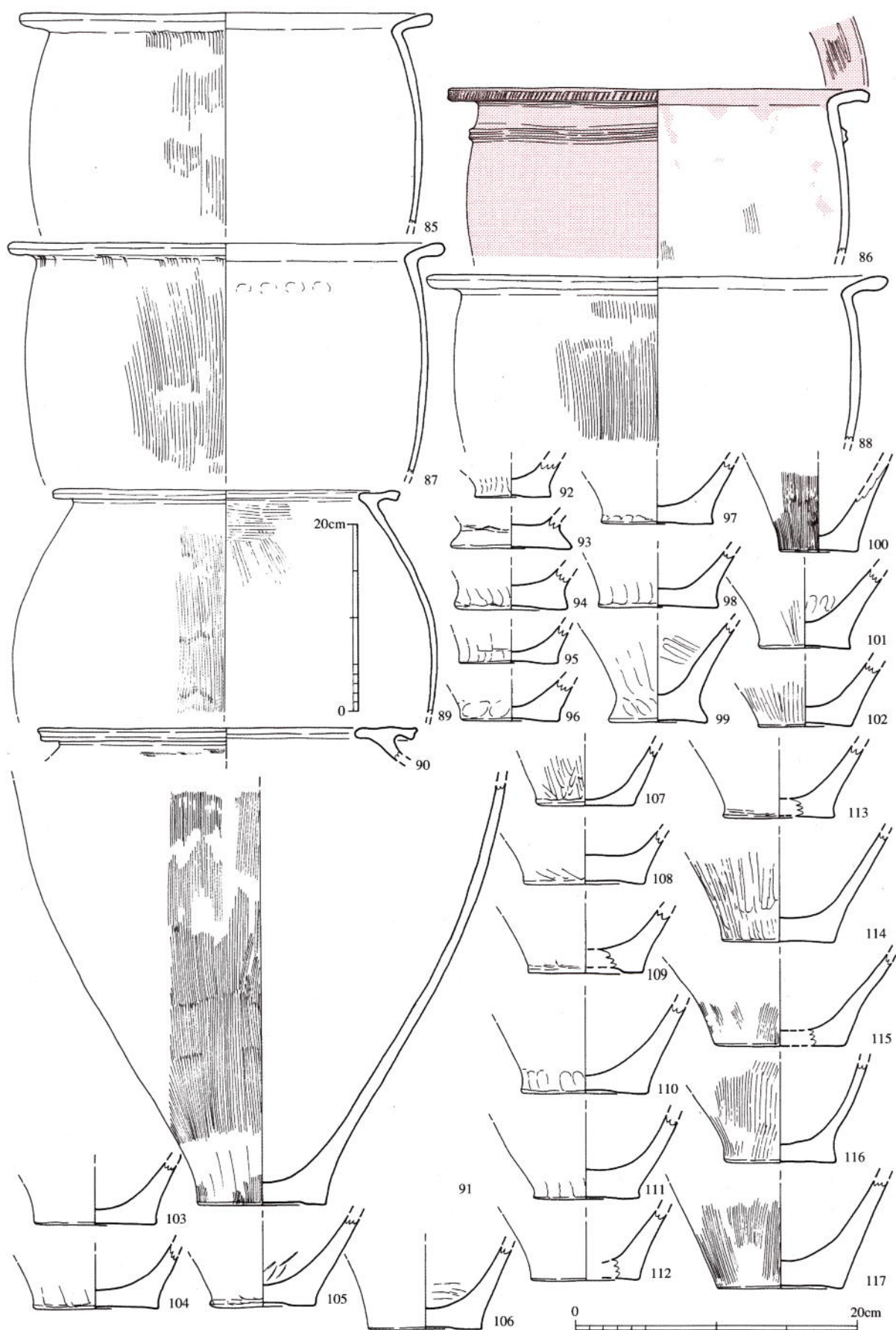
83～88は口縁部が外折するもの。86は丹塗で胴部外面に断面M字状突帯を巡らす。口縁端部は83・84が凹面をなし、85・87・88は丸みを帯び、86は角張った端部に刻目を施す。胴部外面はナデの86を除けば、他は縦ハケ。内面は85・87が摩滅のため調整不明であるが、他はナデ。83外面は橙



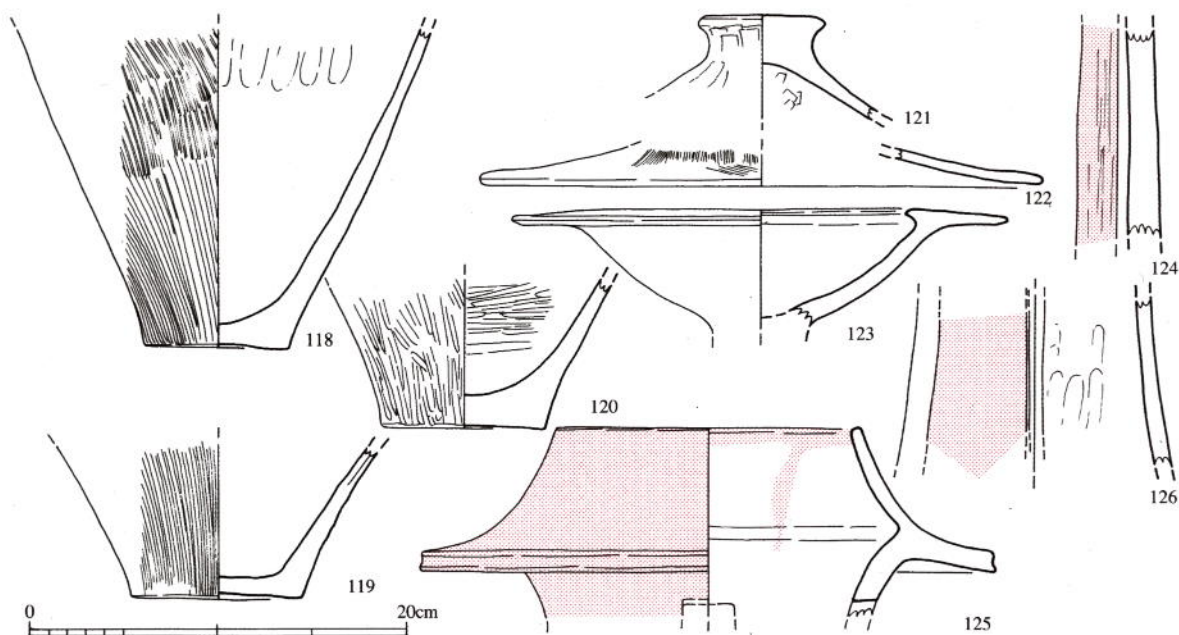
第141图 7号溝出土土器実測図(2)(1/4)



第142図 7号溝出土土器実測図(3)(1/4)



第143図 7号溝出土土器実測図(4)(89・90は1/6、他は1/4)



第144図 7号溝出土土器実測図(5)(1/4)

白褐色、83内面は淡橙褐色、84・88外面は淡褐色、85・87は黄褐色～淡黄褐色、86生地は白褐色、88内面は褐黄色を呈す。88は胴部外面に煤が付着。

89・90は鋤先口縁の大形甕。89は口縁上面が水平に外側へ伸び、内への突出は小さい。90は内外に突出し、外端部を上下に拡張する。89は胴部外面縦ハケ、胴上部内面縦ハケ後横ハケで、淡褐黄色。90は外面に一部横ハケが残るが、他はナデ仕上げで、淡褐色。

91は比較的大きな甕の胴下部～底部。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、下部外面に煤が付着。外面淡褐色、内面焼成不良のため暗灰色。

92～120は甕底部片。92～93・99・116は底部外周の括れが明瞭で、102・105・108～110は微かな上げ底状をなす。外面はナデのもの(92・94・97・98・109・110・113)、板ナデのもの(95・99・101・104・108)、ハケメのもの(100・102・115～119)、ミガキのもの(107・114・120)があり、96・103・105・106・111・112は摩滅のため調整不明。93は外面粗いミガキ風の調整を施す。99は底部外周に指頭圧痕を残す。内面はナデのものが多く、99・106は板ナデ、120はミガキ、96・100は摩滅。105は内面に板状工具の痕跡が残る。92・93内面・94内面・95・102外面・109・118外面は褐灰色～淡褐灰色、93外面・101外面・106・107外面・112・115外面・116・117・118内面は褐色～淡褐色、94外面・100・102内面・103内面・104内面・105内面・110内面・114内面・119内面は淡黄褐色、97外面・98外面・101内面・103外面・107内面・110外面・111内面・114外面・119外面・120外面は灰褐色～淡灰褐色、97内面・99は橙褐色、98内面は淡黄灰褐色、104外面・111外面は淡褐白色、105外面は暗褐灰色、108は淡黄白褐色、115内面は灰色、120内面は褐黄色を呈す。99は胎土に黒色針状の雲母片を多く含む。95外面・106外面・113底部外周・118上部外面・119外面には煤、110・112・114・116にはコゲが付着。96・102・106・107・111・117は二次加熱が顕著で器表が赤変する。

121は蓋頂部。外面板ナデ、内面ナデで、外面淡褐白色、内面淡褐黄色を呈す。122は蓋裾部。外面縦ハケ、内面摩滅し、淡褐色。

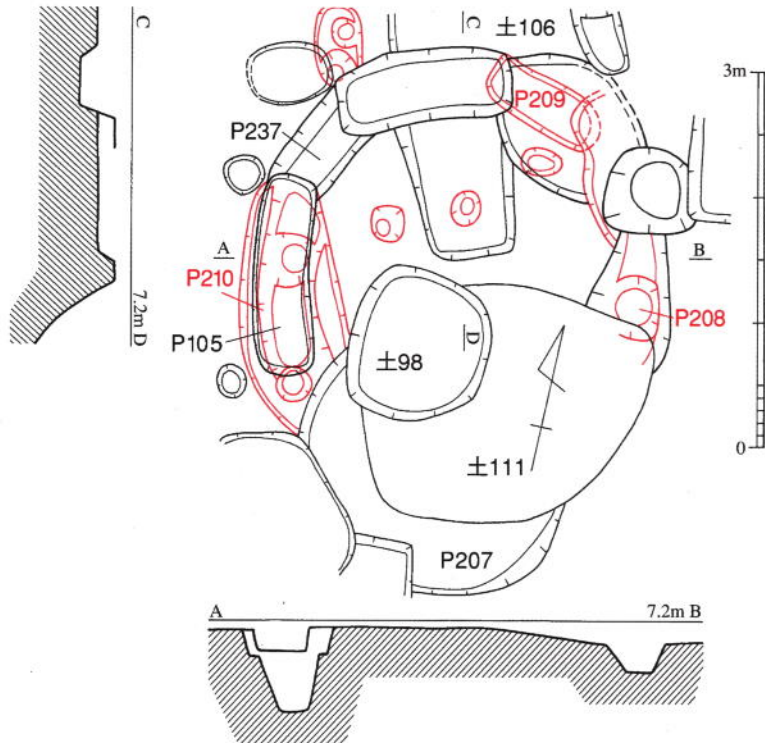
123は内外摩滅し丹塗が確認されない高杯杯部。口縁部は長く外方に伸び、内へ明瞭に突出する。外面淡黄橙色、内面橙褐色。124は丹塗高杯脚柱部。外面縦ミガキ、内面ナデで、生地は淡灰黄褐色。

125は丹塗筒形器台口縁部～鐙部片。鐙部は外方に長く延び、残存部下端に透かしがわずかに残

る。生地は淡褐色。126は丹塗筒形器台の筒部破片。生地は淡橙褐色。

8号溝（図版、第図）

G区に位置する円形周溝である。調査時にはいくつかのピットの切合いと捉えていたものを、図面整理中にその存在に気がついたため、111号土坑に先行するように図化し、切合いを誤認した可能性が高いなど、調査が不十分である。現状では溝の外側で直径3.5m、内側で直径2.2mのほぼ円形を呈す。溝の幅はピットの切合いと見做すが、発掘したため不正確であるが、幅0.5m、深さ20cmを測る。図示できる遺物はない。



第145図 8号溝実測図（1/60）

（4）ピットとその出土土器

調査区はほぼ全面からピットが検出された。柱穴状のものもあれば、平面形に不安があったり、出土遺物の少ない土坑状の掘り込みもピットと数えた場合がある。ピットの一部分が掘立柱建物を構成した可能性もあるが、遺構の切合いが密であるため、抽出できなかった。

ピット出土土器（図版80・81、第146～151図）

1・2はP2出土。1は底部片で、外面縦ハケ、内面ナデ。淡褐色。2は鼓形器台で天地は不安。外面縦ハケ、内面ナデで灰褐色。

3・4はP8出土。3は前期壺肩部片で、肩部に1条沈線を巡らし、外面ミガキ、内面摩滅。褐色。4は口縁部外面に粘土を貼付け拡張させ、刻目を施文した甕。外面ナデ、内面摩滅で、暗黄灰褐色。外面は煤が付着。

5はP10出土の蓋裾部。内外摩滅し、灰白褐色。

6～8はP19出土。6・7は鋤先口縁甕で、ともに内外摩滅し、6は褐白色、7は外面灰白褐色、内面淡黄褐色。8は甕底部で、外面縦ハケ、内面ナデ。淡灰黄褐色で、見込みにコゲ付着。

9・10はP21出土。9は鋤先口縁甕で外面縦ハケ、内面ナデ。淡褐色。10は鼓形器台で、外面摩滅、内面上部ナデ上げ、下部横ハケ。黄白褐色。

12はP29出土の鋤先口縁甕。口縁が薄く、内への突出は明瞭。内外摩滅し、白褐色。

13はP31出土の鼓形器台。内外摩滅し、黄白褐色。

14・15はP33出土蓋頂部。いずれも頂部がわずかに凹み、14は外面縦ハケ、内面ナデで、淡褐色。15は外面にミガキが微かに残り、他はナデ仕上げ。黄白褐色。

16～20はP34出土。16は大形壺で、頸部は直立し、口縁部が短く外反。端部は強いナデにより2条の凹線が巡り、上端・下端に刻目を施す。内外ミガキ仕上げで黄褐白色。17は中形壺。頸部は緩

やかに外反し、角張った端部に至る。胴部外面には3条の沈線を巡らす。外面～頸部内面ミガキ、胴部内面ナデ。淡褐色。18は如意状口縁で、胴部に刻目突帯を巡らす。胴部外面縦ハケ、口縁内外ナデ、胴部内面ナデ。外面淡黄褐色、内面淡褐灰色で、突帯より下の胴部外面には煤、胴部内面にはコゲが付着。19は外面縦ハケ、内面ナデの甕底部。灰褐色。20は蓋頂部で外面ハケ、内面板ナデ。橙褐色を呈する。

21はP 39出土「く」の字状口縁甕。外面～口縁内面ハケ、胴部内面板ナデ。外面暗褐色、内面黄灰褐色を呈する。

22・23はP 51出土。22は鋤先状の壺口縁部。口縁上面は水平で端部は角張る。内外摩滅し、淡灰褐色。23は甕底部で、外面ハケメ、内面ナデ。外面褐色、内面暗褐灰色で、外面に煤付着。

24はP 44出土の壺底部。外面板ナデ、内面摩滅し、暗灰褐色。外面には煤付着。

25はP 62出土の中形壺底部。内外ミガキ仕上げであるが、摩滅が進む。明褐色。

26はP 63出土の前期壺肩部。肩部には2条の沈線を巡らし、その上に2条1単位の縦方向直線文を施文。外面ミガキ、内面板ナデで、淡灰褐色～淡褐色。

27～29はP 64出土。27・28は鋤先口縁甕。27は外面縦ハケ、内面摩滅し、頸部内面には指ナデ状の横長の凹みが見える。淡褐色を呈すが、二次的に火を受け、外面の一部が赤変。28は胴部外面に断面三角形突帯を貼付。外面ナデ、内面摩滅し、外面褐色、内面淡黄褐色。29は前期壺肩部。肩部には3条の沈線を巡らし、その下に3条の沈線を1単位とする重弧文を施文。外面ミガキ、内面ナデで黄褐色。

30はP 71出土の縄文時代晩期御領式浅鉢口縁部。口縁部は直立し、外面に2条の凹線を巡らす。口縁部と胴部の屈曲部に指押さえによる凹文を施文。暗褐色。

31はP 76出土の大形甕。胴最大径部分付近に2条の断面台形突帯を巡らし、その下に焼成後穿孔が見られる。外面ナデ、内面摩滅で褐色～淡黄褐色。

32～34はP 86出土。33は口縁部が如意状に外反し、胴部外面に沈線。外面縦ハケ、内面ナデ。外面淡褐色、内面淡灰黄褐色で、外面には煤付着。32・34は上げ底状の甕底部。34底部外面は接合面から剥離する。いずれも外面縦ハケで、32は内面摩滅。34は内面板ナデ。32は淡黄褐色で、内面にはコゲ付着。33は外面淡灰褐色、内面灰黄褐色。

35はP 100出土の壺底部。内外摩滅し、褐色～黄褐色。外面は二次的に火を受け赤変。

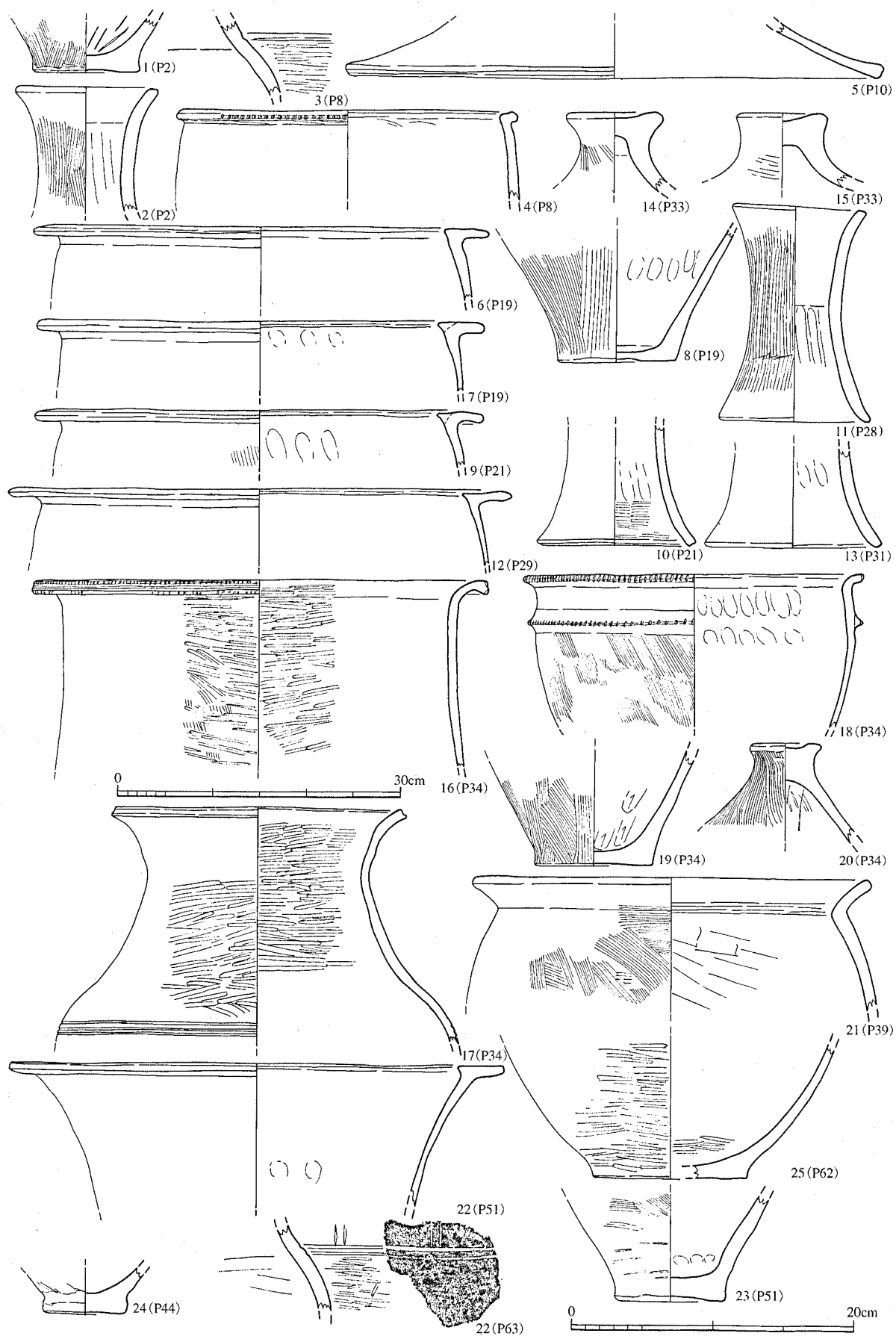
36はP 102出土の中期初頭の壺肩部。頸部はわずかに内傾し、肩部外面に断面三角形突帯を貼付。突帯下には2条の沈線を間隔を空けて巡らし、その間に二枚貝腹縁を刺突して斜行線を充填することにより有軸羽状文をする。胴部外面ナデ、頸部外面縦ハケ、内面ナデで、褐色～褐灰色。

37はP 105出土の大形壺口縁部。頸部内外に断面三角形突帯を貼付し、口縁部上端に細い工具による刻目。外面摩滅するがミガキの可能性が高い。内面はナデ。外面淡褐白色、内面淡黄褐色。

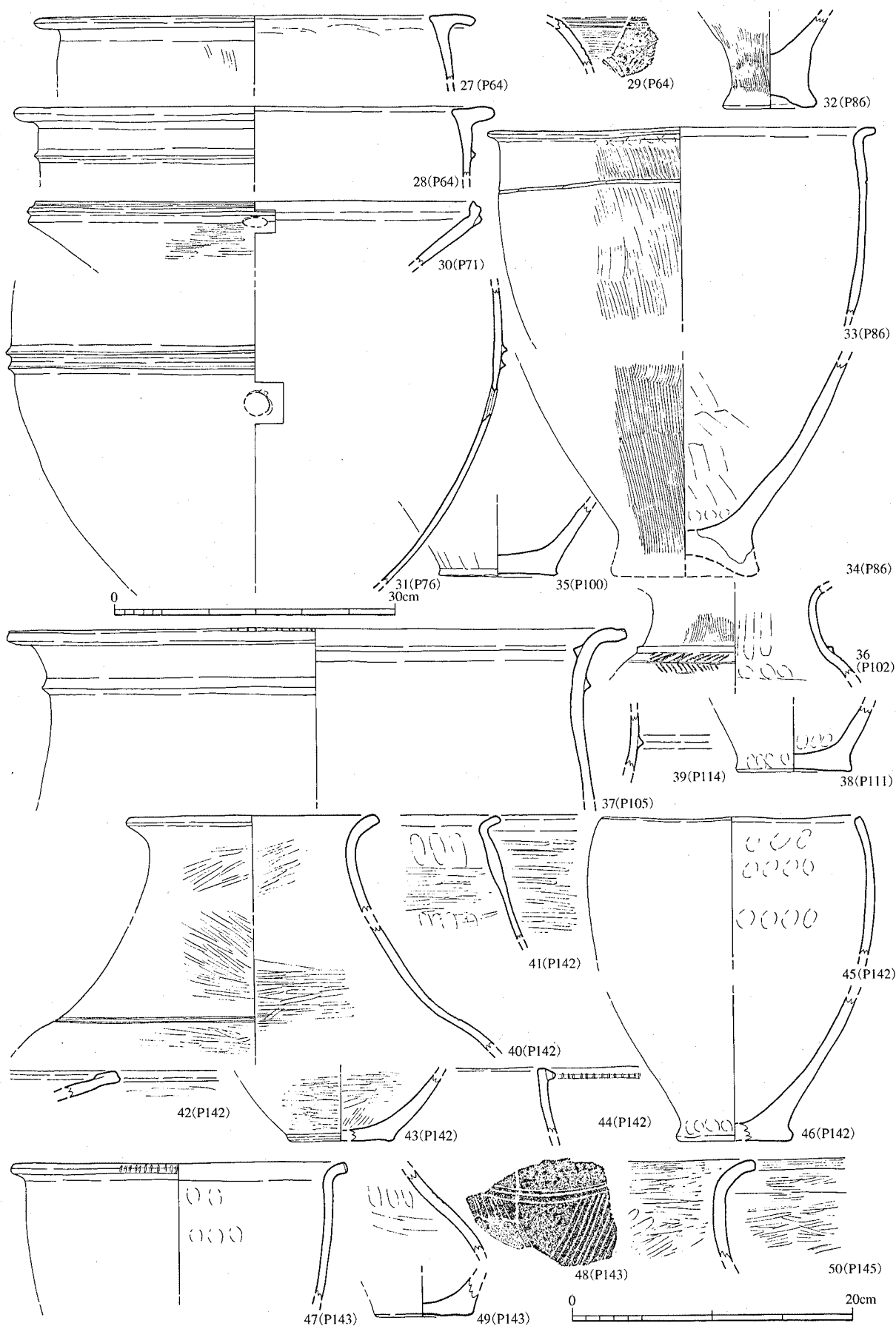
38は甕底部。外面摩滅、内面ナデで淡黄褐色。外面は二次的に火を受け赤片。

39はP 114出土の断面三角形突帯を貼付した壺胴部片。外面ナデ、内面摩滅で、淡黄褐色。外面に煤が付着する。

40～46はP 142出土。40は頸部が大きく括れる壺口縁部～肩部。肩部には2条の沈線を施文。内外をミガキ仕上げし、淡灰褐色。41は壺口縁部で、頸部はすぼまり、口縁部は短く外傾。内外ミガキ仕上げであるが、水平に指頭圧痕が残る。外面暗褐色、内面灰黄褐色。42は大きく開いた口縁部で、内面に粘土を貼付し肥厚させることから、壺と推測される。外面板ナデ、内面ナデで、暗褐色～褐色。43は内外ミガキの壺底部。淡灰褐色。45は口縁部が内傾するもので鉢か。内外摩滅するが、内面には微かな指頭圧痕が残る。淡褐色。胎土に針状の黒雲母が目立つ。46は甕底部。内外ナデで、淡褐色。45・46内面はコゲ付着。



第146図 ピット出土土器実測図(1) (16は1/6、他は1/4)



第147図 ピット出土土器実測図（2）（31・37は1／6、他は1／4）

47～49はP143出土。47は如意状口縁甕で、口縁端部に刻目。刻目は摩滅するため、復元的に図示した。調整不明で、淡褐色～淡褐灰色。48は坪肩部片。肩部に3条の沈線を巡らし、多条の斜行沈線からなる文様をその下に配置する。肩部沈線の底には赤色顔料が付着しているの、文様部を赤彩した可能性がある。外面ミガキ、内面板ナデで、褐色。49は底部片。内外摩滅し、外面褐色、内面淡黄褐色。

50はP145出土の壺口縁部。口縁端部を含め全面にミガキを施し、褐色。

51・52はP152出土。51は口縁断面三角形で、胴部外面に刻目突帯を貼付した甕。口縁端部・突帯頂部には刻目を施文するが、摩滅するため復元的に図示。内外摩滅し、外面淡灰褐色、内面淡褐色。52は内外ナデのミニチュア鉢。白褐色。

53はP156出土の口縁断面三角形、胴部外面突帯貼付の甕。内外摩滅し、口縁端部・突帯頂部に刻目を施文したか確認できない。淡黄白褐色を呈し、外面は二次的に火を受け黒変。

54はP157出土の甕底部。外面縦ハケ、内面ナデで灰黄褐色～褐色。外面上部に煤、内面下部にコゲが付着する。

55はP158出土の甕。如意状口縁で、胴上部外面に断面三角形突帯を巡らす。外面～口縁部内面ハケ、胴部内面ナデで、褐色を呈す。

56～63はP162出土。56～59は如意状口縁の甕で、いずれも端部に刻目施文。58は先端の丸い工具、59は先端の鋭い工具により刻目を施文。56は内外摩滅するが、他はナデ仕上げで、57外面には板ナデ痕を残す。56・58内面は白褐色、57外面は暗褐色、57内面は淡黄褐色、58外面は化粧土のためか橙褐色、59外面は淡褐色、59内面は淡橙褐色。59外面には煤が付着。60は甕胴下部で、61は底部片。60は内外ナデ仕上げで、外面灰褐色、内面褐色。60外面には煤の付着、二次加熱による変色が顕著。61は内外摩滅で橙褐色。62・63は高杯杯部と脚部の接合部片。62は内外摩滅で淡褐色。63は括れ部外面に断面三角形突帯を貼付。杯部内外ミガキを施し、脚部外面摩滅、脚部内面ナデ。褐黄白色。

64はP163出土の甕底部。内外ナデで、外面褐色、内面淡黄白褐色。

65は中央を棒状工具で穿孔した土製支脚。内外ナデ仕上げで褐黄色。胎土にクサリ礫を含む。

66はP179出土の鋤先状の甕口縁部。内外摩滅し、淡白褐色。

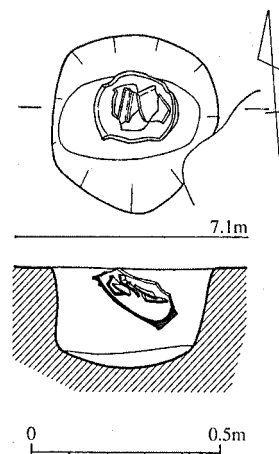
67・68はP180出土。67は広口壺鋤先口縁。調整不明で、淡黄褐色～淡灰褐色。68は外面に断面三角形突帯を貼付した甕口縁部。内外ナデで、外面褐色、内面暗褐灰色。

69～71はP181出土。69・70は甕口縁。69は外面に三角形突帯を貼付。外面ナデ、内面摩滅で、明褐色。70は外面ハケ、内面ナデで口縁部内面に接合痕を残す。褐色で外面に煤付着。71は甕底部で外面縦ハケ、内面ナデ。外面褐色、内面淡黄褐色で、外面には煤、内面見込みにコゲ付着。

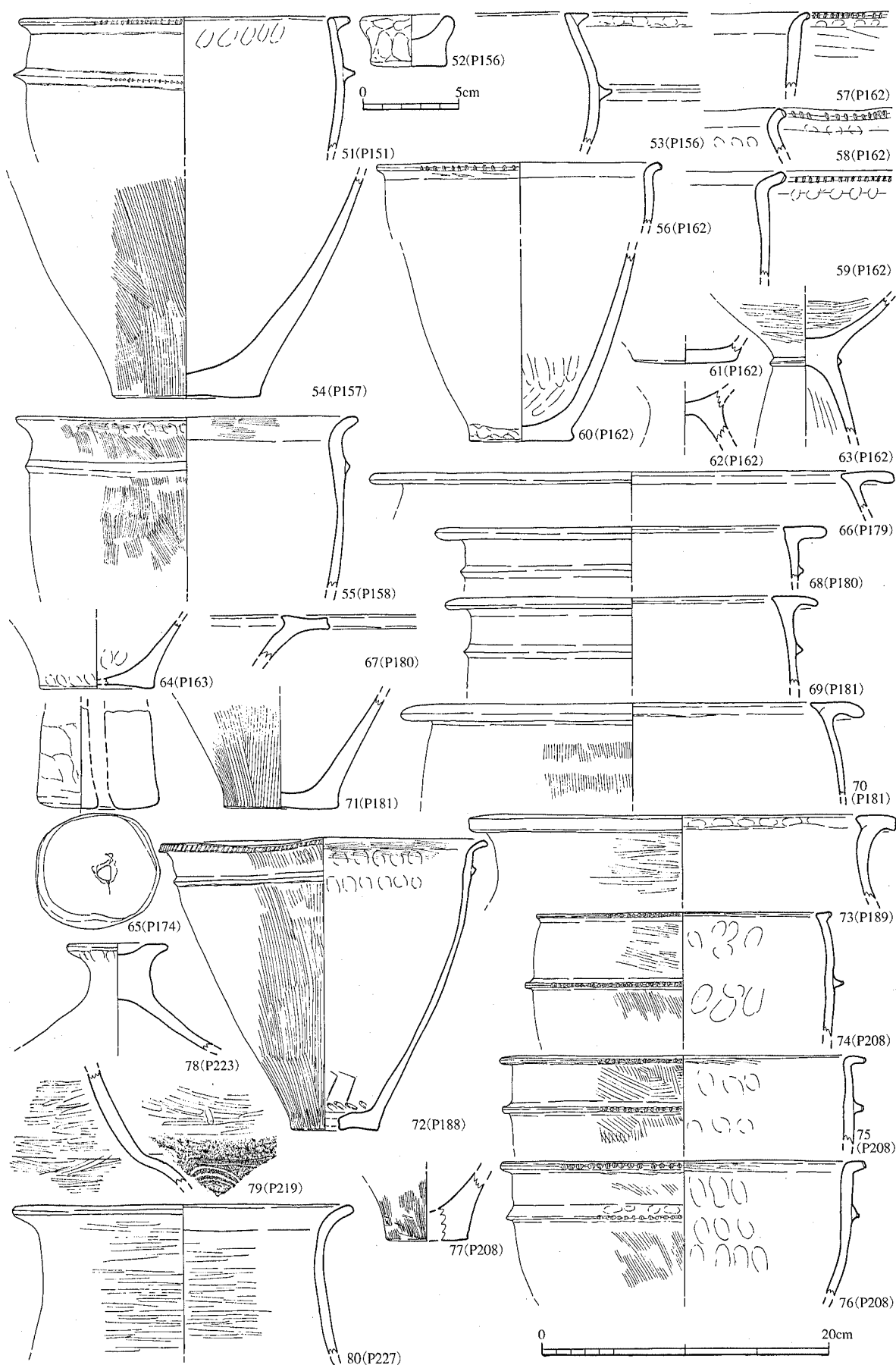
72はP188出土のほぼ完形に復元できる甕。甕はE区に位置する0.45m程の略円形を呈しピット中から、主軸を東西に向け斜めに埋置したかのような状態で出土した（図版52、第148図）。ピットの深さは検出面から26cmを測る。甕は口縁部如意状で胴部外面に断面三角形突帯を巡らす。口縁端部には刻目を施すが、突帯頂部の刻目の有無は摩滅のため不明。外面～口縁内面ハケ、内面ナデ。刻目施文時に張り出した粘土がハケメに被さるため、ハケメ後刻目の工程が確認できる。底部には焼成後穿孔を施す。灰褐色～褐灰色で、外面には煤、胴上部内面には帯状にコゲが付着。

73はP189東外包含層出土の壺口縁部。口縁上面に厚く粘土を貼付し、鋤先口縁とする。外面ミガキ、内面摩滅で淡黄褐色～淡褐色。

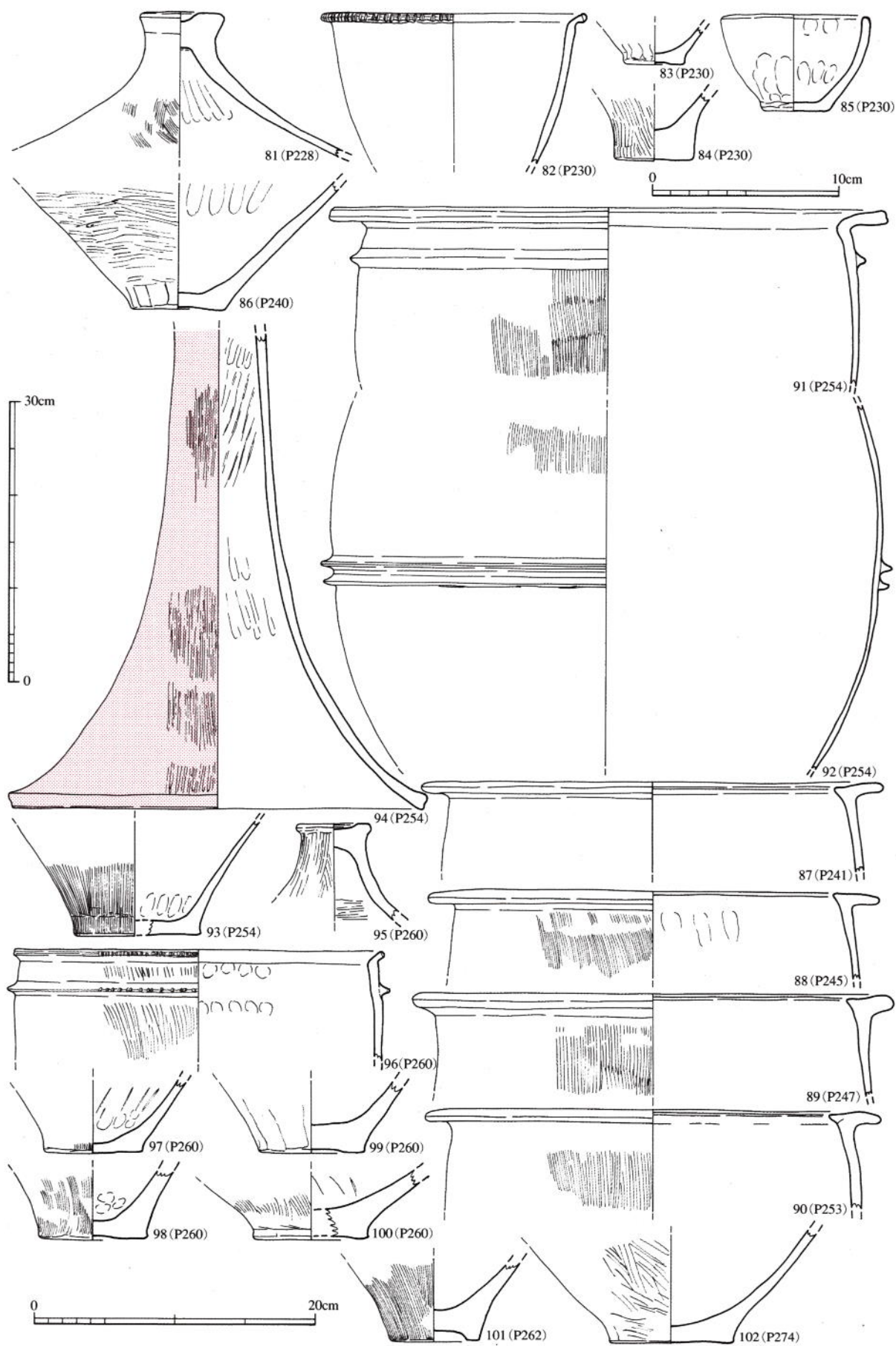
74～77はP208出土。74～76は甕。74は口縁部断面三角形で、胴部外面に刻目突帯を巡らす。口縁



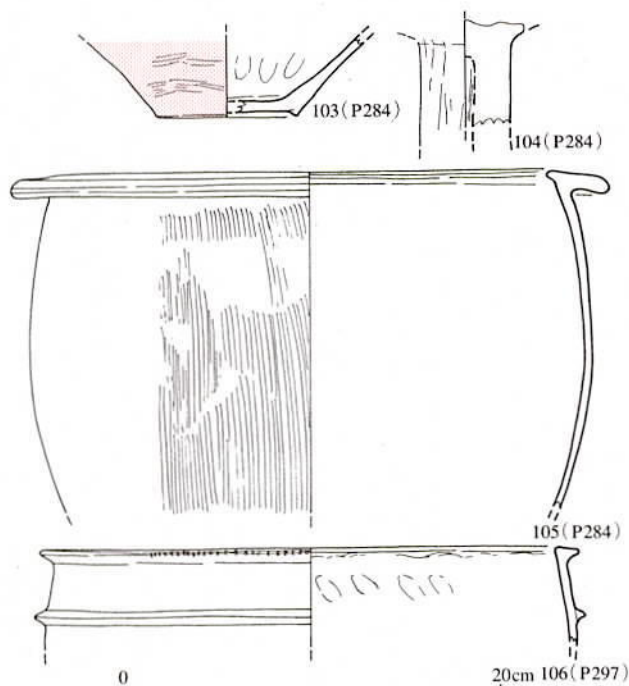
第148図 P188実測図
(1/20)



第149図 ピット出土土器実測図（3）（52は1／3、他は1／4）



第150図 ピット出土土器実測図(4) (83~85は1/3、92・94は1/6、他は1/4)



第151図 ピット出土土器実測図(5)(1/4)

端部・突帯頂部の刻目は太く、密である。外面ハケ、内面ナデ。75・76は外反した口縁端部に刻目を施文し、胴部外面にも刻目突帯を貼付。ともに外面～口縁上面ハケ、内面ナデ。74外面・75内面・76内面は淡褐色、75外面は灰褐色、74内面・76外面は黄褐色。76外面には煤付着。77は底の厚い甕底部。外面ハケ、内面ナデで黄褐色を呈す。

78はP223出土の蓋頂部。頂部外面はわずかに凹み、内外調整不明。淡黄褐色。

79はP219出土の前期の壺肩部。肩部に2条の沈線を巡らし、その直下に3条沈線1単位とする重弧文を配置。内外ミガキで、明褐色。

80はP227出土の前期壺口縁部。口縁部は緩やかに外反する。内外ミガキで、淡黄褐色。

81はP228出土の蓋である。頂部は厚く、

上面が凹む。外面ハケ、内面ナデで仕上げ、淡黄褐色を呈する。

82～85はP230出土。82は甕で口縁部は如意状に外反し、端部に先端の鋭利な工具で深い刻目を施文。摩滅のため調整不明で、褐灰色を呈す。外面煤、内面コゲが全面に付着。83は小形壺底部で内外ナデ仕上げ。黄褐色。84は甕底部で外面縦ハケ、内面ナデ。外面灰褐色、内面暗褐色。85は内外ナデの小形鉢。外面灰褐色、内面淡褐色。

86はP240出土の壺底部。外面ミガキ、内面ナデ。外面灰褐色、内面淡黄灰褐色。

87はP241出土の甕口縁部。内外摩滅し、淡黄褐色。内面は二次的に火を受け赤変。

88はP245出土の甕口縁部。外面縦ハケ、内面ナデで、淡黄褐色～淡灰褐色。

89はP247出土の甕口縁部。外面縦ハケ、内面摩滅で、淡褐色。

90はP250出土の甕口縁部。外面縦ハケ、内面ナデで、淡褐色。口縁内面には接合痕を残す。外面は二次的に火を受け赤変。

91～94はP254出土。91は口縁が外折した甕。大型品で胴部外面に断面三角形突帯を巡らす。外面縦ハケ、内面摩滅で淡黄褐色。92は胴部の張る大形甕で、胴部中央に高い突帯を2条巡らす。内外摩滅するが、外面にハケメが残る。淡褐色。93は外面縦ハケ、内面調整不明の甕底部。淡灰黄褐色。94は丹塗筒形器台の筒部～裾部で、透かしは施されない。外面縦ミガキ、内面上部絞り痕、下部ナデ。生地は淡褐色。

95～100はP260出土。95は蓋頂部か。外面縦ハケ、内面ミガキで、外面黄白褐色、内面淡褐色。96は甕胴上部片。如意状に短く外反した口縁端部に刻目を施文し、胴部外面にも刻目突帯を巡らす。口縁端部の刻目は浅く雑である。突帯頂部の刻みは先端の丸い工具による。97～99は甕底部、100は壺底部。97は内外摩滅、99は外面板ナデ、内面ナデ、98・100は外面ハケメ、内面ナデ。97・99内面は淡褐色、98外面・100は淡黄褐色、98内面は淡黄灰褐色、99外面は黄白褐色。

101はP262出土甕底部。上げ底状で外面縦ハケ、内面摩滅。淡黄褐色で、外面は二次的に火を受け桃色に変色。

102はP 274出土壺底部。外面ミガキ、内面摩滅で、淡黄褐色。内面は焼成不良で黒変。

103～105はP 284出土。103は丹塗壺底部。外面ミガキ、内面ナデ。底部はケズリにより上げ底状。生地は橙褐色。104は高杯脚上部。外面は摩滅し、丹塗は確認できない。生地は淡橙褐色。105は甕胴上部。口縁上面はやや外傾し、内へわずかに突出。外面縦ハケ、内面ナデで、黄灰褐色。

106はP 297出土。口縁部断面三角形、胴部外面断面三角形突帯を巡らす。口縁端部は刻目を施すが、突帯頂部は摩滅のため確認できず。内外摩滅で、白黄褐色。

(5) 遺構面と包含層の出土土器

ここでは遺構検出面とその直上の包含層から出土した土器を、地区別に報告する事にしたい。(第152～161図、図版81・82)

1～10はA区出土土器で、内外摩滅のことが多い。1は淡黄褐色の壺底部。2は無頸壺口縁部。口縁部上面は水平で、穿孔を施す。褐色を呈すが、外面は火を受け黒変。3・4は鋤先口縁甕で、3は外面褐色、内面黄白褐色、4は黄白褐色。5は鋤先口縁の鉢か。口縁部は内への突出が強い。黄褐色を呈し、胎土に黒色針状の雲母が目立つ。6は大形甕口縁部。内外褐黄色。7は口縁部が「く」の字に外反する甕。胴下部外面にハケメが残る。褐色～褐黄色。8は外面淡褐色、内面黄褐色の壺底部。9は丹塗の高杯口縁部か。淡褐色～橙褐色。10は底径3.5cmの小形土器底部。内外ナデ仕上げで、褐灰色。

11～61はB区出土土器で、11～26は包含層中から集中して出土した。11は中期初頭以前の壺であるが、他は中期後半を中心とする。11は外面ハケ後ナデ、内面ミガキで灰褐色。12・13は壺口縁部。12は口縁内面突出部が剥離するが、鋤先口縁をなすと考えられる。内外摩滅し、黄灰褐色。13は鋤先状の広口壺口縁部で内外ナデ。灰褐色～褐灰色。14は広口壺肩部。内外摩滅し、橙褐色。

15～23は鋤先口縁甕である。15・18は胴外面に断面三角形突帯を巡らし、22は頸部の括れが強い。15は口縁内面に接合痕が残り、17は口縁内面の凹みが特徴的である。摩滅のため調整不明のことが多いが、15・21・22は外面ナデ、17は外面ハケメ。15外面は褐白色、15内面・20・21外面は淡黄褐色、16・19内面は淡黄白褐色、17外面・19外面・22外面は淡灰褐色、17内面・22内面・23外面は淡褐色、18外面は褐黄色、18内面は灰黄褐色、21内面・23内面は赤褐色。20は外面が二次的に火を受け赤色・褐色に変色する。24は甕底部。外面縦ハケ、内面ナデで褐色を呈す。外面に煤、内面見込みにコゲが付着する。

25は丹塗高杯口縁部。鋤先口縁を無し、内外摩滅。生地は褐色～褐灰色。26は鼓形器台口縁部。外面縦ハケ、内面摩滅で、淡黄褐色。

27～31は中期初頭以前の壺。27は小形壺口縁部。口縁部は短く外反し、口縁直下、頸部にそれぞれ2条の沈線を巡らす。外面ミガキ、内面ナデ。外面暗褐色、内面褐黄色を呈し、外面は暗い発色を意図して焼成した可能性がある。28は頸部に2条、肩部に3条、胴部に2条の沈線を巡らし、肩部と胴部沈線の間に3条の沈線を1単位とする重弧文を施文。外面摩滅するがミガキが残り、内面はナデ。29は28と同様の文様構成。外面摩滅、内面ナデ。28・29とも外面暗褐色、内面灰黄褐色。30は肩部片で、沈線により無軸羽状文を施文。内外摩滅し、橙褐色。31は肩部に4条の沈線を巡らし、その下に1条の沈線による連弧文を巡らす。外面ミガキ、内面摩滅で、黄褐色～灰黄褐色。

32は三角突帯を貼付した壺肩部。内外摩滅し、外面黄褐色、内面淡灰褐色。33は断面台形突帯を貼付した壺胴部片。内外摩滅し、外面黄褐色、内面淡灰褐色。34は口縁部が水平に外折した小形無頸壺。内外摩滅し、淡褐色。

35～43は壺底部。35は底部外面に接合痕が残り、48は上げ底。39・41は外面丹塗。内外摩滅するものが多いが、37は外面ナデ、40は内外ナデ、42は外面ハケメ、内面ナデ、43は内面ナデ。36・39

～43の内面には指頭圧痕が微かに残る。35・38・39生地・42外面は淡黄褐色、36は赤褐色、37は黄灰褐色、40外面は淡灰褐色、40内面・41生地・43は淡褐色、42内面は橙褐色、42外面は煤、内面はコゲが付着し、43内面は焼成不良のため灰黒色に変色。36は胎土にクサリ礫を含み特徴的。

44～46は中期初頭以前の甕。44は口縁部が如意状に外反し、端部に刻目を施文。内外摩滅するが、外面下部に板ナデ痕残る。内外暗褐色。45は口縁部が如意状に外反し、胴部に断面三角形突帯巡らす。口縁端部・突帯頂部の刻目の有無は摩滅のため不明。外面縦ハケ、内面ナデ。外面黄灰褐色、内面褐灰色で、突帯より下には煤が付着。46は口縁端部を外側につまみ出し、胴屈曲部に高い突帯を貼付した甕。口縁端部外面・突帯頂部に細い刻目を施す。内外ナデで、外面黄褐色、内面褐色。突帯下の外面には煤が付着。

47・49～51は鋤先口縁甕。47・50は胴部外面に断面三角形突帯を貼付し、ともに内外摩滅。49は丹塗甕で胴部外面に断面M字状突帯を貼付。口縁端部外面に先端の鋭利な工具による細い刻目、突帯上の外面には細い逆V字型のミガキ暗文を施文。外面ミガキ、内面摩滅。51は内外摩滅。47外面は淡褐色、47内面は淡灰褐色、49生地・51は淡黄褐色、50外面は褐灰色、50内面は灰黄褐色。

48は外折口縁の甕。外面ハケメ、内面ナデで、外面褐色、内面褐赤色。胎土に針状の黒雲母を多く含む。52は頸部の括れが強い大形甕。内外摩滅し、淡黄褐色。

53～59は甕底部。54・55は底部外面に凹みが巡り、58はやや上げ底。摩滅の進むものが多いが、54は内外ナデ、55外面は縦ハケ、57は外面板ナデ、内面指頭圧痕、58は外面縦ハケ、内面ナデ、59は外面縦ハケ。53外面・54外面・56・57は淡黄褐色、53外面・54内面は暗褐灰色、55外面・58外面・59は淡褐色、55内面・58内面は黄灰褐色。

60は無頸壺蓋。丹塗の可能性もあるが、摩滅のため確認できない。淡褐色。61は直口の鉢。内外摩滅で外面淡褐色、内面淡灰黄褐色。62は鼓形器台。外面縦ハケ、内面摩滅するが横ハケがわずかに残る。63は撮み状の土製品。内外ナデで把手のような形状。淡褐色。

64～83はC区出土。64・65は壺肩部片。64は胴部に1条の沈線を巡らし、その上に3本を1単位とする鋸歯文を施文。外面ミガキ、内面ナデで淡黄褐色。65は肩部に3条の沈線を巡らし、2条を1単位とする重弧文を施文。外面摩滅、内面ナデで、外面淡黄褐色、内面灰黄褐色。

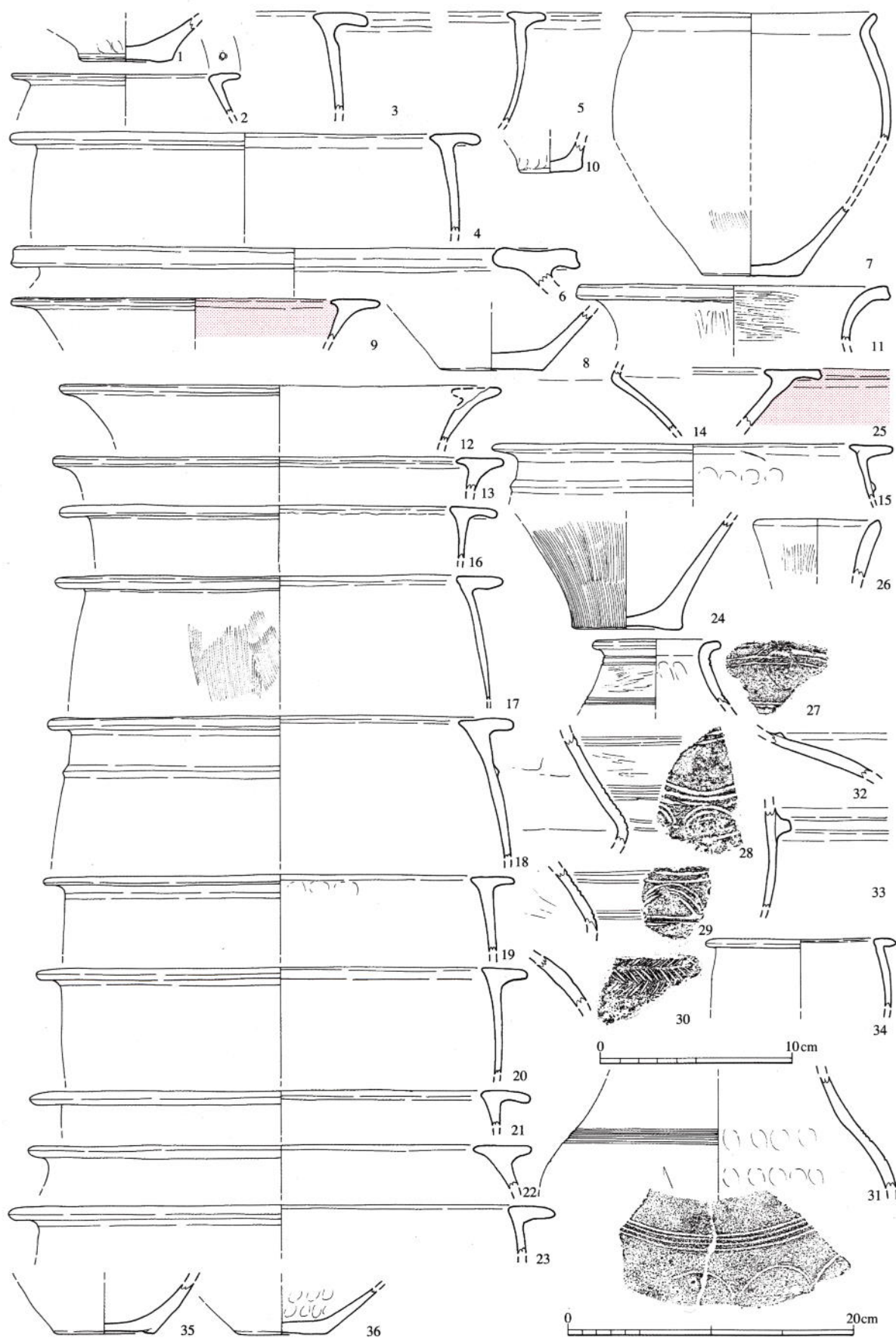
66は「く」の字口縁の丹塗無頸壺。内外摩滅し黄白褐色。68は広口壺の鋤先口縁部。内外摩滅し、淡黄褐色。68は丹塗壺胴下部。外面に断面三角形突帯を巡らし、外面雑な細いミガキ、内面ナデ。生地は褐色。69は丹塗壺胴部。胴部外面に断面M字条突帯を貼付。内外摩滅し、生地は橙褐色。70～72は壺底部。いずれも内外摩滅で、70は外面白褐色、内面暗褐色。71は灰白色、72は外面淡黄白褐色、外面灰白褐色。

73は如意状口縁甕。内外ナデで、外面暗褐色、内面淡黄褐色。74は如意状口縁をなし、胴部外面に刻目突帯貼付。口縁端部は角張るが、摩滅のため刻目の有無不明。内外ハケメが残り、外面橙褐色、内面白褐色。75・76は鋤先口縁甕。75は内外摩滅するが、外面にハケメが残る。外面淡褐色、内面淡橙色。76は内外摩滅し、外面灰褐色、内面白灰褐色。

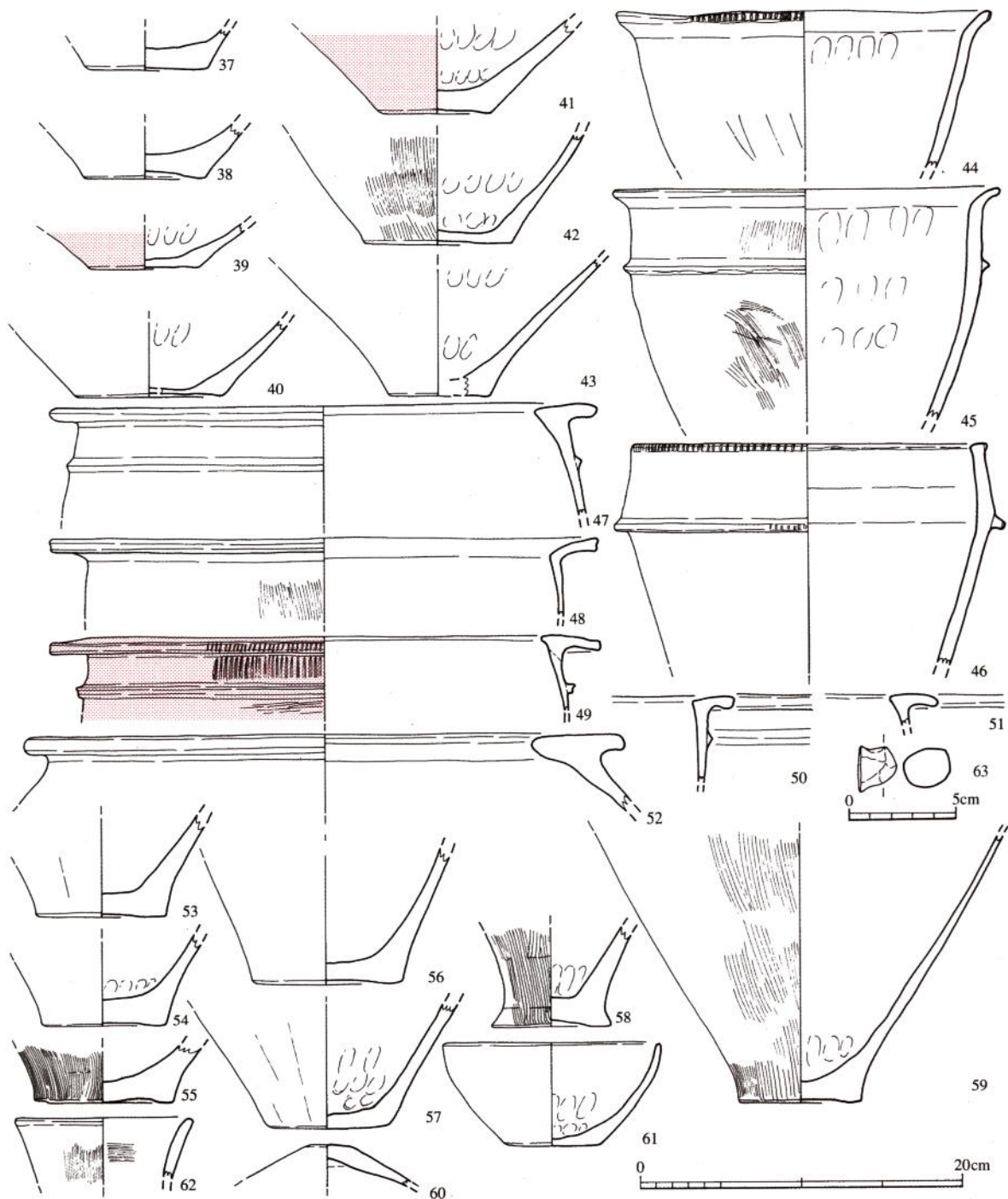
77～83は甕底部で、77は底部に焼成後穿孔がある。外面は77が縦ハケ、79・80はナデ、82は板ナデで、78・81・83は摩滅。内面はナデ仕上げのものが多いが、83は摩滅。77・83は灰黄白色、78・82内面は明黄褐色～淡黄褐色、79外面・82外面は明褐色、79内面・80は灰白褐色、81は白黄褐色を呈す。79・81は外面に煤、78は内面にコゲ付着。

84は無頸壺蓋で、2個所に穿孔が残る。内外摩滅で、褐色。85は鼓形器台。外面ハケ、口縁・裾内面横ハケ、中間部内面ナデで仕上げる。

86～110はA～C区遺構面から出土。86は内外を板状工具によりナデを施した鉢口縁部。縄文時代晩期にまで遡るかとは推測される。87は鋤先口縁広口壺あるいは高杯の口縁部、内外摩滅し、黄白



第152図 遺構面等出土土器実測図 (1) (10・27~30・34は1/3、他は1/4)

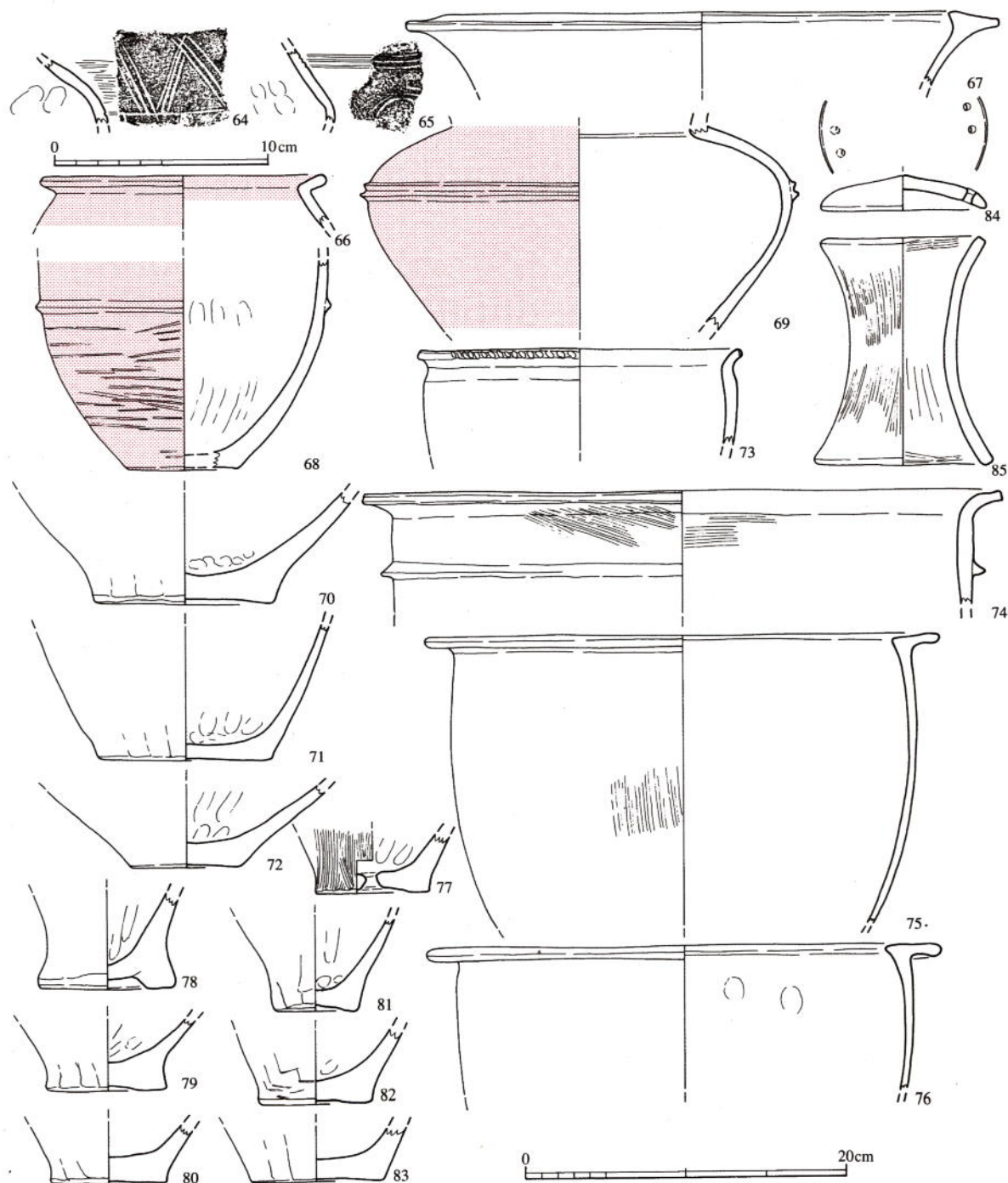


第153図 遺構面等出土土器実測図（2）（63は1／3、他は1／4）

褐色。88は袋状口縁壺で、口縁部外面にはかすかな稜が立つ。頸部外面ハケ、胴部外面及び内面ナデ。灰褐色。89・90は壺底部。89は内外ナデで、淡黄褐色。90は外面ハケ、内面摩滅で、外面灰白色、内面淡褐黄色。

* 91～93は中期初頭の如意状口縁甕。91は口縁端部が丸みを帯びるが、92・93は口縁端部が角張り、刻目は施されないか。いずれも外面ハケメで、内面は91・92摩滅、93ナデ。91外面・92口縁外面～内面・93は使用のためか暗褐色、91内面・92外面は淡黄褐色を呈す。94は2条の刻目突帯を貼付した大形甕胴部で、やはり中期初頭以前か。内外ナデで、淡褐黄色を呈し、外面には煤が付着。

95・96は鋤先口縁甕。95は内外摩滅で、淡黄褐色。96は外面縦ハケ、口縁～内面ナデで、淡褐色

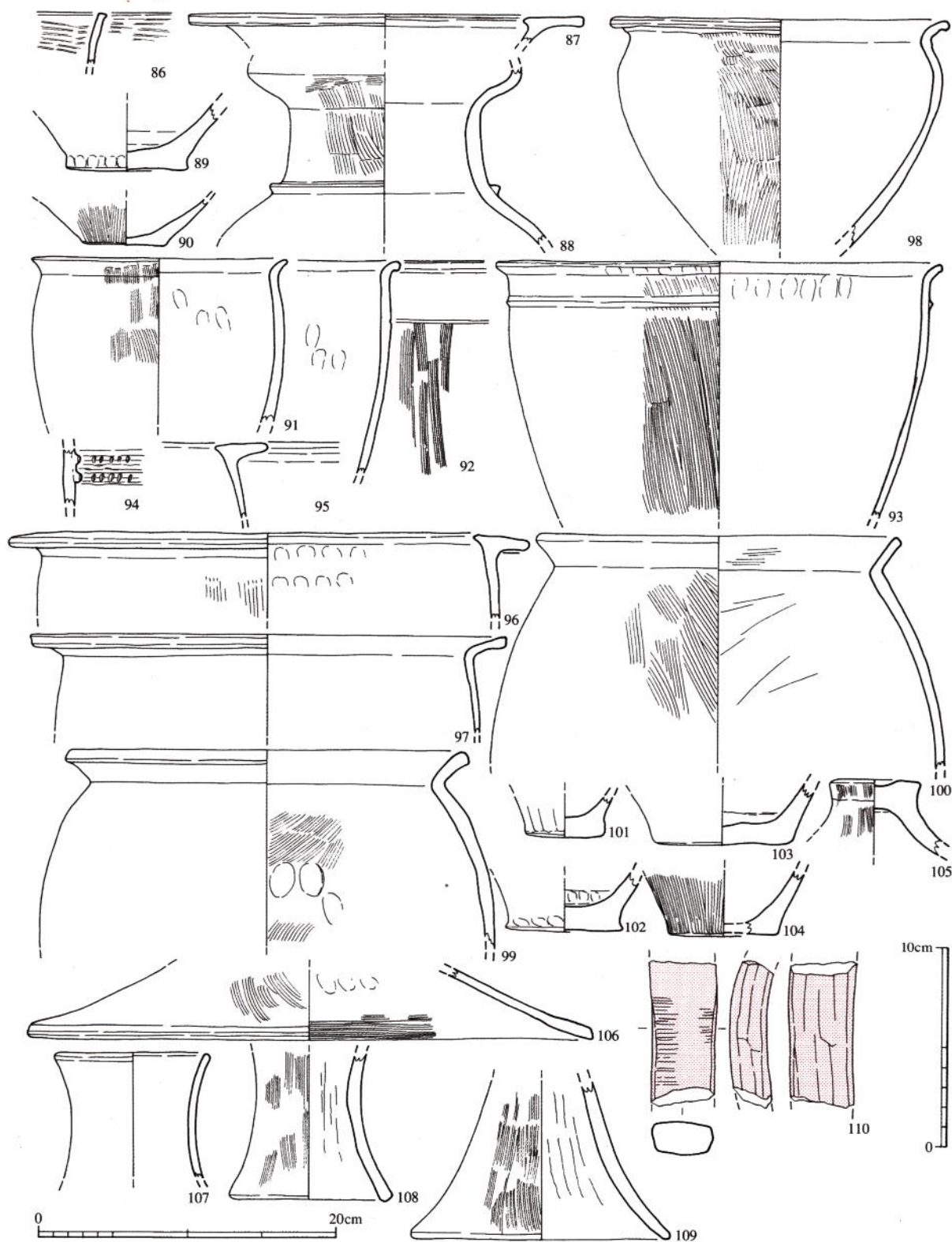


第154図 遺構面等出土土器実測図（3）（64・65は1／3、他は1／4）

～淡褐灰色。外面には煤、口縁上面にはコゲが付着。97は中期後半の外折口縁甕。内外摩滅し、淡橙褐色。

98～100は後期初頭～前葉の「く」の字口縁甕。98は口縁がわずかしかなかった、径・傾き不安。外面縦ハケ、内面ナデで、外面暗灰褐色、内面暗灰色。99は外面摩滅、内面ハケメで、明褐色。100は外面縦ハケ、内面板ナデ。外面黄灰褐色、内面灰褐色。

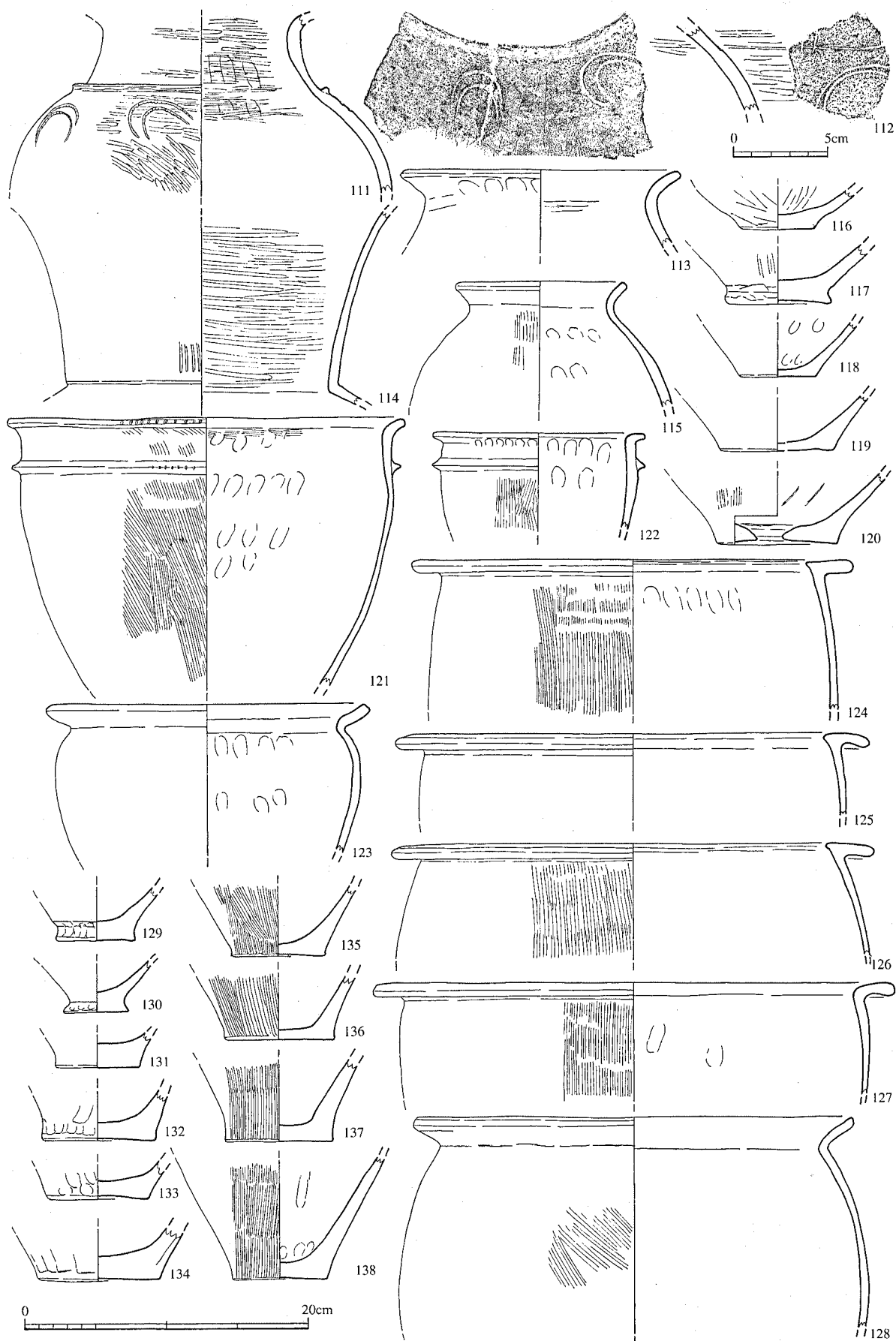
101～104は甕底部。101は外面板ナデ、内面摩滅。外面褐色、内面白灰褐色。102は内外ナデ、外面淡褐灰色、内面灰黄褐色。103は外面摩滅、内外ナデ。黄褐色を基調とするが、外面は二次的に火を受け赤変。104は外面縦ハケ、内面ナデ。淡褐色を基調とするが、外面煤、内面コゲ付着。



第155図 遺構面等出土土器実測図(4)(110は1/3、他は1/4)

105は蓋頂部、106は蓋裾部。105は外面縦ハケ、内面摩滅で、淡褐白色。106は外面～内面裾部ハケ、内面ナデ。外面淡褐白色、内面淡黄褐色。

107～109は鼓形器台か。107は内外摩滅、108・109は外面縦ハケ、内面ナデ。107は淡黄白褐色、108は淡黄褐色、109は淡灰褐色で、108には胎土に針状の黒雲母目立つ。



第156図 遺構面等出土土器実測図（5）（112は1／3、他は1／4）

110は内外を丹塗し、やや屈曲した板状土製品。土製杓子の把手となるか。表面ミガキ、裏面～側面板ナデ。生地は橙褐色～淡白黄褐色。

111～144はD区出土品。111・121はD区南攪乱、56号土坑周辺から出土した。

111は肩部に断面三角形突帯を貼付した壺。壺下には2条の二枚貝腹縁刺突文を1単位とした重弧文を間隔を空けて巡らす。外面～頸部内面ミガキ、胴部内面ナデ。外面褐灰色、内面灰褐色。112は肩部に1条の沈線を巡らし、その下に2条の沈線を1単位とする重弧文を施文。外面及び内面上部ミガキ。暗褐色。113は頸部の括れた壺で中期初頭か。外面ナデ、内面摩滅するが、内面にはミガキが残る。淡黄褐色。114は広口口縁壺の口頸部。外面摩滅するが縦方向のミガキ暗文が残る、内面は横ミガキ。内外明褐色。115は頸部の括れた壺で後期前葉か。外面縦ハケ、内面ナデ。外面淡黄褐色、内面灰褐色。

116～120は壺底部である。117は底部の括れが明瞭で、120は焼成後穿孔を施す。いずれも器表は摩滅するが、116は外面板ナデ、内面強いナデで仕上げる。117は微かにハケメが残る、120は内面に工具痕が残る。116・117外面・119内面は淡褐色、117内面・118は灰黄褐色、119外面・120内面は淡黄褐色、120外面は灰褐色を呈す。

121・122は如意状口縁で、胴部外面に突帯を巡らす甕。121は口縁端部、突帯頂部に刻目を施文。外面及び頸部内面はハケメで、胴部内面はナデ仕上げ。暗灰褐色～灰褐色で、突帯下胴部外面には煤付着。122は口縁端部・突帯頂部とも摩滅のため、刻目の有無は不明。外面ハケ、口縁部～胴部内面ナデ。外面褐灰色、内面黄灰褐色。

123は「く」の字口縁の甕で、後期前葉か。内外雑なナデ仕上げで、淡灰褐色。

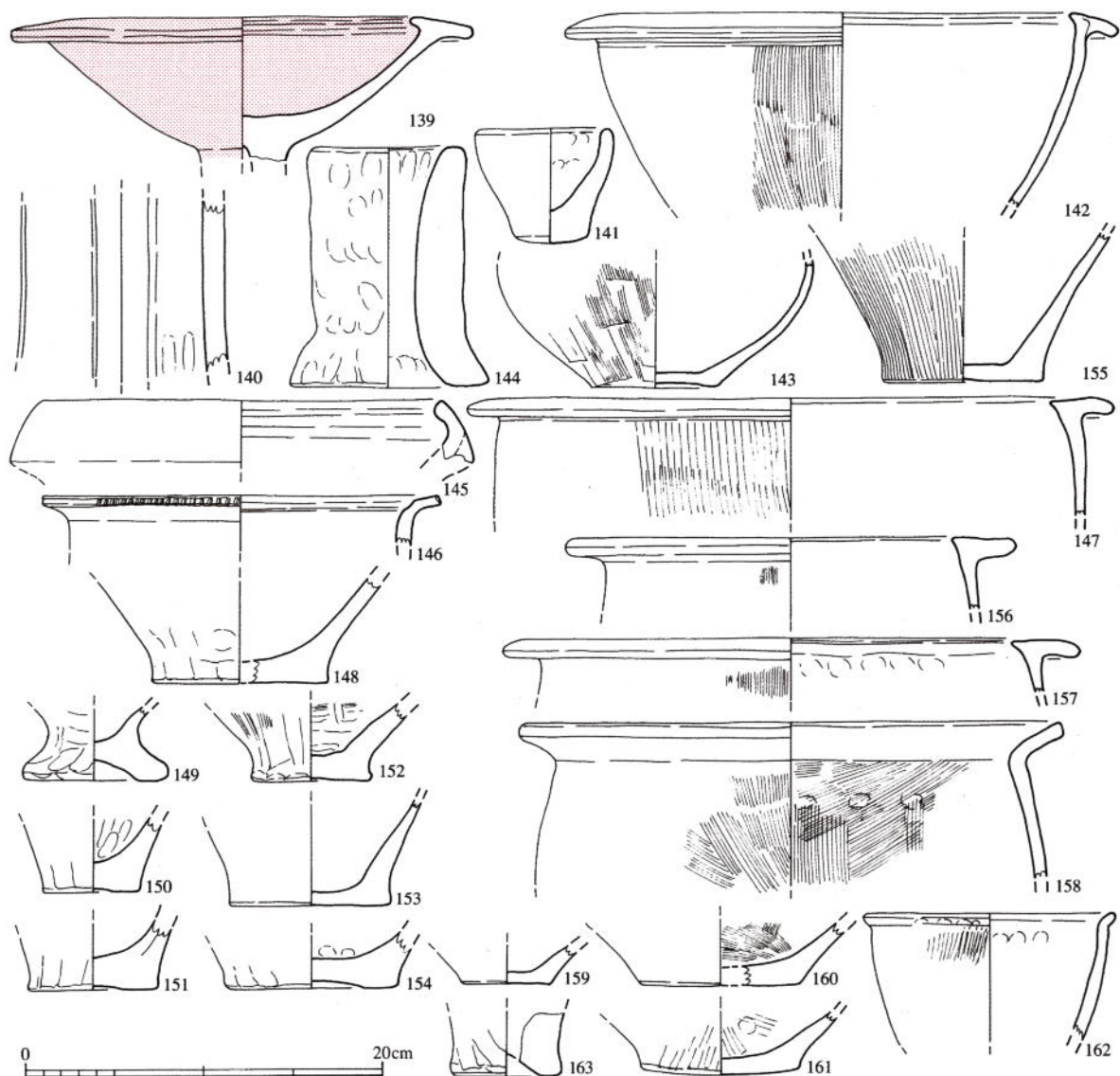
124～126は鋤先口縁甕。外面は124・126縦ハケ、125摩滅。内面は124ナデで、他は摩滅。124は淡黄褐色を呈し、外面煤、内面コゲ付着。125は白褐色。126は外面黄褐色、内面褐灰色で、外面には煤が付着。127は中期後半の外折口縁甕。外面縦ハケ、内面ナデで、明褐色。128は「く」の字口縁甕。内外摩滅するが、外面にハケメが残る。外面赤褐色、内面暗灰褐色で、口縁上面は黒変。

129～138は甕底部。129・130は底部外周が括れる。129～134は内外摩滅するが、129底部外周にはナデ、133外面には板ナデが残る。135～138は外面縦ハケ、135・136内面はナデ、137・138は摩滅。129外面・133内面・135は淡黄褐色、129内面・131内面・134内面は淡黄灰褐色、130・136は白褐色、131外面は暗褐色、132外面・133外面は褐灰色、132内面は灰黄褐色、134外面は褐黄色、137は灰褐色、138は淡褐色。135・138の外面には煤が、135内面・138見込みにはコゲが付着する。

139は丹塗高杯杯部。内外摩滅し、生地は淡黄褐色。140は筒形器台の透かし部破片。内外摩滅のため、丹塗は遺存しない。生地は淡橙褐色。141は底部の厚い小形鉢。内外摩滅し、淡灰黄褐色。142は鋤先口縁の鉢。外面縦ハケ、内面ナデで、頸部外面に接合部分で段をなす。淡橙褐色。143は鉢底部か。外面ハケ、内面ナデで、淡白褐色。144は筒状で内外粗いナデ仕上げの土製支脚。クサリ礫を多く含む特徴的な胎土で赤褐色。

145～155はE区出土。145は後期前葉の複合口縁壺口縁部。下端は接合面より剥離し、口縁部の粘土接合法の観察ができる個体。まず袋状に口縁部を整形した後、頸部外面、口縁部外面に粘土を継ぎ足したことが分かる。淡褐色。146は如意状口縁甕。口縁端部に刻目を施すが、口縁部内面に凹みの巡る点が特徴的。外面褐色、内面褐白色で、外面には煤付着。147は鋤先口縁甕。外面縦ハケ、内面摩滅で、外面褐白色、内面淡褐色。

148は壺底部。内外摩滅し、外面淡褐色、内面暗灰褐色。149～155は甕底部。149・152は底部の括れが明瞭で、149は上げ底状。摩滅するものが多いが、152は内外板ナデ、155は外面縦ハケ、内面ナデ。149外面・152・153・154外面・155外面は褐色～淡褐色、149内面は褐灰色、150・151外面は淡橙褐色、151内面は灰褐色、154内面は黄褐色、155内面は白褐色を呈す。153外面は煤が付着し、二



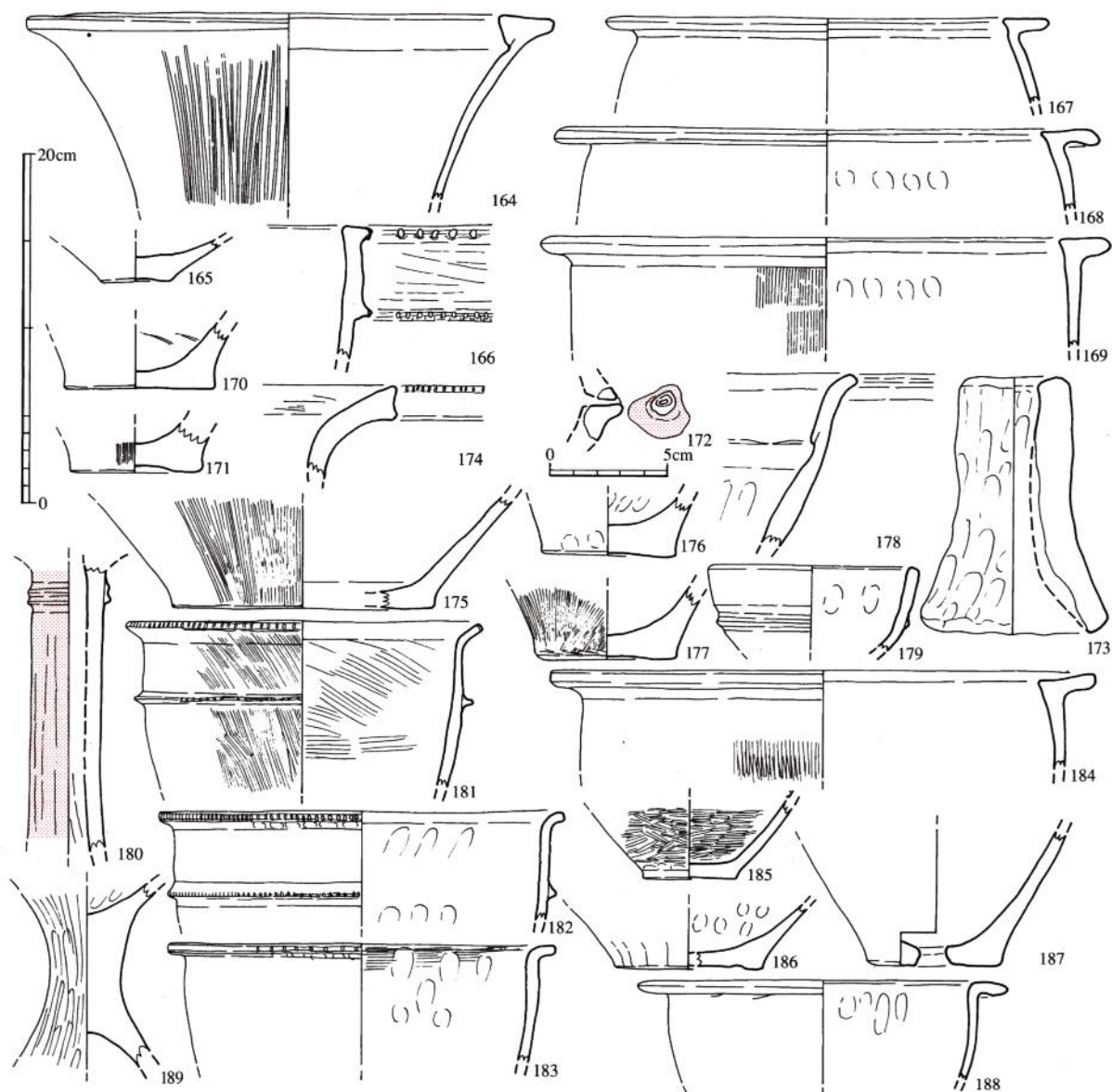
第157図 遺構面等出土土器実測図(6)(1/4)

次加熱で赤変し、内面見込みにはコゲが付着。155は外面に煤、内面見込みにコゲ付着。

156～163はF区出土。156・157は鋤先状の甕口縁部小片。いずれも外面ハケ、内面ナデで、157口縁部内面には指頭圧痕が巡る。158は「く」の字口縁甕で、外面縦ハケ、内面ハケ。灰褐色を呈し、胴部内面はコゲ付着。159～161は甕底部。159は内外摩滅し、褐白色。160は外面摩滅、内面ハケで褐黄色。161は外底部がわずかに突出し、内外粗いハケメ仕上げ。褐黄色を呈すが、二次的に火を受け、外面黒変、底部赤変する。162は小形の鉢。外面ハケメが残るが、摩滅が顕著。内面ナデ。淡黄褐色であるが、二次的に火を受け、赤変、黒変する。163は天地不安であるが土製支脚か。淡褐色を呈し、外底面には煤付着。

164～173はG区出土。164は広口壺で、口縁部は内面に厚く粘土を貼付し鋤先口縁状にする。内外ナデで、外面には縦ミガキ暗文を施す。褐色～褐灰色。165は壺底部。外面摩滅、内面ナデで淡褐色～白褐色。

166は口縁部と胴部に断面三角形の刻目突帯を貼付。刻目は太く、先端の丸い工具で施文。外面板ナデ、内面ナデで、褐黄色を呈す。167～169は鋤先口縁の甕。167は頸部が括れるため、無頸壺口縁の可能性もある。口縁部内面に段をなす点が特徴的。内外摩滅で褐白色。168は外面摩滅、内面

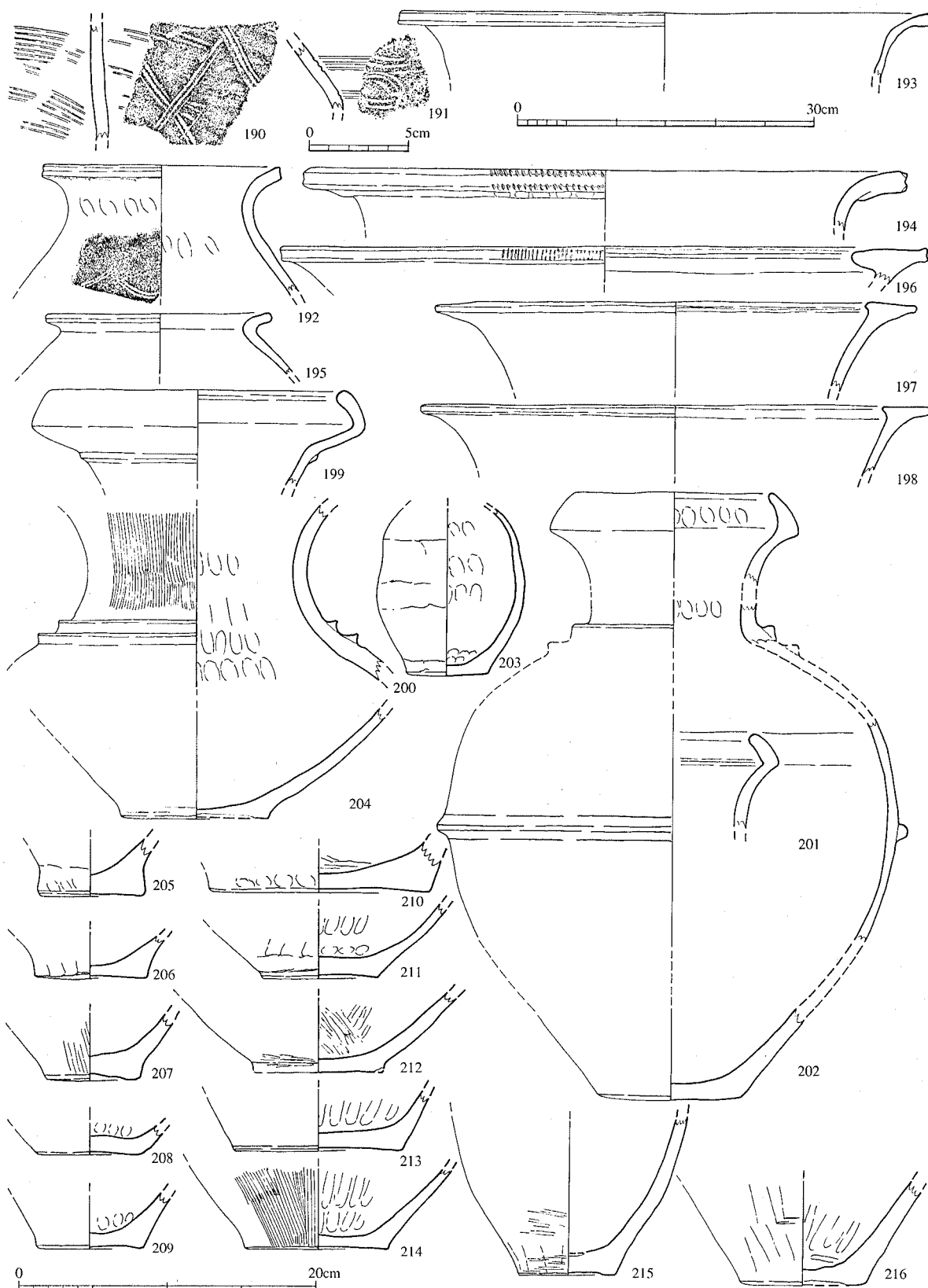


第158図 遺構面等出土土器実測図（7）（172は1／3、他は1／4）

ナデ。外面淡黄褐色、内面暗褐色。169は外面縦ハケ、内面摩滅。外面褐色、内面淡橙褐色。170・171は甕底部。170は外面摩滅、内面板ナデで、灰褐色。171は外面縦ハケ、内面ナデで黄褐色。内面にはコゲが付着。

172は丹塗脚付無頸壺胴部の注口部分か。ただ、注口部は径1mm程の孔に過ぎず、やや小さ過ぎるようにも思う。生地は灰黄褐色。173は筒状の土製支脚。外面は粗いナデで、内面は剥離。褐色を呈し、胎土にクサリ礫を多く含む。

174～180はH区出土。174は端部を拡張し、上端に細い刻目を施す口縁片で、大形の壺か。外面摩滅、内面板ナデ。外面淡褐灰色、内面淡黄褐色。175は大形壺底部。外面ハケメ、内面ナデで灰黄褐色。176・177は甕底部。176は外面摩滅、内面ナデ。外面暗褐色、内面褐色で外面には煤付着。177は外面縦ハケ、内面摩滅。外面明褐色で、内面灰黄褐色。178は鉢口縁部か。内面の粘土接合部は段をなす。内外摩滅で、外面褐灰色、内面淡黄灰褐色。179は胴部に突帯を巡らす小形鉢。内外ナデで、褐白色。180は丹塗高杯脚部。外面摩滅、内面ナデで、杯との接合部に近くの外面に断面M字状突帯を巡らす。生地は橙褐色で、内面焼成不良のため黒変。



第159図 遺構面等出土土器実測図（8）（191は1／3、193は1／6、他は1／4）

181～189はI区出土。181・182は端部に刻目を施文した如意状口縁で、胴部外面には刻目突帯を貼付。181の刻目は先端のやや鈍角な工具により浅く施す。器表の遺存状況が良好で、内外ハケメ。外面淡黄褐色、内面明褐色。192の刻目は先端の鋭利な工具を左から右に押し付けて施文。内外ナ

デで、暗黄褐色。外面突帯下には煤付着。183は如意状口縁の甕で、口縁端部に刻目施文。外面摩滅、内面ナデであるが、口縁部内面にはハケメが残る。184は鋤先口縁甕。外面縦ハケ、内面ナデ。外面淡褐色、内面灰褐色で、外面には煤付着。185・186は壺底部。185は底部が円盤状に突出し、内外ミガキ。灰黄褐色を呈する。186は内外摩滅で、底部外周は接合痕を反映したためか、環状に凹む。外面白褐色、内面淡褐白色。187は焼成後穿孔を施した底部で甕か。内外丁寧なナデで淡褐色。底部外面・底部外周に煤、内面上部にコゲ付着。188は口縁部が外折する鉢。内外摩滅で外面淡褐色、内面灰黄褐色を呈す。

190～258は出土地点が限定できないもの。190は縄文時代晩期深鉢の頸部か。内外二枚貝による条痕残り、外面には板あるいは貝による格子状の文様を施文。

191～195は中期初頭以前の壺。191は壺肩部。肩部に3条の沈線、胴部に2条の沈線を巡らし、その間に3条の沈線を1単位とする重弧文を配置。内外摩滅で、外面淡黄灰褐色、内面暗褐色。192は壺上部片。頸部は括れ、口縁部は短く外反し、端部は角張る。肩部に2条の沈線からなる波状文を巡らす。内外摩滅するが、口縁部は強い横ナデあるいは板ナデ。淡褐色。193は大形壺口縁部で、端部が角張る。内外摩滅し、外面淡灰黄褐色、内面淡黄褐色。194は大形壺口縁部。口縁外面に粘土を貼付け肥厚させ、端部上下に刻目を施文。外面黄灰褐色、内面灰黄褐色。

195～198は中期後半の壺。195は口縁部が「く」の字に外反した無頸壺。丹塗の可能性が高いが摩滅のため確認できない。生地は淡橙褐色。196～198は鋤先口縁広口壺。196は大形で、端部外面に細い刻目を施文。内外ナデで、淡褐色。197は摩滅のため、口縁断面形はやや不安。調整不明で灰白褐色。198は内外摩滅で淡褐色。

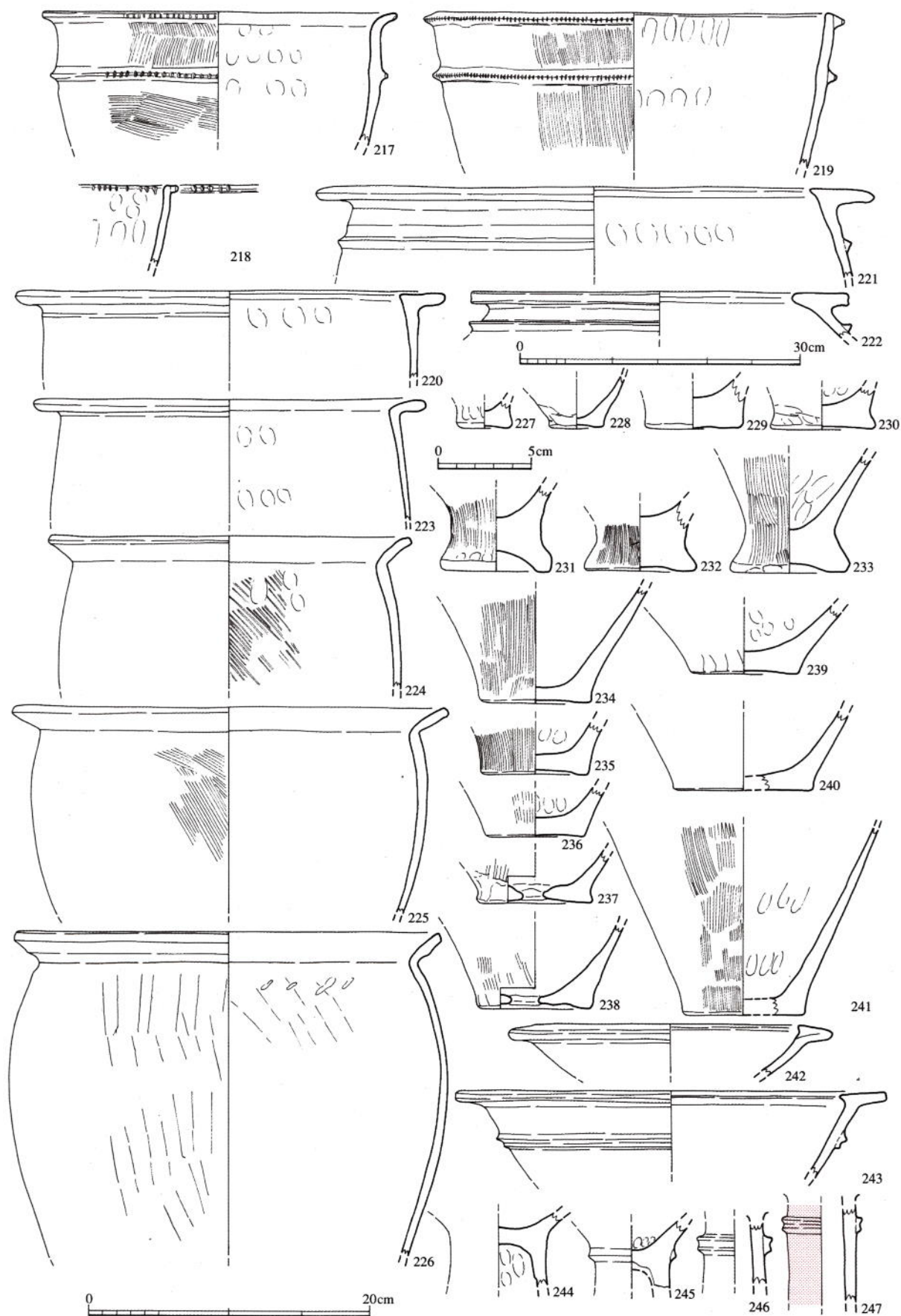
199～202は後期初頭の複合口縁壺。199は口縁部で、小辺のため傾き不安。端部は肥厚し、頸部外面に摩滅した断面三角形突帯が巡る。口縁外面は丸みを帯び、稜は不明瞭。黄白褐色。200は複合口縁壺頸部～肩部。肩部に高い断面三角形突帯を2条貼付し、胴部外面摩滅、頸部外面縦ハケ、頸部内面ナデ。外面淡黄灰褐色、内面灰褐色。201は口縁部小片。端部は角張り、口縁屈曲部内面には凹線が巡る。外面の稜は比較的明瞭。内外摩滅で、外面淡黄褐色、内面黄褐色。202は口縁部、頸部、胴部、底部に分かれ接合しないが、同一固体か。口縁部は外面に比較的明瞭な稜がつたつ。頸部外面には断面三角形の突帯を巡らし、胴部外面にも摩滅した突帯を貼付する。内外摩滅で、外面灰黄褐色、内面暗褐色を呈す。

203は無頸壺か。胴上部は器壁が薄く、内外粗いナデ仕上げ。外面淡黄褐色、内面淡灰褐色。

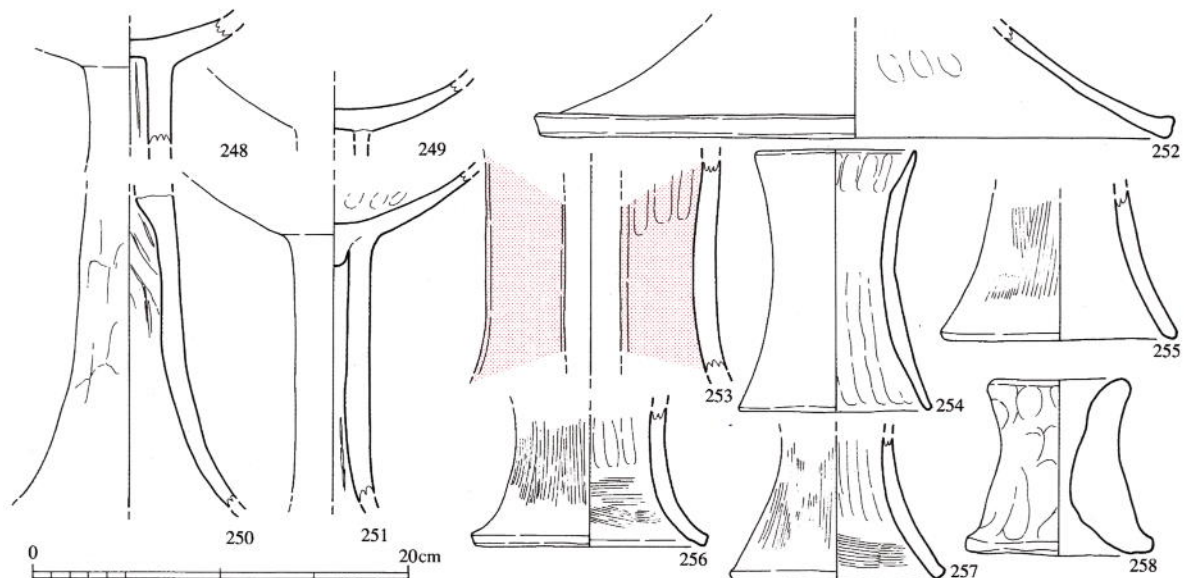
204～216は壺底部か。外面は207・214は縦ハケ、210はナデ、216は板ナデ。212・215は底部外周にわずかにミガキ、211外面は板ナデの痕跡が残る。他は摩滅。内面は210・212はミガキ、211・213・214・216はナデ、他は摩滅。204は白褐色、205外面は淡黄白褐色、205内面・212外面は暗褐色、206外面・209内面・210外面・212内面・213外面・214内面は淡褐色、206内面は灰褐色、207内面・214外面は灰黄褐色、207内面・213外面・215外面は淡黄灰褐色、208は褐白色、209外面・215内面は褐灰色、210内面は淡黄褐色、211は橙褐色、216外面は褐赤色、217内面は暗灰黄褐色。216外面には煤、209内面にはコゲが付着する。

217～219は前期末以前の甕。217は端部に刻目を施した如意状口縁で、胴部外面に刻目突帯を巡らす。口縁端部の刻目はやや下寄りで細く、突帯頂部の刻目は太い。外面ハケ、内面ナデで黄灰褐色。218は口縁部をわずかに外折させた甕。端部外面に先端のやや丸い工具で刻目施文し、内面にも先端の鋭利な工具で細い刻目を施す。内外摩滅進むがナデ仕上げ。褐黄灰色を呈し、外面に煤付着。219は口縁断面三角形で、胴部外面にも突帯を巡らす。口縁端部・突帯頂部には刻目を施文。外面縦ハケ、内面ナデで、外面口縁下には板状工具圧痕が残る。外面褐色、内面黄灰褐色。

220・221は鋤先口縁甕。220は外面摩滅、内面ナデで、口縁下外面には強いナデにより段が巡る。



第160図 遺構面等出土土器実測図（9）（227は1／3、222は1／6、他は1／4）



第161図 遺構面等出土土器実測図 (10) (1 / 4)

外面白褐色、内面淡褐色。221は胴部外面に三角突帯を貼付した大形甕。内外ナデ仕上げで褐白色。222は鋤先口縁の大形甕。頸部が括れ、口縁部は内へ大きく突出する。口縁下の外面には断面三角形突帯を貼付。淡褐白色。223は中期後半の外折口縁甕。外面摩滅、内面ナデで、褐色。

224～225は後期初頭～前葉の「く」の字口縁甕。224は外面摩滅、内面ハケで、褐色～白褐色。225は外面ハケメ、内面ナデで、外面黄褐色、内面灰褐色。226は外面及び胴部内面上部を板ナデ、胴内面下部にナデ。頸部内面には右上がりの凹みが巡るが、接合痕あるいは板ナデに先立つ指頭圧痕か。外面褐赤色、内面暗褐灰色。

227～241は底部片。227・228は小形土器底部で、他は甕底部。227は厚い底部で、内外ナデ仕上げ。外面褐灰色、内面暗褐色。228は外面ハケ、内面ナデで、外面暗褐色、内面褐黄色。

229～241は甕底部で、237・238は底部を焼成後穿孔。外面はハケメを施すものが多いが、229・239・240は摩滅、230は工具によるナデ。内面はナデのものが多いが、234・236・238・241は摩滅。229・234・240内面は淡黄灰褐色、230外面は暗褐灰色、230内面・240外面は淡灰黄褐色、231外面・237・239外面は淡灰褐色、231内面・233・235・238外面・239内面・241外面は淡褐色、232・236外面は黄褐色～淡黄褐色、236内面は淡褐白色、238内面・241内面は褐灰色を呈す。241外面は煤、233・240内面はコゲが付着。237は内面全面にコゲが付着するが、底部穿孔の剥離面にはコゲが付着しないので、ある程度使用した後に焼成後穿孔したものと思われる。

242・243は高杯杯部。いずれも鋤先口縁で、243は外面に断面M字状の突帯を巡らす。摩滅のため丹塗の有無、調整は不明。242・243外面は橙褐色、243内面は黄白褐色。244～251は高杯脚・杯接合部付近の破片。244は内面ナデ、外面摩滅で淡黄褐色。245は括れ部に断面三角形突帯を貼付。脚内面は粘土接合面より剥離。外面摩滅、内面ナデ。外面暗赤褐色、内面橙褐色。246・247は断面M字状突帯を貼付した脚上部片。いずれも内外摩滅で、247は外面に丹塗の痕跡が残る。246は外面褐色、内面黄灰褐色、247生地は外面赤褐色、内面灰黄色。248～251はいずれも摩滅。251は杯部と脚部を充填法で接合する。248外面は淡灰白褐色、248内面・251は赤褐色、249外面は明褐色、249内面は褐灰色、250は淡橙褐色を呈す。

252は筒形器台裾。大きく開き、端部は拡張され角張る。内外摩滅で、丹塗の有無、調整不明。生地は淡黄灰褐色。253は丹塗の筒形器台透かし部破片。内外摩滅し、生地は淡褐色～橙褐色。

254～257は鼓形器台。254はほぼ完形で、外面摩滅内面ナデ。255～257は外面縦ハケで、内面は255摩滅、256・257は中間部ナデ、裾部横ハケ。254外面は灰黄褐色、254内面・256は灰褐色、255外面は褐色、255内面は淡灰黄褐色、257外面は灰白褐色、257内面は淡黄白褐色。254外面は煤が付着する。258は内外粗いナデ仕上げの土製支脚。内外淡褐色で、胎土にクサリ礫を含む。

3. 出土土製品・石器

(1) 土製品

遺存状況の良好なものを抽出し、各遺構出土品と遺構面及び包含層出土品の区別なく、種類別に掲載した。(図版83、第162図)。

それぞれの計測値および出土遺構は第2表のとおりである。

1～18は投弾。長さ2.4cm～5cm。重量4.9～27.5g。断面は円形だが、3のように隅丸三角形に近いものもみられる。胎土はすべて精良で、砂粒をほとんど含んでいない。調整はナデで、整形時の指頭圧痕を残すものもみられる。弥生時代後期前葉の34号竪穴住居跡から7点とまとまって出土しており、その時期まで使用されたと推測される。

19～39は紡錘車。径3.1～7.1cm。胎土には砂粒をあまり含まないものがあるが、全体的に多く含んでいる。調整はナデで、26・31・39には指頭圧痕が残る。22は側面に波状の沈線を巡らせる。出土遺構で時期の明らかなものとしては、25は中期後半の30号竪穴住居跡から、32は中期後半でも古いころの120号土坑、37は前期後半の65号土坑から出土した。

40は手捏ねの容器で、34号竪穴住居跡から出土した。口縁部には整形時にできた亀裂がみられる。外面は黒化する。

(2) 磨製石器・石製品

遺存状況が良好で実測可能な全個体を抽出し、実測図を作成し、各遺構出土品と遺構面及び包含層出土品の区別なく、種類別に掲載した。(図版86・87、第163～170図)。

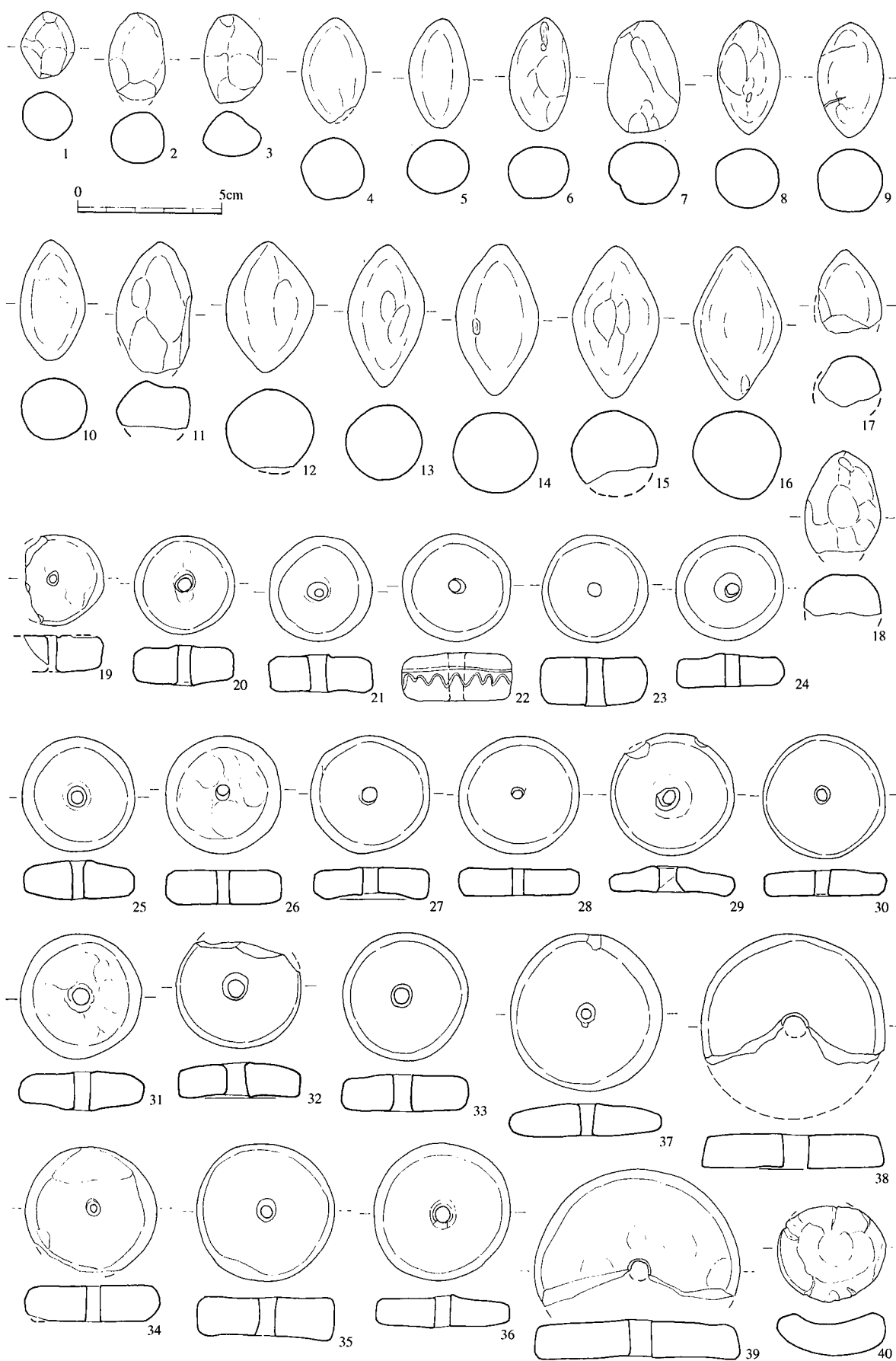
それぞれの計測値および出土遺構は第3表のとおりである。

41～60は石包丁。すべて外湾刃であり、41・50・58のように三角形を呈する古手のもの、42のように半月形のもの、48のように背部が丸みを帯びる新しい形態の楕円形のものがある。44は頻繁な使用による研ぎ直しにより、使い込まれたものであろう。石材は輝緑凝灰岩製のものが多いが、41・50・53のように片岩製のもの、54のように粘板岩製のものがある。42・48は後期前葉の34号竪穴住居跡、45は中期中頃の32号竪穴住居跡から、50は前期後半の71号土坑から、53は前期後半の107号土坑から出土した。

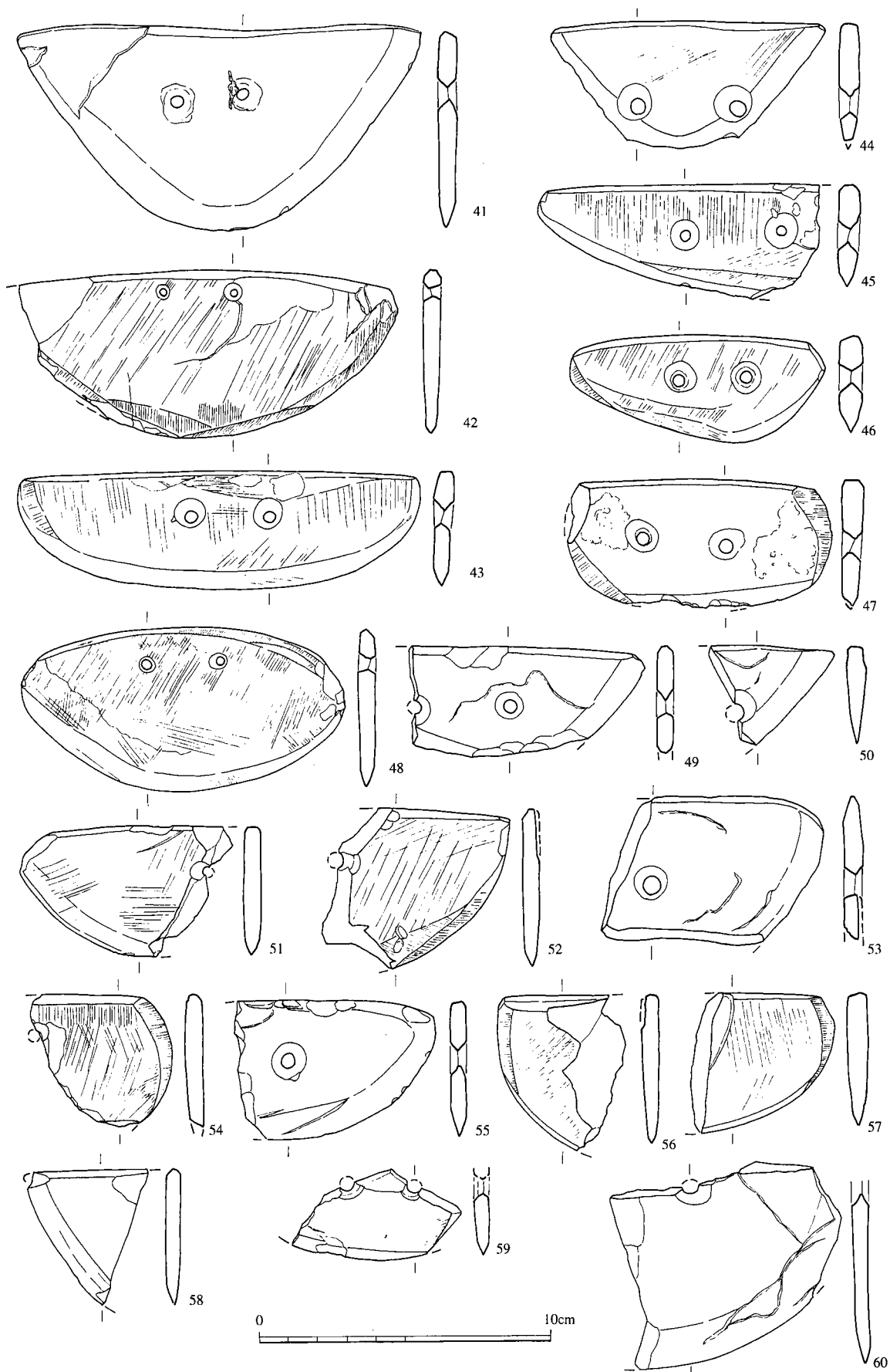
61～63は石鎌。61は中位で折損するがほぼ完形。扁平な板状の素材の縁辺を打ち欠いて刃部を作り出す。背部は磨いて平滑になる。62・63は磨製。後者は身が分厚い。石材は片岩、砂岩、輝緑凝

第2表 土製品計測表

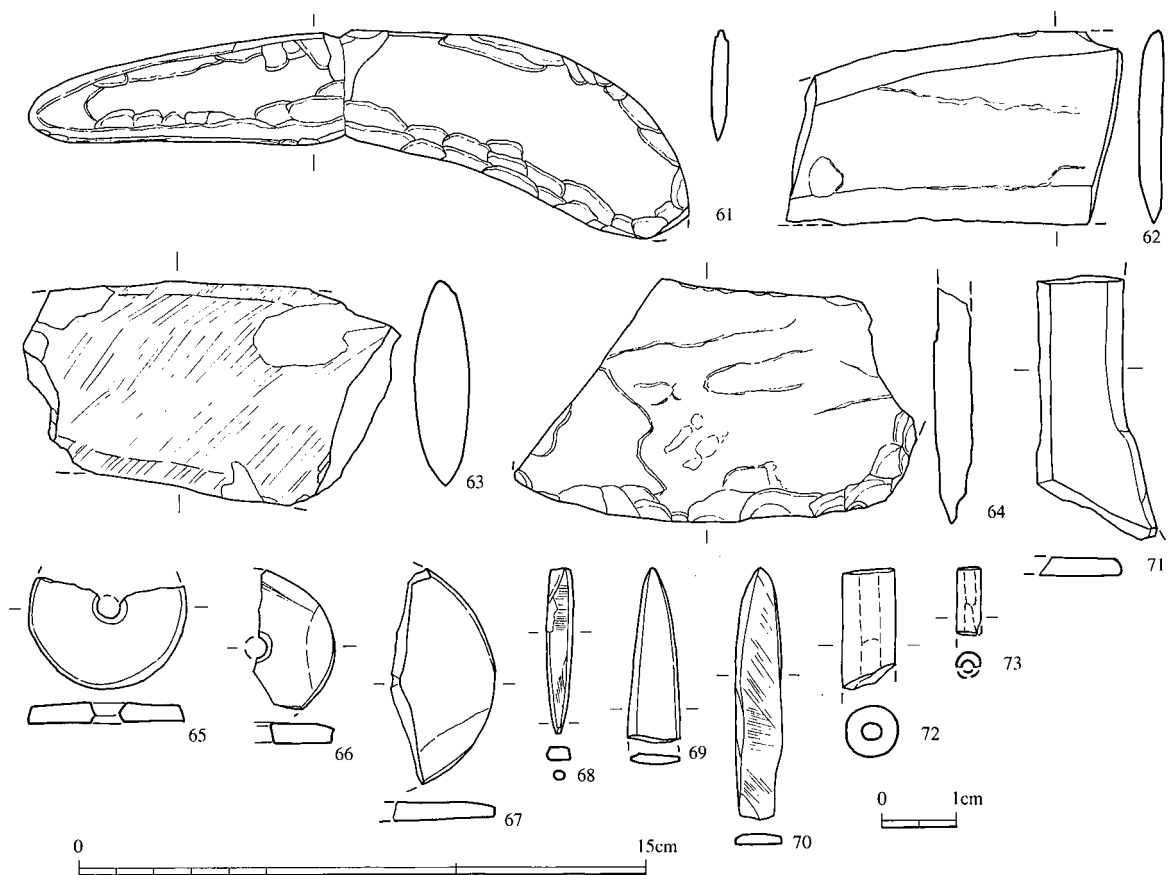
番号	器種	出土遺構	色調	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	投弾	住34	黄褐色	2.4	1.8		4.9	
2	投弾	B区西平遺構面	暗黄灰色	(3.1)	1.9		(9.2)	
3	投弾	C区遺構面	淡黄灰色	3.1	1.5		6.7	
4	投弾	F区遺構面	明黄褐色～淡黄褐色	(3.7)	2.2		(13.2)	
5	投弾	土111覆土上層	淡黄褐色	3.9	2.2		9.5	
6	投弾	E区遺構面	淡黄褐色	3.9	2.1		11.4	
7	投弾	住28覆土	淡黄褐色	3.9	2.5		17.2	
8	投弾	土118	淡黄灰色	4.0	2.2		14.2	
9	投弾	J区遺構面	暗黄灰色	4.1	2.3		15.6	
10	投弾	F区西遺構面	淡黄褐色	4.2	2.3		13.8	
11	投弾	溝4下層	淡黄灰色	(4.6)	2.5		(17.1)	
12	投弾	住34	黒茶色	(4.6)	3.0		(26.1)	スス付着
13	投弾	住34	黒茶色	5.0	2.6		22.0	
14	投弾	住34	暗黄褐色～黒茶色	5.3	2.9		27.5	
15	投弾	住34	暗茶色	5.3	3.0		(24.1)	スス付着
16	投弾	住居34	淡黄褐色	5.3	3.0		27.5	
17	投弾	西遺構面	淡黄褐色	(2.9)	(2.2)		(9.0)	
18	投弾	住34	黒灰色	(3.6)	2.7		13.3	スス付着
19	紡錘車	溝4北包含層	黄白色	3.1		1.3	(12.2)	
20	紡錘車	溝4東南包含層	暗黄褐色	3.5		1.4	30.5	
21	紡錘車	包含層	淡黄褐色	3.6		1.3	23.8	
22	紡錘車	C-1区遺構検出面	暗黄褐色	3.7		1.7	30.5	波状の沈線
23	紡錘車	溝7上層	淡黄白色	3.7		1.7	29.6	
24	紡錘車	表土表探	黄褐色	3.8		1.2	23.1	
25	紡錘車	住30	淡黄白色	4.0		1.3	25.0	
26	紡錘車	土71下層	暗黄灰色	4.0		1.2	28.4	
27	紡錘車	遺構面	暗黄褐色～灰色	4.1		1.1	24.2	
28	紡錘車	住19	暗黄褐色	4.2		1.0	24.6	
29	紡錘車	B区遺構面上包含層	淡黄褐色	4.2		0.9	(17.3)	
30	紡錘車	溝3-1区	黒～淡灰	4.2		0.9	20.0	
31	紡錘車	土83	淡黄褐色	4.2		1.4	27.6	
32	紡錘車	土120	淡黄白色	4.3		1.2	(20.0)	
33	紡錘車	P136	淡黒灰色	4.4		1.3	32.1	
34	紡錘車	土105北	暗黄褐色	4.5		1.3	30.5	
35	紡錘車	D区遺構面上包含層	淡黄褐色	4.7		1.6	45.5	
36	紡錘車	溝3南端上層	灰色～暗灰色	4.8		1.2	28.0	
37	紡錘車	土65	黒灰～暗黄褐色	5.4		1.2	37.5	
38	紡錘車	住16	暗黄褐色	6.4		1.2	(41.7)	
39	紡錘車	土116東包含層	淡黄褐色	7.1		1.4	(41.6)	
40	手捏ね容器	住34	淡茶灰色	3.8		1.5	16.5	



第162図 土製品実測図 (1 / 2)



第163図 磨製石器・石製品実測図 (1) (1/2)



第164図 磨製石器・石製品実測図（2）（72・73は実大、他は1/2）

灰岩と多用である。

64は扁平な素材の縁辺を打ち欠いて刃部を作り出すが、刃部に当たる部分の一部は打ち欠かず厚みを残したままである。あるいは扁平打製石斧の未製品になるか。

65～67は紡錘車。石材は65・66が安山岩、67が片岩。67は前期末頃に比定される111号土坑から出土したものである。

68は輝緑凝灰岩製の刺突具。身の断面形は略長方形で、先端部は円形。

69・70はヘラ状の石器。69は左側の側縁が刃状になる。71は全体の形状・用途ともわからない。側縁部は磨かれる。69は砂岩、70は片岩製。

70・71はいずれも碧玉製の管玉。ともに上下両側から穿孔される。

74～76は磨製石鏃。74・76は輝緑凝灰岩製、75は頁岩製。

77～79は石剣。77は茎部に刻みを施す。78は石戈になる可能性もある。77は安山岩、78は砂岩、79は輝緑凝灰岩製品。77は中期後半の16号土坑から出土した。79は25号竪穴住居跡の床面から出土したが、土器から住居跡の時期を限定することは難しい。

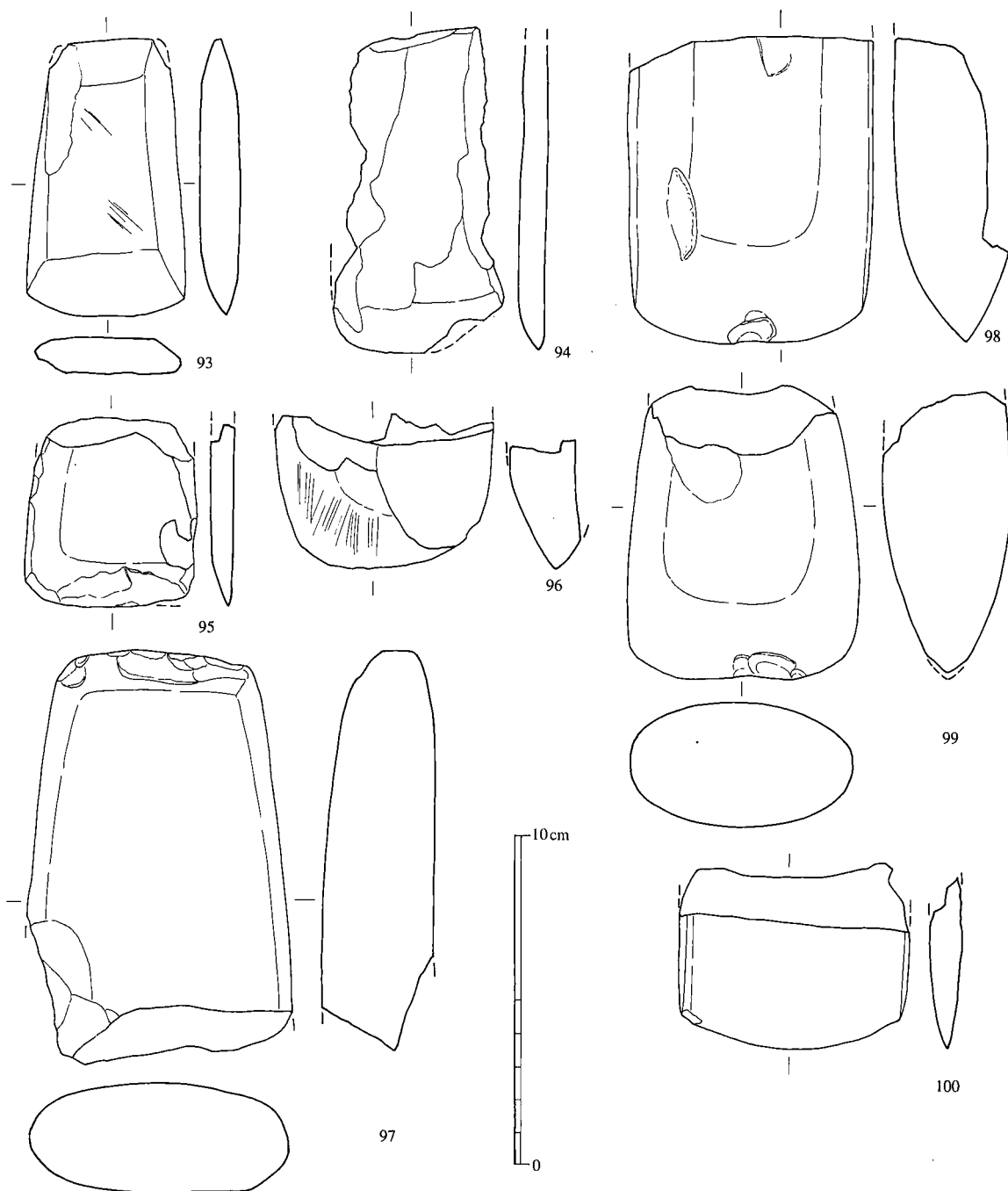
80～84は扁平片刃石斧で、いずれも頁岩製である。84は刃部寄りの背面を欠損した後も使用しており、一部欠損面にも使用による摩滅がみられる。81は中期後半の122号土坑から、82は中期中頃の32号竪穴住居跡から出土した。

85～88は柱状片刃石斧で、いずれも頁岩製である。87は抉入りである。87は中期後半の107号土坑から出土した。

89・90は扁平打製石斧。89は泥岩製、90は片岩製である。89の刃部は磨製。90の裏面は研磨により平滑になる。



第165図 磨製石器・石製品実測図(3)(1/2)



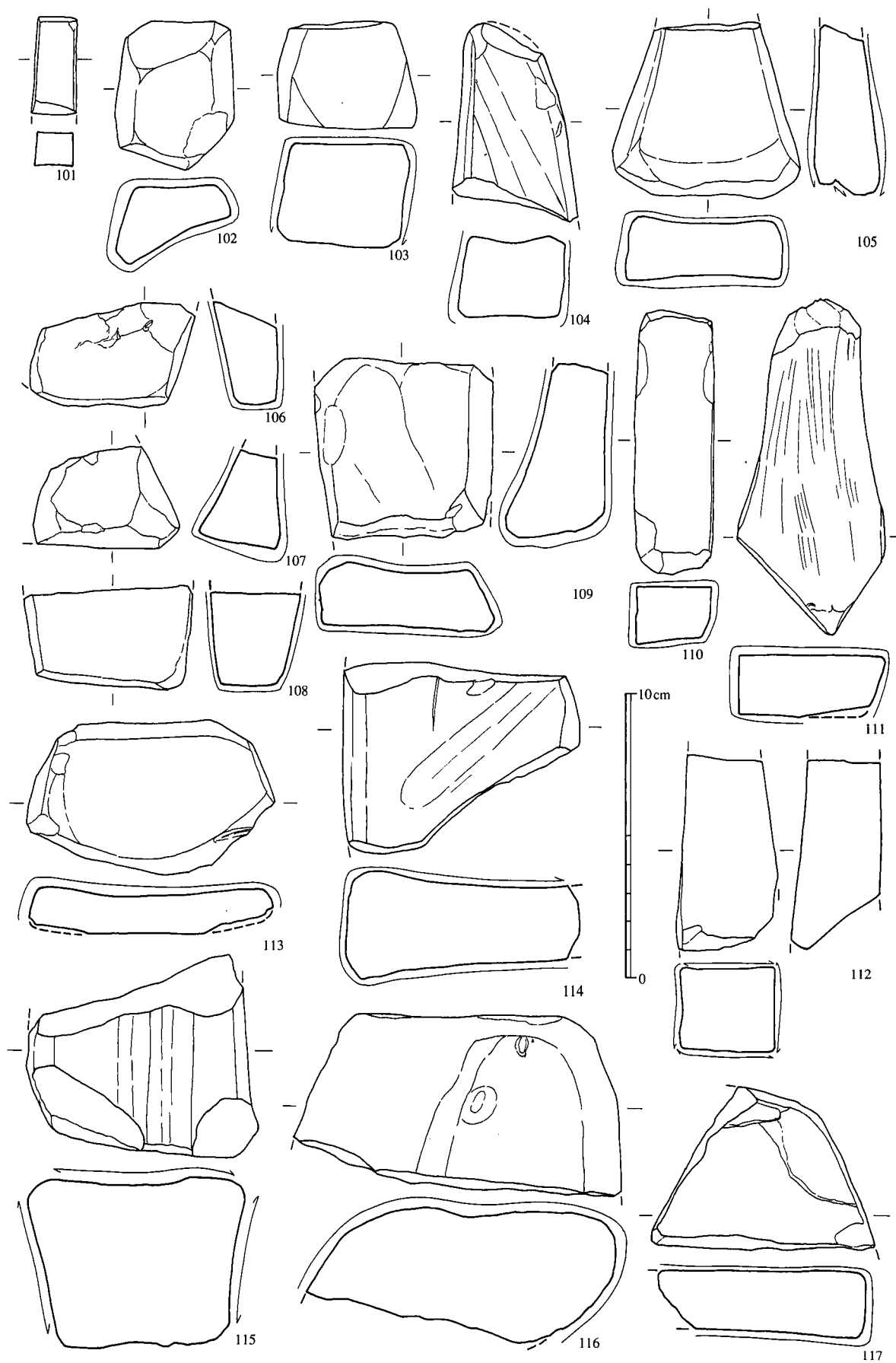
第166図 磨製石器・石製品実測図（4）（1／2）

91～100は磨製石斧。91・92・98は蛇紋岩、93は結晶片岩、94・99は安山岩、95は凝灰岩、96・98は砂岩と多様な石材を用いている。以上の石斧のうち、90・91は縄文系と判断される。

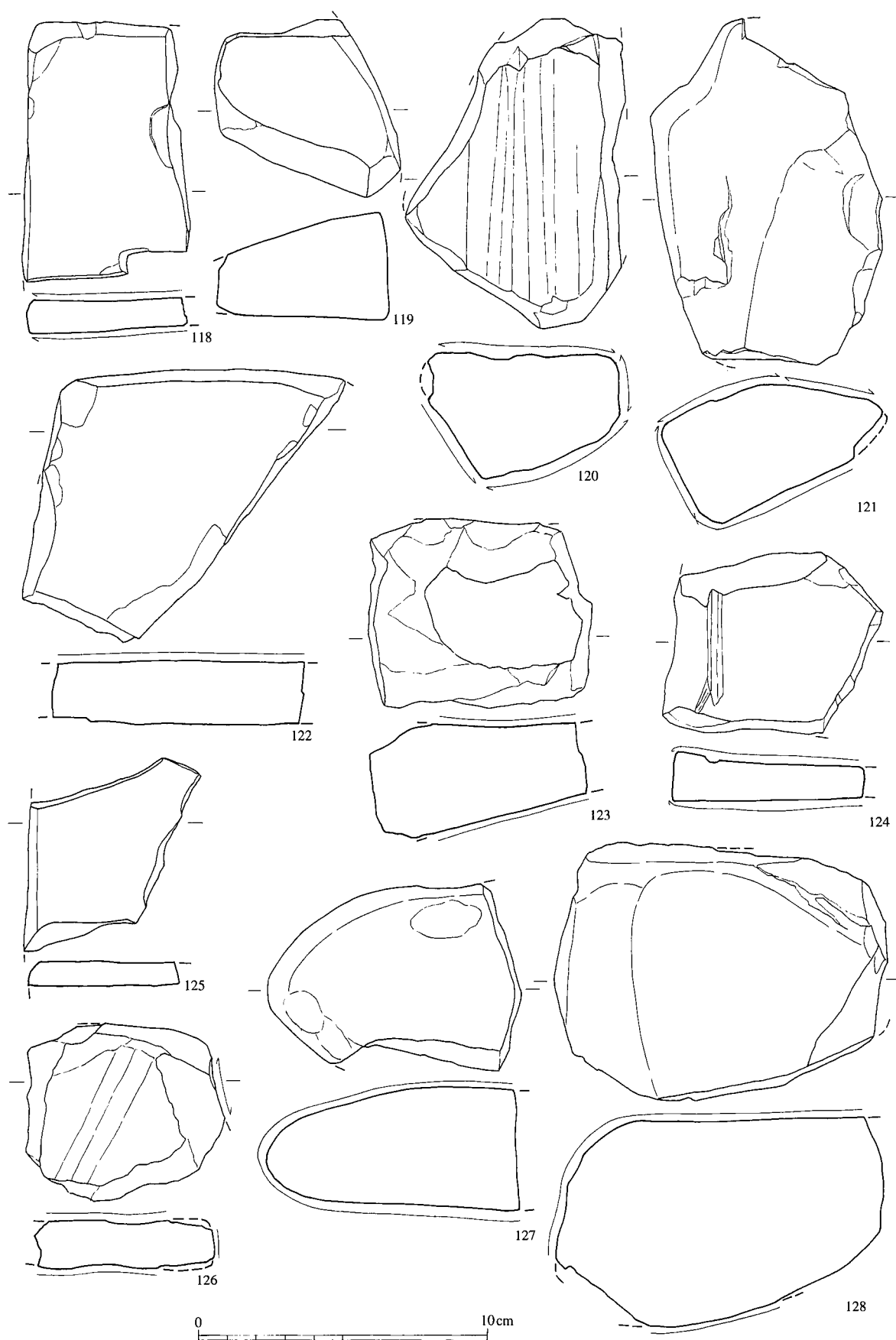
101～138は砥石で、そのうち136～138は凹石として再利用している。砂岩製のものがほとんどであるが、122・130・132は凝灰岩、127は安山岩、129・134～136は片岩、133は花崗岩製である。

139は安山岩製の磨石。表裏の2面は凹石として使用。

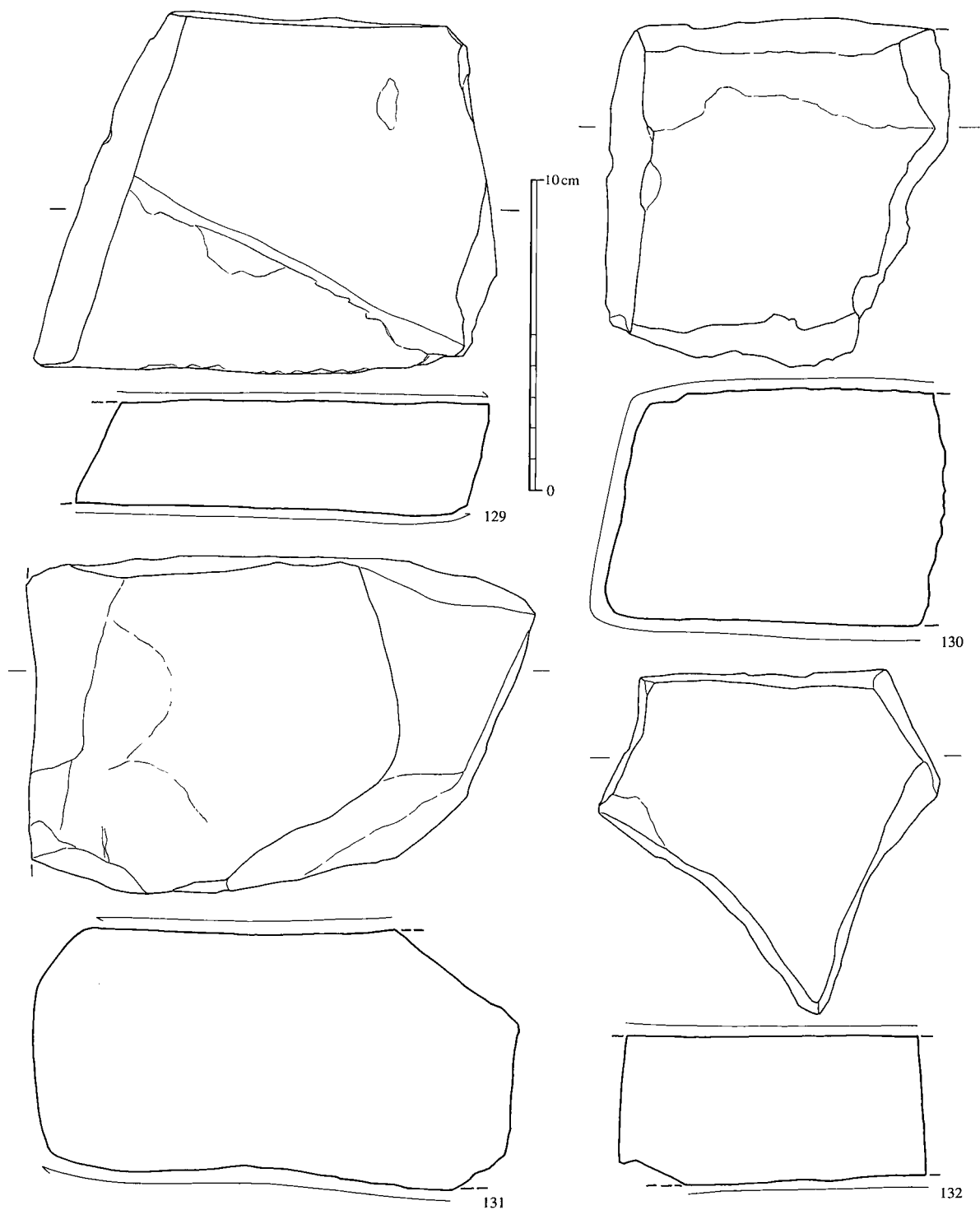
140・141は安山岩製の磨石。ともに敲石として使用し、140については凹石も兼ねている。140は中期後半でも古い時期と考えられる37号土坑から出土した。



第167図 磨製石器・石製品実測図 (5) (1/2)



第168図 磨製石器・石製品実測図（6）（1／2）

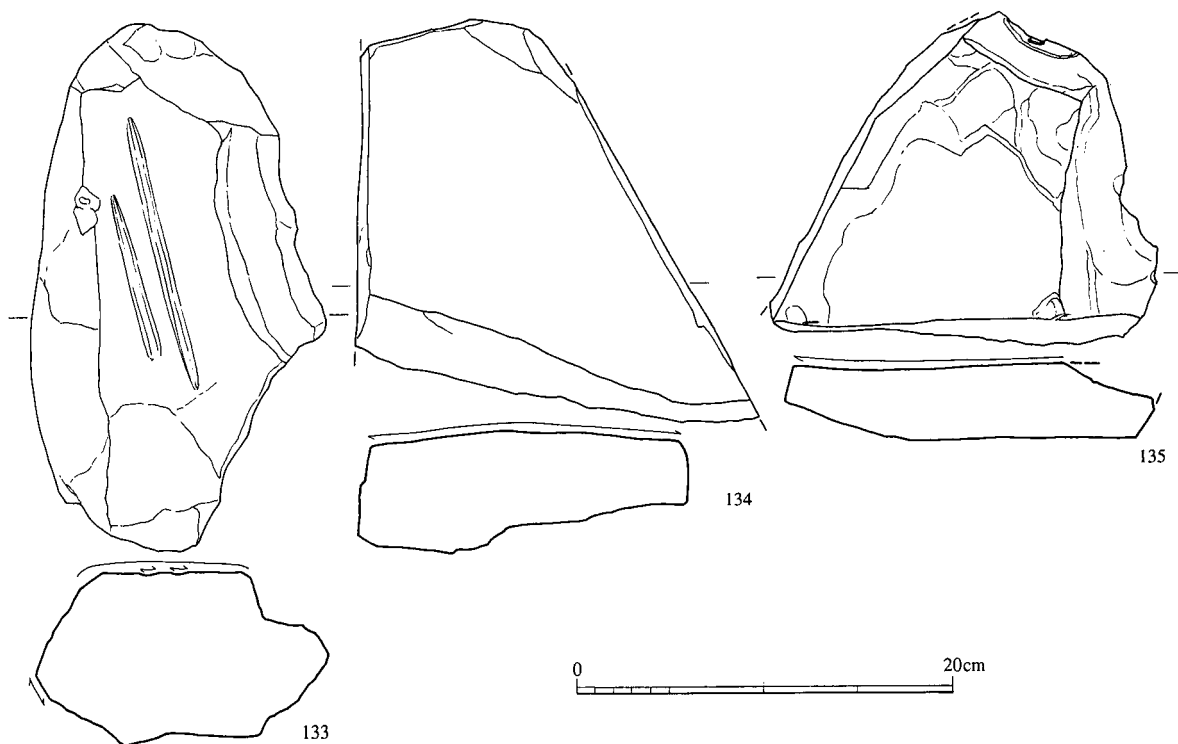


第169図 磨製石器・石製品実測図（7）（1／2）

（3）打製石器

各遺構、遺構面及び包含層のみならず、重機で除去した排土からの採集品も含めて多数の安山岩、黒曜石を主体とする打製石器が出土している。また、久留米市北野町の弥生時代遺跡では瑪瑙・石英質の石器の出土することが大きな地域的特徴となっているが、本遺跡でも製品と推測されるもの、石材として搬入されたものなどが多数、出土している。

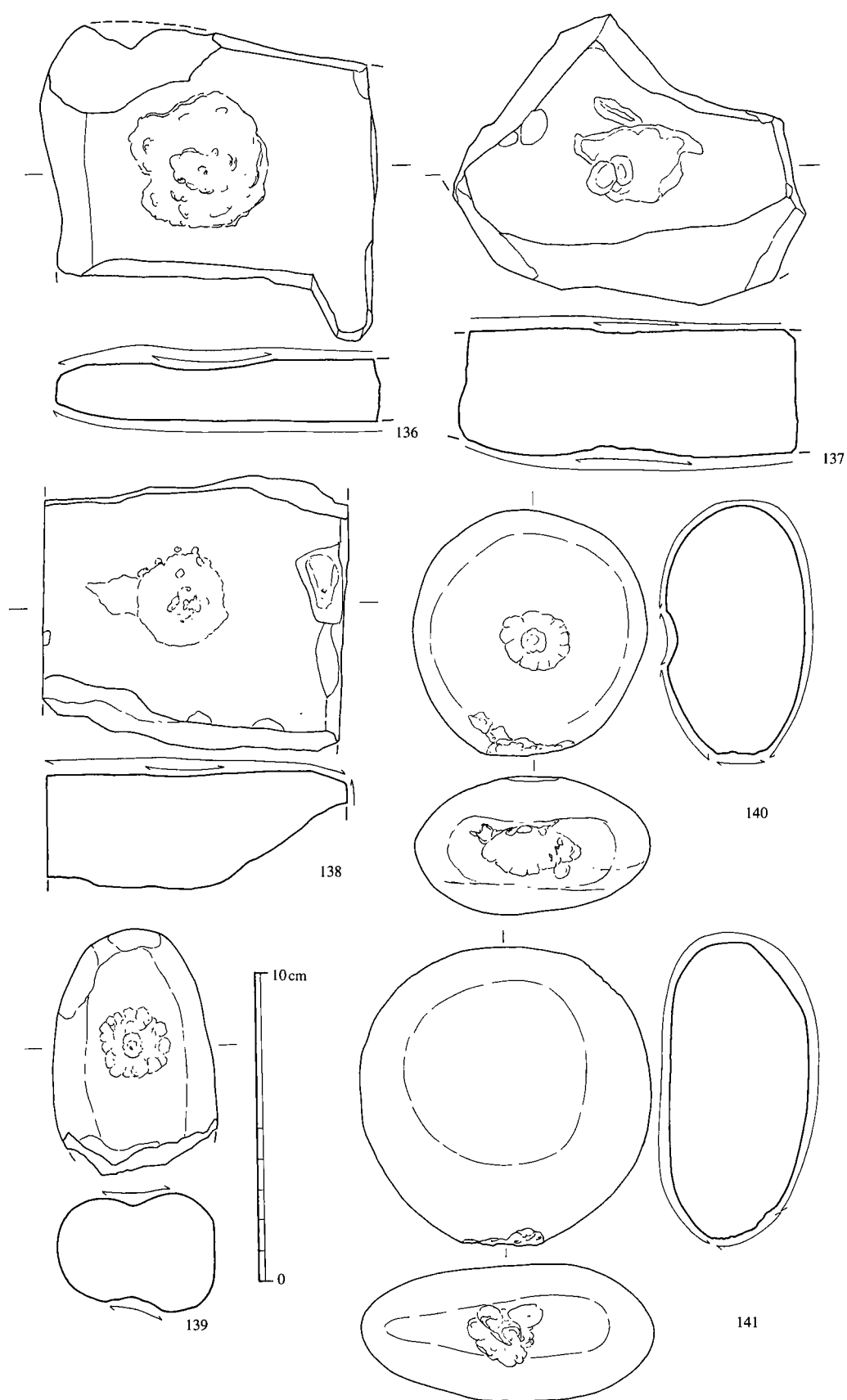
これらの石器のうち、石鏃・石錐・スクレーパーは遺構から遊離したものを含め、同定可能な全



第170図 磨製石器・石製品実測図(8)(1/2)

第3表 磨製石器・石製品計測表

番号	器種	出土遺構	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	番号	器種	出土遺構	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
41	石包丁	I区遺構面	片岩	13.8	7.1	0.7	101.9		92	磨製石斧	遺構面	蛇紋岩	9.3	5.2	2.1	182.8	
42	石包丁	住34	輝緑凝灰岩	(12.9)	6.8	0.6	(72.4)		93	磨製石斧	土74	結晶片岩	8.5	4.8	1.2	97.8	
43	石包丁	P158	輝緑凝灰岩	13.7	4.0	0.7	59.1		94	磨製石斧	土3	安山岩	(9.8)	(5.2)	0.8	(72.6)	
44	石包丁	溝3-1区	輝緑凝灰岩	9.4	4.4	0.7	41.7		95	磨製石斧	住25	凝灰岩	(5.8)	5.1	0.7	(40.2)	
45	石包丁	住32	輝緑凝灰岩	9.7	3.9	0.8	40.7		96	磨製石斧	土136	砂岩	(4.6)	(6.6)	(2.1)	(63.7)	
46	石包丁	土3	輝緑凝灰岩	8.7	3.7	0.8	35.8		97	磨製石斧	P262	蛇紋岩	(12.5)	(8.0)	(3.4)	(620.6)	
47	石包丁	遺構面	輝緑凝灰岩	(9.0)	(4.3)	0.8	(49.9)		98	磨製石斧	土63	砂岩	(9.2)	(7.4)	(3.5)	(385.2)	
48	石包丁	住34	輝緑凝灰岩	11.0	5.6	0.6	60.2		99	磨製石斧	住29	安山岩	(8.8)	(7.0)	3.8	(353.6)	
49	石包丁	溝3南端上層	凝灰岩	(8.0)	(3.8)	0.6	(35.4)		100	磨製石斧	住8	片岩	(5.6)	(7.0)	1.0	(59.3)	
50	石包丁	土71下層	片岩	(4.3)	(3.4)	0.6			101	砥石	住25	砂岩	(3.3)	1.5	1.2	(12.3)	
51	石包丁	遺構面	輝緑凝灰岩	(7.2)	(4.6)	0.6	(27.5)		102	砥石	住35	砂岩	5.2	4.2	2.8	64.5	
52	石包丁	遺構面	凝灰岩	(6.4)	(5.5)	0.6	(26.8)		103	砥石	土19	砂岩	3.7	4.9	3.6	110.5	
53	石包丁	土107	片岩	(7.6)	(5.2)	0.7	(36.8)		104	砥石	E区遺構面	砂岩	(7.0)	(4.4)	(2.8)	104.3	
54	石包丁	E区遺構面	粘板岩	(4.9)	(4.4)	0.6	(18.8)		105	砥石	住13・土16上層	砂岩	(7.2)	6.6	2.3	(126.3)	
55	石包丁	溝3	輝緑凝灰岩	(6.9)	4.9	0.6	(34.7)		106	砥石	土102上層	砂岩	(3.6)	(5.7)	(2.2)	(45.4)	
56	石包丁	住24	輝緑凝灰岩	(4.4)	(5.3)	0.6	(18.4)		107	砥石	土36	砂岩	(3.6)	5.1	2.8	53.3	
57	石包丁	土66	輝緑凝灰岩	(4.9)	(4.8)	0.8	(24.9)		108	砥石	住42	砂岩	(3.7)	(5.8)	(3.2)	(100.0)	
58	石包丁	土68	輝緑凝灰岩	(4.1)	(4.7)	0.5	(10.6)		109	砥石	溝3-2区下層	砂岩	(6.4)	(6.2)	2.5	(143.6)	
59	石包丁	住43	輝緑凝灰岩	(5.9)	(3.2)	0.5	(11.9)		110	砥石	住19P4	砂岩	9.2	2.8	2.0	96.3	
60	石包丁	溝3-1区	輝緑凝灰岩	(8.0)	(7.2)	0.6	(50.3)		111	砥石	住34	砂岩	11.6	5.2	2.4	157.2	
61	石鏃	H-I区遺構面	片岩	17.5	3.7	0.5	54.7		112	砥石	P252	砂岩	(6.9)	3.5	3.0	(110.5)	
62	石鏃	土92	砂岩	(8.8)	5.1	0.7	(43.3)		113	砥石	E区遺構面	砂岩	5.4	8.6	1.7	82.6	
63	石鏃	P203	輝緑凝灰岩	(10.0)	(6.0)	1.5	(113.5)		114	砥石	溝3上層	砂岩	(6.7)	(8.7)	3.8	(239.6)	
64	石鏃?	土108上層	片岩	(10.6)	(6.4)	1.0	(107.2)		115	砥石	C区北遺構面	砂岩	(7.1)	8.1	6.1	(435.8)	工具痕あり
65	紡錘車	住31北包含層	安山岩	4.1		0.5	(9.8)		116	砥石	土129	砂岩	(6.2)	10.7	(4.7)	(484.1)	
66	紡錘車	F区遺構面	安山岩	4.2		0.7	(5.7)		117	砥石	溝4-I区	砂岩	(5.7)	(7.7)	2.3	(132.1)	
67	紡錘車	土111	片岩	6.0		0.5	(10.7)		118	砥石	住24P1	砂岩	(14.0)	(5.8)	1.2	(109.8)	
68	刺突具	E区南包含層	輝緑凝灰岩	4.4	0.7	0.4	1.8		119	砥石	溝3上層	砂岩	(6.4)	(6.2)	3.7	(167.6)	
69	ヘラ状製品	住23	砂岩	(4.6)	1.4	(0.3)	(2.9)		120	砥石	土97	砂岩	(10.9)	7.6	4.4	(441.7)	工具痕あり
70	ヘラ状製品	土100上層	片岩	6.6	1.3	0.3	6.7		121	砥石	住16	砂岩	(12.1)	8.0	4.8	(428.0)	
71	不明製品	I区遺構面	砂岩	(7.0)	(3.2)	(0.5)	(19.5)		122	砥石	溝7	凝灰岩	(8.5)	(11.1)	2.4	(324.9)	
72	管玉	土99ピット	碧玉	(1.6)		0.7	1.1		123	砥石	溝3-I区中層	砂岩	(7.7)	(6.6)	(4.0)	(230.5)	
73	管玉	E区遺構面	碧玉	(0.9)		0.4	0.1		124	砥石	H-I区遺構面	砂岩	(10.3)	(7.6)	1.7	(105.3)	工具痕あり
74	磨製石鏃	遺構面	輝緑凝灰岩	5.0	1.5	0.4	(3.9)		125	砥石	P64周辺包含層	砂岩	(6.8)	(6.1)	0.9	(60.7)	
75	磨製石鏃	溝7上層	頁岩	(4.7)			(1.9)		126	砥石	土24	砂岩	(6.2)	(6.8)	1.7	(105.6)	工具痕あり
76	磨製石鏃	P76	輝緑凝灰岩	3.9	2.5	0.3	3.9		127	砥石	溝7下層	安山岩	(8.8)	(6.5)	(4.4)	(392.0)	
77	磨製石剣	土16	安山岩	4.9	3.1	1.1	(21.6)	茎に刻みあり	128	砥石	C区遺構面	砂岩	9.0	(11.5)	7.4	(934.7)	
78	磨製石剣	遺構面	砂岩	(8.1)	(4.7)	1.9	81.3		129	砥石	土79	片岩	11.6	(14.8)	3.8	(1120.9)	
79	磨製石剣	住25	輝緑凝灰岩	(13.2)	3.4	1.5	(82.2)		130	砥石	土150	凝灰岩	(11.2)	(11.0)	7.7	(1362.7)	
80	扁平片刃石斧	溝3-1区	頁岩	3.9	2.0	0.7	12.1		131	砥石	P60	砂岩	(10.8)	(16.3)	8.4	(2513.6)	
81	扁平片刃石斧	土122	頁岩	3.9	2.3	0.3	5.8		132	砥石	土142	凝灰岩	(11.1)	(10.9)	4.8	(830.6)	
82	扁平片刃石斧	住32	頁岩	(3.4)	2.6	0.7	13.3		133	砥石	住33	花崗岩	28.2	15.8	9.3	4750	工具痕あり
83	扁平片刃石斧	I区遺構面	頁岩	(2.8)	(1.5)	0.9	(7.5)		134	砥石	溝4	片岩	(21.6)	(21.8)	6.5	(3570)	
84	扁平片刃石斧	溝3付近遺構面	頁岩	6.0	4.9	1.6	77.5		135	砥石	P61	片岩	(17.7)	(20.6)	4.0	(1840)	
85	柱状片刃石斧	溝3東南上層	頁岩	7.0	1.3	1.7	33.7		136	凹石	溝4	片岩	(10.4)	(10.9)	2.1	(387.8)	磨石の再利用品
86	柱状片刃石斧	C区遺構面	頁岩	(8.5)	(2.6)	(1.7)	58.1		137	凹石	土130	砂岩	(9.4)	(11.5)	4.3	(600.9)	磨石の再利用品
87	柱状片刃石斧	土107	頁岩	(13.1)	5.1	(1.4)	132.3	挟り入	138	凹石	土70	砂岩	(9.0)	9.7	(3.8)	(569.8)	磨石の再利用品
88	柱状片刃石斧	住18	頁岩	(9.2)	(5.6)	(1.2)	(62.1)		139	凹石	住42	安山岩	(8.0)	5.2	3.9	(235.3)	磨石の再利用品
89	扁平打製石斧	遺構面	泥岩	(5.0)	6.1	1.2	(72.2)	刃部磨製	140	砥石	土37	安山岩	8.0	7.5	4.5	371.2	磨石・凹石の再利用品
90	扁平打製石斧	溝4-I区	片岩	13.6	9.1	1.2	248.8		141	砥石	溝3-1区	安山岩	9.7	9.4	4.5	605.9	磨石の再利用品
91	磨製石斧	住32	蛇紋岩	6.7	2.8	1.3	43.5										



第171図 磨製石器・石製品実測図 (9) (1/2)

個体を抽出し、観察表を作成した。ただ、時間的な制約もあり、遺構に伴うもの、特徴的なものを基準として実測図を作製し、掲載した。

また、使用痕のある剥片は、明確に使用したと思われるものを中心に抽出し、観察表・実測図を作成し、掲載した。

なお、抽出しなかった剥片・碎片の例として図版97に147号土坑、34号竪穴住居跡出土の剥片類を掲載している。

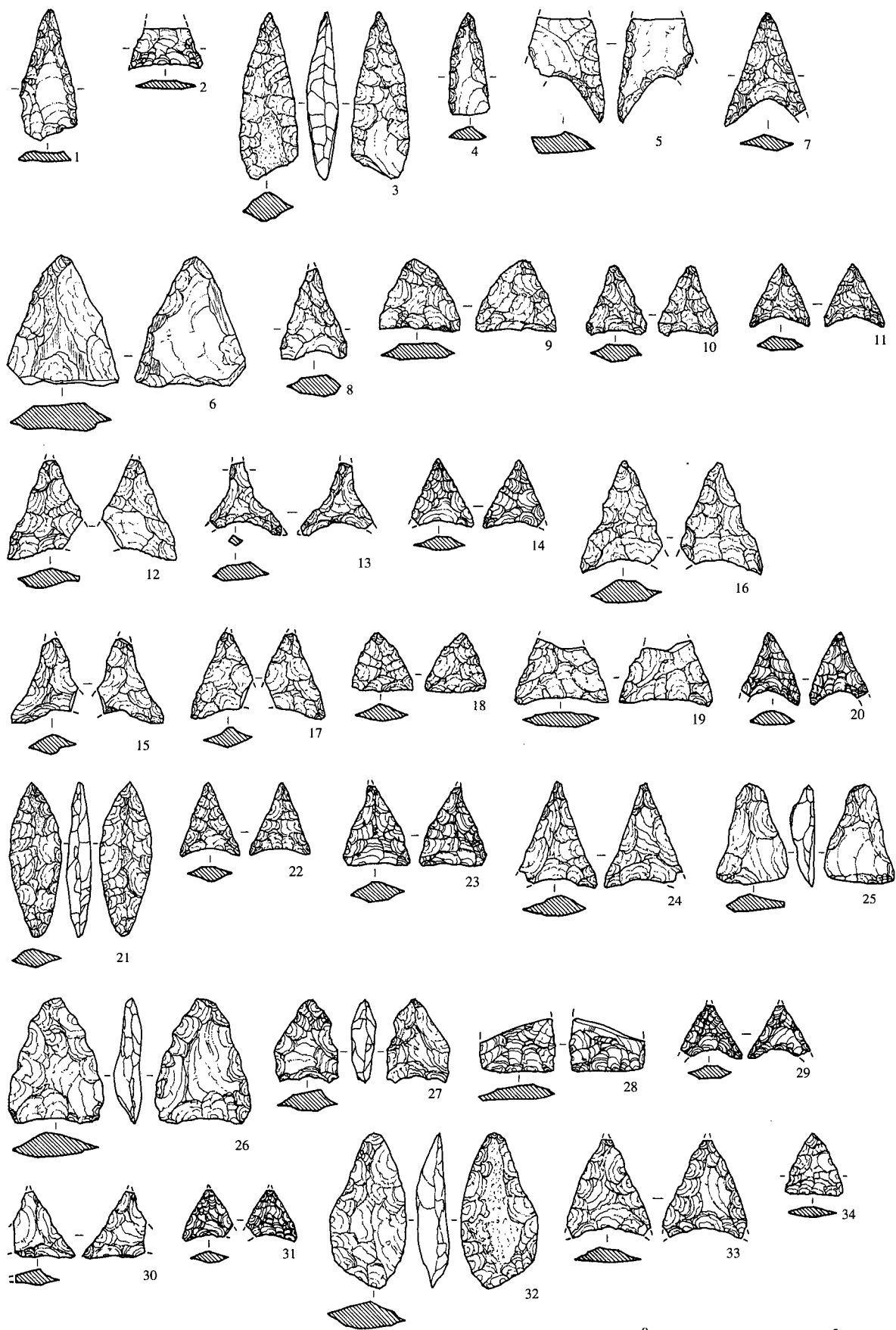
石鏃（図版88・89、第172～174図）

1～82は石鏃。石材としては安山岩が大多数を占め、一部に黒曜石が含まれる。

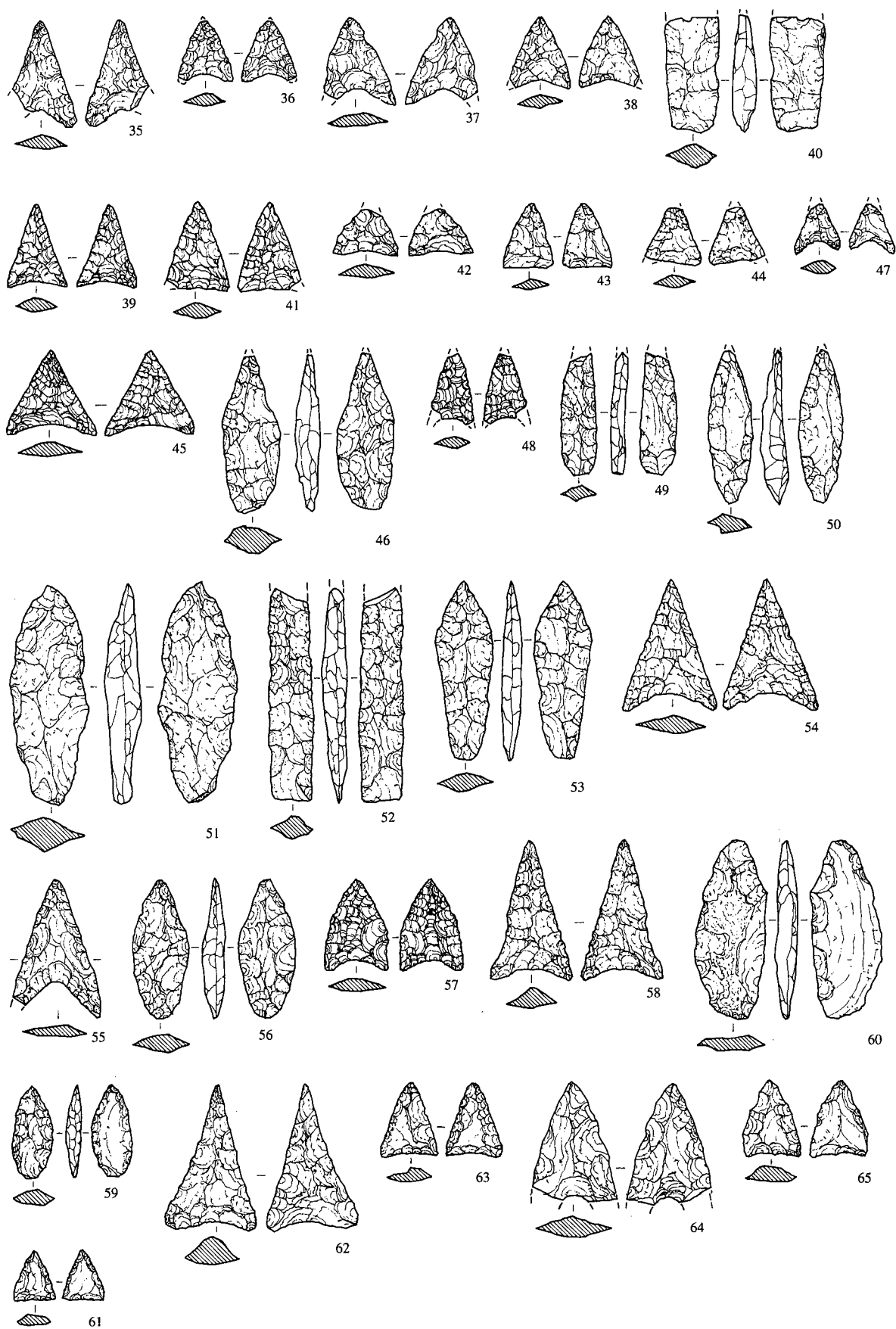
1・5は石鏃として図示したが、1は先端を、5は脚として図示した部分をドリル状に使用したものか。3はほぼ完形の尖基式。表面に礫面を残す。6は唯一の片岩製で、表面に擦痕を残している。石包丁の端部と考えるべきか。21は整った形態の尖基式族。25は石鏃未製品として図示したが、スクレーパーの可能性があろう。26・32・60は他の石鏃と比べて大形で、剥離面も大きく、

第4表 打製石器計測表（1）

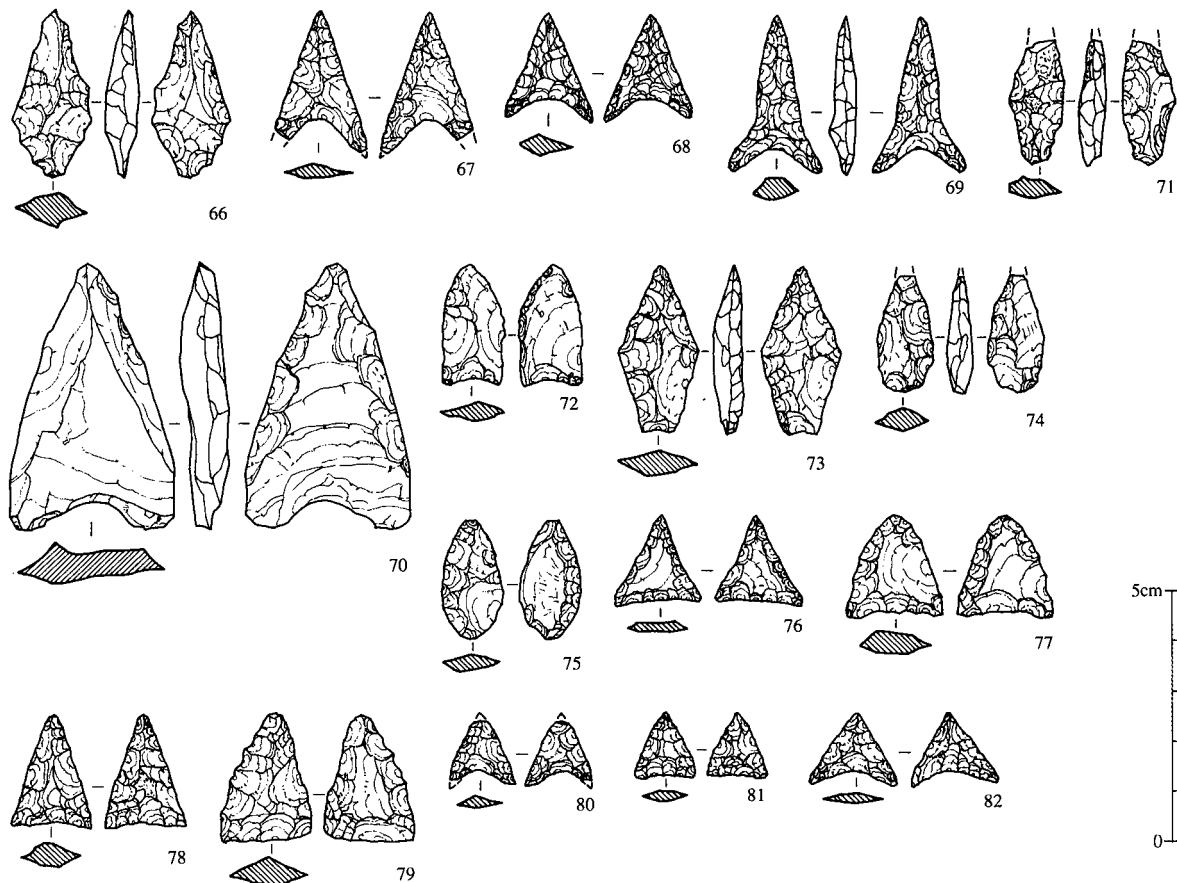
長さ、幅、厚さはmm単位、重量はg単位、数字に×を付したものは残存値										
登録番号	図	器種	出土遺構	石材	長さ	幅	厚さ	重量	形態的特徴	備考
1	55	石鏃	溝4北包含層	安山岩	36 ×	23	4	1.9 ×	凹基	灰色緻密で良質な石材、長脚
2		石鏃	土26・44上層	黒曜石	15 ×	16 ×	3	0.5 ×	凹基	
3	1	石鏃	住21東包含層	安山岩	34	14	4	1.9 ×	基部破損	石鏃の可能性あり
4		石鏃	住13	安山岩	24 ×	26 ×	8	4.2 ×	平基	未製品か
5	34	石鏃	土54北包含層	安山岩	16	15	4	0.7	平基	
6	2	石鏃	住21・土67間包含層	黒曜石	10 ×	19	3	0.6 ×	平基	基部かすかに凹む、脚端少し欠
7	4	石鏃	住22東包含層	安山岩	26	10	4	1.1	平基	
8	5	石鏃	住24東包含層	安山岩	28 ×	20 ×	5	2.2 ×	長脚	石鏃の可能性あり
9	6	石鏃	住24覆土	片岩	34 ×	29 ×	5	6.3 ×	基部破損	一部研磨、石包丁未製品の可能性
10		石鏃	住22覆土	黒曜石	19 ×	10 ×	5	0.7 ×	長脚	あるいは石鏃か
11	7	石鏃	住30	安山岩	31	21 ×	4	1.1 ×	凹基	基部挟り大
12	8	石鏃	住30	安山岩	34 ×	17 ×	5	1.6 ×	凹基	
13		石鏃	住33	安山岩	23	16 ×	5	1.5 ×	凹基	基部挟り小
14	9	石鏃	住34	安山岩	21	18	4	1.5	平基	
15		石鏃	住34覆土	安山岩	18	16	5	1.1	凹基	基部挟り小
16		石鏃	住34西包含層	安山岩	16	20 ×	4	0.9 ×	凹基	基部挟り小
17	11	石鏃	住34覆土	安山岩	17	16	4	0.6	凹基	
18		石鏃	住34	安山岩	14 ×	15	2	0.4 ×	凹基	
19	12	石鏃	住34	安山岩	25	20 ×	4	1.5 ×	凹基	
20	13	石鏃	住34	安山岩	19 ×	19 ×	4	1.0 ×	長脚	側部挟り強
21	14	石鏃	住34	黒曜石	18	16 ×	3	0.6 ×	凹基	
22	15	石鏃	住34	安山岩	22 ×	18 ×	5	1 ×	凹基	側部挟り
23	16	石鏃	住34	安山岩	28	22 ×	6	1.9 ×	凹基	
24	17	石鏃	住34	安山岩	22	17 ×	5	1 ×	凹基	
25	90	石鏃	住34床面	安山岩	21	19	4	1.4		
26	18	石鏃	住35	安山岩	16 ×	15 ×	5	1 ×	平基	先端、脚端少し欠
27	19	石鏃	住35	安山岩	17 ×	24	3	1.5 ×	凹基	
28	20	石鏃	住36	安山岩	19	15 ×	4	0.7 ×	凹基	基部挟り大
29	21	石鏃	住36	安山岩	41	14	6	3.1	尖基	ほぼ完形
30	22	石鏃	住36	安山岩	19	16	3	0.7	凹基	ほぼ完形
31	23	石鏃	住36北包含層	黒曜石	21	17 ×	6	1.6 ×	平基	基部かすかに凹む、脚端少し欠
32	24	石鏃	住37	安山岩	27	20 ×	6	1.8 ×	凹基	基部挟り小
33	25	石鏃	住37	安山岩	26	19	6	2.5	平基	未製品あるいはスクレーパーの可能性
34	26	石鏃	住41	安山岩	33	25	6	4.6	凹基	側部鋸歯状、未製品か
35	27	石鏃	住44	安山岩	23 ×	17 ×	7	2.3 ×	凹基	未製品か
36	28	石鏃	住44	黒曜石	14 ×	20	4	1.1 ×	平基	
37	29	石鏃	住44	黒曜石	14 ×	16 ×	4	0.6 ×	凹基	基部挟り大、先端少し欠
38	30	石鏃	住44	安山岩	16 ×	18 ×	5	1 ×	平基	
39	31	石鏃	住44	黒曜石	13 ×	13 ×	3	0.3 ×	凹基	先端、脚端少し欠
40	91	石鏃	住44	安山岩	27	27	5	2		ほぼ完形
41	32	石鏃	土9	安山岩	41	21	8	6.1	凸基	礫面残す、未製品か
42	33	石鏃	土28覆土上層	安山岩	25 ×	22 ×	3	1.6 ×	凹基	薄い
43	56	石鏃	溝4下層	安山岩	37	15	6	2.5	尖基	ほぼ完形
44	36	石鏃	土64	安山岩	16 ×	15 ×	3	0.5 ×	凹基	先端、脚端少し欠
45	35	石鏃	土59覆土	安山岩	28	17 ×	3	1.1 ×	凹基	
46	37	石鏃	土68	安山岩	23	18 ×	3	0.9 ×	凹基	
47	38	石鏃	土70	安山岩	19	16 ×	3	0.8 ×	凹基	
48	39	石鏃	土73	黒曜石	22 ×	16	3	0.7 ×	凹基	基部挟り小、先端少し欠損
49	40	石鏃	土74	安山岩	30	15 ×	6	3 ×	平基	長く側縁平行
50	41	石鏃	土79	黒曜石	23	16 ×	4	1.2 ×	平基	基部かすかに凹む、脚端少し欠
51		石鏃	土90南包含層	安山岩	24	16	5	1.8	凸基	未製品か
52	42	石鏃	土90	安山岩	12 ×	17	3	0.5 ×	凹基	
53	44	石鏃	土92	安山岩	15 ×	15 ×	3	0.6 ×	平基	基部かすかに凹む
54	46	石鏃	土92	安山岩	41 ×	15	7	3.8 ×	尖基	先端、基部少し欠
55	45	石鏃	土92	黒曜石	22	23	4	1.1	凹基	ほぼ完形
56	47	石鏃	土95周辺包含層	安山岩	13 ×	12	3	0.3 ×	長脚	左右非対称
57	48	石鏃	土111	黒曜石	18 ×	11 ×	3	0.5 ×	凹基	
58	49	石鏃	土111覆土上層	安山岩	32 ×	9	4	1.4 ×	尖基	
59	50	石鏃	土150	安山岩	40	12	7	2.9	尖基	ほぼ完形、表面剥片剥離面残す
60	51	石鏃	土154上層	安山岩	58	22	10	10.7	尖基	ほぼ完形、厚く基部に礫面残す未製品か



第172図 打製石器実測図 (1) (2 / 3)



第173図 打製石器実測図 (2) (2 / 3)



第174図 打製石器実測図 (3) (2 / 3)

32・60は礫面・主要剥離面を残している。これらは素材から調整を余り加えていない段階の未製品か。70も剥離が大振りであり、大形の未成品と考えている。40・49・52は細長く、柳葉形に近い形状のものである。53は先端が幅広くなるが、ほぼ同様の形態。68は脚、先端部が細く、抉りの大きい特徴的な形態を呈す。51・62は大形の部類に属し、61・80・81は小型品。

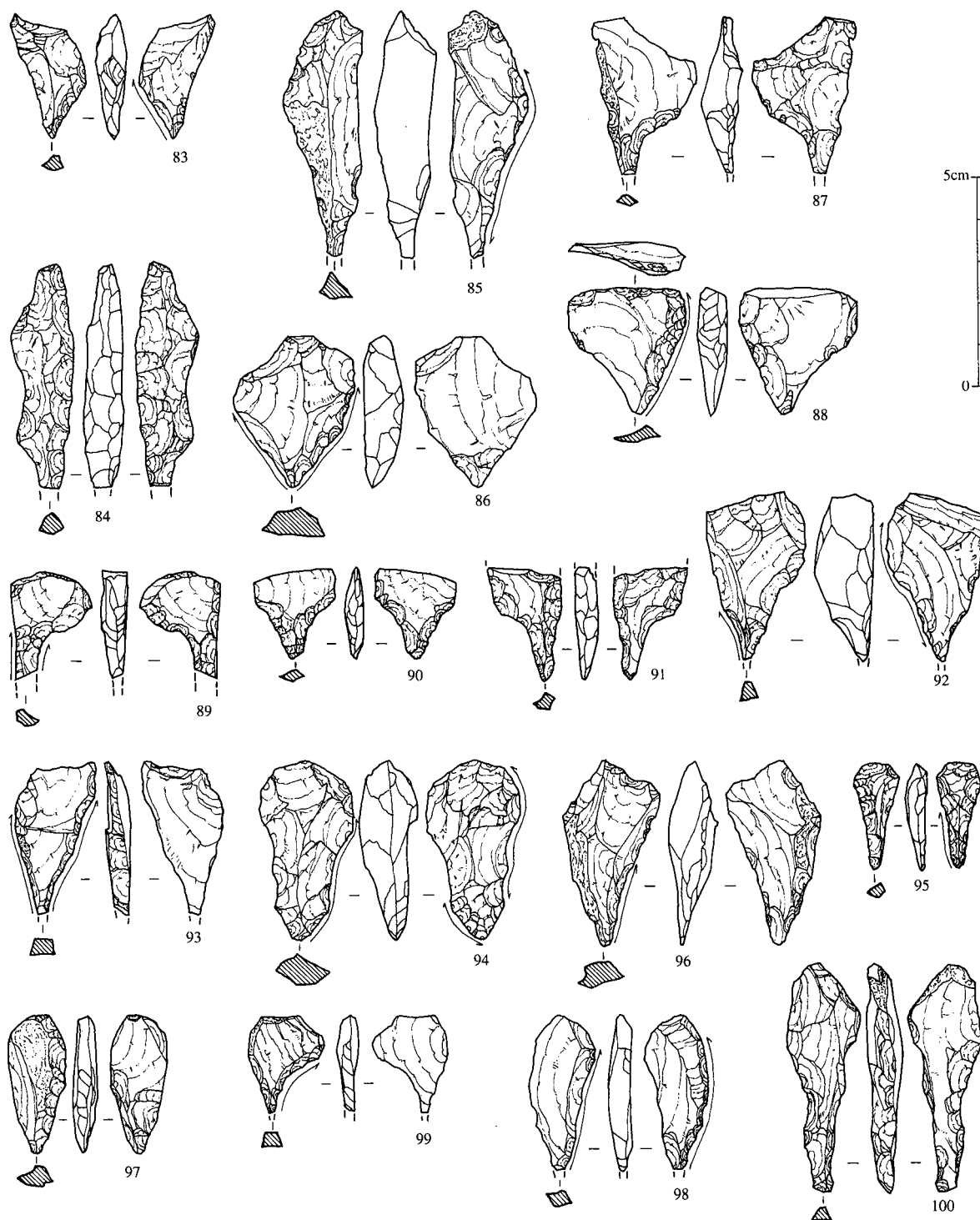
なお、打製石鏃は調査区各所から出土しているが、弥生時代後期前葉の34号竪穴住居跡からまとまった点数が出土している。本遺跡では弥生時代前期以来、多数の遺構が重複しており、混入の可能性は否定できない。これについては周辺遺跡との比較から判断すべきであろう。

石鏃 (図版89・90、第179～177図)

安山岩製と黒曜石製があるが、安山岩製のものが多い。特に黒曜石製品は小型品にかぎられるようである。使用した部分は側面から抉りを入れて細くし、周囲に使用時に生じたと思われる階段状剥離 (図の矢印部) のみられるものが多い。また、先端まで完存するものは少ない。

形態としては原石から打ち欠いてとれる角錐状の剥片素材の先端のみを加工するもの (85・108・114)、主要剥離面・礫面を大きく残し、剥片の先端部分を集中的に加工するもの (86～88・97・98・102・122・126・132)、表裏から剥離を施して形態を整え、先端部を細く仕上げるもの (84・91・111・113・115・118・120・125) がある。93・98・117・124は横長剥片の鋭利な端部に加工を加えて製作したものか。

84は中央に2個所の突起があり、上下両端を使用した可能性が考えられる。89・91・111・117は片方の側縁からの抉りが顕著である。105はドリルとして図示したが、あるいは石鏃となるか。

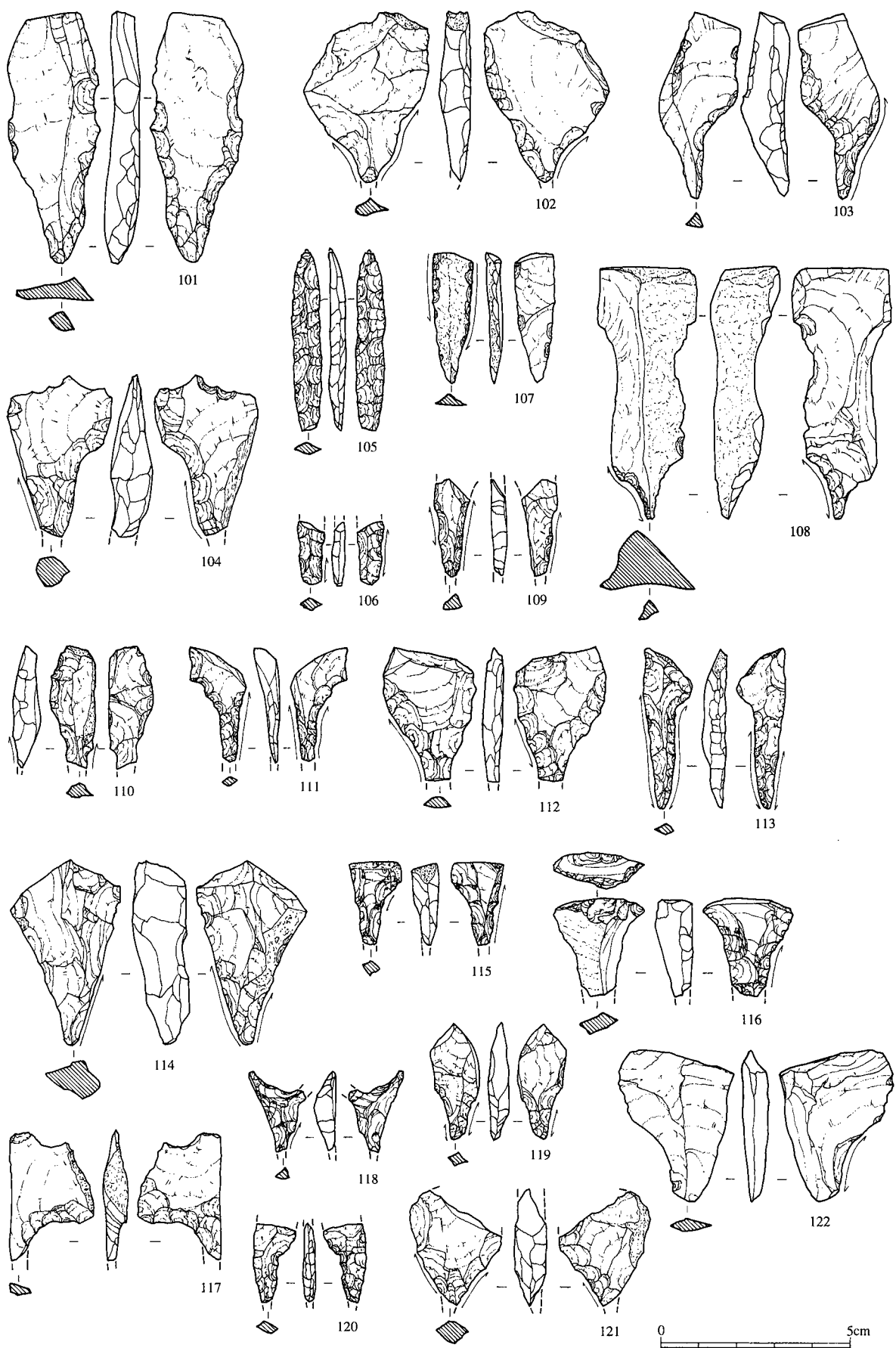


第175図 打製石器実測図 (4) (2 / 3)

スクレイパー (図版91～95 第178図～第185図)

133～206はスクレイパーである。安山岩製のものが圧倒的に多く、黒曜石製のものはわずか2点に過ぎない。

133～163は主として縦長剥片を使用したサイドスクレイパー。形状もばらつきが多く、剥離調整の技法もまちまちである。基本的には素材の形状をそのまま活かし、側縁にのみ簡単な剥離調整を



第176图 打製石器実測図 (5) (2 / 3)

第5表 打製石器計測表(2)

長さ、幅、厚さはmm単位、重量はg単位、数字に×を付したものは残存値

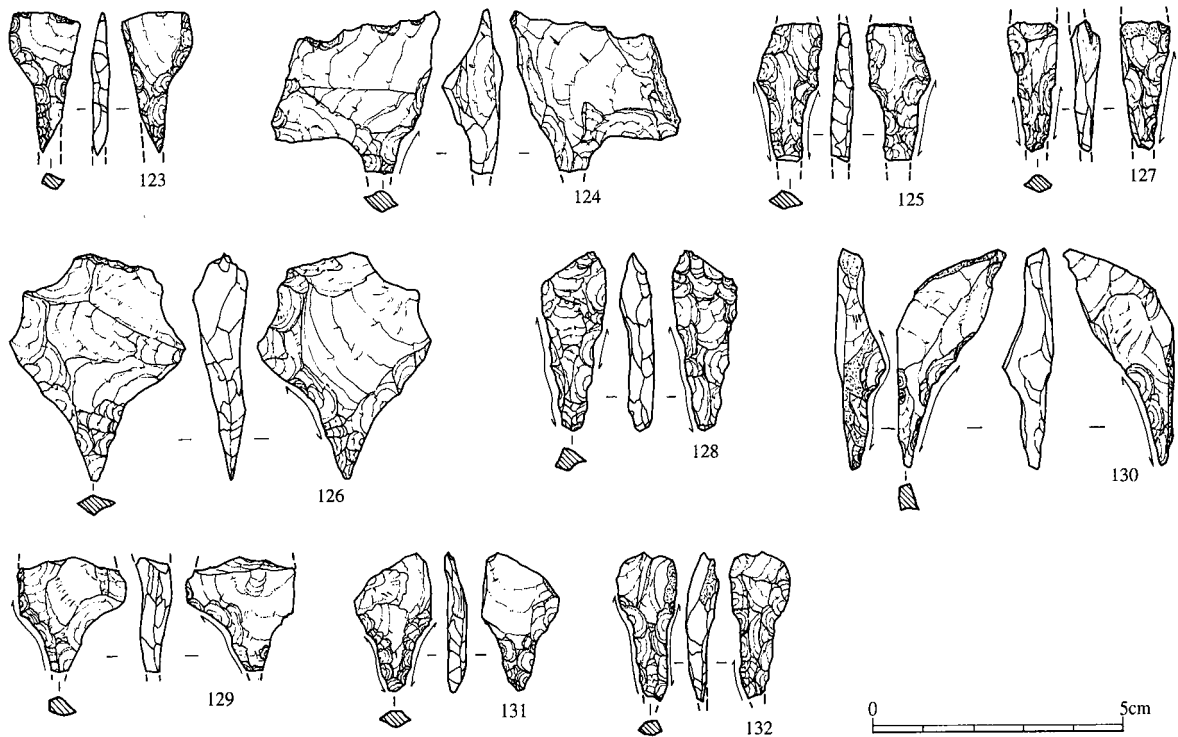
登録番号	図	器 種	出土遺構	石材	長 さ	幅	厚さ	重 量	形態の特徴	備 考
61	52	石鏃	溝3-1区	安山岩	54 ×	12	6	4.4 ×	平基	長く側縁平行、灰色石材
62	53	石鏃	溝3-1区	安山岩	33	24	5	2.1	凹基	ほぼ完形
63		石鏃	P66	安山岩	23	15 ×	4	1.1 ×	凹基	
64	57	石鏃	P97	黒曜石	24	16	3	1	凹基	五角形、ほぼ完形
65	58	石鏃	P105	安山岩	36	21	6	2.5	凹基	ほぼ完形
66		石鏃	P111	安山岩	29	20	4	1.8	凹基	
67	59	石鏃	P195	安山岩	24	10	4	1.1	尖基	ほぼ完形、灰色石材
68	60	石鏃	P216	安山岩	46	19	5	4.8	尖基	断面、剥離面を大きく残す未製品か
69	61	石鏃	P260	安山岩	13	10	3	0.4	平基	ほぼ完形、小型品
70	62	石鏃	P278	安山岩	38	15	8	4.3	凹基	ほぼ完形、厚い
71	63	石鏃	A区遺構面	安山岩	19	14	4	0.9 ×	平基	ほぼ完形、基部かすかに凹む、灰色石材
72		石鏃	A-C区遺構面	安山岩	12 ×	18	3	0.6 ×	凹基	
73		石鏃	B区南遺構面	安山岩	15	16	3	0.6	凹基	ほぼ完形
74		石鏃	B区南遺構面	安山岩	37	25 ×	6	3.6 ×	凹基	挟り深い、灰色石材
75		石鏃	B区北遺構面	安山岩	25	20 ×	3	1.1 ×	凹基	灰色石材、脚端少し欠
76		石鏃	B区遺構面	安山岩	23	20	3	0.7	凹基	ほぼ完形
77		石鏃	B区西遺構面	安山岩	16	13 ×	4	0.5 ×	平基	脚端少し欠、基部かすかに凹む
78	64	石鏃	B区遺構面	安山岩	31 ×	22 ×	5	2.9 ×	凹基	基部挟り大、灰色石材
79		石鏃	B区遺構面	安山岩	16	13	4	0.7	平基	ほぼ完形、基部かすかに凹む
80		石鏃	B区遺構面	安山岩	21	18 ×	5	1.5 ×	凸基	脚端少し欠、基部かすかに突出
81		石鏃	C区北遺構面	安山岩	27 ×	24	6	1.9 ×	凹基	先端少し欠
82		石鏃	C区南遺構面	安山岩	18	18	3	1.2	平基	ほぼ完形、調整粗い
83		石鏃	C区遺構面	安山岩	23 ×	17 ×	4	1.2 ×	凹基	先端、脚端少し欠
84		石鏃	C区遺構面	安山岩	13 ×	15	4	0.4 ×	凹基	基部挟り大
85		石鏃	C区遺構面	安山岩	31	23	6	3.4 ×	凹基	基部挟り小、調整粗く未製品か
86		石鏃	D区遺構面	安山岩	25 ×	15 ×	5	1.5 ×	凹基	基部挟り小
87		石鏃	D区遺構面	黒曜石	22 ×	21 ×	6	2.4 ×	凹基	剥離面大きく残、縁のみ調整、他器種の可能性
88	65	石鏃	D区遺構面	安山岩	20	15	4	1.2	平基	ほぼ完形、基部かすかに凹む
89		石鏃	D区遺構面	安山岩	24	17 ×	4	1 ×	凹基	灰色石材
90		石鏃	D区遺構面	安山岩	31	18 ×	5	1.8 ×	凹基	
91		石鏃	D区遺構面	安山岩	23	17	7	2.2		剥離面、断面を残す未製品、基部突出
92		石鏃	D-E区遺構面	安山岩	26	16	6	2.4	凸基	ほぼ完形、調整粗く未製品か
93	66	石鏃	D-E区遺構面	安山岩	33	16	7	2.7	尖基	ほぼ完形、調整粗く未製品か
94	67	石鏃	E区南遺構面	安山岩	28	18 ×	3	0.9 ×	凹基	挟り深い、薄く丁寧な仕上げ
95	68	石鏃	E区遺構面	黒曜石	22	17	4	0.7	凹基	ほぼ完形、挟り深い、左右非対称
96	69	石鏃	E区遺構面	安山岩	31	18	5	1.4	凹基	ほぼ完形、細身、基部挟り大きい
97		石鏃	E区遺構面	安山岩	30	20 ×	5	1.8 ×	平基	基部かすかに凹む、細身
98		石鏃	E区遺構面	安山岩	25 ×	15 ×	4	1.2 ×	凹基	基部挟り小
99	70	石鏃	E区遺構面	安山岩	53	33	8	12.7	凹基	完形、大形で調整粗い、未製品か
100		石鏃	E-F区遺構面	安山岩	20	15 ×	3	1 ×	平基	
101		石鏃	F区遺構面	安山岩	18 ×	17 ×	3	0.8 ×	凹基	先端、脚端少し欠
102	71	石鏃	F区遺構面	安山岩	25 ×	11	6	1.6 ×	尖基	先端、基部欠、断面に残す未製品か
103		石鏃	F区遺構面	安山岩	19	14	4	1	凹基	調整粗く未製品か
104		石鏃	F区遺構面	安山岩	22	16 ×	4	1 ×	凹基	脚端少し欠
105	120	石鏃	F区遺構面	安山岩	21 ×	11 ×	3	0.6 ×		基部、先端部欠
106		石鏃	F区遺構面	安山岩	28	18 ×	4	1.4 ×	凹基	灰色石材
107		石鏃	F区遺構面	安山岩	18 ×	18	4	1 ×	凹基	基部挟り小
108	123	石鏃	F区遺構面	安山岩	28 ×	14	3	1.1 ×		基部剥片剥離面大きく残す、先端欠損
109		石鏃	F-G区遺構面	安山岩	17	15	3	0.5	凹基	ほぼ完形、基部挟り小
110		石鏃	F-G区遺構面	安山岩	20 ×	20 ×	4	1.1 ×	凹基	
111		石鏃	F-G区遺構面	安山岩	18 ×	21	4	1.2 ×	凹基	先端少し欠
112		石鏃	F-G区遺構面	安山岩	20 ×	17 ×	3	0.7 ×	凹基	
113		石鏃	F-G区遺構面	安山岩	17 ×	13 ×	3	0.6 ×	平基	
114	72	石鏃	G区遺構面	安山岩	24	13	3	1.1	凹基	ほぼ完形、やや細身の五角形
115		石鏃	G区遺構面	安山岩	24	15 ×	3	1.3 ×	凹基	基部挟り小
116		石鏃	G区遺構面	安山岩	22	14 ×	3	0.8 ×	凹基	基部挟り小、脚端少し欠
117		石鏃	G区遺構面	安山岩	13	11 ×	3	0.3 ×	凹基	小型、脚端少し欠
118		石鏃	G区遺構面	安山岩	19	14	3	0.5	凹基	ほぼ完形、挟り深い、左右非対称
119		石鏃	G区遺構面	安山岩	21	17	7	1.5	凹基	ほぼ完形、厚い、基部挟り小
120	73	石鏃	G区遺構面	安山岩	33	17	5	2.3	平基	ほぼ完形
121		石鏃	G区遺構面	黒曜石	16	16	3	0.8	平基	ほぼ完形、左右非対称
122		石鏃	G区遺構面	安山岩	21	14 ×	3	0.6 ×	凹基	
123		石鏃	G区遺構面	黒曜石	19	16	3	0.6	凹基	ほぼ完形
124		石鏃	G区遺構面	安山岩	15 ×	15	3	0.5 ×	凹基	
125		石鏃	G区遺構面	安山岩	19	16	3	0.6	凹基	ほぼ完形
126	74	石鏃	H区遺構面	安山岩	23 ×	11	6	1.3 ×	尖基	下端断面を残す、未製品か
127	75	石鏃	H区遺構面	安山岩	22	12	3	1.3	尖基	ほぼ完形、調整粗い
128	76	石鏃	H区遺構面	安山岩	17	17	3	0.7	凹基	完形、剥片剥離面を表面に残す、基部挟り小
129		石鏃	I区遺構面	安山岩	35	22	7	3.8	凹基	ほぼ完形、調整粗い
130		石鏃	表探・排土中	安山岩	18	15 ×	3	0.8 ×	凹基	脚端少し欠
131		石鏃	表探・排土中	安山岩	22	17 ×	5	1.2 ×	長脚	
132		石鏃	表探・排土中	安山岩	15 ×	15 ×	3	0.7 ×	凹基	
133		石鏃	表探・排土中	安山岩	14 ×	16 ×	3	0.6 ×	凹基	調整粗く脚端に断面を残す、未製品か
134		石鏃	表探・排土中	安山岩	15 ×	19	3	1.1 ×	凹基	
135		石鏃	表探・排土中	安山岩	16 ×	15 ×	2	0.6 ×	凹基	
136	77	石鏃	表探・排土中	安山岩	20	19	5	1.9	平基	調整粗く未製品か
137		石鏃	表探・排土中	安山岩	23	19 ×	3	1.2 ×	凹基	
138		石鏃	表探・排土中	安山岩	21	14	4	1.3	凹基	ほぼ完形、調整粗く未製品か
139		石鏃	表探・排土中	安山岩	24	17 ×	5	2.0 ×	凸基	調整粗く未製品か
140	78	石鏃	表探・排土中	安山岩	22	16	4	1.3	平基	ほぼ完形、基部かすかに凹む
141		石鏃	表探・排土中	安山岩	17	14	3	0.5	凹基	ほぼ完形、左右非対称
142	79	石鏃	表探・排土中	安山岩	26	19	5	2.2	平基	ほぼ完形、調整粗く未製品か
143	80	石鏃	表探・排土中	安山岩	12 ×	13	2	0.3 ×	凹基	小型、先端少し欠
144	81	石鏃	表探・排土中	安山岩	12	13	2	0.4	凹基	ほぼ完形、小型、基部挟り小さい
145		石鏃	表探・排土中	安山岩	27	13	3	0.6	平基	ほぼ完形、基部かすかに凹む
146	82	石鏃	表探・排土中	安山岩	14	17	3	0.5	凹基	ほぼ完形
147		石鏃	表探・排土中	黒曜石	12 ×	14	3	0.5 ×	凹基	
148		石鏃	表探・排土中	安山岩	26	22 ×	5	1.5 ×	凹基	脚端少し欠
149		石鏃	表探・排土中	安山岩	16 ×	16 ×	3	0.8 ×	凹基	基部挟り小
150		石鏃	表探・排土中	安山岩	22 ×	19	3	0.8 ×	凹基	先端少し欠
151		石鏃	表探・排土中	安山岩	18	15 ×	3	0.6 ×	凹基	脚端少し欠
152		石鏃	表探・排土中	安山岩	22	18	4	1.1	凹基	ほぼ完形、基部挟り大きい
153		石鏃	表探・排土中	安山岩	26 ×	17 ×	6	1.7 ×	凹基	脚端少し欠、厚い
154		石鏃	表探・排土中	安山岩	17	16	4	0.8	凹基	ほぼ完形、調整粗く未製品か
155		石鏃	表探・排土中	安山岩	16	15	4	1.0	平基	ほぼ完形、やや調整粗く、未製品か

第6表 打製石器計測表(3)

長さ、幅、厚さはmm単位、重量はg単位、数字に×を付したものは残存値											
登録番号	図	器 種	出土遺構	石材	長 さ	幅	厚さ	重 量	形態の特徴	備 考	
156		石鏃	表探・排土中	安山岩	16	14	3	0.5	凹基	ほぼ完形、灰色石材	
157		石鏃	表探・排土中	安山岩	18 ×	13 ×	2	0.5 ×	凹基		
158		石鏃	表探・排土中	安山岩	28	15 ×	3	1.1 ×	凹基		
159		石鏃	表探・排土中	安山岩	19	22	6	1.8	平基	ほぼ完形、厚く調整粗いことから未製品か	
160		石鏃	表探・排土中	安山岩	17	15	3	0.7	凹基		
161		石鏃	表探・排土中	安山岩	18	13 ×	2	0.5 ×	凹基	挟り深い、左右非対称	
162		石鏃	表探・排土中	安山岩	21	15 ×	2	0.6 ×	凹基	足部挟りあり細身	
163		石鏃	表探・排土中	安山岩	24	21	5	2.2	平基	調整粗く未製品か	
164	54	石鏃	溝3下層	安山岩	47	15	5	3.4	尖基	ほぼ完形	
165	3	石鏃	住22	安山岩	44 ×	15	8	5.0 ×	尖基?	基部欠損、厚い、礫面を残す	
165-2	43	石鏃	住91	安山岩	17	13	4	1.0	平基	ほぼ完形	
166	95	石鏃	土73	安山岩	26 ×	11 ×	6	1.2 ×		先端部のみの破片	
167	96	石鏃	土95	安山岩	45 ×	23 ×	12	7.6 ×		側縁礫面残す	
168	97	石鏃	土102上層	安山岩	23	14	5	3.0		ほぼ完形か、表面礫面残す、灰色石材	
169	99	石鏃	土111覆土下層	安山岩	23 ×	18	5	1.7 ×		基部欠損、主要剥離面残す	
170	100	石鏃	土118	安山岩	55	18	8	6.3		ほぼ完形か、基部礫面残す	
171	103	石鏃	土138	安山岩	49 ×	24	11	9.0 ×		基部欠損か、やや黒色の石材	
172	83	石鏃	住21	安山岩	29 ×	19 ×	8	3.0 ×		基部欠損	
173	84	石鏃	住21東包含層	安山岩	54 ×	16	10	7.8 ×		上下両端を使用、端部いずれも欠損	
174	85	石鏃	住23	安山岩	59 ×	19	16	10.3 ×		先端わずかに欠損、基部・側縁礫面残す	
175	89	石鏃	住34	安山岩	25 ×	19	6	2.7 ×		先端欠損、基部礫面残す	
176	87	石鏃	住32	安山岩	38 ×	25	8	5.2 ×		先端欠損	
177	92	石鏃	住47	安山岩	40	25	14	10.6		ほぼ完形か、やや黒色の石材、遺構番号要確認	
178	104	石鏃	溝3?1区	安山岩	42 ×	27	11	9.0 ×		先端欠損、側縁礫面残す、やや灰色の石材	
179	105	石鏃	溝4	安山岩	46 ×	8	4	1.6 ×		基部欠損、細長い	
180	106	石鏃	B区遺構面	安山岩	17 ×	7 ×	3	0.4 ×		先端小片	
181	109	石鏃	D区遺構面	安山岩	25 ×	9 ×	5	1.0 ×		基部・先端欠損	
182	110	石鏃	D区遺構面	安山岩	32 ×	12	8	2.8 ×		基部礫面残す、先端欠損	
183	111	石鏃	D区遺構面	安山岩	30 ×	16 ×	5	1.5 ×		基部欠損	
184	112	石鏃	D区遺構面	安山岩	35 ×	24	6	4.6 ×		先端・基部欠損、灰色石材	
185	113	石鏃	D区遺構面	安山岩	42	13	7	2.5		基部礫面残す、ほぼ完形	
186	115	石鏃	E区遺構面	安山岩	22 ×	13	7	2.9 ×		基部礫面残す、先端欠損	
187	116	石鏃	E区遺構面	黒曜石	26 ×	24	10	4.3 ×		基部・先端欠損、側縁礫面残す	
188	117	石鏃	E区遺構面	安山岩	34 ×	24	6	3.5 ×		先端欠損、側縁礫面残す	
189	118	石鏃	E区遺構面	黒曜石	22 ×	15 ×	6	1.1 ×		基部・先端欠損	
190	119	石鏃	E区遺構面	安山岩	30 ×	14	6	1.9 ×		基部・先端欠損	
191	124	石鏃	G区遺構面	安山岩	33 ×	33	12	8.7 ×		先端欠損、側縁礫面残す	
192	125	石鏃	G区遺構面	安山岩	28 ×	13	4	1.5 ×		先端・基部欠損	
193	126	石鏃	H区遺構面	安山岩	44	34	10	10.2		ほぼ完形か、表面剥離	
194	127	石鏃	表探・排土中	安山岩	26 ×	9	5	1.1 ×		先端・基部欠損	
195	128	石鏃	表探・排土中	安山岩	36 ×	13	7	2.8 ×		先端わずかに欠損、基部調整丁寧	
196	129	石鏃	表探・排土中	安山岩	23 ×	22	7	2.6 ×		基部・先端欠損	
197	130	石鏃	表探・排土中	安山岩	45	19	8	3.5		ほぼ完形、基部・側縁礫面残す	
198	107	石鏃	B区遺構面	安山岩	34 ×	11 ×	4	1.4 ×		表面礫面大きく残す	
199	131	石鏃	表探・排土中	安山岩	26 ×	15	4	1.4 ×		先端わずかに欠損、基部わずかに礫面残す	
200	132	石鏃	表探・排土中	安山岩	30 ×	12	6	1.6 ×		先端わずかに欠損、側縁礫面残す	
200-2	86	石鏃	住27	安山岩	37	28	8	7.6		ほぼ完形	
200-3	88	石鏃	住32	安山岩	31	28	6	4.9		ほぼ完形、主要剥離面大きく残す	
200-4	93	石鏃	住47	安山岩	36	19	7	3.8 ×		先端わずかに欠損、主要剥離面大きく残す	
200-5	94	石鏃	土63-64間包含層	安山岩	43	23	13	10.1		ほぼ完形、表裏調整丁寧	
200-6	98	石鏃	土105	安山岩	37	11	5	3.1		先端わずかに欠損するもほぼ完形か	
200-7	101	石鏃	土131・132上層	安山岩	66	25	8	12.4		先端わずかに欠損するもほぼ完形か、基部礫面残す	
200-8	102	石鏃	土136	安山岩	45	32	9	11.6		ほぼ完形、主要剥離面大きく残す、基部礫面残す	
200-9	108	石鏃	C区遺構面	安山岩	67	26	18	18.4		ほぼ完形、基部・側縁礫面残す	
200-10	114	石鏃	D区遺構面	安山岩	49	31	15	14.9		ほぼ完形、側縁礫面残す	
200-11	121	石鏃	E区遺構面	安山岩	31 ×	24	9	5.6 ×		基部欠損、側縁礫面残す	
200-12	122	石鏃	E区遺構面	安山岩	37	31	7	7.1		ほぼ完形か	

加えたものが多い。133は縦長剥片のほぼ全面に調整を加え全体の形状を整えたもの。整った形状の割には剥離が粗く、未製品の可能性もある。134は両側縁にわずかな剥離調整を行ったもの。135は両側縁に剥離調整を行うが、その調整はほぼ片面からのみ行われる。自然面が大きく残る。136は縦長剥片の両側縁に粗い剥離調整を加えて刃部としたものだが、先端部に近い所に不明瞭な挟り込みがあり、基部調整を意識したものと思われる。137は先端部と片方の側縁に刃部を形成するもの。打点は丁寧にカットされる。138は片方の側縁にのみ刃部を形成するもので、やはり打点をカットしている。

139は扁平な剥片の側縁に簡単な剥離調整を加えたもの。140は縦長剥片の両側縁に調整を加えて刃部としたもので、特に右側縁の刃部加工は丁寧である。打点に近い所に基部を意図したと思われる挟り込みが見られる。141は整った形の縦長剥片の両側縁に刃部加工を行ったもの。刃部は両側縁ともかなり明確に潰れている。142は側縁に粗い加工を加えて刃部を形成するもの。一部打点側



第177図 打製石器実測図（6）（2／3）

の調整も見られる。143は右側縁のみわずかに剥離調整を加えたもの。144は両側縁に剥離調整を加えて刃部とする。先端部は折損。145は左右対称になるよう剥離調整が加えられる。146は比較的丁寧な剥離調整を行い刃部を形成する。打点付近に基部を意識したような挟り込みが見られる。

147は右側縁のみ簡単な剥離を加えたもの。148は打点を除く他の三側縁に調整が及ぶが、刃部として機能したのは先端部と右側縁である。149は右側縁のみ片面から剥離調整を行ったもの。150は両面から調整が行われる。先端部欠損。151は扁平な素材を活かし側縁部にのみ小さな調整を加えて刃部としたもの。152は左側縁のみ簡単な調整を加えたもの。153は粗い剥離がほぼ全面に及ぶ。154は左側縁のみ両面から調整を加えて刃部としたもの。打点部の調整も見られる。155は両側縁に粗い加工が見られる。石鏃の未製品かもしれない。156は粗い剥離調整を行うもの。157は左側縁のみ調整を行っている。

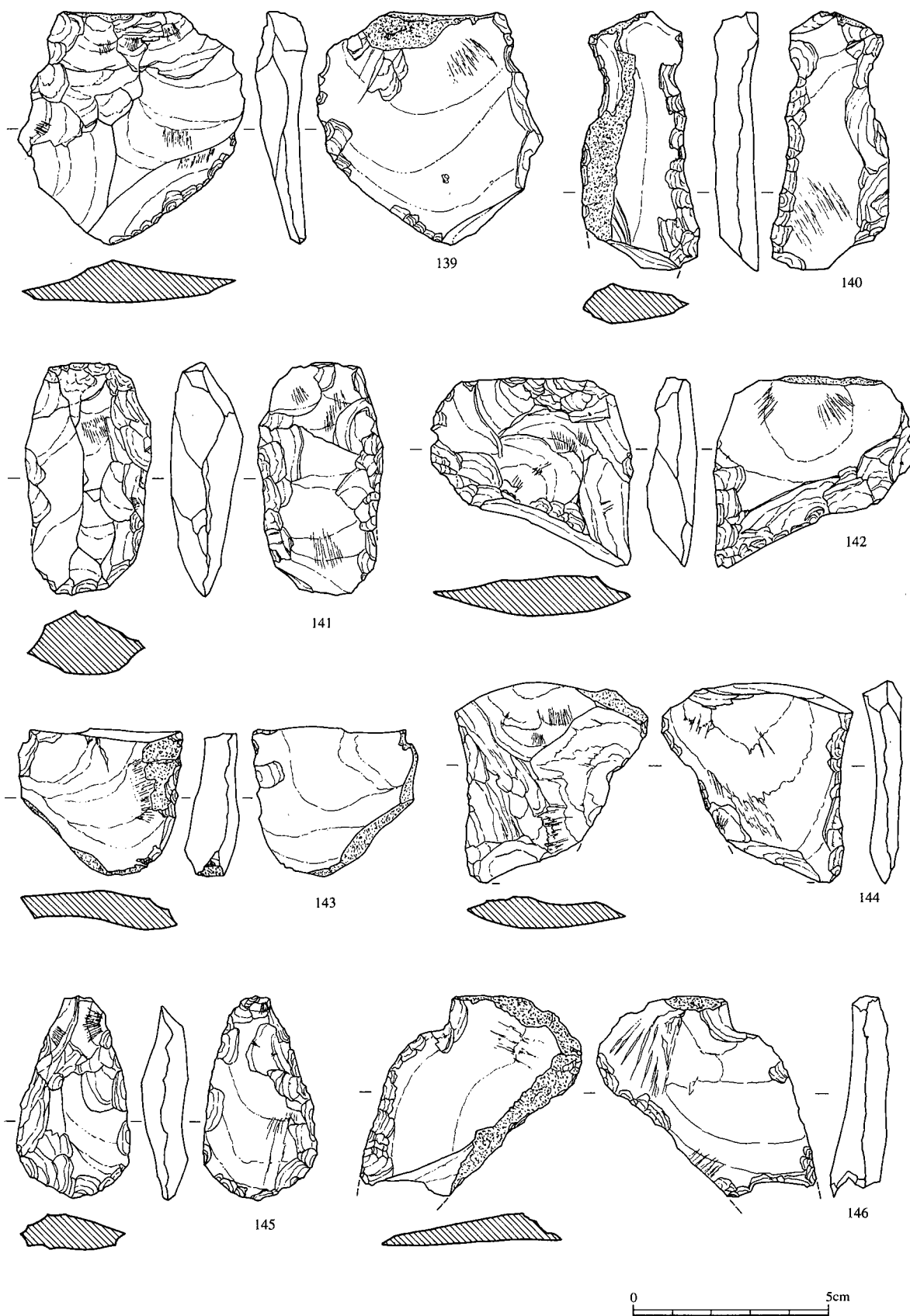
158は薄く形の整った縦長剥片の側縁にのみ調整を加えて刃部としたもの。159は両側縁に比較的丁寧な剥離調整が認められるもので、打点側と先端部が欠損する。160は先端部と右側縁に粗い剥離加工を行ったもの。161は剥離が非常に粗く、形状から石鏃未製品の可能性もある。162は形の整った剥片の側縁に丁寧な剥離を加えたもので、打点部の調整も行われる。163は刃部の欠損資料。164～182はエンドスクレイパー。横長剥片を用いたものが多く、調整もやはり素材の形を活かして側縁のみ剥離調整を行い刃部としたものが多い。164は横長剥片の側縁にのみ丁寧な調整を加えて刃部としたもの。刃部の加工は両面から行う。165は側縁から先端部にかけて刃部を形成するが、調整はもっぱら側縁部に集中し先端部にはほとんど見られない。166は主に片面から剥離を加えて形を整える。167は刃部加工がほとんど見られず、使用痕ある剥片に近い。168は刃部だけでなく基部にも調整を加え石匙状に整形される。169は両面から調整を加えて刃部とする。

170は端部に丁寧な調整を加えて刃部とするもの。比較的整った形状となる。171の調整は側縁部にまで及び、整った形となる。172の左側縁は基部を意識して調整したようにも見えるが、はっきりしない。173は丁寧な調整を行い整った形状となる。174は刃部のみ粗い加工を行う。175は両面から刃部加工を行うが、剥離が粗く雑である。176は両面から丁寧な刃部加工を行っており、整った

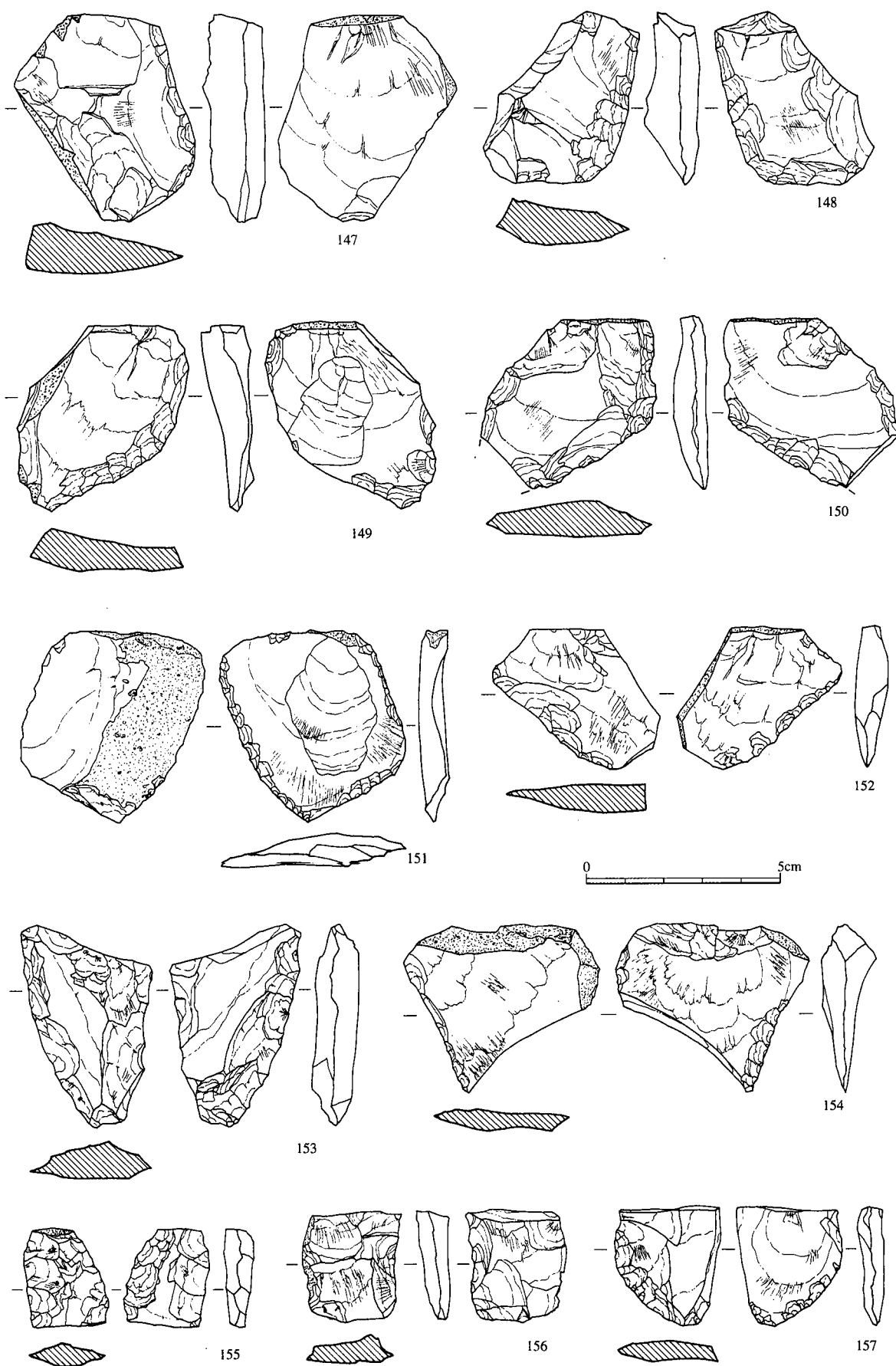


第178図 打製石器実測図 (7) (2 / 3)

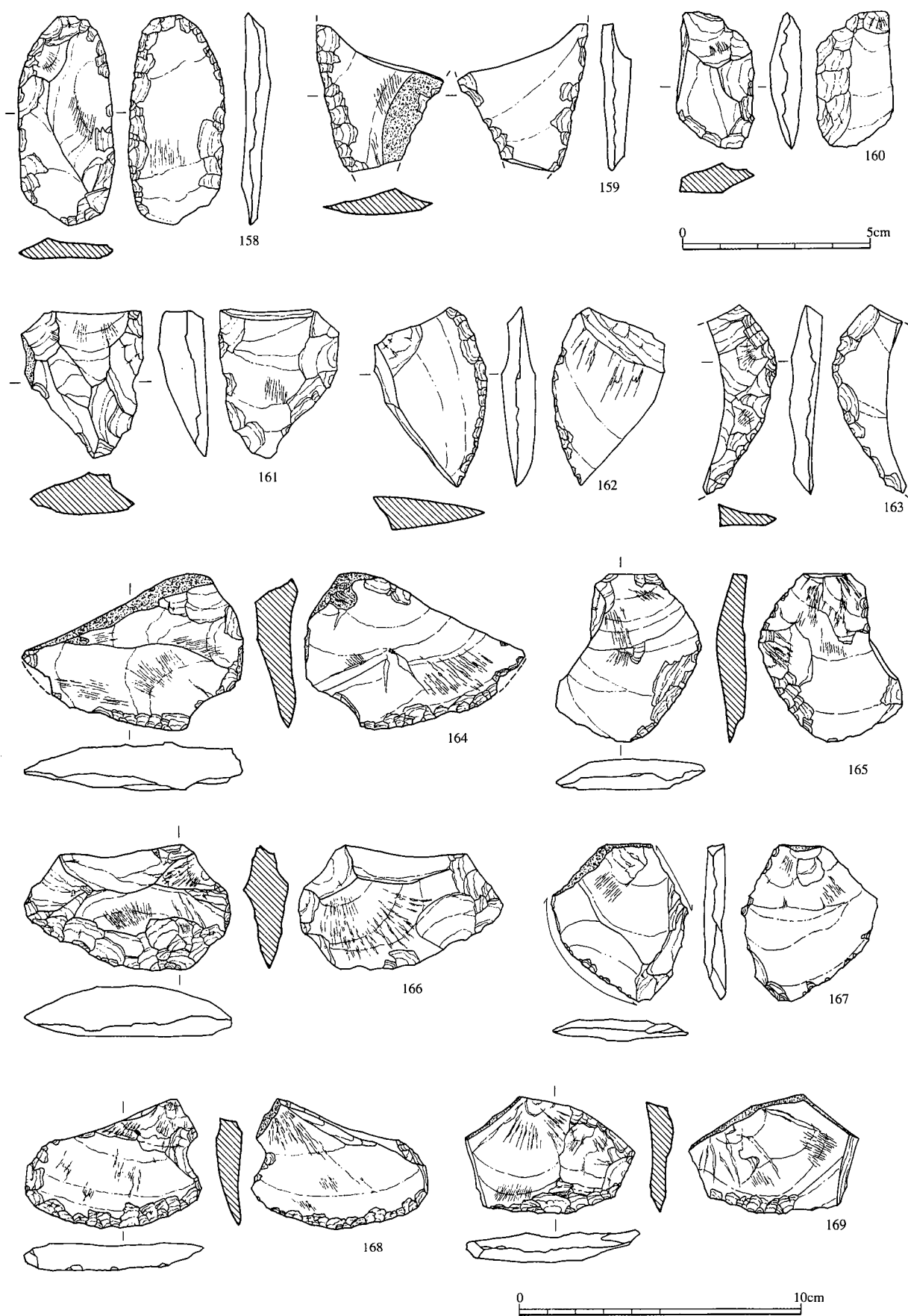
形状となる。177は端部や側縁部に簡単な剥離調整を行ったもので、打点部はカットされる。178は打点以外ほぼ全側縁に調整を加えたもの。179は側縁に小さな剥離が認められるものであり、使用痕ある剥片に近い。180は端部に粗い剥離がわずかに認められる程度のもの。181は両面から加工を



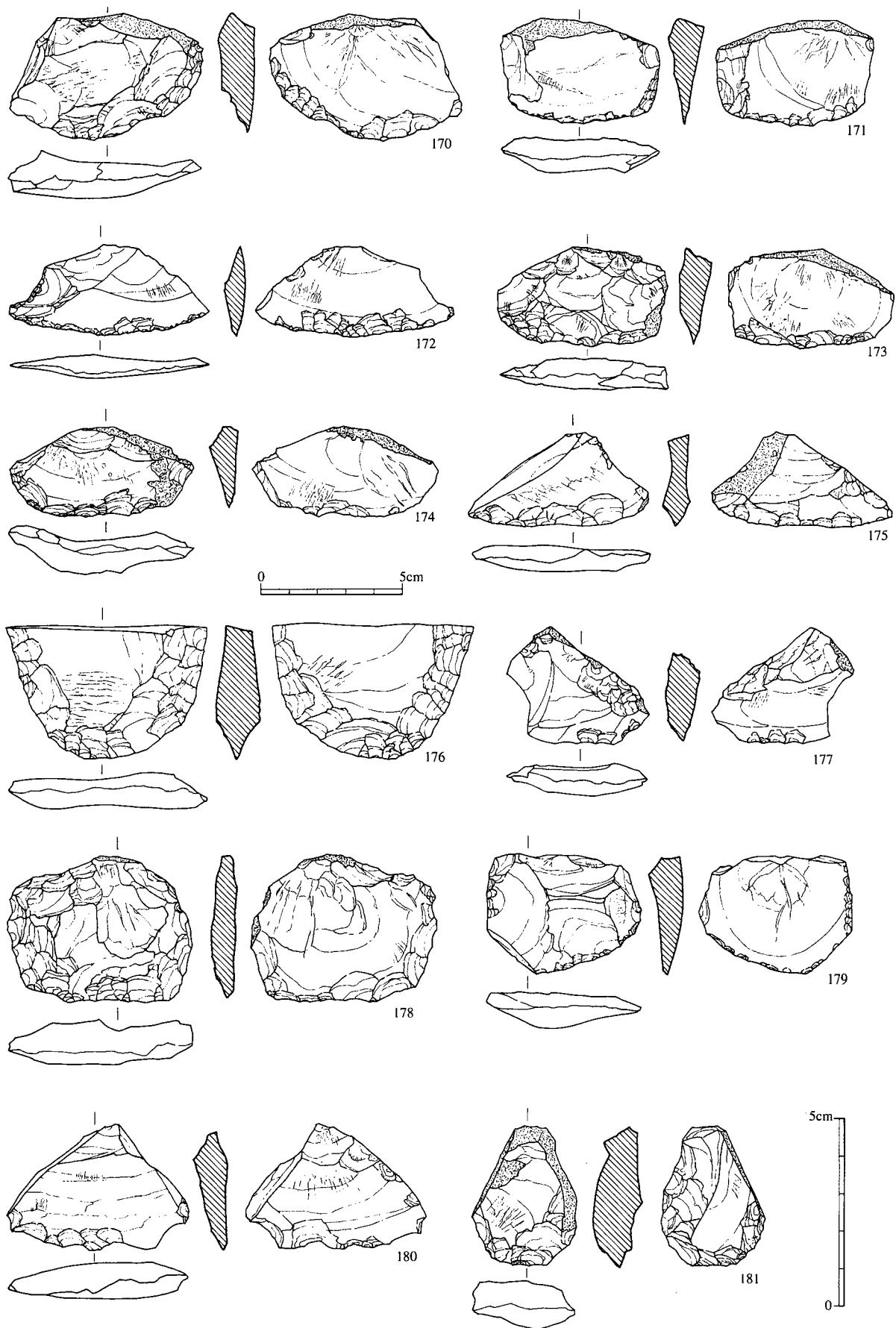
第179図 打製石器実測図 (8) (2 / 3)



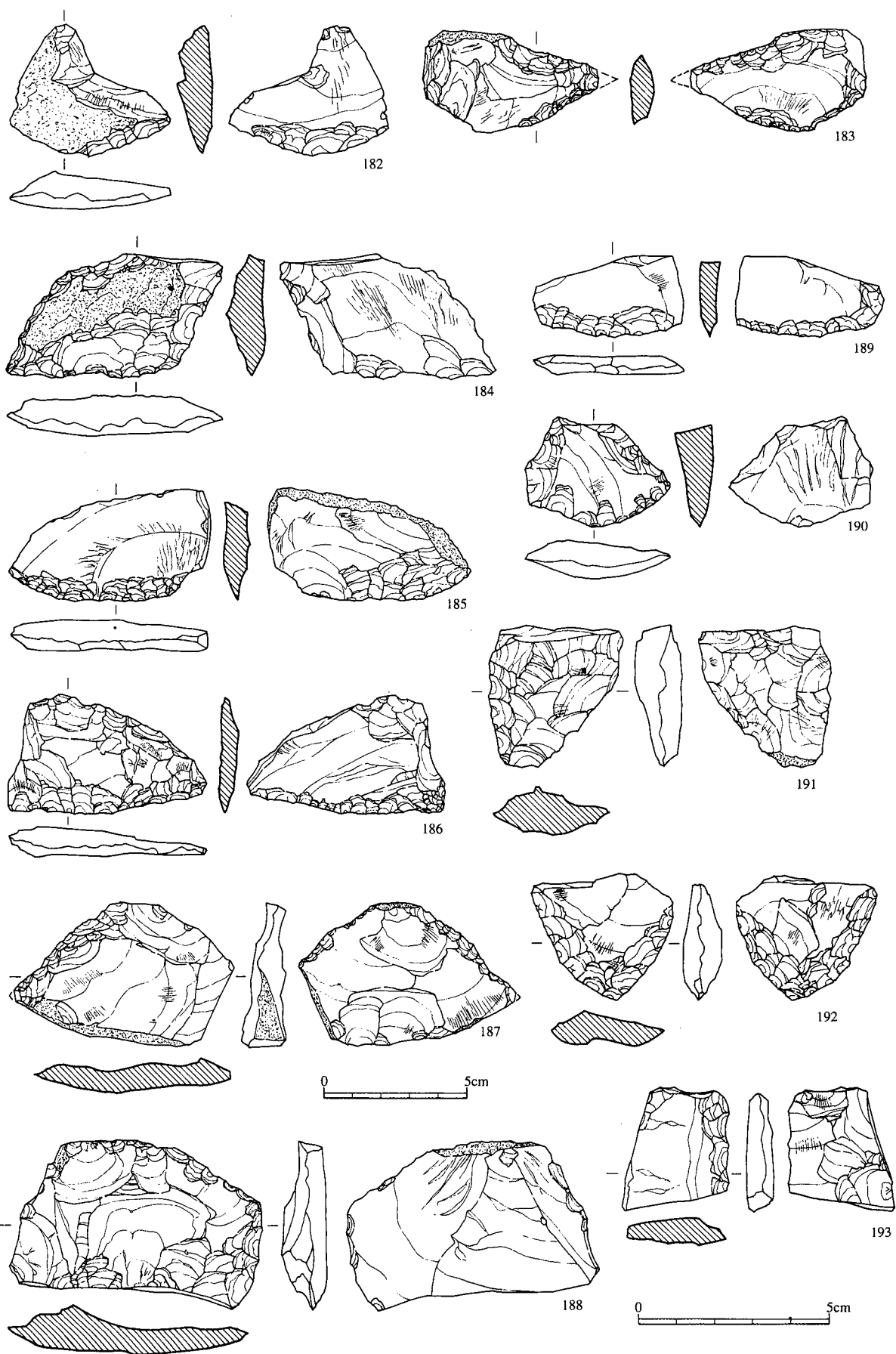
第180図 打製石器実測図(9)(2/3)



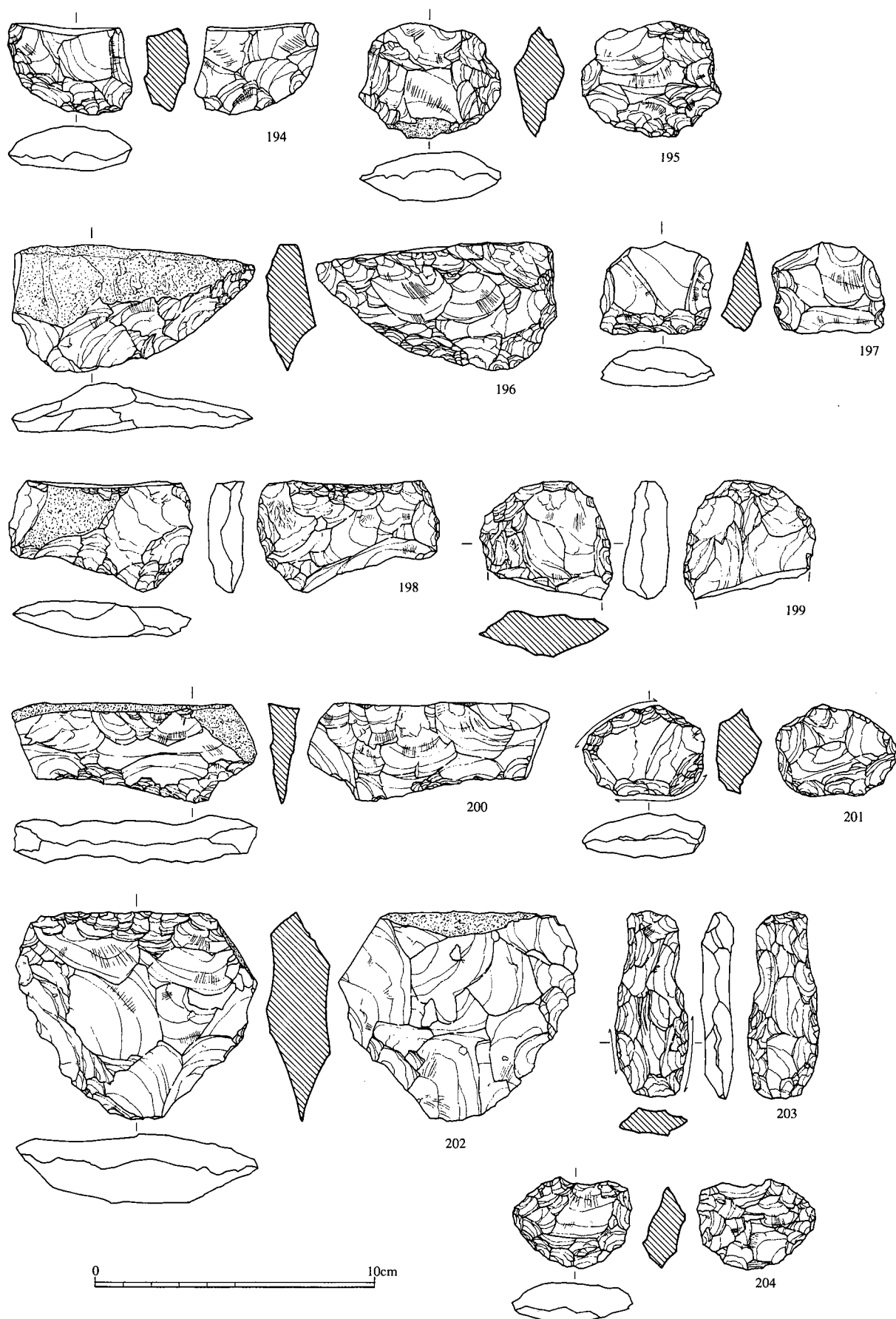
第181図 打製石器実測図 (10) (32~37は 2 / 3 他は 1 / 2)



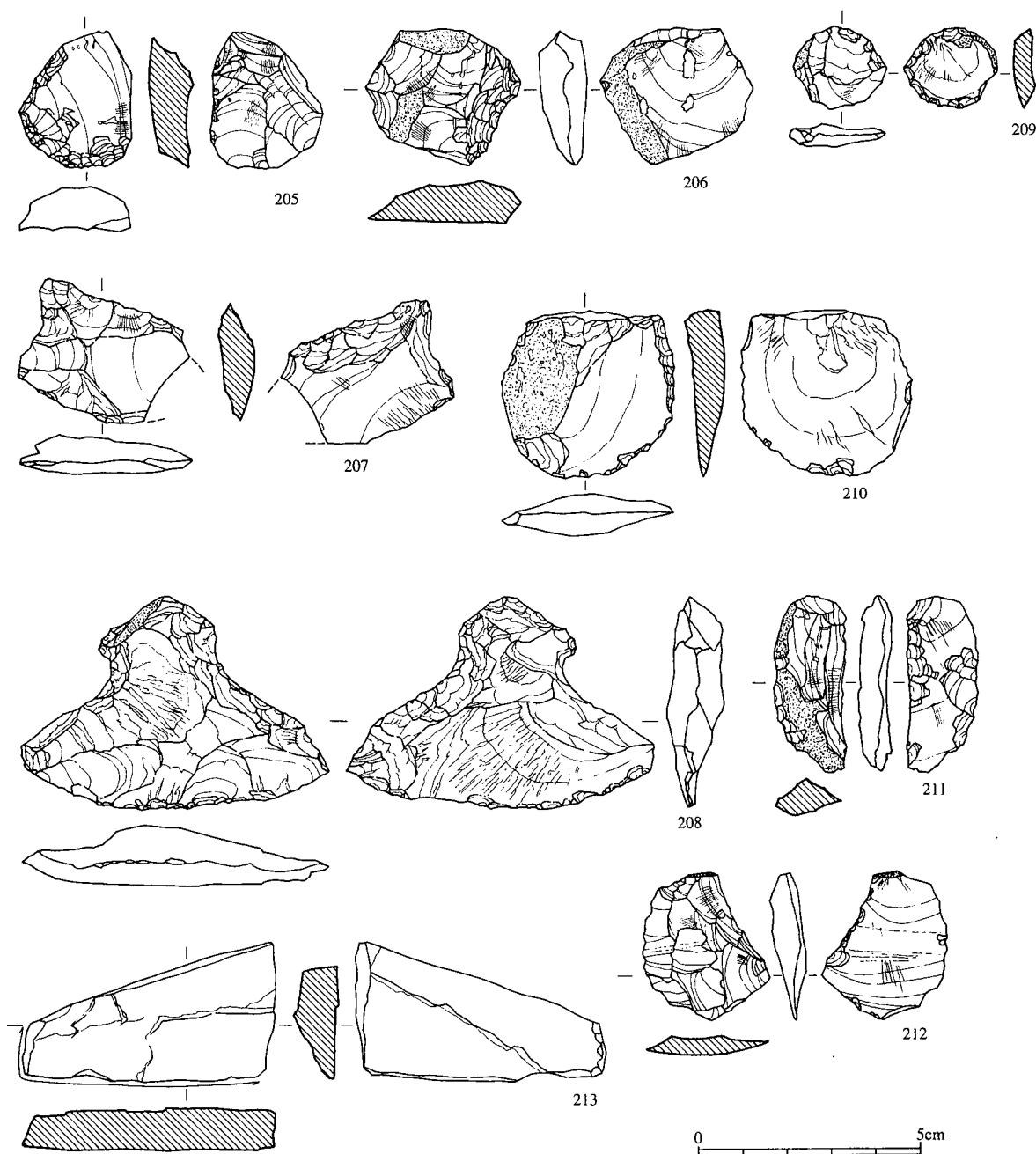
第182図 打製石器実測図 (11) (38~42は1/2 他は2/3)



第183図 打製石器実測図 (12) (51~55は 1 / 2 他は 2 / 3)



第184 図 打製石器実測図 (13) (1 / 2)



第185図 打製石器実測図 (14) (2 / 3)

行うが、刃部の身は厚く鋭さに欠ける。182は刃部に粗い剥離調整を行うもの。

183～193は打点側に剥離調整を行い刃部とするものである。偶然得られた剥片の最も適当な所を刃部を選択した結果であろう。183は打点側の剥離方法が独特で、途中から剥離を加える面を変えて行っている。また刃潰し状の加工も認められ、右側縁は欠損するが鋭利に尖っていた可能性が高いことから石錐として使用した可能性も考えられる。184は粗い剥離を加えて刃部を形成するもので、自然面が大きく残る。185は打点側の側縁に丁寧な調整を加えて刃部としたもの。整った形状をなす。186も丁寧な剥離調整を行っており、整った形状をなす。187は打点側の両側縁に調整を加えたもの。188は片面からのみ調整を加えた大型品。189は扁平な剥片の側縁に剥離調整を加えて刃部としたもの。190は三側縁に粗い調整を加えて刃部とする。191は調整がほぼ全面に及び、形状から石

第7表 打製石器計測表(4)

長さ、幅、厚さはmm単位、重量はg単位、数字に×を付したものは残存値											
登録番号	図	器 種	出土遺構	石材	長 さ	幅	厚さ	重 量	形態的特徴	備 考	
201	157	スクレイパー	土26・44上層	安山岩	32	27	7	5.4	不整形	左側縁のみ丁寧な剥離	
202	144	スクレイパー	土24	安山岩	51 ×	41	10	21.9 ×	不整形	先端欠損	
203	153	スクレイパー	住21東包含層	安山岩	53	34	12	18	不整形	両面から粗い剥離	
204	154	スクレイパー	住22東包含層	安山岩	43	50	14	16.7	不整形	左側縁のみ剥離	
205	192	スクレイパー	住24覆土	安山岩	33	37	10	9.5	不整形	石鏃未製品?	
206	209	スクレイパー	G区遺構面	安山岩	19	21	5	2.1	不整形	片面のみ剥離	
207	189	スクレイパー	住26東包含層	安山岩	22	39	5	5.4	横長剥片	側縁のみ両面剥離	
208	152	スクレイパー	住8	安山岩	37	44	9	12.7	不整形	粗い剥離調整	
209	155	スクレイパー	住32覆土	安山岩	26	21	8	4.2	不整形	石鏃未製品?	
210	208	石匙	住33	安山岩	48	70	13	27.4		刃部の使用顕著	
211	173	スクレイパー	住34	安山岩	35	60	11	25.4	横長剥片	刃部は丁寧な剥離	
212	183	スクレイパー	住47	安山岩	46 ×	27	10	10.4 ×	横長剥片	ドリルの可能性あり	
213	177	スクレイパー	土35覆土	安山岩	32	38	9	7.3	不整形	簡単な調整	
214	168	スクレイパー	土41・44北側ベルト内	安山岩	46	62	10	22	横長剥片	刃部は両面剥離	
215	162	スクレイパー	土61覆土	安山岩	30	48	9	10.2	不整形	刃部は片面剥離	
216	146	スクレイパー	土71	安山岩	52 ×	56 ×	15	22 ×	不整形	欠損後再加工	
217	169	スクレイパー	土111	安山岩	42	60	12	22.8	横長剥片	側縁のみ両面剥離	
218	174	スクレイパー	土129 No.3	安山岩	32	65	17	23	横長剥片	雑な剥離	
219	135	スクレイパー	土130 No.2	安山岩	65	45	15	40.1	縦長剥片	右側縁は刃潰しの的	
220	185	スクレイパー	住44	安山岩	40	71	11	33	横長剥片	刃部は両面剥離	
221	171	スクレイパー	土142	安山岩	38	56	13	23.9	横長剥片	刃部は両面剥離	
222	172	スクレイパー	G区遺構面	安山岩	32	71	8	13.1	横長剥片	基部を形成するが曖昧	
223	186	スクレイパー	溝3南端上層	安山岩	42	69	11	26.6	不整形	比較的丁寧な剥離	
224	151	スクレイパー	P64	安山岩	50	48	8	17.4	不整形	刃部は片面剥離	
225	165	スクレイパー	P78	安山岩	60	51	11	31.4	不整形	刃部のみ雑な剥離	
226	133	スクレイパー	B-1区遺構検出	安山岩	88	41	14	44.9 ×	縦長剥片	全面粗い剥離 尖頭器状	
227	139	スクレイパー	B区西半遺構面	安山岩	60	58	14	35.7	不整形	刃部は右側縁のみ	
228	170	スクレイパー	C-2遺構面	安山岩	45	68	17	22.8	横長剥片	刃部は両面剥離	
229	196	スクレイパー	溝3上層	安山岩	46	87	18	65.6		自然面大きく残る	
230	スクレイパー	D区遺構面	安山岩	37	43	10	12.9	不整形	わずかな剥離		
231	158	スクレイパー	D区遺構面	安山岩	56	25	7	10.2	縦長剥片	側縁のみ剥離	
232	159	スクレイパー	D-F区遺構面	安山岩	39 ×	34 ×	9	6.9	不整形	折損資料	
233	188	スクレイパー	F区遺構面	安山岩	60	88	16	70.6	不整形	刃部は片面剥離	
234	140	スクレイパー	H-2区包含層	安山岩	67	31	11	21.6	縦長剥片	ノッチ形成 刃部使用顕著	
235	142	スクレイパー	I区溝上遺構トレンチ	安山岩	49	52	13	30	不整形	刃部は片面剥離	
236	176	スクレイパー	A区南遺構面	安山岩	36	54	10	21.9	不整形	丁寧な両面剥離	
237	166	スクレイパー	住21覆土	安山岩	45	73	18	52.6	不整形	刃部は片面剥離	
238	200	スクレイパー	D-2区遺構検出	安山岩	36	87	17	52.6	不整形	刃部使用顕著	
239	202	スクレイパー	土90南包含層	安山岩	75	86	26	150.1		両面加工だが雑な調整	
240	147	スクレイパー	土142	安山岩	55	47	16	35.5	不整形	刃部は簡単な剥離のみ	
241	167	スクレイパー	土90南包含層	安山岩	57	48	8	19.8	不整形	わずかな剥離	
242	199	スクレイパー	住32	安山岩	42 ×	48	17	29.6		全面調整 刃部使用顕著	
243	164	スクレイパー	溝3	安山岩	56	78	18	42.1 ×	不整形	刃部は両面剥離	
244	198	スクレイパー	土68	安山岩	40	66	13	32.6		三側縁に刃部形成	
245	187	スクレイパー	表探	安山岩	50	77	16	44.5	不整形	刃部は両面剥離	
246	184	スクレイパー	土146	安山岩	44	76	14	45.8	不整形	三側縁に刃部形成	
247	134	スクレイパー	土114	安山岩	88	41	20	62.6	縦長剥片	ノッチ状剥離あり	
248	141	スクレイパー	溝4Ⅱ区	安山岩	60	32	19	33.9	縦長剥片	刃部使用顕著	
249	203	スクレイパー	F区遺構面	安山岩	66	26	12	21.3		全面調整 刃部使用顕著	
250	149	スクレイパー	廃土中	安山岩	49	45	14	20.9	不整形	刃部は片面剥離	
251	194	スクレイパー	遺構面清掃	安山岩	33	44	16	24.6		両面調整	
252	137	スクレイパー	土3	安山岩	62	44	15	40.7	不整形	刃部は片面剥離	
253	136	スクレイパー	住36	安山岩	74	31	15	28.2	縦長剥片	ノッチ?刃部は両面剥離	
254	204	スクレイパー	G区遺構面	安山岩	32	43	15	16.2		全面調整	
255	201	スクレイパー	F区遺構面	安山岩	32	44	16	23.3		全面調整 刃部使用顕著	
256	148	スクレイパー	土130	安山岩	45	41	15	19.8	不整形	刃部は両面剥離	
257	150	スクレイパー	土119東包含層	安山岩	45 ×	45 ×	9	17.9 ×	不整形	刃部は両面剥離	
258	138	スクレイパー	溝3覆土	安山岩	50	42	11	17.3	不整形	刃部は片面剥離	
259	179	スクレイパー	土63・64間包含層	安山岩	32	41	10	10	不整形	刃部は片面剥離	
260	207	石匙	B・C区遺構面	安山岩	33	39 ×	9	7.9		基部形成不明確	
261	175	スクレイパー	遺構面清掃	安山岩	26	48	7	7.6		刃部は両面剥離	
262	191	スクレイパー	溝3上層	安山岩	37	35	13	13.7		両面調整 石鏃未製品?	
263	143	スクレイパー	住35	安山岩	38	43	14	21.4	不整形	簡単な剥離のみ	
264	190	スクレイパー	住33覆土	安山岩	29	38	10	9.3		簡単な剥離のみ	
265	161	スクレイパー	住21覆土	安山岩	39	32	13	14.5	不整形	簡単な剥離のみ 石鏃未製品?	
266	181	スクレイパー	住24東包含層	安山岩	37	28	13	11.8		雑な剥離	
267	145	スクレイパー	P-273	安山岩	53	29	12	14.6	縦長剥片	全面調整	
268	195	スクレイパー	F区遺構面	安山岩	41	50	18	29.6		雑な剥離 刃部使用顕著	
269	197	スクレイパー	住28	安山岩	33	41	14	16.8		全面調整 刃部は片面剥離	
270	180	スクレイパー	住32	安山岩	34	48	10	13.6	不整形	簡単な剥離のみ	
271	160	スクレイパー	土100上層	安山岩	21	37	9	6.4		刃部は両面剥離	
272	182	スクレイパー	B区西遺構面	安山岩	35	42	10	9.8	不整形	刃部は両面剥離	
273	163	スクレイパー	G区遺構面	安山岩	20 ×	51 ×	8	4.5 ×		折損資料	
274	スクレイパー	E・F区遺構面	安山岩	32	40	15	17.1	不整形	刃部は片面剥離		
275	210	使用痕ある剥片	溝3上層	安山岩	38	39	9	13.3	不整形	風化進む	
276	156	スクレイパー	土38	安山岩	29	26	9	7.8		粗い剥離	
277	178	スクレイパー	住35	安山岩	39	50	12	20.6	横長剥片	粗い剥離	
278	193	スクレイパー	土100上層	安山岩	33	28	7	7.5		刃部は片面剥離	
279	213	不明石製品	土78	石英	32	57	10	19.1		使用顕著	
280	212	使用痕ある剥片	土120下層	黒曜石	33	28	8	4.9	不整形		
281	211	使用痕ある剥片	住22	黒曜石	40	17	8	4.6	縦長剥片		
282	206	スクレイパー	土100上層	黒曜石	31	35	11	10.4	不整形	右側縁のみ片面剥離	
283	205	スクレイパー	土3	黒曜石	31	26	10	7.7	不整形	端部に丁寧な剥離	
284	スクレイパー	住34	安山岩	39	78	15	39.1	不整形	刃部不明確		
285	スクレイパー	土87	安山岩	42	78	19	58.8	不整形	自然面大きく残る		
286	スクレイパー	土147	安山岩	39 ×	64 ×	12	21.4	不整形	刃部の一部欠損		
287	スクレイパー	土119東包含層	安山岩	13 ×	32 ×	5	2.1		刃部の破片資料		
288	スクレイパー	住32	安山岩	24 ×	32 ×	10	6.7		折損資料		
289	スクレイパー	溝3Ⅱ区覆土	安山岩	33 ×	39	10	12.7		一部刃部形成		
290	スクレイパー	住21東包含層	安山岩	25	22	8	3.4		基部形成?石鏃未製品?		

鏃未製品の可能性もある。192は厚みのある剥片の側縁に調整を行い刃部としたもの。193は粗く簡単な調整を加えただけのもの。

194～204は剥離調整がほぼ全面に及び、素材の形状が判別できないものである。194は刃部以外の側縁を垂直にカットして形を整えたもの。明確な刃部を形成するが身は厚い。195はほぼ全側縁に剥離が及び、平面形が円形をなす。刃部の加工はあまり丁寧ではない。196は丁寧な加工を行い整った形状をなすが、自然面が大きく残る。197は刃部にのみ丁寧な剥離調整を行うが、それ以外は雑な調整である。198は整った形状をなすが刃部の加工はあまり丁寧ではない。199は両側縁に刃部加工が認められるもの。200は刃部にのみ丁寧な剥離調整が認められる。201は円形に近い形状をなす。202は大型品で、全面に加工が及ぶものの粗い剥離調整を行っており、明確な刃部が認められない。203は全面に丁寧な剥離調整を加え整った形状のもの。基部を意図して加工しているようにも見える。両側縁は顕著な使用のためか、刃部がかなり潰れている。204はほぼ全側縁に剥離調整が加えられる。

205・206は黒曜石製スクレイパーである。205は端部に丁寧な剥離調整を行っており、また側縁には微細剥離が認められる。206は片側の側縁のみ剥離調整を行ったもの。自然面が多く残る。207・208は安山岩製の石匙である。207は刃部の大半を欠損しているため元の器形が判らないが、基部となる箇所を明瞭に作り出しているために石匙とした。調整は雑である。208は形の整った石匙である。基部の扱いは比較的丁寧だが、それ以外はあまり丁寧な調整とは言えない。刃部はよく使用しており、微細剥離が認められる。

209～212は使用痕の残る剥片である。209・210は安山岩製、211・212は黒曜石製。209は円形を呈した小型の剥片で、側縁のみわずかに剥離が認められる。210もやはり円形に近い剥片の側縁を刃部としたもので、小さな剥離が側縁に認められるものである。211は縦長剥片の側縁を使用したもの。212は不整形剥片の片側縁のみ刃部として使用したものである。

213は用途不明の石製品。他に比べて二つの側縁のみ極端に摩滅する。

石核（図版90）

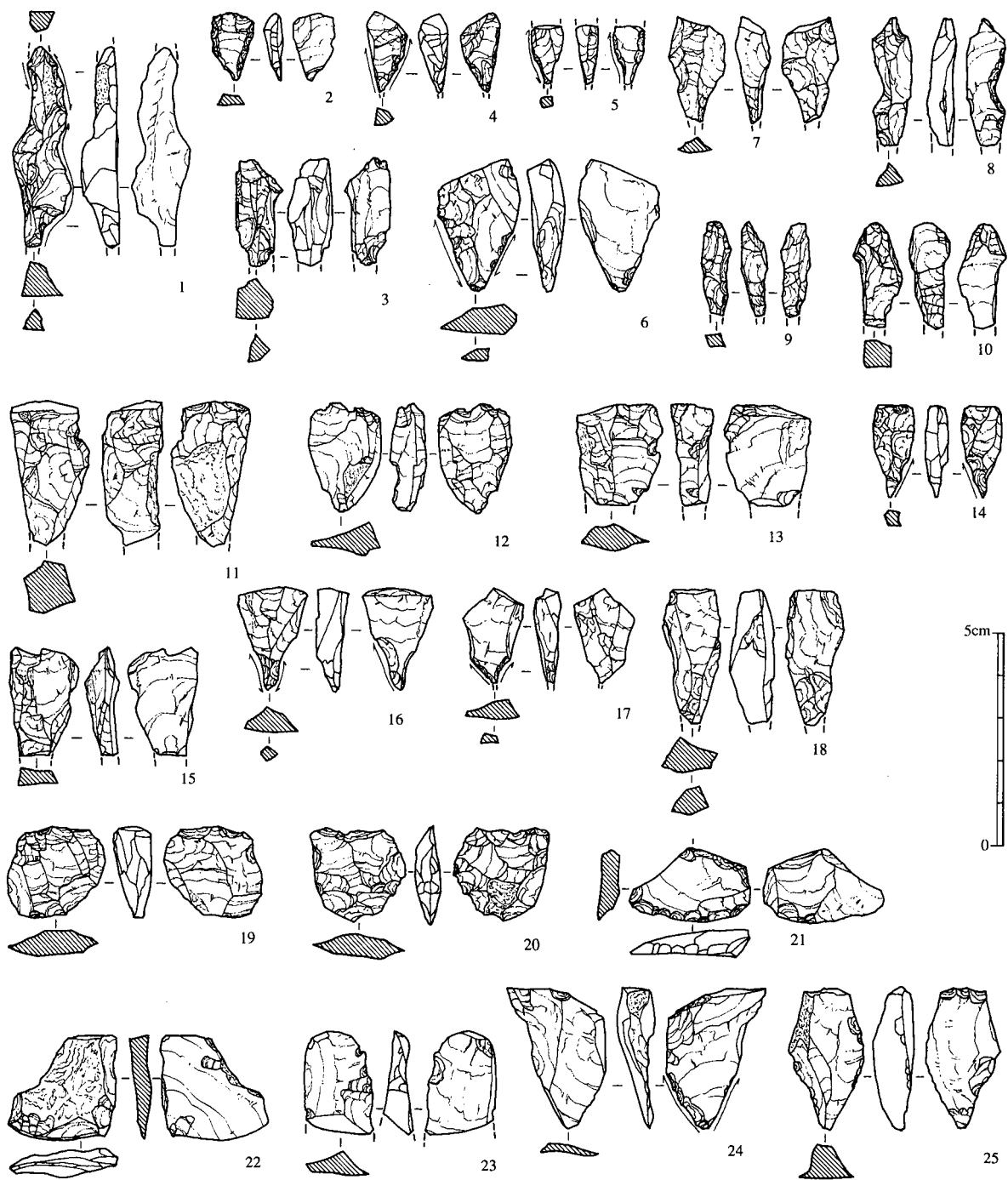
調査区各所から黒曜石、サヌカイトの石核が多数出土している。時間的な都合のため、図化するできなかったが、代表的な事例を図版90に示した。機会を改めて再度、報告することにした。

石英・瑪瑙石器（図版96・97、第186・187図、第9表）

彼坪遺跡3・4次調査で出土した石英・瑪瑙石器・石材等は総計約5.19kg。そのうち器種として設定できるもの32点の計測表を作成し、実測図を掲載した。石材は白色～黄白色の緻密な石英に近いものと、やや透明感があり桃色・赤色をおびた瑪瑙に近いものがある。いずれも堅く、容易に石器に加工できない石材であり、そのため剥離単位、剥離面の切合い、剥離方向等の観察が難しい。

第8表 打製石器計測表（5）

長さ、幅、厚さはmm単位、重量はg単位、数字に×を付したものは残存値										
登録番号	図	器 種	出土遺構	石材	長 さ	幅	厚さ	重 量	形態的特徴	備 考
291		スクレイパー	G区遺構面	安山岩	22	19	7	3.3		石鏃未製品?
292		スクレイパー	F区遺構面	安山岩	31	16	4	1.8		石鏃未製品?
293		スクレイパー	G区遺構面	黒曜石	25	17	8	3		細かい剥離
294		使用痕ある剥片	溝7	安山岩	54	55	13	35.2	不整形	
295		使用痕ある剥片	I区遺構面	安山岩	28	33	8	6.6	不整形	
296		使用痕ある剥片	土12	安山岩	58	30	10	14.2	縦長剥片	
297		使用痕ある剥片	土92	安山岩	28	49	7	9	不整形	
298		使用痕ある剥片	住41	安山岩	33	26	7	5.2	不整形	
299		使用痕ある剥片	土86西	黒曜石	20	22	6	2.2	不整形	
300		使用痕ある剥片	土90	黒曜石	27	31	9	6.5	不整形	
301		使用痕ある剥片	住43床西	黒曜石	17	22	9	3.3	不整形	
302		使用痕ある剥片	G区遺構面	黒曜石	20	24	7	2.7	不整形	
303		使用痕ある剥片	土79付近包含層	黒曜石	37	22	10	5.2	縦長剥片	
304		使用痕ある剥片	表探	黒曜石	35	20	5	2.5	縦長剥片	



第186図 打製石器実測図(15)(2/3)

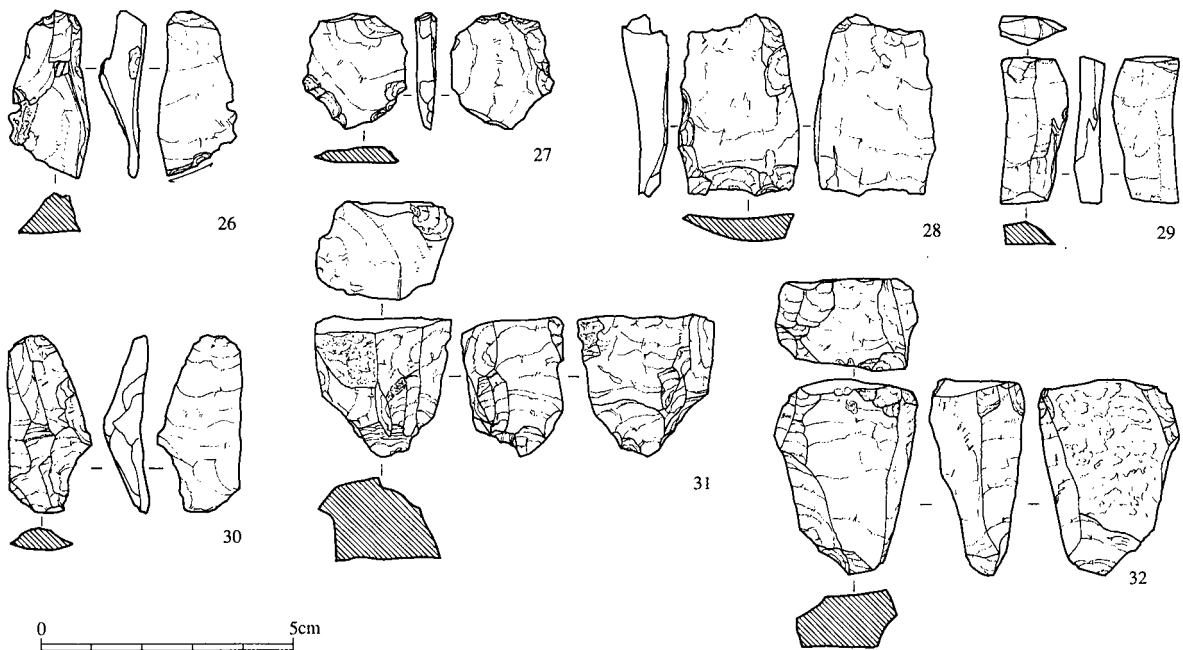
1～18は階段状剥離及び形態を基準に石錐と推定したものであるが、先端の摩滅が観察できるものはない。1は上下を使用した可能性がある。2～5は小形品。11～13・18は大形品で、先端が太い。2・6・15・17は薄い剥片状の素材の鋭利な先端部を使用しているが、他は角錐状の縦長素材を用いている。19・20は上下に対向する剥離が見られるため、楔としての使用が推定されるもの。

21～28はスクレーパーと推測されるもの。21・22は鋭利な下部を刃部として使用した可能性が考えられる。23は側縁が鋭利であり、刃部として使用したか。24・25・27は薄く先端の尖った剥片を素材とし、微細な剥離の見られる両側縁を刃部として使用したと考えられる。26は先端の角張る剥

第9表 打製石器計測表(6)

長さ、幅、厚さはmm単位、重量はg単位、数字に×を付したものは残存値

登録番号	図	器 種	出土遺構	石材	長 さ	幅	厚 さ	重 量	形態的特徴	備 考
1002	1	石鏃?	住32	石英	46 ×	14	10	3.9 ×	両端使用	先端欠損、白色良質
1003	23	使用痕ある剥片	住34	石英	23	16	6	1.9		白-黄白色、脈多
1004	2	石鏃?	住34	石英	15	10	4	0.7		白色緻密
1007	3	石鏃?	住41	石英	24 ×	11	9	2.8 ×		先端欠損、白色-透明、脈多
1009	26	使用痕ある剥片	住42	石英	32 ×	16	9	3.4 ×		先端欠損、白色緻密、不純物あり
1010	4	石鏃?	住43	石英	18 ×	9 ×	7	1.1 ×		白色緻密、先端破片か
1011	5	石鏃?	住44	石英	13 ×	7 ×	5	0.5 ×		白色緻密、先端破片か
1012	6	石鏃?	住44	石英	30 ×	19	8	4.4 ×		基部欠損、白色、脈多
1013	7	石鏃?	住44	石英	24 ×	14	8	1.9 ×		先端・基部欠損、白-桃白色、透明感あり
1014	8	石鏃?	住44	石英	30 ×	10	7	1.5 ×		先端欠損、白色-透明、不純物あり
1016	9	石鏃?	土100上層	石英	22 ×	7	6	0.9 ×		先端・基部欠損、白色、不純物多
1017	10	石鏃?	土100上層	石英	24 ×	12	9	2.5 ×		先端欠損、白-黄白色透明、脈多
1018	11	石鏃?	土111北包含層	石英	34 ×	19 ×	13	9.2 ×		先端欠損、黄白色やや透明、脈多
1019	12	石鏃?	土116	石英	26 ×	16	8	3.0 ×		先端わずかに欠損、白色緻密
1021	13	石鏃?	土150	石英	24 ×	20	9	3.9 ×		先端欠損か、灰白透明、脈多
1022	14	石鏃?	遺構面/C区	石英	21	10	5	1.1		ほぼ完形、白色やや透明、不純物あり
1023	15	石鏃?	遺構面/F区	石英	25 ×	16	7	2.1 ×		先端欠損、黄白色やや透明、脈多
1025	16	石鏃?	遺構面/G区	石英	24	16	7	2		ほぼ完形、白色-透明、脈多
1026	17	石鏃?	遺構面/G区	石英	20 ×	13	7	1.4 ×		先端欠損、白色透明、脈あり
1027	18	石鏃?	遺構面/G区	石英	31 ×	13	10	4.4 ×		灰白色、透明、軽く加工は難しい石材
1029	31	石核	住42	石英	27	27	20	15.3		縦長剥片作出した石核、白-桃白色、脈多
1030	21	使用痕ある剥片	住31	石英	28	18	6	2.8		ほぼ完形か、白色緻密、脈多
1031	22	使用痕ある剥片	住31	石英	25	24	5	3.3		白色透明、不純物多
1035	24	使用痕ある剥片	住35	石英	33	22	8	3.9		白色緻密、脈多
1041	25	使用痕ある剥片	住41	石英	33	17	10	4.0		白色、灰白色透明、脈多
1049	27	使用痕ある剥片	住44	石英	22	20	4	2.5		白色緻密
1054	28	使用痕ある剥片	土56	石英	36	24	9	5.8		黄白色やや透明、脈多
1061	20	楔状石器?	土133	石英	22	21	6	3.9		黄白色やや透明、脈・不純物多
1076	29	剥片	G区遺構面	石英	29	14	6	2.4	縦長剥片	白庄-透明、わずかに脈
1077	32	石核	G区遺構面	石英	39	28	17	24.2		縦長剥片を作出した石核、黄白色透明、不純物多
1078	19	楔状石器?	溝4/1区	石英	25	20	8	4.2		黄白色、不純物あり
1079	30	剥片	表探・排土中	石英	35	18	9	3.4	縦長剥片	黄白色



第187図 打製石器実測図(16)(2/3)

片で、角を使用したものか。28は下端は折れていると考えられるが、左側縁を鋭利に加工し、刃部として使用したか。29・30は縦長の剥片で、加工は進んでいない。31・32は石核。恐らく、31・32のような形態の石核の上下端に打撃を加え、29・30のような剥片をとり、各種石器へと加工する工程が考えられる。このほか石英・瑪瑙の石材、チップ等が多数出土しており、石材の一部を図版96 4、図版97の1に示した。

4 福岡県彼坪遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

試料は、弥生時代前期とされる溝7（環濠）、および弥生時代中期後半とされる土坑120と土坑126（井戸）から採取された計14点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉25、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉21、シダ植物孢子3形態の計50である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、モクセイ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ユリ科、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、ゴキツル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、ミズワラビ、三条溝孢子

（２）花粉群集の特徴

１）溝７（環濠）

溝底部の地山（試料７）では、花粉がほとんど検出されなかった。溝の埋土底部（試料５、６）では、樹木花粉よりも草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ミズアオイ属、ガマ属-ミクリ属、オモダカ属などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属やシイ属-マテバシイ属が優占し、エノキ属-ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、クリなどが伴われる。埋土中部（試料３、４）でも、おおむね同様の結果である。埋土上部（試料１、２）では、花粉がほとんど検出されなかった。

２）土坑120

埋土（試料９、10）では、花粉がほとんど検出されなかった。

３）土坑126（井戸）

埋土下部（試料４）では、樹木花粉割合よりも草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科やオオバコ属が優占し、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が優占し、シイ属-マテバシイ属、エノキ属-ムクノキなどが伴われる。埋土中部（試料２、３）でも、おおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。

埋土上部（試料１）では、樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が優占し、クワ科-イラクサ科、ヨモギ属、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属やシイ属-マテバシイ属が比較的多い。

５．花粉分析から推定される植生と環境

（１）溝７（環濠）

弥生時代前期とされる溝７（環濠）の埋土の堆積当時は、イネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属、ガマ属-ミクリ属、ミズワラビ属などの水生草本が生育する湿地ないし滞水した環境であったと考えられ、周辺では水田稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺にはカシ類（コナラ属アカガシ亜属）やシイ属-マテバシイ属などの照葉樹林が分布していたと考えられ、部分的にクリ林やナラ林も見られたと推定される。

（２）土坑120

弥生時代中期後半とされる土坑の埋土では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

（３）土坑126

弥生時代中期後半とされる土坑の埋土下部の堆積当時は、イネ科やオオバコ属を主として、アブ

第10表 彼坪遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	溝7								土坑120		土坑126			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4
Arboreal pollen		樹木花粉														
<i>Podocarpus</i>		マキ属				1	2	1								
<i>Abies</i>		モミ属				5	1	1					2	1		1
<i>Tsuga</i>		ツガ属						1					1			
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属				3	2	2					4	2		1
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	1			1	1	1		1	1	1	2	1	1	2
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科				1										1
<i>Salix</i>		ヤナギ属				1										
<i>Juglans</i>		クルミ属				1										
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サウクルミ											1			
<i>Alnus</i>		ハンノキ属				1	1	1								
<i>Betula</i>		カバノキ属				1										2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ						1								1
<i>Castanea crenata</i>		クリ		1	24	7	4						2		1	4
<i>Castanopsis-Pasania</i>		シイ属-マデバシイ属		15	54	50	31	1					25	6	2	7
<i>Fagus</i>		ブナ属				1	1									
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属		4	10	7	4						2	1		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属		10	56	88	73	3	1				25	7	3	30
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		コレ属-ケヤキ				2	1							1		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		2	7	17	14						2			3
Celastraceae		ニシキギ科					1									
<i>Acer</i>		カエデ属				1										
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ				2		1								
<i>Vitis</i>		ブドウ属						1								
Oleaceae		モクセイ科		1												
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	1			1		1								
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉														
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科			2	3	4	17		1			52	7	2	5
Nonarboreal pollen		草本花粉														
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属				1	5	2								
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属					2	1							2	
Gramineae		イネ科	3		41	119	140	137		47	4	1	140	21	17	45
<i>Oryza type</i>		イネ属型			6	13	17	21					6			5
Cyperaceae		カヤツリグサ科			6	32	34	28					8	8		4
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属			1	1	1									
Liliaceae		ユリ科											1			
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節			2	1	3	1						1		
<i>Rumex</i>		ギンギン属			1	1	5	1					1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科			1	1	4	1		2			19	7	5	6
Caryophyllaceae		ナデシコ科					1						1			2
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属					1									
Cruciferae		アブラナ科			1	2	1						17	2		12
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>		ノブドウ					2									
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科			1	1	4	6								1
Apiodeae		セリ亜科				3	5	2					1	5		2
<i>Plantago</i>		オオバコ属											1			76
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキツル						4	1							1
Lactucoideae		タンポポ亜科											1	1		2
Asterioideae		キク亜科				2	13	1	5	1			4	1	1	
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属			4	10	10	12		6			45	8	4	8
Fern spore		シダ植物胞子														
Monolate type spore		単条溝胞子	2	1	11	11	4	4		2	2	2	3	3	4	1
Celatopteris		ミズワラビ			1											
Trilate type spore		三条溝胞子			1	6	9	13					2	2	1	
Arboreal pollen		樹木花粉	2	1	32	173	178	138	4	2	1	1	66	19	7	52
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	0	2	3	4	17	0	1	0	0	52	7	2	5
Nonarboreal pollen		草本花粉	3	0	66	198	240	218	0	56	4	1	245	54	29	164
Total pollen		花粉総数	5	1	100	374	422	373	4	59	5	2	363	80	38	221
		試料1cm ³ 中の花粉密度	3.5	0.6	2.5	6.0	1.3	6.5	3.5	4.2	3.5	2.1	1.3	4.9	2.7	1.8
			$\times 10$	$\times 10$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10$	$\times 10^2$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10^4$	$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^3$
Unknown pollen		未同定花粉	1	0	0	8	5	7	1	1	0	1	3	0	1	3
Fern spore		シダ植物胞子	2	1	13	17	13	17	0	2	2	2	5	5	5	1
Helminth eggs		寄生虫卵														
<i>Ascaris</i>		回虫卵						3					16			
<i>Trichuris</i>		鞭虫卵					3	4					23	1		2
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>		異形吸虫卵					1									
<i>Diphyllbothrium mansoni</i>		マンソン裂頭条虫卵					1						3			
Total		計	0	0	0	0	5	7	0	0	0	0	42	1	0	2
		試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	4.9	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	0.7	0.0	1.6
			$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10^2$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

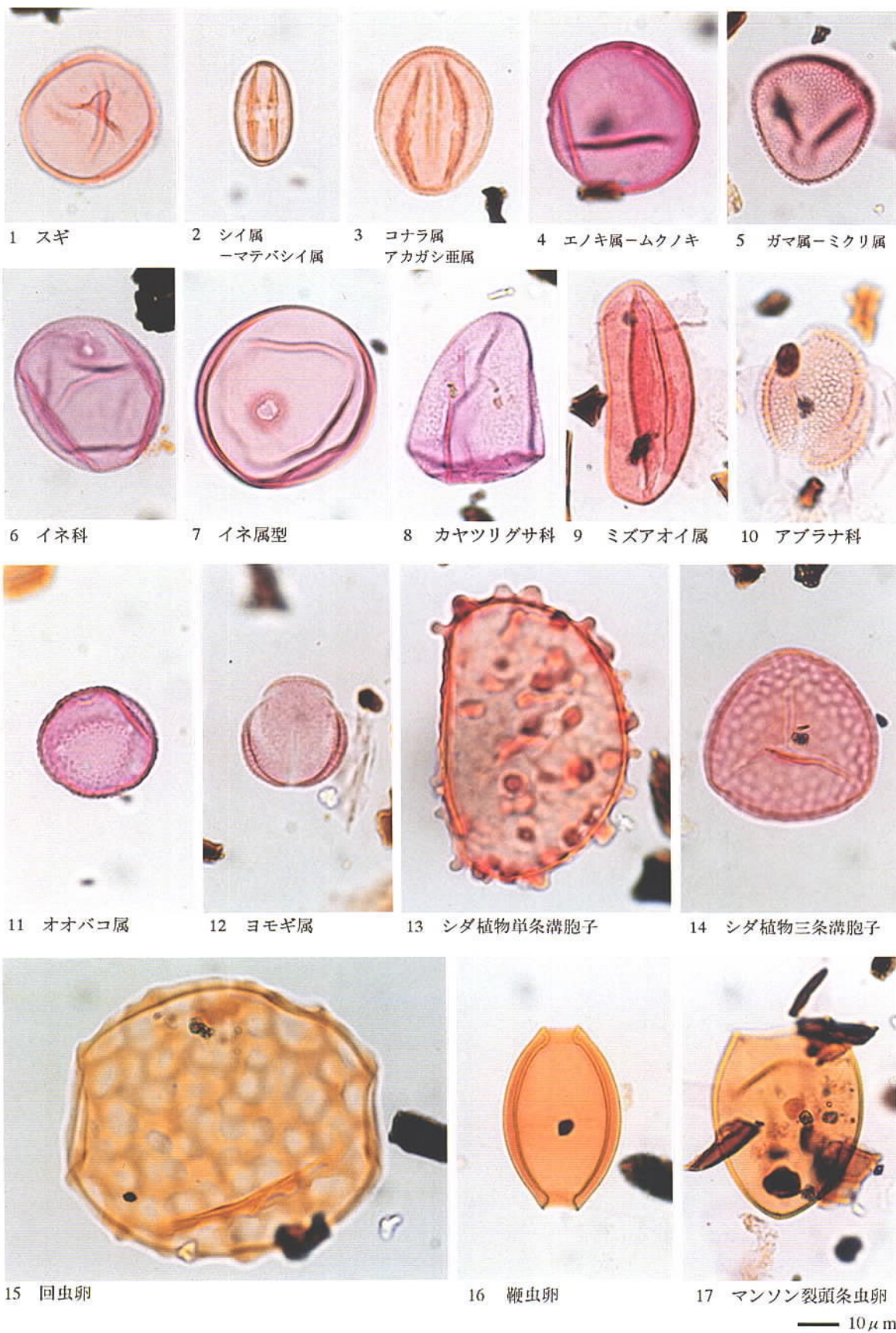
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花形形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.



第190図 彼坪遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵

5 おわりに

1. 彼坪遺跡の範囲と規模

彼坪遺跡対しては平成9～13年から4次にわたり調査を実施してきたが、その結果を示すと次のようになる。

	竪穴住居跡	土坑	掘立柱建物	甕棺墓	溝
1次調査	31棟	90基	6棟	1基	6条
2次調査	16棟	26基	1棟		3条
3・4次調査	33棟	143基			8条

なお、これらの遺構は遺構検出が難しく、遺構間の切合いも顕著であったため、性格を断定するまでにはいたっていないものも含んでいる事を、御了解いただきたい。

それぞれの調査区は県道工事予定範囲に限定されたが、2次調査区と3次調査区との間の谷地形を呈す遺構の空白地を除けば、いずれの調査区においても高い密度で弥生時代の遺構が検出されている。1次調査区の南端から、3・4次調査区の北東端までは、南北約450mに達する。彼坪遺跡の南に隣接する北大手木遺跡との間に遺構の空白地があるため、彼坪遺跡の南端は確認できるが、3・4次調査区の北東部では遺跡が調査区外へと続いており、南北方向へはさらに範囲の広がることは確実である。調査区の西には大刀洗川が南流しているが、現在の流路がどの時期まで遡るか発掘調査・文献記録等では確認できてはいない。ただ、大刀洗川が遺跡の立地する微高地の縁辺に沿って流れていると考え、遺跡の西端は大刀洗川までと考えられる。遺跡の東端は不明であるが、今後、県道久留米筑紫野線の拡幅事業が予定されており、それに先立つ確認調査、発掘調査により確定できると期待される。遺跡周辺は現在、平坦な水田となっており、微高地の形状は明らかにしがたく、2次調査区と3・4次調査区の間にもみられるような谷状地形もあると思われるが、現状では南北500m以上、東西300m程を彼坪遺跡の分布範囲と捉えておくべきであろう。

集落に伴う墓地としては甕棺墓1基と、数基の小児棺であった可能性の高い250号土坑が検出された1次調査区西北端付近に一群が存在すると推定される。ただ、調査範囲が限られたため、墓域の規模を推測するまでには至っておらず、複数の墓群を形成していても不思議ではない。

彼坪遺跡に隣接する地域での弥生時代の拠点集落としては、小都市大板井遺跡・小郡官衙遺跡・小郡若山遺跡にかけての地域と、久留米市北野町良積遺跡が挙げられる。大板井遺跡・小郡官衙遺跡・小郡若山遺跡はそれぞれ地点毎に名称を分けているが、弥生時代は一連の集落・墓地が分布する「大板井・小郡遺跡群」として理解することができる。遺跡は弥生時代中期に盛行期を迎え、東西900m、南北700mに達するという。良積遺跡は弥生時代前期の環濠に始まり、後期に最盛期を迎える。周辺に位置する赤司一区公民館遺跡・八勝負遺跡まで含めると東西500m、南北500m程の規模に達するのではないかと推測される。また、弥生時代後期の環濠集落として著名な甘木市平塚川添遺跡は南北500m、東西400m程の規模である。したがって、上で推測したような彼坪遺跡の分布範囲は大板井・小郡遺跡群には及ばないが、拠点集落に近い規模と評価できよう。

2. 彼坪遺跡出土土器からみた遺構の編年と遺跡の展開

彼坪遺跡におけるこれまで4次にわたる調査では多量の弥生土器が出土した。1・2次調査では弥生時代中期中頃～後半を中心とする遺構・遺物を中心とする。3・4次調査ではやはり中期中頃～後半を中心とする遺構・遺物が主体を占めつつ、前期中頃にまで遡る一部の土坑と溝、後期初頭にまで下る34号竪穴住居跡・21号竪穴住居跡等がある。3・4次調査では遺構密度が高く、発掘調査時における切合関係の把握が不十分であったという難点があるが、長期にわたる土器の変遷を知

るための資料に恵まれている。担当者の力量の不足により、ここでは周辺遺跡まで含めた総合的な土器の比較検討を行うことができないが、遺跡の変遷と関連づけて、遺構別の土器の時期について簡単にまとめておきたい。

彼坪遺跡の位置する筑後川流域の弥生時代前期～中期の土器の編年については、小郡市三国丘陵を中心とした資料に基づいた片岡宏二氏の一連の編年〔片岡1982・1984〕がある。ここではそれらを参考にして、時期を区分し説明を加えていきたい。

前期中頃～後半（片岡1984の前期Ⅱb期） 3・4次59号土坑 3・4次65号土坑 3・4次71号土坑 3・4次78号土坑 3・4次140号土坑 3・4次142号土坑

片岡氏はこの時期の指標として、頸部の沈線、肩部の沈線及び重弧文を施文した小形の壺が多いことを指摘している。甕は如意状口縁のものが多く、外面が踏ん張るような形態の底部が含まれる。断片的な縄文土器を除けば、彼坪遺跡における集落の初源期と理解できる。

前期末（片岡1984の前期Ⅱc期） 3・4次108号土坑 3・4次111号土坑 3・4次137号土坑 3・4次148号土坑 3・4次154号土坑

先行する時期との厳密な区分は難しいが、片岡氏は壺肩部の突帯の出現を指標とし、前期中頃～後半に多い小形壺の沈線が減少すると指摘している。甕は前期中頃以来の如意状の口縁のものが存在する一方で、亀の甲タイプの口縁に近い口縁外面に刻目突帯を貼付した甕が増加することもこの時期の指標に追加できると考えられる。

中期初頭（片岡1982のⅠa期・Ⅰb期） 3・4次139号土坑 3・4次150号土坑

3・4次150号土坑は口縁外面を断面三角形に肥厚させた甕がほとんどで、口縁直下の外面に沈線を巡らすものが多いことも特徴的である。その一方で、如意状口縁の甕、刻目突帯文系の甕は減少している。このような変遷が典型的に現れる150号土坑をこの時期の基準資料とすることができよう。3・4次139号土坑は出土遺物もすくなく、先行する時期の遺物の混入（彼坪Ⅲ第100図1）もあるが、甕の底部は上げ底で口縁部の刻目が減少するため、この時期に該当すると考えられる。

中期前半（片岡1982のⅡa期・Ⅱb期） 1次221号土坑 1次250号土坑（甕棺群） 3・4次145号土坑 北大手木遺跡4号住居跡 北大手木遺跡8号土坑 北大手木遺跡11号土坑

片岡氏はこの時期の指標として、それ以前の段階に主体を占めた如意形口縁の甕、口縁外面に断面三角形突帯を貼付した甕の消滅と、鋤先口縁の甕の出現をあげている。彼坪遺跡においてはこの時期の資料は少ないが、3・4次145号土坑を基準とすることができよう。また、1次221号土坑・1次250号土坑も当該期に含めることができる。このように彼坪遺跡では前時期に続き遺物、遺構とも少ないが、南に隣接する北大手木遺跡における竪穴住居跡・土坑の主体はこの時期に属している。なお、1次250号土坑はその群中に成人用甕棺が含まれており、橋口達也氏による甕棺編年にあてはめればKⅡC式になろう。

中期中頃（片岡1982のⅢ・Ⅳ期） 1次203号竪穴住居跡 1次25号土坑 1次230号土坑 1次231号土坑 1次235号土坑 1次239号土坑 2次18号土坑 2次19号土坑 2次26号土坑 3・4次24号竪穴住居跡 3・4次120号土坑 3・4次132号土坑 3・4次調査16号土坑 3・4次調査98号土坑

片岡氏はⅢ期の指標として壺を主体として丹塗土器が出現することをあげている。また、甕は上面が水平に近い鋤先口縁を呈すると指摘している。また、Ⅳ期になると丹塗土器の器種も増加するとともに、鋤先口縁甕の口縁外端部がやや垂れ下がり気味になり、中形の広口壺では口径が胴部最大径を上回ることを指標としている。なお、片岡氏はⅡ期から鋤先口縁の壺が増加するとしているが、実際に口縁部を鋤先状とした中形広口壺が増加するのは、この時期でも後半、Ⅳ期以降のことと思われる。甕の形態変化にあわせてこのような観点からこの時期を2分するならば、1次25号土

坑、1次239号土坑、2次18号土坑などがその前半、すなわち片岡編年のⅢ期になろう。高杯は鋤先口縁が主体をなすが、椀形のものも一部に出土している（彼坪Ⅲ第36図19・20）。

上述した遺構のほかに2次調査の竪穴住居跡の多くがこの時期の後半、片岡編年のⅣ期に相当するものが多い。なお、3・4次120号土坑および3・4次132号土坑では成人用の甕棺に匹敵する大形甕が出土している。口縁部の形態、突帯の形状などはKⅢa型式であるが、胴上部がわずかにくびれておりKⅢb型式の特徴も備えている。

中期後半～末（片岡1982のⅤ・Ⅵ期） 1次4号竪穴住居跡 1次5号竪穴住居跡 1次9号竪穴住居跡 1次204号竪穴住居跡 1次24号土坑 1次246号土坑 3・4次31号土坑 3・4次50号土坑

片岡氏はⅣ期とⅤ期を画する指標として丹塗甕の出現、口縁部を外反させた甕の増加をあげている。また、無頸壺においても鋤先口縁が減少し、くの字口縁が増加すると述べる。さらにⅥ期になると鋤先口縁の甕が消滅し、袋状口縁壺が出現するとする。3・4次31号土坑は外折した口縁、くの字口縁に近いものが含まれるとともに、ハケメで仕上げた小形の壺（彼坪Ⅲ第41図1）も含まれることから、中期末まで下がるわけではないが、およそ中期後半に位置づけることができよう。大形の丹塗甕が出土した126号土坑もこの時期か。このほか近辺では三井郡大刀洗町下高橋馬屋元遺跡の中期集落がほぼ中期の後半、片岡編年のⅤ期の典型的な資料となろう。3・4次調査の竪穴住居跡は切合関係の誤認等の理由による時期幅の大きな土器を含んでいるが、同様に中期中頃～後半を主体とすると考えられよう。ただ、彼坪遺跡では丹塗の袋状口縁壺は皆無であり、確実に中期末に位置づけられる遺構の存在を指摘することはできない。

後期初頭 3・4次34号竪穴住居跡 3・4次7号土坑 3・4次76号土坑

3・4次調査で比較的資料が揃っているが、先行する2時期に比べると竪穴住居跡・土坑等の遺構数は減少したと理解できる。中でも3・4次調査の34号竪穴住居跡は各器種が揃っており、この時期の標識的な資料として評価できよう（巻頭図版6）。また、3・4次調査73・76号土坑出土土器も一部の混入品を除けば、当該期に属する。

彼坪遺跡の遺構でもっとも遡るのは前期Ⅱb期の遺構であるが、問題となるのは環濠を構成すると思われる3号溝、7号溝の土器であろう。上述したように発掘調査時の分層の問題があり、3号溝出土品として図示した出土土器の下限は後期初頭にある。しかしながらその中で最も古い様相を示すものとして壺を基準に取り上げれば、第118図2の重弧文小形壺、口縁外面を第118図12の大形壺がある。また、第119図66・第120図72の如意状口縁甕も前期Ⅱb期にまでは遡る可能性があろう。7号溝出土土器も時期幅が大きい、口縁外面を微かに肥厚させた第140図5の大形壺、第141図54・55の甕などは前期Ⅱb期にまで遡ると推測される。したがって、環濠の掘削も前期Ⅱb期に求められる。どの時期まで環濠の機能が維持されたかは問題となるが、出土土器、遺構の切合等で確定できるような状態ではない。ただ、中期初頭～中期前半の遺物がそれぞれの溝では少ないことから考えると、環濠は長い期間をかけて徐々に埋没したとするには無理がある。前期の段階ではほとんど埋没し、中期後半以降の遺物はその上面を掘り込んだ遺構に帰属するものではないかと推測しておきたい。

後期初頭は彼坪遺跡の終焉期であるが、3・4次34号竪穴住居跡からは良好なセットで当該期の土器が出土しており、今後、本遺跡のみならずこの時期の編年及び地域性を考える一つの指標となろう。34号住居跡のうち壺には口縁部が中期末の袋状口縁から後期の複合口縁への中間的形態を呈するものが含まれる。甕は断面「く」の字口縁のものが主体を占めるが、高杯では鋤先口縁をとどめている。このような過渡的様相に加えて、それまで盛行していた丹塗土器が全く含まれず、壺・鉢の内外面・甕内面にハケメを残すなどの中期の土器との大きな調整の変化も指摘できる。また、

第20図6の直口壺は当該期に新たに出現した器種と考えられる。

中期末～後期初頭の弥生土器については丹塗土器の盛行する時期を中期までとする考え（例えば中園2003）と、「く」の字口縁の成立を画期とし、丹塗土器を含んでも後期とする説（片岡1982）に大きく分かれ、甕棺編年との平行関係、他地域との平行関係の議論に問題が生じている（平2004）。34号住居跡の土器はいずれの基準においても後期に位置づけることができるが、これに先行する土器は彼坪遺跡では明確ではない。

彼坪遺跡の周辺地域で34号住居跡の直前の土器群を求めるとなると、第191図に示した小郡市津古牟田遺跡2号祭祀土坑（1～15）、筑前町（旧夜須町）金山遺跡竪穴住居跡出土土器（16～24）の資料などがあげられる。津古牟田遺跡2号祭祀土坑出土土器、金山遺跡のいずれにおいても甕は鋤先口縁ではなく、口縁が断面「く」の字ないしは逆「L」字を呈する。ただ、いずれにおいても丹塗土器が含まれるとともに、鋤先口縁広口壺（1・2・5・16）、瓢形壺（2・17）、口縁直下に突帯を巡らす大形甕（9・10）、無頸壺（18）、精製の鉢（23）などの中期後半以来の器種が含まれる。金山遺跡出土土器を後期初頭におく見解もあるが、以上のような点で金山遺跡・津古牟田遺跡出土土器を中期末とすることが適当と思われる。したがって、彼坪遺跡の1次4・5・9・204号住居跡、1次24・246号土坑、3・4次31・50号土坑や、下高橋馬屋元遺跡の中期の各遺構はこれらに先行する中期後半、彼坪遺跡3・4次34号竪穴住居跡はこれらに後続する後期初頭となろう。

ただ、中期末の指標とされる小形の袋状口縁壺は彼坪遺跡を含めた筑後川流域では少ない。また、中期後半においては壺の器種構成、鋤先口縁・逆「L」字形・跳上口縁などの甕口縁部の構成等において、北部九州各地はもちろん、福岡平野と筑紫川流域の間、あるいは筑後川流域の諸地域の間でも地域色がある。平美典氏は北部九州地域の中期末～後期初頭の土器編年における関する認識の食い違いを指摘しているが、上述したような区分の基準の設定の厳密化に加えて、福岡平野と筑紫平野などの地域色の抽出とその再構築から解決する必要があると思われる。そのような検討においても彼坪遺跡の出土土器は重要な意味をもつであろう。

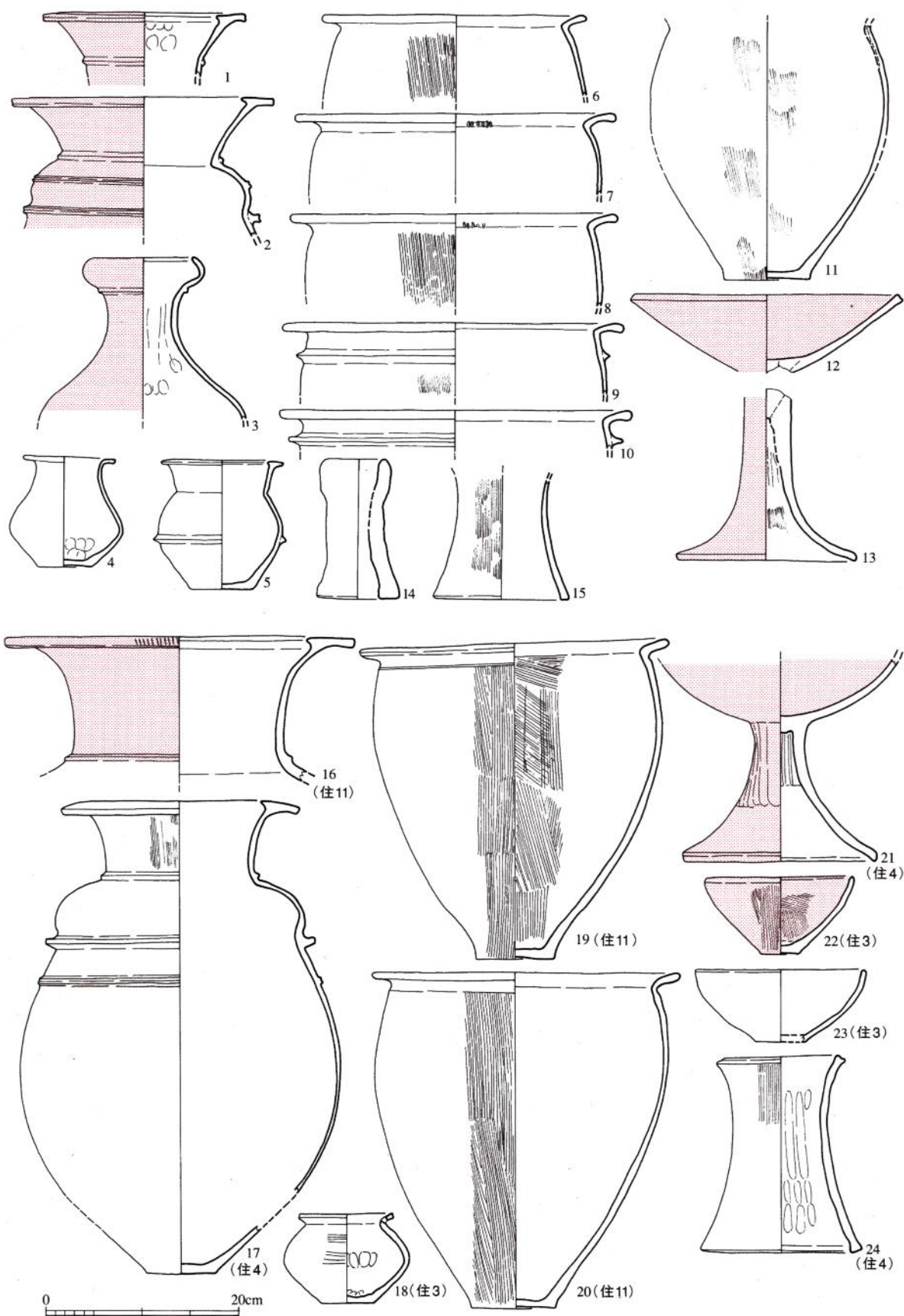
3. 彼坪遺跡3・4次調査の環濠について

彼坪遺跡3・4次調査において検出された3号溝・7号溝はいずれも断面V字形を呈し、3号溝は検出面からの深さ1.4～1.7m、7号溝は検出面からの深さ2.3mを測る深く、規模の大きい溝である。3号溝・7号溝は向かい合う弧をなしており、一部しか検出していないが環濠を形成していたと考えて間違いはない。3号溝・7号溝の間は心々で約73mを測り、楕円形に近い平面形を呈すと考えられる。西側の7号溝は谷への傾斜面に沿うように走り、遺跡の立地する微高地でも特に大刀洗川に近い縁辺部を選地しているといえる。

筑紫平野における弥生時代の環濠・環濠集落として確実なものには小郡市三国の鼻遺跡（後期）、同三沢北中尾遺跡1地点（前期）同横隈山遺跡5地点（前期）、同横隈山遺跡7地点（前期）、同津古内畑遺跡（前期）、同横隈北田遺跡（前期）、朝倉郡筑前町（旧夜須町）迫額遺跡（中期後半）、同東小田七板遺跡（後期）、同中原前遺跡（後期）、甘木市平塚川添遺跡（後期）、久留米市北野町良積遺跡（前期・後期）等が挙げられる。

この内、彼坪遺跡環濠の比較対照となる前期に遡るものとしては三国丘陵の三沢北中尾遺跡1地点・横隈山遺跡5地点・横隈山遺跡7地点・津古内畑遺跡・横隈北田遺跡・良積遺跡がある。三沢北中尾遺跡5地点は85mの直径の円形、横隈山遺跡5地点は直径50mの円形、横隈山遺跡7地点は長軸117mの楕円形、横隈北田遺跡は直径111mの円形、津古内畑遺跡は直径48mの円形、良積遺跡は直径80mの円形を呈する。

片岡宏二氏（2004）は小郡市内の初期の環濠として丘陵の先端で、かつ鞍部により丘陵本体と区



第191図 周辺遺跡の弥生時代中期末の土器

分される場所を選地すると指摘している。さらに、全体の環濠のレベルは、丘陵の先端に向う方が低くなるように配され、環濠の内部には住居は営まれないが、環濠の掘られていない鞍側に住居が営まれているという特徴を挙げている。

沖積平野との比高差が大きい丘陵上に立地する小郡市三国丘陵の弥生時代前期環濠と、沖積平野中のわずかな微高地に立地する彼坪遺跡前期環濠は差があるが、丘陵の縁辺部、河川・沖積平野に近い場所に立地する点は共通すると言えよう。彼坪遺跡、さらに筑後川の支流である陣屋川に面する良積遺跡の例を考慮するならば、丘陵の特に縁辺部、沖積平野・小河川に面した場所に位置する傾向があると理解できるだろう。小郡市上岩田遺跡9地点の弥生時代早期に遡る溝も、環濠となるとすれば、沖積平野に面する丘陵先端の立地と考えられる。

環濠内の住居については、彼坪遺跡では中期以降の遺構の密度が高いため削平された恐れもあるが、環濠と同時期の竪穴住居跡は環濠内では検出されていないので、片岡氏の指摘と符号する。また、上述したような前期の環濠はその多くが直径50～100mの内に収まり、規模の規則性をうかがわせる。さらに、これら初期環濠の間には深いV字形を呈する環濠の横断面形という共通点があることは、周知のとおりである。このような点において、台地縁辺を取り囲んだり、居館的建物群を区画する弥生時代中期以降の環濠とは性格に違いがある。

弥生時代早期の環濠として著名な福岡市博多区板付遺跡・那珂遺跡の環濠、福岡市早良区有田遺跡の環濠は長軸150m程に達し、二重環濠を形成するなど、上述した筑後川流域の初期環濠とは規模・構造には差がある。また、板付遺跡、那珂遺跡では丘陵の削平により、環濠内の竪穴住居の有無については不明である。ただ、上述したような立地においては筑後川流域の初期環濠との類似性が指摘できよう。

しかしながら、彼坪遺跡の環濠そのものは、道路予定地の部分的な発掘にとどまり、規模・内部構造が確定できたわけではない。また、調査の問題もあり、埋没過程などの解明できなかった課題も多い。これについては、今後の周辺地における確認調査の進展に期待することにした。

参考文献

- 平 美典 2004「弥生中期時の平行関係の現状と編年的課題－北部九州における中末後初の移行期をめぐって－」『九州考古学』第79号
- 片岡 宏二 1984「板付2式土器の細分と編年について－特に三国丘陵の資料を中心として－」『三沢蓬ヶ浦遺跡』福岡県文化財調査報告書第66集
- 片岡 宏二 1982「弥生時代中期の土器編年について－特に三国丘陵の資料を中心に－」『大板井遺跡』2小郡市文化財調査報告書第14集
- 中園 聡 2004『九州弥生文化の特質』九州大学出版会
- 片岡 宏二 2004「水田稲作農耕の定着と展開－三国丘陵における弥生時代前期社会の諸問題」『三沢北中尾遺跡1地点』小郡市文化財調査報告書第181集

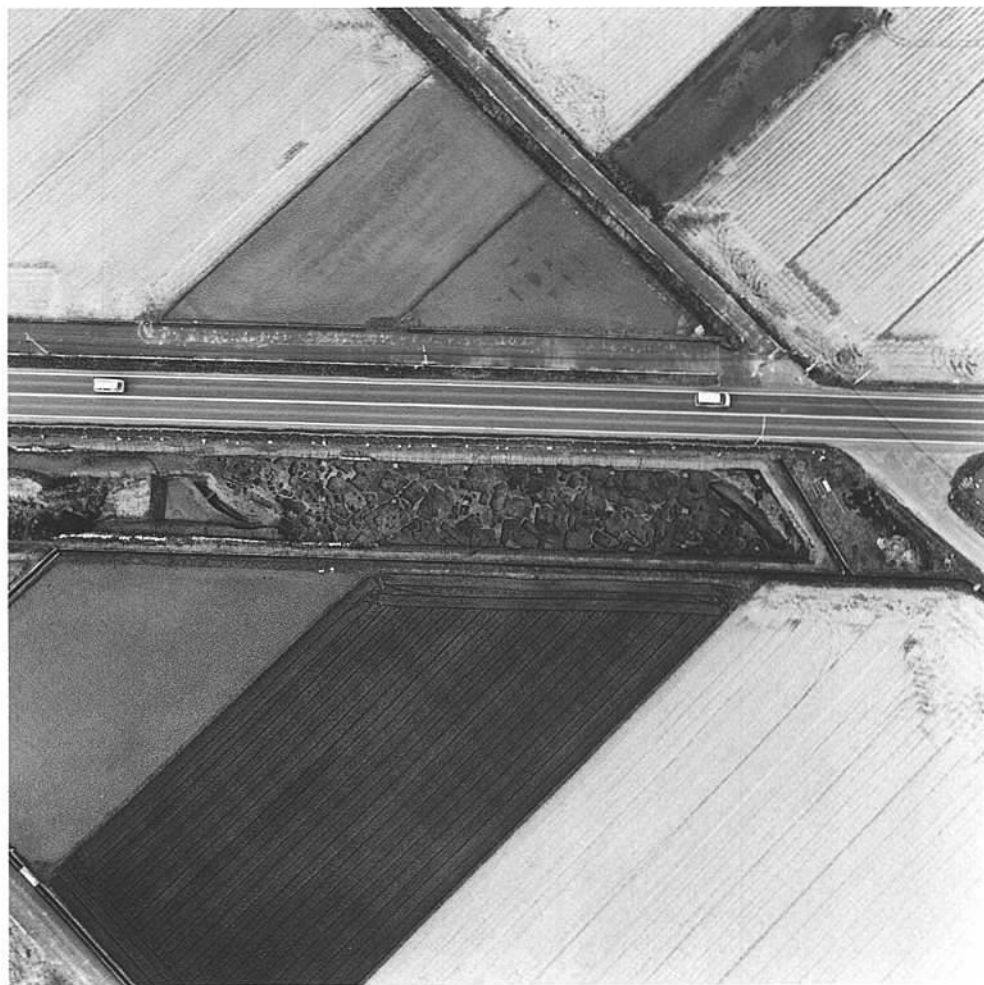
図 版



1. 彼坪遺跡周辺航空写真



2. 第1面全景



1. 第2面全景



2. 調査区（北東から）



1. 調査区（南西から）



2. 調査区（南東から）



1. 第1面西部



2. 第2面西部



1. 第1面東部



2. 第2面東部



1. 彼坪遺跡遠景（南西から）



2. 彼坪遺跡遠景（南東から）



3. 調査区全景（西から）



1. 第1面完掘状況（東から）



2. 第2面完掘状況（東から）



3. 第1面完掘状況（西から）



4. 第2面完掘状況（西から）



1. 4号竪穴住居跡（北から）



2. 8号竪穴住居跡（南東から）



3. 13号竪穴住居跡（南西から）

1. 16・18号竪穴住居跡（北から）



2. 19号竪穴住居跡（西から）



3. 21号竪穴住居跡（北から）





1. 21号竪穴住居跡（西から）



2. 22号竪穴住居跡（西から）



3. 23・25号竪穴住居跡（北から）

1. 24号竪穴住居跡（北から）



2. 25号竪穴住居跡（西から）



3. 26号竪穴住居跡（西から）





1. 27号竪穴住居跡（北西から）



2. 28号竪穴住居跡（北から）



3. 29号竪穴住居跡（北から）

1. 30号竪穴住居跡（北西から）



2. 31号竪穴住居跡（北西から）



3. 31・32号竪穴住居跡（北西から）





1. 33号竪穴住居跡（西から）



2. 34号竪穴住居跡
遺物出土状況（北から）



3. 34号竪穴住居跡（北から）

1. 32号竪穴住居跡（西から）

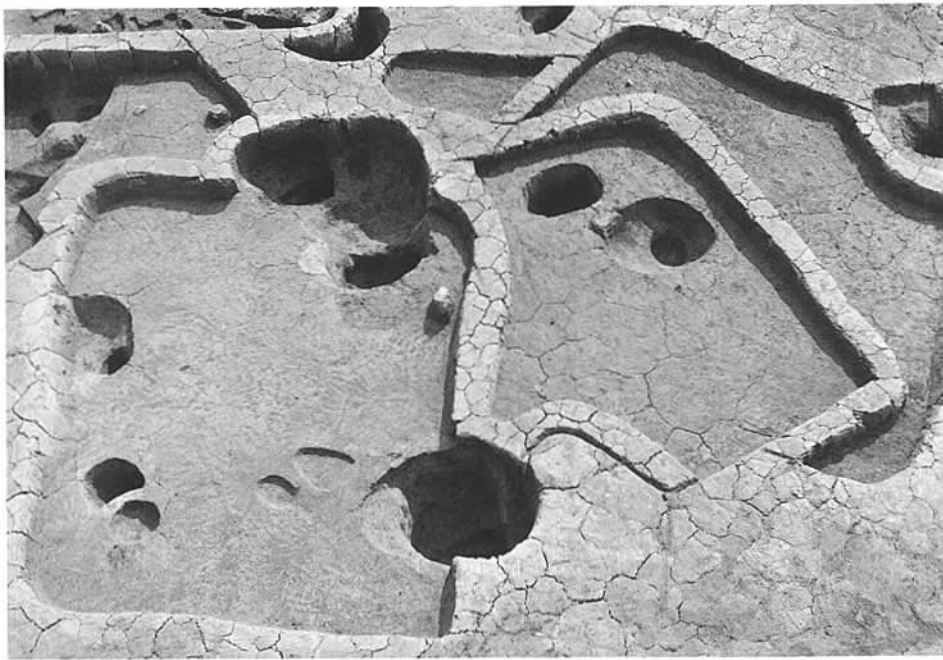


2. 35号竪穴住居跡（南から）



3. 36号竪穴住居跡（北から）





1. 37・39・40号竪穴住居跡
(北西から)



2. 41号竪穴住居跡 (北から)



3. 42号竪穴住居跡 (北西から)



1. 43号竪穴住居跡（南から）



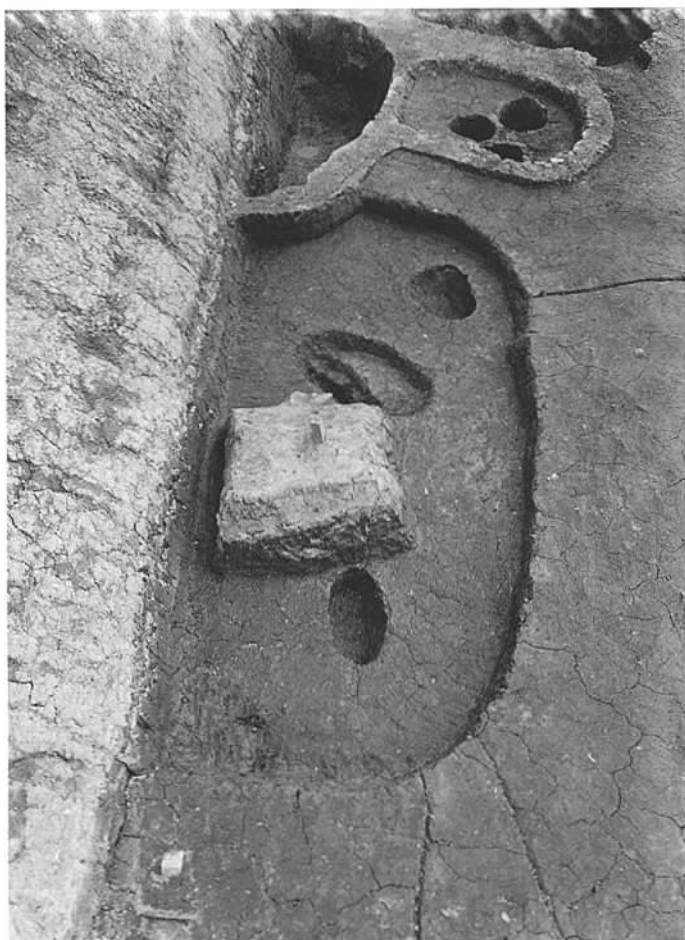
2. 44号竪穴住居跡（南から）



3. 45号竪穴住居跡（南から）



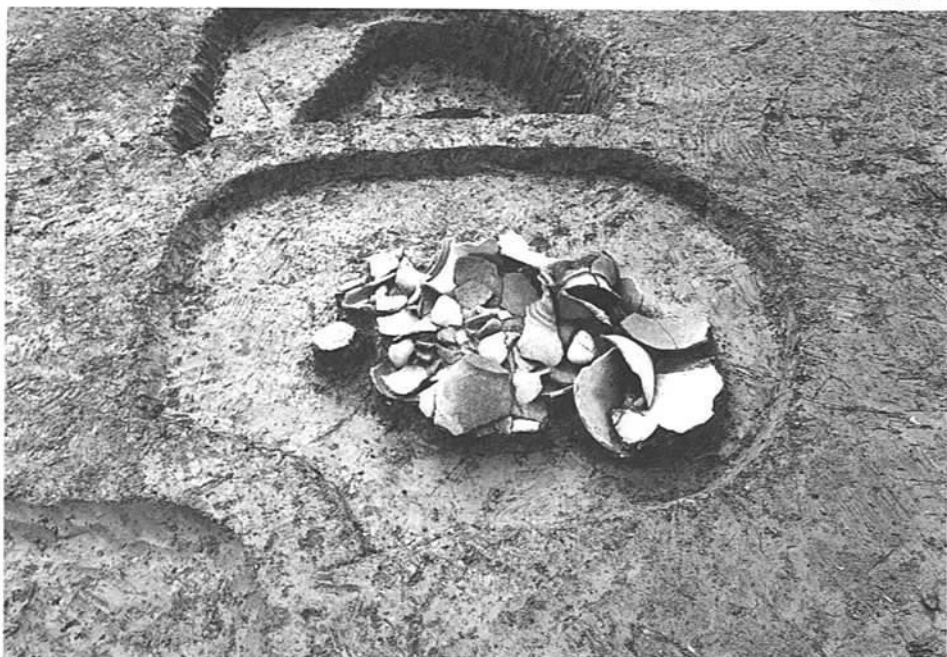
1. 47号竪穴住居跡（北から）



2. 23号竪穴住居跡（西から）



3. 46号竪穴住居跡（南から）



1. 7号土坑（東から）



2. 13号土坑（北から）



3. 14号土坑（西から）



1. 16号土坑（北から）



2. 24号土坑土層



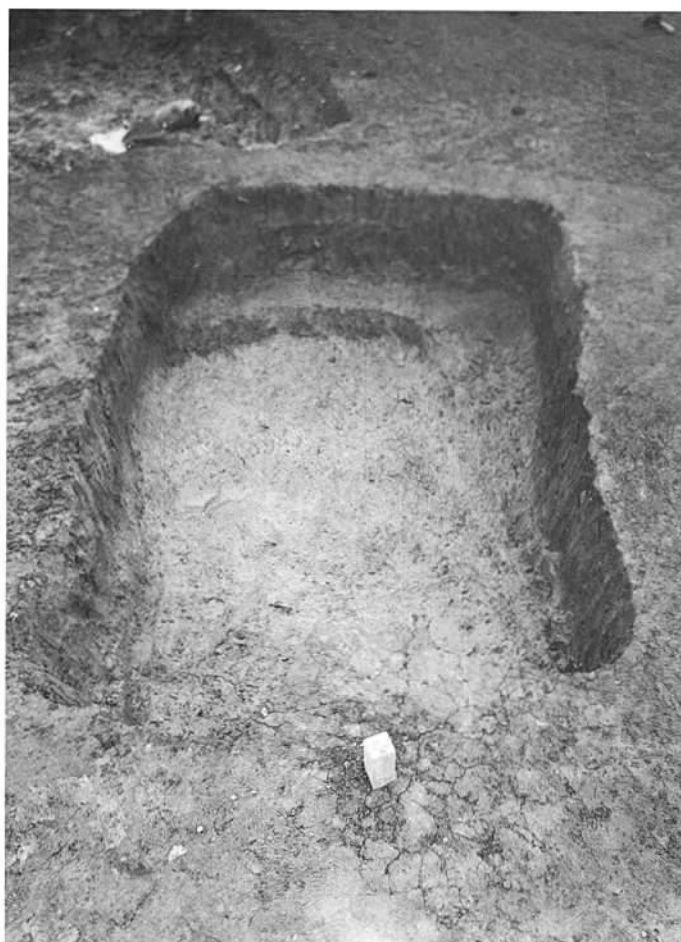
3. 27～29号土坑（東から）



1. 19・20号土坑（北西から）



2. 22号土坑（北から）



3. 24号土坑（東から）



4. 25号土坑（南東から）



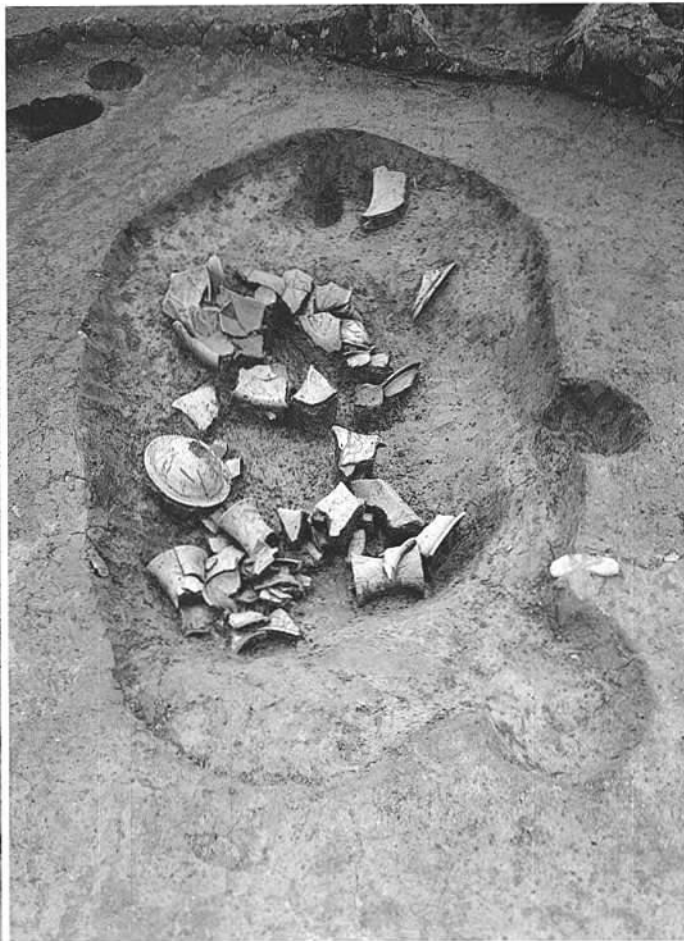
1. 27・29号土坑（東から）



2. 30号土坑（東から）



3. 30号土坑土器出土状況



4. 31号土坑（北西から）



1. 34号土坑（北から）



2. 35号土坑（東から）



3. 37号土坑（西から）



4. 38号土坑（南から）



1. 39号土坑（北東から）



2. 40号土坑（北東から）



3. 41号土坑（南から）



4. 43号土坑（北から）



1. 46号土坑（西から）



2. 48号土坑（北西から）



3. 49号土坑（北から）



4. 50号土坑（西から）



1. 51号土坑（北から）



2. 52号土坑（北から）



3. 56号土坑（南から）



4. 59号土坑（東から）



1. 54・65号土坑（北東から）



2. 55号土坑（北東から）



3. 56・60号土坑（南から）



1. 60号土坑 (西から)



2. 63号土坑 (東から)



3. 65号土坑 (北から)



4. 66号土坑 (西から)



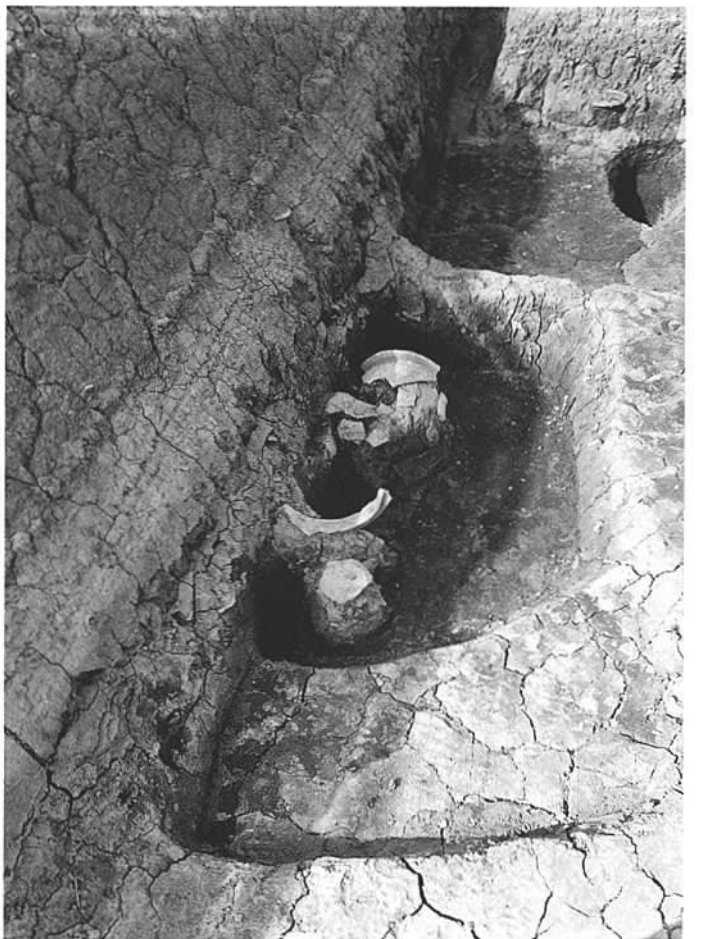
1. 68号土坑 (西から)



2. 72号土坑 (東から)



3. 73号土坑 (南西から)



4. 74号土坑 (南から)



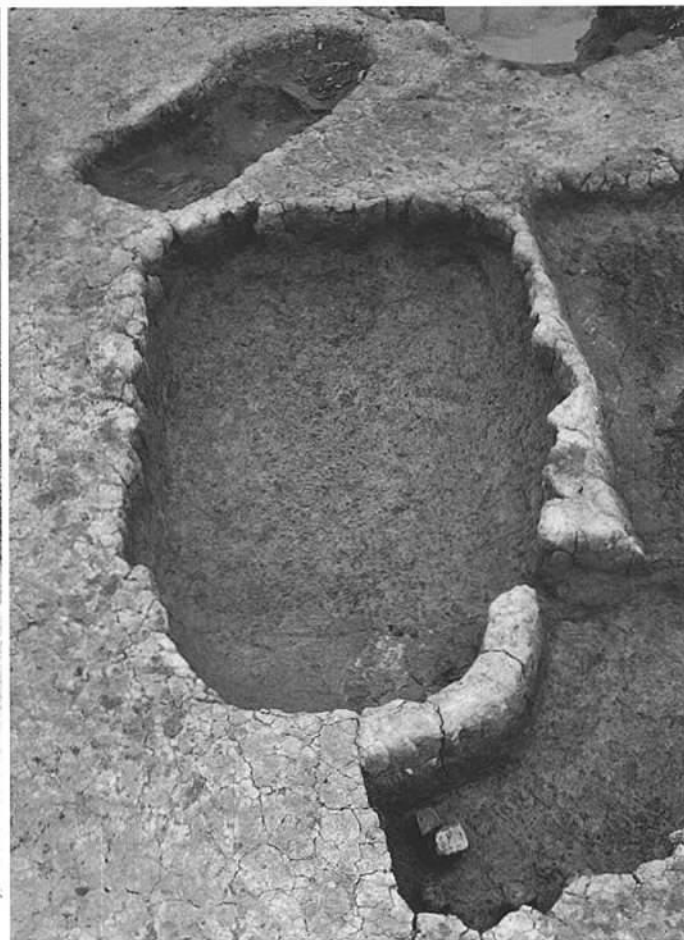
1. 75号土坑土層（東から）



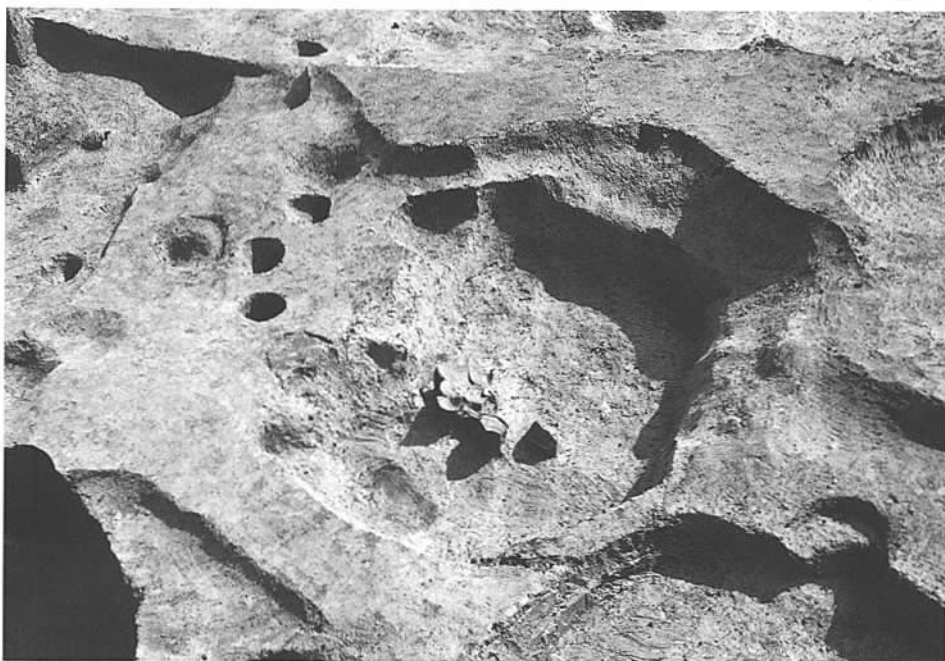
2. 75号土坑（西から）



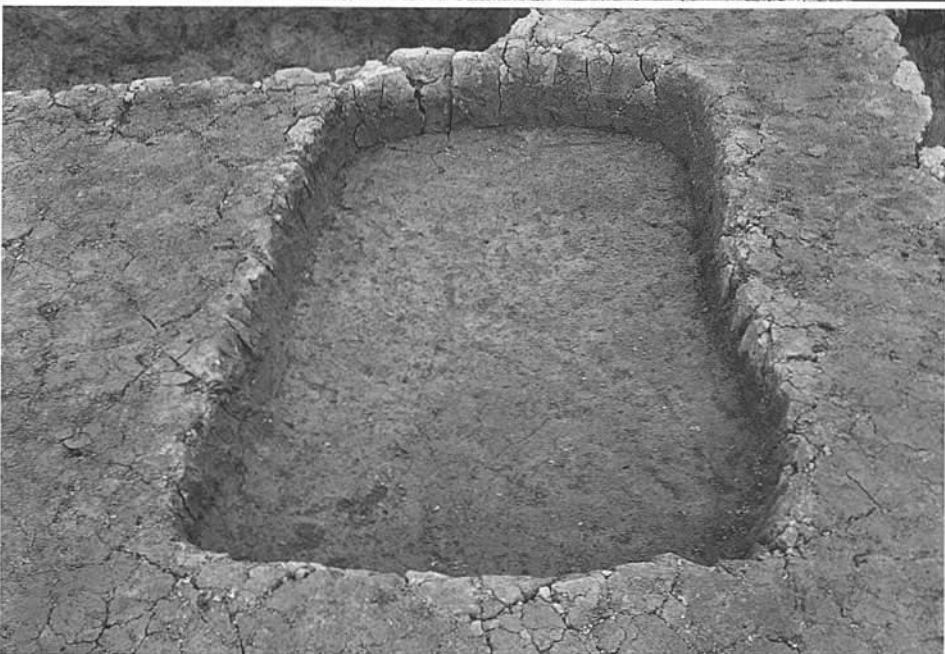
3. 76号土坑（北から）



4. 78号土坑（南から）



1. 71号土坑 (北から)



2. 77号土坑 (南から)



3. 80号土坑 (南から)



1. 83号土坑（南から）



2. 84号土坑（北から）



3. 87号土坑（西から）



4. 88号土坑（西から）



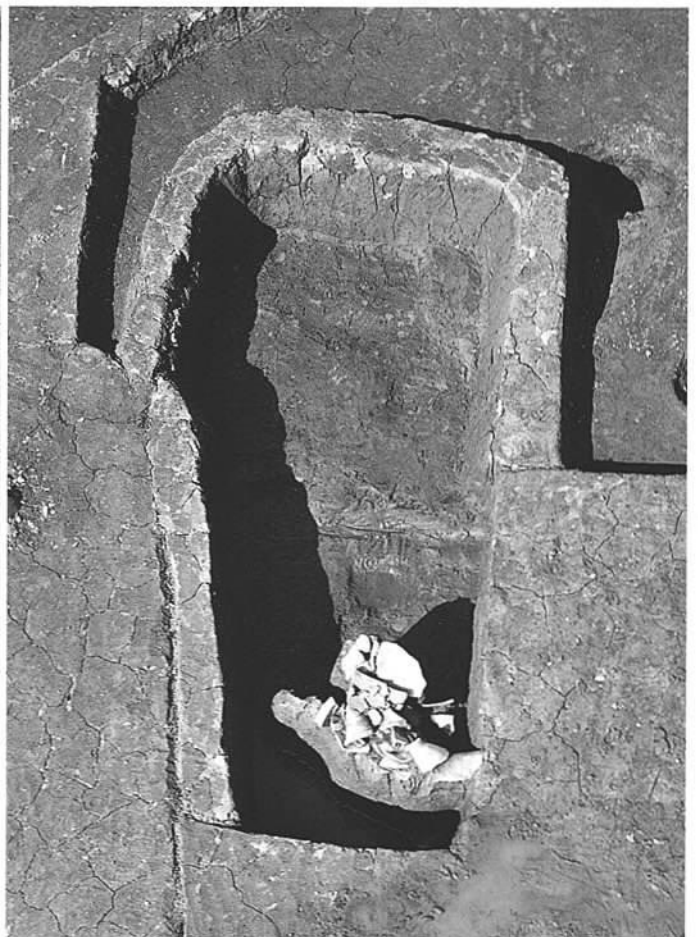
1. 86号土坑（北西から）



2. 86号土坑土器出土状況（西から）



3. 89号土坑（南から）



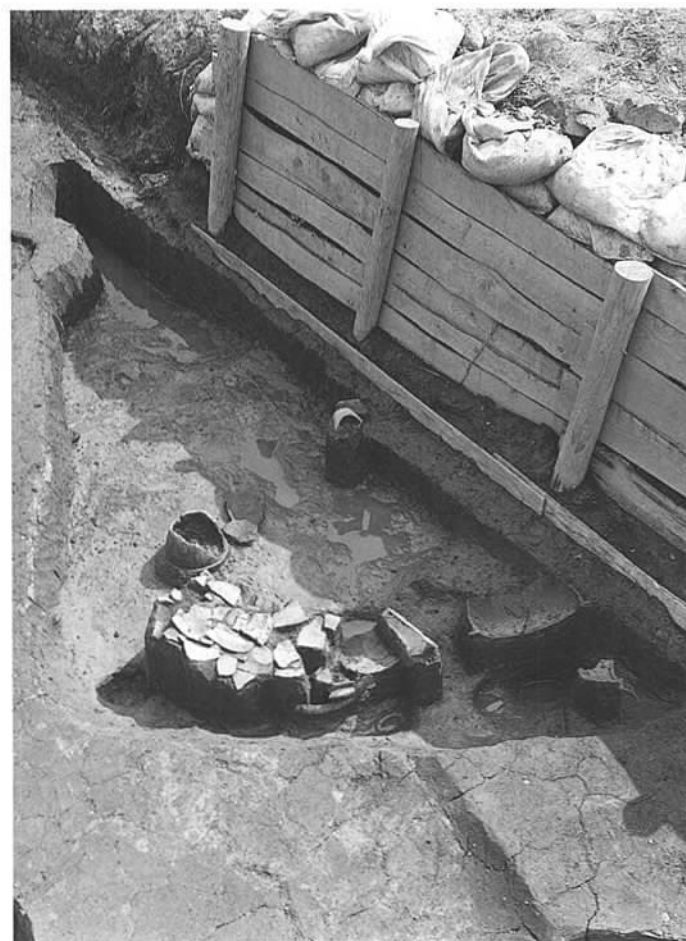
4. 90号土坑（南から）



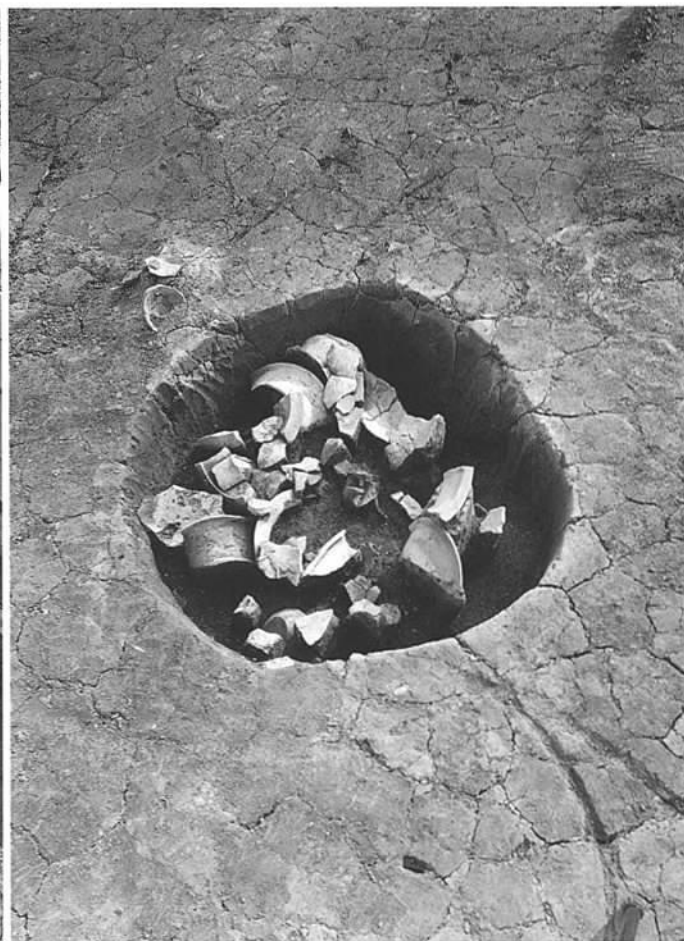
1. 91号土坑（西から）



2. 93号土坑（西から）

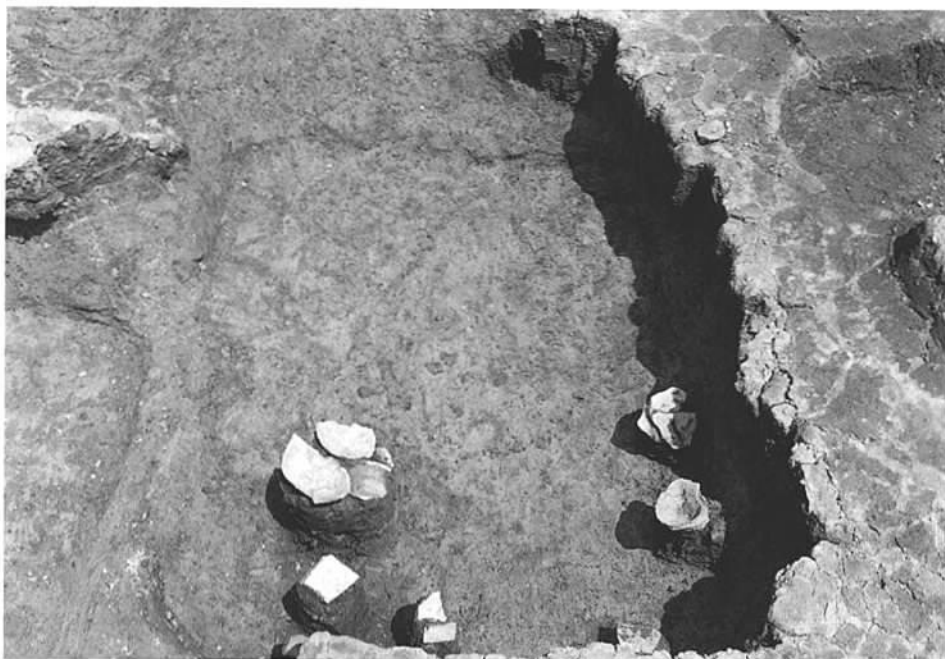


3. 97号土坑（北西から）



4. 98号土坑（東から）

1. 82号土坑（西から）

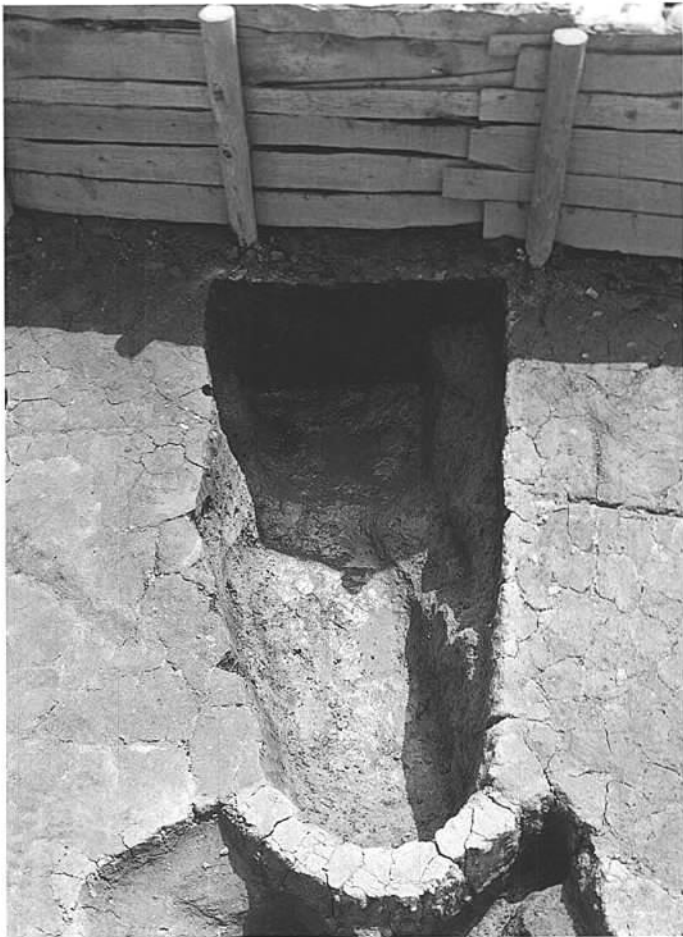


2. 95号土坑（北西から）



3. 96号土坑（南東から）





1. 99号土坑（北から）



2. 102号土坑（南西から）



3. 100号土坑（南から）



4. 101号土坑（南から）



1. 104号土坑（北から）



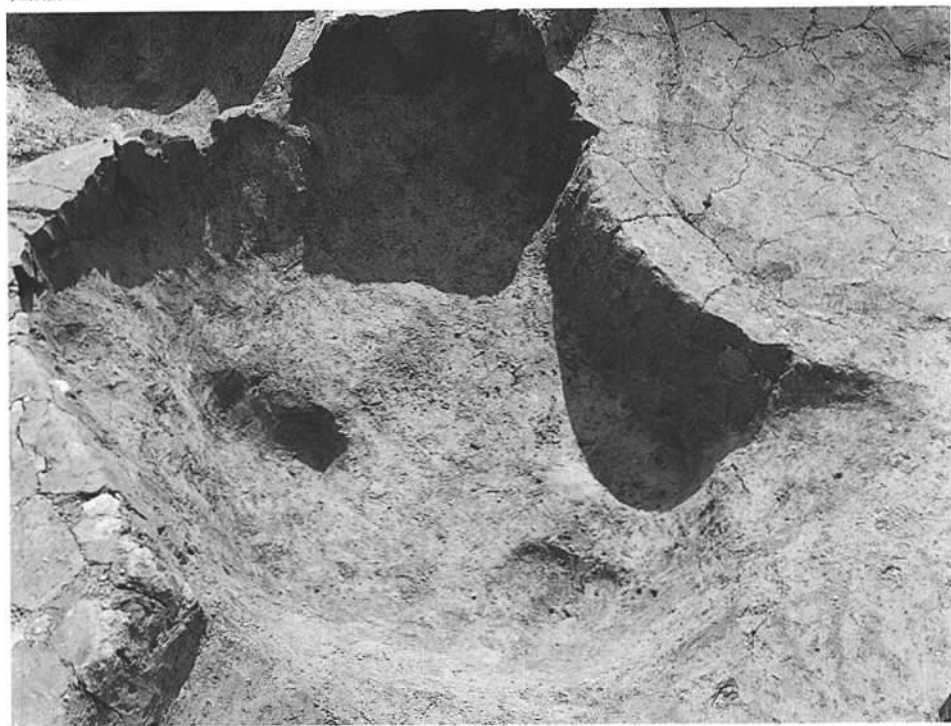
2. 106号土坑（北から）



3. 107号土坑（南西から）



4. 108号土坑（東から）



1. 103号土坑（北東から）



2. 105号土坑（南西から）



3. 109号土坑（北西から）



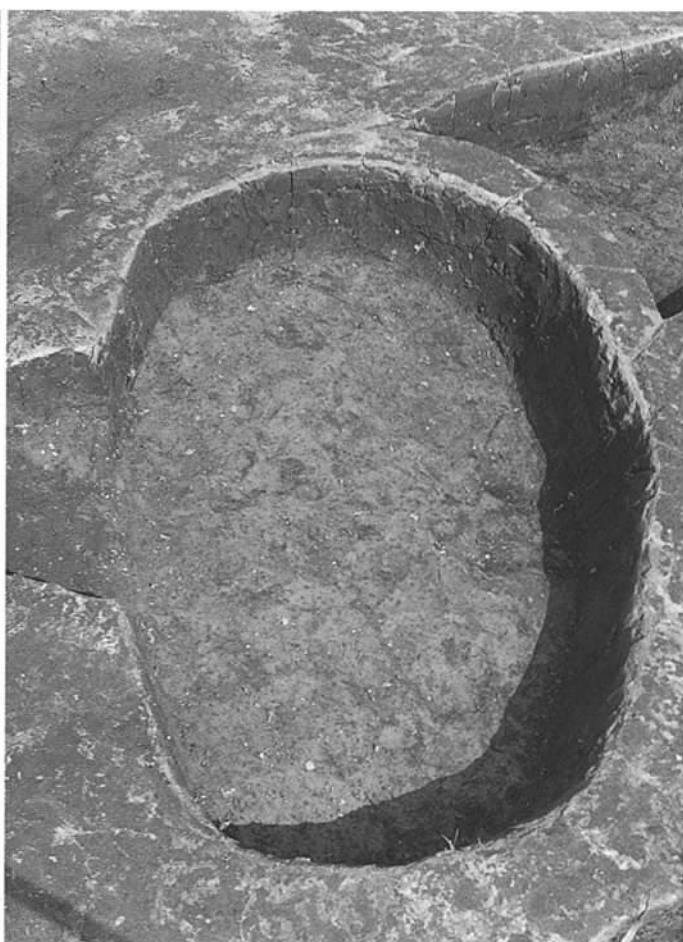
1. 112号土坑 (東から)



2. 113号土坑 (南から)



3. 115号土坑 (東から)



4. 118号土坑 (南西から)



1. 111号土坑（北から）



2. 116号土坑（東から）



3. 126号土坑（東から）



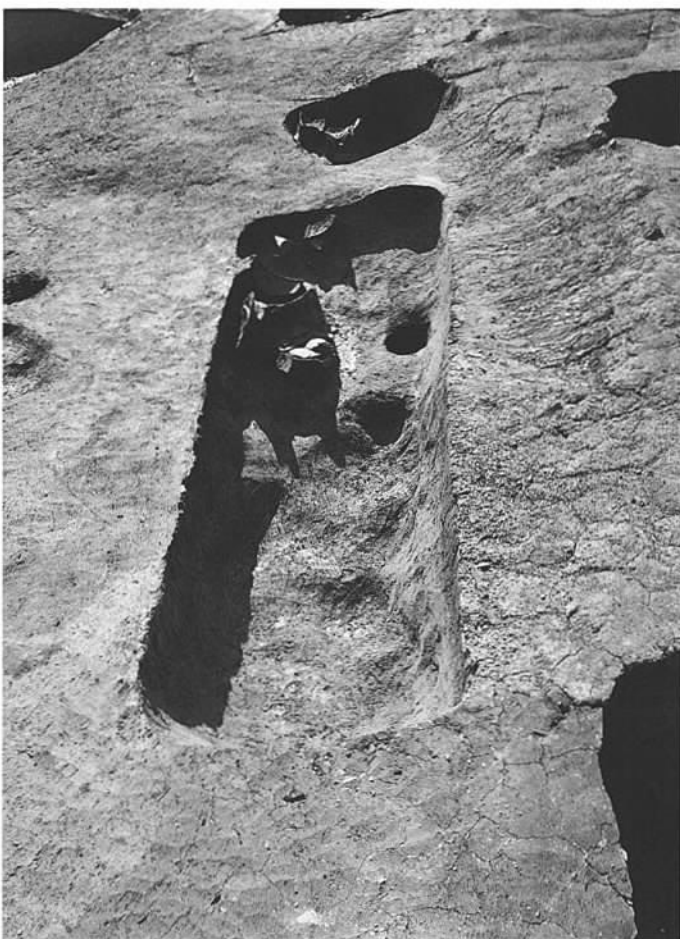
1. 119号土坑（東から）



2. 120号土坑（西から）



3. 121号土坑（南西から）



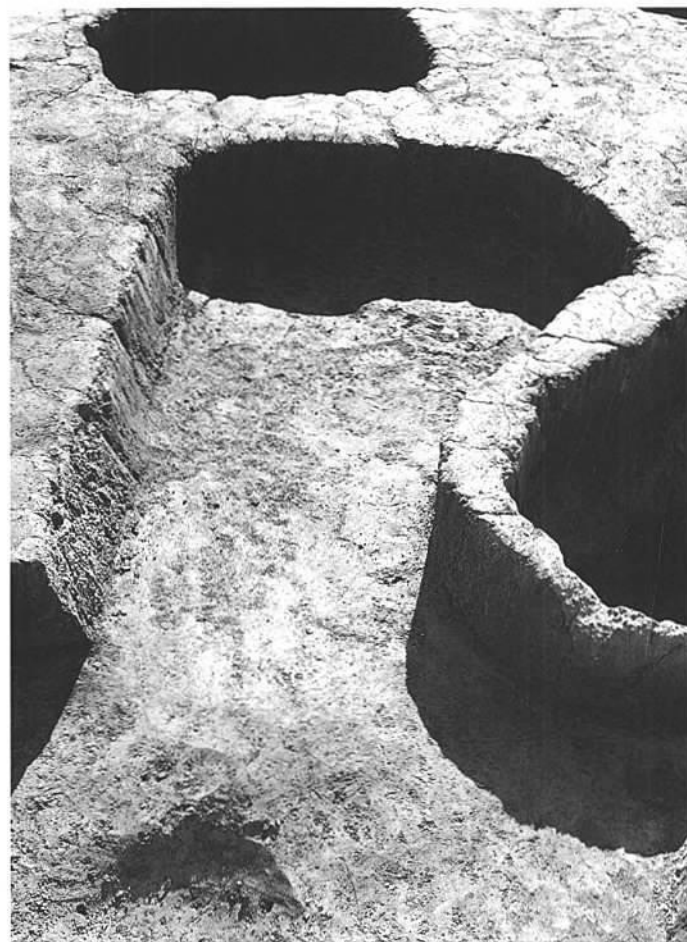
4. 122号土坑（東から）



1. 123号土坑 (南から)



2. 124号土坑 (南から)



3. 127号土坑 (北から)



4. 125号土坑 (東から)



1. 128号土坑 (南東から)



2. 129号土坑 (南から)



3. 130号土坑 (南から)



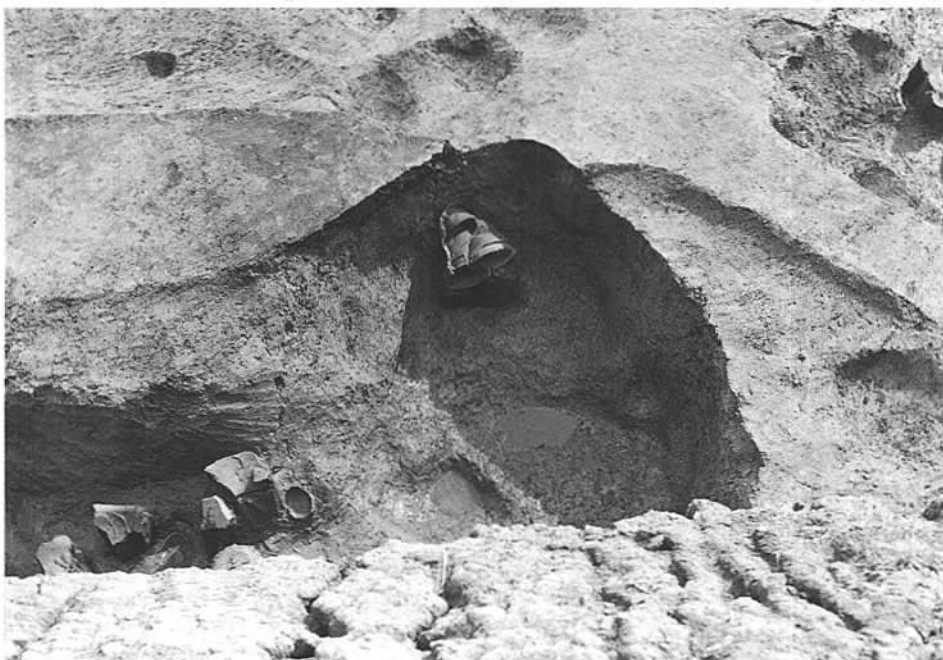
4. 134号土坑 (東から)



1. 133号土坑（北から）



2. 136号土坑（北から）



3. 137号土坑（北から）



1. 139号土坑（北から）



2. 140号土坑（北から）



3. 143号土坑（北から）



1. 138号土坑（西から）



2. 142号土坑（東から）



3. 144号土坑（東から）



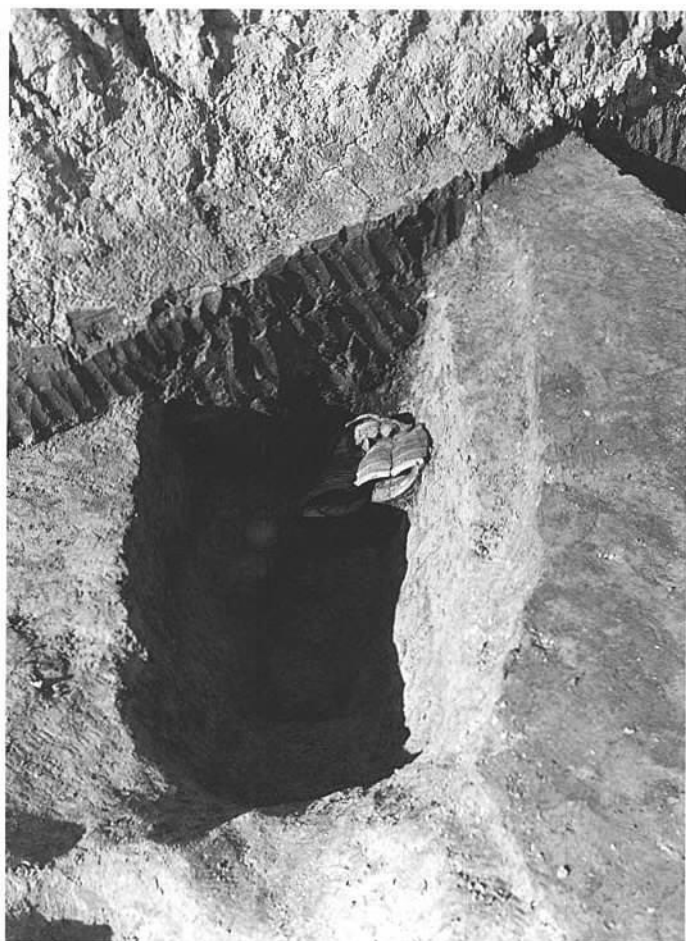
4. 141号土坑（西から）



1. 145号土坑（北東から）



2. 147号土坑（北東から）



3. 148号土坑（南から）



4. 151号土坑（北から）



1. 150号土坑土層（北から）



2. 150号土坑（北から）



3. 152号土坑（北から）



4. 154号土坑（西から）



1. 146号土坑（北から）



2. 3号溝土層



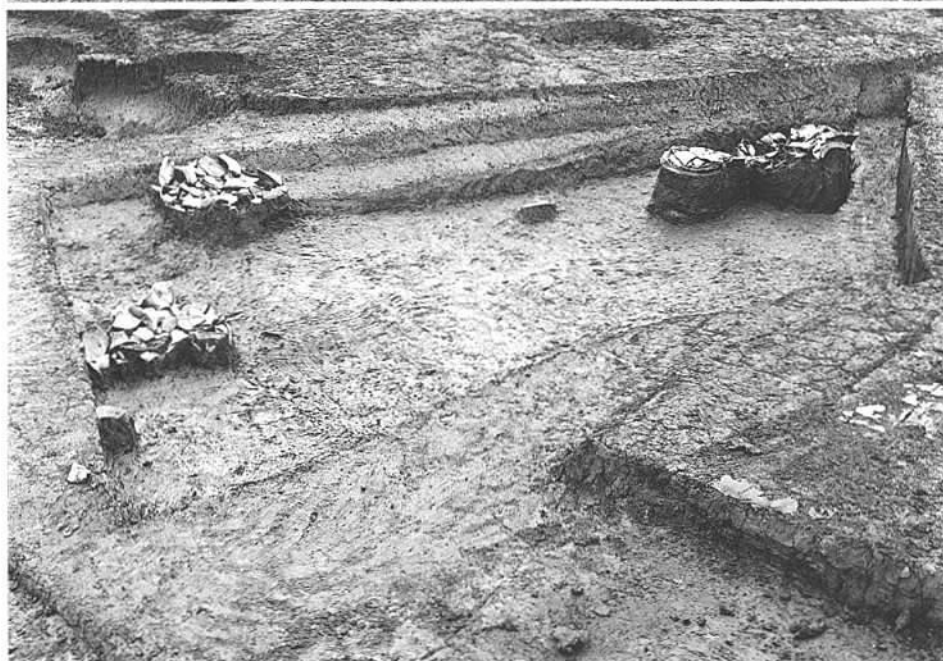
3. 5号溝



1. 4号溝（北から）



2. 4号溝土器出土状況 1



3. 4号溝土器出土状況 2

1. 6号溝（北から）



2. 7号溝・同上面谷土層



3. 7号溝下部土層





1. 3号溝（北西から）



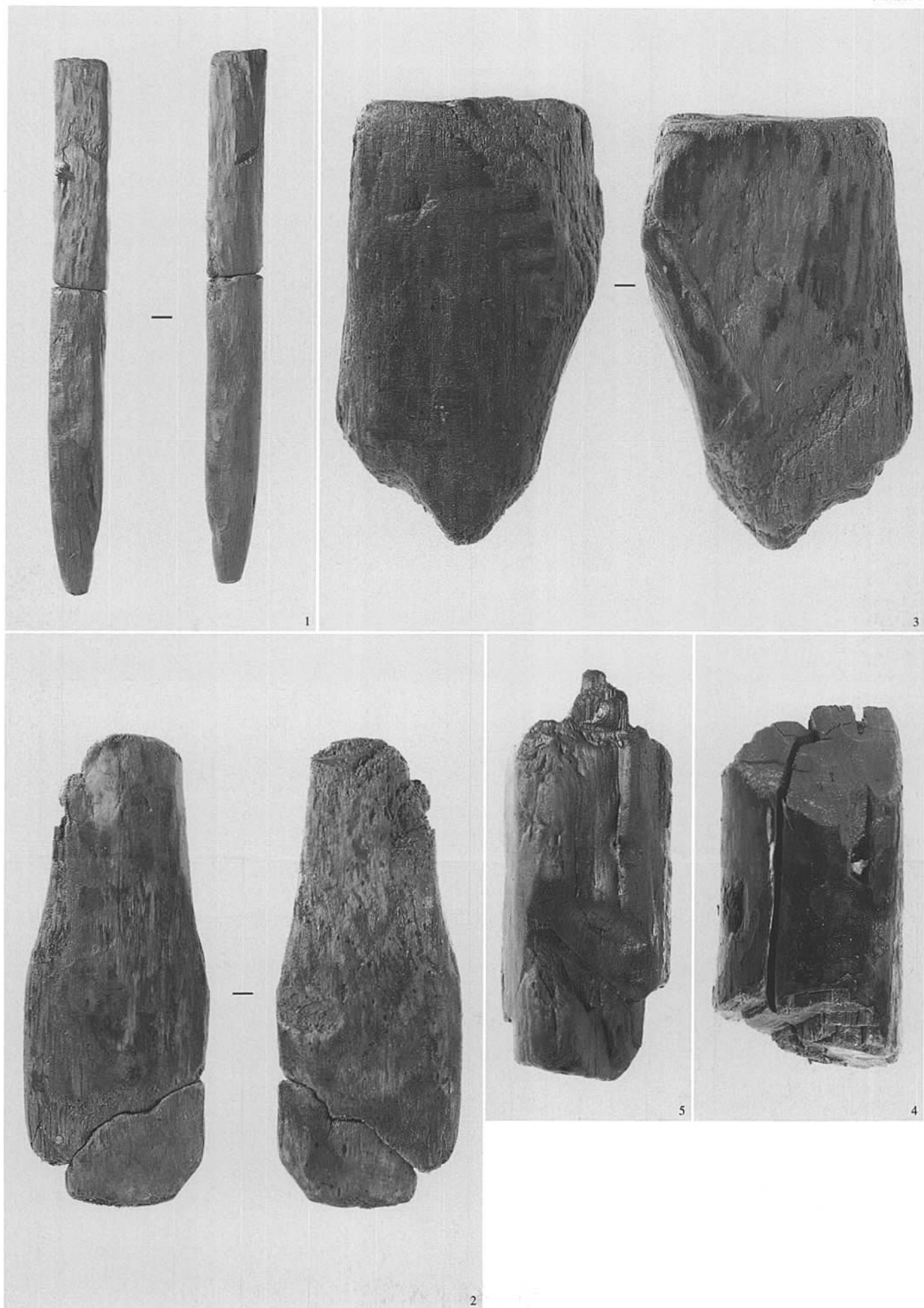
2. 3号溝（東南から）



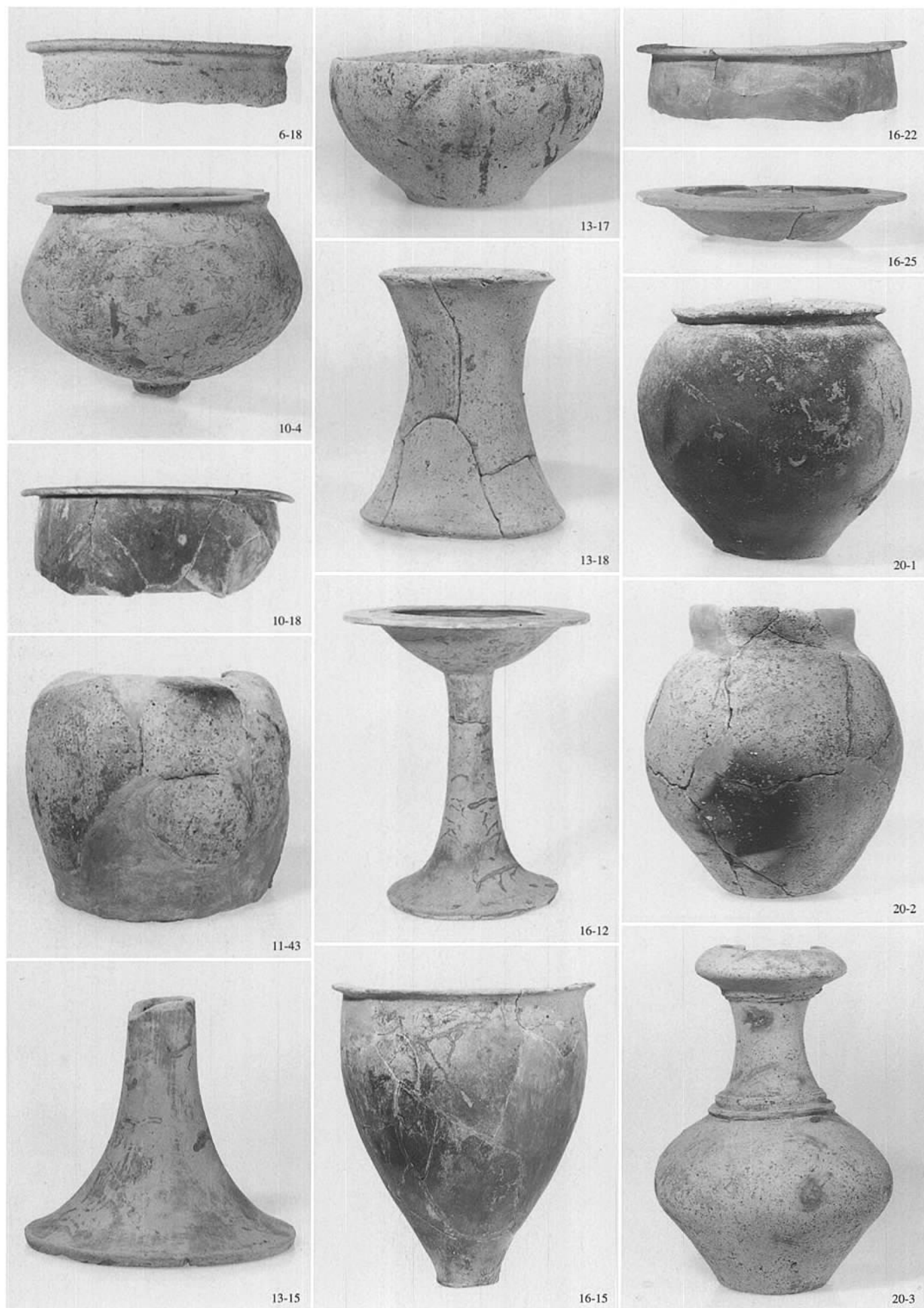
3. 7号溝（南東から）



4. P188（南西から）



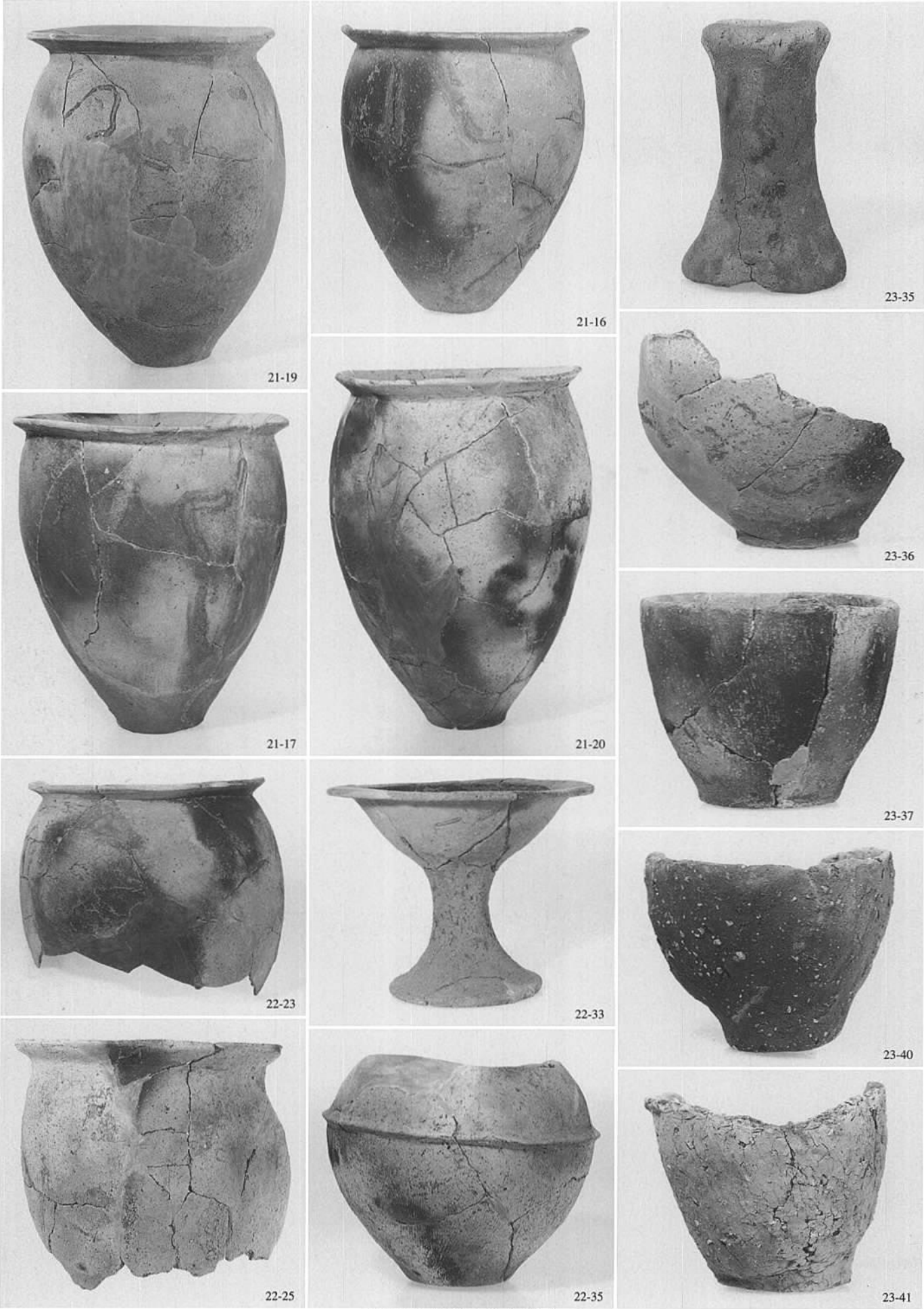
126号土坑出土木器



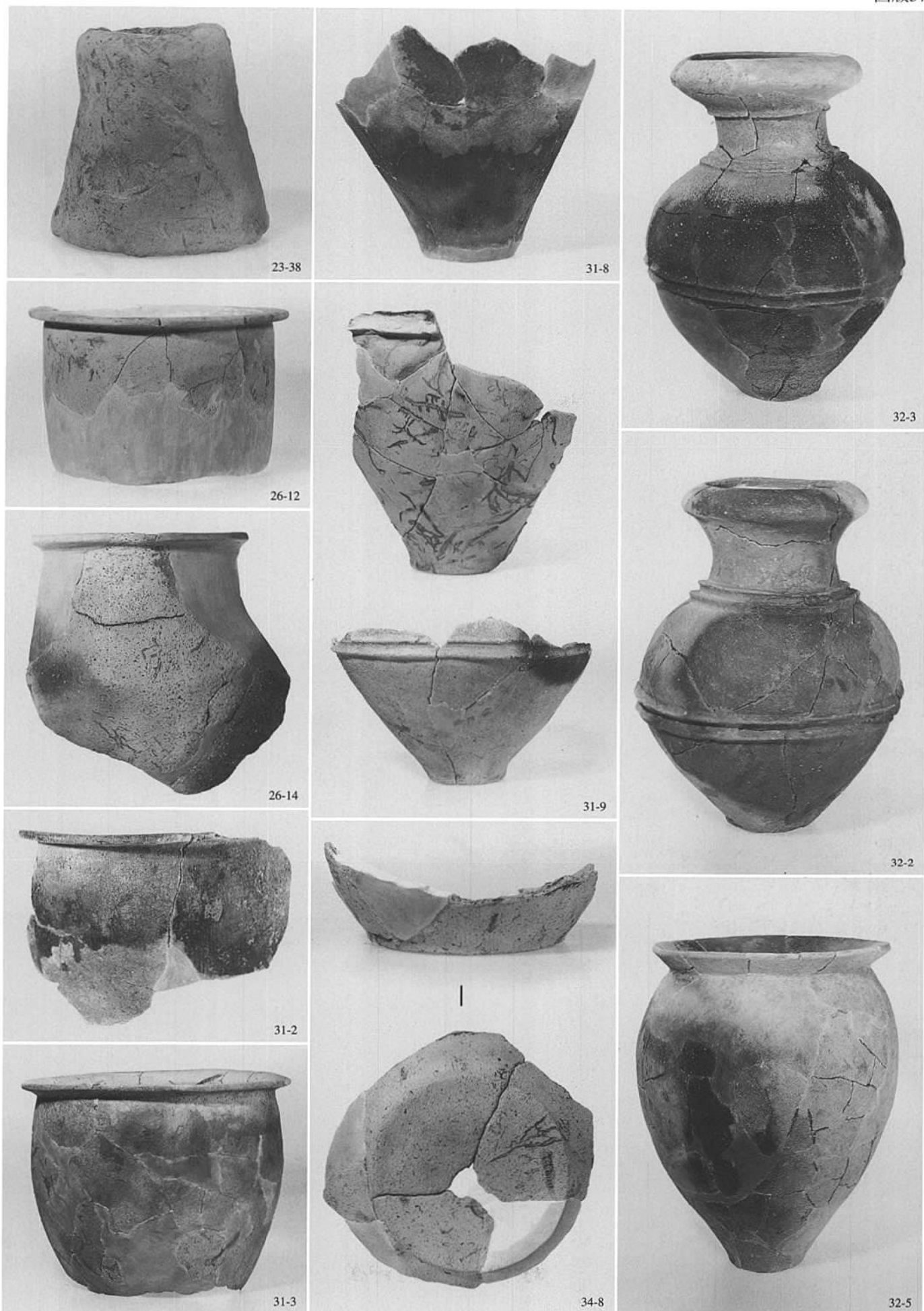
13·21·24·30·32·34号竖穴住居跡出土土器



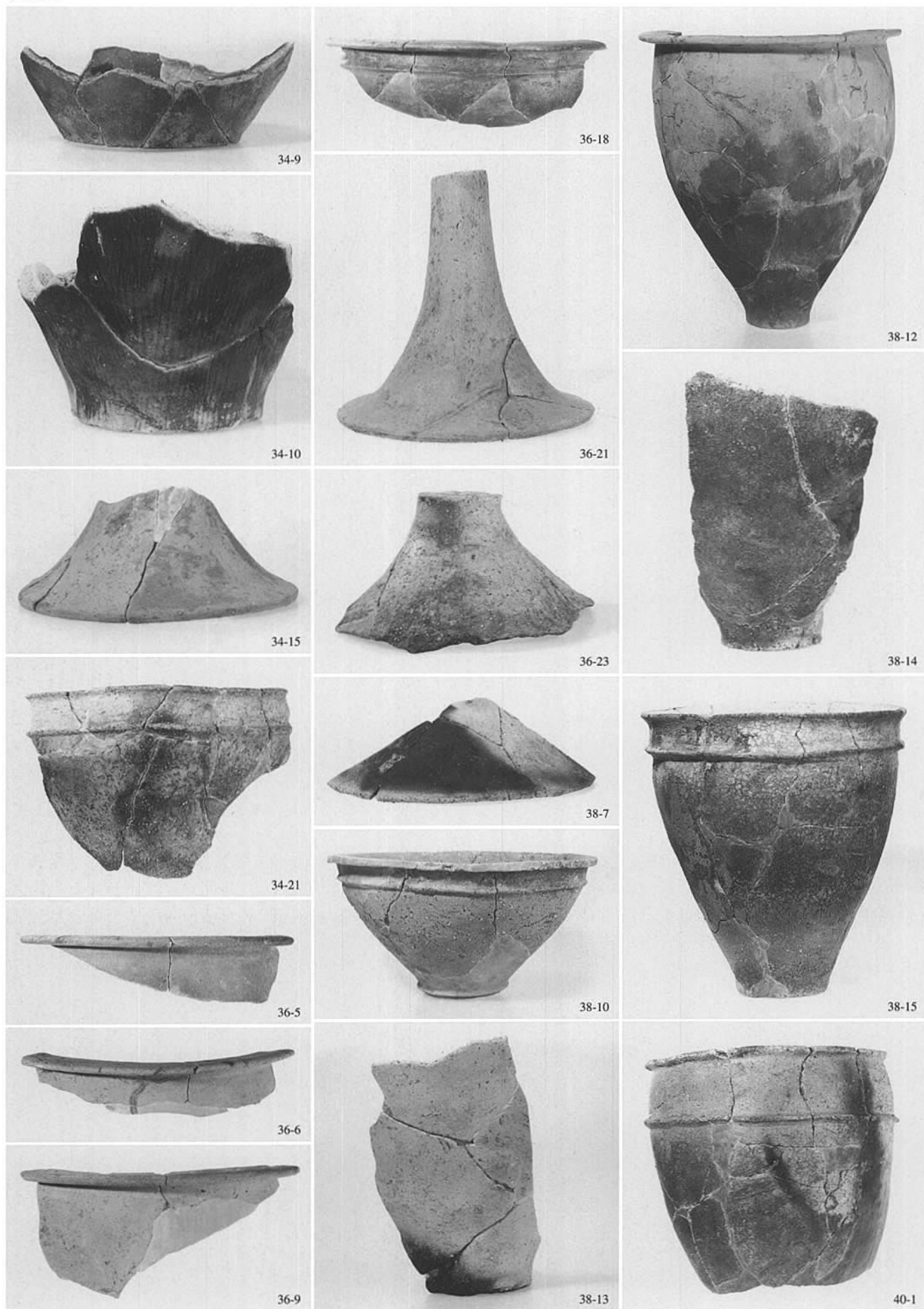
34号竖穴住居跡出土土器 (1)



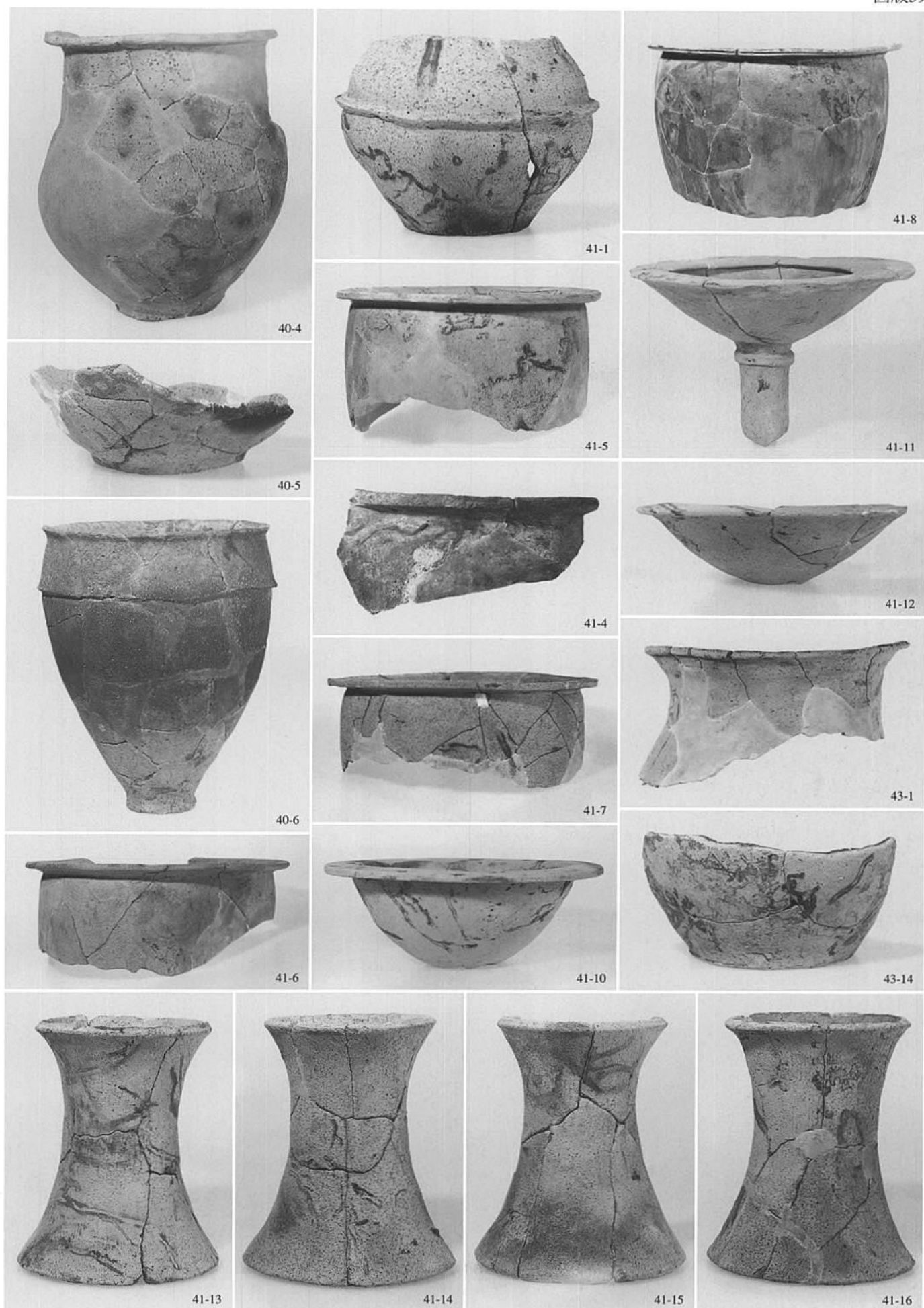
34号竖穴住居跡出土土器（2）



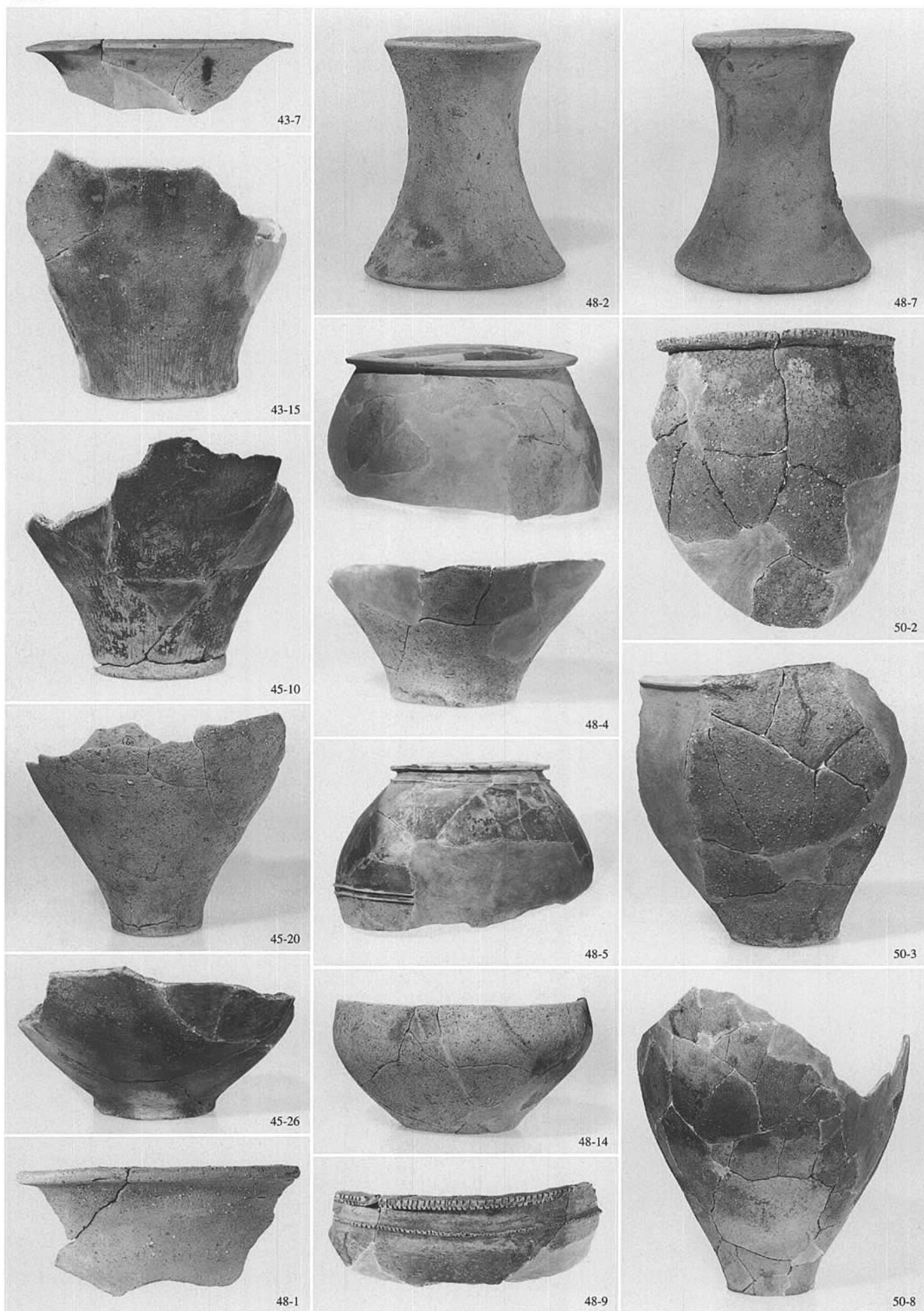
34·36·42号竖穴住居跡出土土器・3・7・9号土坑出土土器



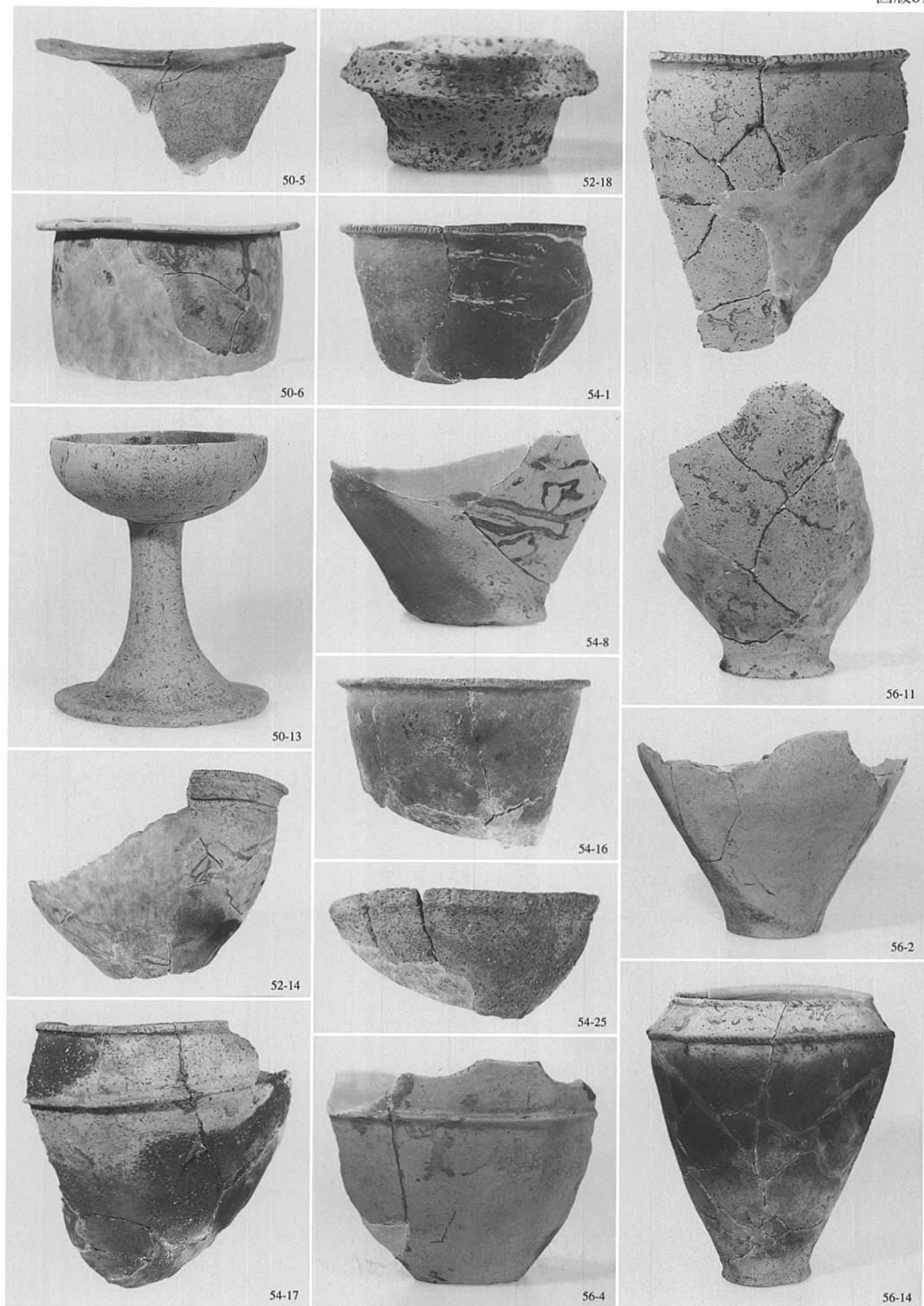
9 · 12 · 14 · 16 · 24 · 25 · 27~29号土坑出土土器



30 · 31 · 34 · 37号土坑出土土器



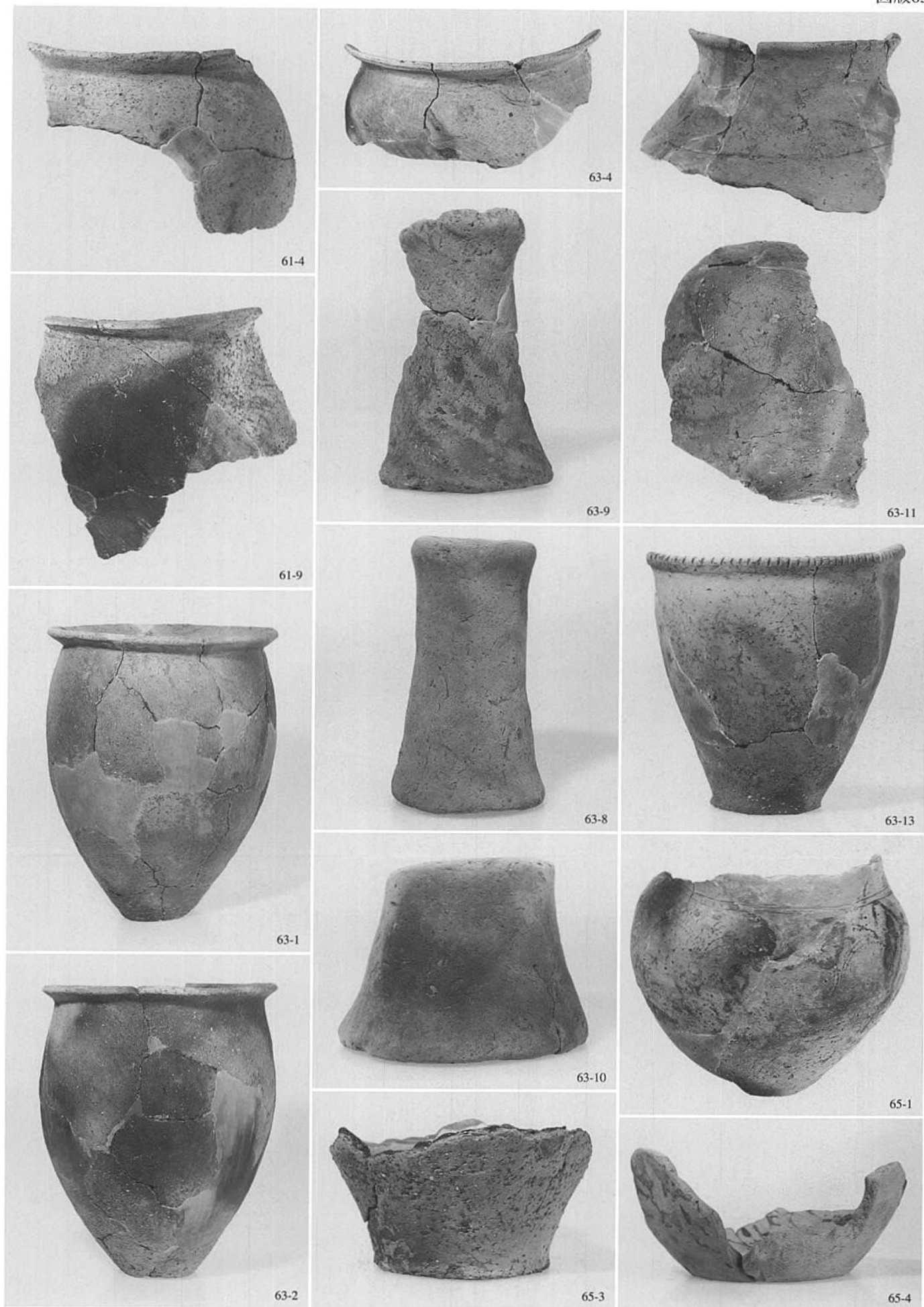
37 · 40 · 42 ~ 45 · 47 ~ 50号土坑出土土器



50・52・54・55・59・61・63～65号土坑出土土器

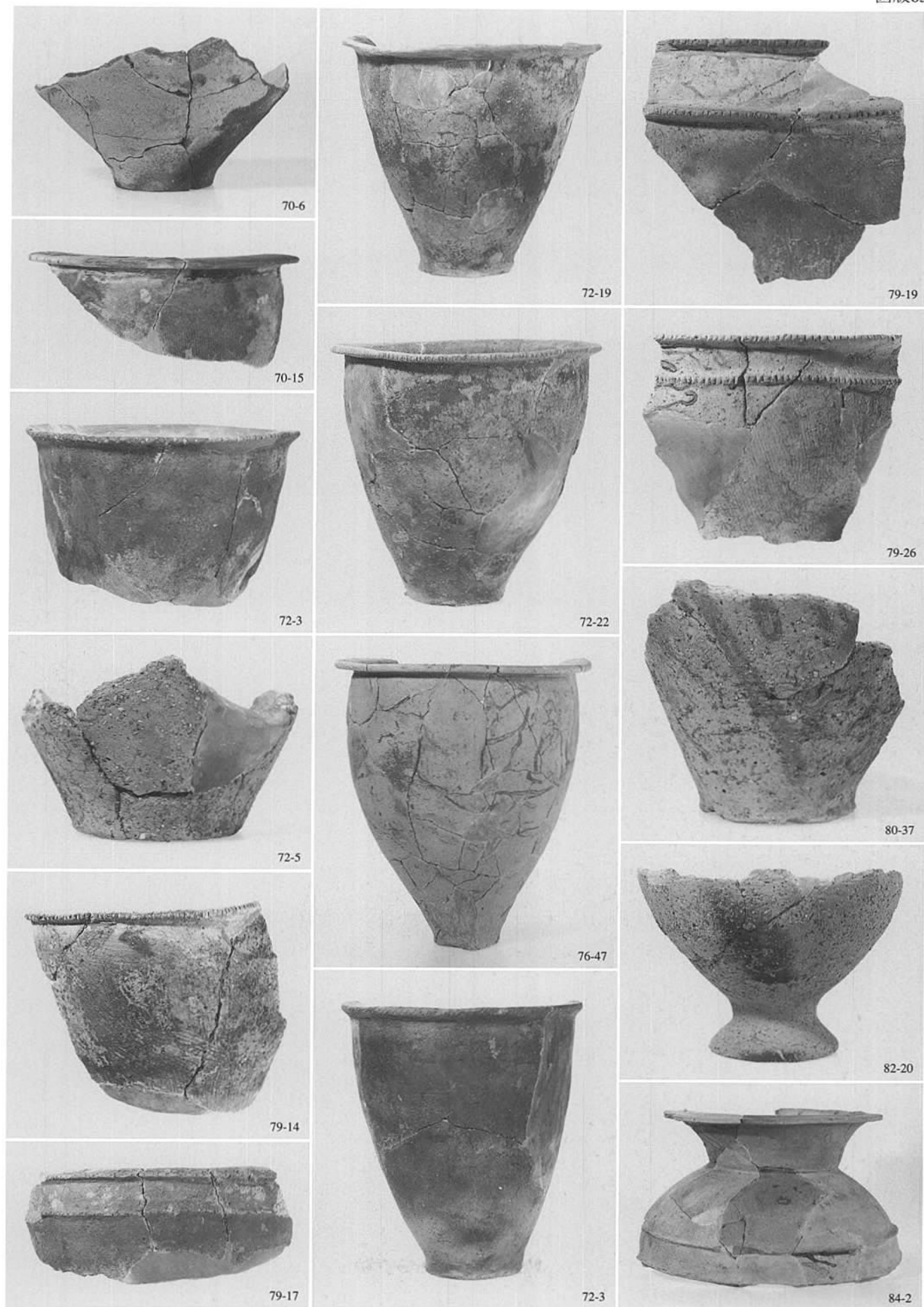


64~68·71·73号土坑出土土器

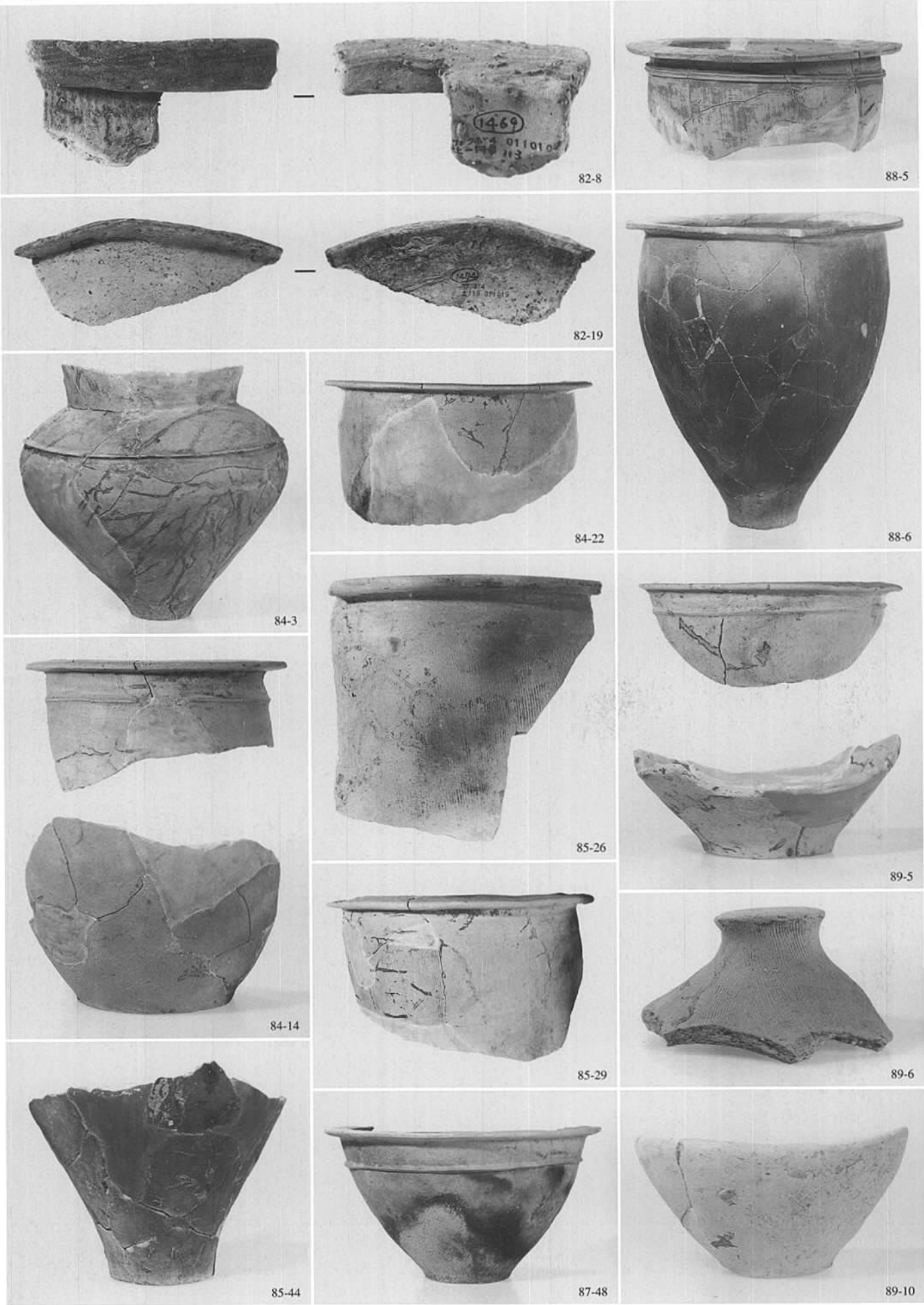


73 · 75 · 76 · 78 · 82 · 85 · 87号土坑出土土器

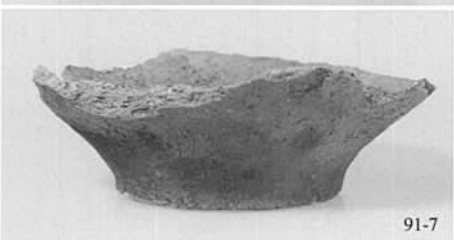
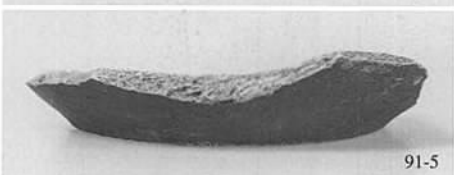
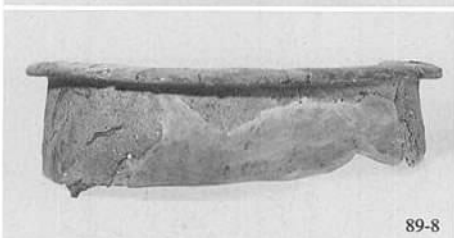
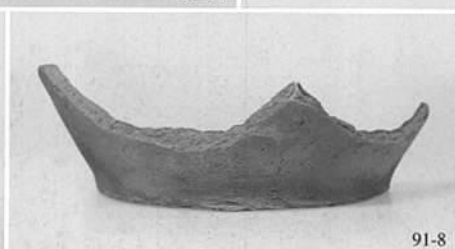
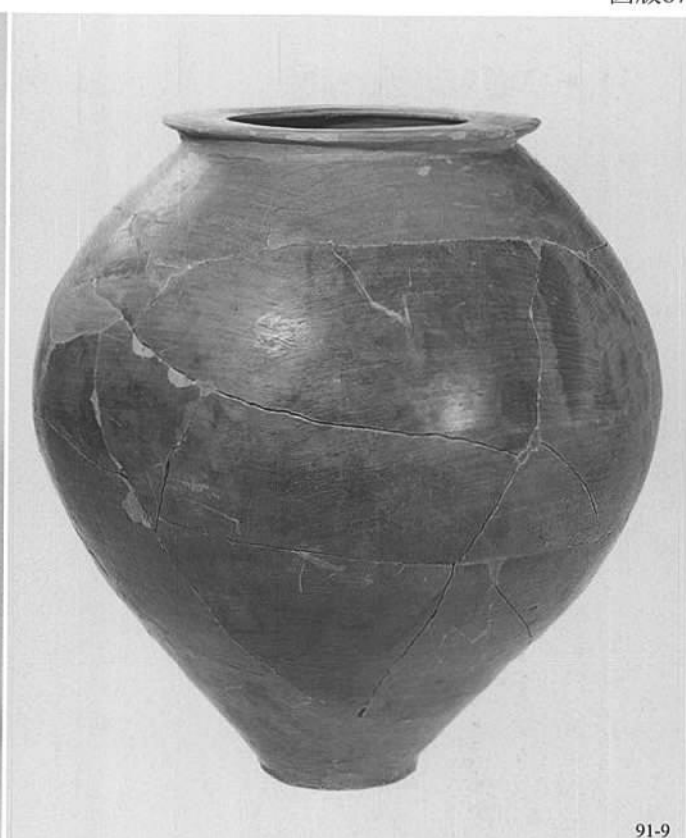


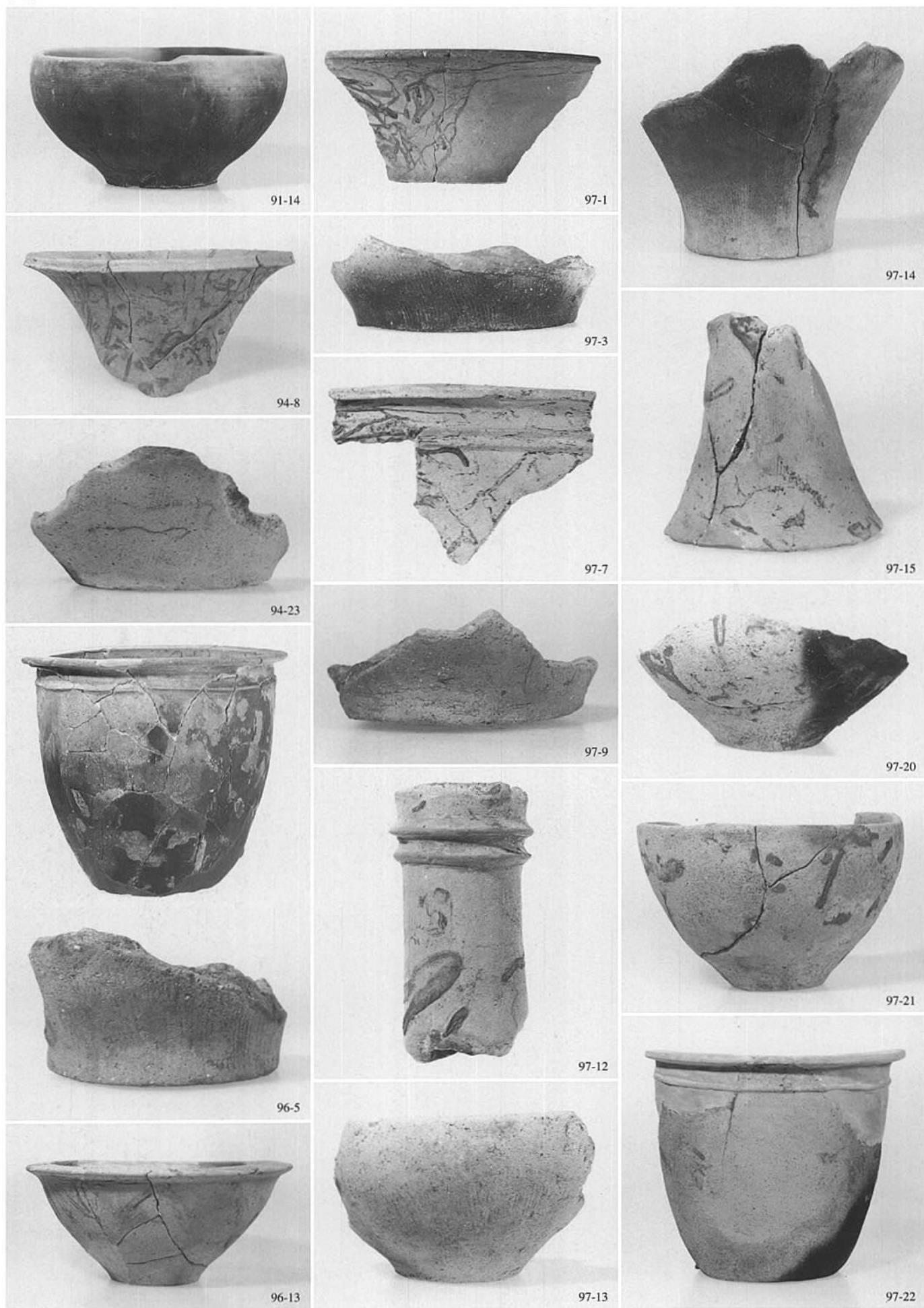


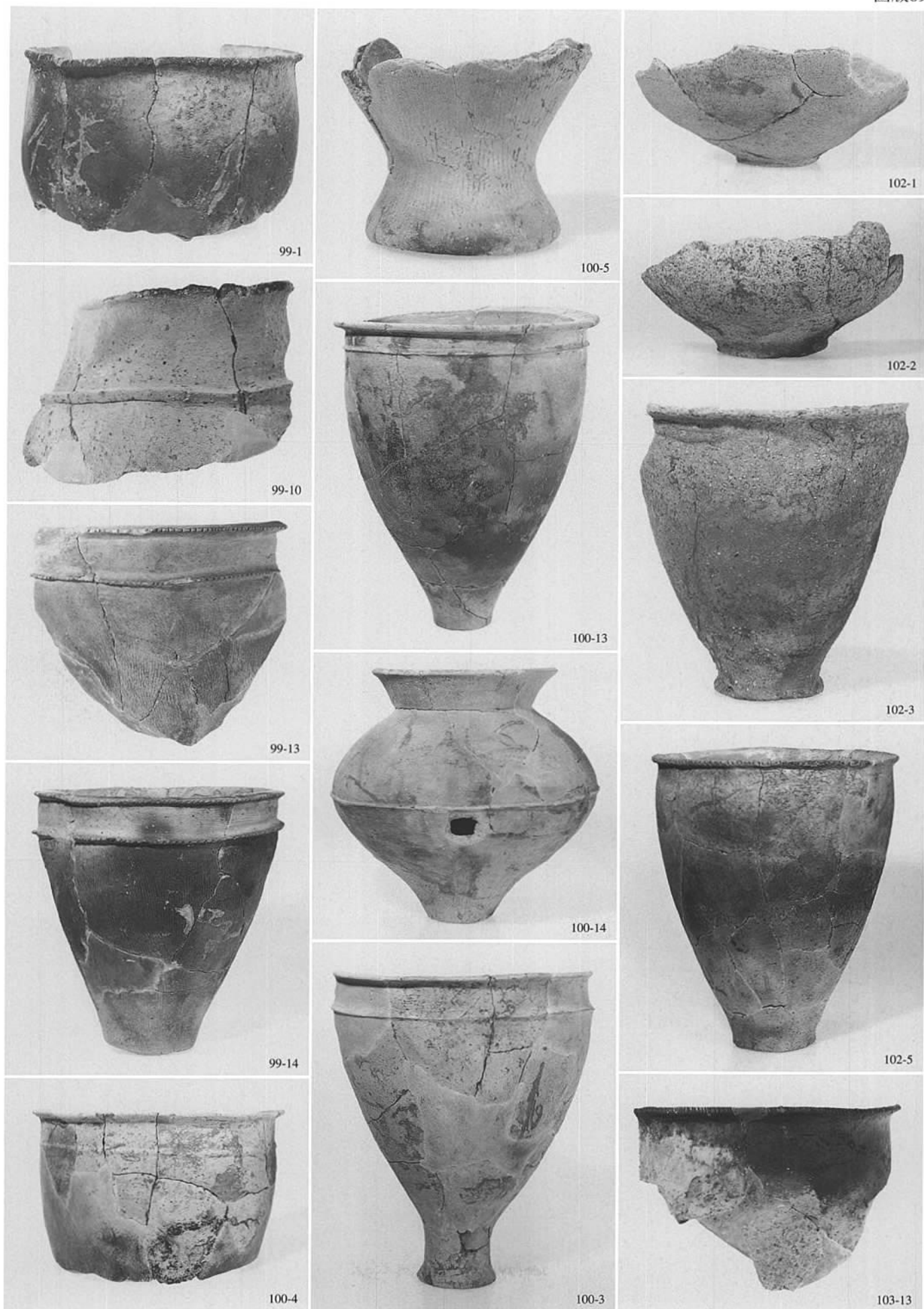
98 · 99 · 102 · 108 · 111 · 113 · 120号土坑出土土器



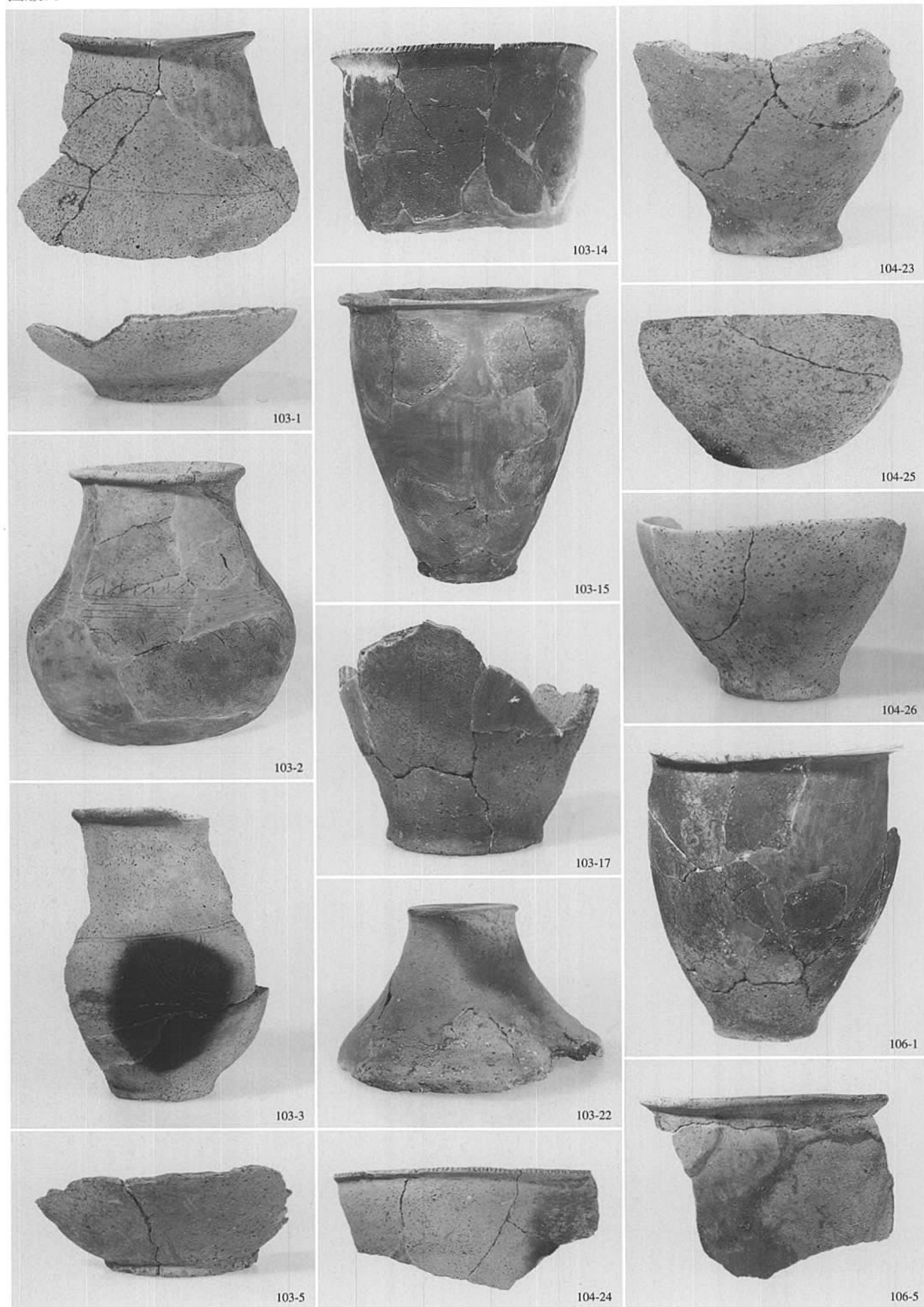
113 · 120 · 122 · 124 · 125号土坑出土土器

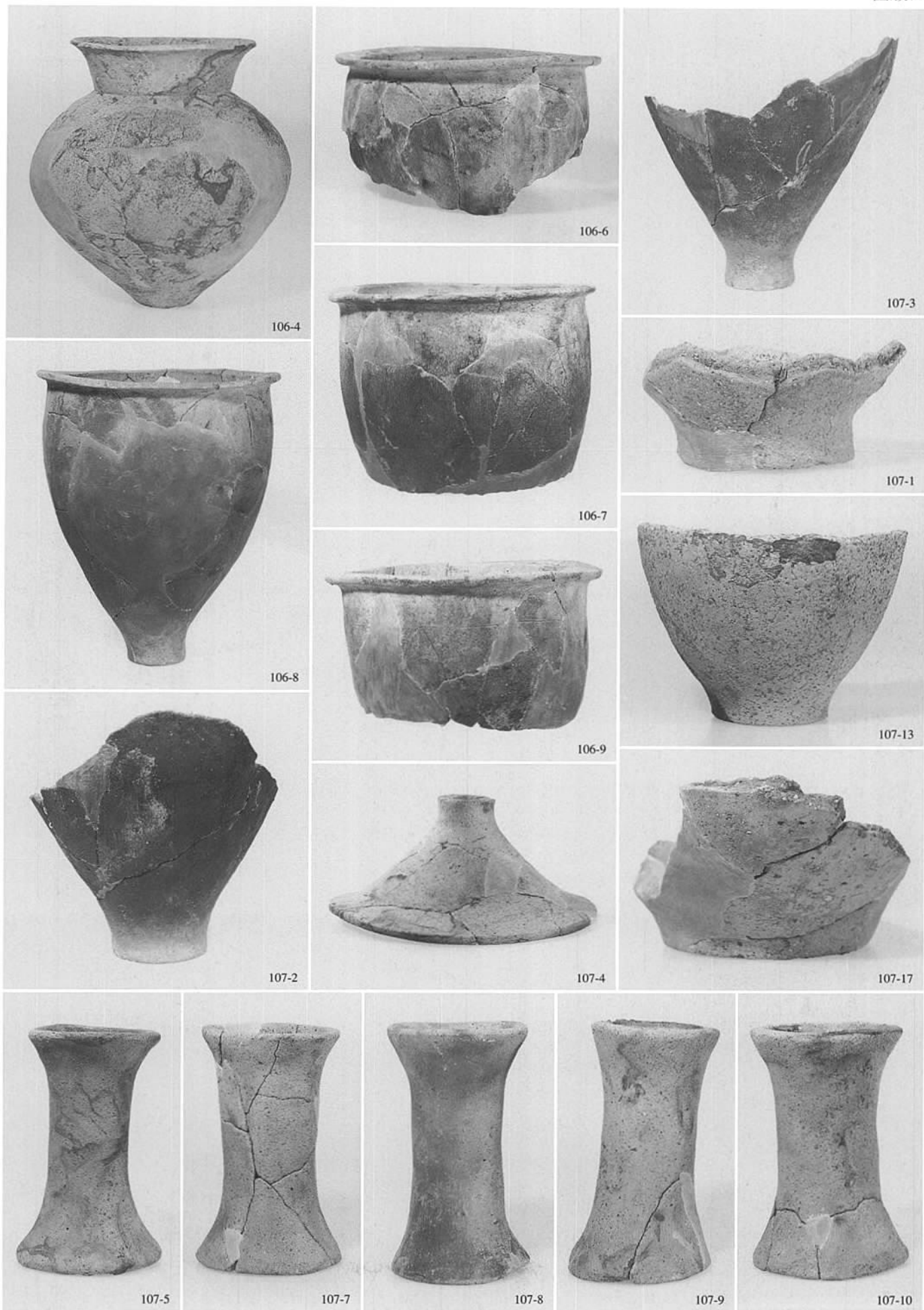




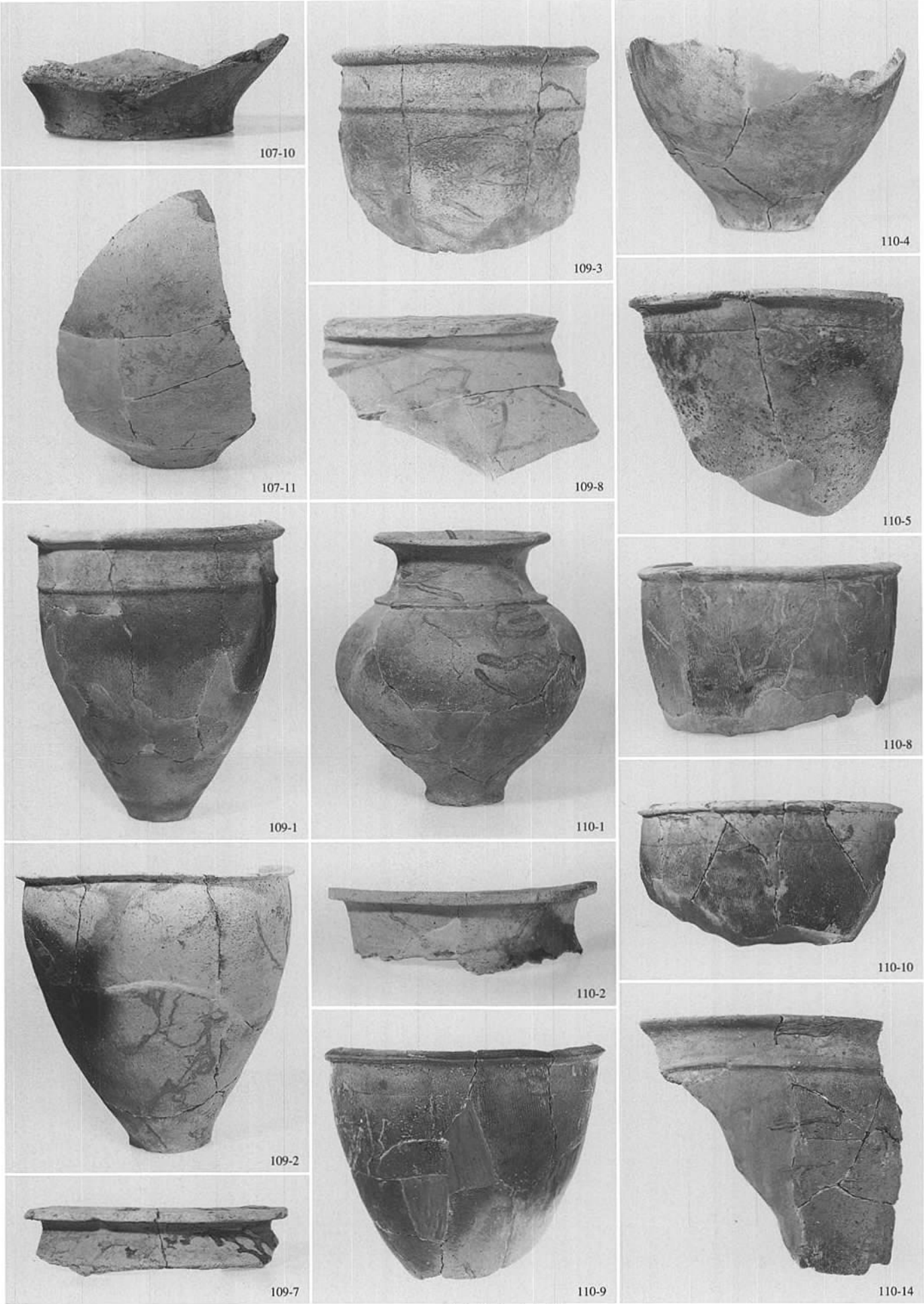


136~140・142号土坑出土土器

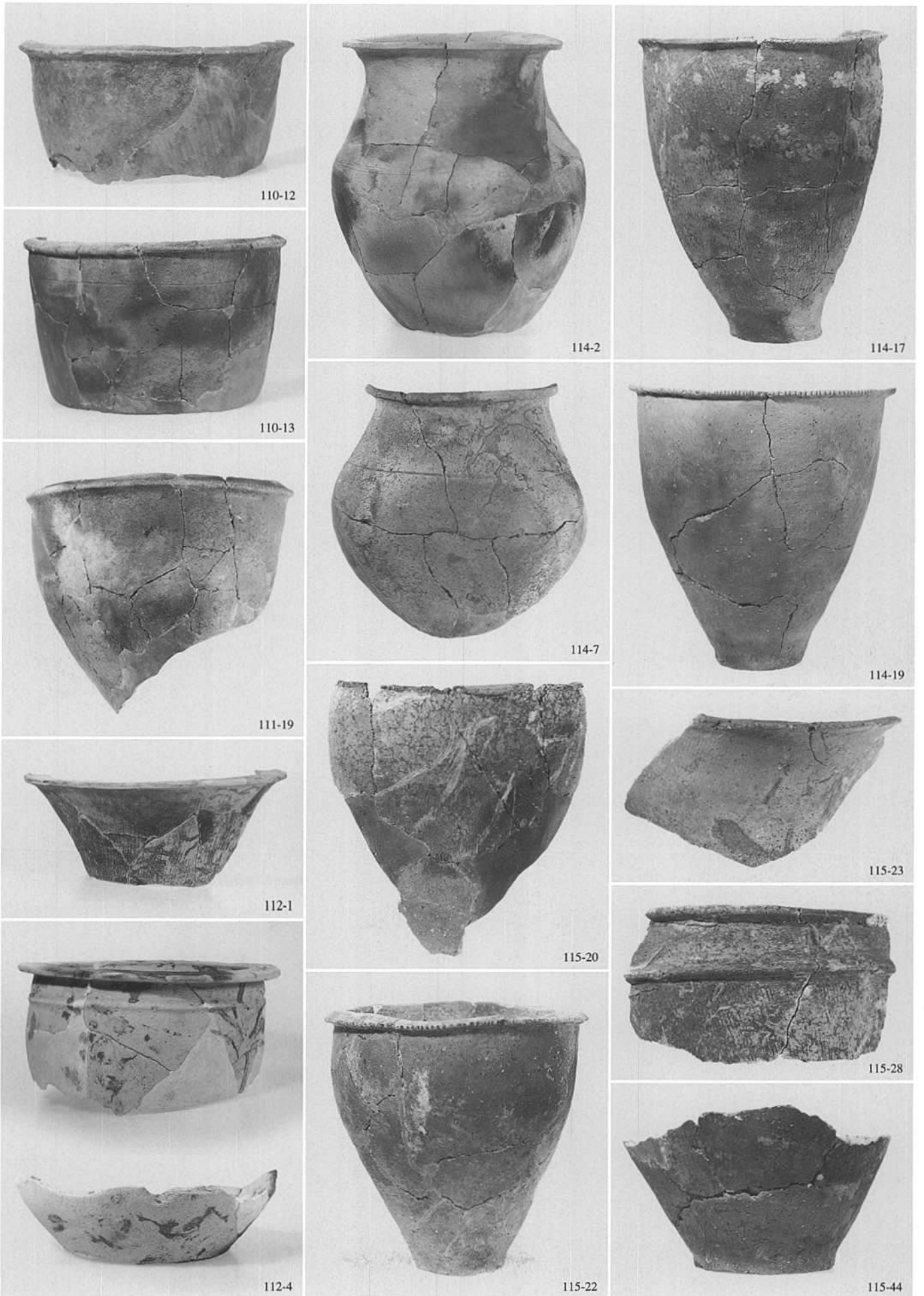




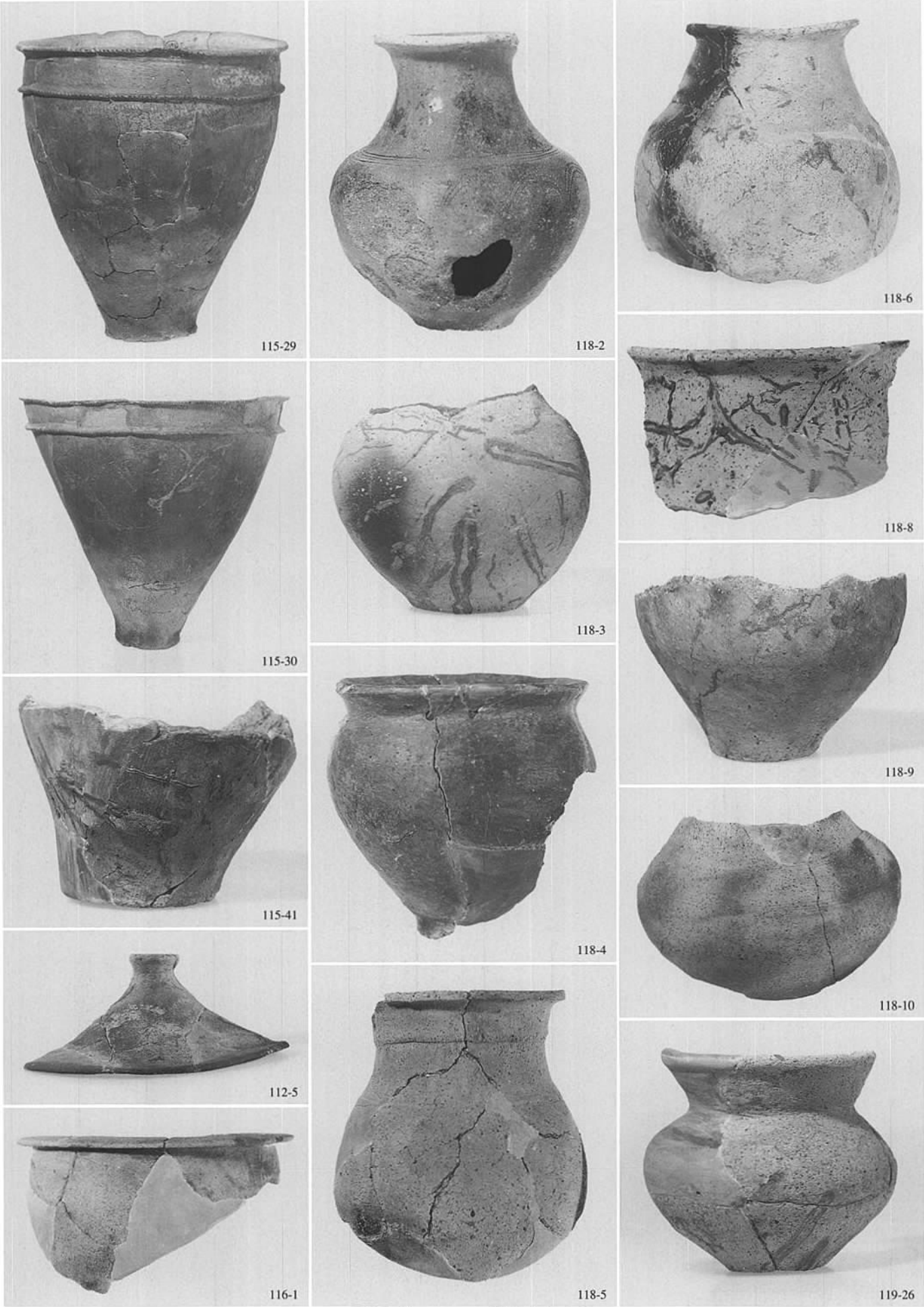
145·147号土坑出土土器



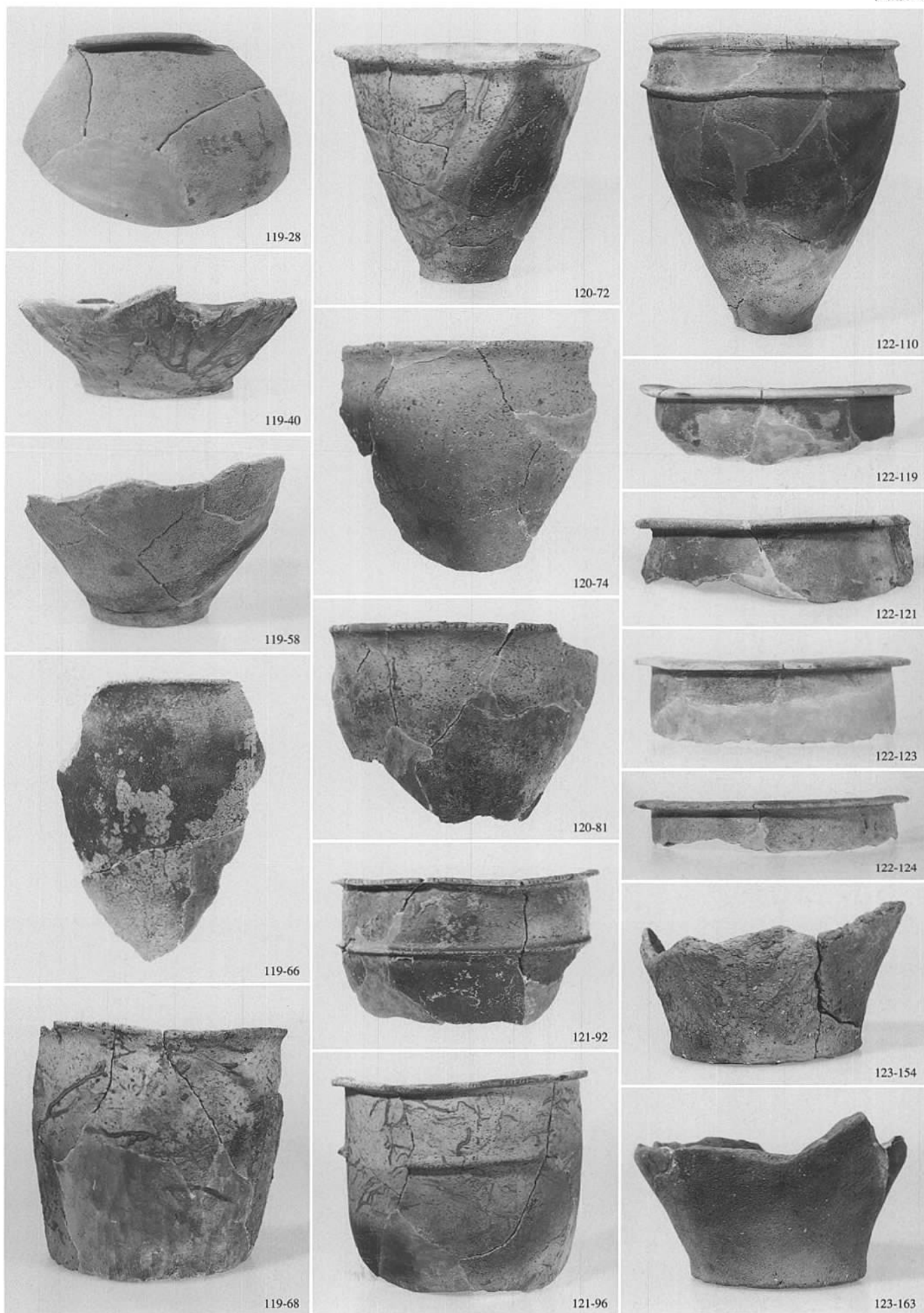
147~150号土坑出土土器



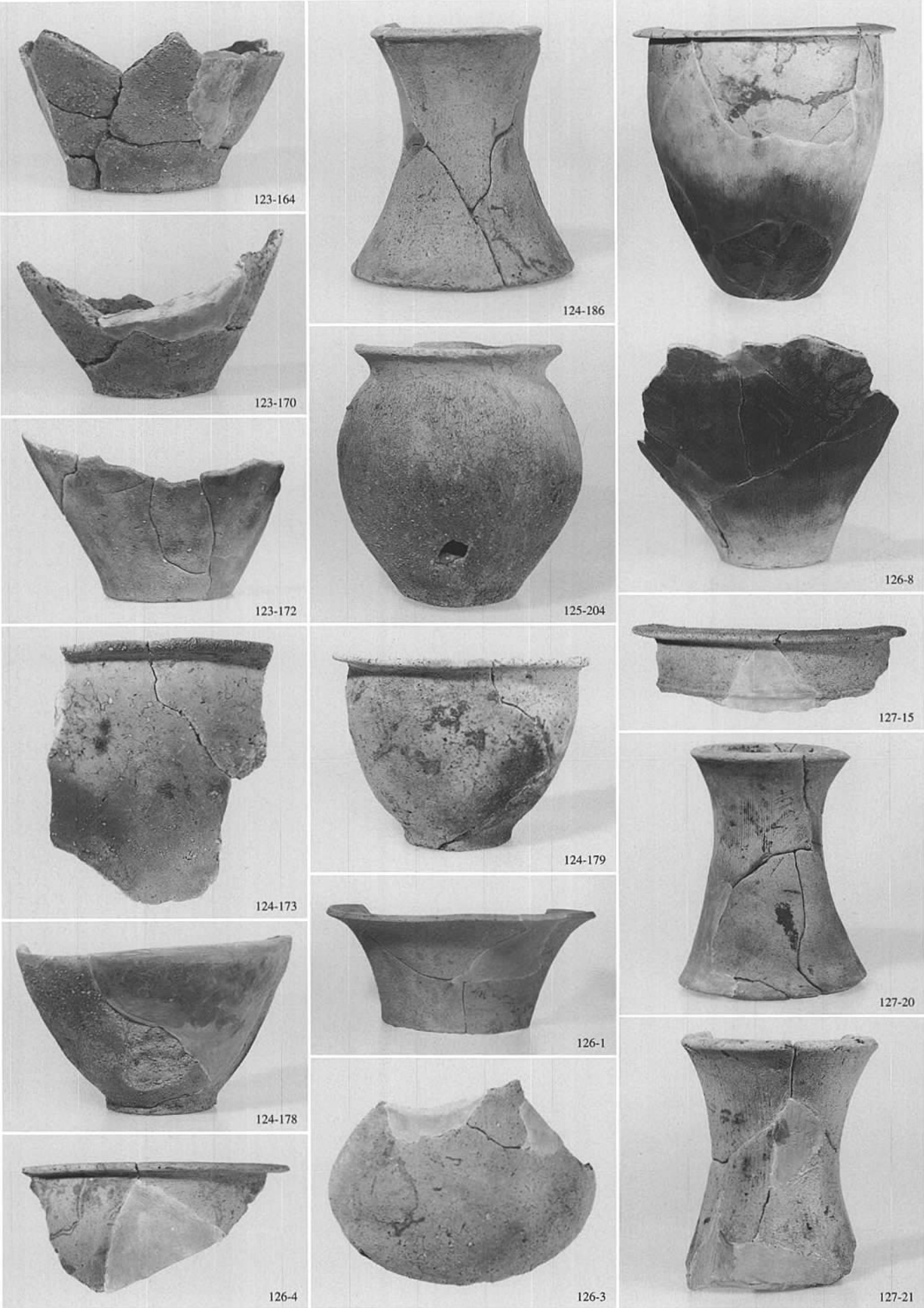
150~152・154号土坑出土土器



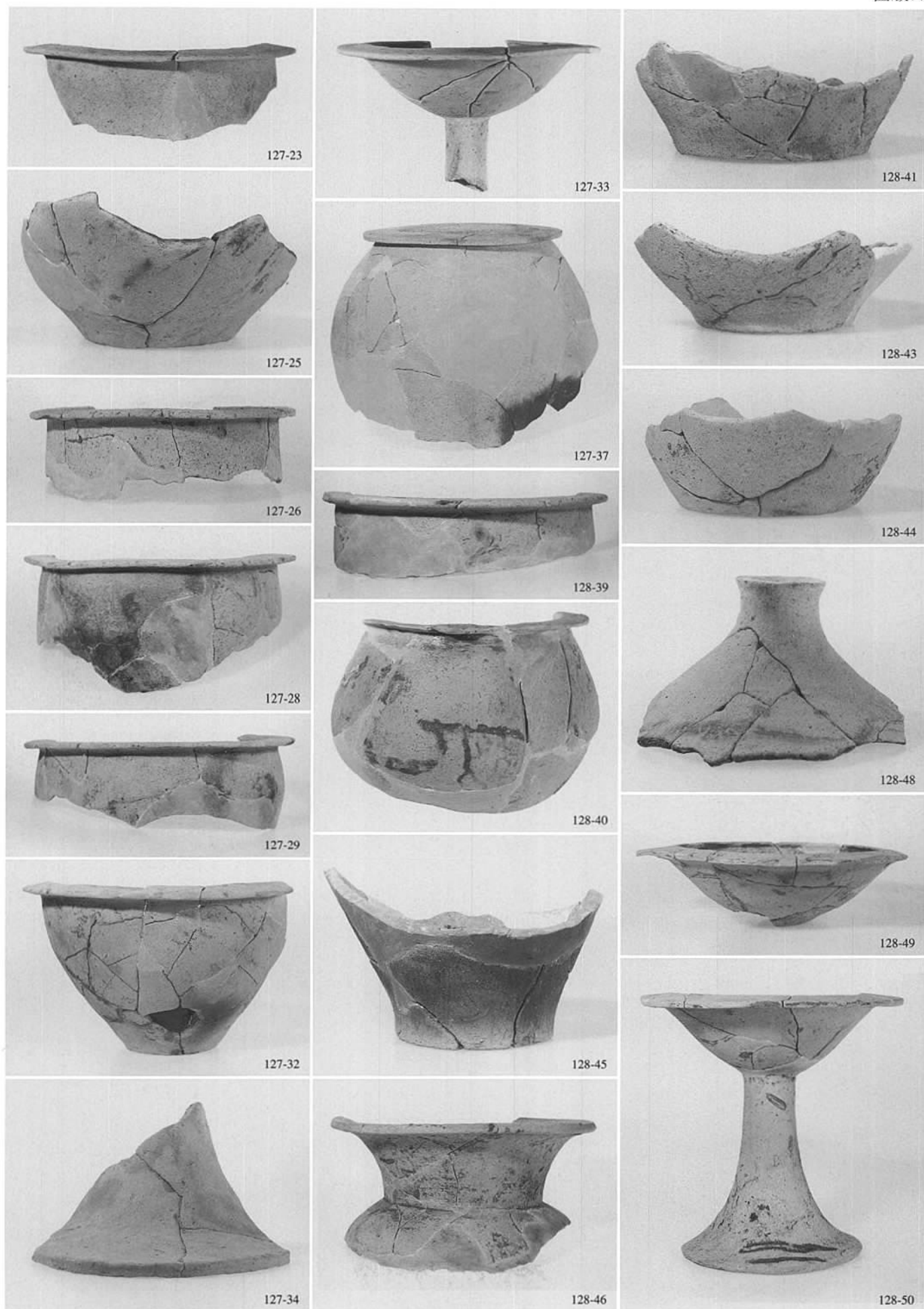
154号土坑·2·3号溝出土土器



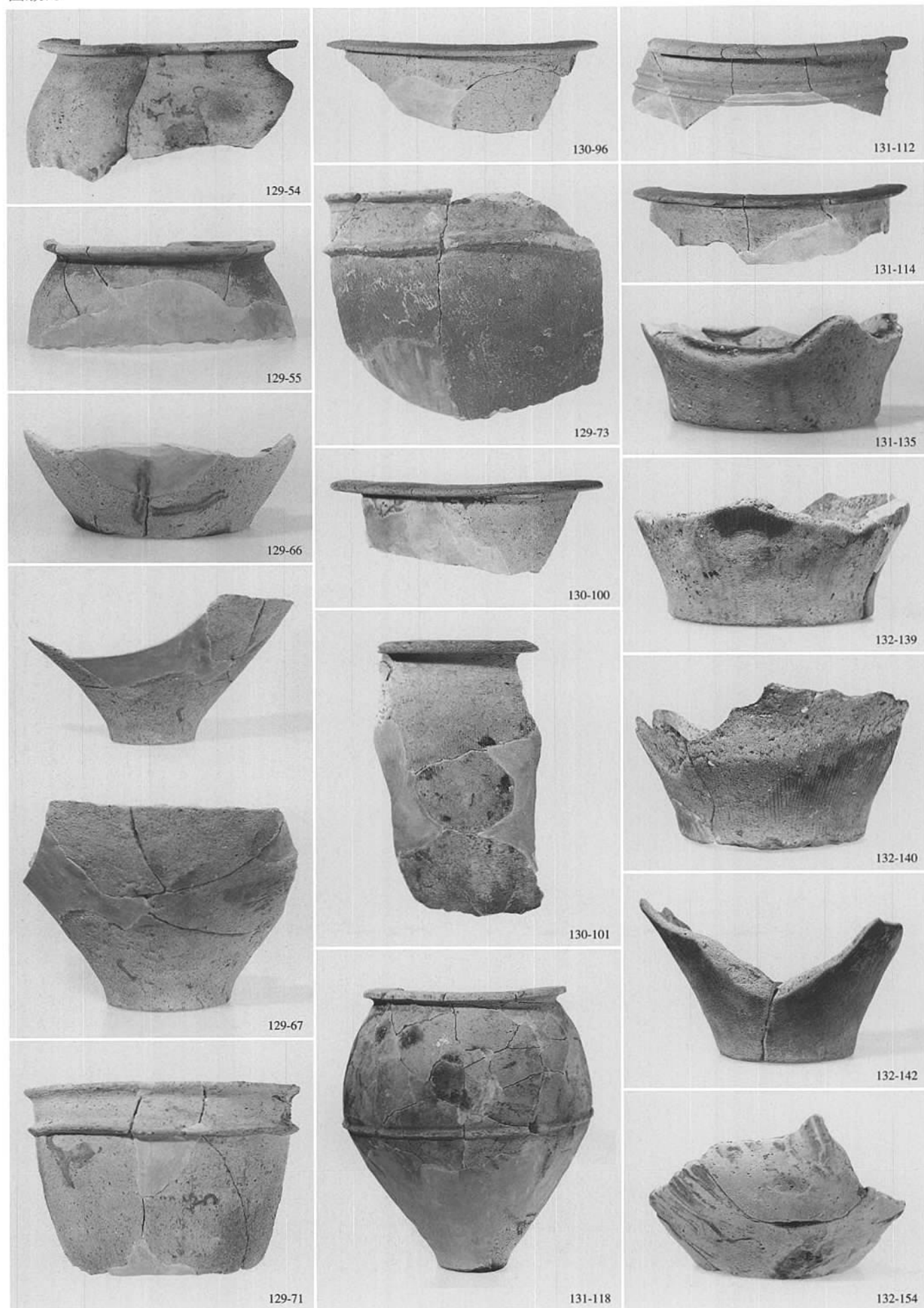
3号沟出土土器



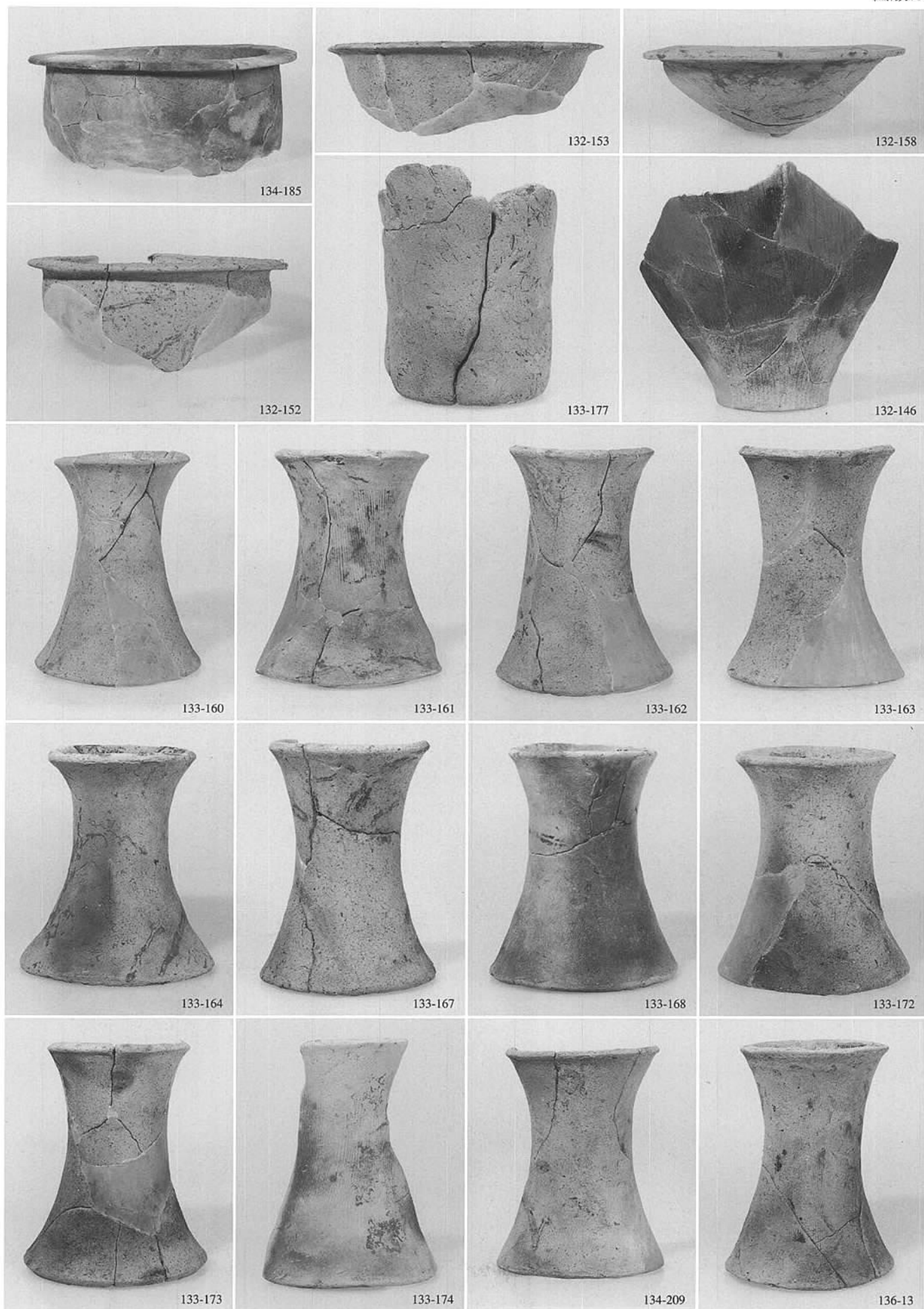
3・4号溝（1）出土土器



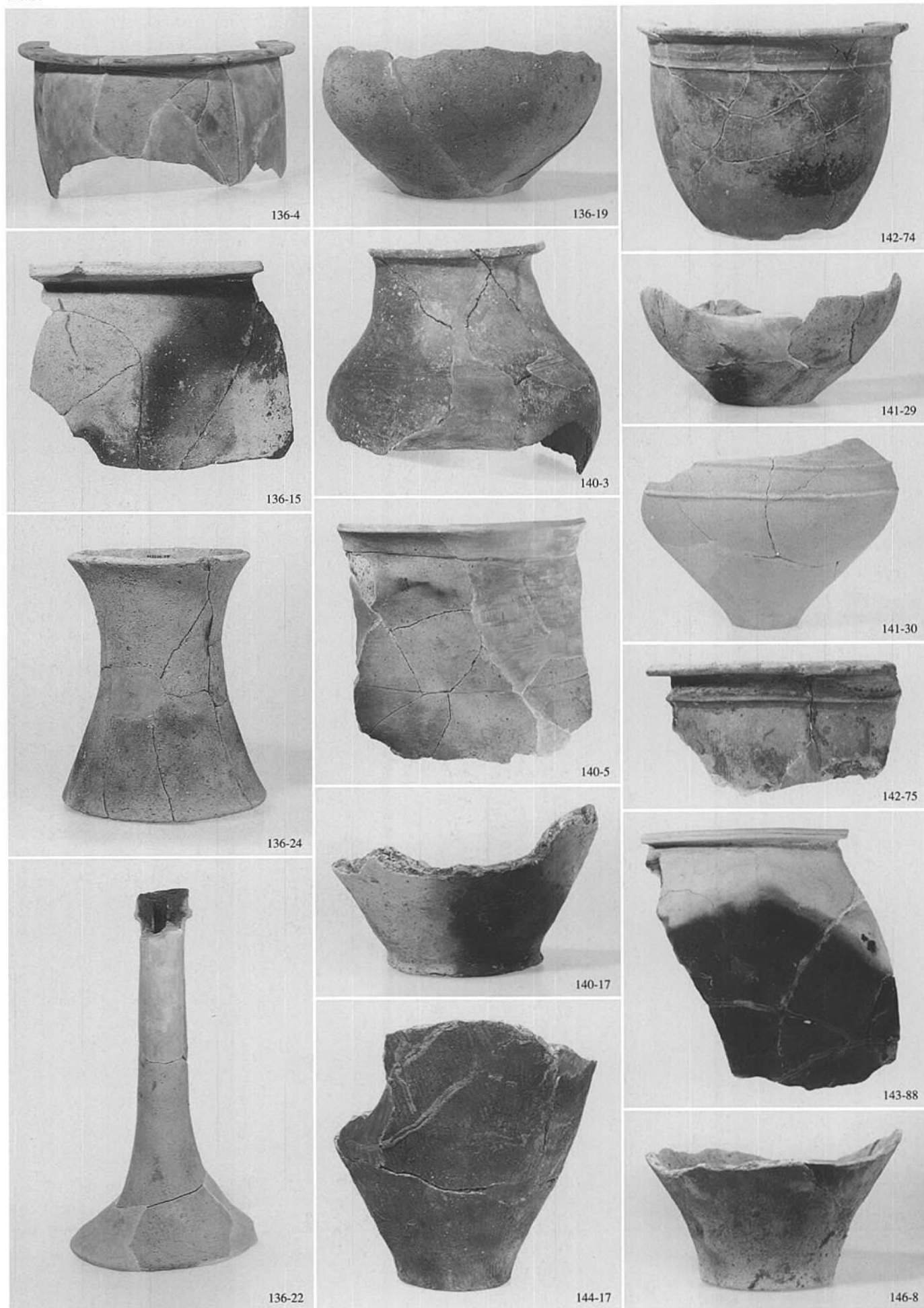
4号溝出土土器(2)



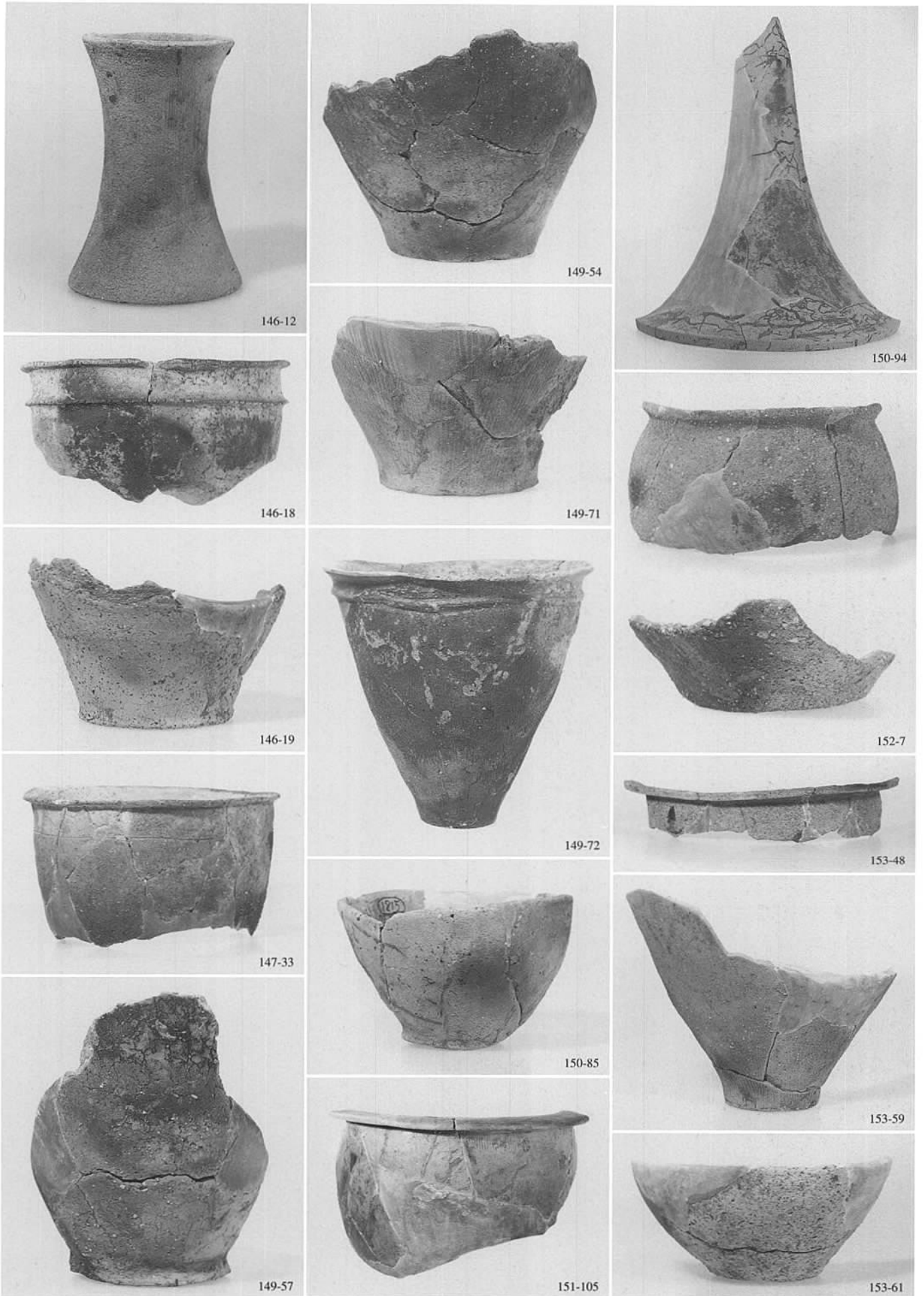
4号溝出土土器(3)



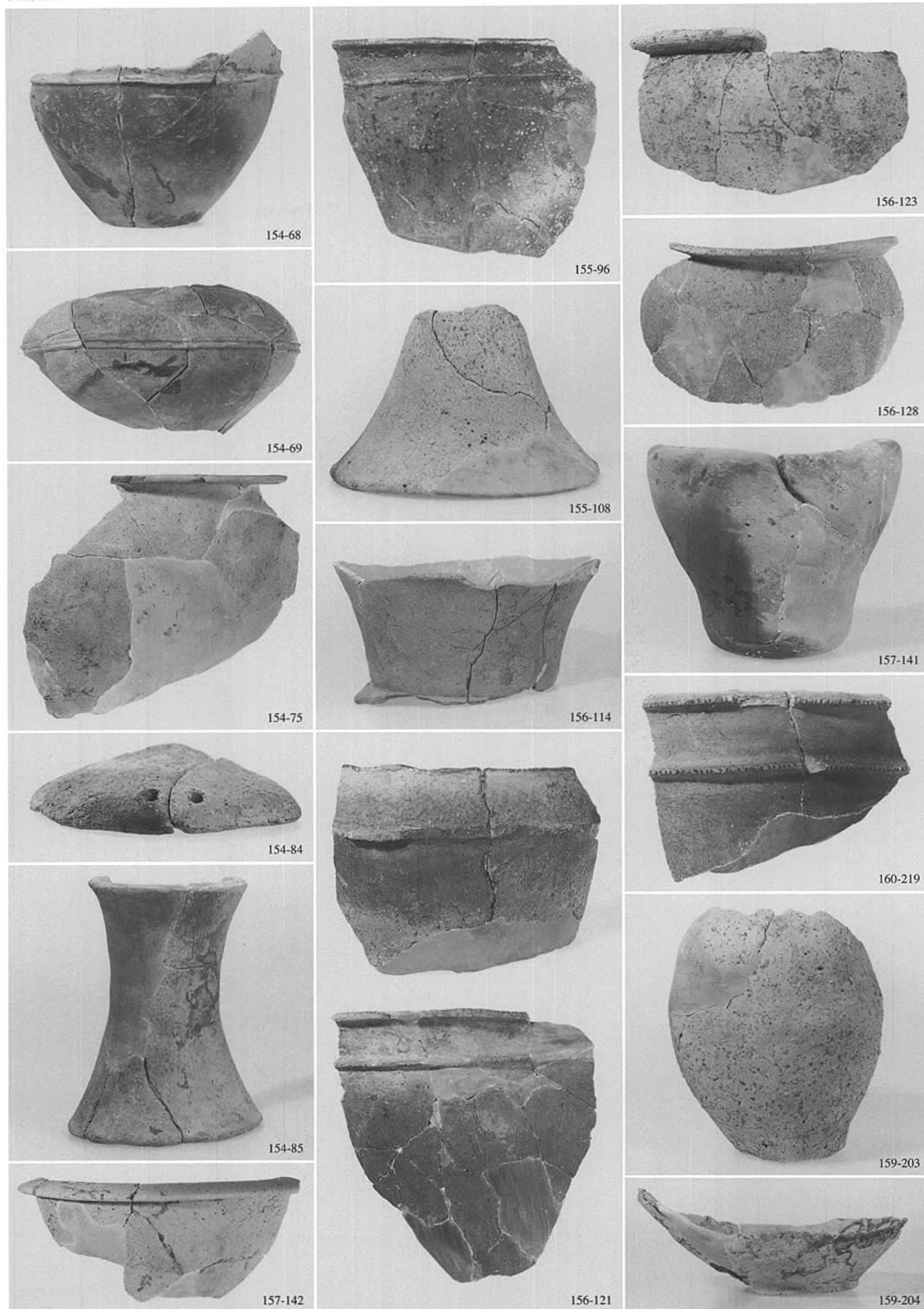
4号溝(4)・5号溝出土土器



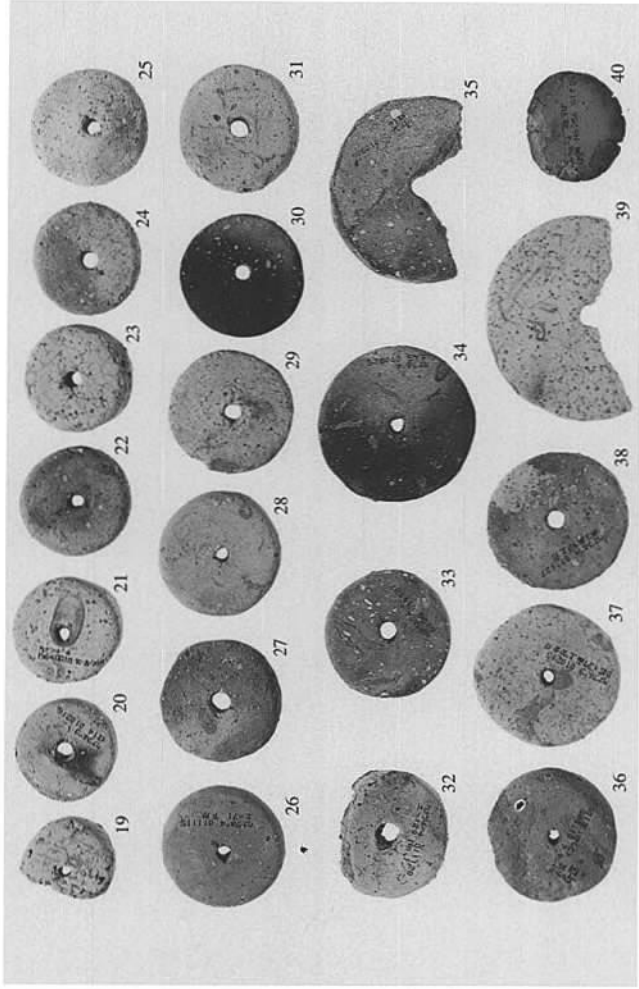
5～7号溝・ピット出土土器



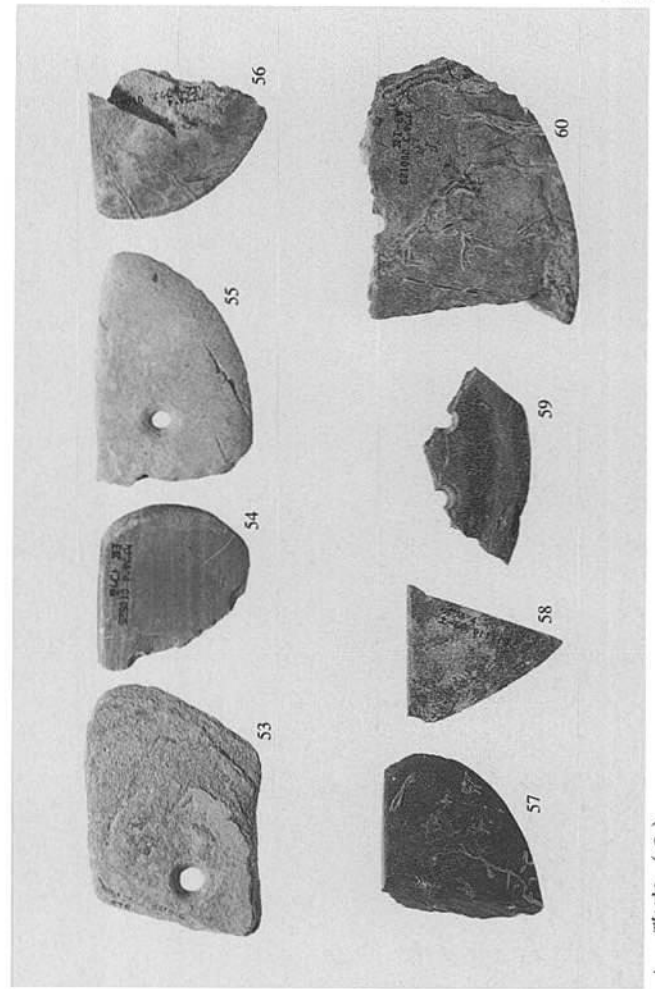
ピット・遺構面および包含層出土土器



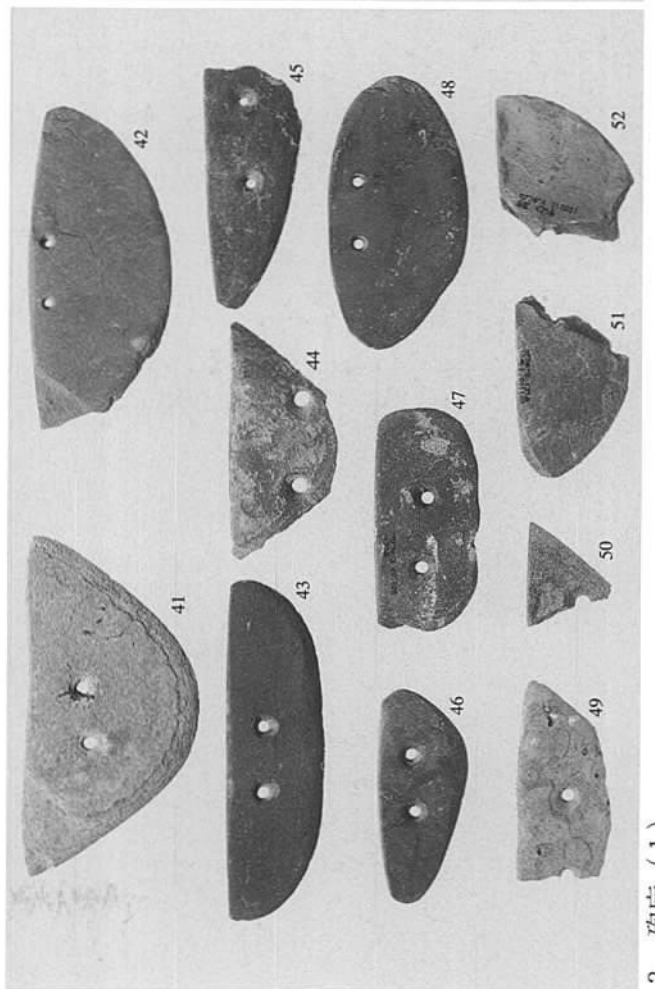
遺構面および包含層出土土器



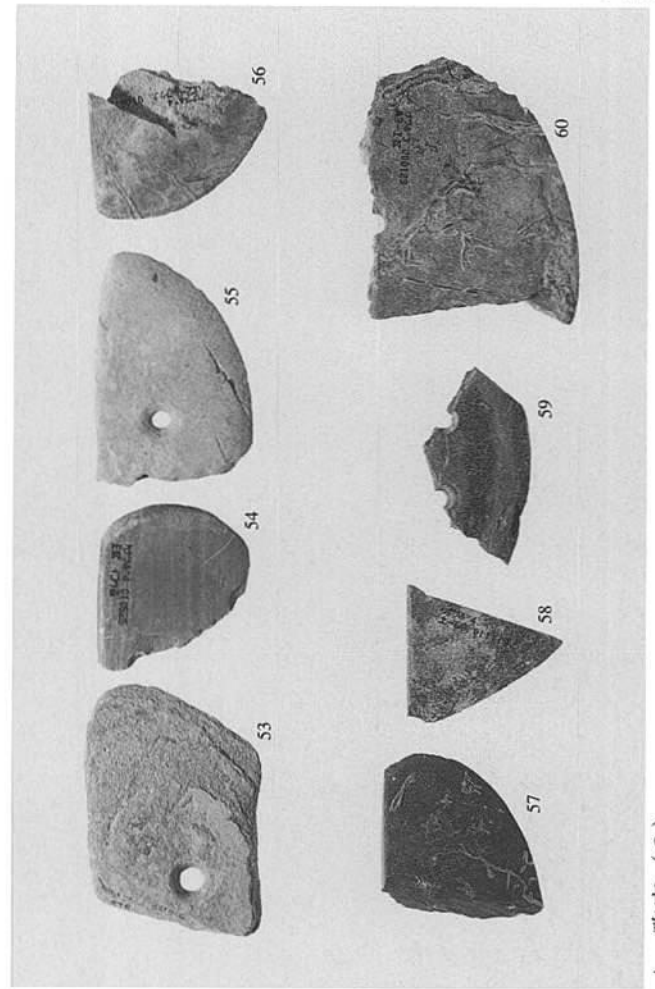
1. 土製投弾



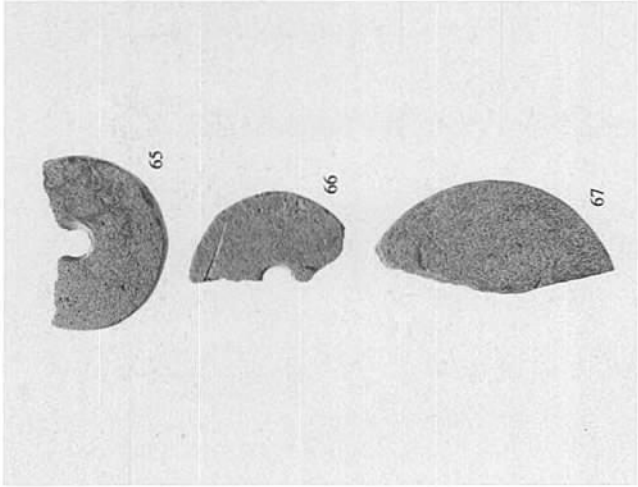
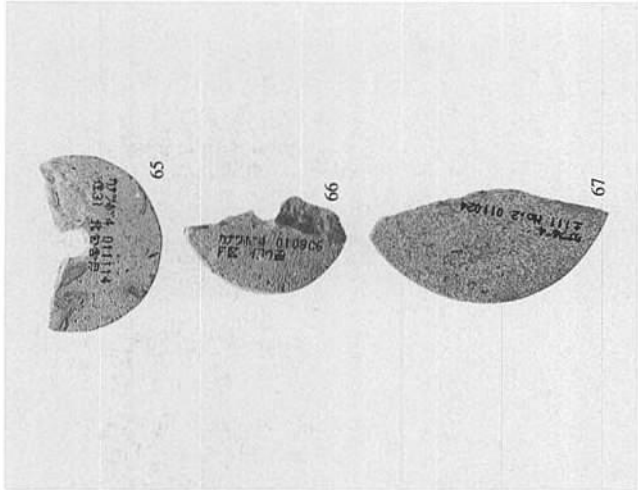
2. 土製紡錘車



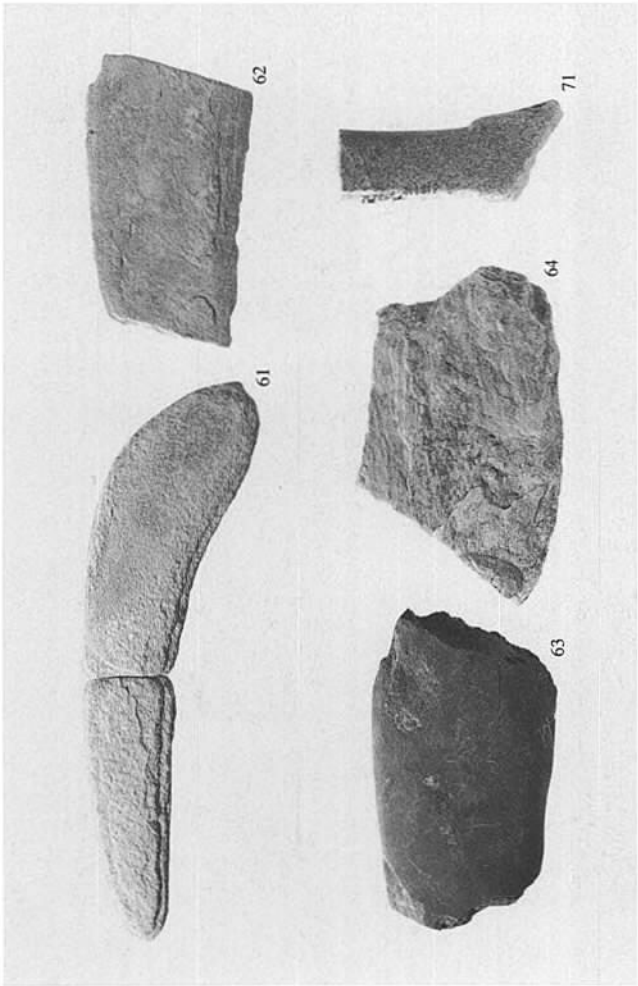
3. 砲庁 (1)



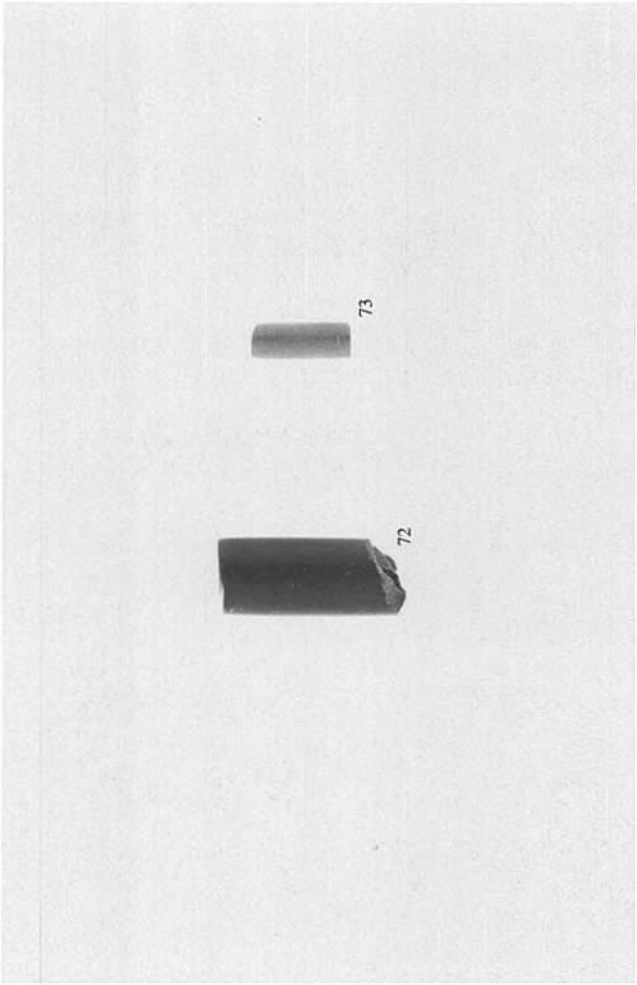
4. 砲庁 (2)



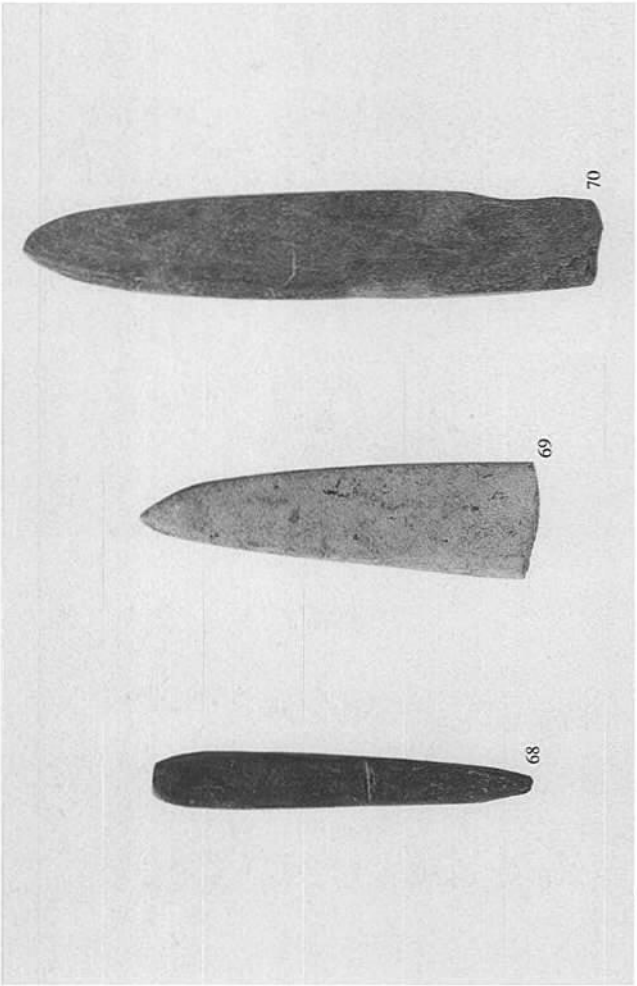
2. 石製紡錘車



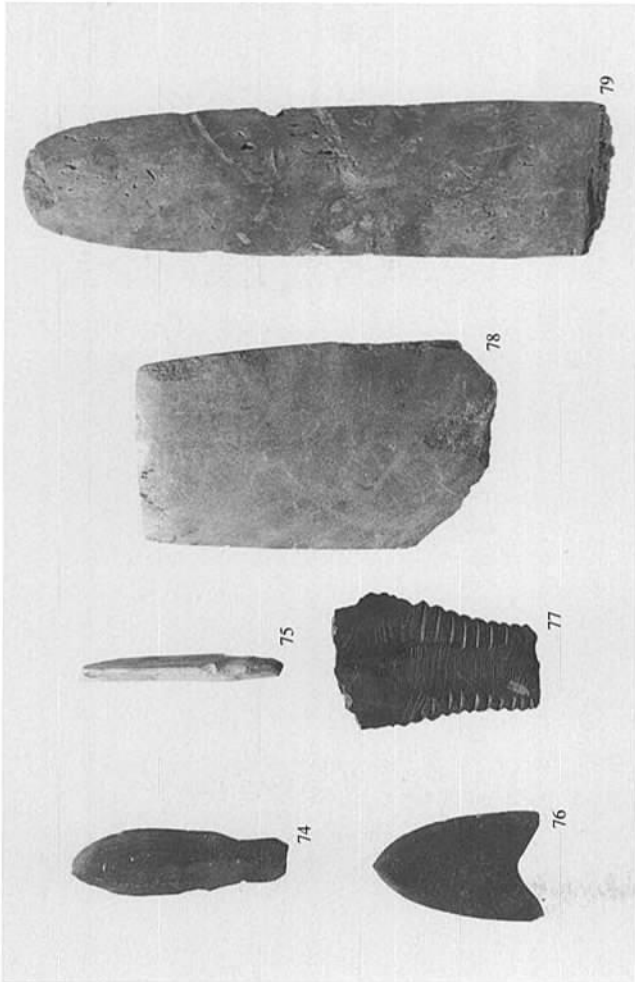
1. 石鎌等



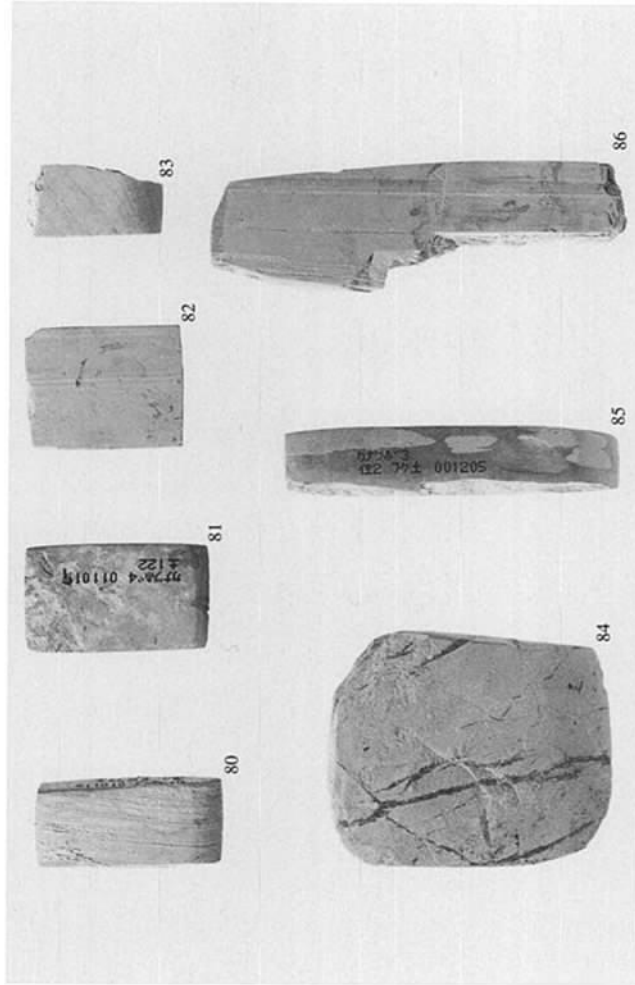
4. 管玉



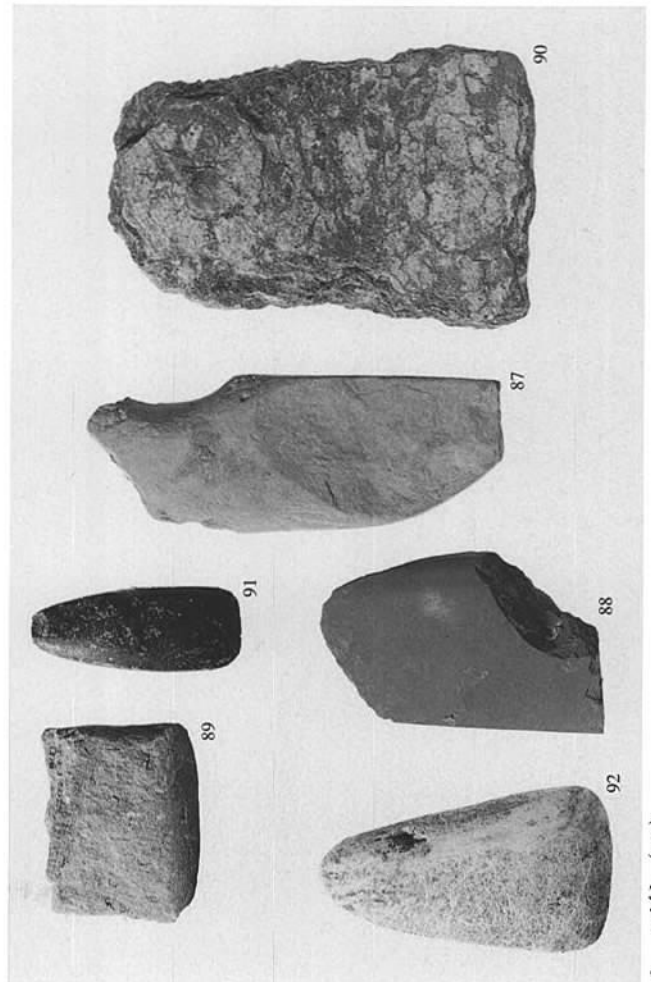
3. 用途不明石製石器



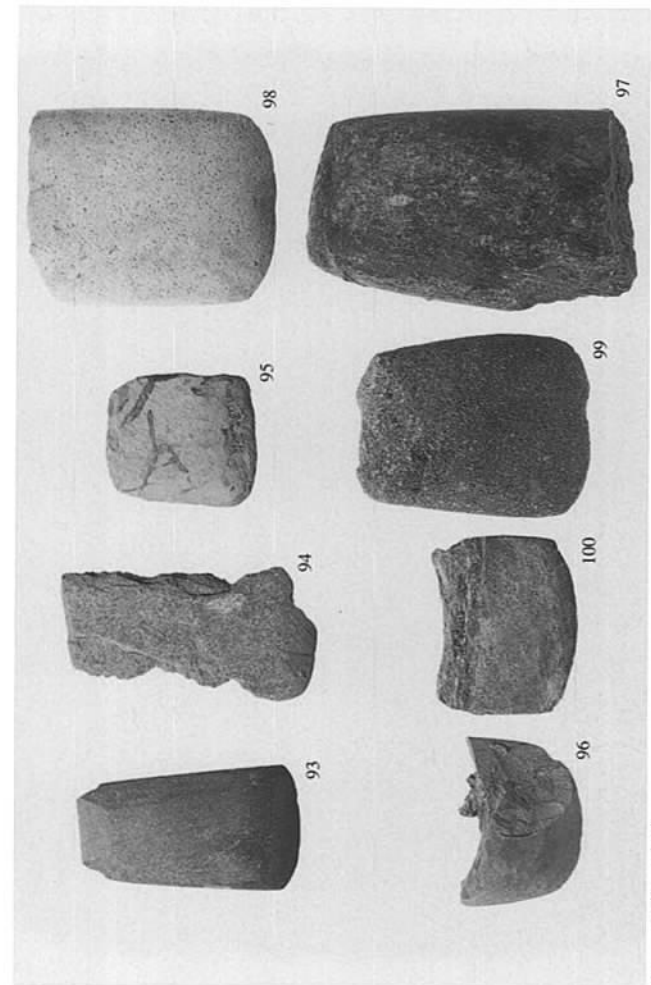
1. 石鏃・石剣



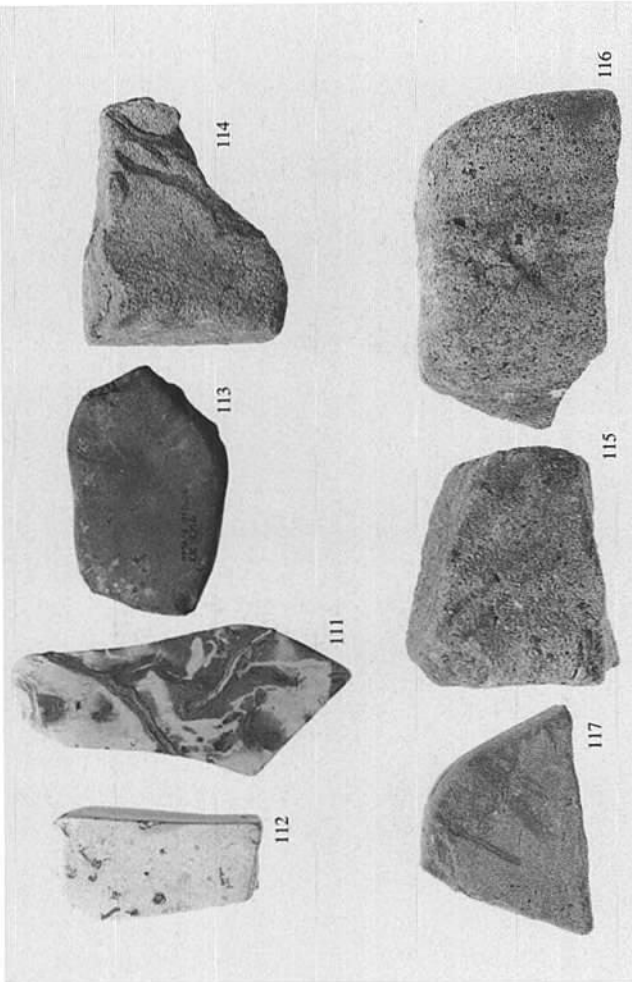
2. 石斧 (1)



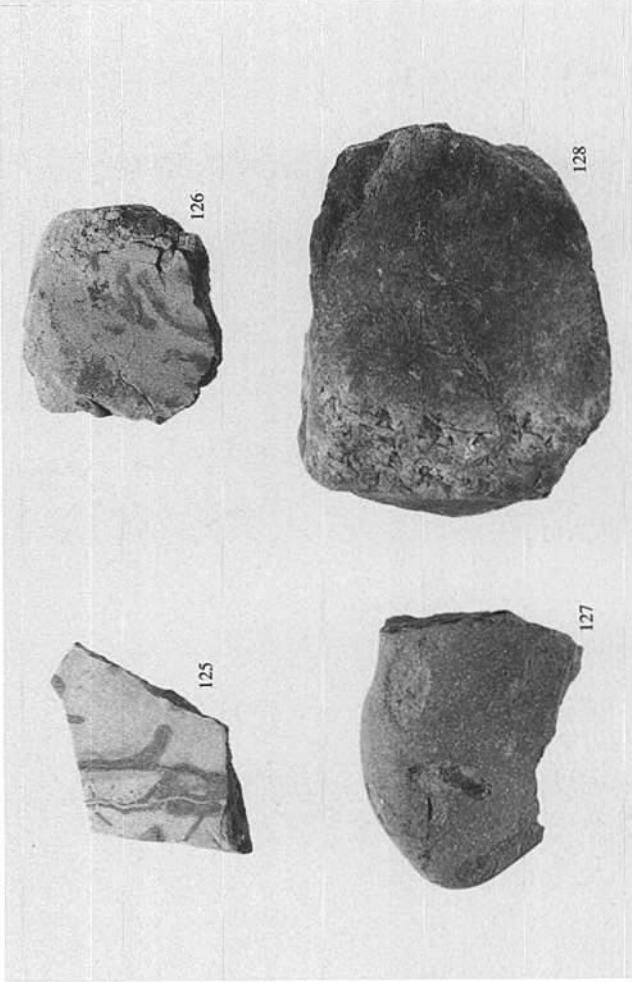
3. 石斧 (2)



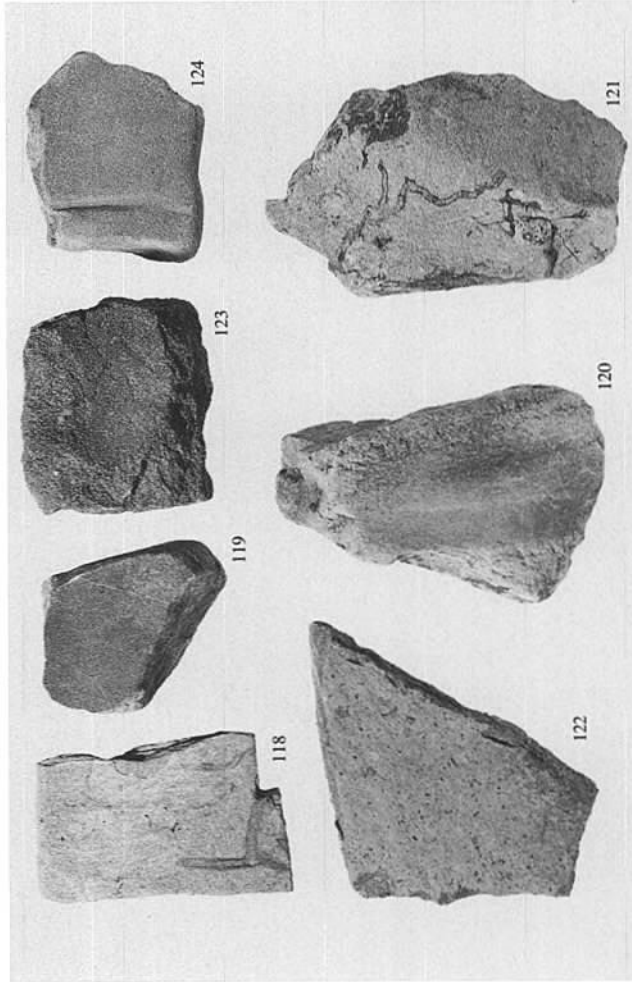
4. 石斧 (3)



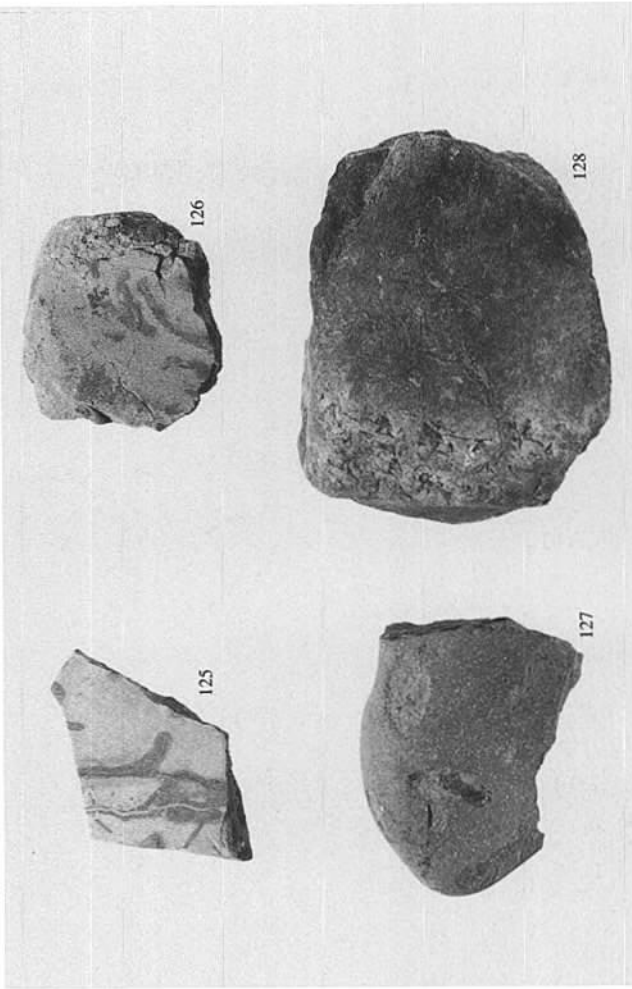
1. 砥石 (1)



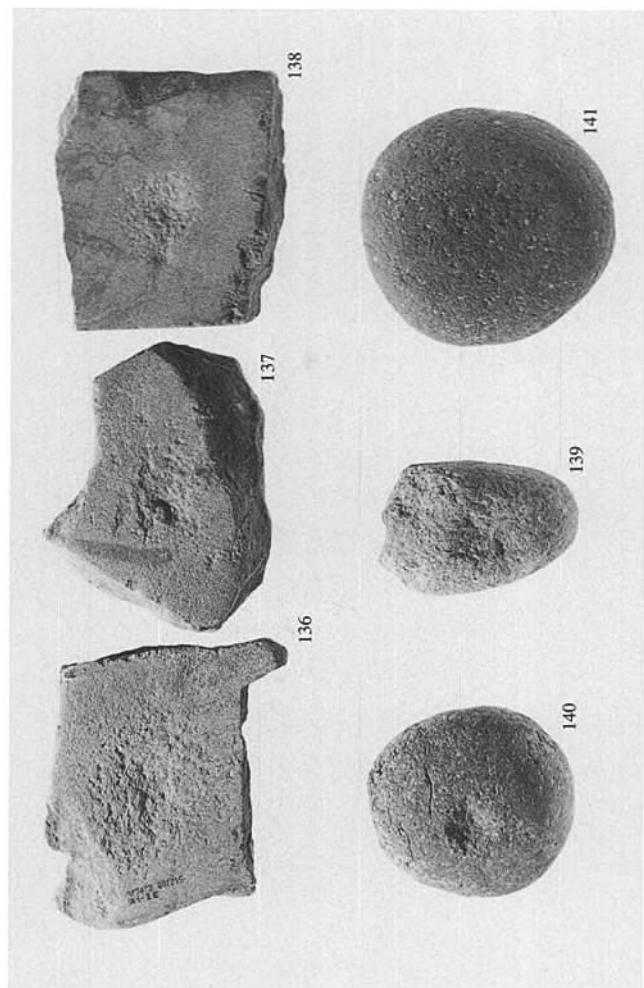
2. 砥石 (2)



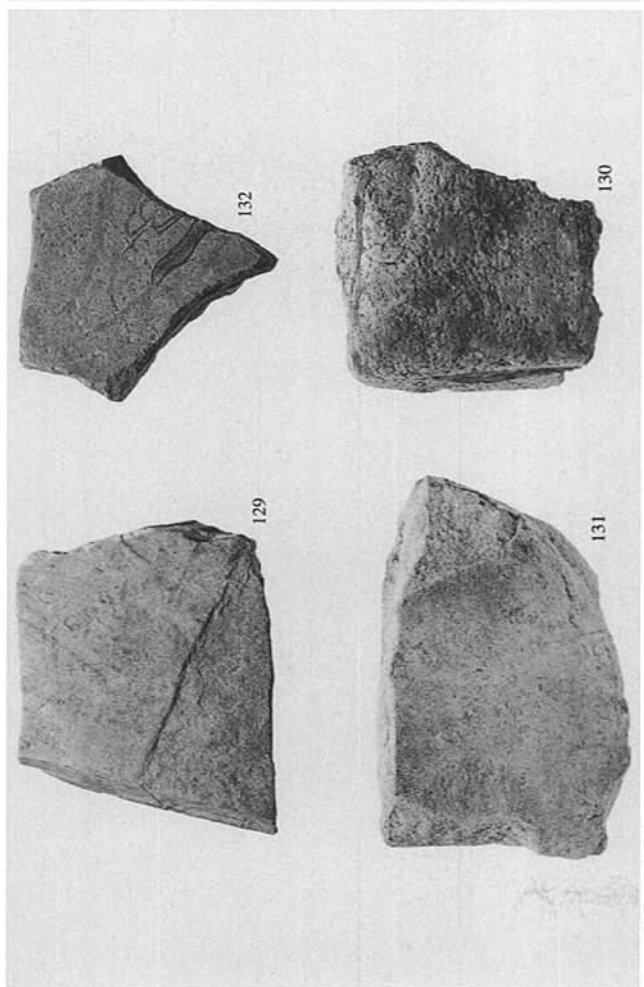
3. 砥石 (3)



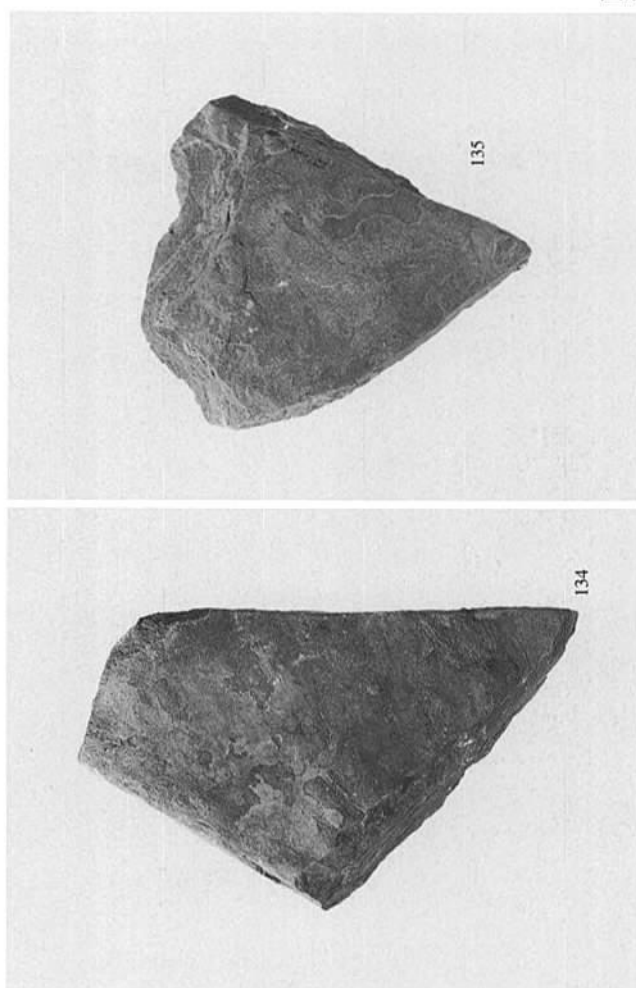
4. 砥石 (4)



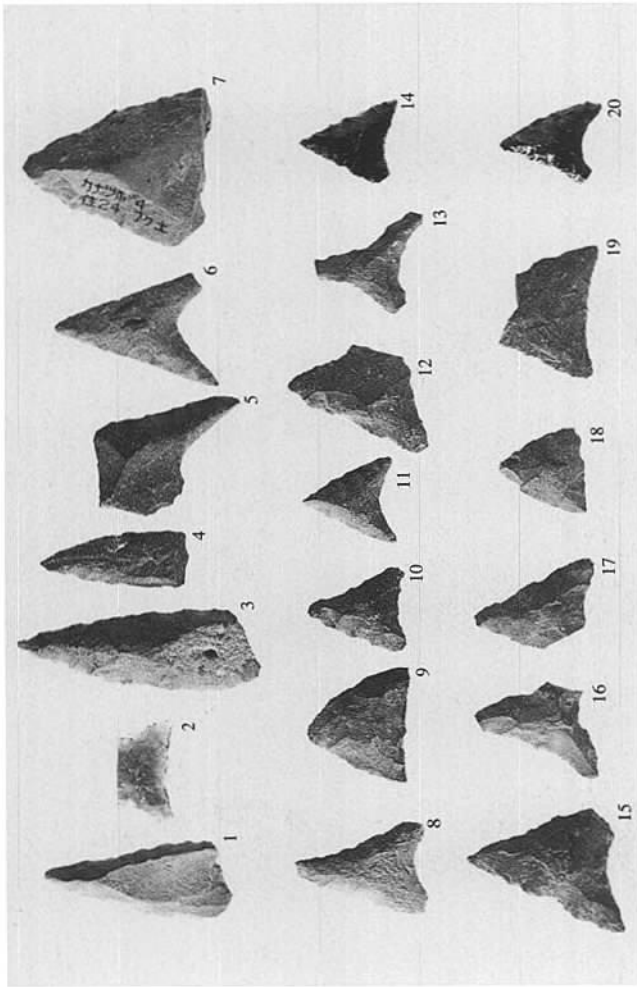
2. 台石・磨石



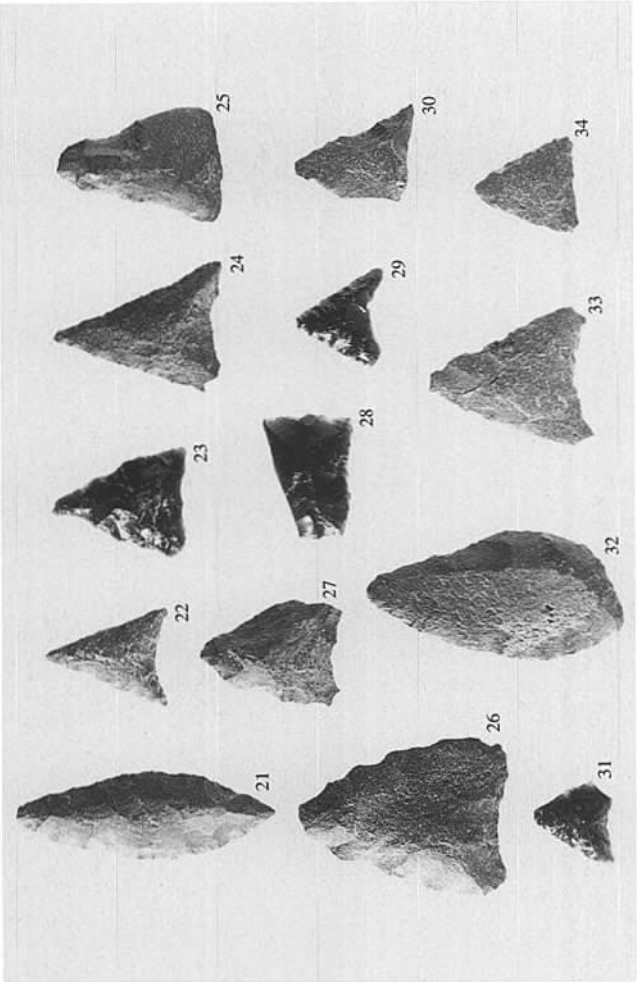
1. 砥石 (5)



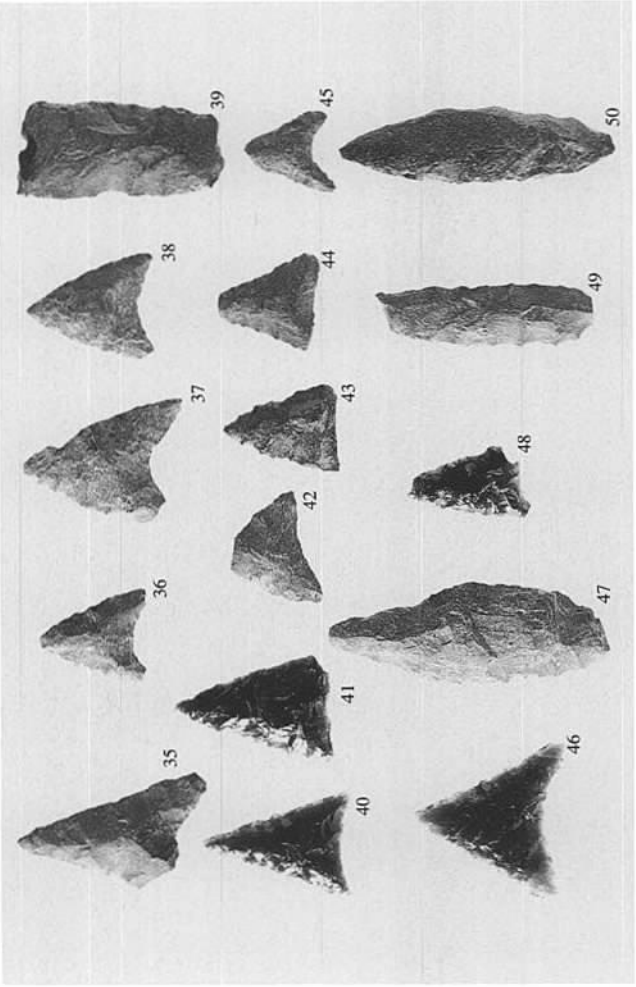
3. 台石



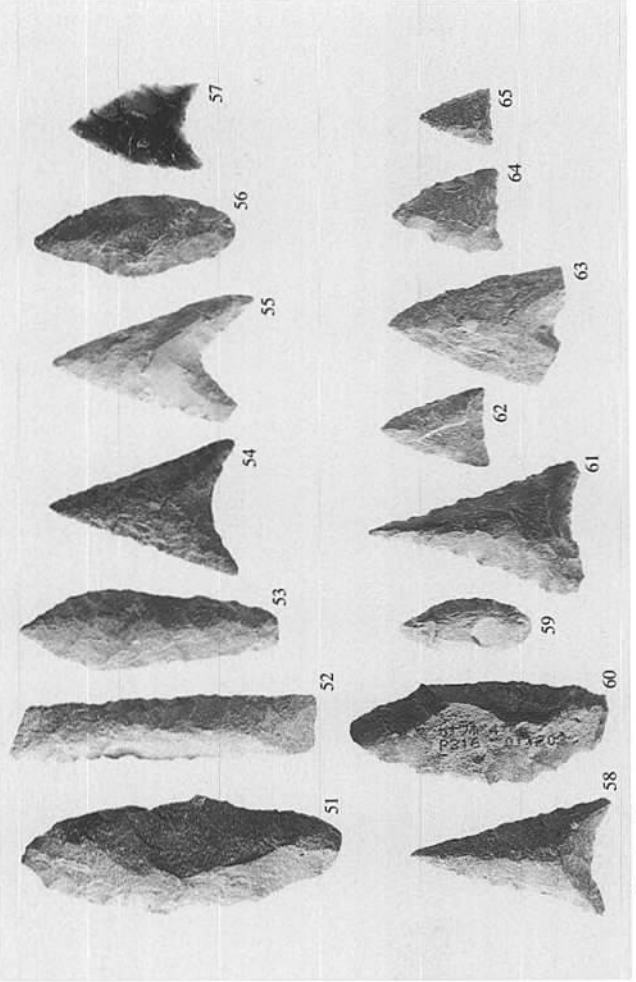
1. 石鏃 (1)



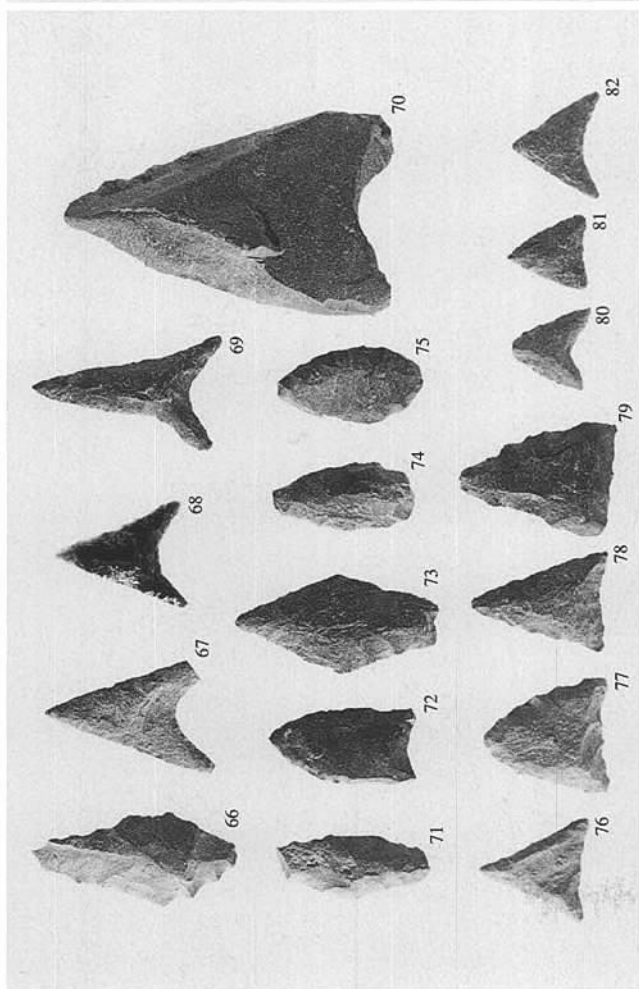
2. 石鏃 (2)



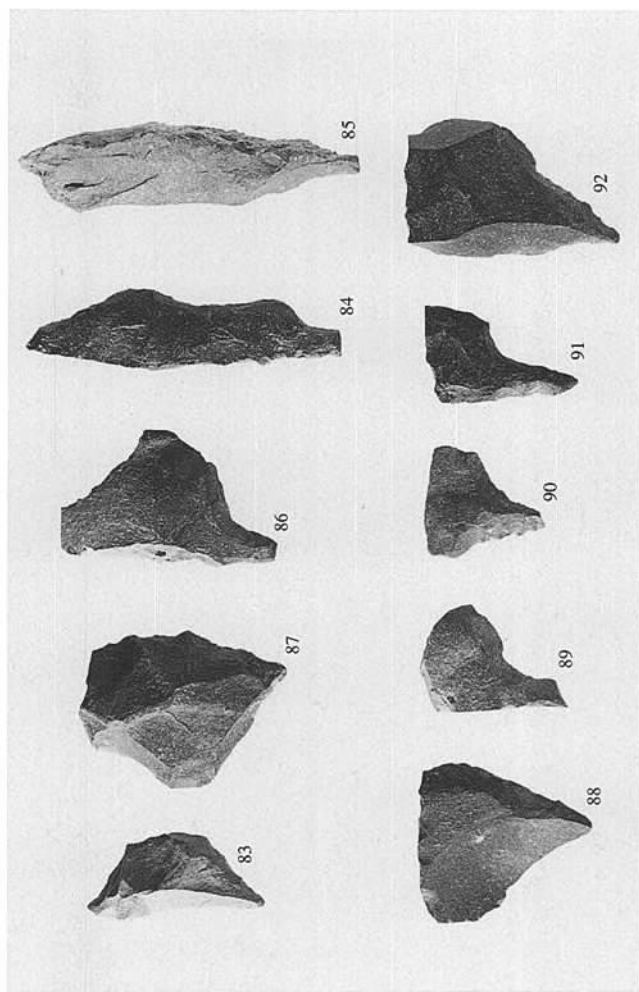
3. 石鏃 (3)



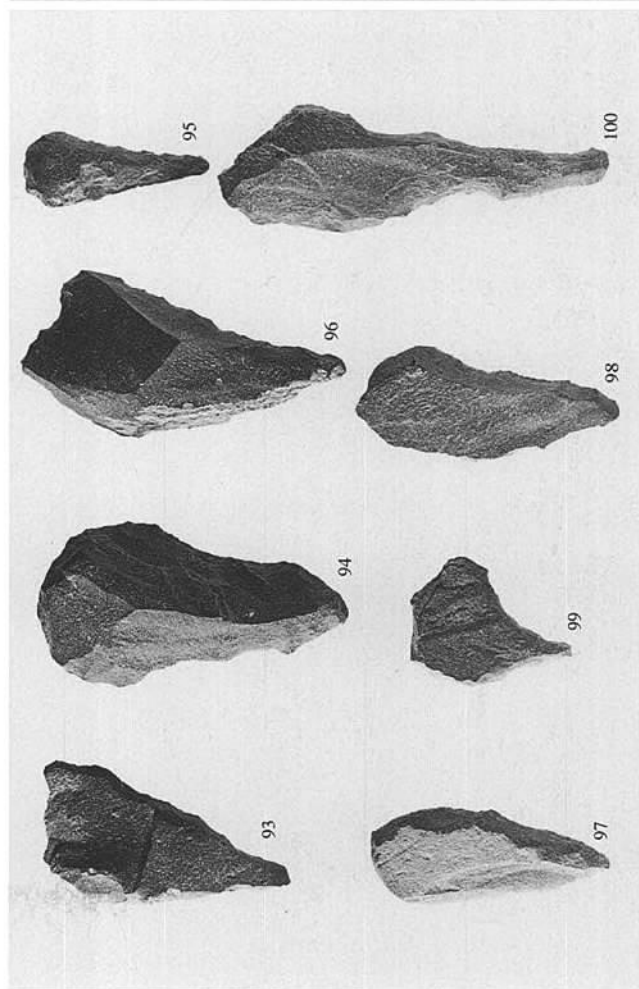
4. 石鏃 (4)



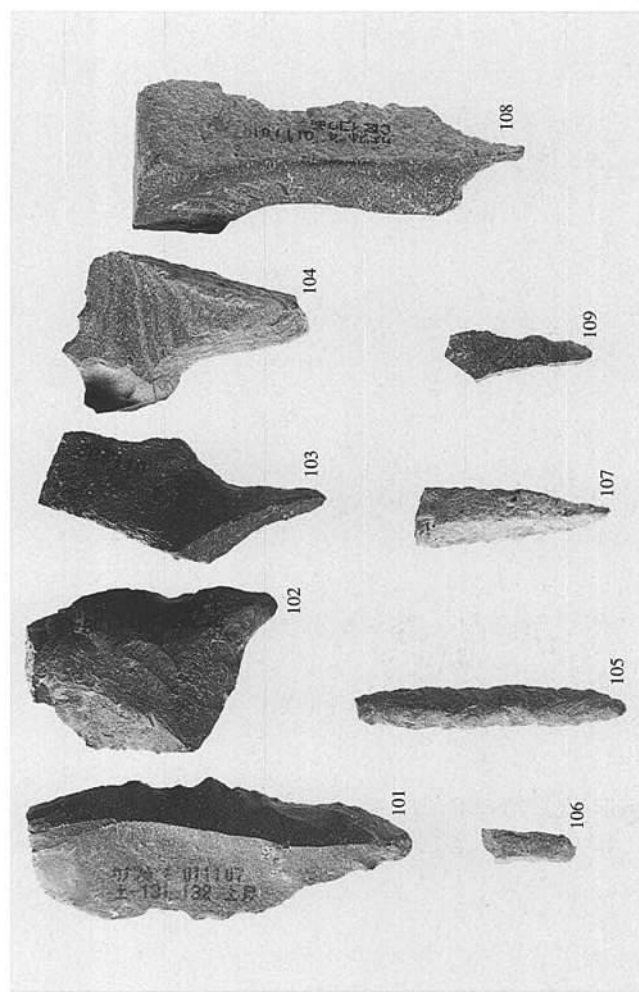
1. 石鏃 (5)



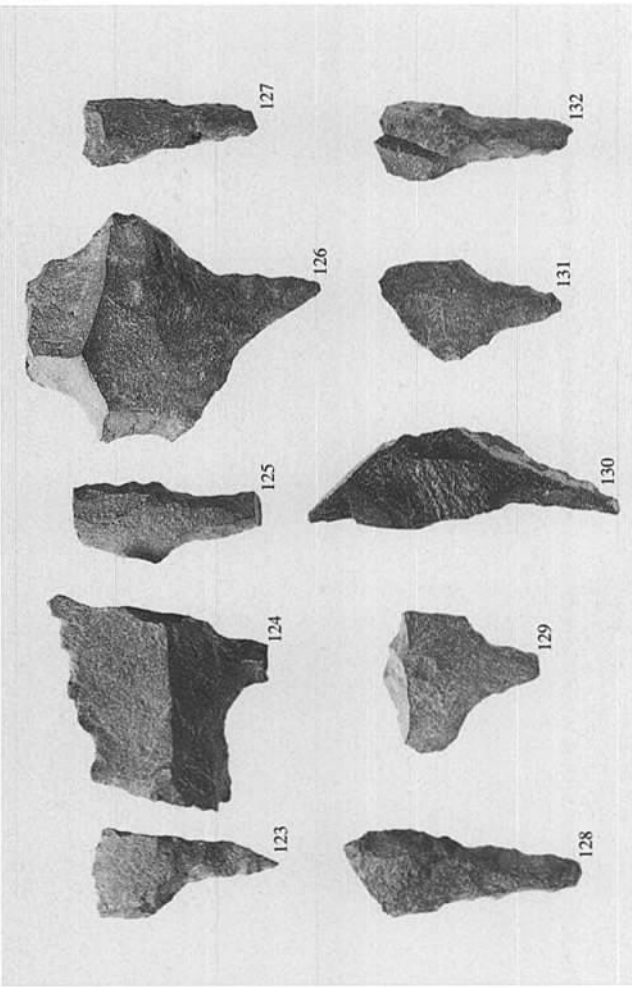
2. 石鏃 (1)



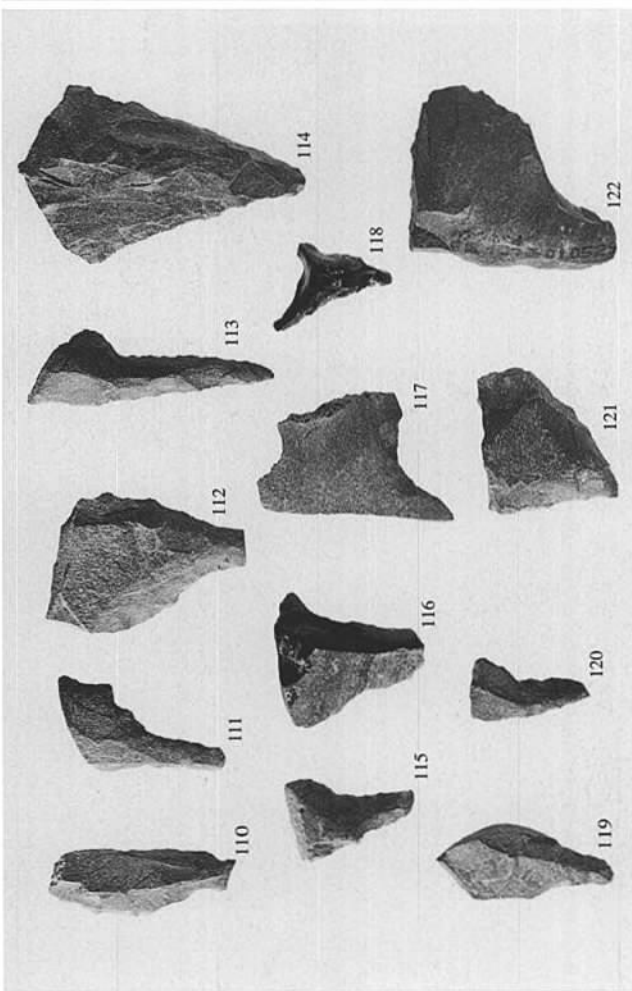
3. 石鏃 (2)



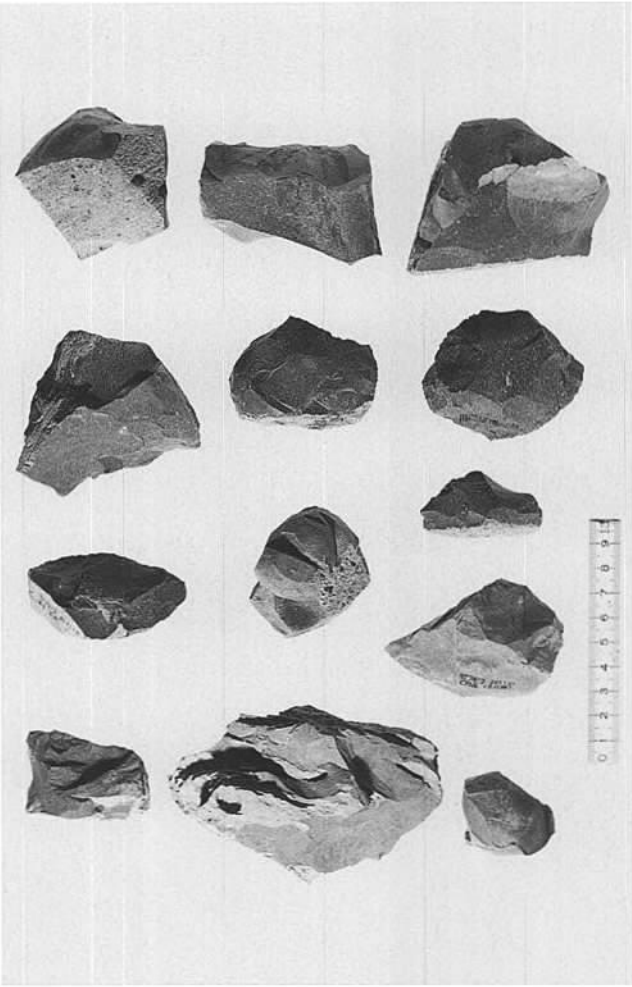
4. 石鏃 (3)



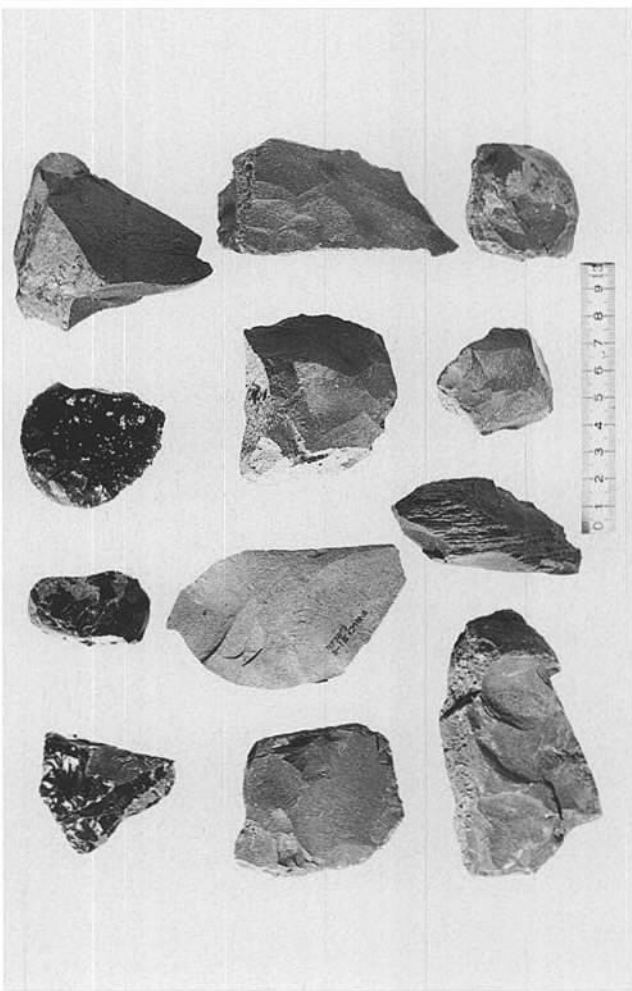
1. 石鍾 (4)



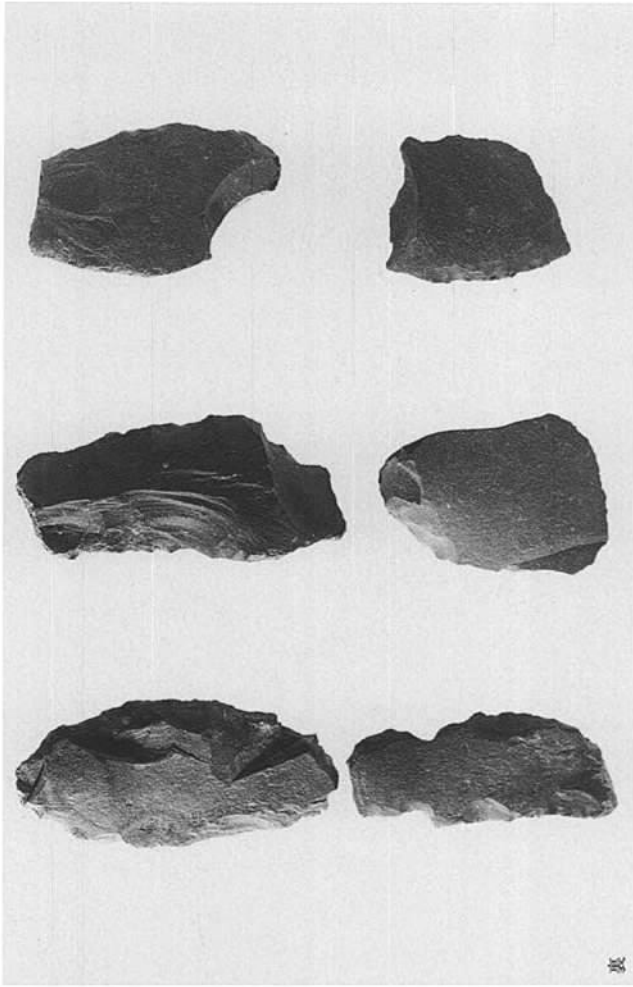
2. 石鍾 (5)



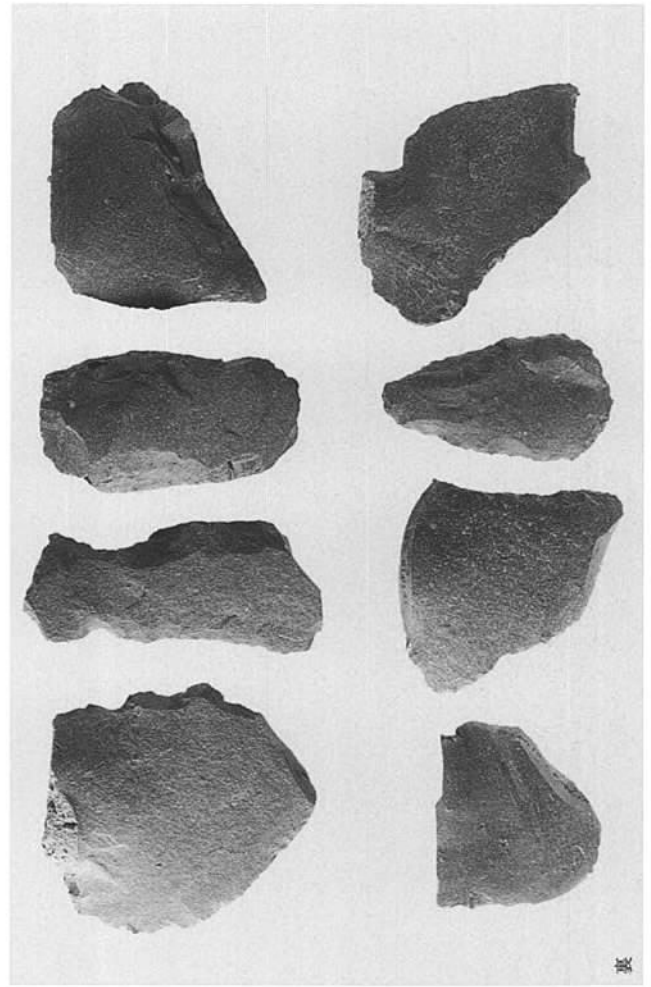
3. 石核 (2)



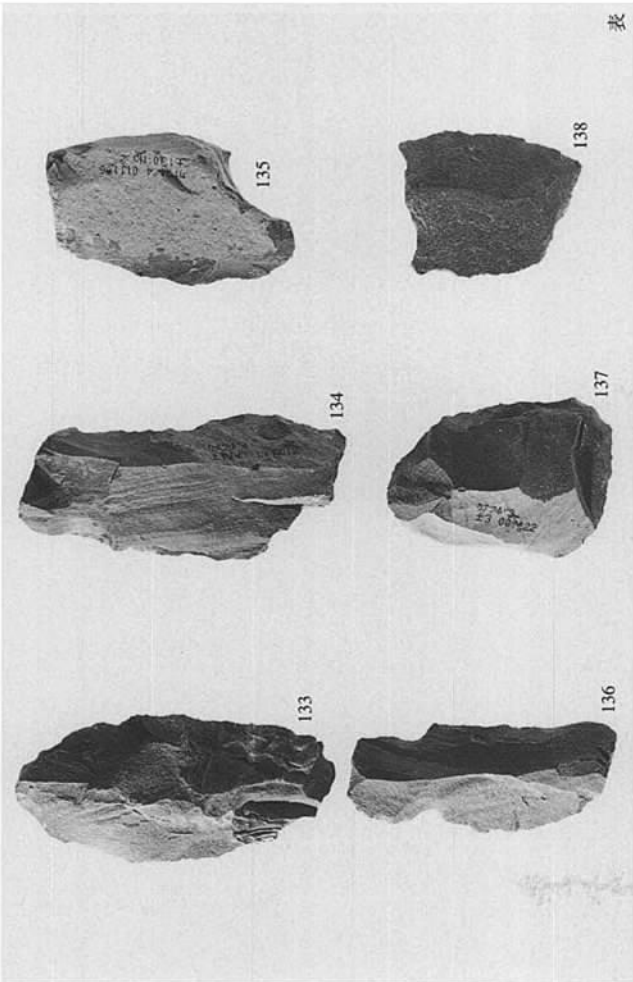
4. 石核 (1)



裏

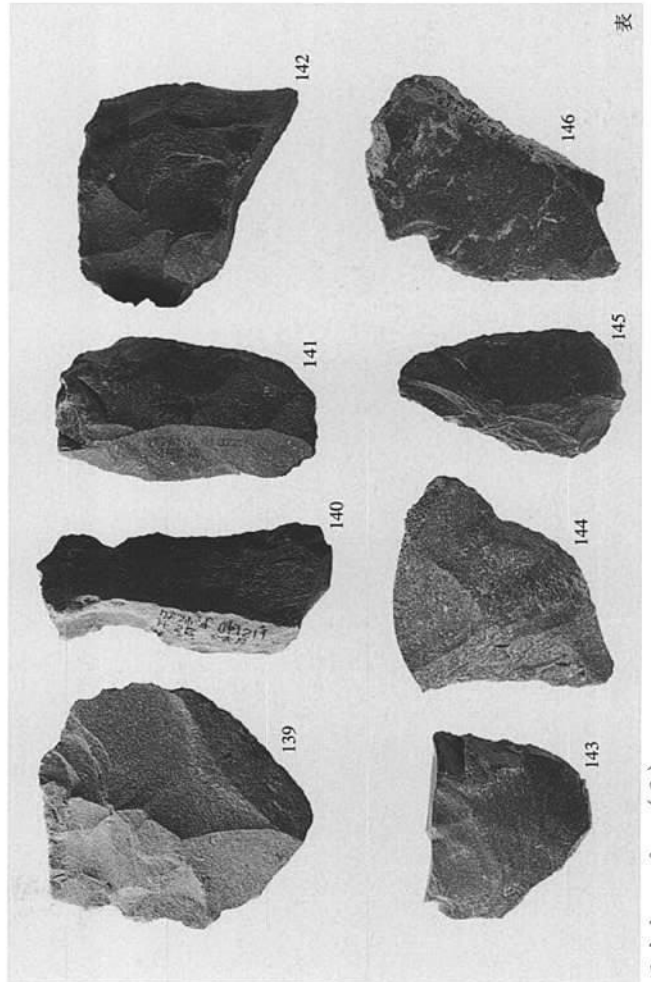


裏



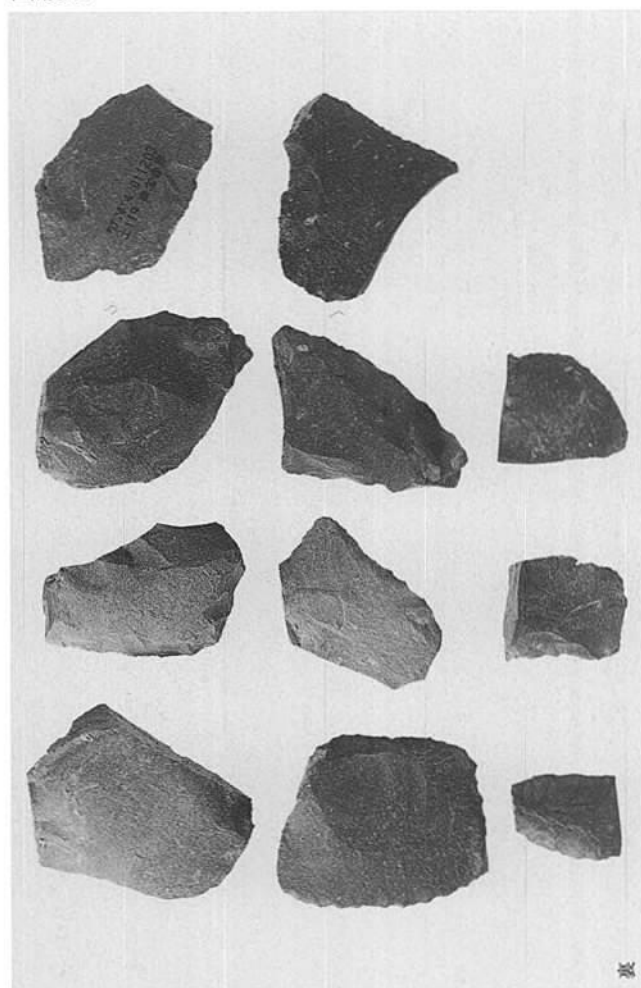
表

スケレハス (1)

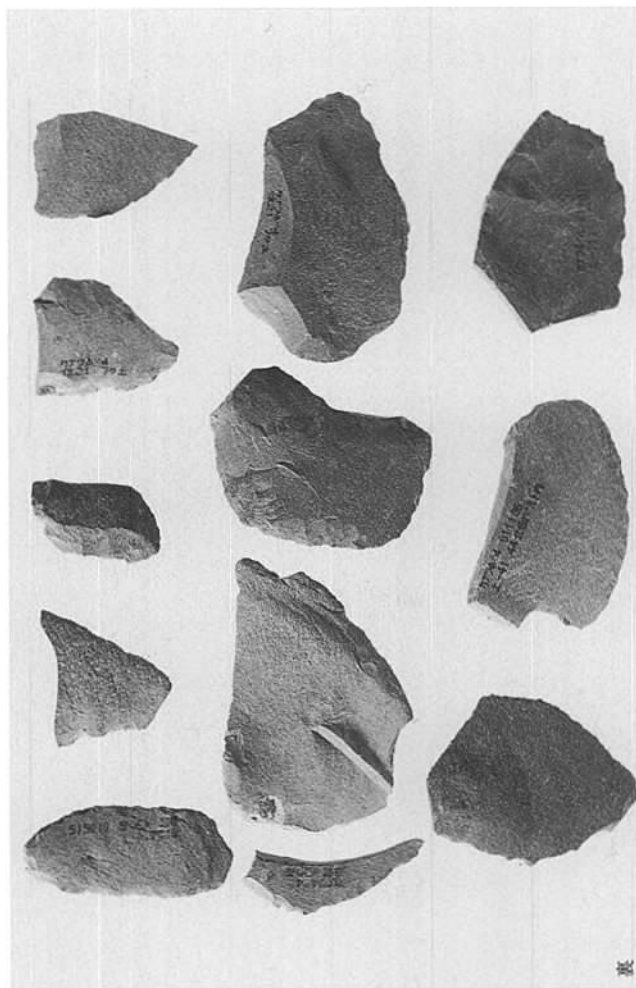


表

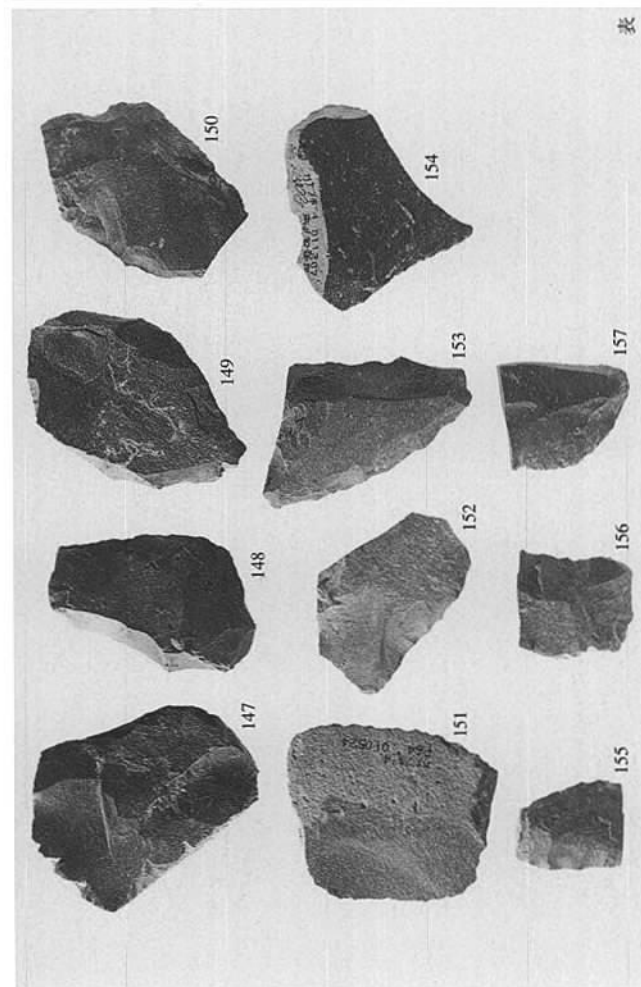
スケレハス (2)



裏

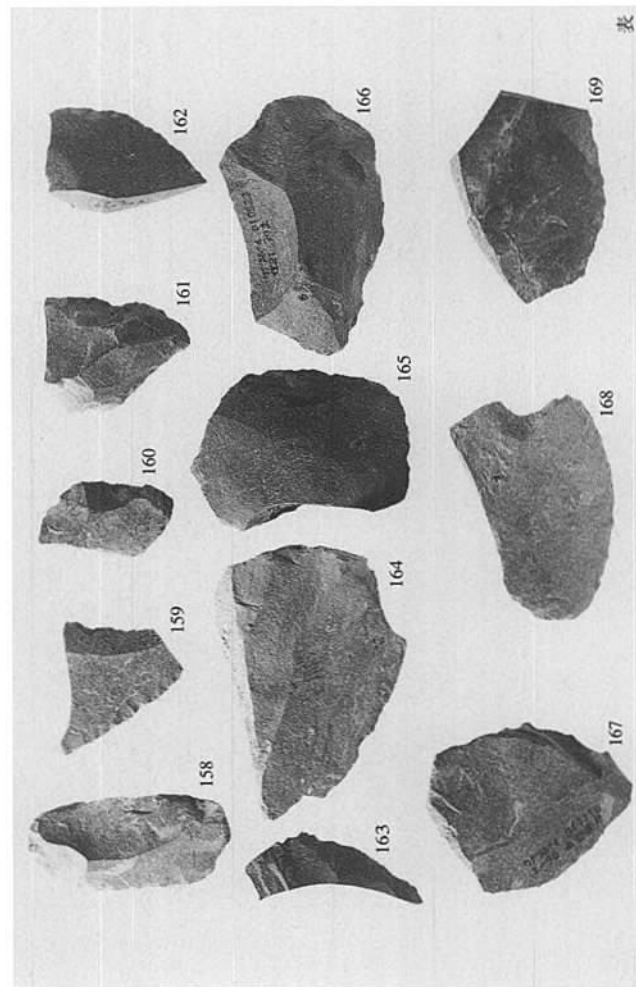


裏



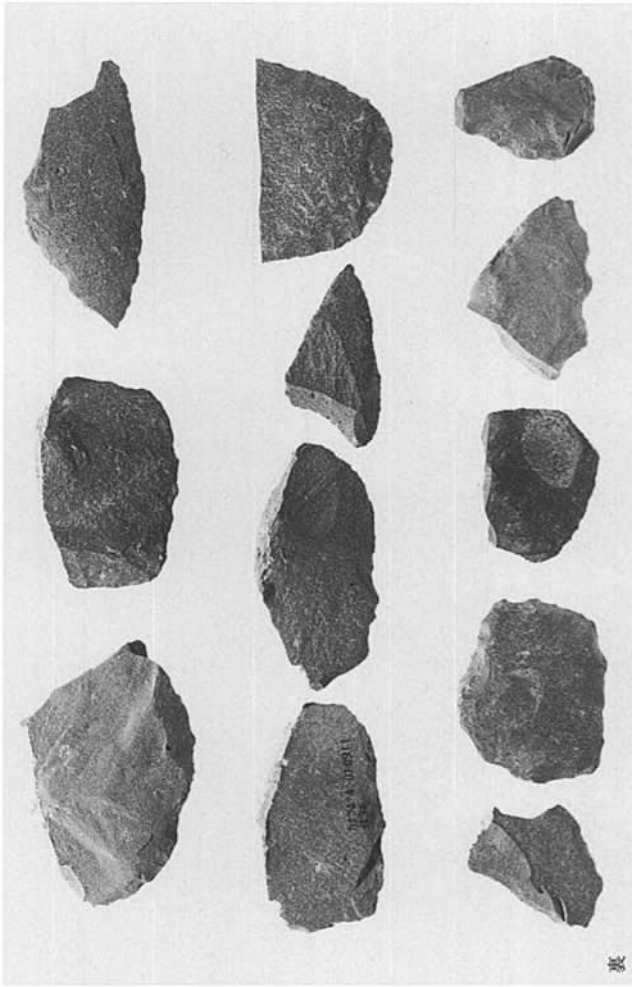
表

スケレパー (3)

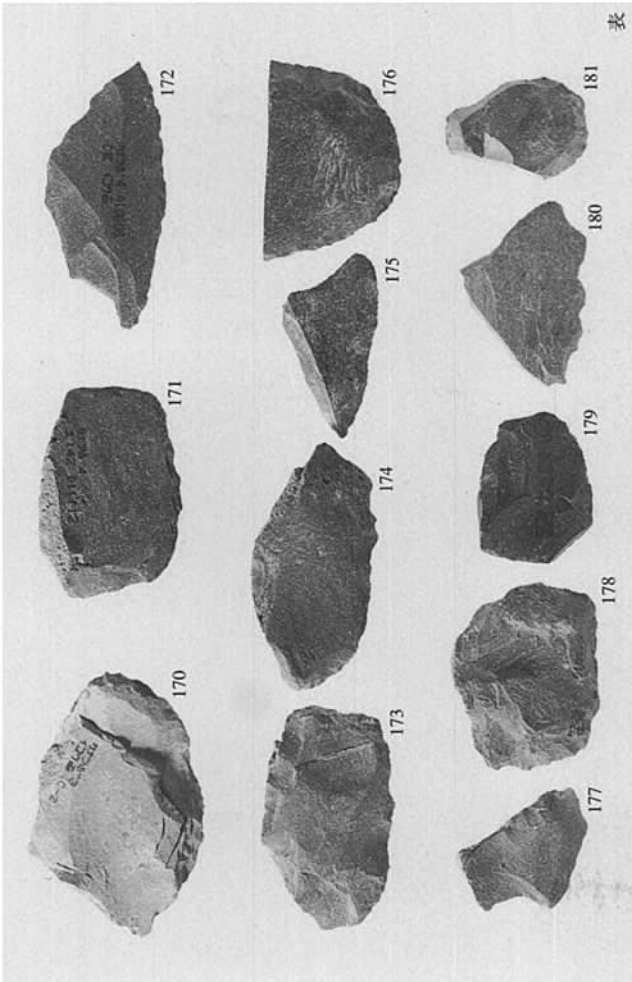


表

スケレパー (4)

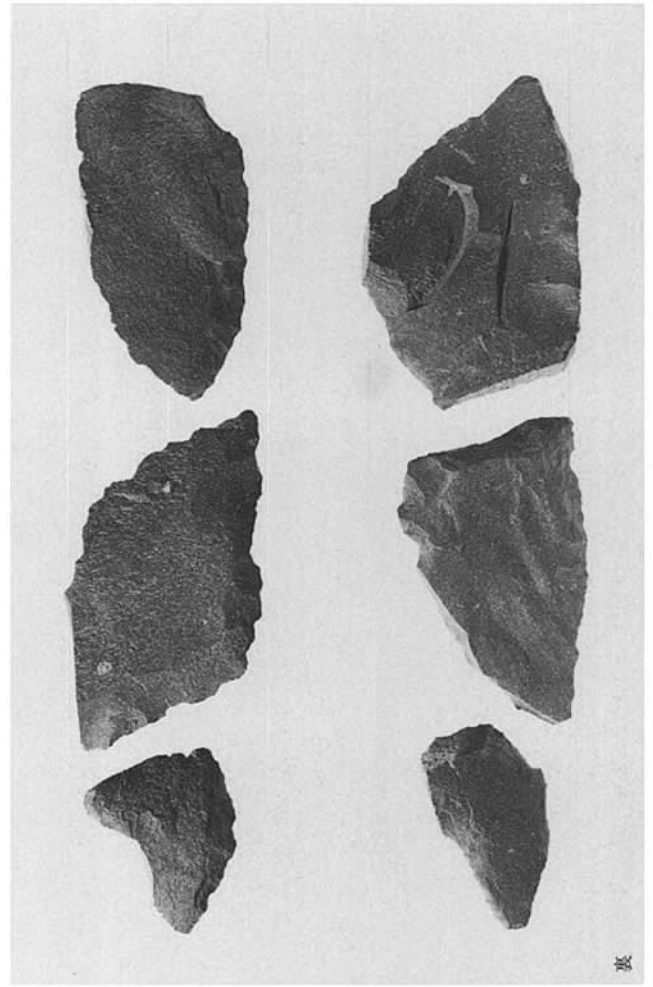


裏

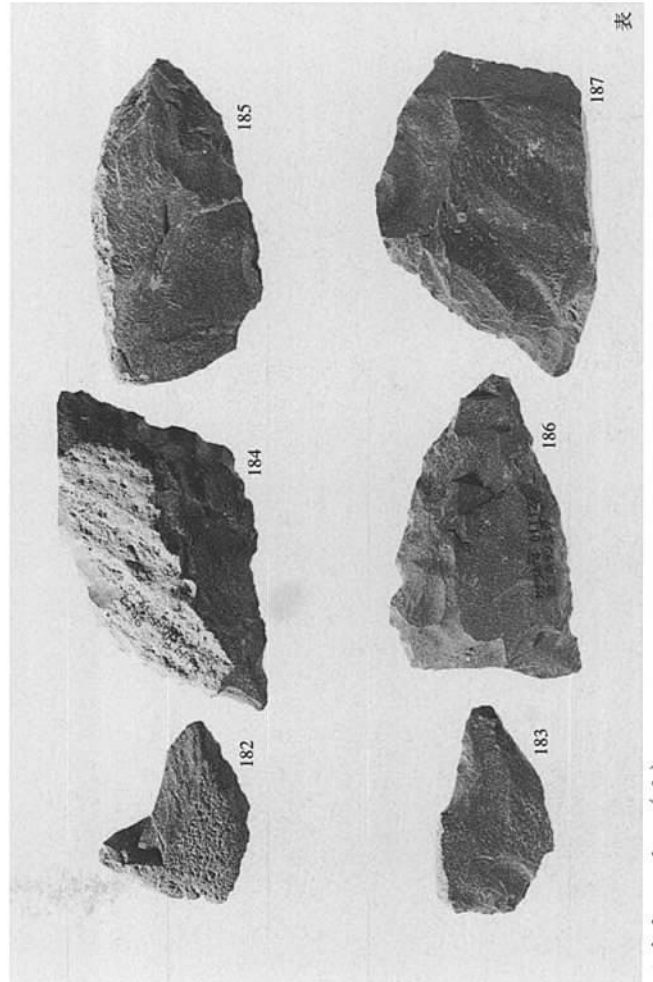


表

スクレーパー (5)

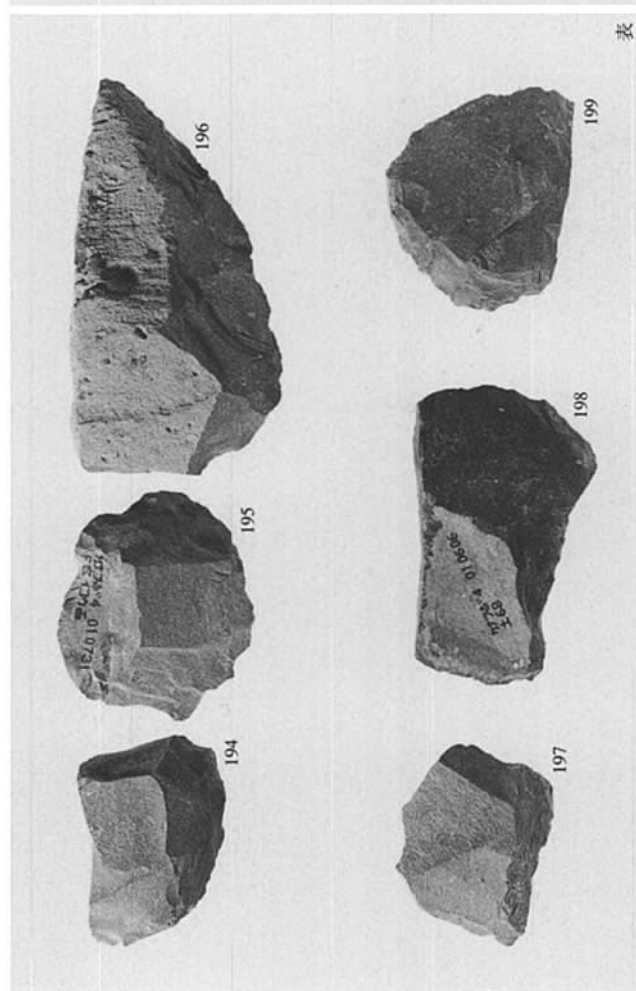
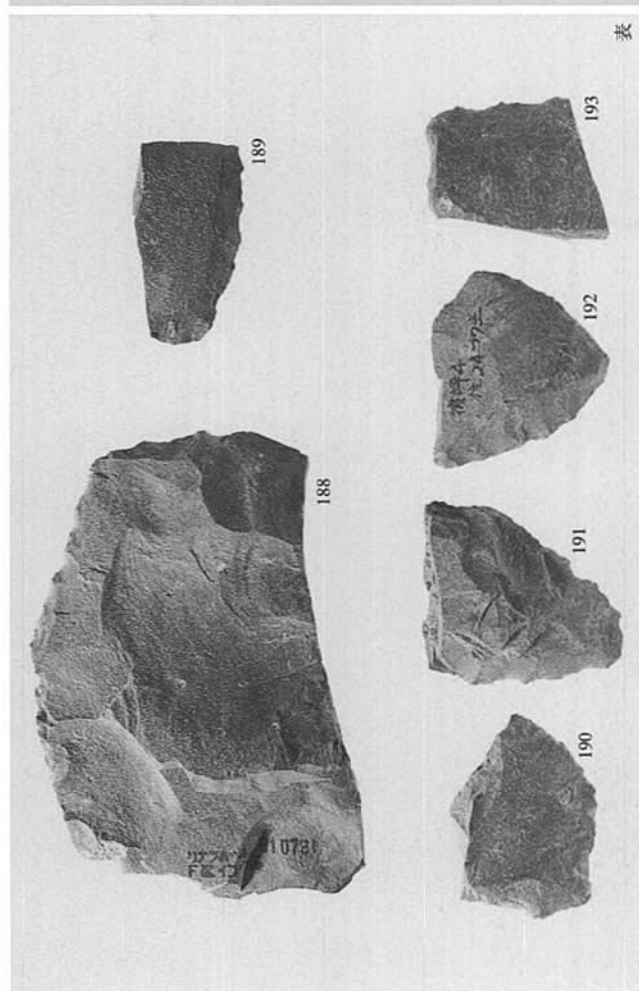
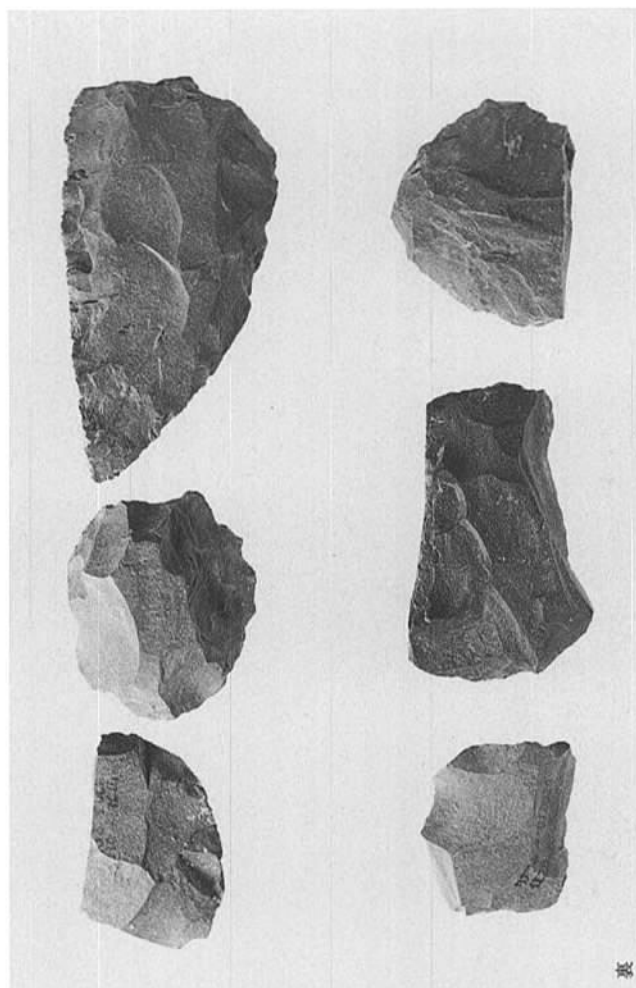
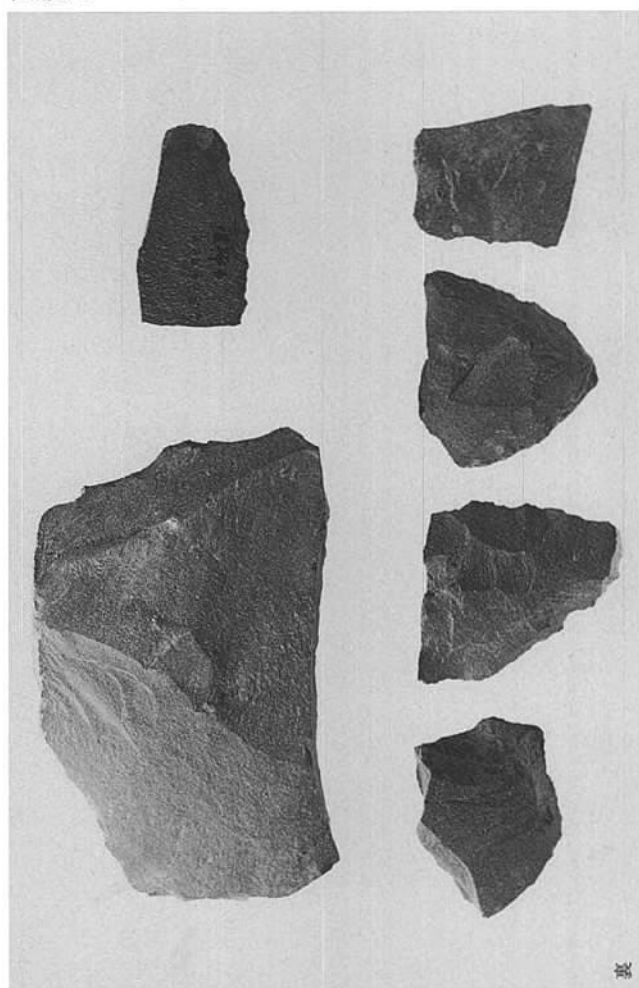


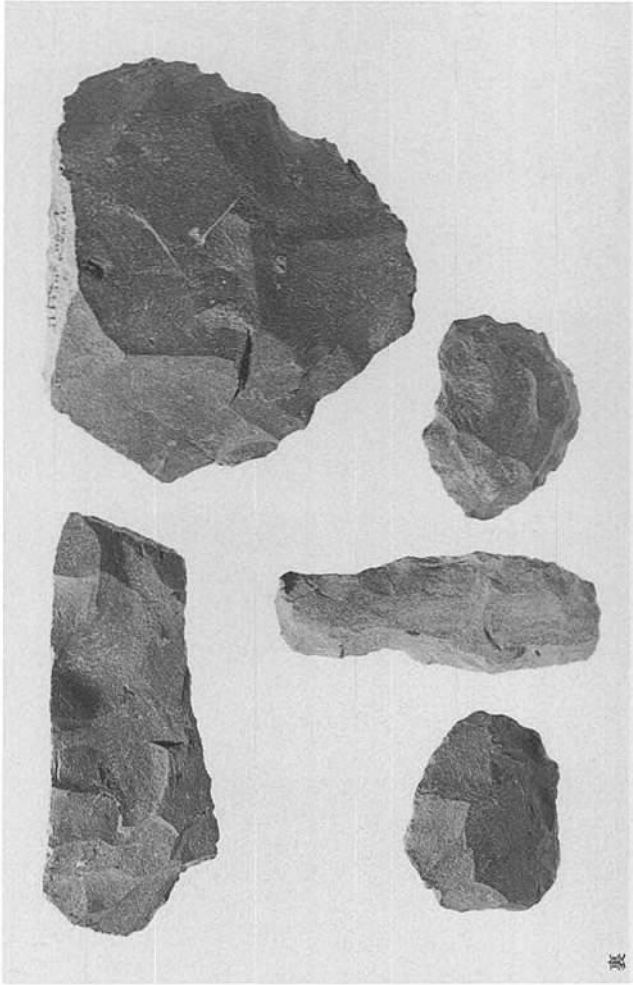
裏



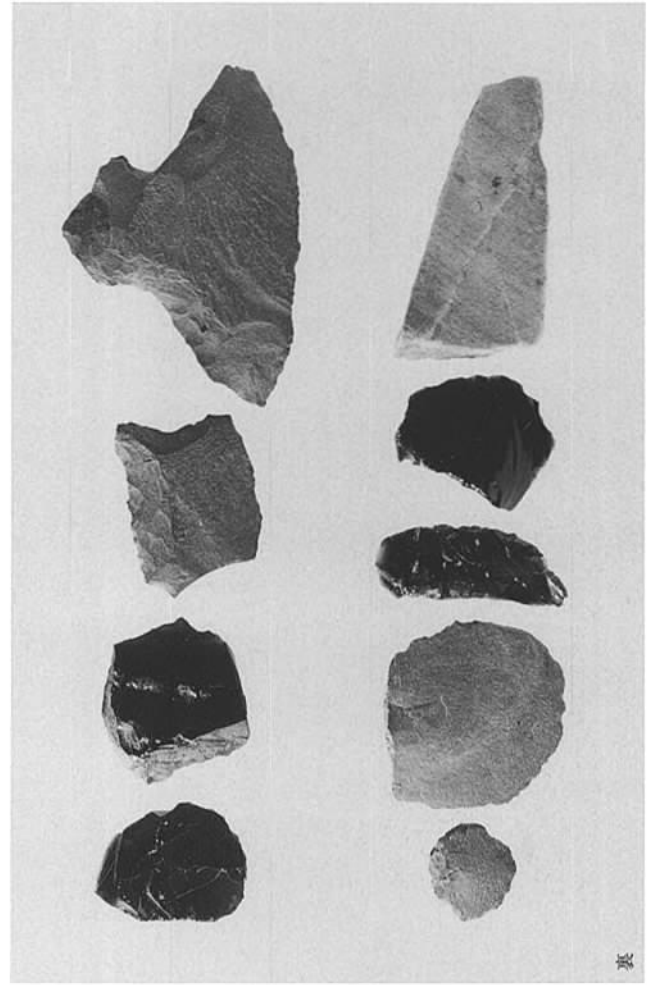
表

スクレーパー (6)

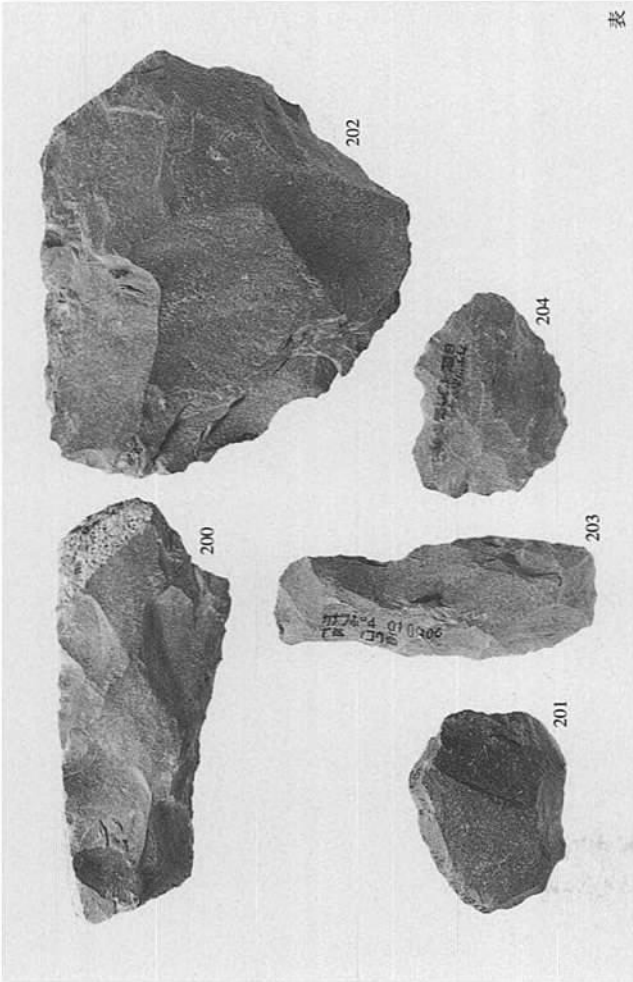




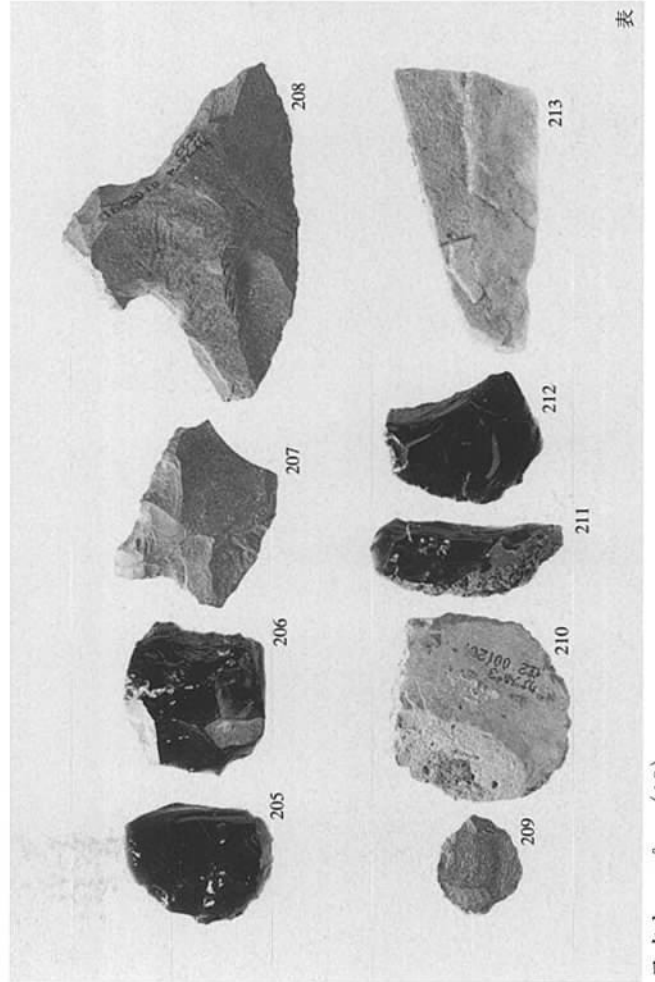
表裏



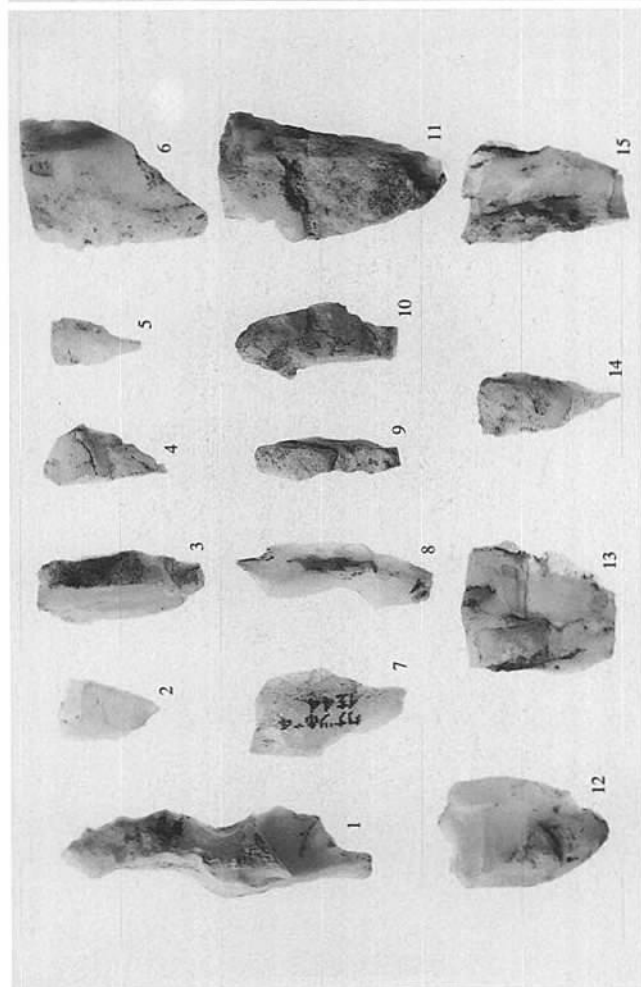
表裏



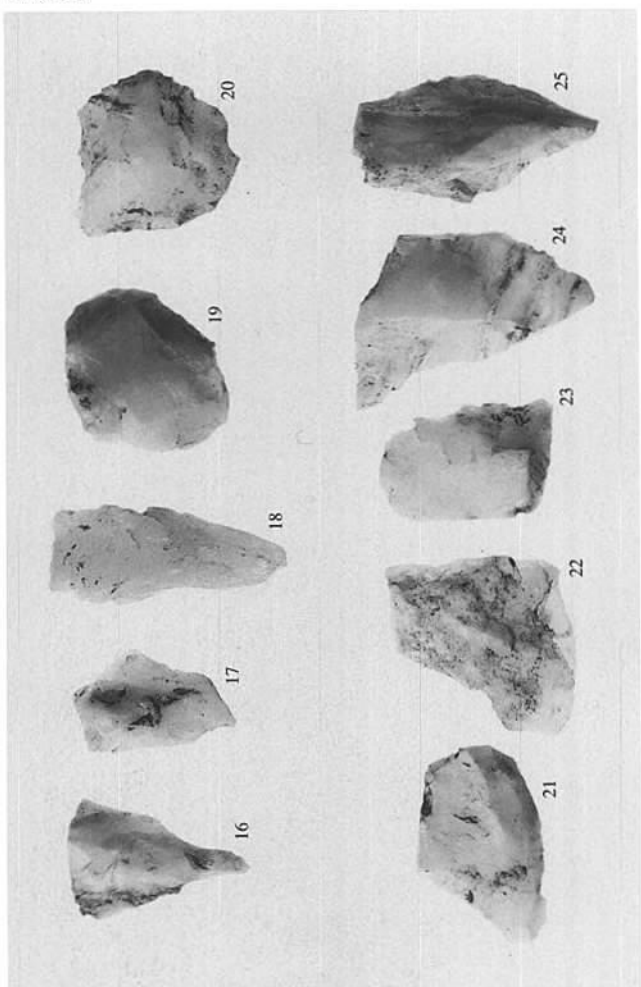
スクレーパー (9)



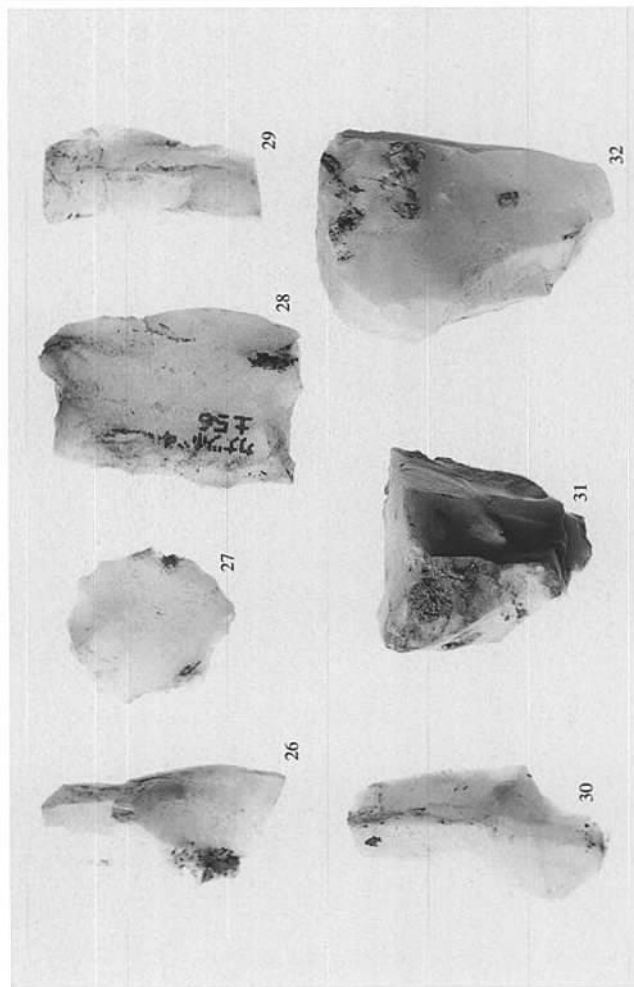
スクレーパー (10)



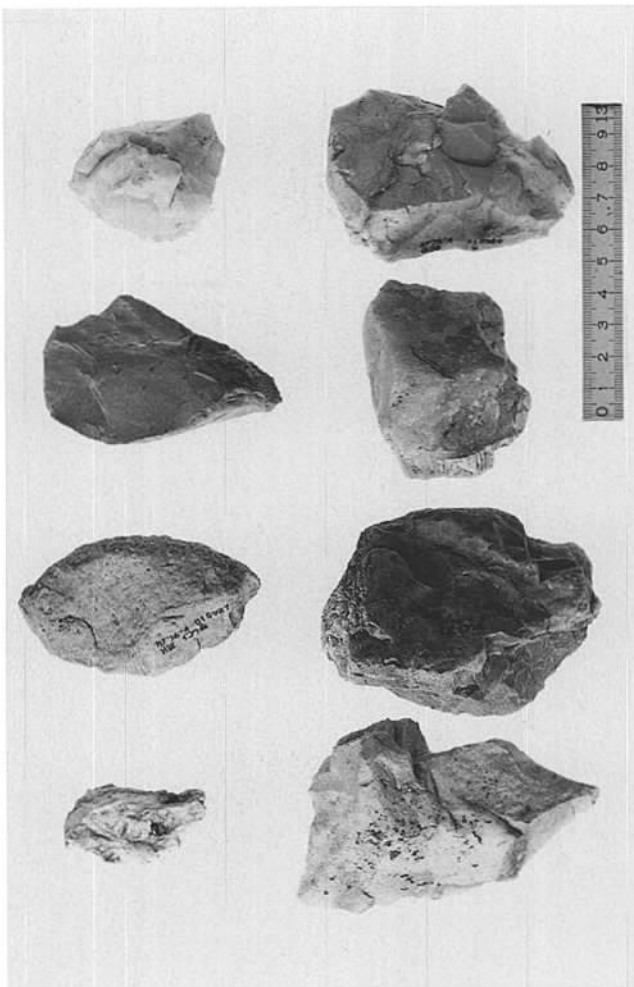
1. 石英質石器 (1)



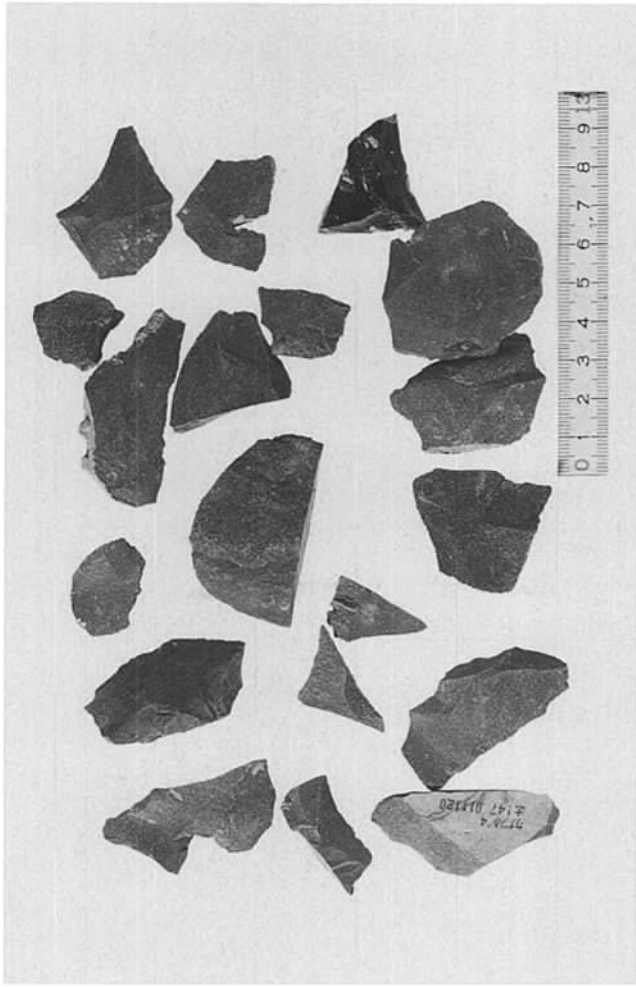
2. 石英質石器 (2)



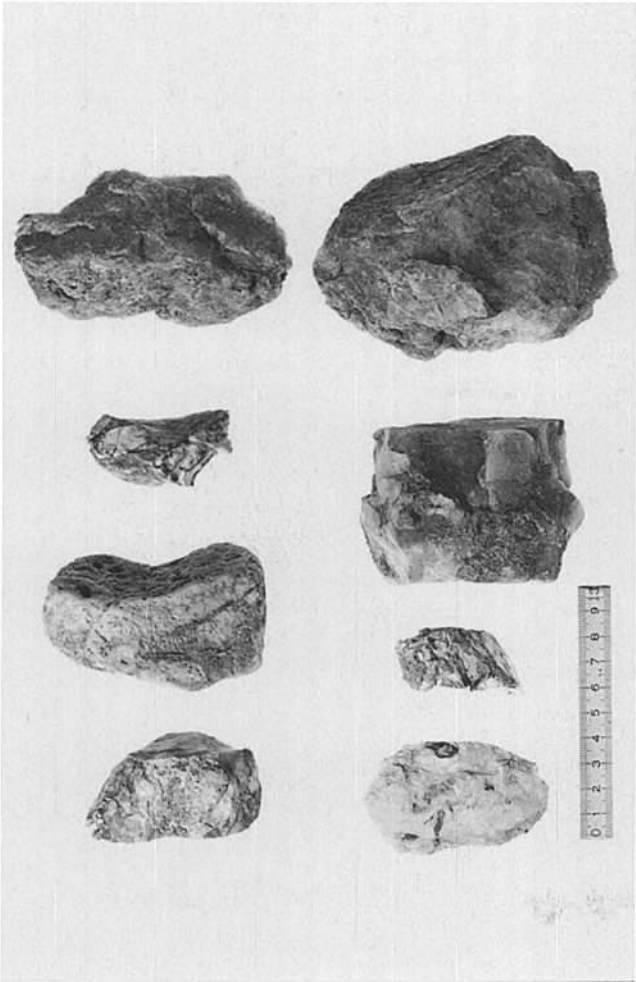
3. 石英質石器 (3)



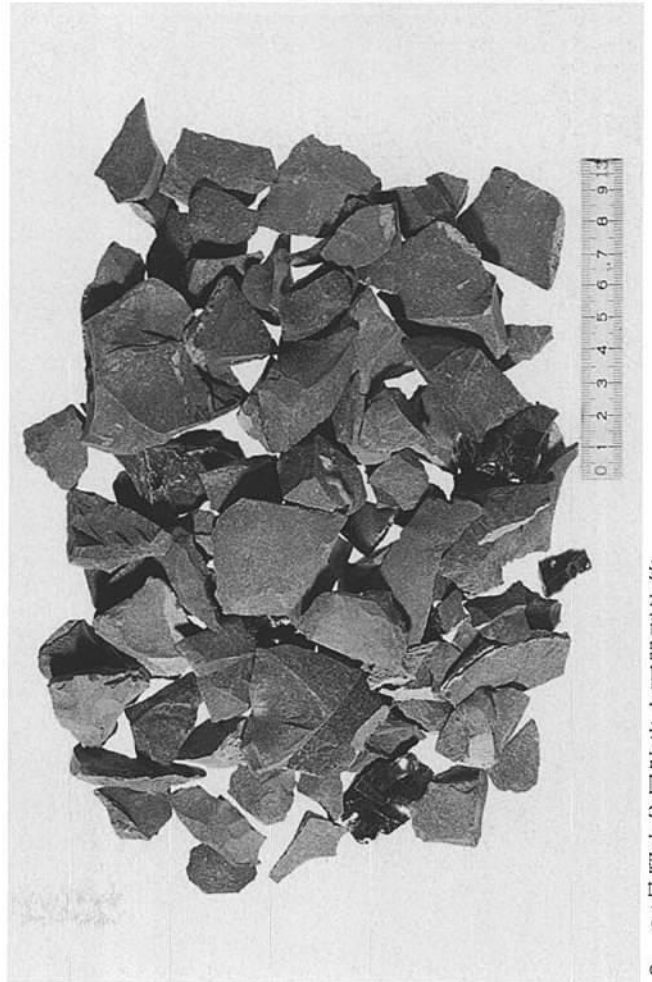
4. 石英原石 (1)



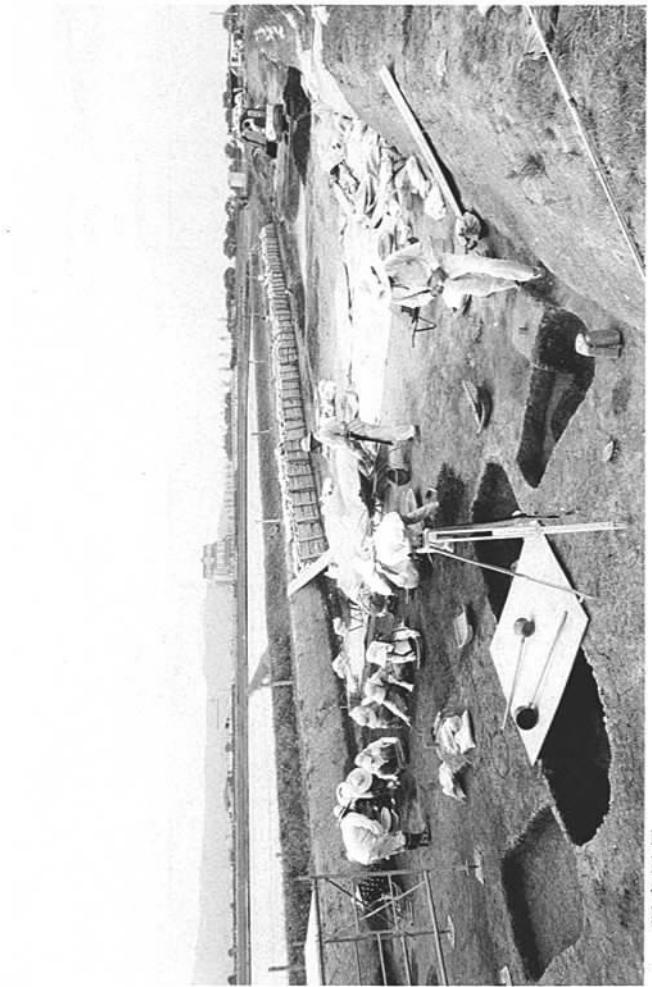
2. 147号土坑出土石器剥片等



1. 石英原石 (2)



3. 34号竖穴住居跡出土石器剥片等



4. 調査風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	かなつばいせき							
書名	彼坪遺跡Ⅲ							
副書名	主要地方道久留米筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告12							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第202集							
編著者名	重藤 輝行・吉田東明・吉村靖徳							
発行機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812－8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
かれつばいせき 彼坪遺跡	ふくおかけんくろめし 福岡県久留米市 きたのまちいまやま 北野町今山		660047	33° 21′ 43″	130° 34′ 53″	20011008 ～ 20021227	1660m2	道路拡幅 (県道久留米筑紫野線道路拡幅)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
彼坪遺跡	集落	弥生時代前期 ～中期		竪穴住居跡 土坑		弥生土器 石器		

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2114107
登録年度 16	登録番号 8

主要地方道久留米筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告	
彼坪遺跡Ⅲ	
福岡県文化財調査報告書第202集	
平成17年 3 月31日	
発行	福岡県教育委員会 福岡市博多区東公園 7 番 7 号
印刷	久野印刷株式会社 福岡市南区市崎 1 丁目15－ 7